
勇者って一人じゃないんですか？

Kelten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者つて一人じゃないんですか？

【Nコード】

N1157Y

【作者名】

Kelten

【あらすじ】

ドラゴンクエストの世界に勇者は一人しかいないのか？

ラダトーム城の兵士（転生者）は勇者の物語に深く関わっていく。

プロローグ

「勇者って一人じゃないんですか？」

ラダトーム城の謁見室に俺の素朴な質問が響いた。

人間は理解しあえるんだ。うん、今理解できた。だってみんな目が言ってる。

（お前はだまれ！）

そして俺は勇者5人の謁見が終わるまで黙って立っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺の名前はケルテン ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士である。まだ新任の為任務が何なのか知らないが権限だけはすごい。王様と国務大臣以外の命令を拒否できるうえ、城の中に立ち入れない場所はほとんどない。

俺がこの世界がアレフガルドと認識したのは10年前、何の脈絡もなくこの世界がドラゴンクエストの世界だと認識した。平和な時代で400年ほど前に大魔王が現れロトの勇者が退治したという伝説がある。つまり近い未来に竜王が現れる。そう理解した俺はそれに備え自らを鍛えた。そう自分を育ててくれた湖上都市リムルダ―

ルを守れるぐらいに。で何の因果かラダトーム城で兵士をやっている。しかも勇者の謁見とはこの物語の最高の見せ場だと張り切っていた。

ちなみに俺の位置は下の通り特等席である。

- - - - -
近衛隊長 近衛 近衛 近衛

王様 勇者

- - - - -
国務大臣 俺 近衛 近衛

プロロ・グ(後書き)

見切り発車

準備

時は5時間ほど前に遡る。

ラダトーム城兵士宿舎 食堂

俺はいつも朝のトレーニングの後食事をする。

食事の後は王室図書館にて史書を漁り、知識を貯める。

昼からは新任の挨拶周りをするのがここ一ヶ月の日課だ。

でも今日は違った。食事の最中、近衛のサイモンがやってきた。

「おついたいた。お前昼からの謁見に立てって命令だ。大臣からの伝言な。」

こいつは不良近衛騎士のサイモン。見た目は金髪碧眼で美形、さらに貴族の三男坊のくせに少し残念なやつだ。一度俺と衝突してから俺お前の仲だ。

「おい、なんか失礼なこと考えていないか？」

「あれっ顔にでてたか。で、王様への謁見は近衛騎士が立つのが決まりじゃないのか？」

「お前なあ。まあいい、今日は勇者の謁見だからな。大臣の隣につけよ。」

「とうとう勇者のお出ましか。いや光栄なことだな。」

「そうか？まっ人それぞれだからな。昼の謁見15分前に控え室に集合な、典礼用の装備で。」

「まじか！典礼用装備。あれ嫌いなんだけど。」

典礼用装備。鉄の鎧、鉄の槍、鉄の盾、腰に鉄の剣のフル装備で総重量20kg以上、しかも無駄に豪華な作りをしている。

「俺は好きだけどな。いかにも騎士って感じだろ。」

「お前はムキムキだからな。俺みたいな軽装備にはきつい。」

「どうせ立っているだけだ。じゃまた後でな。」

他人事だと思って勝手なこと言う。俺の戦闘スタイルは革鎧に両片手刀、さらに魔法の併用だ。しょうがないから今日はいいとして、次の為に典礼用の革鎧を用意しよう大臣に頼もうかな。

おお勇者ロトの志を継ぎし者よ

「勇者ガルドどの、ご入場」

謁見室に勇者の入場を告げる声が響き、黒髪短髪、身長2m弱、ごつい体の男が入ってくる。しずしずと歩み寄り王座の手前で片膝をつく。

「勇者ガルド、まかりこしました。」

ブラボー!!!なんて感動的なシーンだ。俺はこの場にあることを精霊ルビスに感謝する。

「おお勇者ロトの志を継ぎし者よ、よくぞ来てくれた。」

あれ?なんかセリフがおかしいぞ。志? 血じゃないの?

「今アレフガルドは、竜王によって光を奪われ絶望の下にある。そなたがまことの勇者なら竜王を倒し光の玉を取り戻してくれ。なお勇者への支援に関しては大臣より仔細説明をうけよ」

俺の横で大臣が一步前にでて説明を始めた。

「今ラダトーム王家ラルス16世の名において勇者ガルドとの契約が成された。」

一つ、ラダトーム王家は準備金として100ゴールドを勇者に与える。

一つ、ラダト・ム王家は勇者の生命に対してできる限りの支援を行なう。なお血の契約において生命失 われしときでも蘇生が可能である。

一つ、勇者はラダトーム王家御用達の宿屋、武器屋、道具屋において割引サービスを受けることがで きる。

一つ、勇者は王家準騎士として扱う。なお装備品として同等のものを所持する権利も与えられる。

一つ、勇者が獲得したモンスター素材は王家が専属で買い上げる。

一つ、………

(なんだこれ？いやに生々しい契約だな。血の契約ってなんだ？割引サービス？買取？俺は混乱しているようだ。まだ大臣が何か言っているようだ。何も聞こえない。というか聞きたくない。あゝ あゝ 何も聞こえなくない)

ふと我にかえると勇者が大臣の差し出した紙に血判を押している。

「最後に王は公人ゆえに口にできぬが、さらわれし王女ロ・ラの命を案じておられる。もしそなたが姫を助けてきたならば、臣下にして最高の恩賞が与えられるであろう。では行くがよい勇者ガルドよ」

そして勇者が退出していく。なんと言うか想像していたのとは違うが儀式は終わった。と思った。

「では次の勇者を入れよ」

「勇者ドゥーマンどの、ご入場」

で冒頭の一言「勇者って一人じゃないんですか？」

勇者支援官 兼 査察官って何？

今俺の前で大臣が怒って怒鳴っている。

「もう少しで台無しになるところだったのだぞ、次の勇者の耳に入らなかったからよかったものを。」

「まあまあ大臣殿、ケルテンも知らずに口にしたまでのこと、大事には至らなかったのですからよろしいではないですか。」

「私が怒っているのは知らなかったことではないですよ、近衛隊長殿。そなたの部下が十分な説明をしなかったことに腹をたてているのです。部下の教育は正しく行なっていただきたいものですな。」

（うへっ！怒りの矛先がかわった。近衛隊長もサイモンも小さくなってる。）

「いえね、大臣。俺は知らなかったのですよ、ケルテンが知らないことをね。てつきりすでに大臣が説明しているものだ……。」

大臣は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「もうよい！では改めて説明しよう。ケルテン何か質問はあるかね。」

「はい、では質問させて頂きます。勇者は唯一人、しかもロトの血を引くものではないのですか。そう理解しているつもりでしたが？」

「なるほどよく勉強しているな。勇者ロトの伝説とロトの預言書か。」

勇者ロトの伝説：およそ400年前、アレフガルドを絶望に落とし、大魔王がいた。この災難に対してラダトーム王家は異世界から勇者を召喚し、これを討伐させた。

ロトの預言書：大魔王は死に際して言い残した。我死すともいわず、第二の魔王が現れるであろう。

国民の噂：ロトの勇者の血を引きし新たな勇者が現れ、この国を助けてくれるだろう。

ここ一月の間、王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であってる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。

『この国難に王家は勇者を公募する。我と思わん者はラダトーム城まで出でよ。』

（俺が知っている答えと現実の情報は大臣のそれと一致する。では何が違うのか？）

「そう怪訝な顔をするな。概ね正しいが問題がある。まず第一にも、ロトの血に連なる者が現れても証明するすべがない。そしてその者が必ずしも魔王を討伐できるとは限らない。」

「では偽者かもしれない者を勇者として招き入れているということですか？」

「そうだ。だが一人一人にはお前こそ口トの勇者として招き入れているのだ。だが何人の勇者が現れようと一向に構わぬ、そのうちの一人が目的を達成すればよい！」

いや、そこでキリッってどや顔されても困るんですが……。

「しかしそれでは泥棒に金をやるようなものではないですか？」

「だからお前がいるのだ。」

えっ！俺となんの関係があるんだよ。

「そこでだ。改めてお前に任務を与える。ラダトーム王家國務大臣付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官だ。」

勇者システムの実情

「ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官
?」

「そつだ。お前には今日謁見した勇者5人を担当してもらつう。まず支援だが、勇者への助言、救助、レベル管理を主にする。」

「レベル?」

実のところ、この世界では敵を倒してもレベルが上がって強くなったりしない。地道な訓練と経験、素質でしか強くなれない。だからレベルなんてないのだが?

「うむ。各々の勇者の持ち込む素材によってレベルを決める。簡単に言えば倒したモンスターの証明だ。このレベルに応じてどの程度のことか可能か助言するがよい。詳しいレベル管理については素材買取所の者に聞くがよい。」

なるほど。スライムの素材をいくつか持ってきたら、次にスライムベス、ドラキー・・・と強いモンスターと戦わせればいいのか。これが経験値で、買取でゴールドを与える。つじつまはあうな。

「そして一番大変と思われるのが救助だ。もしなんらかの理由で勇者が行動不能もしくは死亡した場合、速やかに現地に行つて救助するのだ。尚、死亡していた場合でも死体が残つておれば王家に伝わる秘術によつて蘇生が可能だ。この任務ゆえにお前が特務隊士に抜擢されたと言つても過言ではない。」

「どういうことだ。それだけなら近衛の連中でもできるような気もするが……？」

「お前の疑問はわかる。この任務に大事なものは強さはもちろんのこと、魔法が不可欠だ。その中でもルーラ、ベホイミが最も重要になる。救助に行ったはいいが戻ってこれないのでは意味がないからな。現状ではそこまでの魔法が使える者で腕の立つものは少ない。残念ながら近衛でも隊長と副隊長ぐらいしかいないのだ。ケルテン、お前は全ての魔法を会得していたな。」

「ええ使えますよ、全てをね。」

「ならば勇者を救助後、ベホイミによる回復やルーラでの帰還を行なうのだ。」

「しかし勇者の行動不能、死亡、現在位置などは張り付いていなければわからないのでは？」

「その点は問題ない。私の執務室の壁にある世界地図があるな。あれで仔細がわかるようになっておる。それを含めての血の契約だ。」

「なるほど、そのような魔法があるとは知りませんでした。」

「これも王家の秘術よ。知らぬのも無理はない。それはともかくもう一つの任務だが、勇者として力量が足りぬ者、器量が足りぬ者がいたならば、査察官として解任する権限を与える。なお口頭による宣言だけでなく説得も必要だ。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。」

「ちなみに力量や器量の基準はどういったもので？」

「それはお前に一任する。解任される者が納得いかぬ場合もあることが説得の方法も一任する。」

「え〜とつ、それは私の気分でやめさせることができ、さらに気に入らないやつはぶん殴つてもやめさせろつてことですよね！」

「そうだ。察しいいではないか。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。お前以外に2名の特務隊士が同じく任務についておるが大体実力行使が必要だつたらしいぞ。まあお前は近衛隊長と互角に戦えると聞く。せいぜいがんばるがよい。」

ちよ、だれがそんなこと言った。大臣の隣で近衛隊長とサイモンがニヤニヤしている。お前らか。

「いえ、近衛隊長には一方的に負けています。」

「あの勝負は私の方が一方的に有利なルールの元行なわれたもので謙遜することはない。お前を推挙した私の顔もたててくれ。がっはっはっ！」

近衛隊長が腕を組んで笑っている。隣のサイモンがサムズアップしている。何がグツ！だ。あとで締める。

「それにこれはもう決定事項だ。快く拝命せよ。」

「はあ、わかりました。特務隊士ケルテン 勇者支援官兼査察官 拝命いたします。」

腹が立つので嫌味たらしく片膝を付き、右手を心臓の前に沿える最敬礼で答えてやる。

「よい。任務に励め。」

くそつまるで嫌味が効かない。さすが国王の実弟で王位継承権2位だけはある。これだから高貴な生まれな方は困る。

「最後にもう一つある。もし今夜にでも城下で女を侍らせて酒宴に興じておる不届き者がいたら、即解任、さらに500Gの罰金をさせよ。罪状は国王様への詐欺罪だ。これで国庫への負担はほぼ無くなる。」

うわっなんて悪辣な。5人のうち一人くらいそんなやつはいるだろう。準備金100Gは高くないってわけだ。しかし素直に聞くはずもないから、全ての厄介事を俺に押し付ける腹だ。

「そう嫌な顔をするな。今までおよそ半数がそれで脱落しておる。無条件でお金や名誉がもらえらると思っておる輩は少くないぞ。」

「わかりました。もういいです。せいぜいがんばりますよ。」

おれは重装備を引きずるように退室した。

考察：魔法とステータス

部屋に戻った俺は重い装備を所定の木人形にかけていく。典礼用の装備は細部は結構華奢にできているので装備しないときは部屋の隅の木人形にて片付けておかないといけない。そこににやにやしたサイモンが入ってくる。

「よっおつかれ！さっきは悪かったな。」

「そう思うなら手伝え。片付けるのも手間だ。自分に着せるより面倒くさい。」

「了解。しかしそんなに重いのが嫌なら魔法使い用の正装でよかったですじゃね？」

「ああ、それも考えてはみたんだがある理由があつて止めた。」

サイモンが手を止めて聞き返す。

「ある理由とは？」

「さぼるなよ。まあ大した理由じゃないが、まず魔法使いの地位が低い。」

「そうか？おれはすごいと思うけどな。ベギラマとかベホイミとか俺には使えないからな。」

この時代の魔法は過去のロト一行が使用していた魔法に較べてかなり劣る。物語のはじめの作品とかそういう問題だけでは解決でき

ない理由が実際にはあるはずだ。そう思って過去の文献等調べたのはもう5年ほど前からか、今ではそれでとんでもない量の報告書が書ける。ただ報告する義務もないし、唯一の俺のアドバンテージを知られるのも困る。そう俺は全ての魔法が使える。ベギラマではなくベギラゴン、ベホイミでなくベホマ、それ以外の全ての魔法すらアレフガルド中を旅して発掘、解読、会得している。そういった理由を踏まえてこの時代の魔法使いは地位が低いと理解している。

「そういうがベギラマの一撃と君らの剣の一撃、与えるダメージは大差ない。ならばMPを消費しない剣の方が強い。またベホイミで回復できる量もそれと大差ない。かつてのロトの時代の大地を焼き払い、天より雷を落とし、死人すら蘇らせる魔法が使えるわけではないからな。」

俺は嘘をつく。使える魔法を使えないふりをする。この強大な魔法を公表したくない。これは多分ロトの勇者の決定と違わないと思う。戦乱の時代には究極の武器になるかもしれないが平和の時代には強力な暴力となる。またもし竜王側が使えるようになると互いの使用する魔法は被害を拡大するであろうことは想像に難くない。

「ふ〜ん、そんなものか？お前は学者みたいなことを言うんだな。でもよお、そんな強力な魔法が使えたら竜王軍もいちころじゃね？」

気軽に言ってくれる。物を簡単に考えすぎる。こいつは剣の力量は近衛でも上の方、魔法も簡単なホイミ、ギラ程度なら使用できるが双方を別物として考えることしかできない。もっとも片手剣と盾を使用する戦闘スタイルでは魔法は使いづらい。どちらかの手を空けないと魔法を発動できないから戦闘開始にギラ、ベギラマを放ち、戦闘終了後に回復を行なうのが一般的である。

「もしの話はいい。しかし懐かしい称号だ。ここの兵士になるまで戦う学者って言われてた。」

「一日の半分は図書館にいるお前らしいいい称号だ。よしできた。」

サイモンが最後のパーツを木人形に取り付け終わった。

「サンキユ。でさっきの話だが魔法使いのローブ姿は動きづらいから嫌だ。第一格好よくない。」

「プツ。クツクツク！やっぱりお前は面白いな。好きにするがいいさ、俺じゃねえし。」

「あきれたやつだな。よく近衛騎士になれたなお前？」

俺は肩をすくめて言う。近衛にあるまじき軽さだ。

「俺もそう思うよ。先の戦いで兄貴が死ななかつたら間違いなく貴族の次男坊って気軽な身分でいれたらうよ。だれにとつてかは知らんが迷惑な話だ。」

「お前が言うな！」

文句を言いながら革の服を着る。自作の特別製で動きやすく軽い。必要な場所だけ金属板で補強してある。籠手も脛当ても同様だ。最後にこれもマイラの鍛冶に作らせた特別製の刀を佩く。刀を作る技術は廃れていたが代々伝わっている秘伝書を解読して作ってもらった。それから更なる改良を重ねて今ではお気に入りの一刀だ。力の強くない俺には使いやすい装備である。

ここからは俺なりのステータスの考察である。
 ちなみにステータスは確認できない。もちろんステータス確認画面なんか出てこない。他人と手合わせしたりして相対的に理解できるぐらいであるが俺、サイモン、近衛隊長の身体能力は次の通りである。

	俺	サイモン	近衛隊長
力	C	B+	A
すばやさ	B	C+	B
賢さ	A	D	C
HP	C+	A-	A
MP	B-	D	C

記号は俺評価で、Aは数値にすると201〜250 B151〜200 C101〜150 D51〜100 E1〜50で、数値の+はふり幅の上、-が下と考えている。例外の数字としてSの250〜255、Fの0（無）としている。Sはお目にかかったことはないがFは純粋な戦士のMPに該当する。

俺に較べて隊長の化け物具合がわかると思うが、サイモンも十分強い。しかもまだ伸びしろがある辺りに空恐ろしさを感じる。力のCというのは鉄の装備ができるぎりぎりの域である。ただし装備するとすばやさ犠牲になる。ゆえに俺は標準戦闘スタイルは捨てた。それでも普通に戦えば隊長には勝てない。多分サイモン相手でも5割勝てればいい方である。

次に賢さだが俺のAは転生ゆえの知識が上乘せされている。総合すると魔法使いか盗賊推奨のステータスだ。賢さはDあれば下級の魔法が使用できる。Cもあれば中級魔法、つまりこの時代の全ての魔法が使用できる。だからこの時代に賢さB以上は棄ててステータス

になる。魔法はワンワードスペルではなく詠唱（発音必須ではない）方式で、理解できない詠唱を丸覚えで使用している。簡単に言うとギラといえば火の玉がでるわけではなく、口頭か頭の中で詠唱してラストワードとしてギラと唱える必要がある。実際はもっと難しくMPの消費、マナとの融合などの基本があるのだがここは割愛する。

総合して俺は隊長に勝てるかというと普通は無理だ。だが俺にしかできない魔法を使用すると可能になる。答えは能力上昇系魔法の使用、具体的にはピオリム（すばやさB：約170はすばやさS：255にする）を2回かける。すばやさB：約170はすばやさS：255に化ける。他にはバイキルトやスカラの使用も有効である。騎士同士の試合は双方構えてからの戦いなので魔法を使用する時間はいくらでもある。かくして俺はそれなりの強さを認められている。

大臣室の地図

「よし準備完了。愉快的な任務じゃないが行って来る。」

「おう、がんばれよ。応援しているぞ。」

「なんかお前に応援されると、馬鹿にされてる気がする。」

とりあえず今日の勇者5人の詳細と居場所を確認する為に大臣の執務室に向かうことにする。執務室へ行くには城の一階奥の二回への階段を上る。ここには常時二名の兵士が詰めている。もちろん俺は顔パスだ。他には大臣、近衛騎士なども顔パスだ。二階に上ると近衛の詰め所がある。反対側が大臣ら文官の執務室にである。ちなみに中央に謁見室があり、その裏側が王様らのパーソナルスペースになっていて、立ち入りは大臣と近衛隊長以外は許されていない。

玉座

国務大

臣地

扉

執務

室 図

- 扉 -

近衛騎士

扉

扉

扉

詰所

-----扉扉-----

扉

扉

扉

扉

扉

階段1F

二階は礼式がとても面倒くさい。ほとんどの扉の前に近衛騎士が立っていて入室の理由を説明しなくてはいけない。それらの障害を乗り越えて大臣の部屋に入る。部屋の中には何人かの文官がいたが大臣によって退室させられていく。俺を睨んで退室していくのは簡便して頂きたい。

「お邪魔でしたか？ずいぶん仕事が立て込んでいるようですが？」

「かまわん。今この城で最優先の仕事は竜王と勇者に他ならん。」

「そうですか。ではその勇者ですが・・・。」

俺は地図を眺めながら声をかける。地図にはアレフガルドの簡単な地形といくつかの光点が見える。手前の台には水晶球が紫色の座布団の上に鎮座している。大臣は抽斗から書類を取りだすと、一枚

の書類の上に右手を水晶球に左手をかざす。すると一つの光点が強く光り水晶球に見知らぬ男達の姿が映った。

「見よ。これが血の契約の効果の一つだ。この契約書の人間をこちらの遠見の球に移すことができる。少量のMPを消費するが便利なものだ。」

「これはだれですか？」

「これは勇者12とその一行だ。固有名詞は書類にある通りだ。」

書類にはエイブラムとある。固有名詞で呼べばいいのに。勇者12つてひどくね？

「先も述べたが勇者が何人いようとかわわぬ。同じくそれが誰でも一向に構わぬ。現在いる勇者は12、25、41、42、43そして今月の51、52、53、54、55の十名だ。」

なるほど数字の前が謁見した月、後ろが謁見順か。

「なるほど一月、二月が一名ずつ三月は全滅で四月は豊作ってことですか。」

「ふん。だれがどうでもかまわん。お前は自分の担当勇者のみ気にすればよい。」

うわっ！一気に機嫌が悪くなった。やっぱり王族だ、下々のことなど気にも留めぬか。

「わかりました。では調べさせていただきます。今月の勇者はこの

5枚ですね。」

勇者51 マイラ出身ガルド 大斧の使い手 嗚呼あのごついやつか。現在位置はと……水晶球に手を当て魔力を送り込む。もう城外にいるようだな……とりあえず問題なし。

勇者52 ラダトーム出身ドォーマン うっ記憶にない。居場所は……城下で同行者2名か。

勇者53 ラダトーム出身クロウ またしても全く記憶にない。こいつも城下で同行者2名つと。

勇者54 ラダトーム出身ゲオルグ やっぱり記憶にない。完全に意識が無かったようだ。反省せねば……こいつも同行者2名？ちよつと映像を拡大……なるほど、こいつら三名はいっしょか。もしかするとあかんかも？

勇者55 出身地不明アレフ 15歳 若いな。まつ18の俺が偉そうに言うことでもないか。ふむ居場所は城下町。ただし一人……。

最悪今日一日で4人解任しなくてはならないか。うっん、我がことながら大変だな。

「大体わかりました。でも本当にいいんですか？500Gとっても。」

「かまわん。我々王族に対して詐欺を行なったのだ。死刑でもかまわないぐらいだ。」

やべっ 触れてはならないところに触れたようだ。とぼっちりが来
ないうちに退避するんだよ。じゅ。

城下町の宿屋

城下町にやってまいりました。当たり前といえば当たり前だが、？の離れた所にある町ではなく同じ城壁内にある？、？のタイプである。この城下町はとも大きく公称の人口で10万人、竜王出現後は集落を失った民が流れ込んでいて20万人とも言われている。10万人といえば多く感じられるかもしれないが、通常兵士一人を維持するには千人の民が必要といわれている。このぐらいの人口がなければ騎士団は維持できない。ちなみに各地の人口はマイラの村5000人、地下の町ガライ8000人、湖上都市リムルダール20000人、砂漠都市ドムドーラ30000人（現在不明）、城塞都市メルキド50000人とされており、またそれ以外にも小集落が多数あった。過去形なのが残念である。リムルダール、ドムドーラ、メルキドはラダトームに多額の税金を払うことで一応の自治を許されている。

さてさっきの勇者達の光点の位置はたしか王家御用達の宿屋の辺りだが・・・なんだ俺が使っていた定宿じゃないか。この宿は俺も結構世話になってたし挨拶ぐらいしておくか。しかしこの宿代は50Gほどだったと覚えているが、もしかして勇者割引で8Gとかになるとか言わないよな。としようもないことを考えながら宿屋に入る。人の良さそうな親父がこちらを確認する。

「久しぶりです。親父さん。」

「おお学者か？城への任官はどうなった。一月も音沙汰無しで心配したぞ。」

「すみません。かなり忙しかったもので。」

心底うれしそうな親父さんがボトルを取り出しながら言う。

「ということは無事任官できたんだな。それはめでたい。今日は奢らせてもらうよ。」

「いやゴメン。まだ任務中なんでそれはまた今度で。」

「ふくん。まだ仕事ってどこに配属された？お前の腕なら一般兵ってことはなかるう。」

「うん。知らないかも知れないけど国務大臣付き特務隊士。」

その名を聞いて親父さんの顔が曇る。その表情からは心配そうな感情と嫌悪が感じられる。あまりいいイメージがないようだ。俺の顔色を見て親父さんの顔が元に戻った。

「嗚呼その任務自体は問題ない。まあできれば補助金の金額をもう少し上げてもらえると助かるが……。いや今のは忘れてくれ。」

「????。なんか都合の悪いこともあるのか？」

「特務隊士なら勇者の視察だな。五月の勇者が四人ほどチエツクインしてる。内三人の態度が以上に悪い。女の従業員に手出すは、部屋にけち付けるはで散々だ。全くあんな安い金でVIP扱いしろって冗談じゃない。ああ城批判じゃないからな。念のためな。」

「はあ。補助金も大した額ではないようだ。気の毒でしょうがない。しかしまあやっぱあの三人は駄目なようだ。気が滅入るな。」

「そうですか。で、そいつらはどこですか？」

「さつき出て行った。ただで飲ませてやる酒はないって言ったら椅子蹴飛ばして出て行ったよ。」

「じゃあ。待たせてもらうよ。水もらえる？」

俺はカウンターに腰をかけた。親父がグラスに水をいれてよこす。

「水だけでなく何か食べていってくれよ。結構もらってるんだろ？」

「残念ながら初任給は四日後だ。しばらく我慢だ。それとこれから荒事になりそうなんだ。あまり腹を膨らませるわけにはいかない。」

「そうか？契約金とかあるはずじゃないか？」

「嫌なこと思い出させるね。契約金は推薦者のリムルダールの義父のものだよ。」

「お前の義父って、確かあの町長だよな。」

「そつ、全部税金だよ。去年は竜王のせいで十分な税金が集まらなかったらしい。なにが城で見識を深めて来いだよ。俺は売られたんだよ。」

「しょうがないさ。城の取立ては結構きびしいらしいぜ。お前さんの義父も苦労してるのさ。」

「わかってるよ。別に恨んだりしてないさ。ただ文句の一つくらい

言ってもいいだろ！」

自治権との引き換えの税金が各都市にある。これはその年の取れ高を考慮したりしない。だからお金や物で納められない場合は人で払う場合がある。その場合町で優秀な人材を城に推挙し契約金という形で納めたことにするのである。前例では近衛騎士になった者は数えるほどしかないらしい。それでも一万Gだったらしいから、俺の10万Gは破格だ。リムルダール町長と近衛隊長の推薦を聞いた大臣の顔は見ものだったらしい。まあ栄転ということで喜んでくれる人が大多数だし、王立図書館の閲覧ができるようになった俺はその言葉どおり見識を深めることができご満悦である。

宿屋の入り口の扉が音をたてて誰か入ってくる。若いというより幼さの残る顔をしている。見覚えがある。たしか勇者55、ああ駄目だ駄目だ、番号で呼ぶのは頭の中といえ失礼だ。え〜とアレフだ。「只今戻りました。食事をお願いしたいのですがお金が少ないので一番安いので。」

「わかった。食事はどこへもっていけばよい。ここか？部屋か？」

「ここでお願いします。」

やけに低姿勢だな。まあ威張り腐っているよりは十倍はましだ。銅の剣、革の盾、皮の鎧。鎧が真新しいということは買い替えたのか。俺が勇者アレフを見定めていると俺の隣で直立した。

「先程謁見室でお会いしましたね。勇者アレフです。多分これからお世話になると思います。よろしくおねがいします。」

驚いた。俺は覚えていないのに俺を覚えている。(うそ。俺は呆けていただけ。)

「おっおう。俺は勇者支援官のケルテンという。こちらこそよろしく。」

「王様にお礼を伝えてください。鎧を買い換えることができました。」

「なんか雰囲気にも飲まれて敗北感でいっぱいである。謙虚さでも人は押されることあるんだな。」

「ええ、必ず伝えますよ。君も頑張ってください。」

「もう挨拶はいいだろう。さあ食事だ。食べて英気を養いな。」

宿屋の親父さんが食事をテーブルに並べる。結構な量だ。

「あの私が頼んだのは一番安い食事でしたが・・・？」

「いいんだ。若いんだ、たくさん食べて強くなってもらわないとな。勇者さまだろ。」

「そつだそつだ頂いておけ。城から補助金もでているしな。なつ親父！」

補助金の話でまた親父の顔が少し曇る。一瞬の間の後俺と親父は大爆笑する。アレフはあつけにとられている。不愉快なことだらけの今日一日だったがこいつに会えてよかった気がする。

勇者との衝突

ドーン！

宿屋のとびらが乱暴に開く。せつかくのいい気分が台無しだ。同じく親父もアレフも嫌な顔をしている。

「おらっ勇者様のお帰りだあ〜。」

女の肩を抱いた酔っ払い三人が入ってくる。反対の手には酒瓶。テーブル席のあたりを占拠すると酒盛りを始める。先程確認した装備と全く変わってない。同行している女は安っぽい香水の匂いにあるからさまな露出度の高い服、いかにもな娼婦だ。さてどうしたものかな？どの程度から詐欺罪って申告できたかな？

「ねえ、いっつもお金がないって言ったのに今日はどうしちゃったのお〜？」

「そうよ！いつも冷やかしばっかだったのにい。」

「そりゃ言えねえな。お金はあるところからもらえばいいんだよ。げっひゃっひゃっひゃ〜！」

「何よそれ。教えなさいよ。教えてくれなきゃ帰る〜。」

「そうよ。あんた達だけず〜る〜い〜。」

完全にできあがってるな。もう少し泳がせたら全部しゃべってくれないかな。娼婦頑張れ！今お前達は優秀な検察官だ。

「誰にも言っなよ。秘密だぞ。秘密だからな。絶対言っなよ〜！」

「うん絶対言わない。私達の秘密ね。」

もう一息だな。まるでトリオのお笑い芸人のようだ。

「じゃあ言うぞ。実はな、城に行ってなにを隠そう私がロトの末裔です。ってやってやった。」

「え〜！三人とも〜。それってなんか変じゃない。」

「細けーことはいいんだよ。それでとりあえず100Gもらえたんだからよ。あとはスライムなりいじめてもっと金もらってくるからよ〜！」

おいおい。スライムは一匹で1Gにしかならんぞ。いや突っ込む所が違うな。はい言質とりました。さてお仕事お仕事ってあれ？アレフ君何するの？

「あなた方恥ずかしくくないんですか！勇者ロトの末裔を偽証し、あまつさえそれで得たお金で遊興に走るとは恥を知りなさい。」

「なんだあお前。なにをガキみたいなのを言ってるんだ。って本当にガキじゃねえか！ガキは帰ってお寝んねの時間ですよ〜だ。」

「そうよ！もう少ししたらお姉さんがお相手してあげる。」ちゅっ！

「止めてください。私はこの人達と話をしているのです。」

「うるせえ！こっちはお前なんかとする話はねえな。」

あかん。そろそろ止めないと収拾が付かなくなる。俺は立ちあが

つてアレフの肩をポンと叩く。

「ああ君は正しいがそれだけでは世界は回らない。あとは任せてくれ。」

そして酔っ払い三人に向かって話しかける。

「では改めて、私は勇者査察官ケルテンと申します。勇者ドゥーマン、クロウ、ゲオルグ3名を解任します。尚血の契約において重大な偽証があるゆえ全員に500Gの罰金を申し渡します。意味はわかりますか？」

「なっ！てめえ何言ってるやがる。」

「理解できませんでしたか？私は勇者の査察官をしています。つまり私の権限で勇者を解任することができます。ここまではよろしいですね。」

皆静まり返っている。その酔っ払いも娼婦達も宿屋の親父、勇者アレフも。

「勇者の解任には次のいずれかの理由が必要です。まず勇者の力量に足りない者、こちらとしても無理に命を失わせるのが目的ではありませんし、支援には限度がありますから弱い者は辞めていただくこととなります。次に勇者として器量の足りない者、これは素行の悪い者はモンスターとなんら変わりないと言うことです。勇者の名前の下、軋轢がうまれては意味がありません。そして最後に目的遂行の意思のない者、これにいたっては論外ですね。あなた方はこの三点すべてに当てはまります。」

「異議有り！」

一番弱そうなドゥーマンが何か言い出した。異議有りときたか。ここに至って何を言い出すか面白そうだ。

「俺達はいま酔っ払っているがこれは明日からの活躍に向けて英気を養っているだけで目的遂行の意思がないわけではない。」

「なるほど。続けてください。」

「それに素行が悪いとおっしゃられるがこれは酒による一時の過ち。どうかご甘受願いたい。」

こいつ結構弁がたつな。ローブ姿だから魔法使いタイプか？

「そして力量が足りないとおっしゃられたが試しもせず判断はできないのではないのですか？」

なるほど詭弁とは言え、一応反論として成立している。

「わかりました。では力量を試させていただきますでしょうか。実践形式で結構です。」

「ちょっと待て、今俺達は酔っついていてまともに戦えな「かまいません。酔いを醒まさせる方法がないわけではないですから。親父さん、例の特別ジュースを三杯頼みます。」

こいつらの戯言にいつまでも付きあつてられるか！こんな嫌な顔を見るのは今日で最後にしたい。

さて目の前に緑色のドロドロした液体が運ばれてくる。これは昔

考案した対酔っ払い用の特別ジュースだ。製法は簡単、毒消し草をすり潰し適当な果汁とシェイクした物だ。アルコールは一種の毒なのである。キアリーを使えばもっと簡単なのだがこの時代には本来無いのでここでは使用しない。

「さあ、グググッと飲み干しちゃってください。私のおごりです。10分もすれば酒が抜けます。ああまずいのは我慢して下さいね。」

しぶしぶ飲み干す三人。とても不味そうだ。というか実際不味い。親父もカウンター内で苦そうな顔をしている。俺はカウンターに50G置く。

「お釣りはありません。必要経費ですから。」

「では酔いが醒めるまで試験の方法について話しましょうか。何か条件があったら聞きますのでどうぞ。」

「条件って何を？」

「ふう、何も考えていませんか。どんな戦いでも最低限の条件はあります。ルールと言ってもよろしいですね。例えば騎士同士の試合は双方同じ装備同じ人数で魔法無しで行います。一方冒険者ではほとんど決め事はありませんが宿屋の中ではやりません。大事な仕事の幹旋場所ですから暗黙のルールです。」

「じゃあ、俺達はいつも三人で行動している。だからこちらは三人でやる。」

「OK！それでいい。他には？」

「あんたのその武器はずいぶん立派だ。不公平だ。」

「おい！何勝手なことを言っている。あんたらは三人でさらに武器ま「アレフ君、私の為に怒ってくれなくてもよろしいですよ。その条件もOKです。じゃあこれはアレフ君に預けておきましょう。でこれだけでいいですか？」

「じゃあ場所はすぐ外の道路上でいいな。まさか城の兵隊さんは街中で火や雷の魔法をぶっ放したりしないよな。火事にでもなったら大変だ。」

「なるほどその通りです。忠告ありがとうございます。ではギラ、ベギラマは私は使用しません。」

よほど自分たちのとりつけたルールがうれしいのか奴等の顔色がよくなってきた。赤くなったり青くなったり戻ってみたり顔色だけで忙しいやつらだ。

「おい、本当に大丈夫か。必要なら城に行つて騎士を呼んでくるが。」

「心配ないよ、親父さん。まあ見てなつて。」

30分後、3対1 さらに不公平なルールの試合が始まる。

決闘

ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ……
いつの間にか宿屋のまわりは人であふれている。いったい何が
きた？窓からこっそり外を覗く。

「偽勇者二人相手に城の兵隊さんが喧嘩売ったってよ！」

「いや勇者は本物で兵隊が因縁つけたって俺は聞いている。」

「え、賭け金は1Gから、今の所オツズは勇者三人が1・5に兵隊
が3、おいだれか兵隊にかけるやついないのか！賭けにならないぞ
よし兵隊のオツズは5だ。だれかいらないか？」

いつのまにか祭りの会場になっている。屋台でもでてくれば完璧
だな。

「大事になってすまない。うちの女どもが外に触れ回ったらしい。
最近景気のいい話がなかったから皆話題に餓えていたらしい。なん
なら今からでも止めさせるが……」

「あゝ……えゝ……まあしょうがないかあ。いや今更止めれる状況
じゃなさそうだ。場所だけ確保してくれるかな、半径10mくらい
でいいから。」

「うちの前では狭いな。若い者に中央の広場を確保させる。しかし
お前さんにはつくづく悪いことした。すまない。」

「別に親父さんが悪いわけじゃない。もう謝らないでいいよ。こっ
ちが悪い気がしてくる。」

時と場所を移すこと ラダトーム城下中央広場 二時間後、完璧な祭りの会場が出来上がっている。急遽用意された屋台、ロープと簡易な木で作られた10m四方の闘技場。山のような人、人、人。もう10時は回っていて本来なら真つ暗なはず・・・誰だよわざわざレミィラで照明作ったのは。

「え、それではこれより自称勇者三名とラダトーム城兵士の決闘を行います。ルールは双方の申し出より決定しています。勇者側は三人パーティー武器魔法など制限無し、兵士は武器無しギラ、ベギラマ使用禁止となっています。」

宿屋の親父が立会い人兼司会者となつてアナウンスする。

「おい！なんだそれ。勝負にならねえよ！！賭けるの止めるぞ！」
「え、条件が変わっても掛け金の返金はしません。このまま続行します。なおオツズは1・2対10に変更します。」

さてとそろそろ登場するとしますか。モシヤスとか使っちゃ駄目かな。あまり個人として目立ちたくないし、いや駄目だなもう手遅れだ、あきらめるか。

俺がとこと広場にでていく。そのあと自称勇者三人が出て行く。騒ぎが余計にはげしくなった。

そうだろうね、俺一見強そうに見えないから。身の丈170cm、筋肉は付いているが細身、顔も普通、しかも武器なし革の服のみ、これが俺の今のスペック。かたや対する三人はゲオルグ身長190弱、結構ごつい体をしている。銅の剣、革の盾、布の服で強そうに見えるな。クロウ身長は俺と変わらないが俺より肉付きはいいよう

だ。こん棒に布の服。多分三人の中で一番劣る。最後にドゥーマン身長170弱俺より細身ローブ姿で木の杖を持っている。どこから見ても魔法使いだ。大体の戦法は想像できるな。さてどうするか？とりあえず準備しよう。まずピオリムを二回かける。バイキルトはいらないか・・・スカラは念の為にかけておくか。魔法対策にマホカンタでも使いたいが却下だ。あれは派手に効果がありすぎる。ロストマジックは使用がばれたくない。こんなもんでいいだろう。

「最後にこの決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここにいる全ての者が見届ける。それでは始め！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ゲオルグ（剣）

俺

ドゥー

マン（魔）

クロウ（こん棒）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

予想通りの布陣だ。ゲオルグとクロウが互いに目配せしている。そしてちらちらとドゥーマンの方を見ている。積極的に前に出てくるやつはいない。近接二人で俺を引き付け後ろからギラで一撃、基本だな。

「おいせつかく三人もいるんだ。そつちから仕掛けてきな。」

わざと挑発するように手を振る。動け！形が崩れないと攻め手が
ない。

安っぽい挑発だが効果があったようだ。クロウのこめかみがピク
ピクしている。

「この野郎！」

クロウが一步踏み込み、こん棒を振り上げた。

そこっ！すばやさ255は伊達じゃない。俺は一足跳びにクロウ
の懐に飛び込み、こん棒を振り下ろす右手と襟をつかんだ。

「ギラッ！」

あせったドゥーマンがギラを放つ。俺はそのままクロウをドゥー
マン側に背負い投げる。あえて叩きつけずに放り投げる。火の球が
空中で逆さまになったクロウの背中を焼く。

「ぎゃあああ〜！！！！ぐふっ！！」

地面に落ちてのた打ち回るクロウに近づき頭にサッカーボールキ
ック。一つ！次二人目、ドゥーマン側に走る。先程と同じように踏
み込む。

「ひいひい〜」

ドゥーマンが頭を抱え込んでしゃがみこんだ。おいおい俺がいじ
めてるみたいじゃないか。しょうがない。

「キヤ……！」

観客の悲鳴があがった。そして静まり返る観衆。最悪の終わりが想像される。そこには銅の剣を両手のひらで挟み受け止めている俺がいた。真剣白刃取り。よく取れたものだ。俺は我にかえり腕をひねり武器を奪い取る。呆然としているゲオルグの腹を蹴飛ばし倒す。

「終わりだな。」

銅の剣を突きつけ宣言する。

「そこまで！」

観衆の歓声は最高潮に達した。多分ここにいるとやばい状況になると思われるので退散するでしょう。手にしていた銅の剣を放り出す。あゝうるさい。耳をおさえながら歩く。

「アレフ君。私の刀を返してください。」

アレフの耳のそばで大声で叫ぶ。

「えっああ！はい、これどうぞ。」

唾然としていたアレフが我に返り刀を差し出した。

「ありがとう。また会いましょう！」

俺は群集にまぎれるように姿を消した。

決闘の反響

うーん、よく寝た。もう6時か、あれだけ身も心も疲れてたわりには起床時間は変わらないとは習慣とは恐ろしいな。うわっ手の平が痛い。昨日銅の剣を受け止めた所が青くなっている。やっぱり無茶だったようだ。銅の剣で助かったようだ、鉄の剣や鋼の剣だったら・・・もうあんなまね止めよう。手足が何本あっても足りん。とりあえず治療しておこう。

「ホイミ」

うんホイミは便利だ。多少の切り傷、打ち身、筋肉痛にも効く万能魔法だ。一人ぶつぶつ言っているとノックの音が聞こえる。

「ケルテン殿起きていらっしやいますか。来客ですが。」

誰だよ、朝っぱらから。扉を開けると騎士見習いの一人が立っている。

「はいはい。起きてますよ。で来客ってどちら様ですか？私しか駄目なんですか？」

「はい名指しです。しかも勇者殿です。」

昨日の連中がクレーマーにでもなったか？そうだったら嫌だな。他には心当たりないし・・・。

「ではすぐ行きますので、応接室に通しておいて下さい。」

「わかりました。そう手配します。」

ラダトーム城兵士宿舎 談話室

談話室は非常に重苦しい空気に包まれている。ここにいるのは俺と勇者アレフの二人だけだ。この空気を作った張本人は真剣な目で俺を見つめている。先程開口一番

「私を弟子にして下さい。」

ときたもんだ。それから5分ほどずっと沈黙が続いている。俺はさつきから考えているのだが考えがまとまらない。個人的に一人の勇者についていいものか？俺に何か教えることができるのか。俺自体何人かに師事したが基本独学で覚えたことの方が多い。そもそも昨日の決闘を見て、何か感じるものがあつたのか？

・・・？さっぱりわからん。

「ゴメン。よくわからないのだが何を師事するつもり？」

「全部です。必要なら武器も変えます。魔法もできる限り覚えます。」

「ああそれは駄目。いくら私の真似しても強くはなれない。今持っている技術を昇華させるようなことをしないといけないよ。私と君は同じじゃないから。」

「それです。」

「えっ何が？」

「そういう考え方です。私にはそういう何かがありません。孤児だった私は生きる為に武器を振っていました。更に必要なので魔法もかじりました。一応ホイミ、ギラは使えます。でも何か足りないのです。昨日の決闘をみてこの人だと思いました。」

なるほどね。必死で生きてきたんだ。よく曲がらずにいたものだ。

「OK。わかった。でもさっきも言ったように一から十は教えない。君が持つてる三なり五なりを十に近づける。そういう方法を教える。それでもいいか？」

「はい！それでかまいません。師匠。」

「ああ、それも駄目。俺にはケルテンという名がちゃんとある。肩書きとかで呼ばれると俺が俺で無くなった気がする。だったら俺も君のことを勇者55で呼ぶよ。」

「勇者55？」

「知るわけないか。君は五月の五番目に申請してきた勇者と城では認識している。失礼な話だろう。」

「では昨日の三人も？」

「そう、かれらは勇者52、53、54だった。んっ？あれっ俺正式に解任してない。また探さないといけないか。まあいい、それは置いて俺のことはケルテンと呼んでくれ。」

「わかりました。では私のこともアレフと呼んでください。この大地の名を頂いた大事な名前です。ケルテン師匠。」

「わかった、アレフ。今からお前は俺の弟子だ。ではまず技量がみたいから訓練場に行ってくれるか。案内はさせる。」

そして騎士見習いを呼んで案内をさせる。俺は自室に戻り自分の刀を佩き、アレフに使わせる鉄の剣と鉄の盾を持つ。これは支給品だが使っていない物だ。実は鉄の剣は市販では売っていない。正規兵の武器である為一般には販売が禁止されている。

- - - - -

兵舎訓練所 ラダトーム城の兵士は特に訓練義務があるわけではないが、一般的にここを使用して自己鍛錬を行なう。俺は毎朝一時間半ほど刀を振っている。

さてアレフと騎士見習いの二人がいる。とりあえず重いので鉄の剣と盾は置いておく。

「あゝ君、名前は？」

「はっ！ ジョルジョといいます。」

「そんなに緊張しなくていいよ。じゃあジョルジョ、アレフと木剣と木盾で模擬戦をやってもらう。双方手加減はいらぬ。もちろん攻撃は当てること。とりあえず三本勝負でいいかな？」

今日の前で模擬戦をやっている。ジョルジョ君は流石騎士見習いらしく正当な剣術を使う。基本的に忠実でフェイントの使い方も教科

書通りうまいもんだ。だがまだ体ができていないからまだ剣筋が甘い。嗚呼そういえば不思議なのがサイモンだ。昔初めての模擬戦やった時、片手剣に盾を持つ正統スタイルでヤクザキックかましてきた。同じ剣術とは思えんな。いかん考えがよそに行った。さてアレフは型がない。ちからもすばやさも相手より上だから通用しているだけだがまだまだ可能性はありそうだ。三本勝負の結果は、アレフ二本、ジヨルジヨ一本だ。

「さて先に品評をしておこうか。

まずジヨルジヨ君。君はそのままでもいい。ただフェイントに固執しすぎじゃないかな。たまには気合の一撃を入れるといい。それでフェイントが生きる。

次アレフ、君は身体能力に頼りすぎ。多分格下には強いが格上には通用しない。とりあえず基本の剣筋を確立しようか。よし大体やるべきことはわかった。ジヨルジヨ君ありがとう。もう戻っていいよ。またあいてをやってくれ。」

先程放り出しておいた鉄の剣と盾をとってアレフに渡す。

「まず先に行っておくが、理解できないことがあつたら必ず質問すること。理解しないまま訓練しても身につかないから。また納得できないならいつ師事することを止めてもかまわない。ただしその場合は必ず口で言ってくれ。いいな。」

「わかりました。でも師事を止めるなんてありません。絶対に。」

「よし、練習だけだがその剣と盾を使ってくれ。やっぱり本物を使わないといけない。とりあえずそれを持って構えてくれ。」

アレフは右手の剣を少し掲げ、左手の盾を前に出す。左の軸足を

少し前に出し、かるく腰を落とした構えをとる。悪くない構えだ。

「それがいつもの構えか？」

「はい。何かおかしいですか？」

「いや別におかしなことはないよ。その状態をホームポジションと
言うことにする。」

「ホームポジション？」

「ああ気にしなくていい。ではその木偶を思いつきり斬りつけて
くれ。」

木偶とは直径10cmぐらいの木を十字に組んでそれに麦わらを
巻きつけた物。必要ならここに甲冑を着けて使う。アレフは剣を思
いつきり叩きつける。剣は振り下ろしたままだ。

「はいそれ駄目。攻撃の後は必ずホームポジションに戻す。」

「あつ！でもなんで？」

「まだ敵は倒れていないかもしれない。だから次に備えた姿勢に戻
す。じゃあ次は木偶の無い所で素振りをしてくれ。ただしさつきと
同じ威力のままです。」

アレフは思いつきり剣を振り下ろし、ホームポジションに戻す。
そしてこちらをむいて笑う。

「そうだ、それでいい。では次はその一連の動作を100回繰り返

す。」

これが結構大変だ。見ていると半分位から振り下ろしが甘く、ホームポジションへの戻りも不正確だ。一応終わった後、肩で息をしている。

「結構きついだらう。まずこれができるまで他のことはしなくていい。最終的にこれを1分の休憩を挟んで10セットできるようにしてもらおう。腕が動かなくなったらホイミを使うといい。」

「でもこんなので強くなれますか？」

「これはそれ以前の問題。さっきのジヨルジヨもこれに近いことをやってるはず。ちなみに」

俺は刀を中段に構え、一瞬の振り上げの後振り下ろす。そして中段に構えなおす。これを100回繰り返す。これだけやって息もきれないしおおよそ3分で終わる。

「俺のはこんな感じだ。10年毎日やっている。まあ一週間でこれぐらいはできてほしいかな。午前中はここを使っている。午後からはモンスターを狩ってくることに。弱いモンスターでもいいから基本を抑えながら戦うこと。ついでにお金も稼ぐこと。では俺も日課の続きをするからアレフも続けるように。」

俺はいつもどおり刀を振る。振っている間は他の事は何も考えない。目の前にいるイメージを斬る。ここ一ヶ月の仮想的は近衛隊長である。10セットが終わったら次の型に移る。自然体から居合いからの右切り上げ、振りかぶって両手持ちで幹竹割り、納刀の一連の流れを100本、10セット行なう。ふと我にかえると隣でアレ

フがあっけにとられている。

「おいおい、手が止まってるぞ。」

「すみません。なんかすぐくて。」

「毎朝ここにいるから、そのときだけ教えてやる。じゃあ俺は終わったからあとは自分で続けること。剣と盾は終わったらその辺の見習いに返しておいて。」

言うだけ言うと俺は練習場を立ち去った。今日はやることがいっぱいあるからあまり付き合ってやれない。昨日の連中を解任しなくてはならないし、賠償金の支払い手続きもいる。さらに勇者51はどこへ行ったのが気になる。今日も忙しくなりそうだ。

祭りの後と後の祭り

いつも通り食堂で朝食をとる。いきなりの運命の変転に気が滅入る。無意識にフォークで肉や野菜をつついてはいる。誰か来たようだな。

「ケルテン師匠、ここにおいででしたか？」

サイモンが冷やかすように言う。

「てめえ！なんでそれを。」

「くつくつく！ジョルジヨから聞いた。私もよい助言を頂きましたって喜んで皆に触れ回ってたぜ。」

頭を抱える。なんだよ、他に娯楽はないのかよ。俺で遊ばないでくれ。

「それともう一つ。」

そういいながらサイモンが袋をテーブルにドンツと置いた。何が入っているんだ？結構重そうだ。

「いや、昨晩は儲かった、儲かった！なんせ10倍の鉄板レースだ。」

サイモンが袋をひっくりかえして中のゴールドをテーブルにぶちまける。食堂にいた連中が寄ってくる。

「あ・あ・あ〜お前・・・これ！」

俺は声にならない声を出して、ゴールドの山を指差す。1000Gどころじゃない。その倍はあるか？

「昨日の夜な酒でも飲もうと城下に出たら祭りやっててな。でな！主催の決闘の賭けに有り金全部お前に賭けた。ああいうのって普通掛け金に限度額あるだろ！でもお前の無茶な条件にお前に賭けるやつがほとんどいなくて、胴元がお前に限り限度無しでのってきた。いや〜お前格好よかったよ。」

もういい。もういいよ。お前、俺をおもちゃにして喜んでるな。

「よお〜し、今日は全部俺のおごりだ。皆ここでなら何食ってもいいぜー！」

そして朝から酒宴が始まった。

「ケルテンに！」

「サイモンに！」

『かんぱ〜い』『乾杯』『乾杯』……………

俺はこの馬鹿騒ぎに巻き込まれないよう逃げ出した。逃げてばっかいるな、俺。

……………

あいつら呪ってやる。大臣と隊長にたつぷり叱られるがいい。俺はぶつぶつ言いながら街中を歩く。見事なまでに人が俺を避けてい

く。きつと怖い顔しているのだろう。それはまあどうでもいいとして、目的地は昨日の宿屋である。あの連中がいればいいし、いなくても手がかりくらいはあるだろう。はたして・・・？

結論。連中は宿屋の一室に籠っていた。あの後ここに逃げ込んだ方がいいが、外の喧騒に一歩も出ることができなくなったらしい。三人とも目の下に隈ができています。眠れなかったのだろう。

「なんだよ。負け犬を笑いに来たのか。強い強い兵隊さんよ！」

「強いつてのは気分がいいんだろうな。やる前から俺達のことを馬鹿にしていたのだろう？」

「500Gなんて払えねえぜ。ないもんないからな。」

なるほど。いじめられて拗ねてる状態だ。強くも出られず、かといって逃げるに逃げれないから開き直ったか？

「まあ馬鹿にしていなかったと言ったら嘘になるな。だが事が終わった後笑いに來る趣味は無い。だがやることはやらないと俺が大臣に怒られる。」

ここで言葉を止める。かなり心配そうな顔をしている。

「まず昨日の通り勇者は解任させてもらう。それと賠償金500Gだが今すぐ払うのは無理なのは分かっているから、モンスター素材の優先買取の権利だけは取り消さずこれで支払ってもらう。」

「嫌だといったら？」

「ああその場合はもつと簡単だ。王様に対する詐欺ということに死刑だ。逃げても無駄だぞ。あの血の契約でどこに逃げても居場所が

分かる。だから逃げるのあきらめろ。俺も追うのは面倒くさい。」

「わかった。死刑になるのは嫌だ。だろっ？」

残る二人に同意を求める。当然縦に首が振られる。

「よし、では詳しいことをつめようか。買取金額のうち半分は即賠償金としてもらう。残る半分は自由に使っていていい。その金で余分に賠償金を払おうが、生活費や装備などに使用するのも自由だ。最高で三人で3000G相当の素材を買い取ることができるな。」

「えらい段取りがいいな？もしかして最初から決定事項か？」

「そうかなり悪辣な罠だよ。大臣に聞いたときもそう思った。まあ高い授業料と思うんだな。」

三人がため息をついてうなだれる。

「あと一ヶ月に一度は報告に来てくれ。もし遠征で一週間以上連絡が取れなくなる予定がある場合も事前に相談してくれ。具体的に言うと徒歩ならガライは3日、マイラは5日、リムルダールなら2週間はかかる。例えばリムルダール近郊にいるゴールドマンなら1体で1000G以上になるが・・・」

ここで三人の顔を見る。

「なあ、人の顔を値踏みするように見ないでくれ。」

「いや悪気があるわけじゃない。どの程度までならいけるか考えていた。」

「で、俺達にいけそうなのはどこまでだ？」

「そうだな。二、三日はラダトーム近郊で遠征費用を稼ぐ。その後ガライへの遠征で野営に慣れるべきだな。あとはガライから帰ってきてから相談だな。」

このとき三人は呆れたような顔で俺を見つめていた。

「何？顔に何かついてるのか？」

「あんた自分が何言ってるか分かってるのか？その見識と自信はどこからでてくる？むしろあんたが勇者だって名乗りでもいいぐら이다！いや今からでもそうするべきだ。」

あれっ！そう言われりゃそうだ。自分が異分子だと判断して大きく世界に関わらないようにしてきたし、自分は勇者じゃないと思っ
てたから……。

「まあ俺のことは置いて、君らの話を続けよう。さっきも言ったようにガライに行って帰ってこれるようになってくれ。いいな。」

「はあ。最初からあんたに会えてればよかったのに。そうすればこんなことにはならなかったのに。」

「なあ俺らはどうしていればよかったんだ？教えてくれよ。」

しばらく考える。こいつらはもともと銅の剣、こん棒、布の服³着、革の盾を持っていた。で前衛²、後衛¹……ならば俺ならこうする。

「そうだな。まずもらった300Gで革の鎧を2着買う。ゲオルとクロウの分だ。あとクロウに革の盾を一つ買う。これで残金は70Gだ。ここまでやって残りで遊興にいそしめばよかった。最低でも翌日からの意思が表明できた。あと革の鎧だったら俺には投げられていない。襟がつかめないからな。じゃあ俺は次の予定があるからまたな。」

部屋をでて俺は外に向かう。物分りのいい連中でよかった。もつとごねてくるかと思った。次は勇者51ことガルドだ。大臣の執務室で調べるかな。

美女と魔法談義

大臣の執務室だ。簡単に昨日の結末と後始末について大臣に説明する。さして興味もなさそうに大臣はいった。

「それについてはそれでよい。であとの二人は有望か？」

「分かりません。ただ内一名が私に師事してまいりましたので許可してしまいましたが、よろしかったですか？」

「かまわぬ些細なことだ。だが役に立たないと判断したなら速やかに放逐せよ。」

相変わらず大臣はある程度の身分以下の人間にたいして厳しい。選民意識の強い人だ。個人的には好きではないが国務大臣ともなると、いちいち下々のことなど気にもかけぬのも当たり前か。

「では残る勇者51について調べます。」

抽斗から勇者51ことガルドの書類をだす。書類に右手、水晶球に左手を置き魔力を送り込む。地図上の光点の一つがより強く光り、水晶球に歩く姿が映し出される。場所は・・・こことマイラの間ぐらいか。

徒歩にしては脚が速いな。問題は今の所無しか。

「では失礼します。」

退室する俺に大臣は一瞥すらしない。

厄介になると思われた今日の予定が半日ほどで終わった。残った時間は図書館で消費するとする。

ラダトーム城一階にある王立図書館。ここには美人の司書官がいる。彼女は宮廷魔術師を兼任していて、馬鹿は嫌いと言っているにも関わらず近衛騎士やら貴族のぼんぼんの来館に頭を悩ましている。

「マギー！今日は来れたよ。」

俺は軽口を叩いて入館する。ここ一ヶ月毎日通っていたが昨日は来ることができなかった。しばらくここに来る機会はぐつと減るだろう。では今日のうちに俺なりの研究結果を教えてやってもいいかな？

「ケルテン！もう昨日はどうしたのよ。ずっと待ってたのよ。」

「おいおい！聞いていないのかよ。勇者査察官に任命されたんだ。大変だったんだぜ。」

マギーが抱きついてくる。この人は自分が美人な自覚がない。おまけに胸が大きいのも気にしていない。俺はどきどきを通り越してばくばくしている鼓動を抑えるのに必死である。照れくさいのを隠すように文句を言う。俺の鉄の剣が大きくなる前に放してくれてよかった。

「それね、馬鹿どもが言ってたのは。」

「俺がここに来なくなるなんて無いよ。まだ読んでいない本がいっぱいあるしね。」

俺がこの城に来た最大の理由がここにある。この図書館には門外不出の文献がいっぱいある。ロトの洞窟、雨の祠、虹の祠（雨と虹の祠は単独で存在しておらず小集落に祠があった。）などのロトの足跡を追い始めたのは5年ほど前、存在していたはずの技術を探し求めた。その集大成がここにあった。

「わたしは？」

マギーは怒ったように言う。

「いや君に会えるのもうれい。また魔法談義ができるし。」

そう俺が気に入られているのはその一点に尽きる。彼女は二言目には『かつて魔法使いは天を地を人を思うように操れたはず。』と言って今の魔法に満足していない。

「じゃあその魔法談義で許してあげる。」

「OK！じゃあ準備するからそこで待ってて。できれば飲み物を用意してほしいな。」

図書館を歩き回って幾つかの本を持ってテーブルに付く。マギーは不器用にお茶を入れている。大体いつもの通りだ。

「じゃあ始めようか。今日は俺の推察したことについてだ。」

まず第一にギラはギラじゃない。さらにベギラマはベギラマでは

ない。意味分かる？」

「わかんない。ギラはギラでしょ？」

「そうだろうね。俺も同じこと聞いたらそう答える。じゃあこれ見て。」

俺は本を取って挿絵のあるページを開く。挿絵にはギラを使う魔法使いと説明書きがある。また別の本を取って開く。こちらには魔法の説明がある。

「これが何？ギラの説明でしょ？」

「この絵をよく見て、ギラで大地を焼き払ってるだろ。」

「そつとも見えるね。」

「じゃあ、君のギラで同じ事できる？」

「無理ね。火球が出るだけ、こんな風に焼き払うことはできない。」

「次、ここにある記述”ベギラマはギラの上位魔法である。”これについて、さてベギラマはギラの上位魔法か？」

この質問にマギーは首をかしげる。斜め右上を見上げながら何か考えている顔はとても美しい。

「そうね。そういえばおかしいわね。ギラは火球の魔法、ベギラマは稲妻の魔法。全然違う。」

俺はさもこの文献で解かったかのように説明する。ただ事実を述べているにすぎないのだが、この時代のギラは実はメラである。同じようにベギラマはなんとライデインである。この事実に気づいたとき俺は失われた魔法を再現できる可能性にも気づいた。今それを始めて他人に洩らしている。

「次に魔法の詠唱内容について、これは今意味の解からない言葉を丸暗記して詠唱している。そうだよな？」

「そうよ。はるか昔口トの勇者一行から教えられた魔法は口伝のみね。」

「俺の考えでは当時アレフガルドは魔法技術が低かったと思っている。そこにそれらを自由に操る大魔王たちがこの地を征服した。そして同じく魔法を駆使できる勇者が光臨して大魔王を倒した。このとき少しの魔法が伝授された。」

「だめよ！その名前を口にしてはいけない。」

「なにが？大魔王のこと？本当の名前も知らないのに！」

「やめて！呪いが・・・何か悪いことがおこるかもしれないじゃない。」

「わかった。その名はもう口にしな。俺が悪かった。」

今現在、大魔王ゾーマの名は伝わっていない。大魔王と口にすることすら禁忌とされている。口にすることで蘇るかもしれないと無意識に恐れられている。

「話が逸れたね。考察を続けよう。魔法の詠唱文の一小節目についてギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスこの4つは同じ。ではこれらの共通点は？」

またマギーが首をかしげている。この顔が見たくて俺は毎日のように魔法談義をしているようなものだ。

「わかった。消費するMPね。数値化はされていないが消耗が近い。」

「正解！まだ魔法を覚えての頃やらなかったか？自分はホイミを一日に何回使えるか？ギラなら？ラリホーではって。」

「やったわ。最初ホイミは2回しか使えなかった。でもギラは4回使えたわ。ホイミが3回使えるようになったらギラは6回使えるようになった。ホイミはギラの2倍疲れるって言ったら大人が驚いた。」

「またまた正解。ちなみに具体的に数値化すると俺数値だがホイミは4MP、ギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスは2MP、レミールは3MP、リレミトは6MP、ルーラは8MP、ベホイミは10MP、ベギラマが5MPだ。」

「ちょっと待って、記述が間に合わない。もう！ここに書いて。」

「了解。じゃあその共通する3MPという部分が詠唱する文節にあるか？」

俺はさっきの消費MPを紙に書きながら質問する。またマギーは俺が好きな顔で考えている。

「うん。あるわね。」

マギーの目が輝いている。ちよつと俺は意地悪をする。

「さて、じゃあ俺から質問。今俺が答えを持っているとする。君はその答えを知りたいか？」

「駄目！そんなカンニングみたいなことしたくない。」

「OK！じゃあヒントをあげよう。詠唱2小節目3小節目の一部分は全ての魔法で一致する。さてこれはいかに？」

「もういいわ。自分で解明してみる。時間はあるから。」

この勝気な感じもたまらないな。多分答えを教えたら二度と口を開いてくれないだろう。手元の紙に詠唱文をかきながらうんうんうなってる。俺も昔やったな。口述するのが日本語だとしたら、詠唱は英語みたいなものだ。意味が分からないから片仮名で詠唱する。口伝なので発音の仕方も習う。元々口トは外国人みたいなものだから言葉も苦労しただろうし、魔法に使われる特殊言語に至っては説明するのは不可能だったに違いない。数ある魔法の詠唱文の解読は大変だったな。数ある魔法・・・そういえば開かずの間・・・あつできるかもしれない。

「そうだ。例の開かずの間、試してみていいかな。」

「はあ？あんた何言ってるの！昔から該当する鍵も見つからないし、有名な鍵師でも開けられないゆえに開かずの間なのよ！」

ここには開かずの間がある。ロトの時代より一切開けられていない開かずの間。鍵も無く万能鍵である魔法の鍵でも開かないから放置されている。その前には古い箱などが詰まれている。無いものとされている。

「やってみみたいことができた。もし開いたら報告する？」

「うん・・・しない。ここが騒がしくなるのは嫌！馬鹿が増える。」

「だよね。報告の義務はないし。じゃあ荷物をどけようか。」

小一時間埃まみれになって荷物をどけた。

「もう！埃まみれ。これで開かなかったら荷物は自分で戻してね。」

「分かった。でも開いたら戻すのは手伝ってくれるってことだよな？」

「うっ！そう来る？いいわ！それでいい。」

扉の前に立って鍵穴を確認する。魔法の鍵にあう大きさよりずっと小さい。しかもやたら複雑な形をしている。いけそくだ。鍵を探していたから開かないのだ。閉めたのはロトに違いない。ということとは閉めた鍵は最後の鍵、じゃあそれがなければ、詠唱開錠魔法・

「アバカムッ！」

カチツ！シリンドーが400年ぶりに音をたてる。

「何？今の魔法。」

「ロストマジックの一つ開錠魔法アバカム。教えて欲しい？」

「意地悪ね。でもまだ駄目、私じゃあまだ早い。」

「君の意見を尊重するよ。じゃあ入ってみようか？」

開かずの間

400年の封印が今解けた。そこにあったものは・・・埃だった。そうだよな。400年も密閉しておけば埃ぐらい溜まるわ！後ろではマギーが布で口を押さえている。

「掃除をしないととても調査できないね。」

「そうね。でも誰がやるの？」

「そりゃあ俺達だ。他の人を入れるわけにいかないし。」

「じゃあ。新しいロープ買ってよね。汚れちゃうから。」

「いいよ、昔遺跡で見つけた絶対汚れないロープを進呈しよう。」

「やった！でもあんた一体何者なの？剣では近衛隊長に匹敵し、魔法を使えばまるでロトにつき従った賢者の様。」

「俺は戦う考古学者ケルテン。それ以上でもそれ以下でもないよ。」

「いいわ、それで。あなたらしいわ。」

それから埃を取るだけで2時間かかった。マギーのロープの袖は埃で真っ黒、二人とも頭が埃で真っ白だ。それで見つけたのは数冊の本と、小さな宝箱一つ。

「ねえ！なんか開かずの間にしてはしょぼくない？こんなに苦労したのよ！」

「それはこの宝箱の中身見てから決めようぜ。」

そう言つて10cm立方ほどの宝箱を空けた。中には紫色の布に包まれた鍵一つ。持ち手から伸びるただ一本の棒だけで一見してどんな鍵にもあつことはなさそうである。

「何これ？鍵にしては何の突起もないわね。使えるの？」

「そうだね。見た目は唯の棒みたいな感じだけどね・・・」

俺はそう言いながら先端を手で触つてみる。やはりそうだこの金属は不定形でいかなる形にでも変化する。

「うん。間違いない、これは最後の鍵。いかなる錠でも開けることのできるロトの秘宝。」

「え〜！でも開かずの間の中にあつたら意味ないじゃない？」

「そうだね。だけどそれ故にここに置いた勇者の意思が感じられるね。きつと勇者はこの鍵もこの世界には不必要なものと判断したんだ。」

「この鍵も？どついう意味。含みがあるわね。」

「鋭いね。一字一句に引つかかるとは。」

マギーはその豊かな胸をはって言う。

「馬鹿にしないで！これでもアレフガルドの賢者って言われたこ

「ともあるのよ。」

「まあ賢者つてのは誇大だね。」

「単なる比喩表現よ！それはそうと話を逸らさないで。」

「ごまかせないか。うんじゃあまた俺の推察なんだけどロトの勇者達は可能なのに魔法や技術を伝承しなかったと思っっている。」

「なんで？すばらしい技術は伝承するべきでなくて？」

「うんそうだね。君は善良で平和な人だからそう言うと思ったよ。」

「どついう意味よ！また馬鹿にしてるでしょ！！」

「いや褒めてるんだ。その考え方を忘れないで欲しいな。」

おれは肩をすくめて言う。

「ならいいけど、でも説明して！」

「例えば大人数を即死させるような魔法や一個大隊を一撃で爆死させるような魔法があるとして、それを君が嫌いな貴族のぼんぼんが覚えたとする。さらに今現在竜王がいないとして彼らはその魔法を何に使うだろうか？」

「そんなの敵がないのだから使い道ないわ。」

「残念。答えは言うことを聞かない相手に使う。」

「そんなひどいことするわけないじゃない。」

「そう？君も貴族の御令嬢だから判ってると思うけど、言うことを聞かない奴隷や家来に暴力を振るう貴族は少なくないよね。」

マギーはその口に両手を当て驚きの声を上げる

「あっ！」

「そう。力の大きさの違いだけでやることは変わらない。現在リムルダールとメルキドが自治区になっているけど、このことを苦々しく思う人間は少なくないと思うよ。城側の意向はできるなら直轄地に戻したいし、自治側は最終的に独立を考えているかもしれない。これらの解決策に力は必須なんだ。」

「判った。もういいわ。」

「そう。続けるね。多分ロトは今言ったことを理解していたんだ。残念ながら彼の旅路はモンスターとだけの戦いではなかったからね。だからこそこの地ではその力を封印した。彼らの死後それらの力が使用されないようにね。」

「なるほどね。でもあなたはそれを掘り出して使えるようにしているのはロトの意思に反しているのではなくて？」

「うっ！耳が痛いね。でも各地に古文書なり口伝による伝承者がいたのは、再びこの地に災厄が襲ってきたときの為だと思うんだ。彼は災厄の復活を予言していたから。」

「そういえばそうね。じゃああなたはいいことをしているんだ。」

「さてね。もしかして豹変してこの国を征服するかもよ！」

「フフフツ！じゃあそのときは私があなを殺してあげる。」

「怖っ！心しておくよ。死にたくないのね。」

プツ！あっはっはツ……。その雰囲気になんか耐え切れず
二人は笑う。

「はあ。こんなに笑ったのは久しぶりね。でもあなたはさっき言った魔法も使えるのね。多分。」

「怖い？」

「いえ。あなたは力の使い方を知っている人だと思うから怖くないわ。」

「ありがとう。」

あれっ！目から涙が……。悲しくなんかないの？気が付くと俺の頭はマギーの胸に抱かれていた。しばらくそのまま時間が過ぎる。

・
・
・

「はあ！なんかゴメン。」

「いいの。あなたにも弱いところがあるのがわかってうれしいわ。」

「うわ〜なんだか恥ずかしい。俺が俺じゃないみたいだ。」

急に我に返つてのたうち回る。そんな俺の肩をポンとマギーが叩く。

「なんかあったら私に相談しなさい。お姉さんが相談に乗ってあげる。」

「うん、そうするよ。お・ね・え・さ・ん!」

「君にお姉さんと言われるとなんかむかつく。やっぱそれ無し。」

そして二人で今日二回目の大笑いをした。そうだね。俺18、マギーは22、それは言っちゃ駄目だよね。

「とりあえずここを出ようか。また日を改めて調べるから。」

「そうね。お風呂にでも入りたい気分。」

「じゃあマイラにでも行く? いい温泉知ってるよ?」

「きつと君のことだから行けるんだね。もう何を言われても驚かなくなっちゃった。」

「うん。行けるよ。これも知りたい?」

「止めとく。今日の宿題ができてからでいい。でも温泉には行きた
い。」

「OK!ではこの鍵は君に預けておく。俺には必要ないからね。」

「でもこんな大事なもの!」

「君に持っていて欲しいんだ。二人の秘密さ。」

「わかった。絶対身から放さない。」

二人は開かずの間改め、ロトの部屋を後にした。

マイラの温泉は行ったのかって?もちろん行ったさ。1泊して城に戻った。

何?昨夜はお楽しみでしたね?うるせーよ。

開かずの間（後書き）

魔法の詠唱、時代考証等作者の勝手な妄想です。ご了承ください。

勇者二人

あれから3日が過ぎた。勇者ガルドはマイラ近郊で狩りをしている。まさに狩りだ。両手持ちの斧を振ってほぼ一撃でことが済んでしまつとはすごい臂力だ。もしかするとちからSかもしれない。期待できるかもしれない。城に戻ってきたら面談することにしよう。

さて我が弟子アレフだ。朝一で俺の部屋にやってくると、ぜひ見て欲しいことがあるとうれしそうに言う。それで訓練所に来て、俺の目の前で素振り100本10セットを終わらせた。

「これは驚いた。まさか3日でできるようになるとはね。」

「その気になれば20セットでも30セットでもできますよ。多分。」

まじか。才能って怖いね。多分って言うけど嘘だね。やったんだ。無茶をする。この訓練の最大のからくりはホイミにある。無理な負担を筋肉にかけると筋繊維が断裂する。それをホイミで強引に直すとなると超回復する。

「よしっ！ではその木偶を斬ってみ。」

アレフは木偶の前に立つと鉄の剣をすらりと抜く。そして構えから一気に振りぬくと即元に戻す。元に戻した後得意げにこちらを見る。俺は斬られた木偶に近づき確認する。麦わらを切り裂いて芯棒を抉っている。もし人の腕なら骨までいつてるな。

「合格だ。わざわざ言わなくても自分で判っているようだし、次の

ステップへ進むか。」

「はい！でも一ついいですか？」

「何？何かわからないことでもあるの？」

「違います。ケルテン師匠が斬るのを一度見てみたいのです。」

「えっ！木偶を？」

「はい！」

俺は頭をぼりぼりと掻きながら答える。

「あくなんと言つか。後で怒られるんだ。備品を大事にしろ！つてね。」

「はあ？」

「だよね。そういう返事しか出てこないよね。判った。一度だけ見せる。」

刀を抜いて中段に構える。気合と共に斬りつける。そして残心。刀を納める頃、袈裟がけに斬られた上半分がすべり落ちた。アレフの顔が壊れた木偶と俺の顔を往復する。さらに斬り口を見ている。

「もつやらないよ。もつたないからね。」

「どうやったらこんな斬り口になるんですか？私にもできますか？」

「無理だね。武器が違う。君達の武器は叩き斬る武器、俺のは斬る武器。振り方も全く違う。だから同じことができる必要はない。」

「でもそれ使ってみたいです。」

「駄目。さつきも言ったように振り方が違う。君の振り方で使うと折れる可能性がある。これはちからの弱いのを力バーする為に特注した俺だけの武器。だから駄目。」

「そうですか……。」

「そう残念そうな顔をするな。純粋なちからならアレフ、君の方がずっと強い。俺の力はC評価、君はB評価、しかもまだ伸びしろがあるからもしかするとA評価もありえるかも?」

「A評価、B、C????なんですか?それ。」

「ああ俺独自の評価だ。ちから、すばやさを大体5段階でする評価だ。もちろんAが上でEが一番下だ。」

「はあ?」

「ちなみに君はB、B-ってところだ。伸びればA-、Bぐらいになれるかもしれない。」

「そのマイナスってのは?」

「ああ、同じBでも幅があるからね。Aに近いBはB+、Bに近いAはA-と表現しているだけ。まあ人はその日の体調や心理で多少上下するから参考までの評価だ。」

「面白い評価基準ですね。考えたこともなかったです。それでケルテン師匠は？」

「俺か？まあこてとこかな。結構鍛えたけどどちらからはこれ以上伸びなかった。素質の問題らしい。ちなみにちからは鉄のフル装備ができるぎりぎりぐらいだ。もっともそうすると重くてせつかくのすばやさが生かせない。本当は攻防バランスのとれたいい装備なんだけど、死にたくないからその装備はしない。」

「なるほどよくわかりました。この装備が僕には適していると言うことですね。」

「そういうこと。では次のステップだ。まず武器を納めて両手を下げ自然体で立つ。」

アレフは言われたとおり立つ。鉄の剣は腰に納められ、左手の盾は逆さまになる（盾は左上腕部に固定されている為、使用時には左手で握り手をつかみ、腕を上曲げなくてはならない。）

「まずそこから抜剣しつつ斜め上に斬撃。」

アレフはシュパツと音を立てて抜き撃つ

「次、いつもの斬撃、即納剣。」

残撃はいいが納剣でもたつく。まあそんなところだろう。

「これを100本。シュパツ、シュ、シャキンぐらいのタイミン
グでできれば完璧。ああ剣を納めたら必ず自然体に戻る。」

「むずかしいですね。手本を見せてもらっていいですか？」

「いいよ。」

おれは自然体から居合いで右斬り上げ、振り上げた所で両手持ちで袈裟懸け、そして納刀。自然体に戻す。ん！いま一瞬殺気？を感じた。

「流れるようですね。武器を戻すことの意味は？」

「あちよつと待って。その影にいる方、見るならこちらでどうぞ。ここは訓練所です。見られて困ることはありません。」

建物の影から体格のいい大男が出てくる。

「わりいわりい。別に隠れてみるつもりは無かったんだが、なんか昔師匠に教えられたようなことやってるなって思わず脚が止まった。つてお前学者じゃないか？懐かしいな。」

「もしかして達人ですか。2年ぶりくらいですか？」

こいつはサバイバルの達人（俺がつけたあだ名だ。俺のあだ名をつけたのはこいつ）薬草学が得意な武闘家。アレフガルドを旅してまわったときよくつるんで冒険したのはいい思い出。互いに右腕を当てて挨拶をする。

「なんであなたがここに？」

「おまえこそ？」

「今月から大臣の下で勇者の支援をやっています。」

「奇遇だな。俺はその勇者をやっている。2月からだ。」

「あの〜すみません。」

いかんいかん。あまりに懐かしくて自分の弟子を忘れていた。

「紹介します。彼はガイラ・ガラ・ライガ、古い友人です。無手で闘う流派の末裔です。ガイラ、彼が私の弟子のアレフです。彼も勇者です。まあ見習いですが……。」

「なるほどねえ。お前さんが弟子をとつたとは……。」

「いえ。ちょっとありましてね。推しかけ弟子といふかなんと言つていいやら。断れなくてですね。」

そこにアレフが口を挟む。

「挨拶が遅れました。師匠ケルテンの弟子アレフです。よろしくお願ひします。」

「おう！俺はガイラ。武器も持てねえ、魔法も使えねえが拳一つで勇者やつてる。しかしまあお前さん見る目あるよ。いい師匠もつたな。」

「私もそう思います。ガイラさん。」

「アレフ俺のことはガイラでいい。さん付けされると背中がむず痒くなる。」

「わかりました。ガイラ」

「おう！それでいい。しかし学者よ。さつきよく俺がいたのに気づいたな。そつちからは見えない位置だったはずだが？」

「ええ！さつき刀を抜いた瞬間、殺気を感じました。」

「ああ一瞬反射的に構えたな。お前さん実は強かったんだな。一手お手合わせ願いたいものだな。」

「嫌です。多分命を懸ける勝負になります。まだ命は惜しいですから。それにまだ授業の続きがありますし。武器を納める理由でしたね。アレフ君。」

強引に話を戻す。

「はい。戦闘が続いているならそのままでも良さそうですし、終わったならそれこそ急ぐ理由は無いとおもいますが？」

「最もな意見です。でもアレフ君、武器を持ったままで魔法は使えますか？」

「無理ですね。僕は右手を使わないと魔法は出せません。」

「だろうね。だから武器を納める練習をします。まさか魔法を使う度に武器を棄てるわけにはいきませんから。」

「そうですね。あまり戦闘中に魔法を使うことはありませんでしたから。」

「これは私独自の解釈です。あまり他にやっってる人はいないでしょうね。じゃあ練習あるのみ。」

アレフは練習を再開する。やはり納剣にもたつく。これだけは慣れないと難しいだろう。俺とガイラが暖かい目で見守る。数回繰り返してアレフが手を止める。こちらをふりむくと

「質問です。毎回自然体に戻す理由は？」

「ああ！それはな常在戦場ってやつだ。うちの流派でもよくやらされた。」

「ジョウザイセンジョウ？」

「常に戦場に在りって意味ですよ。どんな時でも対応できる様鍛錬するんです。」

「そうだ。アレフ。氣い抜いてると死んじまうぞ。」

ガイラは素晴らしいながらアレフに向かってとことこ歩く。そして直前で流れるような正拳突き。もちろん顔面に寸止め。

「わっ！」

「もし今に対応できたら、私からは免許皆伝です。それとガイラ、私には止めてくださいね。反射的に刀で受けてしまいそうです。」

素晴らしいながら刀を半分抜いて目の前に鞘ごと構える。ガイラがむうと唸る。

「ではアレフ。後は自分で練習して下さい。とりあえず一週間はいつもの素振りを10セット、その後はこの練習を10セット行なって下さい。ではガイラ、積もる話もありますからあちらで話しましょう。お茶ぐらい出しますよ。」

そして二人で食堂に向かって歩く。ガイラが軽口を叩いた。

「しかしまあ、お前さん鬼だな！」

「なにが？」

「なにがってさっきの鍛錬だよ。ありゃきついぜ。根をあげても知らないぜ。」

「いつでも止めていいと伝えてありますよ。ただ今のまま放り出したら死にます。そうなる前に勇者を止めさせるか？自分で強くなるか？それだけです。」

「優しい鬼だな。」

「鬼ですか？私は桃太郎に退治されたくないですよ。」

「言うねえ。しかし桃太郎を知ってるとは博学だね。さすが学者だ。」

・
・
・

積もる話はしばらくやむことはなかった。

裏の事情

5 / 6 勇者支援官6日目

日課のトレーニング、日課の師匠の真似事、その後の食事。そこにサイモンがふらふら現れる。少し痩せたか？げっそりして目の下に隈ができています。

「よお！サイモン、久しぶりだな。4日ぶりか、何してた？」

サイモンが俺の前に座り、テーブルに突っ伏す。

「うう行軍訓練でガライまで行ってた。今帰ってきた。お前のせいだ。」

「何でだよ！理知的に説明して頂きたいな。」

「この間ここで大盤振る舞いしただろう。あの後隊長にばれて大目玉だ。お前のせいだろ。」

「あほか、全部自業自得だ。でもまあ徒歩3日でガライ、ルーラで戻ってお釣りが来る日程だろうが。」

「違う違うんだ、往復で4日。しかもフル装備、物資無しで一個中隊の行軍。しかも俺が中隊長で全員任せたって俺達だけで行かされた。死ぬかと思っただぞ。」

「なるほど、それはすごい。たるんだ馬鹿にはちょうどいい。」

ラダチームの軍組織は次の通りである。小隊長が3人の部下を率

いて一個小隊。それを4隊で一個中隊。一名が小隊長と中隊長を兼任する。同じく4部隊をまとめて大隊とする。この頂点に立つのが近衛騎士隊長である。つまり近衛騎士は64名しかいない。ただそれだけでは足りないので一般兵士がもいる。さらに必要に応じて民兵を雇うこともある。

先の戦いで近衛の約半数が失われ、かつ先の近衛隊長も無くなっ
たらしい。その後就任した今の近衛隊長は当時生き残った最高位で、
身分などうるさい近衛の中ではめずらしい叩き上げだ。普段は結構
気さくでフランクな人だが怒ると相当怖いようだ。

行軍訓練。総員で隊列を組み目的地までひたすら歩く。ただフル
装備、物資無しというのはまず鉄の剣、盾、鎧を着込み、更に野営
用の荷物を背負う。総重量は約50kgぐらい、俺には絶対無理。
さらに最低限の水しか持たず食料は現地調達、もし手に入らなけれ
ば無しの過酷な行軍だ。もちろんモンスターは出現する可能性はあ
る。まあ殺気だった16人の兵士を襲ってくる魔物はガライまで
はいないだろうけど。

「今日は一日休息が許された。部屋帰って寝る。」

サイモンがふらふら出て行った。

- - - - -

俺は近衛控え室に来ている。隊長に聞いてみたいことがある。隊
長室をノックして入室する。

「聞きましたよ、アイゼンマウアー隊長。」

「何をだ？ケルテン特務隊士。」

近衛隊長も心なしかやつれている。やっぱりな。

「行軍訓練ですよ。大変でしたね。」

「ふん！たるんだ連中を引き締めただけだ。俺はなにもしていない。」

「そうですね。でも隠れてついでに行ったのは秘密ですか？」

「知らん、なんの話だ。雑談ならまた今度してくれ。書類仕事が溜まっている。」

この人なりの照れ隠しだ。しかし語るに落ちてるよこの人。

「まあそついうことにしましょうか。勇者について聞きたいことがあつてきました。」

「俺に答えられることなら答えよう。」

「ええ、先日落第勇者に言われまして、お前が勇者やれつてね。これは駄目ですか？」

「それは駄目だ。」

「即答ですね。不足しているのは力量ですか？それとも器量ですか？結構自信があつたのですが。」

「そのどちらでもない。正規の軍人は勇者にはなれない。」

「なぜ？と聞いてもよろしいですか？」

「ふむ、ここからの話は極秘になるがよいか？」

「結構口は堅い方です。」

「よろしい。少し話しが長くなる。あちらで話そうか。」

隊長はソファに腰掛ける。隊長が座るまで俺は立っている。

「まあかけてくれ。」

「はっ！では失礼します。」

「ではさっきの話だが、ローラ王女が誘拐された件と関わりある。」

「話の先がみえませんか？」

「そう結論を急ぐな。その後竜王側より秘密裏に交渉があった。」

「交渉ですか？身代金とか、降伏勧告ですか？」

「君は頭がよすぎるな、まあ聞け。そうではなかった。あちらの要求は一つ。双方の軍事活動の停止。」

「はあ？でもまだ対立は続いてますよ？モンスターは相変わらず襲ってきますし、こちらにも勇者を派遣してます。」

「そうだな。詭弁、茶番、俺の嫌いな政治的駆引きらしい。」

「政治的駆引きですか？ということとは交渉は大臣がなされたので？」

「そうだ。先の戦でこつちもかなりの犠牲があつたが、あちらも結構な損害があつたらしい。ドムドーラを落としたとは言え何か手に入つたわけでないからな。」

「なるほどラダトームは必死の攻防で追い返し、メルキドは城砦とゴーレムで、リムルダールは湖とちよつとした小細工で侵攻を止めた。」

「ほう、話には聞いていたがあれはお前の仕業か？」

「何の話です？まあ街が無事だったので。よかつたではないですか？」

「よい、そういうことにしておこう。で、これは想像の域をでないがあちら側はこちらの最大の利点を潰すのが目的と思われる。」

「最大の利点？」

「わからぬか？では聞こう。個々の強さでは我ら人間と魔物どつちが強い？」

「なるほど。個々の強さに自信のある魔物は人間の集団連携を恐れ、封印した。」

「そうだ。王女の命を盾に取られてはこの要求を吞まずにはおれなかつた。」

「では今現在暴れている魔物は軍事行動ではないのですか？」

「それが詭弁だ。あちらが言うには個々の魔物全てが言うことを聞くわけではない。竜王様の崇高な深慮が理解できぬおろか者がいないとも限らないと。」

「ひどい詭弁ですね。主は知らない、馬鹿が勝手にやっているだけだとはね。それでこちらと同じ様なことが起きているだけだと言っている。」

「そうだ。だからお前は勇者にはなれない。2ヶ月前ならなんら問題なかったのだがな。」

「じゃあ今止めて勇者になるのは？」

「それも駄目だ。忘れたか？お前は3年10万Gの契約金でここに来たのだぞ。」

思わず天を仰ぎ見た。そういえばそうだった。

「去年のリムルダールが大変だったのは承知しているが、残念ながら契約は契約だ。あきらめろ。」

「もしかして3年後がないかもしれないのに？」

「そうならないようお前はお前の仕事をしろ。有望な勇者を育成しているらしいじゃないか？」

「なんだ耳に入っていましたか？有望かどうかはこれから判ります。」

駄目なら放逐します。死なれると目覚めが悪くなります。」

「さて話は終わったようだな。飲み物を用意させる。誰かある！」

それから二人でしばらく武術談義に花を咲かせた。

- - - - -

「アイゼンマウアー隊長の長剣は支給品ではありませんね。ちょっと見せてもらってもよろしいですか？」

「そうだな・・・お前の刀とやらを見せてくれるならいいぞ。」

互いに腰から武器を外して交換する。俺のは刃渡り80cmの大
刀、隊長のは拵えが立派な長剣だ。

「すごいな、これはまるで剃刀のようだ。どこで手に入れた？」

「特注です。仔細は秘密です。この長剣もすごいですね。全てミス
リルできていて魔力も感じられる。由来を聞いてもよろしいです
か？」

「秘密だ。・・・ふっ！冗談だ。一族伝来としか聞いていない。俺
は貴族の生まれじゃないからな。代々雇われ戦士の家系にはすぎた
一品だが気に入っている。」

結構古い。拵えの様式からすると多分これは・・・確認してみ
るか。

「代々と言われますが、どの程度遡れますか？」

「家系図があるわけではないから詳しくはわからないが、400年
口下の時代までは遡れるらしい。」

間違いない！確信した。この剣の銘は？

魔法の武器

一息ついてからおれはしゃべりだす。

「判りました。この剣の銘は雷神の剣。ロトに付き従った戦士の
振りです。間違いはないかと思えます。」

「なんとそのような謂れがあったとは……。」

「もう一つ確かめたいことがあります。少し時間をいただけますか
?」

「ああ、ここまで聞いたら全て知っておきたい。」

「ではここでは狭いので訓練所で。」

近衛隊長と俺は数名の兵士を引き連れて歩く。すれ違う者が何事
かと目をみはっている。俺達の緊張が伝わっているようだ。

- - - - -

訓練所で俺は木偶を4つ横に並べた。10mほど離れて構える。
俺の後ろには近衛隊長を先頭に人の山ができている。

「業炎よ！わが敵を焼き滅ぼせ！」

そう言い放つと剣で弧を放つ。的になった4つの木偶が業炎に燃
え尽きた。炎はしばらく消えない。自然に火が消えるころ歓声が上

がった。

「なんだ今のは！」

「あんな魔法みたことないぞ。」

俺は振り返ると雷神の剣を隊長に渡す。

「お返ししますね。間違いありません、雷神の剣です。大事にして下さいね。」

「嗚呼。なんと行っていいか分からないがありがとう。本当にありがとう。」

「その武器を持つに相応しい人がその武器を持つ。当たり前のことです。」

俺と隊長は感動している。

「おい！今のはなんだ。説明してくれ！！！」

外野うるさいな。せつかくの感動のシーンを邪魔するなよ。今二人はロトの時代を旅していたのだぞ。收拾がつかないようなので説明することにしてしよう。

「これは雷神の剣といえます。ロトにつき従った戦士の剣です。剣に宿る魔力を先程の様に放つことができます。炎の剣と同じようなものです。正確に言うると炎の剣はこの剣のレプリカですね。だから宿る魔力が小さい為、小さな火の効果しかありません。」

「なんでお前にそんなことわかるんだよ。見てきたわけでもないの

に！」

「文献を読み、正しく推理する。それで分かることもあります。隊長には後でパワーワードを記述してお渡しします。」

ここで俺は手をパンツ！と叩く。

「はい、余興はもう終わりです。皆さん、仕事にお戻り下さい。いつまでも遊んでいると地獄の行軍訓練が待ってますよ。ねっ！アイゼンマウア・近衛騎士団長どの。」

俺は片目を瞑って、隊長に話しかける。それで皆蜘蛛の子を散らすように散っていった。しかし、その中から女性の声が飛んだ。

「ちょっと！こっち来なさいよ。」

マギーが俺の腕をとって強引に引っ張る。周りの視線を全く気にしないで俺の手を引くように歩く。おいおい簡便してくれよ。

「何なに？もしかして怒ってる？」

「うん、怒ってる。私のいないところで知識を披露しないで！」

「何それ？どんな嫉妬の仕方だよ？」

「いいの！私だけ知らないなんて許せない。」

「わかった、わかったよ。じゃあ詳しく説明するから図書館へ行くか。先に行ってくれる？部屋に取りに行くものがあるんだ。」

「いいわ。でも何持ってくるの？」

「それは後のお楽しみ。じゃ10分後にまた。」

俺は自室に戻り荷物を漁る。確かどっかに片付けたはず。

王立図書館。ここはいつもマギーと俺しかいない。その他のマギーが目当ての男はマギーが追い返すから俺がいないときはだいたい一人で何か読んでいる。最近はペンを片手に紙と格闘している。

「何から知りたい？さっきの剣？約束のプレゼント？それともこの間の宿題？」

「当然もらえる物が先。ちようだい。」

「まったく現金だな。とっておきの品だ。驚け！」

手にしていた包みを開くと半透明な水色の布を取り出して手渡す。マギーが手に取り開いた。

「何これ？ローブ？スケスケじゃない。」

「いや透けないから大丈夫。それは水の羽衣。炎のダメージを減少する効果がある。昔、雨の祠の集落で見つけた。多分勇者一行の女僧侶が着ていたローブじゃないかな。」

「そんな大事な物いいの？」

「いいさ。どうせ俺は装備しない。かさばる装備は俺にはあわない。」

「ありがと。大事にするわ。でもさっきの武器もそうだけど今では売ってないよね。」

「そうだね。じゃあさっきの武器の話も含めて講義しようか。実はロトの時代の前には今より優れた武具が存在していた。例えばラダム王家の国宝、王者の剣、光の鎧、勇者の盾は順にオリハルコン、ブルーメタル、ミスリルで作られていて、これらの素材は通常では溶かすことができないとされている。ではどうやって加工したのか？」

「そんな武器や防具聞いたことないし、溶かせなければどうにもならないわ。もしかして魔物の技術とか、人知を超えた技術じゃない？」

「ああ、それもあるね。大体正解。答えは神々の技術、神々が自らの武具を作成させる為技術を貸した。もっとも調子にのったある国はその後神々に滅ぼされるのだけど、まあそれは別の話。」

「でもなんでそんなこと分かるの？」

俺はある棚の前まで歩き古ぼけた一冊の本を取り出した。

「アイテム物語。はるか昔から伝わる幾つかの話が載っている。童話みたいな本だが結構面白い。暇があったら読んでみるといい。」

「ふん。こんな本あったのね。確かに挿絵とか童話っぽい。」

手にした本を開いて中をパラパラめくる。彼女が本を見る目はいつも輝いている。

「まあね。で、さっきの王家の秘宝の話、今は別の名の方が有名だ。ロトの剣、ロトの鎧、そしてロトの盾だ。ただし今現在は所在不明。とても残念だ。」

「そう。でも見つけることができたら竜王も倒せる？」

「さあ？それは分からない。強い武器を持つだけで強くなれるわけじゃないからね。」

「そんなの知らない。武器なんて握ったことないもの。」

「君はそれでもいいさ。でも武具によつては魔法と同じような効果を持つ物がある。さっきやった雷神の剣とかね。」

「でもあんな魔法見たことない。」

「いや君は一度見てるよ。本の挿絵でね。」

「えっ！ああ、この間のギラ・・・でも炎の大きさが違う。」

「うん。挿絵のはギラだったね。でもさっきのはベギラゴン。ギラ系の上位魔法だ。」

「でも、ベギラマはギラの上位魔法だって・・・。」

「言ったね。正確にはギラ、ベギラマ、ベギラゴンの順に効果が大

きくなる。」

「もう！いつになったらあなたの知識に追いつけるのかしらね。」

ちよつと拗ねた顔で俺を見つめる。

「まだまだだね。宿題はできたのかい？」

「また馬鹿にして。いいわ、研究の成果を見せてあげる。ちよつと待ってて資料取ってくるから。」

マギーはいつも座っている机に歩いていく。

魔法の武器（後書き）

長いので分けます。

美女と魔法談義 その？

準備される黒板、教卓、チョーク、支持棒、資料を教卓に積むマギー。

「ちょ！なにそれ。先生みただ。」

「もう馬鹿にして！これでも宮廷魔術師筆頭で弟子もいっぱいいるのよ。」

「あゝごめんごめん。そうだった。じゃあ先生質問です。3サイズは？彼氏いますか？」

「あのね〜そういう質問一番嫌いなんですけど・・・次言ったらぶつとばすよ。」

「冗談だよ。そういう質問多いんじゃないかって？」

「心配？」

「そりゃあ・・・まあ・・・心配じゃないって言ったら嘘になるかな？」

「もうはつきりなさいよ！いいわ！では講義を始めます。今日は魔法の詠唱についてです。」

チョークのカツカツ言う音が響く。結構手馴れている。書かれているのは4行のギラの詠唱文だ。次に比較し易いようにラリホー、マホトーン、トヘロスと並べて書く。少し離してホイミも書く。

「まず第一にほとんどの呪文は大体4小節でできています。その後
に呪文の名前を口にすることで発動させるのが基本です。」

ここで確認するかのように俺をみる。俺は無言で頷く。

「実は全ての魔法の詠唱において第2小節はまったく同じです。さ
らに第一小節は一部を除いて一致します。しかしこの4つの魔法は
その全てが一致します。」

ここで言葉を止めて俺を見る。心なしか心配そうだ。

「いいよ。続けて。」

「ここで一度魔法の使用法の基本をおさらいします。

? 自分のうちにある精神力、通常MPを放出

? 自然に存在するマナとMPを合成

? 魔法によっておこる現象をイメージ

? 目標を決定し呪文を唱える。」

ここまでを先の4小節の横にわかりやすく書く。

「これらから、第一小節は消費MPの決定、放出を第二小節はマナ
との融合を司るものと考えられます。先に提出された資料から、こ
の部分は2という数字を意味する単語である可能性が高いでしょう。
またホイミのここは4の単語と思われる。また他の魔法から3、
5、6、8、10の単語が導き出されます。」

パチパチパチッ！俺の拍手の音が鳴り響く。

「だいたい正解。大筋で翻訳するところだ。」

？私はMPをX放出する

？MPとマナは融合し万能なる力となれ

？おお万能なる力よ、Aとなり

？Bを、Cせよ。呪文名。

という感じだね。Xは数値、君の言うとおりだ。Aは効果イメージ、たとえば火球、稲妻、癒し。Bは目標、ここには触れていなかったけど我、かの者、かの空間など目標の設定、CはAに類似したイメージした放出方法、焼け、撃て、癒せなどの命令系の言葉になる。」

「ちよつとそこまでは分からなかったわ。参考資料が足りない。」

「じゃあご褒美をあげよう。」

俺は本棚から真新しい本を一冊取り出し、手渡す。

「何これ？こんな本この間までここにはなかったわよ？」

「この間の宿題出した後に置いといた。俺が書いた世界に一冊しかない魔法の本だ。」

「意地悪ね。」

「法則性、違和感とかに気づかないと学者として失格だね。精進あるのみだ。」

俺の軽口を無視したふりでマギーは本を開く。目を丸くしている。そりゃそうだ。その本には全ての魔法が原文で書いてある。

「まったく読めない。でもさっき魔法の本って言ったわね。」

「言ったよ。1ページに一つずつ魔法詠唱文が大きな字で書いてある。」

「意地悪なのか？親切なのか？判断に悩むわね。」

「そつ？君もやらない？有望な生徒を答えに誘導したりしてしない？」

「やる。でもやられるとむかつく。」

マギーが目の前でムキー！ってなってる。うわっ！めっちゃくちゃかわいい。

「よし、では教師と生徒交代だ。テキストはそれね。7ページを開いて。」

「当然読めないはね。でもちょっと他のページと違う。下にいくつかの単語が並んでいる。」

「その通り。よく気づいたね。」

「さっき言われたばかりだからね。法則性と違和感だったかしら？」

「脱帽です！お嬢様。」

そつ言いながらかぶつてもいない帽子を脱ぎ、一礼する。

「続けようか。実はそのページはルーラだ。」

「ルーラ？こんなにいろいろ書く必要あって？」

「うん。今のルーラは城に戻る魔法とされているけど、本来は指定した場所に行く魔法だ。」

「この間マイラに行ったのがこれね。ねえ、じゃあなんで普通のルーラはラダトームにしか戻れないの？」

「それはラダトームを指定しているから。下に指定場所の登録名が書いてある。一番上がラダトーム。別の言語で地下の城という意味。」

「地下？意味深ね。」

「文字通り、勇者はこの世界に落ちてきたからそう名づけた。」

「名づけた？もしかしてルーラの指定場所は勇者が登録したの？」

「その通り！勇者が訪れた場所にある魔法儀式を行い、登録名を決めた。そこにあるのがラダトーム、マイラ、ドムドローラ、メルキド、リムルダールだ。ああドムドローラに取り消し線引いといて。」

「取り消し線？」

「もう使えない。多分座標指定石が破壊された。該当する魔術儀式はまだ解明できていないから仮名ね。でもその基準はなくなったら困るでしょ？だから人の力では動かせないくらい大きい石に魔術儀式で登録名を掘り込んでいる。」

「へえ、すごいね。でもなんで普通に名前じゃないの。ラダトームって書いておけばいいのに！」

「便利すぎるから駄目。その気になれば何人の兵隊でも送れてしまう。多分勇者はそう考えて自分達の専用魔法としたと俺は思っている。」

「ふうん。徹底した平和主義者ね。自分が死んだ後まで心配しすぎじゃない？」

「ははっ！まあ尊敬する勇者様のことは置いて、まずそのページから学習してごらん。他の魔法の解説に参考になるよ。」

「そうね。他のページはどれがどの魔法だかさっぱりわからない。あれ？ちよつと待ってその勇者専用の登録名はどうやってわかったの？またどこかの遺跡でも見つけたの？」

「外れ！その基準石に書いてある。普通は見えないけどレミーラで照らすとうつすら見えてくる。魔法による隠し文字だ。実は王家の秘術：血の契約書にも同じからくりがある。結構えぐいことが隠して書いてある。これは絶対秘密ね。ばれたら消される可能性が高い。」

「じゃあそんなこと教えないでよ。」

怒ったような顔で俺を見る。怒った顔も美しい。もうちよつとこの顔が見てみたい。

「あともう一つ。そこには書かなかったが実は竜王の城にも基準石がある。」

「え！じゃあ行けるの？」

「行けるよ。でもこれは勇者が置いたものではない。じゃあ誰が置いたのでしょうか？」

「それは簡単ね。魔物が帰るために置いた。」

「その通り。だから以外な名前が登録されていた。知りたい？」

「まあ教えてくれるなら。」

「じゃあ言うよ。怒らないでね。勇者達とは違う言語で『大魔王ゾーマ様の城』って書いてあった。」

あつと驚く。そりゃね禁忌中の禁忌とされ、しかも伝わっていない名前が耳に入ってしまったから。

「ああ、もう最悪。それは言わないでって言ったじゃない！」

「教えてっていったじゃない。それに今更恐れることなんかないさ。」

「どづい意味よ！」

「もう第二の魔王が現れているんだ。これ以上悪いことは起きないさ。第三の魔王が現れるにはまた200年ぐらいかかるのさ。」

「何それ。今度は預言者のつもり？過去から未来まで全てあなたのものなのかしら？」

俺は預言者じゃない。ただ知っているだけ。でもこれだけは教えない。しばらく沈黙が続く。

「まあまだ来ない未来の問題は未来の住人に任せよう。今はその問題を解くのが先、レポートにして提出してね。期限は特に決めない。随時質問には答える。途中経過を披露してくれてもいい。」

「わかったわ。絶対負けない。あなたの知識は全部私のものにしてあげる。」

俺は退室することにした。彼女が本に集中しだしたらもう誰の声も聞こえなくなるから……。

落第勇者

5 / 7 勇者支援生活7日目

いつも通りのトレーニングをする。横でアレフも剣を振っている。まだ納剣がぎこちない。結構な頻度で左手に刃を当ててしまいホイミで治療をしている。あれでMP足りるのかな。そうだ！

「おい！アレフ。そんなに昼から実践行けるのか？MP不足で危険じゃないか？」

「わかりますか？実は昼間までに大体使い果たしてます。まあここ近辺は強い魔物がいないので薬草数個ですみます。」

「わからんのか！ではいいことを教えてやろう。城の一階、中央十字路右から行った奥まった所にへんな爺さんいるの知ってるか？」

「・・・？もしかして祝福爺さんですか？」

「祝福爺さん！言いて妙だ。そうだ。昼から外に出る前に会ってからいくといい。」

祝福爺さん（アレフ命名）俺がアレフガルドで解けない謎の一つ。彼は基本『勇者に祝福あれ！』としか言わない。だけどMPが全快する効果がある。アレフが怪訝そうな顔をする。

「騙されたと思っていってみな。じゃあ俺は終わったから行くよ。」

いつも通り朝食をとっている。起床6時、2時間のトレーニング、それから食事。もう10年近く続けている。なるべく生活リズムは崩さない。

「ケルテン殿よろしいですか？来客です。」

騎士見習いの一人が控えめに話しかけてくる。俺そんなに怖いかな。対外的には紳士なつもりなんだが。

「ああいいよ。ところで誰かな？」

「ゲオルグ、クロウ、ドゥーマンを名乗る三名です。」

「ああ彼らか。いいよ通して。」

「ここにですか？」

「かまわんよ。待たせるのも悪いしね。」

「判りました。では案内してきます。」

どうしたのかな？ガライに行く許可でも得にきたのかな？ならいいのだが……。そんなことを考えていると見習いに連れられて三人が入ってきた。ほう、装備が変わっている。先日教えた通り二人が革の鎧、革の盾になっている。武器は変わっていない。

「お久しぶりです。ご指摘どおり装備を整えました。近くで野営などの練習もしました。ガライへ行く許可を得たいのですが？」

言葉遣いも変わっている。最初からこうだったらよかったのに、つくづく惜しいな。

「いいよ。行っておいで。今いくらぐらい持ってる？」

その言葉に三人の顔が曇る。

「ああ別に返せって言ってるんじゃない。どうせガライに行くなら鉄の斧を買った方がいいと思ってね。たしか560Gだったかな。」

「今500G弱です。だいぶ足りませんね。」

「そうだね。ガライで数泊するのと帰りの食料を考えると・・・OK！俺が200G貸してやる。」

「いいのですか？持ち逃げするとは思わないのですか？」

「そうだね。かまわない、地の果てまで追いかけて殺すから。何なら今すぐにも・・・。」

俺は頭でザラキの詠唱を始める。第3小節まで唱え止める。なんとなく秀囲気で判ったのか三人は真っ青になって震えている。

「よく判りました。あなたに殺されるのは嫌です。のたれ死ぬ方がましな気がします。」

「判ってもらえてうれしいよ。ああ、それと俺に敬語はいらない。じゃあ、これ使って。」

俺は懐から200G出して渡す。

「お借りし・・・いや借りとく。必ず返す。」

「それでいい。がんばれよ！」

三人は食堂から出て行った。案内してきた見習いが青い顔で突っ立ったままにいる。

「どうした？もう終わったよ。」

「先ほどの・・・いえ何でもありません。失礼します！」

なんだよ。別に逃げなくてもいいじゃないか。

その後騎士見習いの中に根も葉もないうわさが流れたのを俺は知らない。

視線だけで人を殺せる。

機嫌を損ねると死ぬまで追い詰められる。

そつだ。勇者ガルドはどうしただろう？後で調べることにしてよう。

.....

国務大臣執務室

おっ！ガルドの光点が移動している。あいつの移動速度だと明日の昼には戻ってくるかな？ちょっと気になるから担当外の連中も見てもみよう。

このリムルダールに向かっていている一つだけの光る点はガイラかな。あとは雨の祠付近に四つ固まった光点がある。

「この4人の勇者はもしかして同郷ですか？」

「調べるがよい。」

はいはい、聞いた俺が馬鹿でした。書類を取り出し並べる。勇者12：エイブラムはラダトーム。勇者41：ローランド、勇者42：メルカバ、勇者43：レオパルド、三人ともガイライ出身・・・エイブラムがガイライで三人をスカウトしたと考えるのが妥当か。

「そんなに担当外の勇者が気になるか？」

「ええ、まあ気にならないことはないですが。」

「そうか。ならば勇者25もそなたが受け持て。」

ありや藪蛇だったか？勇者25ってガイラだな。あいつなら放つておいても大丈夫だ。

「はあ？かまいませんが理由を聞いてもよろしいですか？」

「ふむ。そなたの前任者は知っているか？」

「いえ、存じません。」

「2名いた。内1名は先月3月の勇者と共に死んだ。それで残るシユミットがああ4名の勇者を支援してある。勇者25は現在支援する者がおらぬ。」

「判りました。拜命します。」

よしリムルダールについた頃に会いに行こう。

模擬戦

5 / 8 勇者支援生活 8 日目。

いつも通りの訓練所である。昨日と違うのはアレフが少し興奮している。

「祝福爺さんのところ行きました。驚きました。MPが全快です。あれ何なんですか？」

「判らん。まったく判らん。調べても欠片もわからん。」

「ケルテン師匠でも判らないことあるんですね。」

「俺は全知全能じゃないよ。ただ判らないことは調べないと気がすまないだけだ。」

「もう一つ質問。この間魔法の価値が低いつて言いましたよね。例えば距離とつて逃げながら撃つとか、人数集めていきなり打ち込むとかすれば強くないですか？」

「もつともな意見だ。でも魔法は必中じゃない。あまり距離を置くとベギラマならともかくギラは当たらない。弾速が遅いからね。ベギラマでも身を隠せば当たらない。あと俺の本気の速さ、逃げられると思うか？」

「あゝそれは無理ですね。じゃあいきなり打ち込むのは？」

「まあそれは特殊な例だね。不意打ちで斬りかかるのと変わらないから。どちらにしる武器にしる魔法にしる使い方次第さ。ただ手段

は多い方が勝ちやすい。よしじゃあ手合わせしようか。ルールは殺す以外は何でもあり。」

「本当ですか？本気でいきますよ。」

「もちろんだ。武器も好きなのを使うといい。手加減なんざ許さない。」

俺はまわりで訓練している連中に声をかけて場所を空けてもらった。自然と人集りができる。

「よし。とりあえず互いの距離は10m。はじめの合図はその君にお任せします。」

アレフは鉄の剣、鉄の盾に革の鎧。武器を抜いて盾を前に出した左半身の構え、俺は腰を落とし居合いの構え。はじめの合図は鉄の剣で鉄の盾を叩く。ゴンと鈍い音がする。

アレフは俺の居合いの速さも間合いの広さも知っている。警戒しながらにじりよってくる。予定通りだ。

「ベギラマッ！」

居合いの構えからいきなり右手を突き出し稲妻を放つ。狙いは鉄の盾。痺れて棒立ちになったアレフの元まで距離を詰め、居合いで右籠手を打つ。もちろん峰打ちだ。鉄の剣が落ちる。

「ひでえ……。」

「卑怯な！」

外野から非難の声が聞こえた。

「今、卑怯だと言ったやつ前に入る！」

人集りのほとんどが顔を伏せ目を合わせない。前に入るやつはいない。

「まあいいでしょう。今私は殺す以外はルール無しとしました。もちろん魔物にはルールはありません。今卑怯だと思った者全員死んだと思いなさい。アレフ！お前は卑怯だと思ったか？」

「いいえ。私は師匠の間合いや剣速に気を取られて、魔法の存在を忘れていました。さっきまでその話題をしていたのに。」

アレフは悔しそうに話す。左手で打たれた右手をさすっている。

「よろしい。なぜ負けたか理解できればそれでいい。ここなら次があるからな。手をだせ。・・・ベホイミッ！」

赤く腫れていた右手が元通りになる。

「一本で終わりか。終わりならいつもの練習だ。」

「まだやります。」

「そうか。では次は木剣と木盾を使おう。俺も木剣を使う。ちなみに木の盾ならベギラマは通らん。」

「判りました。同じミスはしません。」

「よし。では合図！」

互いにさつきと同じ様に構える。始まりの合図と共にアレフが飛び込んでくる。俺は合図がなる頃にはすでに抜剣して上段に構えている。盾を前に間合いに入ってきたアレフに木剣を叩きつける。受け止めた盾が真つ二つに割れた。以外な結果に止まったアレフの右籠手に軽く剣をあてる。

「おい！あれか？噂の盾割り。」

「聞いたことがある。近衛のサイモンさんが盾を割られたって。」

ちよつと外野うるさい。問題はそこじゃないんだ。

「さてアレフ。今回の敗因は？」

「木剣で盾が割れるとは思いませんでした。」

「残念、そこじゃない。一番の問題は俺にはお前の行動があらかじめ解かっていた。正直に言つとそう誘導した。ベギラマが使えることを意識するとまず間合いを詰めてくる。しかも事前に木の盾にはベギラマは効かないと教えてある。そうでなければ上段からの渾身の一撃はできない。」

「なるほど、私の動きはケルテン師匠の手の内にあつた。」

「さつきも言つただろう？武器も魔法も使い方だつて。あとわざわざ木の盾を持たせたのはもう一つ理由がある。」

「鉄の盾なら斬れないからですか？」

「いや刀なら斬れるんだ。ただそうすると高くつく。800Gも弁償したくない。」

「本当ですか？はあ、かなわないな。」

「まだいろんな戦法がある。さらに魔物なら人間にできない戦法ができる。」

例えば飛ぶ魔物、メイジドラキーはギラを放ってくる。キメラは火を噴いてくる。がいこつとか鎧の騎士は痛覚も感情もないから多少斬られても平気で懐に入ってくる。近くが毒の沼地でもお構いなし、多分崖なら一緒に落ちるだろうね。あとドラゴンとかゴールドマンとか体の大きさが違いすぎるモンスターには常識は通用しない。」

「まだまだですね。ありがとうございます。いつもの練習に戻ります。」

「よし皆解散。時間のある者どうして模擬戦でもやってみる。多分さっきまでと違う戦いができるぞ。」

俺とアレフは隅によるといつものメニューを始めた。あちらこちらで模擬戦が始まる。今日の訓練場はいつもより活気があるようだ。

模擬戦（後書き）

アレフが皆さんの替わりに質問をします。

勇者ガルドと買取センター

さて今日は勇者ガルドが買い取りセンター（俺命名）に来そうな日である。そういえば支援官になってから行った記憶がない。顔をだしておくか。城の一階にあつたな。

・・・怒られました。

「勇者のレベル評価が貯まっています。一週間も何やってたんですか！？」

「いや連絡はしたよ。勇者52、53、54の勇者資格停止、買取継続と半額の徴収については。」

「それだけでは駄目です。勇者55の買取品の書類が貯まっています。この書類に目を通して現在レベルを決定してください。」

「大丈夫。レベルでの評価なんていらない、俺の弟子だし。」

俺は一応買取リストを眺めている。ふうん見事にスライムとスライムベスとドラキーだけだ。当たり前か。城から半日で移動できる範囲しか行かせてないからね。しっかしまあよくこんな集めたな。結構は多いぞ。それにしても効率の悪い書類だな。素材一つにつき一つチェックを入れるんだ。別途数数えてスライムの核何個って書いておけば見やすいのに。

「それでもレベルを決めて下さい！」

「じゃあレベル3。」

「適当に決めないで下さい。こんなに書類があるんです。そんな低いわけではないでしょう。」

「ふん。書類なんかで何がわかる。それにあいつはできるだけレベル上げてから次に行くタイプだ。おれがそう決めた。」

「言っている意味がわかりません。」

「細けーことはいーんだよ！Lv3、これは決定事項です。異論は認めません。」

「もうそれでいいです。」

「そうだ。今日は多分勇者51ことガルド来るよ。」

「へえ〜ちゃんと把握してるんですね。」

「何、その不信そうな目は？」

「文官の間では噂になってますよ。女子供と遊んでばかりいる人だって。」

まじか。そんなことはないはずだ。勇者3人を落第させただろ。次にアレフを弟子にして、マギーと魔法談義して……。なるほどアレフが子供でマギーが女か。否定できねえ〜。いやいやいや、これは竜王討伐を含む壮大な人類補完計画の一部だ。誰かにけちをつけられる覚えはない。大体女と遊んでいるって本人が聞いたら激怒するぞ。

そんなこんなやっているとならばありそうな筋肉隆々な男が現れた。ガルドだ

「これを引き取ってくれ。」

ドサツ！と布袋を床に置く。

「いらつしゃいませ！当店は初めてご利用ですか？当店のシステムは説明した方がよろしいですか？」

俺は一気にまくし立てる。隣の文官は呆れたような顔で俺を見ている。

「おつおつ！そうしてくれ。」

多分調子が狂うのだろう。なんとなく返事をしてしまっている。

「はい！では説明致します。まず持ってきた素材によってEXPポイントとGポイントが付きまします。例えばスライムならEXPポイント1、Gポイント2です。詳細はこちらの紙で確認して下さい。一定以上EXPが貯まると勇者レベルが上がります。7ポイントでレベル2、同じく23、47、110でレベルが上がります。これについてもその紙にありますので確認して下さい。このレベルでどの程度の地域に行けるかの判断材料になります。必要に応じてご相談下さい。相談は無料です。担当は私ケルテンになります。

次にGポイントですが、これはそのままゴールドを受け取れます。また必要分だけ受け取り、残りを貯金しておくことも可能です。

以上理解できましたか？」

「べらべらとつるせえやつだな。別に俺はお前の助言なんぞいらねえ。ゴールドは全部よこせばそれでいい。」

ガルドはこめかみに青筋を立てている。気の短いやつだな。

「では鑑定を行ないます。時間がかかりますのでお待ちいただけますか？または宿に届けることも可能ですが？」

「いや待つ。」

「ではそちらのソファにお掛けになってお待ちくださいませ。」

俺と文官で手分けしてテーブル上に並べる。メイジドラキーの翼膜、おおさそりの毒尾、がいこつの大腿骨、魔法使いの杖。ひどいな。折れたり割れたり素材として半分は使えない。二人で小声で話す。

（なあ。ちょっとひどすぎない？）

（ええ。これなんかわざと折ってあるみたいですよ。数が増えると思ってるんですかね。）

（微妙だね。故意かどうか判断しづらいね。）

（これとこれは同じですね。ほら断面が一致する。こんなパズル嫌ですよ。）

（俺だって嫌だよ。何が悲しくて骨でパズルせにやなんのよ。）

「いつまで時間かかっているんだよ！」

（ちょっと注意してくるわ。正確に続けて。）

俺は申し訳なさそうに話す。

「申し訳ございません。数が多いのと状態が悪いので正確な数をだすのに時間がかかります。また買い取った素材は加工、売却することにより支払うゴールドを得ていますので、次からはなるべく完全な形での納品をおねがいたします。」

怒ってる。怒ってる。手出してくるかな？予想通り俺の襟を掴みに来る。見切ってかわす。やつの体勢が少し崩れた。

「うるせえんだよ！てめえ！……つてなめてんのか！」

「いえ、そんなことはありません。ああちょうど計算が終わったところみたいですよ。」

俺は文官の所まで歩き用紙を受け取る。もどりながら話す。

「今回はメイジドラキー30匹、大さそり25匹、がいこつ13匹、魔法使い32匹でEXP1966、2383Gとなります。おめでとうございます。レベルが1から9に上がりました。なお次のレベルになるのにあと34ポイント必要になります。」

ガルドはゴールドの入った袋を引つつかむと無言で出ていった。

「いや〜怖かったねえ。短気な人でしたね。」

「なんで笑いながらそんなこと言えるのですか？どうかしてますよ。」

「失礼だな。正常ですよ。」

「もういいです。武官の方の神経はわかりません。最初からわざと挑発したでしょう?」

「わかる?人柄を確認したくてね。ありや駄目かな。次来る時もなるべく立ち会つよ。もし俺がない時来たら近衛に声かけて立ち会ってもらう様に。いいね。」

「頼まれなくてもそうします。ああいう人は嫌いです。」

「君の評価も参考にさせていただきます。そういえば名前を聞いていませんでしたね。」

「メイヤーです。一応男爵号を持っています。あなたのことは存じてます。ある意味有名ですから。」

「あっそう。これからもよろしく。メイヤー男爵。ではまた来ます。」

「毎日一回は来てください。」

「はいはい。」

俺は背中を向けて軽く手を振ってここを去った。

弑逆未遂事件

さて不愉快なことばかりおきたので気晴らしにマギーのところにも行こう。

「よお！マギー。はかどってる。」

「駄目っ！邪魔しないで。今いいところなの。」

マギーが顔も上げずにそう言い放つ。

「あっはい。すみません。失礼しました。」

それだけ言うと俺はそつと扉を閉めた。ああなると駄目だ。きつと誰が来たかすら分かってないな。なんか俺寂しい。兎は寂しいと死んじゃうんだよ。嘘だけど。ぼやきながら歩いていると何やら騒がしい。

「なりません。殿下と言えどその命令には従えません。」

「黙れ！衛兵ふせいが殿下に命令するな！」

城の2階への階段前で衛兵2名と貴族風の男7名が問答している。貴族側でしゃべっているのは後ろに立つ3人の内の一人だ。二人の衛兵が鉄の槍を交差させ、通行を妨害している。その前には貴族の護衛と思われる二名、二歩下がって高価な貴族服の男、さらに三歩下がって貴族服三名。

「騒がしいですね。どうしました？ここは城内ですよ。」

俺は間に割り込み衛兵に声をかける。衛兵が少しほっとした顔をする。

「こちらのフレーゲル殿下がここを通せと仰せです。」

フレーゲル殿下？誰だっけ？殿下ってことは王家の誰かだよな。

「いいんじゃない？特に断る理由があるわけでもあるまいし。」

「いえ、護衛の方の武器が……。」

そう指さす。なるほど帯剣してるね。俺は振り返って声をかける。

「お連れの方の武器を預からさせて頂きます。それでお通しできますが？」

「無礼な！国王様の甥にして王位継承権第3位のフレーゲル殿下に命令するな！」

「そつだそつだ。直答するも恐れ多いぞ！」

ああ、後ろのガヤが五月蠅い。当の本人は見下したような目で俺を見ている。そうか王位継承権第3位ってことはたしか國務大臣の息子で……他にはなんの取り得もない男だったような。

「後ろの方々、少し黙って下さい。今あなた方とはお話していません。それで殿下、先も申した通り武器をお預かりしたいのですが？」

「このフレーゲルの武器を取り上げると言っか。」

「いえ、殿下の武器はかまいません。ですが護衛の方の武器をお預かりすると申し上げております。」

「私の部下の武器は私の武器そのものだ。それでも預かると言うか。」

「ええ、なりません。殿下と言えど遵守して頂きます。」

「貴様、大臣殿の覚えがいいからと増長するな！」

「ふん。貴様など図書館でも大人しくしているがいいわ。」

「おのれ、筆頭魔術師殿もこんな男のどこがよくて。くっ！」

また外野が騒ぐ。なんか個人攻撃に変わったぞ。しかも筆頭魔術師って、ああマギーの言ってた馬鹿ってこいつらのことか？フレールが片手を挙げると外野が黙った。よく調教されているな。

「ではどうしても通さぬというのだな。」

「ええ、どうしても通さぬと申しています。」

「ふん！この馬鹿者をやってしまえ！」

そう言い放つとフレールは3歩下がる。護衛の二人が剣を抜いた。馬鹿か、ここで剣を抜くか！剣を構えた二人が威嚇するように剣を構える。

「引いてもらえませんか？事を構えたくありません。」

「ならば貴様が手を引け。」

これは時間稼ぎだ。この間に思考詠唱でピオリムを二回、さらにバイキルトを自身にかける。

「危ないですよ。そのままだと後ろの人に当たりますよ。」

その声をかけると思わず二人が後ろを確認する。今だ！抜く手も見せぬ居合い、狙いは鉄の剣。向かって左の男の剣の刃を斬り裂く。さらにかえす刀でもう一人の鉄の剣も斬り落とす。鏗鳴りの音が響いた時、とぼけた声で話しかける。

「面白い剣ですね。刃がありませんよ？」

「なっ！貴様……」

真っ赤になつたフレーゲルが口述詠唱を始めた。消費MP5の魔法、ベギラマか。間に合え！

『私はMPを5放出するMPとマナは融合し万能なる力となれ
《俺はMPを2放出する。MPとマナは融合し万能なる力となれ。》

おお万能なる力よ、雷となり、我が敵を、撃て！

おお万能たる力よ、不可視の力となり、かの者の魔法を封じよ。》

「ベギラマホトーン！」

何も起こらない。俺が上からかぶせた魔法が効果を発揮した様だ。フレーゲルが手を突き出し口をパクパクしている。

「衛兵！この者たちを拘束して下さい。」

「しかし・・・」

「私が全責任を負います。拘束して牢に入れて下さい。」

騒ぎを聞きつけた近衛騎士達も階段を下りてくる。

「国王、及びに國務大臣に対する弑逆未遂、ならびに城内騒乱罪になります。近衛の方々も手伝って下さい。」

次々に取り押さえられる6人。往生際が悪く暴れているが容赦なく取り押さえさせる。

「父上に会わせる！」

「下郎が！私の体に触れるな。」

騒がしい声が遠ざかっていく。衛兵が引きずる様に連れて行く。

.....

俺の前に不機嫌な國務大臣と近衛騎士隊長がいる。

「これはどういうことだ。説明せよ。」

「はっ！かの者達が帯剣したまま2階への通行許可を求めました。拒否したところ抜剣、さらに魔法の行使を行いましたので身柄を拘束しました。なにか不都合がありますか？」

「何が不都合だ。あれは私の息子だ。それでもか？」

「大臣、いけません。この者の言が正しい。我が国にはこの者を罰するいかなる法もありません。」

「しかし・・・」

ここで俺が口を挟む。

「よく考えて下さい。さきの者は自称王位継承権第3位です。その者が国王様と継承権第2位の大臣、あなたがいるここに武器を携えてくる、ということは反逆の恐れがあります。ローラ王女が行方不明の今あなた方がいなくなれば、かの者が国王になれるのです。」

「なっ！私の息子であるフレージャーが私を殺しに来るわけがなからう。」

「残念ながら私はあなたの息子の顔を存じ上げません。自称の称号や名前を信じて法を犯させるわけにはいきません。さらにそういった前例は枚挙に暇がありません。弑逆という言葉があるぐらいですから。それに今は平時ではありませんから、最悪を想定して行動すべきです。王女が誘拐された前例があります。」

隣で近衛隊長が声にならない声を上げる。

「この件は國務大臣にお預けします。そのかわり絶対につやむやにはしないで下さい？」

「ではどうせよというのだ。」

「そうですね。まずは不見識な行為に対する叱責、さらに一ヶ月の登城自粛といったところですか？またこの件は公にはするが公文書

には載せない。これで大臣の面目も立つでしょう。」

大臣が苦虫を噛み潰したような顔をしている。これでも妥協した方だぞ。汚名返上、名誉挽回のうまい手だと思っただが。

「判った。そなたの言つとおりにしよう。」

がつくり肩を落とす大臣。俺と近衛隊長が退室する。かける言葉はない。

.....

「しかしお前。何をした？見ていたはずの衛兵もはつきりせん？」

歩きながら近衛隊長が質問する。そうか、見えなかったか。狙い通りだ。

「ただ剣を斬り飛ばして、ベギラマをマホトーンで封じただけですよ。」

「軽く言ってくれる。お前以外の誰にもできぬだろう。まあいい。一部の増長した者共もしばらくは自重するだろう。」

「だといいですけどね。」

「しかしまあお前、損な役回りをする。本当は俺の役割だ、すまんな。」

俺に頭を下げる。

「理解してくれる者がいるなら、それほどでもありませんよ。」

この人は敵にまわしたくない。数少ないそう思える人だ。

弑逆未遂事件（後書き）

なんの捻りもありません。あの人です。

一部修正しました。指摘ありがとうございます。

最悪な一日の終わり

自室に戻り革の服と刀を放り出し、ベッドに大の字になる。目を瞑る。疲れた。今日は不愉快なことだらけだった。正々堂々を旨とした騎士、増長した貴族、降って沸いたうまい話に浮かれる平民が無理もないか。400年の平和だ。きつと竜王さえ倒せばまた平和が訪れると思ってるのだろうか。上から下まで平和は他人任せ・・・竜王亡き後の時代は開拓の時代。無能な者は置いていかれる。ラダトーム王家も例外じゃない。いずれ辺境の一王家にすぎなくなる。いつそのことそう言ってやりたい。誰も信じてはくれないか・・・だめだ。ネガティブになっている。夕飯ぐらい豪勢にするかな。

コンコン。控えめなノックの音が部屋に響く。

「いる？私よ。」

ああマギーの声だ。ほっとする。

「ちょっといるんでしょ！返事ぐらいしなさい。入るわよ。」

かつてに扉を開けて入ってくる。前言撤回。ほっとはしない。

「じゃあ立って、出かけるわよ！」

俺の手を取って強引に引っ張る。あわてて刀だけ掴んで引きずられていく。

「ちょっと出かけるってどこに？もう8時だぜ。」

「いいからいいから。とりあえず屋外に出ればいいから。」

・・・屋外？兵舎から外にでる。何人かに見られていたような気がする。

「さうて、よく見てなさいよ。」

マギーの周りのマナが変化する。おい魔法を使つつもりか？マホトーン・・・いや間に合わない。やばい。一瞬景色が失せ、気づくと湯気の見える村の外に立っていた。

「マイラ・・・か？」やったあゝ！できたできた。やっぱりマイラのことだった。「」

マギーが両手を広げてくるくる回っている。俺はあっけにとられている。

「何？俺を実験に付き合わせたん？」

「そうよ。なにかあったら困るでしょ。そうだっ！」

返事をほつたらかして走るマギー。村の入り口の大きな岩。花が捧げられている。

「基準石ってこれね。レミ・ラ。うん確かに書いてあるわね。温泉の村ってセンスないね。」

そこまで言うと俺の方に振り返って胸を張る。

「どう？ルーラは解読したわよ。」

「はあ。そうみたいだね。」

俺はため息をつく。

「なにそれ。もっと驚くとか喜ぶとかしなさいよ。」

「いや十分驚いた。大したもんだ。」

「もうもっと褒めなさいよ。じゃあ行くわよ。」

「えっどこに？もしかしてリムルダール？メルキド？」

「なによそれ、ここはマイラ。温泉以外にどこ行くっていうの？」

再び俺の手を引っ張るマギー、いま多分俺はにやけているだろう。
不愉快な一日の終わりは最高だった。

.....

翌朝、俺は隣のマギーを起こさない様にそっとベッドから出る。

こんな時でも同じ時間に起きてしまう。刀を手にとって外へ・・・

「ねえ！どこへ行くの？」

「ゴメン。起こした？いつものトレーニングさ。やらないと調子が悪くなるから。」

「そう・・・じゃあ。私は見てる。ちょっと待ってて。」

マイラの町の北側、木がまばらに茂る場所で俺が刀を振る。切り株に座ってじっと見つめるマギー。気になってしょうがない。いかん、平常心だ。無心で刀を振る。もう視線は感じない。

「よし、これで終わりだ。ごめん、退屈させた？」

「いいえ、楽しませてもらったわ。やっぱりすごいよね。それで鉄の剣を斬ったって本当？」

「なんだ、君の耳にも入ってたんだ。本当だよ。」

そうか。昨日の一件で俺が落ち込んでいると思って、ここへ連れてきたんだ。ルーラの披露も踏まえて・・・。

「これも伝説の名剣？一体何でできてるの？」

「違うよ。ここで作ってもらった。材質は鉄と鋼の二層構造だった。今はさらにミスリルを含む三層構造。」

マギーが首を傾げる。気づいたかな。

「入手も加工もできないはずのミスリルが使われてるの？」

「まあ説明が長くなるからまた今度ね。まだ魔法の解読終わってないでしょ？」

「まあいいわ。魔法が一段落したらまた聞くことにする。」

少し脹れている。

「じゃあチェックアウトして城に帰ろうか？」

「ルーラは私が使うわ。リムルダール、メルキド経由で。」

「まだ実験する気？」

「駄目？」

「そんなことないけど。」

「……………俺達にとってはたわいのない話をしながら宿屋に帰る。」

……………

私の横でケルテンが安らかな顔で眠っている。

さつき部屋で見た時ひどい顔をしていた。この人かなり無理している。私はわがままを利用して慰める。今は道化でもいい。

最初は何でも知っているような顔にむかついた。武官のくせに！でも本当に私の知らないことまで知っていて、しかもそれを惜しげもなく教えてくれる。まるで子供を教え導くように……………

いつからだろう？一番大事な人だと気づいたのは。多分あの開かずの間が開いた日。そうあの開かずの扉は私の閉ざされた心の扉。格式や身分しか重要視しない貴族の子弟、正々堂々にこだわる騎士、全て馬鹿にしていた私の心を真正面から開放した。

強大な力を持っている。だけどそんなことなんでもないことの様

に言つてのける。誰にでもできることだつて。私は武器は持てない。じゃあ私はこの人の知識だけでも追いついてみせる。でも力の使い方は間違わない。それができるようになったら本当の意味で横に立てる気がする。今はその背中を追いかけるだけでいい。

おやすみ、ケルテン。あなたに安らぎがありますように。

勇者アレフの成長

5 / 10 勇者支援生活 10日目

毎朝の教練である。昨日はここには来れなかったものでちょっと気恥ずかしい。一昨日はここで説教したせいかもしれない兵士や見習いが俺を見てこそこそ何か話している。人の噂をするなら聞こえない所でしてくれないかな。

アレフがいつもと違っていきなり抜き打ち、縦切り、納剣の練習を始める。シュツ、シュパツ、シャキン！10回くらい繰り返し返す。いい音をしている。なるほどね。

「ああ判った、判った。できるようになったって言いたいんだな。」

「できてますか？じゃあ・・・」

何か期待するような目で俺を見ている。

「次の準備するから少し待ちなさい。」

俺は自室に戻り、支給品の鉄の鎧を持ち出した。

「これを着なさい。」

「頂けるのですか。」

「違うよ。やっぱり貸すだけだ。いつものメニューをそれ着たままやるんだ。それが問題なくできるようになったら剣に関しては教え

ることはもつない。」

アレフは目を輝かせながら鉄の剣を振り始めた。流石に流れる汗の量が半端じゃない。今日は自分のメニューが終わっても帰らない。最後まで見ていることにした。体を冷やさないように汗を拭き待つ。

「はあ。はあ。はあ。終わった。」

アレフがしゃがみこんで休む。

「いずれその装備で外へ出るんだぞ。ばててるようじゃまだまだだ。でも俺は優しいからな。直してやる。ベホイミ！」

「ありがとうございます。ずっと楽になりました。でもすごいですね。」

「なにが？ベホイミ？」

「違います。よく無詠唱で魔法が使えますね。」

「ああ、それね。悪いが誰かが魔法を使用するために口述で詠唱したら、第一小節の時点で何使うかわかるぞ。」

「ええっ！本当ですか？」

まあ驚くか。まだアレフはホイミとギラしか使えないからパターンに気づいてないだろう。

「本当だ。だから口述詠唱でなく思考詠唱を推奨する。だから魔法の名前だけで呪文が完成したように見える。これはロト一行が当た

り前にやってたことだ。」

「まだまだですね。」

「では飯食ったら、魔法の学習だ。ベギラマが使用できるまでは午前中は魔法の練習をしよう。」

「はい楽しみです。もう一つ質問いいですか？」

「何？」

「一昨日の夜は筆頭魔術師殿といっしょだったんですか？」

思わず口に使っていた水を噴き出した。周りでこそこそしていたやつらが手を止めてこちらを注目している。

「プツ、プライベートな質問には答えられない。」

「まずい、ごまかしきれしていない。」

「ウワン！本当だったんだあー！俺あこがれてたのにー！」

誰かが泣きながら走りさっていった。その辺、ざわざわするな。

.....

「お前なあ。あそこであの質問はないんじゃないか？」

「食事中、肉をつつきながら文句を言う。」

「どうしても聞いてほしいと昨日言われまして、断れずに……すみません。」

「もう済んだことだ。もうやるなよ。ちなみに魔法の先生はその筆頭魔術師殿だ。」

「いいんですか？」

「なにが！別に魔法を教えることぐらい俺がとやかく言うことじゃない。」

「わざわざ筆頭魔術師殿に教えてもらえるってことですよ。」

「あつ！やられた。お前策士になれるよ。」

「やった。初めてケルテン師匠から一本取りましたよ。」

俺は頭を抱えた。

図書館である。初めて二人を会わせる。なんで俺がこんなに緊張しなきゃならんのだ。

「あゝマギー。こちらが勇者アレフ。しばらく魔法の先生をお願いしたい。」

そしてアレフ、お前は知ってるな。筆頭魔術師のマギーだ。」

「ケルテン師匠の弟子アレフです。筆頭魔術師どのに魔法の指導をして頂けるとは光栄です。」

「王立図書館司書のマギーよ。．．．ちよつとケルテンこつちへ．．．」

(なに？聞いてないわよ。どういうこと、説明しなさいよ。)

マギーが俺の手を引き隅に行く。しゃがみ込んで小声で話す。

(さつき決めた。俺が教えるより君が教えた方がいい。)

(どういう意味。あなたの方が教えるの上手でなくて?)

(そうでもないと思うけど．．．それより人に教えることで初めて気づくことがあったりするんだ。多分だけど今例の魔法書、行き詰っているでしょ?)

(何でわかるの?)

(わかるさ。マギー君の事ならね。まあ騙されたと思ってお願い。)

(しょうがないわね。いいわ。やってあげる。)

(とりあえず魔法の思考詠唱から、最終的にベギラマまで使えるようにしてくれ。例の詠唱文の意味も説明もしていいから。魔法の授業は朝9時から昼12時までの3時間。じゃあ頼んだよ。)

何も無かったようにマギーがアレフの前にもどる。

「はあ、いい、私はマギー。筆頭魔術師なんて他人行儀な呼び方止めてね。」

「はい。ではマギー先生。よろしくお願いします。」

「なんか素直でいいわあ。こんな生徒今までいなかったわ。でも私の指導は厳しいわよ。」

「望む所です。」

- - - - -

例の黒板を出してマギーが板書を始める。10種の魔法を並べて書く。順番に魔法を指し詠唱文の共通点などを説明する。アレフがしきりと感心している。途中マギーがアツと叫ぶといきなり魔法書を10ページほどパラパラめくる。

「ごめんなさい。続けるわね。」

続きが再開される。任せておいても大丈夫だろう。俺は確信した。

どうやら気づいたようだね。あの魔法書にはからくりがある。最初の10ページは今の魔法が順番に書いてある。それだけわかれば・・・まあ頑張れよ。

俺は背中を向け、右手を上げひらひらさせながら出て行った。

湖上都市リムルダール

5 / 14

ここ4日ほど落ちついた日を送っている。朝の調練、魔法学校、買取センター、国務大臣室。単純な作業を繰り返すだけになってきた。実に詰まらない。アレフはまだまだ。ガルドはあいもかわらずマイラあたりで狩りをしている。落第勇者達はガライを出発した頃か。そろそろガイラがリムルダールにつく頃だ。

普通リムルダールへは二週間ほどかかる。距離的には馬さえ使えば10日もあれば余裕でつくのだが、竜王があらわれた頃地下道の両端が毒の沼地になってしまった。馬での通行は不可能に近い。トラマナを使用できれば問題ないがこの時代がない。ゆえにラダトームから全て徒歩で行くか、マイラ村まで馬で行き残りを徒歩で行くしかない。

ガイラがラダトームを出発したのが5月7日、一週間で到着するとはどういうことだろう？担当変更の挨拶をしにリムルダールに跳ぶか。久しぶりに家に帰るのも楽しみだ。

俺の一番古い記憶は馬車から投げ出された自分、ひっくり返った馬車、襲い掛かるキメラの3つだ。養父が言うには馬車でリムルダールに引越してくる際、運悪く野生のキメラに襲われ、馬車の操作を誤ったらしい。このとき実の両親を失ったそうだが記憶にないの涙すらでない。リムルダールに墓だけある。俺は町長に引き取られて、今現在18歳である。

じゃあルーラで跳びますか。誰かにばれるとまずいので隠れて思

考詠唱する。

（俺はMPを8放出する。）

MPはマナと混ざりて、万能たる力となれ。

おお万能なる力よ、風となりて

我を、湖上都市へと運ばん。ルーラ！）

さて久しぶりの故郷です。昔は陸と中州が完全に繋がっていたが、砂地ゆえ不安定かつ防衛上の問題で吊り上げ橋で渡るように提言した。いまでは橋での通行が当たり前になってます。半年前の魔物の侵攻はこれでほとんどが入って来れなかった。竜王の率いる魔物の中で強力なモンスターはほとんど空を飛べない為、陸路さえなくせば防衛は比較的簡単だった。もちろん飛行してくる魔物や無理に泳いでくる魔物に備えてバリスタや投石器を準備し、さらに上陸されにくいよう湖岸線に木の囲いをした。もっとも囲いといっても牧場レベルの簡単な物だ。

では宿屋から確認しよう。うおっ！でけえ馬。黒王号か？松風かと思わんばかりの馬が宿屋の厩舎にいる。多分これだ。俺は宿屋に入ると気安く声をかける。

「やあ親父さん。元気？」

「おお！町長さんちのケルテンか。お前城に行ったんじゃなかったか？なんだもう戻ってきたか。」

「に・ん・む・だ。勇者来てない？」

カチンときたのでちょっと変な区切り方をして答える。

「ああ昼過ぎにきたよ。城から指定宿扱いされてから初めてだ。っ

てなんでお前がそんなこと知っているのだ。」

「だからそれが任務。勇者が十分な活躍できる様支援するのが俺の任務。」

「ふうん。お前は腕も立つし何より賢い。まあらしい任務だな。それはそうと勇者を半額で止める様お達したがどういうことだ？割が合わんぞ。」

「ああ、それね。とりあえず半額で泊めてやってよ。記録しておけばその分税金から控除されるから。」

「じゃあ、それまで損じゃないか。やってられないな。」

「すまないな。俺に言ってもどうにもならんよ。しかしどうせ片手間の仕事だろ？」

「違いねえ。このご時世のんびり旅するやつもいねえ、開店休業中だ。」

「そうだろうね。で、ガイラはどこへ行った？」

「ああ、しばらくここを拠点にするからって町長に挨拶に行っただぜ。」

「以外に律儀だな。わかった。俺も行ってみる。じゃあまたな。」

「おう。元気だな。」

それから俺は懐かしい面々に挨拶しながら家路についた。しかし

まあなんで会う人会う人、俺が落第したかのように言うのか？甚だ疑問だ。3年10万ゴールドの契約金で雇われたって言うてやるのか？まあ養父のことだ余計な気苦労をさせない為、町民には何も言うてないのだろう。

さて俺の家である。町長宅であるとは思えないくらい普通の家だ。自治権と引き換えの税金は高く、町長といえど贅沢はできない。むしろ蓄えを削って捻出しているぐらいだ。俺が一番良く知っている。

「爺さん、帰ったぞー。」

大きな声で帰ったことをアピールする。ちなみに俺がもらった時すでに爺さんだった。ゆえに呼称は爺さんのままだ。なんかお父さんとか言いづらい。

「おうおう、ケルテンか。よう帰った。元気が。」

「そりゃあもう元気ですよ。10万ゴールド分働かないといけませんからね。」

「そう言うな、おかげで町も助かっておる。ほれ客人の前じゃ、ちやんとせい！勇者ガイラ殿、我が息子のケルテンじゃ。ケルテン、挨拶なさい。」

「よう、ガイラ！結構速かったな。」

「これ！ケルテン。なんじゃその挨拶は！」

「いえ、いいですよ。町長さん。こいつは昔からこういつやつです。何も気にしてません。」

「そうそう。俺、お前の仲だ。しかも今じゃ一蓮托生だ。聞いてますよね。俺の任務。」

「そうじゃったな。よく奉公するんじゃないぞ。ガイラ殿もよろしく頼みます。」

話が長くなりそうだったのでガイラを連れて外にでる。宿屋に向かって歩く。

「お前さん。いいところの坊ちゃんだったんだな。」

「そうでもないよ。町長だって言っても贅沢一つできねえ。まあ食い物には困らないから悪くはないな。」

「ふん！あの町長も只者じゃないな。一見人格者だがなかなか中身は大したものだ。」

「そうでないと自治区の町長はできないよ。そうだろ？」

「だなつ。で、本当は何の用だ。しかもなんでここにいる。」

ちよつと不信の目で俺を見る。そりゃそうだ。普通に考えて追いつくはずがない。

「実はお前の担当が俺になった。前任者がなくなったらしい。」

「そうか。しばらく見てないと思ったらそういつことか。しかしまだ半分しか答えてないぞ。」

「まだ聞くか。前いつしよに旅したとき見つけた古文書があっただろっ？あれにあった秘術だ。これ以上は教えない。それより毒の沼地をどうやって通った。一人ならまだしも馬だろっ？」

「飲み薬と塗り薬、あと薬を染み込ませたマスクを使う。これ以上は教えない。」

ガイラが俺の口ぶりをまねて返す。二人して笑う。実に面白い。

武闘家

リムルダールの町外れの牧場、俺の目の前で巨馬が草を食んでいる。ガイラの馬だ。しかしまあでかい馬だな、まあガイラもでかい（195位かな？）からな。

武闘家、ここアレフガルドではマイナーな職業（・・・違うな。戦闘スタイルと言うべきか？）である。こいつ以外に見たことがない。ガイラ・ガラ・ライガ。ガイラが本人の名前、ガラが師匠の名前、ライガが始祖の名前で流派の名前らしい。

ゾーマには次元を切り開く力があつたと思われる。勇者ロトの地球とアレフガルドの間を繋ぎ、バラモス、ヤマタノオロチ、ボストロールを送り込んだ。そのときの次元の狭間から、幾人かの人間がアレフガルドに落ちてきた。さらにギアガの大穴からきた者たちがこの世界に残った。マイラの鍛冶屋、盗賊カンダタ、ロト一行、その他この世界から戻れなくなった者達。その中に武闘家があつたとしてもおかしくはない。

「なあガイラ、一つ頼みたいことがあるんだが？」

「なんだよ他人行儀な。いいぜ。」

即答！せめて内容ぐらい聞け。

「そうか。今はまだいいが、いずれアレフと組んでほしい。」

「まあ俺はかまわないが、あいつには言ったのか？」

「それは問題ない。俺が言えばまず断らない。」

ガイラがニツツと笑う。なにか良からぬ事を企んでいる顔だ。

「一つ条件がある。」

「どうぞ。」

続きを促す。

「試していいか。」

「当然の答えだ。好きに試せ。殺すつもりでやってもいい。」

「よお、し、楽しみになってきた。いつごろになる？俺はいつでもいいぜ。」

ガイラが急に型を始めながら言う。バトルジャンキーめ！

「そうだな、今魔法の修行をさせ始めたから・・・速くて2週間、遅くても一月。もしそれを超えることがあったら、この話はなかったことにしてくれ。」

「OK！OK！お前のことだ、話がなくなることはないだろ。」

「まあね。しかしお前、試合ができることが楽しみなだけだろ？」

「判るか。いやー実に楽しみだ。」

食み終わったのか馬がこちらに歩いてくる。

「おう、ライ！もういいのか。じゃあ行くつか。」

ガイラが馬のたてがみをなで話しかける。その馬はライというのか。きつとその馬も友達なんだな。お前らしいよ。

俺達は宿屋に戻ることにした。

.....

俺達は今一緒に食事を取っている。ふと思ったのだが、こいつとコンビを組ませるのはいいが、まさか銅の剣、革の鎧、革の盾のままではまずいよな。せめてフルで鉄の装備ぐらいは・・・いやそれじゃ不足だな。せめて鋼の剣は用意したいな。2000Gか、補助金がでて1500Gになるか。アレフが持っているか聞いてみよう。

「何考えている？心配事でもあるのか？」

「ああ、アレフの装備だ。まだラダトーム周りでしか戦わせていないから大した武器を持ってない。」

「かまわんさ。武器が強いんじゃない、本人が強ければいい。」

「そうだな。お前は素手だしな。だがこれから困ることになるぞ。この辺だとゴールドマン、いずれドラゴンなど超重量の敵とどう闘う。」

「やってみなきゃわからんさ。」

ゴールドマンは身の丈5m、体重は1tを超える。ドラゴンも個体差があるが体長5m以上、体重も1t以上。普通に攻撃してもまず通用しない。

「殺られてからじゃ遅いぜ。まあやばいと思ったら逃げろよ。」

「そんなものか？まあ忠告はありがたく受け取っておくよ。」

「じゃあ、忠告ついでだ。お前使える武器はないのか？」

「そうだな・・・棍なら使える。あと鉄の爪という武器が流派にはあることはある。ただ金属製品は駄目だ。」

「ああ金属アレルギーだったな。」

なぜかこいつは金属アレルギーだ。武闘家は武器も鎧も装備しないし、今までそこまでの相手には相対していないから問題なかった。

「例えば革越しとかメッキでは駄目か？」

「短時間なら問題ない。だが汗が染み込むと駄目だ。あとメッキも駄目だ。」

駄目か、何とかしてやりたいのだが・・・そうだ！

「なあ、これ触ってくれ！」

俺は刀を抜き、刃を差し出す。

「どういうことだ？これも金属には違いないだろ？」

「いいから！先端の三角のところだけ触ってみる。」

ガイラが訝しげに刃に触れる。そのまま待つ。約10分。異常はない。

「いけるな。それはミスリルだ。」

「ミスリルってあの伝説のか？どうやって手に入れる？」

「このアレフガルドでは採れない。だが手には入る。」

「はあ？意味わかんねーよ！」

「お前メタルスライムは知っているか？」

「ああ、あの金属のスライムな。昔何度か倒したことある。」

軽く言ってくる。まあ相性はいいか。表面の金属面に斬撃はほぼ通らないが、こいつの打撃は中の核にダメージを与えることができる。

「じゃあ、今度倒したらその表面の金属を回収してくれ。それがミスリルだ。」

「さすが学者だ、よく知ってるな。それでどうするのだ？」

「あとは持ってきてからだ。ここに無い物ではなんともならん。お前は使える武器がないか再考してくれ。手に入れた量で作れる武器が変わる。さらに加工の難しい形も無理だ。よく考えておいてくれ。」

「

「わかった。期待していいんだな。なんなら今すぐにも……。」
ガイラは立ち上がり飛び出さんばかりだ。

「そこまで急ぐ必要ない。大体ドムドーラ南はここらよりずっと危険だ。半年前までとは違う。」

「そういえばそうだった。思わず興奮した。」

「なんだ。お前も武器を使ったかったんだな。」

「まあね。やっぱり剣に盾、鎧姿の騎士には一度はあこがれるだろう?。」

「そうだな。俺も一度はあこがれた。無理だったけど。まあいいや、用件は済んだ、じゃあ死ぬなよ。さっきも言ったがやばいと思ったら絶対逃げるよ。」

「わかった。心に刻んでおく。」

よし、今後の予定も決まった。ラダトームに帰ろう。

正と邪

5 / 15 勇者支援生活15日目

いつも通りの朝練である。アレフは鎧にも慣れてきたようでもたつくことなく、剣を振っている。魔法はどこまで使えるようになっただろうか？

「アレフ、魔法はどうだ？」

「まだまだです。覚えていたギラ、ホイミは思考詠唱できるようになりました。ただ新しい呪文がまだ詠唱文が記憶できてません。なんていうか、口には出さないのですが噛むんです。あと消費MPが大きい魔法が増えて祝福爺さんと、図書館を往復してます。」

「はははっ！そりや大変だな。まあがんばれ、全部できるようになったらとりあえず卒業だ。」

「えっ本当ですか？頑張ります。」

嬉しそうに返事をする。

「それはそうと、お前いくら持つてる？」

「ゴールドですか？貯金含めると1000Gくらいですかね。」

それはすごい。ラダチーム周りだけで1000G貯めたか。約300匹の敵を・・・レベル7ぐらいかな。登録レベルを変更しておこう。

「あと500貯める。」

「何に使うのですか？」

「貯まっってから教える。無駄遣いじゃないから心配するな。」

「はあ？そうですか。」

何か期待していたのか、がっかりしている。ある意味チートみたいなものだからな。秘密だ。

「まあそうがっかりするな。わかった。じゃあここで模擬戦をやつて5連勝したらすぐにでも教えてやる。」

「本当ですか？約束ですよ。」

「ああ、いいよ。ルールは相手まかせな。」

ここにいる連中を集めて趣旨を説明する。もちろん賭けの話は内緒だ。

「とりあえず誰とやらせるかな。希望者いるか？」

「はい、私にやらせてください。」

「ジョルジョ君か。やる気だね。ライバル視してるのかな？」

「いいよ。ルールは？」

「何でもありでいいです。武具の制限もありません。距離は10m。」

「いい覚悟だ。よしでは俺がこのコインを投げる。落ちたら開始だ。あと賞金をだそう。アレフに勝ったら100Gだ。本気でやれよ。」

俺がそう言うのと周りで日和見していた連中がざわざわしだす。金出さないとやる気にならないのかよ。そのうちにアレフとジョルジヨが所定の位置につく。双方鉄の剣、盾、鎧、剣を抜き互いに構える。俺はコインを投げる。コインが落ちる音が響いた。

時計周りに摺り足で動く。距離が地道に縮まる、あと8m。ここでアレフがいきなり剣を納める。そして口述詠唱。消費MP2、ギラカ・・・待てよ、なぜ口述詠唱？ジョルジヨが慌てて距離を詰める。居合い一閃！アレフの剣がジョルジヨの剣をはじき飛ばした。そして鐸鳴りの音が響く。

「そこまで！勝者アレフ。」

見物していた連中がざわざわする。中には卑怯だと言う声も聞ける。先日いなかったのだろうな。

「ジョルジユ、何か言いたいことはあるか？」

「いえありません。私の負けです。」

「そうか、じゃあいい。次誰があるか？」

「俺がやる。ルールは木剣、木盾。距離は5m。武器のみの一本勝負。」

若い男が前に出る。真新しい紋章入りの正規の鎧、アレフを見下したような目、自信に満ちた顔、貴族出身の近衛の新人か？話にならないな。まあいい、俺はコインを高く投げ上げた。

互いに構えにじりよる。木剣は居合いに向かない。そう思って選択したのだろう。まあ正解だが……。双方手をださないまま、盾がぶつかりそうな距離になった。アレフが盾を相手の盾に思い切り叩きつける。意表をつかれた男がのけぞった。がら空きの右手にアレフが剣を当てる。

「そこまで。勝者アレフ。」

「なんだ、こんなもの！認められるか！」

「お前は負けた。負けた者の言い訳は見苦しい。」

「いや騎士の鬪いは勝てばいいというものではない。おい！なぜ皆黙っている。こんな下賤な者に言わせておくことは無い。」

木剣を振り回し激高して周りを見渡す。目を合わせる者はいない。重い空気が流れる。その雰囲気能耐えられなかったのか剣と盾を叩きつける。

「いいか！俺は絶対にお前達を認めない。」

その若い近衛騎士は出ていった。明らかに場にほっとしたような空気が流れる。皆、俺の顔を見ている。何？もしかして俺が怒るんでも思っただ？残念、俺はアレフの成長が見れて機嫌がいい。

そして3戦、4戦とアレフが順調に勝ちを収めた。相手がアレフの奇策を警戒している間に普通の攻撃が的確に入る。こうなるとアレフが負けることはないな。

「よし、俺がやるう。勇者アレフの実力、このサイモンが見定めさせてもらう。」

いつの間にかやってきたサイモンがしゃしゃり出てきた。場の雰囲気が変わった。そうだろう、見習いだけでなく正規の兵が負け続けたのだ。悔しいが自分ではどうしようもない。そんな思いが各々の心にあつた。そこに救世主が現れた。

「サイモン。ルールはどうする。君に決める権利がある。」

「馬鹿め、俺にルールはねえ。お前も知っているだろう。」

「OK!じゃあ一つだけ、距離は10mだ。アレフ!こいつは強いぞ、今までの相手と一っしょだと思つな。」

「望むところです。」

サイモンが剣を抜き構える。アレフは腰を少し落とし、柄に軽く手を当てる。気が高まる。俺が投げたコインが地面に落ちた。

「ギラッ!」

いきなりアレフが魔法を放つ。火球がサイモンの1mほど前の地面に着弾し、砂煙があがる。アレフが一気に距離を詰め居合い、金属と金属がぶつかる激しい音がする。サイモンの盾が剣を受け流している。

「甘い！」

そう言うとサイモンが下段から切り上げた。アレフが仰け反ってかわす。崩れた体勢にそのままサイモンが右足で蹴りを入れた。倒れるアレフ。

「そこまでだ。勝者サイモン。」

サイモンがアレフに手を貸し引き起こす。

「残念だったな。」

「完敗です。読まれてましたか？」

「ああ、前にこいつにやられた。ベギラマだったけどな。」

サイモンが俺を指差す。俺とサイモンがにやつく。

「サイモン。賞金だ。もうどんちゃん騒ぎするなよ！」

「しばらくはやらねえ。隊長が怖いからな。じゃ、ありがたくもらつとくよ。」

それだけ言うとサイモンは去っていった。集まっていた皆が解散していく。思うことがあってジョルジヨを引きとめる。

「ジョルジヨ君。君に頼みがある。」

「私にですか？」

「ああ、明日からアレフに型稽古を教えてやってほしい。」

「でもアレフ殿は私より強いですよ。」

「そうかな？まあそれはともかく、貴族騎士の言う正統な剣を教えてやってほしい。ちょっと邪に傾きすぎた気がしないでもない。そういう訳だアレフ、明日からジョルジョ君にもご教授してもらおうにー！」

「はい、ジョルジョ殿。よろしく願います。」

「ジョルジョ殿は止めてください。今まで通りジョルジョでいいです。」

訓練所に三人の笑い声が響いた。

考察：魔物の分布と対策

5 / 16 勇者支援生活16日目

落第勇者達が帰ってきた。買取センターへ行ってその足で俺に会いに来たようだ。

「ほら。借りてた200G返す。」

金の入った袋を投げてよこす。俺はひっくり返して中身を全てテーブルにあける。

「10、20・・・200、210。少し多いぞ？」

「利子だ。つまらんこと言わすな。」

ドゥーマンが言い放つ。後ろの二人がそっぽを向く。こいつらなりの礼らしい。

「そうか。じゃあ、ありがたくもらっておく。でいくら返せた？」

「1000G。実際は900ちよつとだったが、手元から出して1000Gにしてきた。」

「結構、結構。なら本当はマイラの村あたりを勧めたい所だが・・・あまり気が進まないな。」

「都合の悪い事でもあるのか？」

「大いにある。俺が担当している勇者一人が乱獲している。それだけならいいが、ちよっと人柄に問題がある。多分村の宿でぶつかるだろうね。」

そう言う俺を見て三人の顔もゆがむ。

「そんな顔するとはなんかあったのか？」

「顔にでてた？買取素材がぼろぼろでね。指摘したら怒鳴りやがった。多分素材の数をごまかそうとした。」

「そんなことできるのか？」

「例えばこのがいこつの大腿骨つてあるだろ、これを真ん中あたりで折る。あら不思議？体分に見えないことも無い。」

「へえ〜そんな方法があったのか？そんなこと教えていいのか？」

「いいさ。やったら鑑定にやたら時間かけてやる。立体パズルには時間がかかるんだ。」

それを聞いた三人が心底嫌そうな顔をした。

「あんたらしい仕返した。俺達は止めておく。」

「賢明な判断だ。マイラへは行けないとなるとやはりガライしかないな。今度はもう少し長期滞在してくるといいよ。あっちに一週間はいてもいい。」

「ガライから南へはどうだ？」

「止めとけ。ドムドーラに近づくとかなりやばい。ここまでは大丈夫と線引きが難しい。まあ橋は渡るなよ。とんでもない魔物がでるぜ。キメラだろ、影の騎士、鎧の騎士・・・あとは」

「よく判った。みなまで言わなくていい。俺達のできることだけをやる。」

「判ってもらえてうれしいよ。一人でも知り合いが死ぬのは嫌だからな。」

なぜ三人共俺を見てにやにやしている。そんなに変なこと言ったか？

「そうか。俺達はあるたの知り合いなんだな。」

「じゃあな、次戻ってきたら俺達は自由だ。」

「出会いが最悪だったからな、嫌われてなくてよかったよ。」

三人は口々になにか言って出て行った。よく聞こえなかったが悪気はしない。

- - - - -

そうか、そろそろ行動範囲がぶつかり始めるか。一度魔物の勢力について整理しよう。

まずこの城のから北西のガライ、そこから南に行つて橋の手前まで、また北東マイラ村への街道を橋の手前まで・・・このあたりまでならそう危険な魔物はいない。スライム、スライムベス、ドラキ

ー、ゴースト、まあそんなところか。ゴーストのギラが嫌だな。これらの中央にロトの遺跡があるが魔物はでない。除外していい。

次がマイラ周辺、メイジドラキー、魔法使い、おおさそり、がいこつ。どれも癖のある魔物ばかりだ。前者2つはギラばかり唱えてくる。おおさそりは毒、特に鉄で拘束されてからの毒針がやばいな。あとはがいこつか。半年前までは見なかったのだがな、やはり魔王の力のせいなのだろう。不死の魔物は嫌いだ。どこを見ているか判らない。気配が無い。感情がない。人間との戦闘に慣れた者には特にやりづらい。

さつきも話題になったドムドーラ方面、ラダトームから山脈を越えて南西方向。通称岩山の洞窟のあたりまではそれほどではないが、旅程が長くなり補給の関係上危険が高まる。ドムドーラ方面は論外だな。ある意味竜王の支配地域、眷属のドラゴンもいたはず。装備を整えないうちは誰も行かせない。

マイラから南、リムルダール方面へ。一番の問題は敵ではないが一日中続く毒の沼地。海底トンネル・・・まだ誰も知らないがローラ王女はここに監禁されている。ここを守るは竜王の眷属のドラゴン。それも強い個体。もし王女が存在が知れたらどうなる？手柄を求めて幾人も挑戦するだろう。駄目だ、死者の山を築いた拳句、王女がどこか別の場所に移されかねない。把握できる場所においてもらえるなら問題ない。あちらにしても大事な人質、無碍には扱えない。王女には気の毒だがしばらくそこにいてもらおう。

そしてリムルダール。魔道士、リカント、リカントマムル、死霊の騎士、ゴールドマン、キメラ、そんな所か。ガイラ基準で考えよう。魔道士は数種の魔法を駆使する。眠らされたら終わりだな。リカント、リカントマムル、死霊の騎士、人に近い動きをする魔物な

らあいつの敵じゃないな。ゴールドマン、これは逃げると言った。キメラか・・・空中からの火の息にどう対処するのだろうか？まあよほど南に行かなければ出てこないからいいか。よく考えたらまずい魔物ばかりだ。助言が足りてないな、また会いにいかなくてはならない。

よくよく考えると問題が山のようにあるな。うまく事が進んでいくつもりだったが思慮が足りないようだ。そういえばあったことも無い特務隊先任士官もいる。一度相談すべきだな？よしそちらから片付けるとしよう。

王家 光と闇

国務大臣執務室

今日もここに来る。最近2階に上がってくると近衛も文官からもものすごい敵意を感じる。俺に話しかけてくるのは少数派だ。ここにいるほとんどが、自称貴族出身のエリートだから気持ちはわからないでもない。もっともだからといって俺が何か加減したりする必要はない。

「今日はお願いがあってまいりました。」

「なんだ？言ってみるがよい。」

ふう・・・この人の機嫌がよくなることはないようだ。いや、嫌われたものだ。ある意味あの馬鹿息子の高い鼻を叩き折り、この人の顔を潰したのは俺だ。いつそのこと解任してくれないかな？そうなったら一人の人間として勇者の従者でもなんでもやってやれるのに。いかん、余計なことを考えている場合じゃないな。

「前任特務隊士のシュミット殿にお会いしたいのですが？」

「ふむ、なるほど。そろそろ互いの協力が必要になるか。よろしい、これを使いたまえ。」

そう言つと自らの机から一枚の書類が取り出した。引き出しに二重の鍵、やけに嚴重だな、。

「これは誓紙ですか？シュミット殿のもですね。」

「そうだ、それも勇者の血の契約と同じ役割を果たす。調べるがよい。」

そういえば俺も着任したときに提出したな。血判まで押していやに恭しいと思つたらそういうことだったのか。もしかして・・・俺は大臣に背を向けレミィラを唱える。もちろん口述はしない。やはりこの隠し文字は・・・。

一つ、この者は王家と血の契約を結ぶ。

一つ、この者は血の契約により王家の秘術、蘇生を受けることができる。

一つ、この者は王位継承権のある者に武器を向けることはできない。

一つ、この者は王位継承権のある者に敵意のある魔法を使用することはできない。

一つ、この誓紙を破棄することによりこの者は命を失う。

やはりそうか、勇者のものと同じだ。ひどいな。しかし最後の一文、生殺与奪の権利までいっしょとは・・・必要がなくなるか、害があると判断されたらいつでも処分されるか。

俺は動揺を隠しながら魔法の地図を起動させる。シュミット殿はマイラ付近か、近くに4つの光点があるから監視、支援の最中か結構真面目だな。ガルドは近くにはいないな、この光点・・・城に帰ってくるのは二日後だ。

しかし事がうまくいって平和が訪れる、勇者や俺、功績があつた者に十分な報酬や地位を与えた後、邪魔になるなら暗殺する。報われないな。いやだめだ、俺はあの二人は助けてやりたい。

俺は言葉もなく退出した。

よくもまあこの男は毎日毎日私の前に来れるものだ。私とわが息子を貶めたのはお前だ。それは宮中全ての者が知っている。宮中の者に嫉まれていることに気づいていないのか？いやそんなわけが無い、こいつは全てわかった上で飄々としている。切り捨てるか？いやまだ駄目だ。先日息子に説教したばかりだ。

「この！痴れ者がっ！」

私の杖が息子フレールに叩きつけられる。

「しかし父上、あの者は私の顔だけでなく父上の顔にも泥をぬったのですよ。」

「そんなことはわかっておる。」

「ではあの者に処分を！」

「できぬ！忌々しいがあの者には罪はない。」

「しかし私を牢に入れました。あの薄汚い牢に！」

「自業自得じゃ。聞いておるぞ、お前はあの場で剣を抜かせた。その前に『私の部下の武器は私の武器である』と言ってな。自分でその意味を理解しておらぬのか！」

「それは……。」

「しかも城内で魔法を行使するとは……。」

「しかし私は魔法を出しておりません。」

「防がれたのだ。お前はあの者に命を助けられたのだぞ。若気の至りです。叱責で済ませてはどうでしょうか？と私に命令した。そう
国務大臣であるこの私にだ。この腹ただしさお前にはわかるまい！」

「しかしそれでは王族の面目が。」

「王族の面目、お前がそれを言うか。王族の務め理解できるか？」

「王族の勤めですか？それは貴族、騎士、以下民衆を支配、導くこと
とです。」

「話にならん。そんなことは前提条件に過ぎぬ。一番大事なことは
権力基盤を磐石にすることだ。その為にはいかに不快な道具である
うと使いこなせねばならん。」

「あの者は不快な道具ですか？」

「そうだ。不快だが実に有能な道具だ。使い終えた後処分すればよ
い。しばらくお前は大人しくしておれ、ローラ王女無き今お前は今
一番王位に近いのだ。自重せよ。」

「王女無き今ですと、どういう意味ですか？」

「知らぬでよい。今は十分な根回しをせよ。あの者にも礼を言って

おけ、そうする事でお前の度量の大きさを示すことができよう。そう思わせることが必要だ。よいな、しかと命じたぞ。」

.....

さて公式にマイラの村に行くことになった。常識的に考えると往復で6日、いや馬を使って4日にはここには戻って来れないことになるな。近衛隊長、マギーには不在を知らせておいた方がいいな。しかしまあ面倒くさい、ルーラは公表するかな・・・あかん、俺の利便性だけでそうするわけにはいかない。

近衛騎士控え室

「今をときめく國務大臣特務隊士殿がなんの用ですか？」

含みを持つ言い方で近衛騎士の一人が声をかけてくる。誰だっけ、お前？どこかで見た様な覚えがある。首を傾げる俺にいらだって大声を上げる。

「エックハルト子爵だ！近衛騎士の名ぐらい覚えておきたまえ。」

「ごめんなさい。名前はまったく記憶にございません。多分この間アレフに負けて捨て台詞を残していったやつだ。そうかお前か、近衛まで俺に冷たいと思ったら。エックハルト・・・意味は強き刃、ププッ！名前負けだな。」

「失礼致しました。しかし際立った方は記憶していたつもりでしたが・・・。」

「私を無能と言っか！」

怒鳴るなよ。そう言ってるんだよ、お前なんぞかまってられるか。

「騒がしいぞ、大声をだしてどうした？」

近衛隊長が部屋から出てくる。

「はっ！しばらく城を留守にします。少し厄介な用件をお願いすることになります。」

「そうか、では聞こうか。私の部屋に入りたまえ。」

近衛隊長がうんざりした顔をしている。

「あまり挑発しないでくれ、腑抜けばかりなのは自覚しておる。」

「別に私が挑発したわけではありません。あちらが喧嘩を売ってきたのです。」

「まあよい。で、厄介な用件とはなんだ。」

「明日にでも勇者ガルドが戻ってきます。少し素行が悪い為、素材買取の際に近衛の方に立ち会って頂きたいのです。」

「ふむ、では腑抜けでは駄目だな。サイモンをつけさせる、それでいいか？」

「お任せします。では急ぎますので失礼します。」

俺は出て行く。刺さる視線は気にしない。

.....

「はい、マギー！調子はどう？」

「あつケルテン！聞いて聞いて。このページなんだけど「ちょっと待って。」

おれが言葉を遮る。

「急な用件でマイラに行く。4日は戻らない。」

「なんで？ルーラで行くんでしょう？すぐ戻ってこれるじゃない？」

「公務なんだ。あまり非常識な時間では戻って来れない。悪いな、また埋め合わせはする。アレフにもそう伝えておいてくれ。じゃあ急ぐから！」

「もっつー！」

何か聞こえた気がするが、かまっている時間はない。俺は厩舎に行く。と一番速い馬を借りた。まあ使わないけど連れては行く。とりあえず今日はリムルダールに行く。

王家 光と闇（後書き）

まだ魔法は発動していない
ということとは俺は魔法は使っていない

ノーカン ノーカン ノーカン！

サバイバルの達人？

リムルダールに跳んだ。ただ俺は先日ここをでたばかりだ。この姿のままでは町には入れない。馬を引きながらモシヤスを唱える。これでなんの特徴もない兵士に見えることだろう。入り口の門番に声をかける。

「すみません。城からやって来ました。大きな馬に乗った勇者殿を探しております。どちらに向かったでしょうか？」

不信な目で見る番人達に一気に言い立てる。顔見知りだ。俺とばれる前に終わらせたい。

「ああ、それなら朝に南に行くって言ってたな。」

「探すのは大変だぞ。町で待ったほうがいいのか？」

「いえ、至急伝えねばならぬことがあります。ありがとございませぬ。では急ぎますので！」

俺は馬に乗ってここを離れる。モシヤスは効果時間が短い。維持するのにMPが必要だ。俺の最大MPはC＋B、つまり150前後しかない。消費MP12の魔法はあまり使いたくない。

さてガイラはどこへ行っただろう？日没まで3時間か、それまで見つかるか？この辺で待ってればリムルダールに帰ってくる……いやいや常識で考えてはいけない。あいつはサバイバルの達人、そう名づけたのは俺じゃないか。食べられる植物の見極め、狩猟、調理、水の確保、薬草学、安全な野営場所の確保、あいつの本場の強

さはそこにある。以前かなり世話になった。俺と組んでいたときは、俺が魔法で援護、攪乱を担当し、あいつが各個撃破するのがパターンだった。盗賊だろうが、当時野生化していた少ない魔物も敵じゃなかった。

ん？そうか。夜営を待てばいいじゃないか？火をつかうはずだ、遠くからでも発見できる。少し安心した。冷静になると周りがよく見えるようになった。所々ばかでかい蹄の跡がある。・・・俺馬鹿だな、こんな簡単なことに気づかないとは。よしこれを追いかけよう。

日が落ちる。暗くなる中レミーラの明かりで進む。火の光が遠くに見えた。

「おっ！いたいた。お〜い。」

俺が大きく声をかける。

「誰だ！」

身構えるガイラ。攻撃でもされたらたまらない。慌てて名乗る。

「俺だ、学者だ。攻撃するなよ。」

こちらを確認するガイラ。ほっとしたように構えを解く。近づいても良さそうだ。馬を降りて近づく。

「脅かすなよ。魔物かと思ったぞ。で、なんか様か？アレフが仕上がったか？」

「そんなに早く仕上がるものか。ちょっと心配になってな。この辺の魔物はお前と相性の悪いやつが多い。それを思い出した。それで闘ってみてどうだ。」

「ふん、心配性だな。問題ない・・・と言えないのが癪だな。実はちょっと困ってる。」

「だろうな。虚勢を張るような馬鹿だったら、どうしようかと思っただよ。で具体的には？」

「ああリカントだけ？直立する狼みたいのと、その色違いは問題ない。剣を持った骸骨、あれ昔はいなかったよな？まああれも問題ない。数でかかられると困るがな。」

「リカント、リカントマムル、それと死霊の騎士だ。覚えとけ。不死の魔物は魔王の影響で蘇った。俺の見立てどおり人型の魔物は問題ないな。」

「魔道士？あいつはうざいな。魔法をいろいろ使いやがる。これまで一体ならまだいいがあの骨といっしょに襲ってくるとたちが悪い。一度眠らされて死ぬかと思った。それ以来、真っ先に殺すことにした。」

ガイラが思い出したのか顔をしかめる。

「ゴールドマンは一度やってみた。確かにあれは駄目だ。先に聞いておいてよかった。まああの図体だ、発見が遅れることはないからな。それ以来相手にしていない。」

「それでいい。超重量ゆえに打撃も効かない、関節も投げも無理だ

な。」

「だな。それ以外には鉄の蠍、あれはまあ弱い。あとカメラがいたが、あれもまだ楽だった。」

「本当か？空中から火の息を吹いてくるだろ、どう対処してる？」

「こつする。」

そういつてポケットに手を入れ何か投げる。少し離れた木で弾ける音がする。俺が驚いている。

「飛礫だ。羽根に当てて落ちた所を踏み潰す。」

「ああ、なるほど。俺はベギラマが使えるからそういう考えはなかった。」

拳に入る位の石か、金もかからないし補充の心配もない。ふむ・・
・ならば無茶かもしれないが言ってみるか？

「一つ提案がある。メルキドに跳ばないか？」

「メルキド？なにかあるのか？」

「メルキドには用はない。あの周辺はここより強い魔物だらけだ。」

「それこそ意味がわからんな。どうする。」

「メルキドから西ドムドローラから南、例のミスリルを手に入れよう。」

「

「それはいいが、大丈夫なのか、その辺の魔物はどうなんだ。お前のことだ、知っているのだろうか？」

「ああ知っている。影の騎士、影に潜む骸骨の魔物。鎧の騎士、甲冑だけの魔物。死の蠍。メイジキメラ、魔法も使うキメラだな、メタルスライム・・・まあこんな所か？」

思い出すように順に答える。ガイラが呆れている。

「しかしまあよく知っているな。実は竜王の城の魔物も知ってるのじゃないか？」

「ハハハッ！流石にそれはね・・・」

かわいた笑いしかでねえ。ああ知ってるよ。言わないけどね。

「竜王の城のことはおいといてだ。今言った魔物でお前と相性が悪いのはメイジキメラだと思ったが、その飛礫があれば何とかなりそうだ。俺の魔法でメルキドまで跳ぶ、そこからは二人で現地まで行く。そこまで行ったら俺は戻る。」

「なんだ置いてくのか？」

「他の用件もある。そうは行かない。できると思ったから言うてる。どうだ？」

「そこまで言われたら、やるしかないな。」

「よし、じゃあメルキドに跳ぶか。ここで休むより宿屋の方がいい

だろう。」

それが迂闊な提案だと気づくのに時間はかからなかった。

サバイバルの達人？

うわー！それ駄目っ！死ぬー！ー！

俺達は逃げている。地面に振り下ろされた拳は地震の様に地をゆらす。

「おい、学者！話が違っぞ！」

「話は後でいくらでも聞いてやる。とりあえず逃げろー！」

そして今メルキドを目の前にして夜営の準備をしている。まさかルーラでゴーレムの足元に飛び込むとは思わなかった。この間マギーがここに跳ぶと言ったときは思い出して止めさせた。さっきは忘れていた。

「なあ、宿屋で休むのは無理かな？」

「そうだな。」

「学者、お前賢いけど馬鹿だろ。」

「そうだな。」

「さっきからそれしか言わないな。」

「そうだな。」

「いいつつつかげんにしろよ！お前のろくでもない提案のせいでもんでもない目にあつたわ！」

「ああ・・・達人。あんまり大きな声だとドラゴンに見つかる・・・。」

慌てて口を押さえるガイラ。こちら辺にはドラゴン、大魔道、スターキメラ、キラリリカントが生息している。しかし最も強いのがさっきのゴーレム、城塞都市メルキドの守護神・・・だったのは半年前まで度重なる侵攻に故障し、今は無差別にその力を振るう。身の丈10m、重量は不明、火、冷氣、真空、呪詛などほとんどの魔法が効かない。雷がそこそこ効き、爆発はまあ有効だろう。なぜか妖精の笛で寝る。ラリホーが効くかな？試す気にはならない、失敗したらまたさっきの追いかけてこをすることになる。

そして翌朝まで俺達はほとんど口を開くことなく、身を隠し眠った。気休めかもしれないがトヘロスは使う。あまり眠れなくても朝はやってくる。

馬に乗り駆け抜ける。魔物はできるだけ相手にしない。俺の馬が泡を噴いている。

「達人止まってくれ、俺の馬が潰れる。」

ガイラが馬を止める。流石にいい馬だ、強行軍に関わらずまだ元気だ。俺は自分の馬にベホマをかける。人間より体の大きい馬を癒すにはベホマを使わないといけない。思わず馬に声をかけた。

「無理をさせてすまないな。もうしばらく我慢してくれ。」

ライにも癒しをそう思い近づく、流石に息が荒い。こいつにもベホマをかける。昨日からろくにMPが回復していない。ルーラMPを2回、トヘロスMP2、ベホマMP8を2回、まだまだ、まだやれる。

「おい！学者、敵だ。金色のリカント、4体だ。」

くそっ！休ませろよ。馬はまだ駄目だ。

「俺がやる。達人残ったやつがいたら頼む！」

思考詠唱、この呪文は聞かれるわけにはいかない。

《俺はMPを7消費する。MPとマナは混じりて万能たる力となれ！

万能たるマナよ、死神の鎌となりて、我が敵の生命を狩れ！

ザラキ！》

3匹のキラリリカントが突然倒れた。1匹は漏れたか、達人なら大丈夫だろう。仲間を失って動揺している魔物にガイラが詰め寄る。正拳突きが腹にめり込む。蹲るキラリリカント、容赦のない膝蹴りが顎を砕く。仰向けに倒れた魔物の頭を踏み抜く。さすがだ。ガイラの息は少しもみだれていない。

「すげえな、学者。今のはなんだ？」

「すまない。さっきから魔法の使いすぎで疲労が溜まっている。しばらく休ませてくれ。」

疲労を理由にごまかす。ガイラもそれ以上も聞かない。実際短時

間で多くのMPを消費すると頭痛がしてくる。消費したMPはトータルで39、約4分の1。20分ほど休憩、ガイラに声をかける。

「もういいぜ、行こうか。」

再び馬で駆ける。明日には目的地につきたい。逸る気を抑える。あせりは禁物だ。いきなりガイラが落馬した。なんだ？木陰に金色のロープ、大魔道だ。ベギラマをくらったか？ならば！

（俺はMPを2消費する。MPとマナは混じりて万能たる力となれ。）

おお万能たる力よ、不可視の力となり、かの者の魔法を封じよ。）

「マホトーン！」

ガイラに聞こえる様わざと大声で魔法をかける。飛び起きたガイラが大魔道に向かって駆ける。大魔道が口をぱくぱくさせる。馬鹿め！もう詰んだ。

「てめえ、やりやがったな！覚悟はできているんだろうな。」

ガイラの拳が大魔道の頭を打ち砕く。改心の一撃！俺はガイラに近づき、ベホマをかける。ベギラマ一発と落馬の衝撃は軽くない。今は時間が惜しい。薬草での治療をしている暇はない。

「すまない、油断した。しかし普通のコンビネーションだったな。楽しいな。」

「言ってる！なにが楽しいものか。」

しばらく休憩してから出発する。途中ドラゴンをやり過ごす。あの巨体を見逃すのは逆に難しい。さらに先に進む。何度か敵に遭遇する。その度に相手をするがMPの消費が激しい。夜には俺は動けなくなった。夜営の準備、食事の用意、全てガイラに任せる。

「すまん。全部やらせて。」

「謝ることなんかないさ。お前の回復呪文には助けられてる。」

薬草や毒消し草もあるが当然即効性はない。それを補い回復魔法を使う。また敵を倒せばすぐ強くなるわけではない。強くなるのは日々の鍛錬のみ、戦闘経験は自らの力を効果的に使うため、人は一朝一夕で強くはなれない。俺が知っているこの世界はフィクション、しかし俺がいるここは現実。眠くなってきた、最低でも6時間は眠りたい・・・でないとMPが十分に回復しない・・・いつの間にか俺は眠りに落ちた。

はっ！いきなり覚醒した。毛布がかけられている。ガイラは・・・
・ 焚き火の横で座ったまま眠っている。まだ朝には時間があるな。
今度は俺が毛布をかける。ガイラがうつすら目を開ける。

「まだ時間はある。横になってくれ。」

ガイラが横になり俺に背中を向け、丸くなって眠る。俺は焚き火に枯れ木を投げ入れる。

サバイバルの達人？（後書き）

日間ランキング1位、お気に入り登録が1000件突破

読んでくれているすべての人に感謝します。

サバイバルの達人？

今日も馬で駆ける。先程よりメイジカメラがちらほら見えるようになった、もうそろそろだ。

「右前方100m、メイジカメラ4匹だ。」

「やっていいか？」

「駄目だ！数が多い、あいつのラリホーは厄介だ。やり過ぎぞ。」

進路を左に変える。やらなくていい戦闘はやらなくていい。闘いは遊びじゃない、負けたら次はない。

「駄目だ、追ってくる。やるぞっ！」

ガイラが馬から飛び降り突っ込む。俺は馬を棹立ちにし、向きを変える。メイジカメラが空中で止まる。俺とやつらでは距離がある、魔法を撃つには少し遠い。メイジカメラはガイラを標的に決めたようだ。やつらの必勝パターンはラリホー・・・ならば！

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、春の息吹をなりてかの者を目覚めさせよ。

》

「ザメハ！」

ガイラの膝が崩れかける、が再び力が漲る。ガイラの左手が下手

から大きく振られ、一匹のメイジカメラが墜落する。さらにガイラが追撃、喉元を踏みつけ仕留めた。あと三匹！どうにか落とさなくてはいけない。馬を走らせるながら声をかける。

「ガイラ！伏せる！」

「俺はMPを9消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、破壊の力となりて爆ぜよ！」

「イオラッ！」

イオラは発動場所を指定する魔法だ。右手を手綱から放し空中に突き出す。爆発させる場所はメイジカメラの上空！

ドツゴオオオンン！爆音が響く。俺も爆風で落馬する。慌てて飛び起きるとガイラがメイジカメラにとどめをさすのが見えた。とりあえず安心だ。

「おいおい俺まで巻き込むかよ。おかげで真っ黒だ。」

煤で黒く染まったガイラが文句を垂れる。

「贅沢言つな、命あつただけ儲けものだ。ちょっとまってる・・・
ベホイミー！」

見た目ではわからないがガイラの負傷をいやす。ガイラが水を取り出し頭からかぶり、布で煤を拭き取る。

「そつだ、命あつてのものだな。しかしまあ自分の魔法で落馬する

とは間抜けだな？」

「久しぶりで距離感覚がわからなかった。実のところ実戦で使うのは初めての魔法だ。」

「まあ詳しいことは聞かない。次はうまくやってくれ、毎回あな
るのは簡便してくれ。」

「善処する。急ごうか？」

先を急ぐ。幾つかの戦闘をこなす。消耗が激しい。そんな時に鎧の騎士が現れた。ガイラがいれば大丈夫であろう。そうだ、いいことを思いついた。

「ガイラ、おとり頼む。しばらく倒さないでくれ。」

「了解、1分待ってやる。」

鎧の騎士、マホトーンを使えたな。じゃあMPがある。マホトラで吸ってやる。

《俺はMPを1消費する、MPはマナと混じりて万能たる力とな
れ、

おお万能たるマナよ、不可視の力となりて、我が敵の力を奪
え！》

「マホトラ！」

放出された力が鎧の騎士に当たり、MPを引き寄せる。よしでき
た。ぐあっ！なんだこれは？

「があああー！」

俺は頭を抱え地を転げまわる。感情が入り込んでくる。

（死ね！死ね！死ね！）

（もう嫌だ、もう戦いたくない。殺してくれ！）

（命だ。それをよこせ、よこせ、よこせー！）

（俺は誰だ！ここはどこだ！お前は誰だ！）

俺はのたうちまわる。駄目だ自分を保て、取り込まれるな！これは・・・鎧の騎士に封じられた魂か？死して尚魔物として使われる人の魂か？・・・誰かが俺を呼ぶ。学者？そうだ！俺は学者、戦う学者ケルテン、そうあだ名をつけたのは・・・。

「おい！学者、ケルテン、しっかりしろ！」

「はあ、はあはあ・・・」

這いつくばったまま息を整える。もう亡者の声は聞こえない。俺は座り直し水を飲む。ガイラが心配そうに俺の顔を覗き込む。

「すまない、醜態をみせた。もう大丈夫だ。」

「そうか、どうしたんだ？」

言つべきだろうか？いま戦った相手の正体を。

「おい、何か考えている。俺にも言えないことか？」

「そうか？わかった、言う。だが今後やりにくくなるぞ。」

「いいぜ、一人で抱え込むな。俺なら大丈夫だ。」

「そうか、なら教えてやる。これはある程度想像していたが公表しなかったことだ。」

「今戦った敵、骸骨や鎧の魔物は人間だ。いや人間だった。」

「相変わらずお前の言うことは謎だ。中身からっぽの鎧が人間だと？」

「そうだ。正確には死んだ人間の魂が魔王に惹かれ、魔物と化している。」

「馬鹿な……。」

「今そんな魂が俺の中に入り込んできた。生命への渴望、憎悪、恐怖、そんな感情だ。」

しばらく沈黙が続く。耐え切れなくなったかのようにガイラが言う。

「俺には関係ねえ、俺の前に敵として現れたら倒すだけだ。」

「そうだな、流石純粹闘士。だが心しておけ、おそらく元が強かった魂は同じく強い。死んでも生前有していたスキルは健在だ。同じような外見だからってなめてかかると危険だ。」

「わかった。お前の忠告に間違いはない。」

「ああ今の所はな。余計な時間をとったな。先を急ごう。」

遠くに山が見えてきた、目的地は近い。

「よしこの辺だ。この山に囲まれた砂漠が目印だ。」

「ふうん。そういえば昔倒したのもこの辺だったか？なんとなく景色に記憶がある。昔あの金属を鍛冶屋に持ち込んだ事がある。金になるかと思つてな。」

「使えない。そう言われたら？」

「ああそうだ。温度を上げてても溶けない上に、硬すぎて加工できない。屑鉄以下だと・・・」

ここアレフガルドで加工できる金属は鉄、金、銀、銅、錫、亜鉛、鉛まででミスリル、ブルーメタル、オリハルコンの加工はできない。ミスリル、特に純粋なミスリルの融点はとても高い。

「まあ、それについてはなんとかする。金属の入手だけしてくれ。」

「わかった。前も言ったがお前さんの知識はすごいな？」

「ふん。前にも言ったが秘密だ。じゃあ俺は行くが、お前も用が済んだらすぐ帰ってこいよ、キメラの翼は持っているだろう？」

ガイラが懐を漁り、キメラの翼を取り出す。おれに見せびらかしながら言う。

「当たり前だ。これを持たずに遠征する馬鹿はいない。」

「OK！無理はするなよ。」

「お前こそな！」

互いに軽口を言い合う。ここは任せればいい。そう判断した俺はマイラの村に跳んだ。

マイラの村

マイラの村についた。ここでの用は二つある。特務隊士シユミツトとの顔合わせ、ミスリル加工の準備、そんなところか。まあ今日は疲れたし温泉でも入って休むか？

「いらっしやいませ・・・今日は一名様ですか？」

「ああ頼む。小部屋でいい。あと厩舎に馬を入れておくから世話を頼む。」

ちよつと待て。今日は？一名？余計なこと言うなよ。どうも顔を覚えられたか。俺は不貞腐れながら部屋に手荷物を放り込む。鎧と刀を外して身軽になる。さて風呂に入ろう。久しぶりに戦闘とか夜営とかしたから汗、泥まみれだ。

温泉に行こうかと部屋を出る。よく見るとこの部屋以外2部屋も埋まっている。へえ、このご時世に泊まる物好きもいるんだな。ここは元々温泉が取り得で平和なときには結構湯治客が全国から訪れていた。この村唯一の宿屋も部屋数は多い。残念ながら今はほぼ開店休業に近いだろう。

まあ余計なことを考えながら温泉に行く。おお客がいる、金髪ロンゲのチャライ男だ。互いに軽く会釈をする。俺は軽く体を流すと湯船につかる。ふう、生き返る様だ。なんかチャライ男が俺をじっと見ている。

「なんすか？なんか俺の顔についてます？」

「お前さん、どっかで見たことあるな？・・・そうか一人だから気

づかなかった。」

「お前もか！俺はそうじゃないけどマギーは目立つ。なるほど迂闊だった。」

「俺もヴィッセンブルンの嬢ちゃんは狙ってたんだけどな。」

「ヴィッセンブルン・・・ああマギーの家がそんな苗字だったな。もしかしてこいつ・・・。」

「失礼、もしかしてシュミット隊士？」

「そうだ、俺がシュミットだ。お前さんがケルテンか、噂には聞いている。」

「失礼しました。特務隊士を拝命しましたケルテンです。」

「めんどい挨拶はいい。俺は女たらしの放蕩者でおっている。素行が悪いから仕事を与えて城から追い出されているようなもんだ。」

「そんなものですか？」

「敬語も要らない。放蕩者だと行っただろ、堅苦しいのはきらいだ。」

「はあ。」

「我ながら間抜けな返事しかできない。拍子抜けしたが用件は済ませておきたい。そう思っていると」

「お前さん、真面目だな。もうちょっと気楽に生きた方がいいぞ。」

「はあ、まあそうしたいんですけどね。平和になってから考えます。」

「それじゃ駄目だ。考えちゃいけない。」

禅の教えかよ。もしかしてこの人意外に深いのかも知れない。このチャラいのは演技か？

「違うよ、これが素だ。事実俺には全ての町に女がいる。格式とか儀礼とかまっぴらだ。」

なんで俺の考えていることが判る？

「お前さん、顔にでてるぞ。まあ大体俺に会うやつは同じ質問をする。別に心が読めるわけじゃない。」

怖いな。この洞察力並じゃない。なるほど、性格はともかく使える人らしい。ならば

「OK!では改めて、シュミット。」

「そうだ、それでいい。でマイラになんか用か？一人で来て楽しい場所でもあるまい。」

「まだ言うか・・・用があるのはあんたにだよ。シュミット。」

シュミットは怪訝な顔をする。やっと一本取れた。

「あんたの勇者達に見込みがあるか？聞きに来た。」

「ふむ・・・やっぱり真面目だな。いいだろう、こっちの勇者はまあ駄目だな。俺がある程度押さないと進まない。未だここで足踏み中だ。ただまったく見込みがないわけじゃないから逆に性質が悪い。そっちはどうだ？」

「ああ三人いるが・・・一人はこの辺にいたはず、強さは問題ないが我が強い、いずれ誰かと衝突する。そのうち止めてもらうことになるだろう。あとはあんたも知ってるだろうが、ガイラはリムルダール辺りでも一人でやれる。」

ここで一息いれる。シュミットが真面目な顔をして聞いている。

「実の所、今一人育てている勇者がいる。名前はアレフ。まだ未成年だがそのうちガイラと組ませる予定だ。ガイラにはもう伝えてある。」

「ふ〜ん・・・面白いことしてるな。今どこだ？一度見ておきたい。」

「ラダトームだ。他の場所には行かせていない。」

「はあ、そんなんで大丈夫か？」

「俺に弟子入りしてきたんでな。半月基本だけをやらせている。」

「半月基本だけか？仮にも勇者に対して厳しい鍛錬だな。普通嫌になるぞ。」

「そうなると思った。だけど腐らず続けている。毎朝6時から2時間間の鍛錬、9時からの魔法の学習。それだけだ。もし会いたければ訓練所か図書館に行けばいい。」

「朝は苦手なんだけどな。わかった、近いうちに見に行く。じゃあ女を待たせてるから行く。」

そういい残すとシュミットは出て行った。軽そうに見えて実は深いところがあるがやっぱりチャラ男か。底がしれない男だな。でもそう言ったら違うと言っただろうな。

- - - - -

もう一つの用件、鍛冶屋に顔を出す。ここにはあの王者の剣をオリハルコンから作り直したジパングの鍛冶屋の末裔がいる。そう思っただけにきたのは3年前か。残念ながら技術は伝わっていなかった。しかし読めない秘伝書はあるとのこと。これを解読、全てではないがそれなりの技術は復興させた。俺の愛刀もここで作ってもらった。

「やあ久しぶり。元気にやってる？」

いかつい顔の親父がいる。いかにもな頑固な職人顔だ。ちなみに名を一字と言う。俺ができた刀を見て菊一字か、正宗かという言っていたら、気に入ったのか改名した。なにか響くものがあったらしい。

「おう、ケルテンか。刀の手入れか？」

「いや、曇り一つないよ。今日は頼みがあつて来た。」

「そうか、まず刀を見せる。俺の仕事の成果を見たい。」

相変わらず武器のことになると回りが見えなくなるな。俺は刀を鞘ごと渡す。渡された刀を真剣な顔で抜く。

「ふむ、確かに曇り一つないな。やはりミスリルはすごい……できれば全てミスリルで作りたいものだな。」

「それだ。今日の用向きはそれだよ。」

刀工一文字の顔が輝く。

「なんだ。ミスリルを持つてきたのか。だせ！」

「おいおい、なんだよ。今はねえよ。今度持つてこさせる。俺の知り合いに今取りに行かせている。そいつ専用の武器を作つてほしい。」

「そうか、楽しみだな。どんなやつだ。いつ来る？」

「うん。いつになるかははっきり判らん。一週間はかかるか？もしかしたら知っているかもしれんがこの辺出身のガイラって男だ。徒手での戦いを得意としている。」

「記憶にないな。しかし徒手なら武器はいらないだろう。」

「そうはいかないことになったから頼みに来た。だから今素材を取りに行かせている。」

「そうか、判った。今から準備しておく。」

そう言うが速いか、石炭をひっくり返し一つ一つ吟味しだす。あ
あもう駄目だ、きつと話しかけても無駄だ。なんで俺のまわりはこ
んなやつばつか何だろっ？

俺はここを後にした。今日はゆっくりしてから明日朝一にでも帰
ろっ。

マイラの村（後書き）

今更ながら感想の返信の仕方を理解、

過去に遡って感想に返信を書きました。

帰還

5 / 19 勇者支援生活19日目

朝一でラダトームに跳ぶ。久しぶりに訓練所に来た。目が合ったアレフが駆け寄ってくる。

「ケルテン師匠、4日ぶりですか？」

「それくらいかな？ガイラに話をつけてきた。いずれお前とコンビを組んでもらう。」

「えっ！いいんですか？私で。」

「ああ！いいか悪いかはお前次第だ。」

「私次第ですか？」

「あいつは弱いやつとは組まない。なんらかの力を示さないと！」

「力ですか・・・期待に添えるよう頑張ります。」

それだけ言うといつもの鍛錬を始める。大分板についてきたな。もう剣に関しては俺から教えることは無さそうだ。あとは実戦訓練か・・・いいかげんスライムとドラキーではあかん。そうだ、魔法はどうなった？とりあえず終わるのを待つか。俺も刀を振る、無心で振る。一通り終わる。アレフがジョルジョと型稽古をやっている。互いに剣を振り合う。型稽古だから殺陣みたいに全て決められた順にやっているだけなのだろうが、はたから見ると激しい戦いの

様だ。互いに礼をして終わる。

「アレフ、魔法はどこまで修めた？」

「使っただけならベギラマまで全て、まだ口述詠唱ですが。」

「なるほどね、よし続ける。卒業は近いな。」

「本当ですか？」

「ああ嘘は言わん。俺を卒業したらガイラの試験。それで実戦開始だ。」

「じゃあ、朝食をとって速く図書館へ行きましょう。」

アレフが食堂へ駆ける。急いでも9時になるまでの時間は変わらない。

- - - - -

王立図書館　マギーがつまらなさそうに空を見ている。手元の魔術書を見る。付箋でいっぱいだ。行き詰っているな。

「ただいまマギー！いま帰ってきた。宿題は終わったのかい？」

俺を見るとマギーの目が輝いた。

「もう遅い。あなたのせいで2日は無駄にしたかもしれないのに。」

「ひどい挨拶だな。お帰りくらい言ってもよくないか？」

「じゃあ、お帰り。今日こそ話を聞いてもらおうよ。」

「OK、OK。アレフの魔法を見てからな。君の生徒の上達とやらを見せてもらおうか。」

「いいわ、アレフ見せてやりなさい。」

アレフが図書館の隅にある魔法実習室で木偶に向かって魔法を放つ。なるほどギラの扱いは大したものだ。ピンポイントの攻撃までできるか。ラリホーやマホトーンの効果は判らないが発動はしている。よし、ちよつと痛いが的になるか。俺は木偶の隣に立つ。

「アレフ、俺に向かってベギラマを撃て！口述でかまわん。」

「えっ！痛いじゃすみませんよ。」

「判っている。それでもやれ、俺を敵だと思つてな。」

「ちよつと危ないわ、止めなさいよ！」

マギーが止めさせようとす。俺は真剣な目でアレフを見る。アレフがマギーを押しつける。もしアレフにこれができないならもう勇者は続けさせない。先日の鎧の騎士の件もある。やさしいのは美点だが戦場では役に立たない。敵と判断したら俺でも撃て。そう目で語りかける。

「やります。・・・』私はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能なる力よ、雷となり我が敵を撃て！』

ベギラマッ!」

ラストワードとともに俺に向かって右手を突き出す。右手から稲妻が俺を襲う。があああ!判っていても痛いものは痛い。この魔法は本当の名はライデイン、HPに80ポイントのダメージを与える。俺のHPはC+、およそ150。半分以上持つていかれる計算だ。痛みを耐えアレフに言う。

「よし、次だ俺にベホイミを。」

「はい。『私はMPを10消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、血肉となりこの者を癒せ!』ベホイミ!」

アレフの手が俺に当てられる。痛みが引いていく。

「よしいいぞ。後は思考詠唱ができるようにしろ。」

「はい、でももうこんな無茶止めてください。」

「あんた馬鹿よ!死んだらどうするの?」

二人とも涙目だ。

「すまないな。試さないといけないこともあるんだ。俺の計算では死ぬことはない。はずだ。」

「馬鹿!」

おれにビンタが飛ぶ。避けるのはわけないが避けない。俺が馬鹿なのも悪いのも判っている。

「ゴメン。もうやらない。」

俺がマギーを抱きしめる。アレフが後ろを向いて見てないふりをする。

魔法談義？

俺は今とても困っている。

「ああもう泣き止んで。せつかくの美人が台無しだ！」

どうしたものか？これではこの間の戦闘の話なんかしたらとんでもないことになるな。子供みたいな過保護な扱いされたくない。ならばアレフと同じく鍛えるか。肉体でなく心を・・・仮にも筆頭魔術師、目の前の出来事に心を乱されてはいけない。できないなら、深窓のお嬢様に戻せばいい。

「よし！じゃあこの間の続きだ。俺の魔術書の解説をしよう。なっ！そうしよう。アレフ、黒板用意してくれ。お前にも講義してやる。」

マギーを座らせ、アレフと講義の準備をする。今の魔法と失われた魔法の相違点に関する俺の考察、これを聞けば、好奇心が勝るはず。まず黒板にホイミの呪文を二つ書く。左に現行、右に旧魔法。

「ではこれ！左が君らが使ってるホイミ、右が俺の使うホイミ、マギー違いは判るか？」

少しためらってからマギーが話す。

「うっうん。それ例の魔道書の最初のページにあったホイミ。普通のは消費MPが4、でもそれは3、どういことかしら？この前聞こうかと思ったの。」

狙い通り好奇心が勝ったようだ。

「そのとおり、これは純粹に伝承の間違いかと思う。これ以外にも消費MP10のベホイミは実は5ですむ。」

「でも他のギラ、ラリホー、マホトーンも違うわ。」

「いいところに気づいたね。実はギラとその他の魔法の消費MPの違いは理由が異なる。」

「理由が違う?」

「マギーが少し首を傾げる。隣のアレフはぼかんとしている。ここで黒板を消し、ギラとベギラマを同じ様に新旧並べて書く。」

「さてマギー、多分気づいてると思うけど相違点は?」

「ええ、これは気づいたわ。ラストワードが違う。今までギラとしていた魔法は文字からするとメラ、同じくベギラマはライデインとあるわ、これはどういうこと?」

「そのとおり、なんと別の魔法だ。ギラと呼んでいた魔法はメラ系の初級にして初歩の初歩の魔法。これに対してベギラマはなんと勇者にしか使えないと言われたライデイン。何がどうなったか判らないがこれが真実だ。」

「ふ〜ん、メラ系とか前に言っていたギラ系とかは、更に発展形があるってことよね?」

「あるよ。メラ系はメラ、メラミ、メラゾーマと発展する。消費M

Pは2、6、12と順に多くなり、威力はメラ基準で10倍、20倍といったところか。」

マギーは興味津々で、アレフは真剣に話を聞いている。

「さらにデイン系の魔法、これはライデイン、ギガデインとある。同じ魔法とは思えないが雷を操る類似の魔法だ。消費MPは8、30だ。MP30なんて気軽に使えないね。」

「類似するつてのはどういう意味？」

「いい質問ですね。ベギラマことライデインは手から稲妻を射出する。だけどギガデインは天から雷を落とす。まさに”天を裂き地を割る”の表現が正しい魔法だ。」

「でもそんな魔法使ったら味方にも当たるとはならない？」

「そうだね。こういった範囲魔法は器用に味方を避けてくれない。使いどころが難しい魔法だ。まあ詠唱文は魔術書とにらめっこしてくれ。それとアレフは無理に覚える必要はない。」

「ええっ！覚えなくていいって？」

「お前なあ、自分の総MP判ってるのか？」

「あっ！そうでした。・・・でもさっきの話だとベホイミの消費MPが半分で済むので助かります。」

「ああそうだね。実はさらに上級の魔法がある。ベホマっていったんな状態からでも無傷に戻る。」

「それ聞いてない。」

「今始めて言ったからね。自分で学習すること。ちゃんと書いてある。」

「うっ、そうだけど・・・でもパワーワードが判っただけでも収穫ね。」

しまった、情報を与えすぎたかな。

「まあそれはいいとして、次にラリホー、マホトーン。これは先と違って現行魔法の方が消費MPが減っている。」

「減ってる？なんで？」

「ん、これは戦闘における使用法の違いによって変わったのか・・・ロトの時代には集団戦が主だったが、平和になってからは騎士同士の個人戦が主流になったことに原因があると思われるかな。」

二人とも全く意味が判らないといった顔をしている。自分でもよくわかってないからね。

「簡単に言うと、旧魔法は範囲魔法、現行魔法は単体魔法。だから現行魔法の方が少なくて済む。どうしてそう変化したかはともかく実質そうなっている。まあMPだけでなく詠唱内容も変化してるから気にしないでいい。両方使えると状況によって使い分けられることができるから便利だ。」

「なるほどね、それは気づかなかったわ。細かい文法はまだ理解で

きてないから・・・でも参考になつたわ。」

「俺はアレフにこういった補助魔法を使いこなして欲しいと思っている。ガイラは純粹闘士だから魔法は使えない。あいつは突っ込むしか能がないからもう一人が全体を見て、有効な魔法を使うべきだ。実際俺が組んでいたときもガイラが前衛、俺が遊撃で有利な状況を作った。」

「有利な状況ですか？」

「そうだ。実のところ一番怖い魔法はラリホーだ。寝てしまつたらいくら強くても終わり。だからラリホーを使う敵がいたら真っ先に倒すか、ラリホーかマホトーンで封じる必要がある。あと敵の前衛を眠らせたり、味方の負傷を癒したり、俺がよくやる囮としての魔法の使用だったりで、戦況のコントロールが勝敗を分けた。」

「難しいですね。僕にできますか？」

「できないなら剣を捨てる。最悪ガイラや俺が目の前で倒れていたとしても、なんとかかできる方法を考える。それが逃げることも一向に構わない。常に冷静でいろ。」

これはマギーにも言っている。今日はこのぐらい言っておけばいい。

「まあ、最悪王家の秘法で蘇生できるからいいか。でもあまり遠くまで迎えに行くのは簡便してもらいたいな。」

「心しておきます。」

二人とも神妙にしている。

「まあ難しい話はこの辺で終わろう。いずれ判る。じゃあ実際に魔法を見せるぞ。他言無用な！」

俺たちは魔法実習室に入った。

遠征

5 / 20 勇者支援生活 20日目

いつもの朝の訓練所である。もう特に教えることもないので自分の鍛錬だけ行なう。んっ？出入口が騒がしいな。人垣が真つ二つに割れ、貴族服と護衛2名、取り巻き3人、計6名が歩いてくる。ああフレーゲルだ。こんな所に何の用だ。自分の屋敷に引っ込んでるよ、謹慎中だろ？そう心の中で罵る。なぜかこっちに向かっているような気がする。やばい目を合わせるな！

「先日は世話になった。礼を言う。」

俺の願いむなしく、俺の前にふんぞり返ったフレーゲルがそうのたまう。世話をした覚えもないし、第一礼をするなら、”ありがとう”とか、頭を下げるとか、金をよこすとかいろいろあるのではないかと・・・はあ返事待ちですか？後ろの取り巻きがプルプルしている。そろそろ何か言っておくか。

「いえ、差し出がましいことをしました。お恥ずかしい限りです。」

「そうか、こちらこそ王族の心得勉強になったぞ。これからも父上をよく補佐してくれ。」

「はっ！かしこまりました。」

言いたいことを全て終えたのか、踵を返して立ち去っていく。取り巻きが一睨みしていくのはまあご愛嬌つてもんでしょうか？いまいち納得いかないが嵐が去っていくのは歓迎する。しかしまあ、我

ながら心無い返事をしたものだ。

「あのくあの人、一体何しにきたのでしょう？」

「あゝ、あの人って言わないほうがいいぞ。あれでも王位継承権3位、国務大臣の長子フレーゲル様だ。」

「はあ、その割には1mmも尊敬の念が感じられませんか？」

「わかる？」

「それはもう。顔に書いてありますよ。」

思わず自分の顔を撫で回す。

「この間、城中でこっぴどくやりこめてやった。今謹慎中のはずだ。向こうも俺の顔なんぞみたくもないはずなんだけどな！」

「大丈夫なんですか？」

「うーん・・・どうなんだろうね。反省して謝りにきたと考えていいのかな。」

「判りません。そんな偉い人に知り合いませんから。」

二人して首を傾げる。まあ悩んでもしょうがない。俺も嫌いだし、あっちも俺のことなんか歯牙にもかけていないはずだ。放っておこう。

「そうだ。今日は昼から俺もついて行く。そろそろ大臣にそれなり

の成果を報告したい。」

「いっしょに戦えるのですか？」

「いや、俺は見てるだけだ。とりあえず昼1時にここに来いよ。」

アレフが納得いつていないようなので適当に切りあげる。昼までにしばらく城を開けることを各所に挨拶しておくか。

.....

昼すぎ、俺は兵舎前で馬を二頭用意して待っている。馬には夜営用の道具を載せてある。さっきはわざと言わなかったが3、4日ほどの遠征をするつもりだ。しばらくするとアレフがやってくる。意外な重装備に驚く。

「これからマイラ付近まで行く。馬には乗れるな？」

「えっ？そんな所まで行くんですか？何も用意してませんが？」

「かまわんよ、現地調達すればいい。」

「判りました。馬には乗れます。行きましょう。」

あまり納得していないようだが知らないふりをする。意地悪だが実際にはもつと理不尽なことが多い。

「よし行こう、しばらくは駆けるだけでいい。特に相手にしたい魔物もないし。」

俺が先に駆ける。アレフは黙ってついてくる。馬の扱いは慣れていないらしい。とりあえずは乗れてはいるが、股が痛いらしい。時々馬の休憩も兼ねて降りて歩く。アレフが痛む所にホイミをかける。

「いずれ慣れる。慣れてもらわねばならん。」

「ええ、分かってます。」

「あと馬の息も気にしておけ、馬を潰すなよ。じゃあそろそろ駆けるぞ。先に走ってくれ。」

今度はアレフを先に走らせる。馬の様子を見ながら駆ける訓練でもある。さつきは俺が馬の様子を見てペース配分を決め、疲れる前に休憩させた。わざわざ説明したりしない。馬の息があらいい、少しペースが速いか？すまないな、しばらく我慢してくれ。馬にそっと話しかける。しばらくして速度が落ちてきた。

「アレフ、止める。馬が潰れる。」

「はい、まだ行けますが？」

「どうも俺の馬の方が劣るようだ。お前は自分の馬は見ていたが俺の馬は見ていない。」

「すみません。気づきませんでした。」

馬から降りてベホマをかける。それでも今日はもう無理をさせない方がいい。体力はともかく馬の気力が持たない。それに日没が近い。

「それはいい。次から気をつければいい。今日はここまでだな。よし水場を探してくれ。馬も頼む。俺は食い物を探してくる。」

そう言っつて自分の馬の手綱を渡す。アレフが怪訝な顔をしている。

「早くしないと日が暮れるぞ。水場を見つけたら次は火をおこしておけよ。薪は馬に積んである。」

それだけ言い残すと俺は獲物を探す。魔物が出るようになってから野生の動物は少なくなった。獲物がいなければ食べられる野草などで腹を満たすしかない。今日は俺がやるが明日はアレフにやらせる。こんなことはガイラが得意なのだがなあ。

取ってきたのは蛙と野草、それを火で炙り塩をかけて食べる。そう嫌な顔するなよ。食べるだけでしたが。馬は遠慮なくその辺の草をムシャムシャ食んでいる。アレフガルドの夜は早い。竜王に光の玉を奪われてから特に顕著だ。もう8時ぐらいか。

「俺が先に見張りをしておく。お前は寝ろ。夜中になったら起こすぞ。いいな。」

「トヘロスは使わないのですか？覚えたばかりなので使ってみたいのですが？」

「それもありがただが今回は無しだ。そういう訓練だ。帰ったらサイモンに自慢できるぞ。」

「判りました。それでは先に。」

アレフが毛布をかぶって横になる。少し腹を立てているかもしれない。悪いな、俺の馬が遅いのも、食い物を持ってきていないのも、最低限の食い物しか獲ってこなかったのも全部わざとだ。もっと困ったことはいくらでも起きる可能性がある。俺がいるうちに困っておけばいい。深夜2時くらいになったら起こしてやる。アレフは6時間は眠れるはずだ。俺は火を絶やさぬように薪を足す。

遠征の目的

5 / 21 勇者支援生活 21日目

眠い。俺は4時間ほどしか寝ていない。それでも起きて、いつもの鍛錬を行なう。食事は昨日の夜の残り。

「アレフ、出発前に薪を集めてくれ。」

「分かりました。探してきます。」

俺は水筒に水を詰める。馬の分もあるので結構面倒だ。ちなみに本当の意味での水筒だ。なんせこのアレフガルドには竹槍があるくらいだから、水筒は竹の節を抜いたものを使う。しばらくしてアレフが薪を持って戻ってくる。縄でまとめて馬に縛り付ける。

「よし行こうか、今日も先に行ってくれ。」

「はい、今日は馬を潰しません。」

俺は馬に飛び乗り、無言で手を前に振る。アレフが先に駆ける。時々こちらを見る。こちらの馬の息を確認しながら必要に応じて休憩をしたり、降りて歩く。少し慎重すぎるくらいはあるがもう同じ間違いはしないようだ。思わすニヤリとしてしまう。

昨日も今日も魔物は相手にしていない。スライムやドラキーは無視して駆け抜ける。あっちも駆け抜ける馬にはついてこれない。橋が見えてきた、そろそろマイラと海底洞窟の分岐点だ。

「よし、アレフ。橋を渡ったら降りるぞ。目的地だ。」

アレフが無言で手を挙げる。ずっと馬に気を使ってきて精神的に疲れているのだろう。

「ここから北へ行くとマイラだ。馬なら3時間くらいか。で、東に進むと毒の沼地が広がる。それを抜けると海底洞窟がある。リムルダールへ続いている。行くなら徒歩だ。残念ながら馬は毒の沼地に入る事を嫌がる。」

「どうやってリムルダールに物を運んでいるのですか？」

「もつともな質問だ。竜王が現れるまでは普通の泥濘だったんだがね、魔王の瘴気のせいか毒の沼地が変わった。以来リムルダールに訪れるものはほとんどいない。もちろん物も入ってこない。」

「そうですね、やはり早く竜王を倒さねばなりませんね。」

「そうだ。ならもつと強くなれ。この辺から魔物が強くなる。明日の夜までこの辺で狩れ。」

「判りました。では馬は頼みます。」

アレフが馬を預け自分の装備を確認する。歩き出すアレフに声をかける。

「途中食える獲物がいたら狩ってきてくれ。それが今日の夕食だ。俺はここら辺で野営の準備をしておく。」

アレフが張り切って歩いていく。この辺の魔物なら問題ないだろ

う。がいこつには苦戦するだろうか？あとで聞いてみよう。俺は野営の準備をする。もしもの雨を避けられる様濡れぬ場所を確保する。あとは焚き火をする。馬に草を食ませる。眠い、少し眠るか。トヘ口スをかけ安全を確保してから目を瞑った。

誰かが近づいてくる気配で目が覚めた。アレフか。

「どうだった？この辺の魔物は。」

「それなりに相手できるってところでしょうか。」

「それなり、とは？」

「おおさそりは武器がともに効きません、メイジドラキーも空中から魔法を使ってきました。この2つの魔物にはギラを使っていますから消耗が激しいです。魔法使い自体は強くありませんが、やはり魔法は曲者です。ホイミが欠かせません。」

アレフが疲れた顔で語る。まあ予想通りだ。

「がいこつには会ってないか？」

「見てませんね。どんな感じですか？」

「そうだな・・・嫌な相手だ。感情がないから動きが読めない。それでいて技術は持っている。」

「そうですか。気をつけます。」

「焦ったり侮らなければ怖い相手ではない。それはそうと夕飯は？」

アレフは布の袋から兎を取り出した。少し焦げている。

「ギラで仕留めたか、昨日よりはマシなものが食べれるな。捌けるか？」

「できます。やりますので休んでいてください。」

「わかった。お前に任せる。明日はもう少し北へ移動する。しっかりと食っておけ。」

アレフが夕飯の準備をしている。ふん、俺に気を使うとは生意気な、自分も疲れているくせに。だがそれでいい。ガイラに自信をもつて渡せる。さあ食事の準備ができたようだ。

「さっきMPの消耗が激しいって言ったな。ちなみに飛んでる魔物にはこんな方法がある。」

俺は落ちていた石を近くに投げつける。ガイラの見よう見まねだ。

「これで落とす。ガイラがこうしてた。」

「投石ですか、あまり威力は期待できませんが？」

「ああ俺は得意じゃないからな、ガイラのは飛礫とってもっと速さも威力もある。」

食事が終わる。今日はもう寝る時間だ。

「今日も先に寝ておけ。昨日と同じ位におこす。」

「では先に寝ます。おやすみなさい。」

トヘロスを使っていることは秘密だ。緊張感のなか寝ろ。

.....

朝だ、今日も眠い。日課の鍛錬はやる。何があってもアレフの前では泣き言は言わない。

「今日は薪を集めなくていい。今日の夜にはラダトームに帰る。マ
イラが見える辺りまでで行こう。」

「先行します。ついてきて下さい。」

「生意気だな。OK、ついて行こう。」

2時間は走っただろうか、遠くにマイラの村が見える。この辺で
いいか？

「よしいいぞ。この辺から別行動だ。馬は連れて行くぞ。」

「では私はこの辺りから魔物を探します。」

「ああ、しばらくはマイラにいる。日が落ちたらラダトームに戻れ。
キメラの翼はあるか？」

「・・・？ルーラが使えますが。」

「疲れて使えない場合もある。護身用に一つ位持っておけ。ほらっ
！」

俺は懐からキメラの翼を取り出すと、アレフに投げつけた。

「すみません。借りておきます。」

今日が終えたらきつとアレフはいろいろな意味で前より強くなっている。そう確信した俺は馬を引いてマイラに向かった。

重体

俺は今ラダトーム城下町の入り口にいる。ルーラの基準石のある場所ではアレフが戻ってくるはずだ。果たしてアレフは戻ってきた。顔に疲労がみえる。

「疲れただろう。今日は帰って寝ろ、何か報告があるなら明日にでも聞く。」

「はい、では失礼します。」

重い足を引きずる様にアレフが歩いていく。定宿にでも行くのだろう。戻ってきてほっとした。もしかしてもしかすることがないわけではない。ならずっと見ていればいいとも考えたがそれも駄目だ、過保護になりかねん。俺自身が否定したことをアレフには押し付けたくない。さて俺も宿舎に帰ろう。

ジョルジヨが兵舎の番をしている。なんかそわそわしているな。

「戻りました。何かありましたか？」

「お待ちしておりました、昨日の夜から何度もケルテンさんがいなかと問い合わせがありました。」

ジョルジヨが慌てたように言う。俺に客？ガイラか？特に急ぐ話はないはずだ。

「誰だった？もしかしていかつい男か。」

「いえ、城下町の宿の方の使いです。1時間おきに何度もです。帰ったらすぐ来て欲しいと伝言を承っています。」

「わかった。馬を頼む。」

馬を預け、宿に向かって走る。あの宿の親父が伝言で急いで来いだと？・・・何が起きた？気が逸る。蹴飛ばさん勢いで宿の扉を開けた。

「学者か？よく戻った。」

「何がおきましたか？急ぎの用みたいですが。」

「ああそつだ、こつちだ。昨日ガイラが担ぎこまれた。重体だ！」

親父が部屋に飛び込む。俺も急いで入る。重体だと・・・そこには全身包帯でぐるぐる巻きのガイラが寝ている。意識はない。

「どういうことだ？説明してくれ。」

「昨日夕方、町の入り口に血みどろで倒れていた。とりあえず応急処置はしてあるが、右足がひどい。」

「右足の具合は？」

「ああ膝から下、中ほどで完全に折れている。お前の言った開放性骨折ってやつだ。無理にあわせて添え木がしてある。」

「わかった。それでいい。あとは？」

「頭から上半身にかけて火傷がひどい。こいつの持っていた薬を塗って様子を見ている。魔法で治療がまともに見える知り合いはお前しかない。そう思ってお前を探していた。」

俺は包帯を少しめくり火傷の具合を見る。範囲が広いがホイミを数回かければいいたろう。この場合回復力の強いベホイミやベホマをかけると全身場所を選ばず回復してしまう。折れている足が折れ曲がったままくつつくともう直しようがない。手間だが少しずつ直すしよう。

俺は包帯を切り取り、何箇所かに手をあてホイミを唱える。少しずつ火傷のあとが消える。

「これで火傷は大丈夫だ。まだ熱があるからしばらくは安静にしないではいけない。もしかしたら感染症があるかもしれない。」

「あっああ。よくわからんがここで様子を見る。任せてくれ。でも足はどうなんだ。」

俺はガイラの脚の包帯をとり添え木を外す。痛むのか、ガイラがうめき声をあげた。

「つつ！悪いな。へまをした。」

「気づいたか、しゃべらなくていい。少し痛むが我慢しろ。」

ガイラが左腕を軽く挙げる。俺はガイラの右足に両手を当て探る。ガイラがうめき声をあげる。うん、骨の合わせ目はずれていない。これならベホマで直せるな。

「どうやら応急処置がよかったです。魔法をかけます。」

俺はベホマをかける。これで大丈夫だ。

「もう大丈夫です。しかしまだ熱も引いていません。明日迎えに来ます。それまで絶対動かないようにして下さい。」

「わっ判った。宿の者に面倒見させる。何、ひっぱたいてでも動かさせん。」

「というわけです、ガイラ。屈辱的かもしれませんが言う事はきいてください。」

「く、屈辱的？」

「ああ、便所も自分で行けません。」

ガイラと宿の親父のあつ！と声を上げる。

「異論は認めません。あともう眠りなさい。………ラリホー！」

不意打ち、さらに体力が落ちているガイラは抵抗できずに眠りにつく。俺たちは部屋からでた。

「実は動いても問題ない程度には治ってます。ただ体力が落ちていますから休息が必要です。あとこうでもしないとまた無茶をしますからね。」

宿の親父が呆気に取られている。

「お前、やっぱり悪辣だな。」

「悪辣とはひどいな。治療までしてやって、心にも薬をやったのに」

「子供には苦い薬か？」

「ええそうです。あいつは少し自信過剰なところがあります。バートルジャンキーでね、戦いこそ我が人生。うらやましくもあるが、それで死なすには惜しい友人です。」

「そういうことにしとくか。明日まで責任もって預かる。それからどうする？」

「しばらくマイラでも湯治をさせます。回復には時間がかかりそうですね。」

「マイラの湯か、俺も行きたいな。」

「いずれ平和になったら行きましょう。では俺は帰ります。」

俺は宿舎まで歩く。三日ほどまともに寝ていないもう限界だ。なんとか足を引きずるように自分の部屋まで帰る。ベッドに倒れこむ。意識が途切れた。

とんぼ返り

5 / 23 勇者支援生活 23日目

朝目覚める、ものすごく腹が減っている。昨日は疲れて飯も食わずに寝てしまった。とりあえず食堂に行き肉を啜えてから訓練所に行く。アレフはもう鍛錬を始めている。

「おはよう。」

肉を啜えたまま、声をかける。

「行儀が悪いですよ。ケルテン師匠。」

「そうだな、昨日あれから大変でね。さっきまで死んだ様に寝てた。」

「大変？もしかして私のことで迷惑をかけましたか？」

「違う違う、ガイラの件だ。怪我で宿に運ばれていた。」

「・・・あの部屋ですか。急病人がいると聞いてました。」

「まあそんなところかな。それでまたマイラに行くことになった。やつを休ませる。またしばらく戻らないから自分で予定をきめて動いていぞ。」

「そうですか、大変ですね。予定ってどうすれば？」

「そうだな・・・今いくら貯まった？」

「1500Gは預かってもらってます。手元に200Gちょっとあって、昨日までの素材を売れば全部で2500ぐらいになるかと。」

「そうか、結構貯めたな。じゃあガライへ行って鉄の盾を買って来るといい。そろそろ装備を整えよう。」

「剣や魔法の修行はもういいのですか？」

「そうだな。もう自主訓練だけでいいだろう。ただその旨はマギーには伝えておけ。」

アレフが首を傾げる。

「伝えてもらえないのですか？」

「今から馬を手配してガイラを迎えに行く。あまり時間がないからもう行く。じゃあな。」

それだけ言うと訓練所から飛び出す。少しして戻る。

「ああそうだ、遠征するときにはマギーかサイモンに予定だけ伝えておけ、俺が戻ってきた時予定がわからないと困る。じゃっ！」

.....

宿屋に来ている。中が騒がしい。扉を開ける。ガイラが暴れている。

「学者とめてくれ！この馬鹿、言うことを聞かん。」

「ガイラ五月蠅い。いいかげんにしろ！子供か！」

怒鳴りつけてやった。昨日死にかけていた癖に。

「学者聞け！、俺はもう自分で歩けるし、誰の世話もいらねえ！」

「救いがたい馬鹿だな。まだお前の体の中には毒が残っている。放っておくとそのうち仰け反って死ぬぞ。聞いたことないのか？大した傷じゃなくても死ぬ病だ。」

正確には違う。破傷風菌の概念なんぞアレフガルドにはないが経験測では知っているだろう。しかし破傷風菌にキアリーは効かないかな？それ自体は毒じゃないし・・・菌が出す毒にだけ効くとかありえるな。ガイラが黙り込んだ。

「・・・そんな感じで死んだ同門がいるらしい。最後は弓なりになつて死んだと聞いている。」

「それだ。しばらくは様子を見る。毒は毎日俺が抜く。その間はマイラで湯治三昧だ。激しい運動は禁止、いいな。」

「マジか、体が鈍るな。」

「つくづく馬鹿だな、武闘家ガイラ、メイジキメラに死すつて墓に書いてやるつか？」

「嫌なことを言う。わかったよ。でもじっとしているのは性に合わ

ん。」

「ふん！別にそれだけが用事じゃない。例の物は持ってきたんだろ
うな？」

「2匹分ある。欲張ってもう一匹と思って山を散策していたら崖が
崩れて落ちた。そこをメイジカメラに襲われた。カメラの翼がなか
つたら死んでいた。」

「阿呆、馬鹿、強欲、そんなことだと思った。無理はするなといっ
ただろうが！」

「面目ない。」

ガイラが小さくなっている。俺が本当に怒っているのが判ったら
しい。

「もういい。マイラに行くから準備しろ。5分で用意しろ！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

厩舎で馬に荷物を載せている。ガイラはふらついている。さつき
はよく暴れていたな。

「しばらくは馬で進む。辛いだろつがしっかり掴まってる。」

「なあ、お前の魔法で跳ぶわけにはいかんのか？」

「あれは便利すぎて公表したくない。対外的には馬で移動すること

「になつてるから我慢しろ。城が見えないところまで行ってから使つ。」

「そうか。わかった。」

俺たちは馬を並足で進む。ずいぶんゆっくりとしたペースだ。

「しかしまあ、お前の馬もよく戻ってこれたな？」

「ああ、メイジキメラに襲われていた俺を啜えて走つたんだ。それでキメラの翼を使えた。命の恩人だ。」

「ライは主より賢いな。まあそれはいい。マイラに行くのはもう一つ用がある。お前の武器を作ってもらおう。これも時間がかかるから丁度いい。」

「そうかそれは楽しみだ。」

「馬鹿！馬上で素振りをするな！しばらく安静だろうが……。」

「いや、楽しみで思わず。」

「馬鹿につける薬はないな。馬鹿ついでに聞くがこの間の魔物の素材はあるか？」

「あるぜ、メイジキメラの翼だろ、影の剣、魔物の兜、死の毒針。」

ガイラが馬にぶら下げた袋から一つずつとりだしながら言う。

「それ絶対出すなよ。」

「なんでだよ？金になるだろ！」

「やっぱり馬鹿だ。どうやってそこに行ってきたんだよ！」

「あっそうか！」

「勘弁してくれ・・・しかしそうだと死にそうになったのは好都合か。」

絶句。そうだろう、死にそうになって良かったって言ってるんだからな。

それからしばらくどうでもいい話をしながら進む。城が遠くに見える頃になってルーラで跳んだ。

武器発注

マイラの村、宿屋で二人部屋を取る。こいつと二人きりというのはぞつとするが、何か起きたらすぐに治療を行なわなくてはならない。おれは真剣な顔でガイラに語る。

「ガイラ、あらかじめ言っておく。今はまだ発症していない病がある。発症したら生き死には五分の病だ。実感は沸かないかもしれないが認識しろ。ここまでは判るか？」

「今はなっていない病気があって、病気になったら死ぬかもしれない。であつてるか？」

「そうだ。ならないかもしれないが、それがはっきり判るまで最大で三週間かかる。それを踏まえてお前が好きにやりたいなら好きにしている。だがその場合は一人で死ぬ。俺はお前を看取る気はない。」

「わかった。お前がそういうなら正しいだろう。俺の体を預けよう。」

「よし、今現在の発熱、悪寒、眩暈は火傷や骨折によるもので、これから起きることとは関係ない。魔法で皮膚や骨を直したが失われた血は失われたままだ。これからは次の症状になったら即言え。舌がもつれ会話に支障がでる、顔が引きつる、筋肉の強い痛みなどが深夜だろうが構わないから起こせ。」

「よくわかった。これは俺の中の闘いなんだな？」

「そうだ。体の中にできた毒は俺が消す。だがその毒を出す目に見えない何かは、お前の体力でしか勝てない。食欲はないかもしれないが食え。体力が尽きたら終わりだ。」

「そうか・・・闘いなら負けるわけにはいかないな。」

ガイラの目に光りが宿る。闘いを前にしたガイラの目だ。

「ならばもう一つの用事に行こう。ミスリルを出してくれ。」

ガイラが袋を漁る。メタルスライムの残がいを取り出す。すごいな、殴ったと思われる箇所がへこみ、反対側が破裂している。

「これだ、この通り二つある。」

「OK！それでどんな武器がいい？」

「やっぱり殴る武器がいい。棍や爪は性に合わない。」

俺は手持ちの紙にDのような形を描く。

「ならばこんなのはどうだ。こっちのまっすぐの方を握りこみ反対側で殴る。」

「ちょっとイメージがわからないな？」

「じゃあこれではどうだ？」

手持ちのタオルを自分の手に巻く。拳を握り巻いた布の部分でガイラを殴るふりをする。

「なるほど、布では意味ないが硬いミスリルなら効果的かもな。」

「更にこっちの打撃面に棘なり刃をつける。これでこちらより硬い敵に効果的にダメージを与えることができるだろう。」

「で、これはなんと言う武器だ？」

「ナツクルダスターとかサツクとか、単純にナツクルとも言つ。ミスリルナツクルとでも名づけるか。」

「なるほどミスリルナツクルか、楽しみになってきた。」

「そうか。なら鍛冶屋を紹介する。ついて来い。」

独特の何かが燃える匂いがある。村はずれの小屋にガイラを案内する。

「ここだ。職人らしい頑固な親父だ。機嫌を損ねるようなことは言
うなよ。」

「そついわれてもわからん。」

会った事ないからわかるわけないか。まあいいや、ミスリルを見ればやる気になるだろう。

「おいケルテンだ。入るぞ！」

大声を出して小屋の扉を開ける。普段から鎚の音や火のせいで耳が少し遠い。いつもここでは大声だ。

「おう、ケルテンか。今石炭を蒸している。」

「そうか。客を連れてきた。こいつがガイラだ。」

「ガイラだ。よろしく頼む。」

鍛冶屋の親父がガイラの全身を舐めるように眺める。

「いい体つきだ。少し元気がないが大丈夫なのか？こいつ。」

「ああ先日大怪我をしたばかりだ。まだ本調子じゃない。それよりミスリルを持ってきた。ガイラ出してくれ。」

「おう、これだ。」

ガイラがミスリルを差し出す。鍛冶屋が目をむく。

「なんだこれは！スライムみたいな形だな。」

「ああそうだ。実はメタルスライムというスライムの表皮だ。倒すのは結構大変だ。それを二つ用意してきた。もちろん倒してきたのはこいつだ。」

「そうか、世の中には変な魔物があるのだな。一つ試していいか？」

「ああ、なんだ。」

「こいつの一撃を見たい。」

ガイラが俺を見る。

「いいのか？ 安静だろ。」

「いい。どうせ言っても聞かない。この親父は力量の足りない者に武器を売らない。そのメタルスライムを殴れ。それで力量が知れる。」

ガイラが殴りやすいようメタルスライムの残骸を台の上に置く。念の為、親父をガイラの後ろに下がらせた。俺は残骸の横に立つ。

「よし、ここだ。思いつきだぞ。」

ガイラが腰を落とした構えを取る。心気を整える、正拳突き。普通は金槌で叩いてもへこまないミスリルが一撃でへこむ。鍛冶屋の親父がへこんだ残骸を触る。

「なんて一撃だ。」

「親父、合格か？」

「もちろんだ。鍛冶屋冥利に尽きるとはこのことだ。せひやらせてもらう。断ることは許さん。」

「そうか、よかったなガイラ。お前合格だったよ。お前はどつだ。」

「おっおっ！ 頼む。」

二人が固く握手をしている。暑苦しいな、こいつら似たもの同士だ。親父が俺に向き直り言う。

「それでどんな武器を作る？さっきのだと剣とか槍ではないな。」

「それなんだが、これを見てくれ。」

俺はさっき書いた絵を見せる。親父がまじまじと眺める。

「ふ〜ん、なるほど！拳を保護しつつ殴るか。加工はどうすればいい。」

「そうだな。まずミスリルを棒状にする。それを曲げて円形にしてから叩いて形をこう変える。細かい所は例の方法で少しずつ削ることができるか？」

「もちろんだ。だがそれは大変だな。削るだけでも2、3週間はかかるぞ。」

「ああ、構わん。こいつの病気療養にそれぐらいかかるしな。」

「そうか、判った。ならまず手の型を取ろう。」

鍛冶屋の親父はそこら辺にあった粘土を取り出して、太さ3cmぐらいの棒状にする。真ん中辺りをガイラに差し出す。

「よし、ここを軽く握ってくれ。」

ガイラが素直に握る。親父は粘土をガイラの拳に巻き付け押し付

けた。

「少しずつ手を抜いてくれ、型が崩れないようにな。」

ガイラの拳の型ができる。親父が大きさを確認する。なにか納得したかのようにうんうん首を縦に振っている。

「おい、一人で納得してないで何とか言ってくれ。」

「ああすまない。思わずな……。しかし、これだと材料が余る。どうする?。」

「なら余った分は10cm×30センチ、厚さ1mmぐらいの板状にしてくれ。」

「前といつしょか?。」

「そうだ。2枚作ってくれ。」

「わかった。」

隣でガイラが怪訝な顔をしている。

「なあ、二人だけで会話しないでくれるか。なにができるんだ?。」

「秘密だ。楽しみにしてる。お前は病気を治すことに全力を尽くせ。使う人間がいなくなったらこの親父が困る。」

「そうだ。俺が作るまでくたばるな。死んだら許さねえ。」

「なんか理不尽だな。激励だと思うことにしよう。」

三人が笑う。きっとそれぞれが出来上がりを想像しているのだろう。俺もガイラがミスリルナツクルでドラゴンを殴るところを想像してみる。それは空想をはいえ究極の一撃だった。

勇者アレフの冒険

僕は今ガライの町に向かっている。馬は借りられないので荷物をいっぱい入れた背嚢を背負っている。装備と合わせて結構重いが慣れた。ただこのまま戦闘をするにはかさばるので魔物は避けることにしている。

一人で黙々と歩く。慣れているはずなのになぜか一人が辛い。師匠といっしょの3日間はもっと辛かったはずなのに……。あの3日間は必要最低限の会話しかしてない。その会話もほとんど命令だけで暖かい言葉なんてかけられなかった。

だいたいまず城の外について来るといったが、まさかマイラの村に行くなんて聞いてない。馬があるから問題ないと言ったが野営など今までのしたことない。多分そういった準備など万全かと思ったら全然そうじゃなかった。

腹が立つことばかりだった。馬のペース、自分の馬だけならともかく同行者の馬の調子なんてわかるわけない。あげく“止まれ、馬が潰れる。”と言われた。そうなる前に言ってくれればいいのに……
・口には出さなかったけどそう思った。

次に食事、携帯用の食事や保存食くらい持ってきていると思っていた。ないから獲ってくると思う。しかも獲ってきた物は数匹の蛙と少々野草、とても食い物には見えなかった。調理されたそれはまあ口に入れるのに抵抗がなくなっていくにはなっていたが、それでも量が少なすぎた。

さらにまだ日が落ちたばかりなのに寝ると言う。こんな時間に寝

られるかと思つたが腹が満たされないのと、慣れない馬の移動で疲れているので寝ることにした。夜中に起こすと言われた。この辺ならトヘロスを使えば見張りを立てなくても大丈夫と言つてみたが却下された。むちゃくちゃだ。

本当に起こされた。まだ真つ暗だ。硬い土の上で寝たので体の節々が痛い、疲れが取れた気がしない。星を見ると二時くらいだろうか、6時間くらいしか寝ていない。文句を言おうと思つたがすでに師匠は僕に背を向けて寝ている。不貞腐れて薪を火に放つた。

朝6時、師匠はいつも通り起きてきた。そしていつもの鍛錬だ。鍛錬のあと薪を集めて来いと言われた。不承不承集めながら考えた。この遠征目的はなんだろう？まるでいじめだ。・・・あれ？なんか聞いた覚えがあるな、そうかサイモンさんの3日連続行軍訓練。

師匠は答えを教えることはしない、ヒントはくれるが結論だけを述べることはしない人だ。昨日からのことを改めて考えてみる。

まずは馬・・・これは馬に限つたことではないな、同行者に気を配るのは大事だ。今まで一人だったから気づかなかつた。次に食料・・・常に安定した食べ物があるわけでないということか。不足の事態はいくらでもあるだろう。サイモンさんもぼやいてたな、何もなければ食べないって・・・笑いながら。多分当たり前だと思つているのだろう。

よく考えると僕は6時間寝ている、あまり眠れてはいないが・・・でも師匠は4時間しか寝ていないじゃないか！僕は馬鹿か！全て大変なことは師匠がやっている、昨日の食事も今日の食事も僕の方が量はあつた。ならばと今日は僕が全ての荷を負うことにした。目的地で魔物を狩って帰ってきたとき、師匠は座つたまま寝ていた。

遠くから見てわかった。残念ながら近づくとおきてしまった、隙を見せてはくれない。

そんな3日間だった。もうそろそろラダトームからでる時、今回のガライ行きはその予行練習を兼ねる。もちろん装備を充実させるのも目的だ。1500G貯めると言われていたが何を買うのだろうか？ラダトームの武器屋しかしらないが、そんな高い装備は知らない。楽しみだ。この間の模擬戦5番勝負、最後に負けたのが残念だ。サイモンさんも余計な時に来てくれたものだ。・・・これは駄目だな、負けたのは僕でサイモンさんが悪いわけではない。

ガライに向かって歩く、歩く、歩く。いろいろ考えていたら足取りが軽くなってきた。僕が選んだ師匠は間違いでなかった。あの夜の決闘を見たとき、この人についていけばいいと思った。都合よく勇者支援官だと言う。好都合だ、断られることはない。弟子にして下さいといった時の師匠の顔は今思い出しても笑える。今思うと最初一本だったんだろう。あとはマギーさんのことを聞いたときだけだ。それ以外では剣でも魔法でも策でも何一つ勝っていない。今は勝てなくてもいい、全て吸収する。

さてもうしばらくしたら日が落ちる。たしかこの辺にロトの遺跡があると聞いた。そこは聖なる地なのか魔物が出ないらしい。今日の夜はそこで過ごそう。そこに行くまでに今日の食事を採ろう。実のところ背囊に携帯食はある。でもこれは獲物がなかったときに食べるためだ。そりゃそうだ、ガライやマイラなら2〜3日だから携行した食事だけでも行ける、でもリムルダールへは？竜王の城へはどうだ？当然無理だ。現地調達が必要だ。これができなかったことは魔物より怖い、今はそう思える。

ロトの遺跡だ。たしかにシーンとして魔物の気配はない。安全は

確保できているのでそんなに早くは寝なくてはいいい。そうだ、ロトの石碑を見に行こう。レミーラを革の盾に唱える。明かりは万全、石畳の通路を歩く。安全が確保されるとそれはそれで面白くないな。いつも緊張して歩くのが癖になっている。

ロトの石碑がある。大きな墓標のような石版に文字が彫られている。

「私の名はロト。私の志を継ぎし者よ。ラダトームから見える魔の島に渡るには、3つの物が必要だった。私はそれらを集め、魔の島に渡り魔王を倒した。そして今その3つの神秘なる物のを、3人の友に託す。彼らの子孫がそれらを護ってゆくだろう。再び魔の島に悪が蘇った時、それらを集め戦うがよい。」

なぜか涙が出てきた。ロトの想いが心に響く。これから厳しい冒険になるだろうが、彼の志は僕の心の支えになるだろう。今日はここで寝ることにする。ロトの勇者様、おやすみなさい。

夢を見た。

青い鎧をきたロトの勇者様が3人の人といっしょにいる。重厚な鎧の男、優しい眼差し女性、理知的な顔の男、みんな笑いあっている。4人で拳を打ち合わせ背を向け、それぞれ違う方向に歩き出す。空の太陽がまぶしい。

はっと目が覚める。僕はロトの伝説についてそんなに詳しくない。でもまるで見てきたかの様に詳細まではつきりとした夢だ。石碑の前で寝たからなのか、ロトの勇者様が本当に夢に現れたのか？・・・面白いことを考えた。この夢の内容を師匠に話そう。きっと驚いてくれるだろう。

ロトの遺跡をでてガライに向かって歩く。竜王が現れてからくすんだ太陽しか見れないが、今僕にはまぶしい太陽が見えている気がする。

勇者との衝突再び

5 / 3 1 勇者支援生活 3 1 日目

ガイラをここに連れてきて8日目、発症して5日。ガイラの状態は良くない。痙攣、引き攣りが起きるたびにキアリーをかける。毒素は消すことができるが、破傷風菌自体が消えたわけではない。最初の懸念通りだ。こんなことが当たっても少しも嬉しくない。衰えた体力を補うために回復呪文を使う。もうまともに食事をとることもできなくなってきた。昨日から流動食を与えている。

昼は鍛冶屋の手伝いをしている間、宿の主人にガイラの様子をみてもらう。何か異常があつたら俺を呼びに来させている。鍛冶屋ではミスリルを打っている。ミスリルは硬い、コークスを使って赤熱化する。赤熱化して少々柔らかくなったミスリルを大槌で叩いて形を変えている。まずメタルスライムの表皮の型でしかなかったミスリルを一つの塊にする。その塊を棒状になるようさらに成形する。

コークスはアレフガルドにはなかった技術だ。ジパングの鍛冶の秘法にあつた質のいい石炭を蒸し焼きにすることで炭素の純度をあげる技術。他には空気を送り込むための特別なふいご、コークスの高温に耐える窯などジパングの秘法から得た技術の粋だ。町外れにある窯小屋で汗だくになりながら大槌を振るう。なんとかDの形まできた。工程の半分と言った所か。

「あとは冷えるのを待つだけだな。温度管理だけはしっかりしてくれ。俺は宿屋に戻る、何かあつたら呼んでくれ。削るのは明日からしよう。」

「大変だな。あいつは大丈夫か？本当に死んだらこの努力も無駄になるな。」

「無駄になんかするものか！ガイラは死なない。あいつもこれ待っている。」

「そうだな。こいつも使う人間がいなくなるのは嬉しくないと言っている。」

「ふん！物がしゃべるものか。では行くぞ。」

俺は小屋を出る。武器の声か、鍛冶屋らしい言葉だ。

.....

宿屋。なぜか怒号がする。もしかしてガイラか！

「なぜ部屋が開いていない。俺は勇者だぞ。」

「そうは言われましても病人を預かっています。部屋は開いていても十分なサービスをすることができませんゆえ、お断りしています。」

「馬鹿か！そんな病人追い出せばいい。この勇者様が泊まってやると言っているのだ。」

「お預かりしているのも勇者様です。」

「それこそ無駄だ。弱い勇者などいらんだろっが！」

この声はガルドか。ある意味正論だろうがあまりにひどい。何より疲れ果てた俺の神経に触る。

「そこまでだ、ガルド！」

「誰だ、俺の名を気安く呼ぶのは？なんだ、城に籠もっている勇者支援官とやらか。この俺様になんの忠言だ。」

馬鹿にした口調でガルドが言う。かちんときた。今俺の機嫌は悪い、ならば言ってる。

「お前の言動は聞くに堪えないな。尊大すぎるその態度は目に余る。」

「はん。城の連中が困った、助けてーって言うから助けてやってるんだ。尊大になって何が悪い。」

「ならば城に帰ってからそう言え、こんな村でそれを言ってる。」「

「そんなことは知らん。支援援助をするといったのはそっちだ。だが今ここではそれがなってる。怠慢だな。」

「そうか、俺は支援すべき勇者を支援している。大体俺の助言などいらんと言ったのはお前だ。今更そんなこと言われても困る。」

宿屋の主人が右往左往している。それはそうだ。俺とガルドがものすごい声で怒鳴りあっている。村の人々も興味深げに集まっている。

「だが弱い勇者はいらないと言うのはお前の言う通りだ。」

「そうだ、そうだろ！なら俺を優遇しろ。」

「馬鹿か！何を勘違いしている。お前が弱いと言っているんだ。」

「俺が弱い、言うに事欠いて弱いだと！馬鹿な、お前みたいなひよるひよるに言われる筋合いねえ！」

別に俺はひよるひよるじゃない。お前らがガチムチなだけだ。だが売り言葉に買い言葉、

「じゃあ、そのひよるひよるの俺がお前より強いことを照明してやる。お前が負けたら勇者は解任させてもらっ、いいな！」

「そんなこと天地がひっくり返ってもありえねえ。いいぜ、やってやる。怪我しても文句を言うなよ！」

「その言葉そっくりそのまま返してやる。大勢の前だ、恥ずかしくて二度と表を歩けなくしてやる。ここでは狭い、表にでやがれ！村の中央広場でやる。ついて来い！」

「判りきつたことを一々命令するな！こんな所でやれるか！」

散々怒鳴りあつた俺たちは大勢の村人を引き連れ、村の中央広場に戻ってきた。俺とガルドが10mほどの間隔を開けて対峙する。その周りには大勢の野次馬、これから起きる決闘に村が騒がしくなる。

俺は革鎧に細い剣、ガルドは革鎧に両手持ちの大斧。体格は俺が

細身で背の高さも普通、ガルドはがっしりした体格で背の高さは2mを超える。一見大人と子供の喧嘩に見えるようで、口々に村人がやめるよう言っている。もちろん聞く気はない。俺たちの間に一人のお年寄りが出てくる。

「私はこの村の村長をやっておりますグスマンといいます。村長の名に免じてこの騒ぎを収めてもらえませんか？」

「駄目だ、こいつは俺を弱いと言った。身をもって思い知らせてやる。」

「これは国務大臣付き特務隊士としての職務になります。村長どのには申し訳ありませんが、残念ながらこちらから引く気はありません。」

村長がため息をつく。

「判りました。では私がこの決闘の立会人になります。よろしいですか？」

「つべこべうるせえ、早く始めろ！」

「よろしく願います。」

「では、この決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここにいる全ての者が見届ける。始めてください。」

村長の手が拳げられ振り下ろされた。

結末と再会

「おい、どうした！かかってきな。もしかしてギラやベギラマが怖いのか？ああ単純そうだからラリホーで即効寝るかもな。もしかしてトヘロスで見えなくなるかも？よし、ハンデだ。今の魔法は使わないでやる。感謝しな！」

当然ここにいたるまでにピオリム2回はかけてある。やつは皮鎧だからバイキルトは無用だ。こういった衆人環視の中の決闘では目立つ魔法は使わない。

「てめえ、舐めやがって！ぶっ殺してやる！」

ガルドが大斧を上段から振りかぶり俺に叩きつけてくる。馬鹿め、安い挑発に乗って大振りをするとはそんなもの当たるか！俺は斧が当たる寸前にバックステップ、斧が叩きつけられたら速攻懐に入って終わりだ。そう思っていると予想を裏切って大斧が強引に横に向きを変えた。何かいやな予感がする！俺は更に下がる。居合いの型は崩さない。ガルドは斧の勢いを利用して一回転、そこから袈裟切り。強烈な一撃が地面に叩きつけられた。俺は抜いた刀を納める。

「はんつ！よく避けたな。普通今ので死んでるぜ。武器を抜いても俺様には届かなかったか！」

「なるほど、いいコンボだ。まさかあそこから軌道を変えられるとはな！ちよつと実力を見誤っていたかな？」

ガルドが大斧を引っこ抜き、力を誇示するように振りかぶる。底意地の悪い笑みを浮かべる。

「なら前言を取り消して、土下座でもするんだな。みつともない姿で俺の気が済んだら許してやらんでもない。ゲハハハハッ！」

「馬鹿笑いは止める！そんな武器で勝てると思うな。いつまでも木こりじゃないんだぜ。」

「うるせえっ死ねや！」

ガルドの斧が俺に叩きつけられる。俺は棒立ちの状態から動かない。斧が当たる。観衆にはそう見えただろう。だがしかし斧が当たる音は聞こえない。時間差で俺の後方で大きな音がする。俺は刀を抜き、斧の柄だけを持って啞然としているガルドの眼前に突きつける。

「終わりだな。」

「なっなんだ、これは！こんなもの認められるか。俺の斧が壊れなければお前は死んでいたっ！」

ガルドが吼える。

「負け犬はよく吼える。馬鹿が・・・よくその柄を見る。壊れたんじゃない、斬ったんだ。」

ガルドが柄を見つめる。観衆もその柄を凝視する。その先端は途中まで斜めの切断面があり、さらにその先がささくれだっている。

「なっ！いつの間？」

「最初にたたきつけた斧に切れ込みを入れておいた。あの時は届かなかった訳じゃない。お前の体に攻撃する必要がなかったただけだ。」

「くそっ！まだだっまだ負けていない！」

ガルドが柄と拳を振るう。斧の攻撃にくらべ緩慢なその攻撃はいつも簡単に避けられる。

「くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！」

ガルドが何度も振るう。避ける、避ける、避ける……。やがて息が切れたガルドが肩で息をしている。

「そこまでです。」

村長のグスマンが静かに声をかける。

「もうあなたの負けです。ここにいる全ての者がそう思っています。決闘にも作法があります。負けを認めなさい。」

ガルドの肩が軽く震えている。

「くそっ！勇者なんかこちらから願ひ下げだ！」

ガルドは斧の柄を叩きつけ村人の輪を断ち割って出て行った。俺はその背中を見送る。だから助言はすると言ったのに……人の言うことが聞けない勇者なんていらぬ。

「がっ学者よ。見させてもらった。やっぱりお前強いな。」

宿屋の主人に支えられたガイラがでてくる。

「お前見てたのか？ 安静にしてると言っただろう。」

「あれだけ騒げば全て聞こえる。俺が馬鹿にされているのは我慢ならん。」

「そうか……。じゃあ早く直せ。今度見かけたら自分でやれ。」

「わかった。だがその前にお前と勝負したい。」

「俺は病人とはやらん。それこそ早く直せ。」

「約束だぞ。直ったら勝負だ。」

ガイラが崩れ落ちる。気絶している。やられた、病気を利用して言質をとるとは……。まあいい。気力が蘇っただけでもいい。

「だれか手を貸してください。この馬鹿を宿屋に連れ帰ります。」

ガイラを担架に乗せて運ぶ。世話のやけるやつだ。

.....

ガイラを看ている。まだ治る見込みはない。俺は椅子に座ってうとうとしている。なにか騒ぎが聞こえる。もしかしてガルドが戻ってきたか？ 扉の外で足音が響き、扉が乱暴に開いた。マギーが立っている。後ろにはアレフ。

「マギー、それにアレフまで、なんでここに？」

「ケルテン！あんたっ何やってるの！自分が病気になったら意味ないじゃない！」

何を言っている？別に俺は病気じゃない。

「マギーさんの言う通りですよ。自分の顔を見てください。」

どういう意味だ。手渡された鏡を見る。うわっ！なんだこの顔は。目の下の隈、げっそり痩せた頬、確かに病気に見える。

「大丈夫だ。まだガイラの様子を見なくてはいけない。」

マギーが俺の胸に飛び込んでくる。

「駄目っ！もう止めて！」

「でもこれは俺にしかできない。止めるわけにはいけない。」

「じゃあ私がやる！どうすればいいの！教えて！」

マギーが半狂乱で騒ぐ。そうか、その手もある……。

「判った・・・替わりを頼む。魔道書18ページ、解毒の魔法キアリィ。呪文は

『俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たるマナよ、癒しの力となりて、この者の毒を打ち消せ！』だ。」

「マギーは魔道書を開きページを開く。キアリーのページを開き、指で文字をなぞる。」

「この魔法ね。わかったわ、でもどうすればいいの？」

「この病は体内で毒素が作られる。できた毒素を解毒すればいい。その症状のサインは筋肉の痙攣、表情筋のこわばり、会話がまともにできなくなったり、口に水を含んで飲めなくなるなど。症状がでたらすぐに使ってくれ。」

「わかったわ。もうあなたは寝なさいっ！」

「でもまだ様「寝なさい！そんな顔した人に何ができるの！久しぶりに会ったら死相なんて！アレフッ！ケルテンを別の部屋に連れてって！寝るまで監視しなさい。」

アレフが俺に近づく。

「ケルテン師匠、無駄ですよ。ああなったらマギーさんは言うことを聞きません。それに私も同感です。寝て下さい。ラリホーをかけたでも寝てもらいますよ。」

「すまない。じゃあ寝させてもらっつ。もし急変することがあったら起こしてくれ。」

俺は肩を落とし隣の部屋に行く。アレフが黙ってついて来る。俺がベッドに入る。俺が寝るまで監視つもりだな。監視なんてしないでいい。もう起きていられない……。

いざマイラへ

時は遡って5月28日、ラダトーム城図書館

昨日ガライの町からラダトーム城に戻ったアレフは久しぶりに図書館に向かう。今回の遠征中にやっとベホイミの思考詠唱ができるようになった。それを報告したい、そう思ってここに来た。本当に報告したい相手はここにはいないがその次にで報告すべき人だ。

「マギーさん、戻りました。聞いて下さい、ベホイミは思考詠唱できるようになりました。」

「ふん。あっそう。それで？」

なんか機嫌が悪い。そうか、一週間も師匠にあっていない。

「いついえ、それだけです……。」

やばい。これ以上言葉がない。どうしよう。

「え〜とっ！いま師匠とガイラさん、マイラの村にいますよね。」

そんな顔で僕の顔を睨まないで下さい。僕が悪いわけじゃありません。

「マイラの村と言えば、この間師匠といっしょに馬で行ったんですよ。それが師匠ったらひどいんですよ。マイラまで2日かかるのに何の食料も持ってこなくて大変でした。はははっ！はあ。」

沈黙が続く。誰かこの間を助けてください。

「そうね、それだわ。」

マギーさんの顔が輝く。まずい、なんかたくらんでいる顔だ。

「アレフ、あなたマイラまで護衛しなさい。あなたもケルテンに会いたいでしょ？」

「まあそうですね。でも勝手にマイラに行ったら・・・。」

「馬鹿ね！自由に予定を決めていいって言われてるんでしょ？なら自分でマイラに行く予定を決めればいいじゃない。」

なるほど、名案だ。僕は僕の意味でマイラに行く。でも護衛って・・・。

「じゃあ私は馬を借りてくるわ！後何がいるの？私野営とかしたことはないし、よく判らないわ。」

えっとこの間の荷物を思い出す。

「馬、毛布、マント、2〜3日分の食料、それだけあればなんとかなります。」

「えー。じゃあ雨とか降ってきたらどうするの？それとどこで寝ればいいのか？」

じゃあ、ここで待ってて下さい。僕一人で行ってきます。とは口

が裂けても言えない。そういえばこの人は貴族のお嬢様だった。こ
ういった場合どうすればいいのだろうか？

「ちょっと待ってください。サイモンさんに快適な旅の仕方を聞い
てきます。」

「そう、頼むわ。ここで待ってるから。」

.....

兵舎でサイモンさんを見つけたので聞いてみる。

「すみません、貴族のお嬢様を護衛してマイラに行くことになりま
した。何を持っていけばいいでしょうか？なるべく快適にしたいの
ですが？」

「なんだ？女連れでマイラまで行ってくて？止めとけ止めとけ。無茶
無謀だ。」

「じゃあ、そうマギーさんに言ってください。図書館にいます。」

「ヴィッセンブルン嬢かあ。ケルテンがらみか？お前さんも大変だ
な。」

「そう思うならなんとか助けてください。」

「うーん、なら馬車を使うといい、御者もいるな。馬で駆けるより
は遅い、さらに乗り心地も良くない。心しておけ。」

「ああそういえば馬車なんてありましたね。使ったことがないので

思いつきませんでした。ありがとございます。じゃあそつマギーさんに伝えてきます。」

「おう、まあ頑張れ。ケルテンによろしくな。」

急いで図書館に走る。今日はどうにも日が悪い。

.....

「馬車を用意して下さい。それと御者も。それでマイラまで行けませす。」

「判ったわ。馬車は家の物があるし、使用人が御者をやってくれるはず。」

「それでいいです。じゃあすぐに行きましょう。時間が惜しいです。」

それからマギーさんの屋敷に行く。使用人によって準備がされる。出発のときがきた。ただまだ確認しておかなければいけないことがある。

「マギーさんいいですか。例え馬車でも快適ではありません。急げば揺れますし、いつものような快適な眠りは保障できません。食事もおいしくありません。また魔物が出てきたら数によっては戦ってもらいます。私の指示に従ってもらいます。これは遊びではありません。できないならこの話は無しです。」

じつと見つめる。条件を指定して譲歩をさせる。師匠なら多分こ

うする。

「わかったわ。あなたの指示に従いましょう。外の世界ではあなたの方が先達です。」

「結構です。では行きましょう。」

馬車がゆっくりと出発する。

「ねえ、アレフ。あなたなんかケルテンに似てきたかも？」

「最っ高の褒め言葉です。」

「そう、私もあなたもあの人の弟子みたいなものね。目指しているのはいつしょ、そうね？」

「そうです。これから師匠から一本を取りに行きましょう。僕たちの顔を見た師匠の顔はきつと面白いですよ。」

そして二人である人に対して愚痴を並べる。マイラまで3日はかかるだろう。ずっと放っておかれたんだ。愚痴ぐらい言っても罰は当たらない。

二つの意味で次の工程

6 / 1 勇者支援生活 32日目

目が覚めた。ここ何日かは寝ているか起きているのかよく判らない状態だった。久しぶりに意識がはつきりと覚醒したようだ。ベッドで上半身を起こし昨日までを省みる。・・・ああそうだ、苛立つてガルドと決闘をした。よくあんな状態で勝てたな。そうだ、ガイラの容態を見に行かねば……。俺はもぞもぞと立ち上がり着替え始める。コンコン！控えめなノックがされる。

「アレフです。入ってよろしいですか？」

「ああ、いいよ。」

袖に腕を通しながら返事をする。心配そうなアレフが入ってくる。俺の顔をみて安堵の表情を浮かべる。

「すまなかったな、心配をかけたようだ。」

「私のことはいいです。でもマギーさんにはちゃんと謝罪した方がいいですよ。」

思わず右手で頭を押さえる。目の前のことについてはいっぱいで結構な期間連絡していなかった。

「そういえばなんで君達がここにいるんだ？」

「私の遠征です。ガライ周辺は手ごたえがなかったのでこちらに来

ました。」

「ふん……マギーを連れて？」

「えっ！ええっ！そうですよ。魔法修行の成果を見たいとおっしゃられて。」

「へえ……誰の差し金かねえ？……まっそういうことにしておこうか。」

着替え終えた俺は腰に刀を佩く。これだけはないと落ち着かない。

「じゃあガイラの様子を見に行こうか。」

二人で隣の部屋に移る。ベッドに横になっているガイラ、その寝息は規則正しい。椅子に座ったまますうすう寝ているマギー。俺はしゃがみ込んで顔にそっろ手を当てる。

「マギー、マギー。」

「んっ。うん……！あっケルテン起きたの。」

「ああ、おかげでよく眠れた。ゴメンね。」

ぎゅっつと抱きしめる。抱きしめかえされる。泣き声がする。

「また泣いて、美人が台無しだ。これ前にも言ったね。ごめん、俺のせいだね。」

「そうよ、全部あなたのせい。」

マギーが半泣きのまま笑顔を浮かべる。

「うん。もう泣き止んで。君も隣で寝てきなさい。睡眠不足は美容に悪い。」

「そうね、じゃあそうさせてもらっわ。・・・チュッ！」

そう言つとマギーは俺に軽くキスをすると部屋を出て行った。アレフは見ない振りをしている。照れ隠しにアレフに声をかける、

「アレフいつもの鍛錬だ。行くぞ。」

「ここはいいのですか？」

「ああ、宿の人に任せる。いつもなにかあったら呼ぶよう言ってる。」

.....

久しぶりに隣でアレフが剣を振っている。銅の剣、鉄の盾、革の鎧のなんともちぐはぐな装備だ。思わず笑みが漏れる。

「どうしたのですか？なにかおかしいですか？」

「ああ、その装備がおかしい。」

「いや、ケルテン師匠の勧めに従っただけですよ。笑うのはひどい。」

「

「すまん、すまん。そうだったな。とりあえずこの村の武器屋でも見てくるんだな。まあこの間の1500Gも使ってもかまわない。もし手元に無くて貯金分で買ってもいい。手続きは俺がしてやる。」

「いいのですか？」

「ああ、多分買いたくなる装備があるさ。」

「そうですね。後で見てください。」

「それとその後は外で実戦、魔物の被害もあるそうだからちょっといい。ただ、昼には戻って来い。頼みたいことがある。」

「頼みたいこと？なんですか？」

「あとで言う。そう難しいことじゃない。」

一通り鍛錬が終わるとアレフは武器屋に行った。俺は鍛冶屋一字に行く。次の工程だ。ちなみに鍛冶屋と武器屋は別ものである。

.....

「来たか、昨日は大活躍だったな！」

「そうきたか。いや感情のままに動いたことを反省している。」

「いいんだ。あいつには村人が困っていたと聞いた。胸がすうつっ

としたって感謝していたよ。」

「そうか、もっと早く言ってくればいいのに。」

「言つても何も誰もお前の身分なんぞ知らん。知っているのは宿の主人と俺ぐらいだ。お前は俺のところに来る変わった兄ちゃんとしてか思われておらんかった。」

「そうだな。そう言われればそうだ。印籠を見せびらかして歩くのは趣味じゃない。」

「いんろう？お前はたまに意味のわからないことを言う。」

「まあそれはいいや。次の工程に移ろう。例の砥石はまだあるか？」

「ああまだあるが、砥石だけでは駄目だ。」

例の砥石。これはダイヤモンドの粉末をまぶした砥石だ。もちろん俺オリジナルだ。ダイヤモンドはそう産出しないし、貴重ゆえその粉末は市場にでていない。

「判った。じゃあ粉末は用意してくる。とりあえず武器の加工はできるところまで頼む。」

「はん！武器は俺の領分だ。頼まれるまでも無い。」

「じゃあこれはもらっておくぞ。」

俺は石炭の袋を一つ担いで外にでた。さてどこで加工しようか・
あまり離れるわけにはいかない。村の中を歩いていると豪華な馬

車をみかけた。あいつら馬車できたのかよ！やっぱり鍛えてやることにしよう。改めてそう決意した。

ダイヤモンドの砥石、それは炭素の立方晶であるダイヤモンドをまぶした砥石。ダイヤモンド粉末を作るには炭素に爆発などで高温、高圧をかければよい。あとはこれを接着剤を塗った金属棒や板にまぶす。もちろん俺の刀ミスリルブレードはこれで仕上げた。

宿の主人にしばらく留守にすることを告げると村の外にでる。重たい石炭袋を担ぎ、それなりに離れた山まで走る。岩山のくぼみに石炭を置きイオナズンを唱える。響き渡る轟音、強烈な衝撃。多分村からでも見えるだろう。爆発の跡の黒い粉末をかき集める。よしこれでいい。早く村に戻ろう。ルーラ、マイラへ！宿屋に戻る、特に異常は無いようだ。

- - - - -

鍛冶屋の小屋に戻る。親父が座り込んで粘土の塊を触っている。近くにいろいろな棒が転がっている

「例の粉だ。で、それはなんだ？」

「ああ、この間とつた型を焼いた物だ。これからさらに手の型をとつたのがこれだ。これにピタリ合う様、削っていく。この型に合う様削るには、丸型、半月型、それも大きさの違うものがある。それで用意したのがこの棒だ。」

いろいろなサイズの丸棒、半月状の断面の棒を取り出す。

「なるほどね。いつの間に作ったんだ？」

「そりゃあお前があいつの看病をしている間にだ。お前がやつれていたので粉末待ちだったのさ。」

「それはそれは……。」

俺は苦笑しかできない。どうも周りが全く見えてなかったらしい。

「だが今日はいい顔をしている。例の姉ちゃんか？大事にしるよ。俺一人でやすりを作るから、今日はもうお前の手はいらぬ。邪魔だから帰れ！」

俺は小屋から追い出された。しょうがない、帰ろう。大事にしるか……やはり昼から鍛えることにしよう。放っておいて怒られるなら横にいても困らない様鍛えてやる。

真のつよさ

昼になってマギーが起きてきた。寝ぼけ眼でひどい顔をしている。

「ん、おはよ〜その人だいじょ〜ぶ〜?」

まだ半分寝ているな。

「ああ大丈夫。それより温泉でも浸かって目を覚ましてきなさい。あとで用件があるから。」

「は〜い。じゃそうする。」

足をひきずりながらでていった。流石に看病は辛かったのだろう。

「おい、ケルテン。よかったのか?」

目を覚ましたガイラが俺に声をかける。

「なんだ、起きてたのか?人が悪いな。」

「はははっ!俺は人の恋路を邪魔するつもりはない。だから目をつぶっていただけだ。」

ガイラがサムアップをする。

「で何がよかった?なんだ?」

「普通後を追ったりするんじゃないのか?」

「それはないな。もし俺が義務と責任を放つたらかしのしたら幻滅される。そんな仲だ。」

「ふん、そんなものか？しかし夜中に目が覚めたら知らない女がいた。びっくりしたぞ。」

「そういえば互いに紹介してないな。やはり全く頭が回ってないかったのだろう。」

「改めて後で紹介する。それで体はどうなんだ？」

「なんともわからん。急に痛みや引き攣りが来る。お前の魔法ですとそれが消えるだけだ。」

「まだ破傷風菌は消えないか。確か抗生物質は効く。だがそんな物はアレフガルドにない。このまま体力に任せて快癒させるしかできない。三国史や戦国時代に戦争の後、大したこと無い戦傷で死んだ武将の死因はこれだ。」

「三国史？戦国時代？実のところ俺の頭には未知の知識が沸いてくる。神の知識か、前世の知識。多分前世、別の世界の知識。残念なのかどうかわからないがはっきりとした記憶がないから、前世とやらに全く未練などない。18年生きてきたこの世界の方には執着はある。最低でも自分が関わった人々には寿命をまっとうしてほしい。それが俺の生きる目的。」

「10年ほど前、記憶とも知識とも判らないものが頭に蘇った時、周りの人にこれから魔王が蘇ると言った。子供の言葉だと一笑された。それでも言い続けたが悪い夢だと言われた。長い平和だったの」

だ、それも仕方ないだろう。なら自分で何とかしよう。そう思って自らを鍛え、過去の知識を蘇らせた。

もしかしたら自分が何もしなくても、勇者が現れ竜王を退治してくれるかもしれない。だけどそれまでに犠牲になる人はどうなる。利己的かもしれないがせめて自分の周りだけでも犠牲はださない。事実俺はドムドーラの陥落は見逃した。正確な侵攻時期が判らないのと、これから新しい勇者の伝説が始まるからだ。

俺自身で事が始まる前に竜王を倒せばいいとも思ったが、実は俺はそこまで強くない。日々の鍛錬とロストマジックのアドバンテージで瞬発的な強さはあるが、敵を倒しながらあの長い竜王の城を降りていく持久力はない。それ以前に俺はロトの血をひく勇者ではないと思いついていたのもある。まさかの勇者システムには驚かされたものだ。もしかして攻略ルートを間違えたのかもしれない。

「おい！どうした？もしかして俺は治らないのか？」

「ああすまない、思考が他所に行った。毒の症状を見逃さず毒を早急に消せば死ぬことはない。やはりお前の体力と見えない敵との勝負だけだ。」

「やはりそれしかないか。一つやってみたいことがある。」

「なんだ言ってみろよ。」

「俺の流派に体の中の気を整え、全身に廻らせる鍛錬がある。まあ外に出せるものではないし目にも見えないから説明しても理解されないと思うが……。」

ここでガイラが一度言葉を止める。

「なんとなくは分かる。続けて、」

「俺の氣を全身に廻らせれば、その見えない敵とやらに勝てるかもしれない。」

「お前はつよいな。そんなことを考えていたのか？お前の体だ、やってみればいい。だがそれは昼からにしよう。」

「何かあるのか？」

「ああ、お前のことじゃない。まあすぐに終わるから見ている。」

.....

しばらくしてアレフとマギーが揃う。ガイラとマギーを互いに紹介する。何を今更と言った感じた。アレフは真新しい鋼の鎧を着ている。

「やはり鋼の鎧を買ったか。まあ俺でもそうする。」

「でもお金が大分なくなりました。残金は500Gぐらいです。」

「問題ない。しばらくここを拠点に稼げばいい。そこで一つ頼みがある。」

「朝教えてくれなかったやつですか？」

「そつだ。昼からマギーを連れて行って欲しい。」

「えっ！私？」

自分は関係ないと他所を見ていたマギーが驚く。

「ああそつだ。アレフ、ここに来るまで何回か魔物に襲われたと思うが、マギーはどうだった？お前のことだ、特等席で見物はさせてはいまい。」

「はい、魔法の発動の早さは流石です。」

「なにか含むところがある言い方だな。続きを言ってみるよ。」

「はあ、マギーさん怒らないで下さいね。なんと言うか、その、なんていうか、結構力押しなんです。よくあんなにベギラマを使えるなど関心していたのですが……。」

「何よ、それ！何も言わなかったじゃない。現に敵は倒していたでしょ？？」

「マギー、そうアレフを責めるな。なんとなくは判っていたんだ。君には実戦経験がないからとりあえず一番効きそうな魔法を使うだろうとね。じつはこの辺りの魔物はギラでも十分だ。アレフもいたのだから敵の行動を牽制するだけでもよかった。」

「今まで誰もそんなこと教えてくれなかった。父上も兄上も！」

マギーがつぶやくように言っ。

「多分君の父上も兄上も知らなかった。だって実戦経験なんてないもの。城の騎士だって魔術士だってそうだ。だから先の大戦で多くが亡くなった。今重職についている者の半分はそれ以前の未熟者にすぎない。君も父上、兄上を失って心ならずも筆頭魔術士になったと聞いている。」

「あなたにそんなこと言われたくない。」

泣きながら叫ぶ。心を抉っているのは判っている。

「そうだね。今が平和な時代ならこんな事言わない。だけど今は城にいても絶対平和ではない。いずれ竜王の軍勢が襲ってきたら君も戦わなくてはならなくなる。ここまでは判るかい？」

「ひつく、ひつく！うん、判る。」

「そうすると君はベギラマを乱発するだろう。これはいろんな意味で危険だ。」

「いろんな意味？」

「ああまず第一にいつ終わるかわからない戦い最中にMPが切れるかもしれない。君は俺よりずっと多い潜在MPを持っているとはいえ限度はある。第二に俺は戦いになったら魔法を使える敵を一番にマークする。はっきり言うとまず先に殺すか、魔法を封じる。なぜかわかるかい？」

「魔法が怖いから？」

「半分正解。ギラやベギラマはまだ怖くない。一発では死なない自

信があるから、この間やつて見せたようにね。でもラリホーは怖い。確率は低いかもしれないけど一発で行動不能になるから。まだ理由はあるけどそれらを踏まえると君は敵の第一目標になってしまう。君には死んで欲しくない。」

「じゃあどうすればいいの？」

「そうだね。今言った危険なことを逆にすればいい。後ろで必要な魔法を効率的に使う。これが今の魔術士の戦い方だ。その為には敵の特性を理解しなくてはいけない。実戦にも慣れてもらわなくてはならない。だからアレフに同行して欲しいと言った。」

俺が語ることに興味がいつて、もうマギーは泣いていない。

「わかったわ。私は強くならなければいけないのね。」

「ああそうだ。アレフ、改めて頼む。いいか？」

「判りました。謹んで筆頭魔術士殿の護衛を勤めさせていただきます。」

「よし、じゃあ行ってこい。マギー、足が痛いとか、疲れたとか、泣き言は無しだぞ。」

「もう判ってるわよ!」

マギーが膨れる。皆が笑う。

晴れた心

マギーはこの前やった水の羽衣を着ている。二人の背中を見送る。結構きびしいことを言った。理解しているだろうか？必ず無事に帰ってこい。

「なあ、お前！なんて言うか・・・」

「言わなくていい！わかってる。」

思わず怒鳴る。

「そんな顔するなよ。泣きそうな顔してるぞ。」

「ああ、それもわかってる。」

「前にも言ったよな。優しい鬼だなんて。」

「ああ言われたな。はっとしたよ、俺の行動が矛盾してるってな。」

「獅子は我が子を千尋の谷に落とすってか！本当にやるやつがいるとはな。」

「難しい言葉を知ってるな。それも流派の教えか？」

「そうだ。流派の教えだ。教えついでにさっきのやってみるか。」

そう言つとガイラが立ち上がる。目を瞑り腰を落とし両腕を腰に当てる。独特の呼吸法、ガイラの気配が大きくなった気がする。俺

には何をやっているかわからない、ただ見守ることしかできない。

その時間は永遠に感じられた。いやもしかして一瞬だったのかも
しれない。ガイラが構えを解いた。

「ふう！ずいぶん体が鈍っているな。たったこれだけで疲れた。だ
が嫌な疲れじゃない。しばらく寝させてもらう・・・。」

ガイラはそれだけ言うとベッドに横になった。これで病が癒える、
そんな気がした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

一人で村の中を歩く。すれ違う村人達が俺を見て声をかけてくる。

「やあ兄ちゃん。あんた強かったんだな。」

「ありがとね、これであいつも大人しくなるといいんだけど。」

「城の役人さんだったのかい。そうは見えないね、ちつとも偉そう
に見えない。」

そうだな。少しはこの村の為になることができた。そう思ったら
気が楽になった。とりあえずやるべきことは無くなった。村の入り
口に見たことのある3人が見える。落第勇者たちだ。へ、ここまで
来れるようになったのか。

「あれ？なんであんだここにいるんだ？」

「ああ久しぶり。俺の担当の勇者がこの村に滞在している。」

「そうか、その割にはのんきな顔してるぞ。」

思わず顔をなでまわす。

「そうか、のんきな顔か。それはよかった。」

「まあいいや。あんたに言っておきたいことがあったんだ。」

嬉しそうにドゥーマンが言う。

「なんだ。吉報か？」

「ああ吉報だ。俺達は自由になった。全部払い終えたんだ。」

「それはよかった。おめでとう。ならなんでここへ？」

三人の顔が少し沈む。ゲオルグが真面目な顔になって言う。

「あの一件以来、ラダトームには居づらくなった。流石に三人がかりで一人に負けると人の目が気になる。一応これでもあそこではそれなりに名前が通っていたんだ。」

「それでゲオルグとクロウ、俺で相談して城を出ることにしたってわけだ。」

「で、どうか俺達を雇ってくれる所はないかとここまで来た。」

なるほど、そこまでのケアをしないといけないか。

「そうか、もしよければだがリムルダールに行かないか？」

「リムルダール？なんか伝手でもあるのか？」

「ああ、俺の養父が町長をしている。」

三人があきれた顔をしている。

「あんたには驚かされてばかりだ。結構いいところの出だったんだな。」

「それほどでもない。行けばわかるが町長といっても金持ちではない。まあ俺のことはいいさ。紹介状を書くからそれを持って町長に会えばいい。」

「それでどうなる？」

「ちょっと前に俺が城に勤めるようになったから、町を護る兵士に負担がかかっている。君らが行ってくればその負担が軽減できる。そう紹介状に書く。もちろん腕は俺が保障すると付け加える。」

「いいのかよ？そこまで保障して。」

「まあいいさ。町にはそれなりの装備も設備もある。実戦経験者なら役にたつだろうよ。」

「頼んでいいか。俺達が少しでも役にたつなら、そうしたい。」

「こちらから頼む。俺の大事な町なんだ。・・・だけど」

「だけど何だ？」

「リムルダールまで行けるか？ここからまだ10日はかかるぞ。しかも毒の沼地を越えないといけない。」

「10日が・・・厳しいな。魔物は当然いるよな？」

「そうだな。この辺のがいこつより強いやつらがな。」

「うへっ！そりゃあ無茶だな。」

そうだな、我ながら名案だと思ったんだけど・・・どうしよう。

「しょうがない、送り届けよう。あんまり気が乗らないけど。」

「いや、それはあんたに悪い。いくらなんでも10日もつき合わせられねえ。」

心底困った顔でクロウが言う。

「俺だつて嫌だよ。10日も付き合えるか。」

「じゃあどうするんだよ？」

「ここに特別性のキメラの翼がある。行ける場所はリムルダールだ。」

「・・・いやもう驚くことにも慣れてきた。まあなんでもいい、まかせた。それは多分すごいことなんだろうが俺達には関係ない。」

「物分りが良くてよろしい。じゃあ跳ぶぞ。」

もちろん嘘だ。そんな器用なキメラの翼なんて無い。まあルーラ
を使ったための方便だ。

.....

リムルダールの基準石は砂州の外側にある。今は吊り上げ橋の外
に当たる場所だ。今俺達はここについた。三人がきよろきよろして
いる。

「本当に着いちまった。呆れたやつだ、もう何が来ても驚かねえ。」

「そりゃあ頼もしいな。今紹介状を書くから待ってる。」

懐からとりだした紙にペンを走らす。

『爺様へ、訳あってこいつらを預ける。番人でも兵士でもすきにこ
き使ってくれ。ケルテン』

俺は折りたたむとゲオルグに渡す。

「門番には俺の名前を言えばいい。多分大丈夫だ。」

「多分てなんだ。」

「それはお前ら次第だ。尊大に行けば入れてはくれないだろうし、
うまくやれば入れる。それくらいはできないと紹介する意味がない。
じゃあ俺は戻るぞ。あとは任せた。・・・ルーラ！」

取り残された三人。思わず顔を見合わせる。

「忙しいやつだな。」

「そうだな。」

「まあ任されたわけだ。うまくやるつぜ。」

晴れ晴れとした顔の男達が橋を渡っていった。

鍛冶屋一文字

6 / 4 勇者支援生活 35日目

あれから三日たった。アレフとマギーは毎日村の外にでて実戦訓練を行なっている。マギーは帰って来る度に疲れただの、足が痛いだの俺に文句を言う。アレフに聞くとそんなことは聞いていないらしい。俺の前だけか。まあそれはそれでかわいいとしておくか。

ガイラはあれから軽快した。彼の言う気が破傷風菌を倒したのが、氣とやらによつて抵抗力が上がったのか判らないが悪くなるよりは、ずつといい。ガイラは毎食前に例の構えで氣を廻らせる。今俺達の毎朝の鍛錬につきあっている。

「なあ、俺も型稽古していいか？」

「ああ、激しいのは駄目だぞ。ゆっくり体を慣らしていけ。」

「了解。」

そう言うのとガイラはゆっくりと太極拳みたいな型稽古を始めた。なぜみたいなのかと言うと正解を知らないからだ。まあゆっくりやっている踏み込みや突きを、そのまま早送りすればいつものガイラの動きである。横でアレフがじつと見ている。

「あんな鍛錬の方法があるんですね。」

「そうだね、ゆっくりに見えてあれで結構大変なんだ。なんだったらいつもジョルジョとやっている型稽古を同じ位ゆっくりやってこ

らん。ただし目の前にジルジョイがいるとして一つ一つの型を確かめながらやること。適当にやっては駄目、意味が無くなるから。」

「なるほど、やってみます。」

そう言つとアレフがゆっくり稽古を始めた。

「ねえ、何やってるの?」

マギーが起きだしてきた。怪訝な顔をしている。俺はただ微笑む。

「なんかふざけてるみたい。」

「まあそう見えるだろうね。正確な型をゆっくり確かめるながら体を動かす、そう言う鍛錬だ。別にふざけているわけじゃない。やってみると大変だよ。武人にしかわからないけどね。」

「ふん。」

「君なら、呪文の詠唱をゆっくりやる、もちろんMPの放出、マナの融合を意識しながらの詠唱ってところか?」

「それはそれで大変そうね。ちょっとやってみる。」

そう言つとマギーが何か真剣な顔をしている。そして手を動かして何かを俺に向かって打ち出した。

「あの・・・俺を的にするの止めてくれない?」

「いいじゃない、どうせ出さないし。でもこれいいわね、おそろい

「思つてやるわ。」

そう言い放つと身振り手振りを加えて、魔法の型稽古を始めた。

魔法を使うのに身振り手振りは必ずしも必要ない。ただ目標に正確に当てる為に手を突き出したり、人によつてはマナの融合を意識して行なう為に身振りをしたりする。範囲魔法は範囲の指定に手でここからここまでとするし、単体魔法でも一点で目標を指定したりする。ちなみに上級呪文、ベギラゴン、マヒヤド、バギクロス、イオナズンなどの使用にはあまりに大きな力の為、両手を使用しなくてはいけない。

4人それぞれが自分の鍛錬を行なう。マイラの村には珍しい光景がここにあった。

ここ3日鍛冶小屋では地味な作業が続いている。一文字の親父はミスリルナツクルにやすりを当て少しずつ削る。少し削ったらガイラの手の型に合わせる。首を傾げてはまたやすりを持って削る。俺はそれとは別に残りのミスリルを熱し叩き続ける。用意してもらえなかったミスリル板は自分でやれと言われたからだ。叩きすぎで腕が痛い、音で耳が痛い。暑さで汗が止まらない。それでも手を止めない。

「なあ、そつちはどうだ？」

「ああ、まだかかるな。そろそろ当の本人に感触を確かめてほしい。」

「

「そうか、俺も腕の型を取りたい。昼からでも連れてくるよ。」

「そうしてくれ、こいつも待ってる。」

「また武器の声か……。じゃあ昼も近いから一度戻る。」

宿屋に歩いて戻る。ガイラが温泉の辺りでまた型稽古をしている。適度に体を動かすよう注意すべきだろうか？部屋に戻って椅子に座る。目を瞑って思考する……。もう少しでアレフもガイラも仕上がるな。やっと物語が進むな……

部屋の扉が開く音で目が覚める。どうも寝ていたようだ。時はそれほど経っていない。

「すまん。起こしたか？」

「いや、いい。体の調子はどうだ？」

「ああかなりいい。もう外に出たい気分だ。」

「駄目だ！あと三日は様子をみる。鍛錬もいいが程々にしろよ。」

「なんだ見ていたのか？人が悪いな」

「帰ってくるとき目に入ったただけだ。監視してるわけじゃない。」

「そうか、お前に土産がある。これを見てくれ。」

ガイラが懐から古ぼけた笛を取り出した。

「どこで見つけた？」

「ああ、温泉の近くで鍛錬していたら、一箇所踏んだ感触が変でな、掘ったら出てきた。結構古そうだし価値があるかなと思って持ってきた。」

「まあ金銭的な価値はないな。」

「なんだ、残念だな。」

「だがそれは妖精の笛、かつて大魔王に封じられた精霊ルビスを開放した笛だ。」

ガイラが呆れている。

「相変わらずお前は大事なことをさらっと言っな。」

「この笛は聖なる者を癒し、世に在らざるものを鎮める効果がある。まあアレフにでも渡しておくんだな。」

「そうする。こうちまちました物は性に合わん。」

「そうだろう、懐にいれたまま折れでもしたら困るしな。」

「そりゃそつだ。ガハハッ！」

それから二人で昼食をする。ガイラも普通に食事ができるようになった。アレフとマギーは昼は帰ってこない。まずい携帯食でも文句を言わないらしい。

ガイラを連れて鍛冶小屋に戻る。

「暑いな、ここは！」

「そうか、俺はいつもここにいるからな、もう慣れた。で体調はどうだ？」

「大分よくなった。もう大丈夫と思うがこいつが許してくれん。」

ガイラが俺を指差す。一文字の親父は笑う。

「それは言うことを聞いたほうがいい。こいつは怒ると怖いからな。」

「もうその辺にしとけ、用件だけ済ますぞ。ここは病人にはよくない。」

「ああそうだった。ちょっとこれを握ってくれ。」

ナツクルを差し出す。ガイラが握る。

「どうだ、違和感はないか？変にあたる場所があったら言ってくれ。」

「ああ、この辺が・・・」

「こっちはいいのか？・・・」

二人で話している。細かい所まで詰めている。俺は粘土を用意す

ることにした。腕の型をとるつもりだ。

「ガイラ、いいか？ここに左手を当ててくれ。」

ガイラが素直に腕を当てる。俺は型が取れるよう粘土をしっかり押し付ける。

「これどうするつもりだ？」

「籠手を作る。盾の替わりになる。右手も出せ。」

「こっちはいらぬ。あの武器を握ると邪魔になる。」

「そうか。なら他はいいか？まだ材料は余っている。」

「いらぬ。あまりつけると動きを阻害する。そっちの方が困る。」

「だ、そうだ。残りのミスリルはやるよ。好きに使おうといい。」

余ったミスリルは一文書の親父にくれてやることにした。これだけの武器を作ってくれるのだ、それなりの報酬はやりたい。多分お金は受け取ってくれない。刀の時もそうだった。秘伝書の解読とミスリルの加工法の確立、それが一番の報酬だといって1Gも受け取ってくれなかった。今回もそうなるくらいなら残りを渡した方がずっといい。

「いいのか？もらっちゃまって。」

「ああいい。もう使い道はない。」

「あの坊主のはどうする？」

「あいつはいい。あいつのは他にある。」

「そつが悪いな。ありがたくもらっておこつ。」

鍛冶屋一文字、最高の笑顔を浮かべた。

約束の試験

6 / 7 勇者支援生活 38日目

この三日間、毒の症状は出ていない。その当の本人は今俺の目の前ですごい勢いで一人乱舞をしている。

「よしっ全快だ。これでベッドともおさらばだ！」

「わかった、わかった。治ったと判断しよう。もう好きにしてい
」

「よっしゃー！アレフ！約束どおり勝負だ！」

「いいですよ。手加減しませんよ。」

アレフが快諾する。

「ちょっと待て、病気は治ったが体は鈍ってるぞ。半端な勝負すると怪我するぞ。」

「構わん、闘いに餓えてるんだ。やらせろよ、別に勝敗が目当てじゃねえ。」

「もういい、好きにしろよ。ただしアレフ魔法無しな！」

「了解です。」

アレフとガイラが5m開けて対峙する。アレフはすでに抜剣して

いる。

「よゝしはじめろぞ。できれば寸止めで終わらせてくれ。絶対殺すなよ！俺は大臣に叱られたくない。行くぞ。」

気合の入らない声で俺が言う。コインを投げる。高く舞い上がったコインが落ちた。

「せいやっ！」

ガイラが間合いを詰め、正拳を叩きつけた。まだ様子見のアレフの鉄の盾に直撃、アレフが2mほどスサーツと下がる。思わず右手を地についた。ガイラの追撃はない。

「よっしやあ！これだこれだ。この手ごたえ！」

ガイラが吼える。アレフが立ち上がり構えなおす。左腕を軽く振る。次の瞬間袈裟切り、ガイラが完全に見切つてスウェー、アレフの斬り返し、ガイラが仰け反つた勢いを利用してバク転で避ける。アレフが跳び下がり距離を取り納剣する。

「舐めすぎです。行きます！」

アレフが踏み込みながら抜きつつ。さっきと同じ様にガイラがスウェー、すかさずアレフの突き。同じ避け方はできない。ガイラが右に避ける。突きからの横薙ぎが入る。避けられないと悟ったガイラが左上腕で受け止める。鈍い音が響き渡る。二人が再び跳び下がつて距離をとる。アレフが剣を納める。

「これで互いに左腕が使えなくなりましたね。」

そう言いながらアレフが右手で盾の固定具を外す。外した盾は右手。

「そうか、最初の一撃で左手がいったか？」

「おい、もういいだろう。これ以上怪我を増やすな。」

俺は思わず声をかけた。いかげんにしろよ、誰が治すと思ってるんだ。

「そう言うなよ。まだ楽しませろよ。」

ガイラが俺の方を見て文句を垂れる。

「そうですよっ!と!」

アレフが右手の盾をガイラに軽く投げる。ガイラが思わず盾を受け止めてしまう。そこにアレフの居合い、狙いは脚。そこでアレフの剣が止まった。

「はい、それで終わり。ガイラももういいだろ。お前足腰が弱ってるぞ。」

「ああ、わかってる。しかし容赦無いな、避けるので精一杯だ。しかしまあアレフこれはひどいぞ。」

ガイラが鉄の盾をアレフに返しながら言う。文句を言っているわりには笑っている。

「勝負の最中に目を離す方が悪い。僕はそう習いました。」

「そうだな、お前の言う通りだ。これからよろしくな！」

「はい、こちらこそお願いします。」

俺はマギーと顔を見合わせる。マギーは呆れ顔だ。

「馬鹿が移るぞ。部屋に戻ろう。」

「いいの？怪我してるけど……。」

「ああっいいい！あれぐらいなら折れてない。アレフのベホイミで十分だ。」

俺はマギーの手を強引に引っ張って宿屋に戻る。

「あー腹立つ。今の体調では勝てないのを判っているくせに！」

「そんなものなの？剣のことはよく判らないわ。」

「あいつは二週間ずっと寝ていたただけだ。まともなステップも取れないから上半身だけで避けていた。」

「ふん。で、何に腹を立ててるの？」

「……何に腹立ててるのか？俺にもよくわからん。なるほど君は聡いな。」

そうか。アレフの成長、ガイラの体、二人の勝敗、将来の展望、

心配になることでいっぱいだ。なるほど俺はそれらをまとめた何かに心配して、腹を立てていたのか。マギーが微笑んでる。

「そうだ。聡いと言ったついでにマギー、君を褒めてやろうと思っ
ていたことがあるんだ。」

「何？褒められるようなことした？」

「君達は馬車でここマイラに来た。ルーラで来れるにも関わらず。」

「あのルーラを使ってはいけないと言ったのはケルテン、あなた。
ならあなたに会う為にそれは使っ
てはいけない。」

「そう俺が言ったことだ。だからそこまで考えてここまで来た覚悟
を褒めてる。」

「褒めるってのは頭をなでるとか、抱きしめるとか、褒美をくれる
とか行動で示すものよ。」

「そうだね。」

俺はマギーの頭をなで、抱きしめる。

「続きは城に帰ってからにしよう。扉の外で聞いている馬鹿がいる。」

扉の外から逃げる音が聞こえた。思わず噴出す。

「いつになったら城に帰れるのかしら？」

「そうだね・・・ガイラの武器ができるまであと二日といったこと」

るか。それまであの二人に付き合ってくれ。馬鹿二人を使いこなすのは大変だぞ。」

「いいわ。どんな馬鹿でも使いこなすのが筆頭魔術士。そうよね？」

「そうだ、城にはもっと馬鹿が多いからな。今のうちに慣れとくといいぞ。」

俺は笑う。マギーも強くなった。皆強くなった。もう俺一人強くなくていい。

旅立ち

6 / 10 勇者支援生活41日目

とうとうミスリルナツクルが完成した。握ったガイラが嬉しそうに素振りしている。さらに左手に籠手を装備させる。これはミスリル板をメイジドラキーの翼膜で包んで、一見革の籠手に見せている物である。実は俺が使っている革の籠手も同じものである。

「おい、ガイラ。一人喜んでないで聞け。その籠手は一応盾の替わりになる。この前のアレフの攻撃を受け止めたように使えばいい。ただ刃物など受け止めると表面が切れるから、必要に応じて修理すること。中身は絶対に見られるな。ミスリルナツクルも同じだ。一般的な品物じゃないんだぞ、気をつける。」

「ああわかった。なんにせよこれは普段は使う必要はないな。拳が効かない相手にだけ使用する。籠手はまあ状況次第だな。」

「本当にわかってているのかよ。ではこれからの予定だがアレフと一緒にリムルダールに行ってくれ。まず鋼の剣を買っといい。今もっている素材は俺が替わりに城に持っていく。貯金から購入できるよ。う連絡はしておく。」

「鋼の剣ですか？楽しみですね。」

「まだまだ、そのうち炎の剣、魔法の鎧、水鏡の盾は購入してもらおう。値引き後で9800G、7700G、14800Gだ。」

「うっ！そんなお金どうやって集めるのですか？」

アレフがあまりの高額に肩を落とす。

「大丈夫だ。もうガイラに必要な装備はない。これからの収入は全
てお前の装備に使えばいい。」

「勝手に言ってくれるねえ。まあいいけどな。」

思わずガイラが突っ込む。

「でも悪いですよ。僕が強くなればいいだけなのに。」

「駄目。手に入る装備を考慮して、お前は鍛えてある。大体鋼程度
では竜王どころかドラゴンにすら、傷がつくか怪しいな。」

「そっなんですか？」

「さあな、俺もドラゴンに会ったことは無い。でもやってみて駄目
だったじゃすまないだろう？」

「ガハハッ！違いねえ。王家の秘法とやらで生き返るかもしれない
がそれは嫌だな。」

ガイラが気楽に言う。アレフが嫌そうな顔をする。

「あのなあ……だれがそれを回収しに行くと思ってるんだ！」

俺一人でドラゴンと闘えと、魔物の巣窟へ忍び込めと……それ
無理。

「そうならないよう気をつけます。」

「そう心掛けてくれ。それにいずれロトの装備を手に入れることがあるかもな。」

「でたわ、またケルテンの予言ね。よかったねアレフ、ケルテンの予言は当たるわよ。」

マギーが横から口を挟む。マギー違うんだ。これは予言じゃない、予定だ。

「そうなんですか？でも頑張ります。」

「俺の予言とやらない。ガイラ、アレフ。ロトの石碑は読んだか？」

「ああー応読んだ。」

「僕もこの間読みました。」

「じゃあやるべきことは判っているな。」

ガイラとアレフが首を縦に振る。

「ならいい。これからロトの軌跡を辿ることになるだろう。頑張れ。」

「おう、任せろ。」

「はい、でもロトの遺跡で勇者様が男性の戦士、優しそうな女性、理知的な男性と一緒にいる夢をみたんですが単なる夢ですかね？」

「えらい具体的な夢だな。それで正解だ。ロトの勇者に付き従ったのはまず男の戦士、なんと近衛騎士団長どのが末裔にあたる。次に女性の僧侶、最後に男性の賢者だ。あとの二人の末裔は自分で探せ。」

「はあ、よくご存知ですね。驚いてくれると思ったんですが・・・」

「ああ昔調べた。ある意味驚いたな、俺の長年の調査は夢一つと等価か。お前さん、もしかしたら本当にロトの血を引きし者かもな。」

「冗談は止めてくださいよ。僕はそんな大層なものじゃありません。」

アレフが両手を大きく振って否定する。

「まっそんなの関係ないしな。大事なのは血より志、そうだろ？」

「だなっ！俺らはその志とやらの絆で結ばれている。たとえ離れていてもお前もいつしよに戦っている。」

「私は？」

「そうだった。嬢ちゃんもいつしよだったな。」

「ガイラ、嬢ちゃんなんて言ったら駄目ですよ。ケルテン師匠より怖いですよ。」

「そうだ。マギーを嬢ちゃんなんて言えるやつは城にもいないぞ。」

「そっか、気をつける。」

「おい話題が逸れとるぞ。それとアレフ、もう師匠はいい。名前で呼んでくれ。」

「えっ師匠は師匠ですよ。」

「駄目。ガイラにはガイラって呼ぶくせに、俺にだけ師匠とかつけるのもう無し。」

「わかりました。じゃあケルテンさん。」

「まあ、とりあえずそれでいい。じゃあアレフ、お前に俺の馬を貸すからそれでガイラと行け。俺はマギーと城に帰る。」

「わかりました。ではガイラ、行きましょう。」

「おう、俺の馬は速いぞ。遅れるなよ。」

「駄目です。僕が先行しますからついてきて下さい。」

二人が駆けていった。しばらく面倒をみる必要はないな。

「さあマギー、城に帰ろう。《俺はMPを・・・》」

マギーが人差し指で俺の口を押さえる。

「駄目、ルーラは私が使う。私の方がMPは多いのよ。」

「そうでした、お嬢様。では城に戻りましょう。」

そして一つの光がラダーム城に跳んだ。

急転

6 / 1 1 勇者支援生活 4 2 日目

国務大臣執務室に行こうと約2週間ぶりに城の2階に上がる。それはともかく様子がおかしい。文官側でそわそわ、ざわざわしている。さらに大臣の執務室の前に人だかりができているのだ。俺に話しかけてくるやつは少ないはずなのだが何人かに声をかけられた。

される質問は皆同じ「担当の勇者は大丈夫か？」ばかりだ。何か気持ちが悪いのであまいにしか答えは返さない。なんとか人だかりを割って執務室に入る。そこに顔色が青くなつたシュミットがいる。なにやら大臣と深刻に話をしているようだ。

「勇者支援官ケルテン戻りました。長期留守にして申し訳ありませんでした。」

「よい。ご苦労であつた。してそなたの担当の勇者はいかに？」

「はっ！勇者51は素行不良にて解任、勇者25、55共にリムルダールに向かいました。概ね順調です。」

「よろしい。この者の報告を受けていたのだがそなたも聞くがよい。もう一度説明せよ！」

「はっ！小官が担当する勇者12、41、42、43が昨晚から今朝にかけて消息を絶ちました。当人達の申告からリムルダール方面に向かつたはず。5日前のことです。光点も消滅しております。」

「と、いうことだ。そなた何か心当たりはないか？」

「そうですね・・・小官は昨日までマイラの村にいました。それまでに見かけたことはありません。」

「なるほど。ではシュミットよ、ケルテンと協力して探すがよい。そなたもよいな。」

それだけ言うと大臣は自分の席に戻るとベルを鳴らす。何人かの文官が入室し次々に書類を渡し始めた。

シュミットの青い顔はそのままだ。

「シュミットもそんな顔をするんですね？真っ青ですよ？」

「そうか？いや自分でも驚いている。他人のことでこんなに動揺するとはな。俺らしくもない。」

「飄々としていても意外に人情家ということですか・・・」

「なるほど、同行している間にねえ・・・よしならば早く探し出してすつきりしよう。」

そう言うと魔法の地図に目を移す。今見える光点は毒の沼地辺りに二つ。契約書を取り出して映像で確認する。

「間違いない、これは俺の担当のアレフとガイラだ。」

「しかしここからリムルダールに向かうと5日の距離はこの辺だな。」

「そういつて地図の海底洞窟を指差す。」

「そうですね。普通ここは南北の通路をまっすぐ使用するだけで、それなら一日もあれば通過できるはず。」

「何だ、通ったことがあるのか。俺もそうだがあまり実入りのよくないというか東側の入り組んだ所には行かないな。」

「ですよ。人為的に整備された本道と、東に広がる複雑な自然窟。」

「迷い込んだか？しかしこの辺りはそれほど強い魔物はいなかったはず。」

「そうですね。魔法使い、ゴースト、メーダ、おおさそりといったところですかね。」

「驚いた、よく知っているな。まあ土着のメーダ、おおさそりくらいしか知らなかった。」

アレフガルドには平和なところにもある程度魔物はいた。スライム類や野生の動物に近い魔物おおさそり、メーダ、キメラなどがそれにあたる。しかし魔王の復活によってそれらの魔物が瘴気により凶暴化、他に様々な魔王の手下が散らばった。さらにあの洞窟の最奥には王女がドラゴンに監禁されている。それに遭遇したか……。

「まあそれはね……いろいろと。しかし魔法の地図から光点が消えるとはどういうことでしょう？」

「そうだな、可能性としては肉体の消滅・・・食われたか、灰にされたか。なにせよ生存は絶望的か。やりきれないな。」

シュミットが頭をかるく横に振る、そして俯いて黙っている。かける言葉が浮かんでこない。しばらくの沈黙の後シュミットが提案する。

「しかし事の顛末を確かめなくてはならないな。ケルテン、一緒に行ってくれるか？」

「了解です。しかし時間がかかりますよ？馬では毒の沼地を渡れないし、手前で馬を乗り捨てるのも気が進まないですね。」

「ならば馬を回収できる者を同行させる。まず沼地の前まで馬で行く。俺達はそこから徒歩、同行者が馬を連れて帰る。俺達は調査の後ルーラで帰ればいい。」

「OK！それで行こう。では急ぎましょう。一時間後に兵舎の厩舎でいいですか？」

「わかった。では一時間後に！」

俺達は退室の挨拶も程ほどに走り出した。

.....

自室で出発の準備をしている。時間が無いので騎士見習いにも手伝わせる。馬の手配、野営用品、食料など用意する物が多い。それも昨日帰ってきたばかりだ。どうもこの部屋に縁が無いようだ。

さて緊急の課題がいくつかある。整理してみよう。

まず第一、王女の監禁場所とドラゴン。これは今から行かねばならないがどこまで調査しようか？仮定の話として王女がここで監禁されていることが公表されるのは事態の好転になるだろうか。いや駄目だな。今のところドラゴンを確実に倒せる手駒はない。軍隊を送るにしても秘密裏に送るのは無理、しかもあの狭い中では力を発揮できない。さらになんらかの方法で奪還に成功したとする・・・これも駄目だ。今は不完全ながらも戦局は膠着、所謂冷戦状態になっている。バランスがくずれたとき竜王はどうするだろうか？同族が殺された怒り、王女奪還の焦りで全面攻勢にでてるかもしれない。しばらく公表は控えたいな。

第二に血の契約書対策、俺、アレフ、ガイラ、そしてマギー。昨日ピロートークでなんとなく聞いてみたら、やはり文官も誓約書を提出していた。この4人分の対策が必要だな。方法はあるが準備には時間がかかる。先の問題も含め、時間稼ぎをしよう。

第三、時間稼ぎができたと仮定して、ロトの神器の收拾、雨雲の杖、太陽の石、虹の雫・・・まあこれは先の二つが解決してからでいいや。あとロトの装備も集めないといけないな。

そうこう思考していると準備が終わったようだ。どうも途中から見習いに全部やらせていたらしい。かわいそうなので10Gの駄賃をわたす。ついでにマギーに手紙を渡すよう頼む。現金なやつだ、快く引き受けてくれた。

海底洞窟

6 / 13 勇者支援生活44日目

目の前に毒の沼地が広がっている。正直気が進まない、竜王が現れるまで毒の沼地なんぞごく一部しかなかったし、無理に通る必要がなかったから入ったことない。しかしここから海底洞窟までここを通っていくしかないのである。

「薬草と毒消し草を絞った汁を布に染み込ませて、それで口を押さえるんだ。これで瘴気を吸う量がある程度軽減できる。」

「お前いろいろよく知っているな。その若さでその知識量、油断ならないな。」

「無駄口叩くと瘴気を吸い込むぞ。まあ俺も気に入っている他称だが伊達に“戦う考古学者”とは呼ばれていない。」

「なるほどねえ、いいあだ名だな。俺も女たらしとかすけこましよりそんなあだ名がいいな。」

「普段の行いが悪いからだ。そのあだ名をつけてくれた友人が教えてくれた方法だ。そいつは馬ですらここを通すぞ。」

「マジか！すげえな。俺にも紹介しろよ。」

「もう知っている。勇者25ことガイラだ。俺がつけてやったあだ名はサバイバルの達人。」

誰かが俺の体を揺すって名を呼んでいる。ああそつだ。ここは海底洞窟、もう5時間たったか？

「ああつ、もう時間か？」

「そつだ。外で星を見て確かめた。すまん、もう少し寝させてやりたかつたが……。」

「いやいい。見張りは変わる。寝てくれ。」

「了解。日が昇ったら起こしてくれ。」

シュミットが眠つた。周りを見渡す。永遠の闇が広がる、そんな気がする洞窟内だ。ここはまだ洞窟の入り口に近いからほんの少しの光が入ってくる。洞窟内では目立つため、今は明かりをつけていない。

暗闇に目を凝らす。少し離れた所に魔物の死骸、その傷口は焼ききつたようだ。炎の剣・・・雷神の剣のレプリカ、そう結論付けた。素材はミスリルではないが、内包させた魔力により抜剣時は常に灼熱化している。間違つて自傷する可能性が高いため、未熟な者は使用できない。つまりシュミットは強い。なるほど今のこの状況では明かりの確保もできてちょうどいいか。

どうせ目を凝らしても魔物の姿は見えない。なら立つたまま目を瞑り意識を広げる。何も考えていないが意識のある状態を保つ……無理だった。

仕方がないので暗闇の中でいつもの鍛錬をする。シュミットを起

こすのは悪いので少し離れて刀を振る。これが一番落ち着くな。結局俺の剣気によってかどうかは判らないが、魔物は現れなかった。日が昇るまでの時間が永遠に感じられた。

.....

俺達は暗闇の中進む。ここにいないはずの強敵を恐れて、レミーラの明かりを布で隠して光量を調節している。メーダやおおさそりは闇でもこちらを発見してくる。もっともこちらでもその気配が音だけでもはつきり判るからまだ楽だ。魔法使いが持っている明かりは先に見つけやすいので、こちらが闇に紛れて過ごすか、不意打ちで倒す。問題はゴーストだ、気配がほとんどなく壁をすり抜けて不意打ちをしてくる。不意打ちに対応するのは諦めて、不意打ちを受けてから二人で背を合わせこちらの隙をなくした。ゴースト自体はそれほど強くはない。

半日ほど進んだらどうか？時間の間隔はない。腹が減ってきたので携帯食を口に運ぶ。俺が小声で話題を振る。

「なあ、もしこの先にとんでもない敵がいたらどうする？」

「どの程度の強敵だ？」

「そうだな・・・例えばドラゴン、悪魔の騎士、ストーンマン、大魔道とかかな？」

「ドラゴンならすつ飛んで逃げるね。鎧の化け物や魔道士系は相手の数次第だ。そのストーンマンとやらは聞いていないな。」

「メルキドでゴーレムと激戦を繰り広げた魔物だ。まあゴーレムの

方が強かったから街は守られた。」

「それこそこんな所には入らないだろう。まあいずれにしろ相手にはしないな。」

「その通りだ。しかしやつらはなぜここにいるのだろう？」

言葉を選んで話す。

「それは判らん。考えても無駄だろう。もう行こうか。」

再び暗闇の中を進む。暗闇と静けさの中に違和感が現れた。耳を澄ます。俺は小さな声で囁く。

「おい、何か聞こえないか？」

「ああ聞こえる。獣の呼吸音だ、それもかなりでかい。」

「俺が偵察に行く。あんたの魔法の鎧よりは俺の革の鎧の方が静かだ。」

「いいのか？危険だぞ！」

「どつちにしろ、誰かが行かねばなるまい。もし俺が戻らなかったらリミットで帰って、強い魔物がいたと報告してくれ。できればしばらくここには誰も来させるな。いいな。」

「・・・わかった、お前の言う通りにしよう。俺が行くのは適任ではない。」

「戻らない基準だが、俺の悲鳴や断末魔が聞こえたら即逃げる。呼吸で1000回、それだけ数えて戻らなかった場合も同様だ。では行く。」

暗闇の中、頷いたような気配がした。俺は摺り足で少しずつ進む。100歩は歩いただろうか、幾つかの角を曲がった先に明かりが見える。一度戻る、シュミットが俺を迎える。

「どうだった？」

「もう少し先に明かりがあった。そこまで行こう。」

シュミットが左手の鋼の盾のベルトを閉めなおす。腰の炎の剣に右手を添えたまま進む。無言のまま先の場所についた。

「確かに明かりだな。待て！よく見る。あそこの床に焦げ跡がある。」

シュミットが指差す。目を凝らす・・・なにか転がっている。

「何かあるな、よし取ってくるぞ。さっきも言ったが何かあったら逃げる。」

もう明かりを気にしなくてもいい。足音を立てないようじりじりと摺り足で進む。転がっていたのは半分溶けた鉄の盾。手に取って戻る。シュミットと目があう、真剣な顔で俺が戻るのを見守っている。他人事みたいに可笑しい。

「とりあえずは戻ろう。最低でもこうできる魔物だ。」

「しかしまだ何を見てないぞ。」

「いや駄目だ。鉄の盾が溶けるような攻撃ができる敵だ。それだけ判るだけでも収穫だ。」

シュミットがしばらく黙る。顎に指を当てて何か考えている。

「わかった、戻ろう。この情報だけでも報告する。」

「ならリレミトを使う。俺が完全無詠唱で使う。いいな？」

「まかせろ。」

俺達はリレミトで外にでた。思わず深呼吸ををする。ここは毒の沼地、空気がまずい。あわててルーラを使う。城下町だ。やっと落ち着いて深呼吸ができた。座り込んで二人で顔をあわせて笑う。通りがかかる人々がおかしな顔をしている。生きていることを実感した。

異端者

国務大臣は俺達の目の前で難しい顔をしている。

机の上に半分溶けた鉄の盾がある。鉄の盾といっても全部が鉄でできているわけではない。そんな鉄の塊を作っても誰にも持てない。基本木の盾の表面に鉄の板を貼り付けた物だ。だからといって簡単に溶かせるものではない。

「これはどういうことだ。」

「見たままです。そういうことのできる敵がいたようです。」

「いたようだ？では見てはいないのか？」

目に見えて大臣の機嫌が悪くなる。そこにシュミットが口を挟んだ。

「見てはおりません。この事実の報告が大事と小官が判断しました。」

「そうか、ならばよい。大儀であった。」

大儀か、俺は一礼すると踵を返した。隣のシュミットも同じくそうしている。

.....

俺とシュミットはそのまま近衛騎士の控え室にいる。近衛隊長、サイモン、他大勢の騎士に囲まれている。先ほどの溶けた鉄の盾を見せている。

「発見場所は言えないが、このような物があった。」

俺がそう発言する。皆言葉を失っている。空気を読まないサイモンが言う。

「すげえな、どうやってたらこんな風になるんだ？」

「わからない。予測はついているが見てはいない。」

「その予測とやらを教える。」

「サイモン！少し言葉が過ぎるぞ。」

隊長が苛立つて叱る。だがその言葉に重々しかった空気が緩む。

「構いません。こいつの馬鹿はいつものことです。では説明します。これは火の息によるものでしょう。」

「馬鹿な！先の大戦でドラゴンが噴いた火の息でもこうはならなかった。」

「そつだ。そんな馬鹿げた話はない。」

「ありえないな。なんらかのトリックか欺瞞だ。」

ふむ。結論を知っていなければ信じられないだろうな。あの先には間違いなくドラゴンがいる。俺は知っている。ただこれは想像を超えている。

「ならそう考えてもらってもいい。だがもしあんたらがその火の息を受けたら、盾ごと黒こげだな。」

「ケルテン！それはよい。後で私から叱っておく。これを見せたのは備える、そう言いたいのだな？」

流石、伊達に隊長をやってはいないとみえる。俺は黙って頷く。

「わかった。どう備えるかは検討してみる。だがこれはどこで？」

「先も言いましたが教えることはできません。これはそのシュミット殿と決定したことです。」

「そうです。我々特務隊士の権限で口外も禁止させてもらいましょう。一般兵にまで漏れると士気に関わります。」

その言葉にその場に居合わせたうちの半分が不満そうな顔をする。内容ではなく命令されたことに対してだ。なるほど近衛騎士はエリート意識が強い。サイモンは涼しい顔をしている。

「とりあえず事実は伝えました。あとはお任せします。シュミット行きましょう。」

俺達は近衛控え室をでた。歩きながら話す。

「あんたも貴族の割には近衛に好かれてないな。」

「ああ、俺もあまり好きじゃない。あいつらは格式とか礼儀とかうるさい。さらに俺の剣技にもけちをつけてくる。」

「なるほど、そう言うことか。さっきあなたが命令したときの反感がひどかったので気になった。」

「よく見ているな。よく言われたよ、お前の攻撃は軽い。速さはあるがそれがどうした、そんなもの効かない。ってね。」

「馬鹿は放つとけ。あんたは強い、俺が保障する。」

「おまえに保障されてもなあ、いや感謝する。俺もおまえの強さは保障してやる。」

「褒められたと思っておこうか。」

俺達国務大臣特務隊士、この城では異端者。

一度部屋に戻って荷物を漁る。2つ同じの水晶のペンダントと取り出した。その足で図書館に行く。

「はいマギー。今戻ったよ。」

「おかえりなさい。怪我は無い？」

「ああ大丈夫だ。やばくなる前に逃げ帰ってきた。」

「逃げ帰る？珍しいわね。あなたらしくもない。」

怪訝そうな顔をする。

「俺は自信過剰の騎士とは違う。彼を知り己を知れば百戦危からず。つまり勝てない相手とは戦わない。」

「それいい言葉ね。ちょっとメモするから。もう一回言つて。」

「彼を知り己を知れば百戦危からず。」

「OK!書けたわ。それでどうしたの?私に会いに来ただけ?それでもいいけど。」

知識欲が満たされていい気分のマギーだ。

「この間の御褒美を持ってきた。これだ。」

俺が二つのペンダントを取り出す。一つを渡す。

「一つは俺の、もう一つは君の。これには必要な儀式がある。」

「儀式?何か意味あるの?」

「ああもちろんある。俺がいつまでも俺であるように、君が君でありますようにって意味だ。」

「何か深いわね。いいわ、やりましょう。」

俺がナイフを取り出し自分の指に小さな傷をつける。血を一滴、水晶に垂らす。水晶が真っ赤に染まる。なぜかその色は落ちない。ナイフをマギーに渡す。

「同じ様に。」

マギーが同じことをする。終わったたらホイミをかける。

「これでいい。身から放さないでくれ。俺も身から放さない。」

「ふうん。よくわからないけどそうするわ。せっかくの貰い物だもんね。」

マギーが首にペンダントをかける。真っ赤に染まった水晶が怪しく光った。

アレフとガイラ

6 / 15 リムルダール近郊。

「なあアレフ。お前なんで弱いがいこつより、死霊の騎士の方が楽に倒せる？」

「えっ！わかりますか。なんと言うか・・・その動きが読めるんですよ。死霊の騎士はヨルジヨと同じ動きをするので・・・ああヨルジユってのは一緒に訓練していた騎士見習いなんだけどね。」

「ほう、正規の訓練を受けた者とそうでない者の違いか？」

「そう、がいこつは素人っぽい感じで何をしてくるか予想できない。だけど死霊の騎士は型通りの動きをするので少しずらして避けたり、カウンターを合わせたりしやすい。魔物がなぜなんでしょうね？」

こいつ気づいたか？学者の仮説どおりじゃねえか。あの魔物が人間だとはとても教えられないな。俺はとぼける。

「さあな、俺にはわからん。帰ったら学者にでも聞けよ。」

「そうしましょう。では次あそこに見えるリカントにいけますか？。」

「OK、ついてこいよ！」

ガイラは愛馬ライに飛び乗り駆け出す。少し遅れてアレフが馬で駆ける。リカント達が蹴散らされた。

.....

日が落ち、焚き火を囲む。

「トヘロスを使いました。ある程度は安全だと思います。」

「OK、そこら辺に鳴子を仕掛けた。カモフラージュも十分だ。しかしお前さん、野営もなれたものだな。」

「つい2週間前に習いました。いや習ったと言っているのか？」

「なんだそれ？」

「師匠にですね。無理やりやられた・・・ですかね。急に馬にのってマイラへ行くぞって言われて、ついていいたらまあひどい目にあったんですよ。」

ガイラが笑いながら焚き火に薪を放る。

「驚きましたよ、食料がないと言われたときは本気で殺意が沸きました。」

「ふん、あいつらしいな。絶対わざとだ。」

「僕も後で気づきました。他にも互いに速さの違う馬を用意したのも、カエルを食べさせたのもみんなそう。」

「なるほど、俺に渡すまでに完成させた・・・そう言うことか。」

「まだ完成にはほど遠いですけどね。基本的にあの人教えてくれな
いんです。ただそこにヒントを置いておく。でも気づかないと捨て
られる怖さがあります。」

「そうか、お前は置いていかれるのが怖かったのか。いい師匠を持
つたな。」

「もちろんです。僕が選んだ師匠ですから。」

「あいつなあ、怒ると怖いんだよな。この前の病気の時な・・・俺
の言うことを聞いて病を治す気がないなら一人で死ねって言われた。
あれは効いたな、まじでへこんだ。」

「それわかります。いろいろ心当たりあります。」

「まあいいさ、今日はあいつの悪口でも言おう。」

それから夜中になるまで語り続けた。

.....

朝になる。日課の鍛錬をする。

「鋼の剣はどうだ？」

「あまり変わらないですね。基本ができていれば得物が変わっても
問題ないようです。」

「そうだな、俺のミスリルナックルも違和感はない。これなら多分いけるな。次ゴールドマンを見つけたら戦ってみよう。」

「そうですね、この前は銅の剣だったので止めましたが、もういいですよ。」

しばらく鍛錬を続ける。朝食を取る、まずい飯にも慣れた。

「なあお前聞いているか？昔、俺と学者で遺跡を探索していたこと。」

「なんとなくですが聞いてます。」

「あれなあ、地方の小集落を回ったんだがな、力仕事と護衛を頼まれたんだ。高報酬に釣られて依頼を受けた。あの頃は平和だったから若い学者の道楽に付きあつのも悪くはなかった。」

「へえ……それもいいですね。うらやましいな。」

「それがそうでもない。あいつ何か見つけるとこつちの話を聞かん。雨の祠のところ、半日地面に這いつくばっていたときは腹が立ってたまらんかった。ずっとやることもなく待っていただけだったからな。」

「半日ですか、何かありましたか？」

「昔ここには天に届かんばかりの塔があったと嬉しそうに言った。地面の岩や石の基盤を調べていたらしい。まあ本当かどうかは知らない。ただ、いろんな骨董品ができたから金にはなったがな。」

「はあ本当ですかね？」

「さあね？まあそんなわけで俺も受け売りながらロトの伝説には詳しい。しばらく力試しが済んだら南の聖なる祠、別名虹の祠へ行く。その後にでもさっきの雨の祠にも行く予定だ。」

「そこがロトの友の末裔のいる場所ですか？」

「そうだ。昔あいつと回ったことが役にたつとはな。じゃあ今日はの第一目標はゴールドマン、次にキメラだ。キメラは上位種もいるから戦い慣れてくれ。」

しばらく歩いてゴールドマンの足跡を発見した。重いゴールドマンの足跡だ、後をつけるのはむずかしくない。果たして・・・ゴールドマンを発見した。

「よし、俺が後ろに回って脚に一撃を入れる。5分ぐらい経ったら奴の気を逸らしてくれ。」

それだけ言うとガイラは離れた。気配を消して裏に回る。アレフはゆっくり数える。1、2、3・・・297、298、299。アレフがゴールドマンの前に飛び出す。

「ギラッ！」

火球がゴールドマンの顔面で弾けた。対してダメージは入っていない。ゴールドマンがアレフを敵として認めた。振り下ろされる大きな右腕、アレフはすでにそこにはいない。ゴールドマンが敵を探そうと体を起こした。次の瞬間ゴールドマンの右膝の裏にガイラの一撃、バランスを崩してゴールドマンがひっくり返る。

「アレフやれ！弱点は額だ。」

アレフが藪から飛び出す、仰向けになったゴールドマンの顔に飛び乗り、額の刻印に鋼の剣を叩き付けた。ゴールドマンは糸が切れた操り人形のようにいきなり動きを止めた。

「やったな。ナイスだ。」

「いえ、転んでなければできませんでした。」

ガイラが自分の攻撃の跡をみる。そこにはミスリルナックルの跡がはつきり残っている。

「改めて思うがこれはすごいな。武器のおかげだな。」

「武器を使いこなすのも強さのうちだそうですね。」

「違いねえ。しかし学者の言ってた弱点・・・本当にあるとはな。見る！」

ガイラがゴールドマンの額を指さす。そこには読めない文字で何かが書いてあった。そのど真ん中に大きな傷が入っている。

「これが弱点？」

「ああ、金塊を安全に運ぶために作られた金のゴーレム、それを動かすための魔術儀式らしい。文字を消せば動きは止まる、そう聞かされた。学者の知識に感謝だな。」

「じゃあこれ本当に金なんですか？持ち帰ればゴールドになります

ね。」

「ああリムルダールに持ち帰って売ろう。それでお前の魔法の鎧が買える。」

二人でなるべく細かく解体する、できるだけ馬に載せる。さあリムルダールに戻ろう。金で重いはずのその足取りは軽かった。

暗雲

6 / 15 勇者支援生活46日目

現在活動している勇者が2名しかいなくなったことを憂慮して、
国務大臣から命令が下った。地方で勇者に相応しき者をスカウトせよとの事である。それについて今シュミットと食堂でぼやいている。

「シュミット、無理だ。」

「そうは言っても探すしかないだろう。俺が知っている限り城下街、
ガライ、マイラはすでに余地はない。お前はどうか？」

「リムルダールは俺の故郷だが俺以上の腕利きは少ない。街の守備
隊長は俺より剣技は上だが魔法はからつきし、なにより街の守備隊
長を引っこ抜くわけにはいかない。魔法の使い手の心当たりもない
ことはないが年齢の問題で推薦できない。」

「となるとメルキドか・・・メルキドが攻められた時向こうから脱
出してきた者がいるが、キメラの翼を使って逃げてきた者でなんの
役にも立たん。」

思わず二人してため息をつく。

「いずれにせよ誰かが行かねばならん・・・か。」

「俺が行く。ケルテン、お前は残れ。お前はお前の勇者の面倒を見
るべきだ。」

「だが、それではあんたがっ！」

なぜかシュミットが笑っている。荒げた声が続かない。

「何を言うか、俺はメルキドの女に顔を見せに行くだけだ。ついでにめばしい人材がいるといいな。」

ルーラで送るべきか？失うには惜しい・・・どうする？思考が絡みつく。そんな俺に気づいたのかシュミットがさらに笑う。

「はははっ、聖水と薬草を買い込んで行くさ。玉砕する趣味はないし、やばくなったらルーラでもキメラの翼でも使って逃げてくるさ。」

「そうか、そうすればまだマシだ。だがどうやってメルキドに入る。守護するゴーレムが無差別に攻撃するようになっていっていると聞く。」

「噂には聞いている。まあ壁をよじ登るなり裏口から入るなりするぞ。」

わざとらしくぶざけてみせる。それがわかるだけに止めることができない。

「・・・なら途中までも送らせてもらおう。ドムドローラまでとは行かないがせめてその手前くらいまでなら・・・。」

「そうだな。そこから先は不眠不休に近くなるからな。それまでは楽させてもらおうか。」

「ああ、野営でも寝ずの番でも務めさせてもらおうよ。」

それが欺瞞なのは自分が一番知っている。それでもこの男にできることはしてやりたい。

.....

俺達は各自馬に乗っている。更にもう一頭の馬を連れて駆ける。3頭ともかなりいい馬を無理言って借りてきた。一日目は少し遠回りになるが安全にキャンプできるロトの遺跡で寝る。

「明日は岩山の洞窟の手前位まで行こう。明後日にはドムドーラ付近まで行けると思う。」

「無茶言つねえ。いやこのメルキド行き自体が無茶か。」

「そうだ。この馬は普通の馬より倍は速く走れる。更に持久力もある。明後日からはこっちの替え馬を使えば少しでも早く走れるだろう。」

「そこまで考えていたか。荷馬にしては速いと思っていたところだ。」

「ふん、今日はもう寝る。明日以降まともに寝れる保障はないぞ。」

「そうだな。お前さんがいる間は全部任せる。」

それだけ言つとシュミットが眠る。俺も寝るとしよう。明日明後日は不寝番は俺がやらねばなるまい。

それからさらに二日、予定どおりドムドーラへの橋を越えた。夜は俺が不寝番をし、空が明ける頃から少し仮眠をとった。馬の休憩で停止した時も仮眠をとった。眠さで限界だがシュミットを笑顔で送る。

「では行ってくる。速ければ一週間で戻る。」

「任務なんぞ捨てていいから無事に戻って来い。あんたの死体を向かえに行くのは簡便してくれ。」

「心得た。俺はそんなに任務に真面目じゃない。じゃあな。」

シュミットが駆けていく。その姿が見えなくなるまで見守った。俺は何気に馬を引いて橋を戻る。さあ城に戻ろう。ルーラを詠唱する・・・なぜか発動しない。しまったマホトーンか！周りを見渡す。橋を渡った先に2体、後ろに2体の鎧の騎士が現れた。さらに橋の下に漆黒の鎧の騎士。

挟まれたか。まずいな、いつもの自己強化魔法も使えない。どうする？ここは逃げるべきだ。馬に飛び乗り、もう一匹の馬に鞭を強く当てる。尻をぶたれた馬が暴走する。前方の鎧の騎士が割れた、俺の馬もその間に向けて駆けさせる。馬体を強引にぶち当てて通り抜けた。しばらく駆けさせて距離をとる。懐を漁ってキメラの翼を天に投げた。護身用の一つ持っておけ、これはアレフに俺が言った言葉だ。

橋の上にいた鎧の騎士が姿を消す。漆黒の鎧の騎士がゆっくり上に上がってくる。兜の上には血のように真っ赤な房。

「くっくっくっくっ！やはり思ったとおりだ。あやつめ、慌てふためいておった。俺が知っているあいつはこれぐらいの敵は蹴散らせるはずだが、魔法を封じただけでこれだ。逃がしたのは惜しかったがな、だが次は勝てるぞっ！ああっはっはっは……」

誰もいなくなつた橋に男の笑い声が響き渡つた。

深刻な申告

ラダトームの入り口、馬ごと戻ってきた。落馬と見間違わんばかりに馬から降りる。衛兵が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・ああ大丈夫だ。すまなが馬は返しておいてくれ。俺も落ち着いたら・・・か・・・え・・・る・・・zzz」

はっ！意識が覚醒した。見慣れた部屋、俺の部屋か。俺の額には冷たいかたく絞った布。ベッドのすぐそばにはマギー、椅子に座ったまま寝ている。額の布をとり上半身を起こした。

「マギー、そんなところで寝ると風邪ひくぞ。」

マギーの顔に手を当てる。

「う、うん。何・・・ああ、ケルテン起きたのね、よかった。」

マギーが目を覚ます。あまり慌てた様子はない。

「ああ、また心配かけた、すまない。」

「そんなに心配はしてないわ。ただの睡眠不足、疲労でちょっと熱があっただくらい。」

「そうか、ずいぶん冷静な判断だ。で、俺はどれくらい寝ていた？」

マギーが立ち上がって窓へ歩き、カーテンを明ける。朝日が眩しい。

「そうね、まる一日にはちょっと足りないくらいね、ずいぶん寝坊なこと。それとあなたの無茶には慣れたわ。」

ベッドから降りる、少し体が硬い。ストレッチをして体を解しながら声をかける。

「それほど無茶するつもりはなかったんだけどな。最後に一つ誤算があった。」

「誤算？」

「ああ、シュミットをドムドーラ近郊まで送った帰りに魔物に襲われた。それも俺を狙っていたような気がする。」

「そんなこと判るの？」

「ああ、不意打ちで魔法を封じられた。橋の上で鎧の騎士2体ずつ両端から挟み撃ち、さらに橋の下でそれを指揮している奴がいた。漆黒の鎧に真っ赤な兜飾りの鎧の騎士・・・話に聞く悪魔の騎士とは違う。」

「よくそんな危機を逃れられたものね。」

「そうだな。連れていた馬を一頭突っ込ませた。暴走した馬で割れ

た隙間を強引に抜けた、後はカメラの翼。置いてきた馬にはかわいそうなことをした。」

「そう……でもよくそんな瞬間的に判断できたわね。」

「戦う気がなかったからね。すぐに逃げることしか思いつかなかった……それが幸いしたか、多分下手に抗おうとしたら命はなかった。」

マギーが俺に近づいて抱きつく。

「私を置いて死ぬなんて許さない。どうせ死ぬならあなたの全てを私に渡してからにして、それまでは死んでも死なせない。」

「なんだ、やつぱり心配してたんだ。なんか理不尽だけど俺も死にたくないから努力する。それでいいか？」

「……………」

返事は無い。より強い抱擁、俺も強く抱きしめる。

……………

国務大臣に報告するため、国務大臣執務室にいる。

「シュミットをメルキドに向かわせております。現在位置を確認したのでシュミットの誓約書をお貸し下さい。」

「そうか、何時に結果がでるか？」

大臣が抽斗をあけ、シュミットの誓約書を差し出す。相変わらず
嚴重だ。

「そうですね、最速で一週間といったところでしょうか。」

俺は魔法の地図を起動させる。シュミットのマーカーはドムドー
ラ南、動きはない。水晶球の映像で確認する。どこか薄暗い所で寝
ている、休憩中か。

「無事を確認しました。必ず戻ってきます。」

「ふむ、だがそれだけでは困るのだから。」

頭に血が昇る。まるで個々の生命には興味が無いかのようだ。心
を静める。こいつに何かを期待したのが間違いだ。

「そうですね、なんらかの結果を持ち帰ってください。それともう
一つ報告したい事が！」

「なんだね？わざわざ報告せねばならぬことか。」

「昨日襲われた魔物に、見たことの無い魔物がいました。」

「そうか、そのような瑣末なことは現場である近衛と相談するがよ
い。」

「はっ！申し訳ありません。では近衛隊長に報告します。これは返
却致します。では失礼します。」

俺は不機嫌を隠さず、退室の挨拶をする。踵を反して退室、特に反応はない。

.....

「新種の魔物だと言うのか？」

近衛隊長が難しい顔で問いかける。

「そうです。通常鎧の魔物は青い“鎧の騎士”、漆黒の“悪魔の騎士”、そして真紅の“死神の騎士”がいるとされています。先の大戦で報告されたとおりです。」

「そうだな、名前は仮にこちらでつけたものだが、その認識である。」

「私が襲われた魔物は漆黒の鎧に真紅の兜飾り、つまりパーソナルマークを持つ個体です。4体の鎧の騎士を連れていました。」

「それが本当なら由々しきことだな。」

ここは前に俺が考察したことを伝えておくべきだ。俺はより深刻な顔で問いかける。

「これは仮説ですが・・・それもかなり不愉快な仮説になります。よろしいでしょうか？」

「聞こう。」

「ありがとうございます。がいこつ系、鎧系の魔物についてですが、強さに個体差があるのはご存知ですか？」

「ああ、ある程度は把握している。それが何か？」

「下位のがいこつや鎧の騎士に顕著に現れる現象があります。妙に素人っぽい動きをする固体と一応の戦闘訓練を受けた固体、そう急遽の募集兵のような動きです。これが悪魔の騎士、死霊などになると正統な剣術を使用してきます。」

「なるほどよく観察したものだな。それでそれが何か？」

「ここからが不愉快な仮説です。奴らは元々アレフガルドにいた魔物ではありません。魔王の瘴気によって作られた魔物、その材料が死した人の魂かと。」

「なんとっ!！」

ここにきて近衛隊長の顔が青ざめる。

「使用する魂の弱いものには下位種、それなりの強さを持つものは中位種、十分な強さをもつものには上位の体を与えたと仮定しました。これで大体説明がつかます。極端に言うると先の大戦で無くなった兵士、騎士が新たな魔物になっている可能性は高いかと。」

近衛隊長の顔は青を通り越して、真っ白だ。

「それが事実なら我らは死ねないと言うことだ。しかもこのことは公表できない。まさか僚友と戦わなければならぬとは……。」

「その通りです。この仮定を知っているのは勇者のガイラだけです。もしかしたらアレフも判ったかもしれませんが。とりあえずこれに関して隊長に預けます。」

「判った。俺の心の内に留めよう。」

「では失礼します。」

俺は城の中を歩く。話しかけてくる者は一人もいない。

夢想

6 / 20 勇者支援生活20日目

この二日間で勇者二人のレベルを査定した。ガイラLv15、アレフLv12といったところか。

少し低めに見積もる。魔法の鎧を買うには金が足りないはず。一度戻って換金してから再度リムルダールへ・・・かなり時間がかかるな。双方向のルーラが使えないとアレフガルドは広い。

大臣執務室でアレフ、ガイラの位置を確認する。昨日はリムルダールにいたな。聖なる祠には行ったかな。多分相手にされなかっただろう。俺の魔法の基本はあそこで調査、研究した。門前払いされても懲りずに毎日通ったものだ。シュミットはドムドーラ砂漠の南端・・・無事でいろよ。

さて自らの安全が確保されると実に退屈である、我ながら悪い性だ。図書館でも行って理知的でウィットにとんだ会話でもしよう。

「はーい、マギー！ やっと手が空いたよ。ここに来るのも久しぶりだ。」

「ここで一人放って置かれた私について何か言いたいことはなくて？」

「それはすまなかった。別に遊んでいたわけじゃないけど・・・OK！ では今日は更なる真実について話そう。」

ちゃかして誤魔化そうと思ったが睨まれたので、興味を引く話に

すりかえる。思惑どおりマギーの目の色が変わる。

「更なる真実とは何？」

「そうだね・・・勇者ロトの冒険について。なんてどう？」

「そうね。400年前招換され、悪の手から光を取り戻した勇者、その栄光を称えロトの称号が送られた。だがその後の消息を知る者はいない。そんな感じかしら。」

「その通り、だけどそれは作られた伝説だとしたら？」

「興味深いわね。いいわ！今日はそれで誤魔化されてあげる。」

「なんだ、そこまでバレバレか。いや誘導されたか・・・まあいいや、じゃあ資料を用意するから待っててね。」

ロトの部屋の開け、ロトの日記を取り出してきた。戻ると黒板に教卓、マギーの準備は抜かりない。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「じゃあ、始まりから話そう。まず精霊ルビスの恩恵の元、平和なアレフガルドがあった。そこに別の世界から大魔王ゾーマを名乗る者が現れた。大魔王ゾーマはルビスを封印し、アレフガルドを絶望の闇に落とした。ここまではいい？」

「詳しいことは伝わってないけど、そうなのね。」

「そうなんです。なぜか事實は闇の中、誰が消したか、時間の壁に消されたか？それで大魔王ゾーマは次にどうしたと思う？」

「そうね。大魔王・・・まだ口にするのは抵抗あるわね。大魔王はアレフガルドを征服して・・・それで終わりじゃないの？」

「答えは新たなる地を征服させた。ここアレフガルドの絶望だけでは満足しなかつたわけだ。それで次の目標になったのが勇者ロトのいた大地、単なる偶然か歴史の必然かは判らない。それで彼の世界を守りその後アレフガルドに現れた。」

「じゃあロトの勇者は召喚されたわけじゃない。自らこちらに来た。」

「その通り！この日記にある。彼の世界に派遣された魔王バラモスなる者を倒し、大駆逐するべく大魔王ゾーマの虎口に飛び込んだ。」

「じゃあなぜそれは伝わってないのかしら？」

「その事実を知られては嬉しくない者たちがいたから。」

「誰よ！そんなこと隠しても意味が無いじゃない。」

「ラダトーム王家。王家の力や軍隊、いかなるものを持ってしても手も足もでなかつた大魔王を倒してしまった。この事實は王家の威光に傷つけること甚だしい。そうだろ、その気になればロトの勇者は王家にとつてかわれた。」

「勇者ロトはそんなことしない。平和のために戦ってきたのに・・・」

「そうだ。だから名前だけの名誉を受け取って歴史から消えた。」

「自分の世界に帰ったのじゃなくて？」

「だとよかつたんだけどね・・・世界と世界の壁を開けていたのは大魔王ゾーマ、でもその大魔王を倒してしまつたら帰ることはできない。ちなみに勇者ロトの父親もここアレフガルドで亡くなっている。さらに元の世界の彼の実家には母親が残っている。この悲しみはだれにも判らない。」

マギーが涙ぐんでいる。勇者ロトの悲しみか、彼の母親の悲しみか・・・それが理解できない人でないことは俺にとって嬉しい。

「話を戻そう。名誉を与えられた勇者達は最初は大事にされただろう。だがそのうち嫉まれて城から離れた。・・・実は勇者は大魔王の断末魔の叫びを聞いている。」

「断末魔の叫び？」

「だが光ある限り闇もまたある……。わしには見えるのだ。再び何者かが闇から現れよう……。だがその時はお前は年老いて生きてはいまい。わははは……っ。こつ日記に記されている。」

「なんて禍々しい……。」

「だろっ！これがロトの予言の元になった。そして勇者は再び現れる魔王に対抗する為、三人の友に神器を託して歴史に消えた。」

「でも勇者の名の元、アレフガルドをまとめ、備えることもできた

はずよ。」

「その方法も無くも無い。だけど戦って平和を勝ち取った勇者にはそんなことはできなかった。一応アレフガルドはラダトーム王家によつて秩序があつた。一度壊した秩序は新たなる秩序を得るには時間がかかる。大魔王の予言は曖昧でいつになるか判らない。だから今ある秩序は壊せない。そういうことだね。」

「それが本当なら勇者ロトは報われないじゃない!」

マギーが激昂して立ち上がる。

「俺も報われなと思う。だけどこの日記にはそれに対する文句や愚痴は書いてない。ただ残してきた故郷の母や友の安否を気遣う記述は多々ある。」

「もしあなたの言ってることが本当なら、その日記は公表すべきよ。それこそ勇者ロトに報いるべき一番の方法よ!」

「それは駄目だね。勇者ロトに報いるならまず竜王を倒すことだ。彼が憂慮していたのはその一点だ。」

「でもそれじゃ納得できない。」

「そうだね。ロトの沈黙を利用して彼の死後、都合よく伝説を作り変えた。つまりこうだ。大魔王ゾーマに対抗する為、ラダトーム王家は異世界より勇者を召喚した。はたして勇者は大魔王を退治し、後の世の脅威に対抗する為この地に血を残した。どうだい、よくできたシナリオだろう。」

「だから公表すべきって言ってるじゃない。」

「でも証拠がない。」

「その日記じゃだめなの？」

俺は日記のページを開き、マギーに見せる。

「読める？読めないだろう。言語が違う。これは彼の故郷の言葉、魔法の詠唱に使われたラテン語が大きな世界に散らばり、さらに細分化された言語。これを解読するだけで膨大な時間がかかる。」

「でもあなたが読めるじゃない。」

「残念ながら俺はまだ公表する気はない。」

「まだ？」

「あいかわらす君は聡いな。そうだ、俺はまだと言った。竜王が倒されラダトーム王家に権威がなくなったら公表する。」

「また予言者ケルテンが現れたわ。」

納得したのかマギーが俺をからかう。

「そうだね。もう一つとんでもない秘密が隠されている。光の玉の真の持ち主について。」

「ラダトーム王家がロトから譲られたとされているわ。」

「そうなっているね。もしかしたら勇者から申し送りがあつたかもしれないがそれは闇に葬った。実は違う、大魔王の闇に対抗するため竜の女王から勇者に渡された。だがその後竜の女王は次の世代を生み生を終えた。その次の世代はなんと竜王。つまり彼は自身の持ち物を取り戻したにすぎない。」

「嘘っ！なぜ闇を従える者が・・・そんなことあるわけない。それはあなたの考察が間違っている。」

「かもしれない。でも大魔王の怨念、生まれた時より孤児になつた竜王の渴望、これらの化学反応が今の竜王を作った。そう考察している。」

「大胆な仮説ね。でも誰にも真実は判らない。」

「そうかい。実はその竜王に聞いてみたい。“あなたの主張は正しい。だが光あつた母と違い闇に落ちたあなたは元の光に戻りたいか？真なる姿を取り戻さないか？”てね！」

「やっぱりあなたは怖いわ。魔王たる竜王もあなたの掌の上みたい。」

「じゃあ今日の講義はここまで、絶対公表しちゃ駄目だよ、命に関わるから。」

「言っても信じてもらえないわ。頭がおかしくなつたと思われるかも。」

俺は思わず俺なりの希望を口にしてしまった。勇者が竜王を倒すエンディング。それは人間にとってほたただし。所謂Lawエンデ

イング。それ以外のエンディングは無いのだろうか？それを夢想している。

帰還

6 / 21 勇者支援生活52日目

いつも通り大臣執務室で光点を探る。シュミットは無事進行中、ガイラとアレフはラダトームに戻っている。・・・んっ？いつの間に戻った？俺は挨拶もそこそこに退室した。

換金所に走る。まずここに来るはず、そう思い走る。いたっ！冷静な体を装って話しかける。

「なんだ戻っていたのか。結構速かったな。」

「只今戻りました。ケルテンさん。」

「おう！学者、戻ったぞ。頼みがあってきた。」

よく見るとアレフのが魔法の鎧を着ている。よく金があったな？

「アレフ、その鎧どうした？手持ちの金では足りなかっただろう。・・・ああガイラが出したのか？お前甘やかしすぎだぞ。」

「残念、外れだ。俺の懐からは1Gも出していない。」

「じゃあ、どうやって？」

「ゴールドマンを倒しました。それから取れた金塊で購入しました。」

ゴールドマン、かつて金塊を安全に運ぶために作られた儀式魔法

金塊で人型を作り魔法の儀式で仮の命を与える。その一部が野生化したと言われる。大変レアな魔物で、倒した者は一生遊んで暮らせると、平和な時代には一部のトレジャーハンターが探していた。

「なるほどね、よく倒せたな。」

「お前の言った弱点を潰したら一発だった。流石学者だ。」

そういえばそんなこと教えたな。それでも額の魔術文字を消すのは簡単ではないはず。俺が不思議に首を傾げているとアレフが得意げに語る。

「僕が正面から気をひいて、後ろからガイラが転ばしました。そこからこれで一撃です。」

そう言って腰の鋼の剣を軽く抜いた。

「OK！よくやった、降参だ。君達のレベル評価を2ずつ上げておこつ。」

「そんなのはどうでもいい。俺が戻ってきたのは一つ相談があったからだ。」

「相談？俺にできることか？」

「そうだ、お前にしかできないことだ。聖なる祠の爺さんなんだが、学者、お前さん顔見知りだな？」

そういえば昔ガイラを連れて行ったことがあったな。

「顔見知りも何もあそこが俺の先生だ。最もあそこに入入りするの
に二週間毎日日参して許可を得た。」

「その爺さんだが勇者の証明無き物に貸す力はないと追い出された。
お前さんなら口利きしてもらえると申つて戻ってきた。」

「なるほどねー。それはちょっと違うんだ。」

「何がですか？勇者の証明と言われましてもこの城での認定しかあ
りませんよ。」

「そうだね。あの爺さん、つまり賢者の末裔の言いたいことは勇者
に託された神器の一つを渡すのにふさわしい力量があるかどうか。
そういうことだ。」

「でもお前さん、出入りしてたじゃないか？」

「それは目的が違う。俺の目的はあそこに残された賢者の書、つま
り知的好奇心を満たすことだ。その当時はロトの神器が必要ではな
かったし、俺ものすごくしつこかったから根負けした爺さんが入れ
てくれた。」

アレフとガイラがものすごく嫌そうな顔をする。

「それはそれはしつこそうだな。まあそれはいい。なら勇者の証明
はどうすればいい？」

「なんだ答えが欲しいのか？それこそが勇者の証明、とても教えら
れないな。」

ロトの印、本当の名は聖なる守り。大魔王討伐後ロトの勇者から精霊に託したお守り。いまはその精霊の祠は残っていない。

「よく判りました。僕達の力の証明とあらば自ら探します。それでいいですよね、ガイラ。」

「お前も真面目だな。OK、それで構わん。スポンサーの仰せだ。」

「スポンサーね、言িয়েて妙だ。でこれからどうする？」

「雨の祠に行く。お前さんが地面を這いつくばっていた場所をこいつに見せに行く。」

「なんだ、覚えていたのか。あそこにあったのはルビスの塔、大魔王に石にされたルビスが封じられた塔があった。あそこにはその基礎が残っていた。」

「なるほど、ガイラがつけた戦う考古学者というのも頷けます。」

アレフ、感心するところが違う。まあこの時代では信じられないのも仕方が無い。

「まあ行けばいいさ。それとは別だが一つ問題ができた。」

「問題？なにかあったのか？」

「ああ、もう一つの勇者のパーティーだが全滅、いや消滅した。場所は海底洞窟東の自然窟。今は絶対に行くな。まずはできる限りの戦力の充実、それを目指すべきだ。」

まさかドラゴンによって王女が監禁されているなんて言えない。そんなこと教えたらアレフなら“姫を助けるべきだ。” ガイラなら“ドラゴンか、今の俺ならやれる！”とか言いかねん。

「何がいるんだ。教えるよ、知っているのだろう？」

これだ。だから教えられない。

「同じ特務隊士のシュミットと現場近くまで行った。その魔物は見なかったが半分溶けた鉄の盾を見つけた。それだけでもどれほどの脅威があるか想像できるだろう。」

「鉄の盾をですか？それはすごい。どうやればそんなことになるのか、想像できません。」

「そうだ、アレフ。判っている危機には備えなくてはいけない。判つてくれるな、ガイラ。」

「判った、判った。具体的には？」

「メルキドで売っている水鏡の盾を手に入れる。伝説にあるロトの盾でも可だ。」

「買う方はメルキドにさえ入れれば買えるが、ゴーレムはどうする？」

「その答えはお前らの手の内にある。それも自分で調べる。勇者なんだから？」

「かあ〜！お前の師匠は意地悪だ。簡単には答えを教えてくださいね！。」

お前の言った通りだ。」

ガイラがお手上げと言わんばかりに手を挙げる。

「俺の知らないところで好き放題言われてるようだな。まあいいさ、ヒントはやる。地方に伝わる伝説には真実がある。」

それだけ伝えると俺はその場を後にする。ふと思いついて振り返る。

「ああそつだ。出かける前にマギーに挨拶しておけ。口には出さないが心配してるはず。じゃあ俺は調べることができたから行く。」

自分で言ったことだがロトの盾の所在について調べよう。このアレフガルドのいずこかに存在しているはず。

神の武具

6 / 2 2 勇者支援生活53日目

今朝アレフとガイラが雨の祠へ旅立った。マイラの村経由で集落を目指すそうだ。まああそこでも門前払いをくらうんだけどな。我ながら意地が悪いと思うが今は時間を稼ぎたい。万全を期すためにはまだ調べなくてはいけないことだらけだ。

とりあえずロトの日記から探ることにする。あの日記は外に出したくないから図書館からは持ち出さないことにしている。

「やあマギー、アレフ達は挨拶に来たか？」

「ええ来たわ。すぐに旅立つから顔を出したただけだって、あなたと同じで失礼な話よね。まあ元氣そうだったからいいけどね。」

うへっ！ 藪蛇だった。

「い・いや、その・・・なんだ・・・しばらくは城に居れると思うんだ。調べたいこともあるしね。」

「ふん・・・そうなんだ。何時まで居ることやら？」

「そっそうだ。次に出かけることがあったら一緒に行かないか？ まあ危険じゃなかったらだけど。」

「ケルテン、あなたの旅に危険じゃないことってあったかしら？」

・・・ありません。現状では危険じゃない場所を数える方が早いな。俺の沈黙を読んだのか、マジギーが笑う。

「ほら、何も言えないじゃない。もういいわ、なんでこんな人に惹かれたんだろっ？・・・で今日は何の用？」

なんか言葉の途中がよく聞こえなかったが、まあ怒りの矛先を避けることはできたらしい。

「ああ今日はロトの装備について調べようと思ってね。元々はラダトーム王家に伝わる3種の神器だ。」

「そうね。異世界より召喚した勇者にラダトーム王家から贈られた武器と言われているわ。今は所在不明だけど、それが何か？」

「見つけれれば強力な力になると思ってね。なんとか探してやりたい。」

「ふっん、それで手がかりでもあるの？」

ロトの鎧と剣はいずれ見つかるからいいとして、問題は盾だな。

「実はない。だからロトの日記からでもヒントを探そうと思ってね。」

それだけ言うと俺はロトの部屋の扉の前に行く。ここは以前と同じく荷物が置いてあるが動かしやすい様に台車の上においてある、カモフラージュは完璧だ。もしこれに気づいても鍵は開かないから秘密がばれることはない。ロトの日記を持ち出し図書館の開いた椅子に座る。

「マギー、ロトの装備の本当の名前を知っているか？」

「それは知らないわ。特に伝わってないから。」

「ならその由来も伝わってないな。」

「王家に伝わった3種の神器としか聞いていないわ。」

「じゃあ、今日はその話からだ。そこから何かヒントが出てくるかもしれない。神器、そう言われるのには理由がある。その名の通り神に捧げられた武具だ。」

「でもなんでそんな大層な物が王家にあるの？」

「それはまあ御伽噺や伝説のレベルの話になるがね。まず神々に愛されたある国があった。その国は神の御技によって繁栄した。だがその恩寵に溺れ、その技術で作られた武具で周辺の国を侵略した。この所業におこった神々はその技術を取り上げ、その国を滅ぼした。ここまではいい？」

「ええ、だから神々に恥じぬ行いをしましょうっていうよくある童話ね。それが何の関係あるの？」

「ああ大有りだ、神々の中でも穏健派に当たる神が全ての人を滅ぼすのはどうだろうか？ならば心清き者のみ助けようと提案した。まあ天罰推進派はそんなことをする気がなかったから、不可能な試練を与えることにした。それがオリハルコンの剣、ブルーメタルの鎧、ミスリルの盾の献上だ。どうだい、話は繋がっただろうか？」

「いいから続けて！」

「そう結論を急ぐなよ。この3つの金属の加工には神の技術が必須だがその技術はすでになくまさに不可能な試練だった。それでも力を合わせる事ができる人々によってそれは成された。影で穩健派の神の手助けはあつたけどね。」

「それで神に神器として献上して、それからどうなったの？」

「それでも天罰は行なわれた。しかしその力を合わせる事のできる心清き人々を別の世界に移住させることにした。それがアレフガルド、そしてその中心にいた人物がラダトーム王家の始祖だ。この時に神々から改めて3種の神器が下賜されたわけだ。」

「なんとも見てきたような嘘というか……。」

「嘘か本当かは自分で検証して下さい。それから時がたつてラダトームに王家として権威ができた頃、大魔王ゾーマが現れた。このとき大魔王によって神器が盗みだされた。さらにオリハルコンの剣は粉々に砕かれたんだけど、マイラの村に落ちてきた他の世界の住人により作り直され、鎧と盾は隠された場所から勇者が奪還した。」

「もしかしてそのマイラの住人って一文字さんの？」

「そう、ロトの勇者の世界のジパングにいた鍛冶職人が偶然ここに落ちてきた。まあそのジパングにも大魔王の手下の八岐の大蛇がいたから、世界が繋がっていたと考えていい。これは勇者の日記からも読み取れる。」

「また自分で検証しろと言いたそうね。」

「当然、教えられただけの知識だけじゃこの国一の賢者は名乗れないな。話を戻そう、ロトの勇者の足跡を辿ろう。アレフガルドに来た勇者はまずラダトームを訪れ、盗まれた神器の話聞いた。そしてこれを集めることにした。」

「当然ね。大魔王が恐れてわざわざ盗ませたぐらいだからすごい力があつたはずよ。」

「その通り。それで勇者はドムドーラの砂漠で粉々になったオリハルコンを集め、魔王の爪痕と言われる洞窟で盾を、ルビスの塔で鎧を回収した。剣はさつきも言った通りマイラで修復した。それらをもって大魔王ゾーマを倒した、というわけだ。」

「それで何かヒントはあつて?」

「それはこれから考えよう。現存している都市、町、村は当時とそれほど変わらない。ガライが集落から町になり、ドムドーラは滅ぼされたが一応現存している。」

「さつきの魔王の爪痕とかルビスの塔ってどこ?」

「ああ、魔王の爪痕は今ロトの遺跡、ルビスの塔は雨の集落に基礎だけが残っている。・・・あれ?魔王の爪痕には人口的な遺跡の地下部分に底無しの裂け目があつたはず。」

「今は地下2階の石造りよ。そんな底無しの裂け目なんて聞いたことないわ?」

「なるほど、調査する価値はあるな。」

「他には怪しいところはないの？」

「そうだな・・・海底洞窟はその当時繋がってなかった。必要に応じて工事がされ始めたのが当時だった。・・・あとはメルキドの南に精霊の祠。現存はしていない。岩山の洞窟は現存、ガライの墓は当時にはない。」

「当たり前よ、ガライが勇者ロトの伝説を広めたのよ。そんな人の墓が当時にあるわけない。」

「最もだ。だけど在ったかもしれない構造物を墓として利用もできるから、絶対無いとは言えない。」

「魔王の城にあるという考えはないの？」

「それこそお手上げだ。なんとかロトによって封印されている可能性を追おう。だとするとロトの遺跡か・・・近々行ってみるか。」

呟く様に口にする。マギーの目が輝いている。なにか企んでいる顔・・・。

「じゃあ私もついて行く。ロトの遺跡なら危険も少ないし、まさか学術的調査に王宮図書館司書官を連れて行かないなんてないわよね。」

「止めても無駄だよ・・・はあ、判ったよ。しかしやはり何か考えを整理するのに、誰かと会話するのは役に立つようだ。自分では当たり前で過ごしたことが、ふと質問として返ってくる。そこから新しく見えることもある。まあ相手の知的レベルにもよるが、マ

ギーはよい対話の相手になるな。」

「それ褒めてるの？馬鹿にしてるの？」

「いや、素直に褒めている。サイモンやガイラじゃ駄目だ、途中で面倒だと騒ぎ出す。アレフもいいけどちょっと素直すぎる。他の人は考えられないな。やっぱりマギーが一番いい。」

「じゃあもつと大事になさい。」

マギーが冗談めかして言う。大事にしているつもりなんだけどな。口には出さない、多分藪蛇だから。

しばらく他愛の無い会話をする。とりあえずやるべきことは決まった。新しい発見があるかもしれない、そう思うと心が躍る。

雨の祠

6 / 25

マイラの村から東、橋を渡った先の小集落。アレフが地面を鋼の剣で突付いている。

「本当ですね。ここの下は固いです。どう見てもただの草原ですけど。」

「ああ、学者がそう言っていた。ここ周りにある巨石は崩れた塔の石材だと・・・俺には風化した岩にしか見えんがね。」

「そうですね。でもここから・・・」

アレフが言葉の途中で走り出し、50mほど先で止まる。

「・・・ここまでずっと堅い石畳が埋まっています。やっぱり何かあったんですよ。」

「まあそうだろうが今は何も無い。俺にはそれだけでいい。過去の探求はあいつに任せる。」

ガイラがちよっとうんざりした顔をする。前に来たときはここで3時間待たされた。そんな苦い思いが蘇る。アレフが走って戻ってくる。この程度では息はきれない。

「じゃあ今やるべき探求を続けましょう。その集落ですよ、行きましょう。」

アレフが馬を引く。安堵の表情を浮かべたガイラも続いた。

.....

「ここが長のいる祠か、ずいぶんとボロいな。」

「そんなこと言っちゃ駄目ですよ。聞こえます。」

思わず愚痴ったガイラをアレフがたしなめる。その祠の地下から声が聞こえた。

「外で騒いでいるのはどちら様ですか。どうぞお入り下さい。ここはいかなる者も迎えます。」

「ほら、大丈夫じゃねえか、入ろうぜ。誰でもウエルカムだよ。」

ガイラが遠慮なく階段を下る。この祠の上部分は飾りで地下に人が入れる空間がある。二人が階段を降りると広い空間が現れた。中央の祭壇に年配の女性が立っている。

「ロトの勇者に連なる者ですね。近々ここに来られると神託がありました。」

「いついえっ！そんな大層な者ではありませんが、勇者とは呼ばれています。」

「俺もだ、血だのなんだの関係ない。だがここにはあの島に渡る為に必要なものがあるのだろう。それを受け取りにきた。」

「率直な方ですね。ですがお渡しすることはできません。」

「なんでだよっ！」

「止めてください。失礼です！」

ガイラが激高し一歩踏み出す。アレフが止める。

「そうですね。納得できないでしょうから説明しましょう。ここには雨雲の杖というロトの神器の一つがあります。これは唯一本しかない物で紛失したら替えがきくものではありません。」

「そんなことは判つてい「もうガイラは黙つてて！」

「ですから、あなたの方がこれを持つに相応しい力量があるか、確かめさせて頂きます。」

ガイラがさらに何かを言おうとして、アレフに睨まれる。

「それで何をすればよろしいでしょうか？」

「それも神託で聞いています。銀の豎琴をここにお持ち下さい。それはしかるべく場所に安置されていますが、残念ながらその場所は魔物に侵されています。それを回収してきて欲しいのです。」

「判りました。その銀の豎琴、必ずここにお持ちします。」

すると老婆は優しい笑顔を浮かべる。アレフは自らの記憶にその笑顔がある気がした。

「そうですね、私はロトの友。心優しき僧侶の末裔。ロトの願いを叶える為に代々雨雲の杖を受け継いできました。今私の代でそれが必要になったことは悲しきことなれど、これを渡せる栄誉は他に変えられない最高の栄誉だと思います。」

「おう！アレフ行こうぜ。やるべきことは判った。その銀の豎琴とやらもいつまでも魔物の元に置いてくわけにはいかんからな！」

ガイラがアレフに声をかける。さっきまでの不機嫌はすでにない。

「ガイラさん。あなたのその率直さは好感が持てます。ですが突っ走るだけがあなたの役割ではありません。どうかご自愛なさいますように。」

「わかった、わかったよ、婆さん、ありがとよっ！」

「ガイラっ！大変失礼しました。それでは行つてきます。」

二人が階段を駆け上がる。馬に飛び乗る、行くべき所は・・・？

「おい！アレフ。銀の豎琴ってどこにあるんだ？」

「さあ、ガライの町のガライの墓にでも安置されているのではないのでしょうか？」

「そっそうか。あんまりそっういふ芸術や伝説には興味ないんだ。」

「じゃあ、一度城に戻りましょう。」

「そっうだっ！もしかすると学者の野郎、こっうなることを判ってい

たかもな！」

「ありえそうですね。じゃあ戻ったら詰問しましょう。では呪文を使います。離れないで下さい……ルーラ！」

.....

勇者支援生活56日目

ロトの遺跡に行く前にシュミットの帰還を待たなくてはいけないことに気づいて3日。毎日マギーが何時になつたらロトの遺跡に行くの？と催促する。早く行きたいのは俺だ。……アレフたちも雨の祠に行つたきりまだ戻らない。今頃着いた頃だろうか？

昼食の後のまどろむ時間、まとまらない考えと愚痴を頭の中で反芻する。食堂の外で騒がしい音がする。だれか駆け込んできた。

「学者！お前知ってただろ！」

「何がだよっ！」

「雨の祠、普通には雨雲の杖は渡してくれませんでした。」

ああ……それね。もちろん知っていましたが。俺の沈黙を肯定と受け取ったガイラがさらに言う。

「ならそう言っとけ、二度手間だろうが。」

「そうは言われてもねえ、必要になる要求が前もって判るわけないでしょ。」

俺は澄ました顔で冷静に答える。馬鹿め！俺と論戦で勝てると思
うな。

「そうだけだよ。」

「だいたい聖なる祠でも同じ様な対応をされたはずです。予想の範
疇ではありませんか？」

「ガイラ、もういいでしょう。確かにそう言われると反す言葉もあ
りません。僕達の負けです。」

「ったく、この師弟は！じゃあこれには答えてくれるな？“銀の豎
琴はガイラの墓にある”これは間違っていないな。」

「その通り、はいといいえで答えられる質問は楽でいいな。魔法の
鍵は持っているな？」

「持っています。リムルダールで買いこんであります。でも使い捨
てなんですな、これ？」

「ああ、不完全な代物ですぐに壊れる。ロトの持っていた本物は永
久に使えたけどな！もしかしたら鍵屋の営業手段かもしれないな。」

まあそんなことはあるまい・・・単に技術が足りないのか、便利
すぎて困るのであえて品質をおとしてあるのか？予断ではあるが他
人の家に無断で入ったり鍵を開けるのはもちろん犯罪である。

「じゃあガイラの墓は結構大きい遺跡で強力な魔物が巣くっている
から気をつけるように。やばいと思ったらすぐに離脱しろ。リレミ

トの脱出点は町の中に登録しておけよ。」

脱出の魔法リレミト。これを使用するには予め脱出地点に魔術儀式でマーキングをしなくてはならない。手間ではあるが安全の確保には便利な魔法である。

「判りました。ではすぐにでます。」

「じゃあな、学者。」

二人が出て行く。小声が聞こえる。

(やっぱり知ってやがった、意地が悪いな。)

(そうみたいです。もしかしたらガライの墓のことも知ってたんじゃない?)

(きっとそうだ。やっぱり底意地が悪いな、お前の師匠。)

全部聞こえていますよ。しばらくは意地悪ってことでいいでしょう。

ロトの遺跡？

6 / 26 勇者支援生活57日目

シュミットがメルキドに到着したようだ。マーカーが動いていない。映像で確認する・・・ベッドで爆睡している、隣には心配そうに看病している女性。これ以上は見ないでおこう。

とりあえず心配材料がなくなったので任務と知的好奇心を満たすのと両立させるべく、ロトの遺跡へ行くことをマギーに告げる。一石二鳥、いや三鳥か、マギーのご機嫌伺いも兼ねているからな。

「マギー、やっと手が空いた。ロトの遺跡に行くぞ！準備はいいか？」

「何を今更、準備なんて3日前に済んでるわよ。今すぐにも発てるわ。」

「それはそれは申し訳ございませんでした。ではわたくしも準備を致しますので1時間後にそちらの屋敷に伺います。それでよろしいでしょうか？」

「何、その気持ち悪い言い方。別に怒ってないから・・・」

.....

一時間後、俺はマギーの屋敷に来た。旅装のマギー、隣に若い執事が立っている。

挨拶をして敷地内に入る。隣の執事が礼儀正しく声をかけてくる。

「ケルテン＝リムルダール殿、お嬢様をよろしく申し上げます。」

「お嬢様をお預かりします。安心してお待ち下さい。執事どの。」

「もう、シャッテンブルグったら余計なこと言わなくていいの！行くわよ、ケルテン！」

マギーが俺の腕も引つ張る。後ろで執事が丁寧な一礼、俺が軽く会釈。多分マギーには判らないだろう男同士の会話がいった。

「全く、私はもうヴィッセンブルン家の当主なんですけど、いつまでもお嬢様扱いは止めて欲しいわ！」

「さあね？俺は平民だし、貴族のしきたりやお約束は知らないな。さあ急ごう、馬を使ってもロトの洞窟まで1日はかかる。日が落ちるまでには辿り着きたい。それとも草原で野営したいかい？」

「そんなの嫌！できることならそんなことしたくないわ。」

「俺だつて嫌だよ。この間はそれで大変な目にあつたし、しばらくは遠慮願いたい。」

「じゃあ急ぎましょう。馬が苦手なんて言つてられないわ。」

「苦手ね、じゃあ俺が先行してペースを取る。馬に任せて無理に手綱は使わないように！」

「判ったわ、任せます。」

先日のアレフの時より十分な休憩と低ペースで、なんとか日没前に遺跡につくことができた。馬での移動では正直今までが一番疲れたかもしれない。遺跡に隣接する宿泊施設の厩舎に馬を繋ぐ、平和な時代にはここは巡礼する人相手の観光で賑わっていた。魔物があふれている現在は利用する者がいないため放置されている。

「とりあえず中に入ろう。この建物より中の方が安全だ。」

遺跡の階段を下りる。松明を取り出し先端にレミールをかける。隣でマギーが首を傾げる。

「わざわざ松明にレミールをかけるなんて、無駄じゃない？」

「ああ癖みたいなものでね、昔からこうしてる、レミールを使えなかった時のなごりだ。」

「ふ〜ん。」

「これでも結構実用的なんだ。火が必要なときもあるし、こうやって明かりを抑えることもできる。」

明かりの上に布を被せて光量を抑える。さらに松明を放り出す。

「あと魔物がでてきたらこうやって放り出すこともできる。手に直接かけるところはいかない。」

「ふ〜ん、いろいろと気を配っているのね。城については知ることのできないことね、それだけでも来た甲斐があるわね。」

何気にマギーがニヤリとする。気持ちは判らないでもない。

「今日は食事を取ったらすぐに寝ることにしよう。慣れない馬上で疲れただろう。」

「そうするわ、ケルテンもちゃんと寝るのよ。話に聞くところいう時無理してばかりだから。」

「心配しなくてもちゃんと寝ます。ここでは魔物はでないから頼まれても不寝番なんてしません。」

そして食事の後、光に布を被せ光量を落とす。毛布に包まって横になる。しばらくするとマギーの寝息が聞こえた。やっと俺も眠ることができる。

.....

朝になる。堅い床に慣れないマギーが体の痛みを訴える。

「体中が痛い。こんなのこの前の馬車以来だわ。」

「安全に寝れるだけまだマシだ。朝食をとったら、とりあえず口トの石碑まで行こう。道順は判っているからついてきてくれればいい。」

「道順覚えているの?」

「全然、ここは聖地として巡礼の人がよく来ていただろ、天井を見

てごらん。松明の煤の跡でいっぱい。壁にもマーキングでいっぱい。

「マギーが天井を仰ぎ見、壁のチョークの後を見る。

「なるほど確かにそのとおり、複雑な作りのわりには間抜けな話ね。」

「間抜けとは失礼だね。ここの作者の意図と違って、ある意味平和利用された結果だ。」

朝食後、歩きながら話す。しばらくして地下2階の階段を降りる。

「なんかつまらないわね。所々看板があったり緊張感のないところね。薄暗くて気味が悪いけどただそれだけ。」

「贅沢な悩みだな、この前の海底洞窟では闇の中魔物に見つからない様大変だったんだぜ。」

「ごめんなさい。無神経だったわ。」

「まあしなくてもいい苦労もあるさ。今頃アレフたちもガライのお墓で大変な目にあってるかな。」

しばらく無言で歩く。ここは無意味に遠回りさせられる。一番北側の直線路、あとは南へ道なりでロトの石碑に到着した。あまり大きくない墓石に文字が彫ってある。

「ここに来たことはある？」

「ないわね。この文面はお父様に教えてもらった通り。」

マギーが石碑の文字を指でなぞる。俺は石碑の周りを調べる。石碑の背面、土台と石碑の継ぎ目、床の石の隙間にナイフを突っ込んで外れる所はないかと試行錯誤する。

「なんか罰当たりね、墓泥棒みたい。」

「そう言っなよ。別に墓荒らしがしたいわけじゃないから・・・おつと、外れた。なんだ？何があるんだ？」

石版の後ろ側、床の一部が外れた。むき出しの土、ナイフで掘り進む。なにか堅い物に当たった。

「何っ？何があるの？」

俺はさらに掘りおこす、ぼろぼろの革に包まれた古ぼけた兜。長い間土の中にあっただせいか錆びて朽ちている。

「兜か、なぜこんな所に？」

「私に聞いても判らないわ。誰の持ち物なの？ロトの勇者の物かしら。」

「違うだろうね。ロトの鎧と光の鎧は、全てセットの装備で専用の兜もある。だとするとこれはオルテガの兜か。」

「オルテガ？」

「ああロトの勇者の父親だ。ロトの勇者の前に彼の国から魔王討伐

の為、派遣された勇者だ。勇者ロトはオルテガが消息不明になった為、次代の勇者として旅にでた。」

「なんかよく判らないわね。」

「オルテガは不幸な事故で、先にアレフガルドに落ちて戻れなくなっていたんだ。派遣した国では死んだと思われていたけどね。それでロトが次の勇者と手を挙げた。これでどう？」

「納得。それでどうなったの？」

「ああ、大魔王ゾーマの城の奥底、勇者ロトの目の前でゾーマ三将の一人キングヒドラと壮絶な相打ち、最後は息子の胸の中で亡くなった。」

「なんてこと！でも・・・最後に会えたのは救いになるのかな？」

「だとよかったんだけど残念ながら死にいくオルテガに、自分を抱く者が誰かは認識できなかった。最後に故郷アリアハンに残した妻と息子に遺言を残しただけだ。ロトの日記に記述があった。このページは文字が震え、涙で滲んでいた。」

「誰も救われない話ね。でも一番かわいそうなのは故郷に残されたオルテガの妻、夫と息子を平和に捧げてしまったことになるわね。」

「ああ女性らしいもつともな意見だ。アレフガルドの平和の為に犠牲になったものは過分に大きい。残されたロトの勇者の唯一の故郷への繋がり、遺品ともいえるこの兜と同じ墓で眠っている・・・か、だとしたらこれは返したほうがいいな。」

「そうね、私達には使い物にならない兜かも知れないけど、彼には大事な物。」

俺はその兜を元通りに埋め直す。腰の酒と少しのゴールドを捧げ、黙祷する。二人ともしばらく言葉も出ない。

ロトの遺跡？

「なんかしんみりしちゃったな。戻ろうか、戻りながら気になる所があつたら調べる。」

それから蝋燭を取り出し火をつけた。

「それどうするの、光はここにあるのに？」

「うん、もしなにかおかしな空気の流れがあつたら判るかもしれない。そう思って持ってきた。」

「いろんな方法があるのね。やっぱり面白いわね。」

「しばらく黙っててね、軽い息でも影響あるから。」

静かに歩く、炎が揺れたらその場所を探る、それを繰り返す。北側の長い回廊の同じ場所を3往復、3回とも揺れた。壁に炎を近づける、消えた！壁の隙間に手を当てるとわずかな風の流れを感じる。

「ここから風が入ってくる！この石を外そう。手元に明かりを！」

マギーが明かりで俺の手元を照らす。ナイフの刃を石と石の隙間に差し込む。隙間を埋める粘土を少しずつ掻き出し隙間を広げる。石が外す、暗闇しか見えない。さらに隣の石を外す。腕が入るぐらいいなつたら明かりを受け取り奥に突っ込む。照らされた広い空間。

「間違いない、ここが魔王の爪跡だ。もう少し広げて入れるようにするぞ。」

マギーが唾を飲み込む音が聞こえた。新たなる発見に緊張している。俺は嘔き出す汗も拭わず作業を続ける。外した石をマギーが作業の邪魔にならないよう運ぶ。しばらくして這って入れるぐらいの穴ができた。

俺が這って中に入る。マギーも入った。改めて明かりで空洞を照らす。そこには中央に飾られた盾、その奥には大きな亀裂がある。

「あつたわ！本当にあつたわ。あなたの仮定どおり、盾も亀裂も全部。あはははっ！すごいわ、大発見よ。」

大喜びするマギー。俺は盾に近づき埃を払う。白銀の盾、中央に鳥を模った独特の紋章。間違いないロトの盾、又の名を勇者の盾。しばらく見とれる、言葉も出ない。

「ねえ黙ってないで何か言いなさいよ。いつもみたいに蘊蓄を並べないの？」

「ああ、まさか見つかるとは思わなかったから呆然としていた。これは勇気の盾、ミスリルで作られた神の盾で間違いない。」

「そうね。じゃあアレフにでも渡す？」

「それが順当だな。持ち出すにはもうちょっと穴を大きくしないと無理だけど。」

マギーが亀裂を見下ろす。そこには完全な闇しか見えない。マギーが小石を手にとって落とす。

「ねえ、この亀裂すごいわ、石を落としても音が聞こえない。どこまで深いのかしら？」

「さあね？大魔王がいたときは全てを拒絶する亀裂だったらしい。今みたいに物を投げ入れると帰ってきたらしい。」

「なにそれ？なんか怖い。」

「大魔王の城に繋がっていて、ここから魔物が噴き出したとされている。」

「それが本当なら今も魔物がここからでてくる？」

「可能性としてはあるかも・・・でもこの遺跡には魔物がでないのは周知の事実。ということ。」

俺は振り向いてロトの盾に近づく。しばらく盾を撫で回す。さすが神器だ、ものすごい魔力を感じる。同じ様に台からも強い魔力。

「どうかしたの？」

「うん、もしかしたらこの盾がこの遺跡を護っていたかもしれない。この立掛ける台と合わせることでこの盾の神気を増幅し魔物を封印しているのかな？」

「ふん、大胆な仮説ね。でもそうだとしたら持ち出せないね。」

「そうだな、ならばしばらくはここに安置しておくか。竜王の城に渡る準備ができてからアレフに渡そう。」

「じゃあ、帰りましょう。ここは埃っぽいわ。今すぐにもお風呂に入りたい気分。」

マギーがふざけて帰りを促す。

「だけど、まだ穴を塞ぐ大仕事が残っている。」

「そうだったわね。誰か別の人に持っていかれるわけにはいかないわ。」

俺達はさつきと同じ様に穴から這い出した。積んである石を元通り壁に戻す。水筒を取り出し、掻き出した粘土に水を含ませて隙間を埋める。

「こんなもんかな？」

「ちょっと濡れて変ね。それとここだけ埃が取れて違和感があるわ。」

周りの壁と較べる。たしかにここだけ綺麗になっているな。懐から武具の手入れ用の布を取り出し壁全体を拭く。さらに埃だらけのマントを壁に叩きつけ、埃を擦り付ける。

「まあこんなところかな。どう、マギー？」

マギーが壁を見る。少し離れて見る、歩きながら自然に見る、近づいて明かりで照らす。

「こつ明かりで直接照らすとわかるけど、まあ普通に歩いてたら気づかないかもね。私じゃどうしてもそこにあるって知ってるから判

るだけかな。」

「そうだといいな。今できることはここまでだ。道具が足りない。」

「でも色々持っているのね。それと使いこなしているし、改めて尊敬しちゃうわ。」

「そうか？俺の異名を聞いているだろう。戦う考古学者、俺の本業は考古学者。こんな作業をしているときが一番じっくり来る。平和になったら再開するかな。」

「それもいいわね。じゃあ、さっさと平和にしちゃいなさい。私も楽しみだわ。」

「えっ！君もついて来るつも「まさか駄目って言わないわよね！こんな面白いこと一人でやるなんて許せない。」

「いや、その駄目とか言わないけど・・・じゃあ野営とか馬とか粗食に慣れてね。あれもこれもできないなんて聞かないから。」

「あっそう！よく判ったわ。足手まといにならないようにすればいいのね。」

「まあそうですね、お嬢様。何事も鍛錬あるのみです。」

「じゃあ、帰りを見ていなさい。私が馬で先行して帰るから。」

あのルーラで帰れますけど・・・そう言い返すことのできない雰囲気だ。それから拙い手綱さばきながら城まで帰ることはできた。俺の馬にベホマをかけていたのは秘密だ。

到着後ヴィッセンブルン家で丁寧なおもてなしを受けた。翌日はヴィッセンブルン家から出仕しました。

ガイラの墓

6 / 27

「おい！アレフ、ここさつきも通ってないか？」

「違いますよ。同じ様な階段ですけど違います。」

アレフは自作の地図に印を書き込みながら返事をする。ガイラが覗き込む。

「これ合ってるのか？大体今どっちを向いているかも判らん。」

「ガイラは屋外ではいいですけど、迷宮の中は駄目みたいです。いや、安心しました。僕足を引つ張ってばかりかと思ってました。」

「別に足手まといなんかじゃねえ、まだ未熟なだけだ。それにお前さんの強さはバランスのいい強さだ。それは誇っていい。」

「それ言い換えると器用貧乏なんですよね。」

アレフが少し落ち込む。ガイラがその背を思いつきり叩く。

「ちょっと違うな。器用貧乏は平均的な能力だ。お前さんののは平均より高い水準のバランスだ。つまりん事言ってるのと師匠に恥かかすぞ。」

「痛いですよ、ガイラの一撃は鎧の上からでも衝撃がすごいんです。僕は近くにエキスパートばかりいますから、自信が持てないです。」

「そうか・・・なら学者には聞いていた評価を教えてやるよ。いいかアレフ、学者、俺、マギーの4人だ。上から順にちから、すばやさ、かしこさ、体力（HP）魔力（MP）、評価基準はA、F、Aが最高、Fは0だ。」

ガイラはそう言うとアレフから一枚紙を取り上げて書き込む。

アレフ	A -	B	B -	B +	C +
ケルテン	C	A	A	C +	B -
ガイラ	A	B +	C	A -	F
マギー	D	C	A -	C -	A

「つと、まあこんな感じだ。ある程度できると判断できるのがCだ。力とすばやさはC+あれば一般兵と同等の能力と考えていい。かしこさは魔法を覚えるならCあれば問題ないらしい。現にお前さんもベギラマは使えるだろう？その他にも判断力や知識量にも影響あるらしい。体力と魔力に関しては限界を判断する基準でしかない。実際に確かめることができないからだそうだ。」

「まあそうでしょうね、限界超えたら死にますから。しかしこの分析と評価基準はすごいことですよね。」

「ああ、流石は学者、賢さAは伊達じゃないな。俺は覚えるだけで限界だ。俺ができる判断は俺よりちからの強いやつは今までに会ったことがない。すばやさにも自信があったが学者の方が速い。そんなところだ。」

「僕はどちらにもガイラに勝てませんね。しかしまあマギーさんは完全に魔法特化ですね。賢さA-と師匠に次ぐ高さがあります。しか

も魔力はA、すごいな。僕はどれでも一番ではないですが、著しく劣る能力はないのが取り得ですか。」

「そうだな。だがそれだけではない。例えば、俺には重大な欠点がある。」

「そんなのありましたか？」

「ああ、金属に触れているとかぶれるんだ。金属アレルギーとかいっつたな。これのせいで剣の修行もできなかつたし、鎧も着れない。」

「そうでした。その戦闘スタイルが板につきすぎて、すっかり忘れていました。」

「残念だとは思っていたが今はそうじゃねえ、俺にはこれがある。」

そう言うとミスリルナツクルをつけた右手を振る。

「これで俺の戦闘スタイルは完成した。学者には感謝してる、本人には言わないがな。だからお前さんも自分のスタイルを見つけれ。武器でもなんでもいい。それができたら一人前だ。」

「そう出来る様、心がけます。さあ休憩は終わりです。今日中に1、2階の地図は埋めますよ。」

そう言うとアレフは地図に書き込みがない方に歩き出した。ガイラがついて行く。

「なあ、別に全部埋めなくてもいいだろう。目的地につけばいいんだ。」

す。」

「そうだな・・・ってここ完全に行き止まりじゃねえか。意味あるのか、この作りは？」

「僕に文句を言わないで下さいよ。じゃあ戻って別の階段で降ります。」

「次はどっちだ。右か左か？」

「迷宮内で右とか左とか止めてください。とりあえず南に向かいましょう。こっちです。」

再びアレフが先に歩く。地図で場所が確認取れている所ではその方が効率がいい。

「そうはいうがな。ぐるぐる回っているとよく判らなくなる。ここには日も星もない。」

そうこ言っていると別の下への階段に辿り着いた。

「次こそ当たりだといいですね。」

「どうせ、全部廻るのだから？ だったら当たりとか関係ないな。さて降りたら北と南に道があるぞ。どうする？」

「そうですね。ガイラに任せると大変な事になりますから、とりあえず右手をこっちの壁につけて下さい。」

言われた通りガイラが壁に手を当てる。

「じゃあそのまま、手は離さないで前に歩いて下さい。これ僕は感覚でやってました。」

「ふうん、適当に歩いてたんじゃないのか？」

「そんな訳ないです。まあ師匠に教えてもらいました。」

「また学者か、アレフ、本当にいい師匠を選んだな・・・おっ行き止まりだぞ。」

「予想通りです。多分この壁の向こうにさっき下りた部屋があります。判つても何の役にも立ちませんが。」

.....

1時間後。3階の長い回廊を歩き、魔物と戦い、ついに辿り着いたのは登り階段。

「アレフ、お前の言う通り歩いていたら、また2階に戻ったぞ。」

「だから僕に文句を言わないで下さい。さっき降りた階段とは違います。だからここから南の階段を降りれば正解です。」

「本当にそうか？大体なんでこんな面倒くさい造りなんだ。」

「そういえばそうですね。なるほど・・・何か意味があるかな？」

「ああ、そういうのは学者に任せとけ。考えても無駄だ。」

また3階への階段を降りる。ガイラが苛立っている。

「そろそろ強い魔物でも出てこいや、闘ってスカッとしたいぞ。」

「まあそうですね、でてきたのはリカントマムル、メーダロード、ドロルメイジ、ヘルゴースト。上位種ですがさほど強くなった感じはしませんね。魔法を使ってくるようにはなりましたけど・・・。」

「そうだな、気分よく闘える相手じゃねえ。卑怯ではないが面白くない。」

しばらく右手を当てて歩く。行き止まりだ。しかも魔物が群れている。リカントマムルを中心にリカントが群れている。八つ当たりするかの様にガイラが飛び込む。アレフが慌てて追いかける。さほど苦勞することなく魔物の群れは駆逐された。

「ガイラ、戦い慣れた敵だからといって無謀すぎですよ。」

「いいじゃねえか。こいつらはリムルダール付近で嫌というほど倒したんだ。魔法も使ってこないから憂さ晴らしにちょうどいい。」

妙にすつきりした顔でガイラが言う。アレフが呆れて来た道を戻る。30分ほど歩くと降りる階段。

「やっと4階だ。ゴールは近いか？」

しかし降りた先にはなぜか登る階段があるだけ。

「どうなっている。馬鹿にしてるのか？」

アレフが地図を確認する。

「ガイラ、見て下さい。3階のこの辺に空間があります。多分ここに繋がっているのでは？」

「そうかいそうかい、どこでもいいさ。行くぞ。」

アレフが地図を片付け、慌てて追いかける。登った先でガイラが立ち呆けてている。追いついたアレフが見たのは小さな池の中央に小さな社。そして社の中には銀色の豎琴が祭られている。二人が近づく。

「これですかね？」

「だろうな。しかしまあ吟遊詩人ガライの墓とはいえ無駄に豪華な墓だな。吟遊詩人さんよ！悪いがこれはもらっていくぜ。」

そう言いながらガイラが垣を越え、豎琴に手を伸ばす。誰も止める者はいない。

「へへっ、銀の豎琴、ゲットだぜ！アレフ、どんな音がでるのだろうな、これ？」

そう言ってガイラが豎琴の弦に手をかけた。響き渡る豎琴の音。

その澄んだ音はアレフには不吉に聞こえた。

戦場での死

6 / 28 勇者支援生活59日目

午後4時、ラダトーム城に城下町の門番衛士が駆け込んできた。城の衛士が引き止める。

「どうした、騒がしい。静かにせぬか！」

「はっ！申し訳ありません。国務大臣付き特務隊士殿はいずこですか？勇者アレフなる者が急ぎ面会を希望しております。」

衛士二人が顔を見合わせる。

「あの人なら、いつもどおり図書館だな。」

「ですね。あの筆頭魔術士殿とよろしくやっています。うらやましいですね。」

「馬鹿っ！お前死にたいのか。怒らすと相当怖いらしいぞ。大臣の息子をとっちめた話を聞いていないのか！」

「あれあの人だったんだ。俺らにはいつも笑顔で“ご苦労さん”ていい人だなんて思っていました。・・・あれ、さっきの人は？」

「ああ、場所を聞いたらすっ飛んで行った。問題はなさそうだから通した。」

「そうですね、きっと特務関係ですから俺ら衛兵では止められませ

んじ。」

.....

バンッ！

図書館の扉が乱暴に開く。兵士が駆け込んできた。俺とマギーが目を丸くしている。

「ちょっと乱暴に開けないで」「はあ、はあ、すみません。特務隊士のケルテンさんってあなたですか？」

マギーの抗議の声をかき消す兵士。

「ああ私だが、何か御用ですか？」

「勇者アレフなる者が、至急お会いしたいと来ています。」

「アレフが至急だと、何があつた？」

「それがお連れの方がいて、すでに亡くなられています。現在我らの控え小屋に……」

俺は駆け出す。後半はすでに聞いていない。

.....

城下街の入り口横の衛士小屋。慌てて飛び込む、寝かされている

ガイラ、血の気は全くない。隣に涙ぐんだアレフがいる。俺の顔を見る。

「ケルテン師匠、ガイラが、ガイラが僕のせいで……。」

俺はガイラの脈を確認する。脈はない、間違いなく死んでいる。門番の一人に声をかける。

「伝令を頼む。國務大臣に王様の謁見許可を、勇者蘇生を至急願いたい。そう伝えてくれ。俺の名は國務大臣付き特務隊士ケルテンだ。止められたら俺の名を使え、いいな！」

「はっ！國務大臣に王様への謁見許可、勇者蘇生の件、至急伝令いたします。」

衛士が復唱し走り出した。こうなれば王家の秘術とやらが頼みだ。いまここで蘇生魔法を使うわけにはいかない。すでに大勢の者がガイラの死を見ている。

「ガイラが僕の身代わりになって……剣で刺されて……。」

アレフが涙ながらに語る。

「アレフ、落ち着け！とりあえずガイラを城に運びます、担架の用意を！」

残る衛士に指示する。用意された担架にガイラを乗せ、衛士に運ばせる。アレフを連れて城に向かう。追いついたマギーがガイラの死体を見て天を仰ぐ。まだアレフが何かを伝えようとしている。

「アレフ、走りながらいい。最初から順に話せ。」

別に聞いたからといってガイラが生き返るわけではないが、話すことでアレフが落ち着くなら聞いてやる。すこしずつアレフが語る。

「銀の豎琴は手に入りました。でもガイラが豎琴の音をだしたら・・・。」

「そうか、迂闊にも音を奏でたか。お前ら知らなかったのか？銀の豎琴の調べは魔物を呼ぶ、故に封印されていたことを。」

「はい知りませんでした。それから魔物が現れました。がいこつ系統の魔物が全部で16体。それも4体一組が4隊、統率を取る強い骸骨もいました。」

なんとがいこつ、死霊、死霊の騎士による一個中隊か、それはきびしいな。」

「アレフ、続ける。冷静になって思い出せ。」

「はい、戦いになったのは地下4階の部屋です。社のあった部屋ではリミットが使えませんでしたので場所をかえて脱出しようとした。」

「盗難防止のためのシステムだな。銀の豎琴が祭壇から無くなったら働くトラップだろう。」

俺は冷静に返事を返す。俺が慌てようが泣き喚こつが状況は変わらない。ならばできる限り正答を教える。

「それで地下4階に戻ったら、魔物の群れに遭遇しました。まず2つの部隊が襲ってきました。壁を背に向かえ打ちました。」

「その判断は間違っではない。それで？」

「はい、その2部隊のがいこつはそれほどの強さはありませんでしたが、隊長格の死霊がうまく指揮を執るためなかなか倒すことができませんでした。しかも折った腕や脚が気づくと元に戻っているのです。」

「それは死霊の騎士の仕業だろうな。やつはベホイミを使う。3部隊をうまくローテーションさせてそれすら判らない様にしていただろう。」

「それでも頭を破壊したがいこつは動かなくなりましたので、少しずつ敵の数は減らして、残り1部隊になりました。」

俺の仮説が正しかったことが証明できたようなものだ。生前からの部隊編成と指揮が可能とは侮れない。また近衛騎士隊長に報告せねばならぬことが増えた。

「最後の1隊は精鋭ぞろいでした。多分死霊の騎士1体と死霊3体かと思います。この時点ですでに残ったMPは多分リミット一回分、もう回復魔法は使えないと判断しました。それでもなんとか死霊3体を倒したのですがそこで僕に限界がきました。死霊の騎士の突きがものすごくゆっくりと僕に迫るのが見えました。」

そこでアレフがしゃくりあげる。再び涙が流れる。

「最後まで続ける。」

「はい、もう死ぬ。そう思った瞬間横から突き飛ばされました。立ち上がって見たのは胸を貫かれたガイラ・・・それでもガイラは貫かれたまま、死霊の騎士の頭を掴んで壁に叩きつけ倒しました。それからリミットを使って脱出、キメラの翼をつかって戻りました。」

「よく判った。その判断は正しい、お前は間違っていない。それに正しい情報を得ることができた。」

「なんでそんなに冷静でいられるのですか？ガイラが死んだんですよ！」

「俺が慌てればガイラは生き返るのか？ならばいくらでも慌ててやる。戦場では心を動かしてはいけない、たとえ俺が死んでもお前は最善をつくせ。マギー、これは君にも言えることだ。いいな！」

「じゃあケルテン、あなたが死んでも泣いてはいけないの？」

マギーが半泣きで言う。

「そうじゃない。戦場では泣いている暇はない、全て済んだ後に泣け。それができないならそこが君の墓場になる。そう言っている。」

「でもガイラはもう死んでいるのよ！」

「まだ希望がないわけでもない。王家の秘術にかけるため謁見の許可を申請している。」

それでもどうにもならなかったら、多分俺は泣くだろう。こいつとの付き合いは長くはないが友と言っていい仲だ。だから俺はこい

つ
の
確
実
な
死
を
見
届
け
る
ま
で
涙
を
見
せ
な
い
。

ラルス16世

ラダトーム城 謁見室

先の勇者謁見のときと同じ様にラルス16世、国務大臣、近衛隊長、他に文官3名、近衛3名が並び、中央のガイラの遺体、そのすぐ後ろに俺が控える。儀礼の名乗り上げが始まる。こんな時まで儀礼が必要とは怒りがこみ上げる。俺は顔を伏せているので誰からも見えていないだろう。俺とガイラの名が呼ばれた。発言が許可される。

「ご尊顔を拝し奉り恐悦至極、御前に侍りまするは国務大臣付き特務隊士勇者支援官ケルテンに御座います。」

我ながらセリフがおかしい。緊張と怒りで嚙む寸前である。

「よい、緊急時だ。直答を許す、普通に話すがよかるう。」

助かった、ラルス16世により直答の許可がでた。

「はっ！この度は小官の不幸により勇者ガイラを死亡させました。血の契約により勇者ガイラの蘇生を賜りたく存じます。」

「よかるう。それも国王の義務である。勇者ガイラをこちらに。」

その言葉で近衛2名により、ガイラの遺体が国王の段下に運ばれる。ラルス16世が階段を降り、ガイラの体に手を当てる。この際全ての臣下が顔を伏せる、王家の秘術ゆえ見えてはならないようである。俺も顔を伏せる。ラルス16世の詠唱、普通では理解できない

言葉が俺には判る。

（我はMPを10放出する、MPはマナと混じりて神に捧げん、
おお神よ、この者の魂をここに戻したまえ！ザオラル。）

その独特の詠唱により全てを悟った。王家の秘術ってザオラルだったのか。なるほど血の契約の一部でザオラルの対象として登録をしてあるのか。

蘇生魔法ザオラル、ザオリク。この魔法がなぜ無差別に行なわれないのか？それは術者がよく知らないか、登録していない者は対象とはできないからである。かつてその登録は神の名の下に行なわれることになっていた。ゆえに蘇生は教会によってなされるのが常であった。ここアレフガルドでは王家の秘術として、不完全な形で残っていたのか。俺は現状ではアレフ、ガイラ、マギーを蘇生できる自信はある。術者がどの程度その対象を知っているかが成功する確率に大きく影響する。となるとこのザオラルの元々の成功率は50%、面識の薄い相手ゆえ大きく確率がさがる。血の契約の支援効果を考慮しても成功するのは30%か。

ふと国王と目があつた。慌てて目を伏せる。しばらく無音の中時間が過ぎる。駄目か！

「ガハッ！」

ガイラが血を吐く。魂は戻ったが体は治っていない。俺は立ち上がる。

「無礼な！御前である。誰か止めよ！」

近衛騎士が俺を止めようとする。俺はかまわず駆け寄る。

「よい、その者の好きにさせよ。余の命令である。」

(俺はMPを8放出する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ。

おお万能たる力よ、血、肉、骨となりて、この者を癒したまえ、ベホマ!)

ガイラに当てた手が光り輝く。癒しの力が胸に開いた傷を修復する。ガイラの呼吸が安定したものになる。俺はそこで初めてここがどこか思い出した。周りを見渡すと優しげに微笑む国王、怒りを顔に表した国務大臣、我関せずとそっぽを向く近衛騎士隊長がいる。他の文官、武官は概ねしかめっ面である。

「皆、その者を責めるでない。その者は職務に忠実で勇者を救ったに過ぎず、余もそれを咎める気はない。」

「しかし陛下、こゝよい、余は咎めぬことにした。よもや聞けぬとは言つまい。それより早急にそこな勇者ガイラをしかるべく看病すべきではないのか？余やそなたらが不甲斐無いゆえ、勇者に無理をさせた結果である。余、ラルス16世の名において感謝の意を表する。よいな、丁重に扱え。」

「はっ！では勇者ガイラを近衛の病棟にて看護いたします。近衛騎士よ、丁重に運び出せ。」

「はっ！」「はっ！」

近衛騎士隊長の声に並んで立っていた近衛騎士がガイラを運ぶ。俺もついて行くこうとする。

「待て、そなた名をなんといつたかな。」

「臣の配下のケルテンと申します。」

「そうか、ケルテンというか。そなたは残れ、他の者は下がるがよい。」

「しかし陛下、その者は……」

「よい、余に害をなせぬことはそなたも知っておろう。許せ。」

「はっ！では失礼致します。」

大臣以下全ての者が下がる。近衛隊長は好意的な目で、他のすべてはそうでない目で俺を見ていた。

.....

今ここに残っているのは国王ラルス16世と俺だけ。この人は何を考えている。

「よかったのう、そなたの友人が助かって。」

「はっ！陛下のおかげを持ちまして。」

「そうか、そなたにはできたのではないか？」

「おっしゃる意味が判りません。」

「そうか、まあそう答えるしかならう。だが先ほど余が蘇生の詩を唱えた折、そなたと目が合った。あれは何かを知っている者の目だ。もしかして蘇生の呪法を知っておるのではないか？しかも先の回復魔法はどうだ？」

どう答えてよいか判らない。沈黙が続く。

「そうだ、沈黙が正解だ。そなたは聡いな。国王は象徴、権威の象徴で実権など必要ない。余の周りにはそう考える者が多い。平和な時代ならそれでもよかった。だがそのせいで娘を失うことになるうとはな。国王の座など欲しい者にくれてやったものを……。」

「いえ陛下、まだローラ王女を失ってはいません。必ず私の勇者が救い出してきます。」

「そうか、ならばいつそのこと娘を助けてきた勇者を婿に迎えるとするか、それを聞いたときの皆の顔が見物だの。そなたはどう思う？」

「御戯れを、私には答えることはできません。」

「よい、申せ。ここには誰もおらぬ。そなたの嫌いな権威も儀礼もない。」

ただのお飾りかと思われた国王が意外によく見ている。まさか俺のことまで見ていたのか。

「もし勇者と王女がそれをお望みなら陛下のご随意に。そうでないなら無理強いは厳禁です。反感しか買いませんから。」

「そうか、ではその時を楽しみにしよう。勇者支援官ケルテンよ、そなたの職務に励むがよい。大儀であった。」

俺はそこから逃げるように立ち去った。俺は勇者二人とともに平和を目指す。たとえその結果この王家がなくなるうとも・・・そこまで読まれていたような気がした。

復帰と復旧

6 / 29 勇者支援生活60日目

ガイラはまだ目を覚まさない。体は治っているし呼吸も正しい。いつ目を覚ましてはおかしくないはずだ。アレフも看病に疲れて隣のベッドで寝ている。

「ねえ、ケルテン。なんでガイラはあんな無茶をしたのかしら？」

「そうだな。俺は言ったよな、最善を尽くせと。ガイラはそれを実行したのではないか。」

「最善？どういうことかしら。個人の強さではアレフよりガイラの方が上、そうじゃなくて？」

「確かにそうだ。だがもしアレフが死んでガイラが生き残ったとする。その時は多分ガイラでは迷宮の最深部からは帰って来れない。そう考えると最善策であったと言える。」

「ち、ちがうさ。おっおれは只、目の前でアレフに死なれなくなつた、だけだ。」

「ガイラ、目を覚ましたのか！」

俺とマギーがガイラに目を向ける。

「ああ、ベッドの横で「ちや」「ちや」言っていれば誰でも目ぐらい覚ますぞ。」

「馬鹿か！お前死んでたんだぞ。」

「そうよ！もつと自分を大事になさい！」

思わず叫ぶ。マギーも彼女らしくなく叫ぶ。俺以外には他人然としているくせに……。

「そうか、アレフを突き飛ばして俺の胸に剣が刺さった。しゃれこ
うべが笑ったような気がして、妙に腹が立ったところまでは覚えて
いる。」

「その怒りで死霊の騎士を倒したらしい。それでアレフがリレミト
で脱出した。あとは城まで戻って陛下の蘇生を受けたってわけだ。
でかい借りができたな、もう勇者は止められないぞ。」

「そうか、落とした命を拾ってもらったか。ならせいぜい恩を返す
さ。それでアレフはどうした？」

俺が隣のベッドを顎で示す。

「そこで寝てる。限界まで使ったMPの反動でぐっすり寝てる。お
前ら二人とも今日、明日と安静にしている。これは支援、査察官の
命令だ。拒否権はない。」

「はいはい、わかりました。」

「それとお前の籠手は預からせてもらう。革がぼろぼろで中身が丸
見えだ。今回持ち帰った素材は全て没収する、いいな！」

「ああ、いいよ。俺の分は好きにしてくれ。」

「じゃあ、俺らは行く。しっかり静養しろ。」

もうここには居れない。俺はマギーを連れて病室を出た。

「ケルテン・・・あなた泣いてるの？」

「泣いてなどいない。」

俺はマギーに顔を見られないよう先に歩く。

.....

今俺はガイラのミスリルの籠手を分解している。誰にも見られるわけにはいかないので自室で作業中だ。ミスリルを覆っている革は使い物にならないくらい破れている。相当剣を受け止めたようだ。これはメイジドラキーの翼膜で作ったやつで、ほんの少しだが魔法に耐性がある代物だ。代わりになる物はないだろうか？・・・なかつたらとりあえずドラキーの翼膜でも取ってくるか。ガイラの荷物を漁る。

「おつ！金色の翼膜があるじゃねえか、ドラキーマの翼膜だな。よしこれで作り直そう。」

一人でぶつぶつ言いながら革を取りだす。

「おい、ケルテン。いるか？」

いきなり扉を開けてサイモンが入ってくる。慌ててミスリル板を

隠そうとして落としてしまつ。サイモンの足元に落ちた板が無造作に拾われた。

「なんだこれ？やけに軽いな。何でできてるのだ。」

俺は返事をしない。俺の沈黙になにかやばさを感じたのか、サイモンが俺に金属板をかえす。

「まさか伝説のミスリルじゃあないだろ？隠さなくてもいいだろっ！」

「正解だ、まさか当てられるとはな。誰にも言うなよ。」

もう黙っていることは諦めた。下手に隠すより教えた方がいいこともある。そう判断した。

「そうか。で、それどうするんだ？」

「ああ、ガイラの籠手の中板だ。ガライの墓で酷使したらしく作り直した。」

「聞いたよ、一度死んだってね。陛下の魔法がなかったら終わりだったんだろ。よかったなケルテン！お前の担当の勇者が死ななくて。」

「同情してるのか、からかっているのか判らない口調でサイモンがしゃべる。」

「できれば普通に帰ってきて欲しかったんだがな。まさか拾った道具をいきなり使うとは想像していなかった。」

「拾った道具？なんだそれ。」

俺はガイラの荷物から銀の豎琴を取り出す。

「これだ。吟遊詩人ガライの遺品、銀の豎琴。この豎琴の調べはなぜか魔物を呼ぶ。そういう伝説だ。」

「ふん。それ本当か？」

「馬鹿！手を出すな。このラダトームに魔物を呼ぶ気が！」

「わりい、試してみないと信じられなくてな。」

「だから馬鹿だと言っている。もし本当だったらどうするんだ。責任取れるか？」

「全部倒せばいい。城を護る為なら近衛も動ける。最近活動を控えさせられていて退屈だ。」

「馬鹿にも程がある。どれだけ町に犠牲がでると思っている。それと来る魔物がスライムやドラキーとは限らんぞ。それと隊長には何も聞いていないのか？」

隊長はあの話はまだしていないのだろうか、昨日のうちに更なる脅威を伝えたのだが……。

「ああ今朝聞いた。全員ではないが一部の近衛には話がいっている。魔物に等級があるのと統率が取れている話な。それ本当なのか？」

「お前は質問ばかりだな。本当だ、俺が襲われたのはパーソナルマークを着けた悪魔の騎士、ガイラ達が襲われたのは死霊の騎士が指揮する1個中隊だ。油断するなよ。」

「パーソナルマークって隊長章とか一部色違いとかそういうやつか？魔物の癖に生意気だな。」

「そうだ。お前の感想は頭悪いな。それだけ魔物にも個性があるかもしれないということだ。もし魔王の再侵攻があったらお前がこの城を護るんだぞ。油断するな。」

「OK、了解だ。それまでにもっと修行しておくさ。俺も死にたくないからな。」

それだけ言うとサイモンは出て行った。何しにきたんだ。あいつももう少し思慮があれば中隊長ぐらいにはなれるのにな。今では戦時任官の小隊長がいいところだ。腕はいいからな。

ドラキーマの翼膜に型をあわせ切り取る。2枚でミスリル板を挟み、余っている部分に穴を穿つ。後はその穴に革紐を通して形を整えるだけだが、革が結構堅いので時間がかかる。しかしまあ素材がドラキーマになったから金色の籠手になってしまっうな。

結局出来上がるのに5時間かかった。これで前より魔法耐性のある籠手になる。少し余計な細工もしておく、ガイラにはわからないように……。もし次にこれのバージョンアップがあるとしたらドラゴンの革が手に入ってからかな。それはそれで楽しみだ。俺の皮の鎧もドラゴンの革で作りたいな。そんなことを想像していたら気づいたら机に突っ伏して寝ていた。

王家による政治

6 / 30 国務大臣執務室

「大臣、今月の法務関連報告書です。」

「ふむ、後で読むからそこに置いておけ。何かあるか？」

「はい、やはり流民による犯罪が増えています。城下街の犯罪件数は先月比で+20%、前年比で+200%です。」

「兵士による巡回を増やせ。少々手荒でも構わん、牢に放りこめ。」

「しかし、兵士の絶対数が足りておりません。」

「私から近衛に増援を頼む。それでやり過ごせ。」

横から口を挟む文官が現れる。

「流民対策ですが、強制移民を検討しております。先方の承認は得ておりますが問題があります。」

「問題とは何だ、簡潔に申せ。」

「二つあります。一つは移動時の魔物対策であります。先の話に付随しますが兵士の絶対数が足りませぬ。次に移住先ですがリムルダールへの移動が不可能です。さらにメルキドに至っては連絡すらまともに行なえません。」

「ならばマイラ、ガライへの移動には近衛の力を借りる。近衛に頭を下げるのは気に入らぬが、この際は仕方あるまい。メルキドについては私の特務隊士を派遣しておる。しばし待て！リムルダールはなぜか？」

「こちらに報告書がありますが、海底洞窟の両端に毒の沼地が広がっているとのこと。集団での移動を困難、不可能にしています。」

「勇者や特務隊士が何度か通過しておる。なにか対策があるやもしれん。相談するがよい。しかしまあ、頭を下げたくもない者の手を借りねばならぬとは忌々しい。そうは思わぬか。」

目の前の二人が首を縦に振る。その表情は険しい。

「先の謁見の際も、無礼があつたと聞きます。今の内に釘を刺しておきますか？」

「ふん、国王様の覚えがよろしいからな、迂闊な真似はできぬ。」

「下賤の者が調子にのりおって、我ら貴族ら皆心を痛めております。」

「もうよい！時間が足りぬ。次の報告をせよ。」

二人が後ろに下がる。その間にも書類にサインをし、決済済みの棚に移す。

「財務担当です。今月も軍事関連の予算が逼迫しております。その他にも法務、都市対策などに予算が取られています。」

「耐えよ、移民対策が済めば多少は軽減できるであらう。」

「しかし昨年のリムルダールからの税の分が惜しいですな。只一人に10万ゴールドとは奮発しましたな。」

「それを言うな。近衛騎士隊長の推薦もあつた、断るわけにもいかぬ。それに竜王対策がうまくいかねばいかに権威があるうが何の役にも立たぬ。そうであらう。」

「そうですね、命あつての権威ですか。全て終わった後、元通りとはなりませんかな。」

「元通りにせねばならぬ。竜王亡き後新しい勢力が台等するなど悪夢だ、そうならぬ様事を運ぶのだ。」

「判りました。しばらく財務関連の不足は国庫の予備から捻出します。よろしいですな？」

「仕方あるまい。だがなるべく節制せよ。」

「心得ております。では失礼を。」

財務担当の文官が立ち去る。大臣の秘書官が横から蠟封された手紙を差し出す。中身を取り出し文書を確認する。秘書官に小声で話しかける。

「ここに呼ぶわけにはいかぬな。私の屋敷ではいかん、今晚しかるべき場所を用意せよ。よいな！」

秘書官は無言で立ち去る。しばらく待っていた次の文官が書類を

差し出す。 国務大臣の仕事は忙しい。

ラダトーム王家の政治体系。この国は王家による絶対君主制である。建国時、国王はいたが制限君主制であったこの国も時が経ち、ある一族に権威が集中するようになった。初代ラダトーム王家ラルス一世である。それでもまだ合議制が残っていた間は問題なかった。だがさらに時が経ち権威が絶対になったころ変化が現れた。つまりラダトーム王家による絶対君主制である。能力が高い国王が精力的に全ての決済をしていたのは初期の国王だけで、いつしか一族の者を国務大臣に据えて行政を代理させるようになった。現在のラルス16世の代理執政官が実弟のオットーである。

- - - - -

近衛騎士団長の執務室に三人の男がいる。部屋主の近衛騎士隊長、国務大臣付き特務隊士ケルテン、文官アーベントロートである。

「近衛騎士団長どの、国務大臣からの要望書です。此度は流民の移民、及び城下街の警備の要望です。国王様の許可も得て降ります。」

「しかたありませんな。現状では軍として働くことのできぬ近衛騎士団が、協力できぬなどとは言えないですな。半数の貴族出身の団員の反発もありませんが、まあ国王様の命令だ、ありがたうお受けいたそう。」

「さすが近衛騎士団長殿、話が早い。」

張り詰めた空気の中、内に剣を構えた舌戦が行なわれている。大臣以下の文官と近衛騎士との確執は相当なものだ。俺の居場所がな

い。

「それはそうと、なぜ私がここに呼ばれたのか判りませんが？」

「これは失礼した特務隊士殿。 国務大臣より移民対策問題の件でご助力頂く様言われております。」

「なるほど、しかし小官になにかお助けできますでしょうか？」

「これはこれはご謙遜を！大臣より大層な見識と伺っています。」

いちいち余計なことを言わないと気がすまないのか。 いいかげんにしてもらいたいな。 ささつと話を進めるよう促してみるか。

「はあ、それで何か問題でも？護衛や旅程に関しては近衛の方が詳しいでしょう。」

「ガライ、マイラに関しては問題ない。直轄地故に移住の要請もすぐに済み、移動の計画もすぐに済むでしょう。しかしリムルダールへは毒の沼地があるとのこと、安全な移動法も確立しておらぬ。さらに十分な連絡も取れていない上、誰か使者として行ってもらわねばいけません。」

「はあ、それで小官に行けと。」

「そうです。貴官の実家はリムルダールの長と聞きます。適任ではないですか！」

「たしかに使者の件は適任と言ってよいでしょうね。しかし毒の沼地の通行方法は一般人にはむずかしいですね。」

「それでも構いません。まず移住の要請の使者として行ってもらえますか？」

「判りました。使者の任お受けいたしましょう。しかしその間勇者の支援の任務はいかが致しましょう。」

「それは心配に及ばせん。大臣よりしばらくは無理な行動はせぬよう言われています。先日も国王様のお手を煩わせたそうですね。」

そう来るか、俺としても時間を稼ぎたかったのもあるから渡りに船、悪い話ではないな。

「では勇者にも無理をせぬ様、助言しておきます。國務大臣殿が心配していられたと伝えておきます。」

「では話は済みましたので、私は仕事に戻ります。文官は忙しいのです。では失礼致します。」

それだけ言うと文官アーベントロートは部屋から出て行った。俺と近衛隊長は思わず顔を見合わせる。

「なんともまあ、迂遠なやつだ。もっと簡潔に話を済ませられないものかな。」

「まあそうですね。貴族出身の文官なんてあんなものですよ。個人的には好きじゃないですが。」

ため息がでる。それは近衛隊長も同じ様だ。

「俺も隊長に昇格して半年だが、文官だけでなく貴族出身の騎士の反感をひしひしと感じておる。実のところ俺は貴族ではない。」

「そういえば戦士の家系でしたね。よく近衛騎士、しかも隊長になれましたね。」

「ああ騎士になるのはそれほどでもなかった。俺より剣の立つ者はいなかったし、近衛騎士でも末端なら問題なかった。居心地はあまりよくなかったがな。」

「それでなぜ団長に？」

「先の大戦だ。敵が敵ゆえに前線に出たがる貴族は少なかったので、俺らの様な者が前線ドムドローに送られた。特別に戦時任官で副隊長、ドムドロー方面の司令官だそうだ。死んで来いと言われた気がしたよ。」

「それは大変でしたね。それでなぜ隊長にまで？」

「竜王によるラダトーム城侵攻、城に残された団長以下近衛騎士は皆貴族出身、それで多くの犠牲がでた。戻った俺が国務大臣により団長に推薦された。いろんな思惑はあっただろうがな。」

「なるほど、実力はあるが後ろ盾のない人材ですか。」

「だろうな。だが俺は傀儡にはならぬ。敵にもならぬ。近衛が仕えるは国王のみ、それだけが俺の信念だ。それで十分ではないか、剣を振るう理由は。」

「そうですね、立派です。私が言うのも生意気ですが。」

「構わん、帰ってきたら酒でも振舞おうか。さあリムルダールへの使者の任、しかと務めよ。」

「了解です。では行ってきます。」

俺は最敬礼をもって近衛騎士隊長の部屋を辞した。

騎士の誇り

近衛騎士隊長の部屋からでる。いや、いい人だな。絶対に敵にまわさない様にしよう。そう思って近衛の控え室を出ようとすると、出口が数人の騎士によって塞がれている。

「これはこれは特務隊士殿、こんな所になんの御用でしたかな。」

嫌味つたらしくそう言う男・・・見た記憶はある。誰だっけな？

「特務に関する任務ですので話すわけにはいきません。そこを通していただけませんか？急ぎの用があるのです。」

「ほう、国務大臣付きの特務隊士ともなると、我々の様な者は話もしてもらえませんか。」

「急ぎの用があると申しました。そこを通してください。」

もう一度俺の主張を言ってみる。

「ふん、その任務とやらも怪しいな。また図書館で筆頭魔術士との任務ですかな？」

「王様や大臣の覚えがいいことを盾に調子にのるでないわ、下賤な生まれの癖に！」

「我ら近衛にも禄に任務がないのにこんな奴に任務だと？大臣も隊長も何を考えておるのか。」

先頭にいる男の他にも嫌味を通り越した悪口を言い出した。さてどうしたものか、それ以前にこいつらはどう落とし前をつけたいの

だろうか？とりあえず反論だけはさせてもらおう。俺のことは構わないが幾人かの名誉に関わる発言がある、それは許せない。

「先も申しましたが特務の任務に関しては教えられません。それに私がある特定の女性と一緒にいることが気に入らぬことは今は関係ありません。また私が下賤ゆえに上の方々の覚えがよいわけでもありません。さらに言わせてもらえば近衛の任務が私の様な者に愚痴をこぼすこととは知りませんでした。質問の答えはこんなところでよろしいですか？」

先頭の男の顔が真っ赤になっている。後ろの者たちも同じくらい赤くなっている。もうすぐ爆発するな。

「黙れ、貴様に任務のことを言われたくないわ！」

「図に乗るな！貴様ごとき下賤な者、本来ならここに来られるだけでも栄誉と思え！」

「そうだ、我ら爵位を持つ者に直答できると思うな！無礼者めが。」
「うわっ！すごい勢いで罵り始めたぞ。お前らが聞いてきたんじゃないか、まあ挑発にのってやったのは俺だから仕方ない。俺が黙っている」とさらに続ける。

「腕が立つとは聞いてはいるが怪しいものだな。」

「弟子ともども下品で卑怯な技しか使わぬらしいな？」

あら今の言葉で真ん中の男のこめかみに血管が浮き出してる・・・もしかこいつアレフに負けて逃げ帰ったやつじゃないか。名前はたしか・・・思い出した、名前負けのエックハルト子爵。

「ああ、思い出しました。模擬戦でアレフに負けたエックハルト子

爵、確かお前達を認めないと捨て台詞を残していかれましたね。」

「貴様っ！言うに事欠いて負けただと！あれは貴様らの罠に嵌っただけだ。まともな勝負すれば負けるわけがない。」

激高したエックハルトが俺に掴みかかる。さすがに周りの者が押しとどめるが、子爵の息は荒い。

「なるほど」俺のほうが強い”そう証明したかったですね。判りました、では決闘でも模擬戦でもなんでもお受けいたしましたしょう。よろしいですね、近衛騎士隊長殿。」

俺は後ろに振り返り、困った顔をしている近衛隊長に許可を得る。

「なんだ気づいていたのか、どう治めようかと思っていたところだ。」

「まあ、これだけ騒げば出てこないわけがありません。それにあちらの文官の方々もこちらに興味深深です。」

向かいの部屋から文官何名かがこちらを覗き込んでいる。こちらと目が合うとあわてて引っ込んでしまった。

「よろしい。決闘は許さぬが模擬戦ならば許可しよう。場所はここで行なう。さらにここで見たことは皆口外しない。よいな。」

「了解です。異論ありません。」

「こっちもだ。」

で輪を作る。騎士の戦いは互いに剣を打ち合わせるところから始まる。剣を落とすか、頭、喉、胴、右手に剣を当てた者が勝ちであるが、故意に強打を当てることは無作法とされる。互いに木剣と木盾を構える。いつも通りのピオリムの二重がけはすでに終わっている。正直どんな強力な魔法よりこれが一番使い勝手がいい。

互いに剣を打ち合わせる。相手が一步跳び下がり構える、俺は両手をだらんとたらしめた自然体で待つ。

「構えぬかつ！」

「構えてますよ、どうぞ。」

「ふざけるなっ！」

怒りに力が入りすぎだ、そのまま右袈裟切りが来る。それを見切つて半身で避け、右籠手に下から軽く木剣を当てる。

「そこまでだ。次っ！」

次の者が出て、すぐに剣を合わせてくる。なるほど休憩はさせないか。さっきと同じく跳び下がって構える。敵の構えは右を前に出した突きに特化した構えだ。いきなり突きが来る、結構速い。半身でかわす、すぐに次の突きが来た、さっきの様にはいかない。後ろに下がりながら避ける、突き突き突き、下がる下がる下がる。背中が誰かに当たった。これ以上は下がれない。追い詰めたことが嬉しいのかニヤリと笑う。

「もらったあ！」

突き出される剣、悲鳴があがる。すれすれで避けた剣が後ろにいた騎士に当たっている。躊躇した相手の喉元に剣を当てる。

「それまで！中央に戻れ。」

俺はゆっくり歩いて中央に戻る。次の敵と対峙、剣を合わせる。さっきの戦法が有効と思ったのか突きの構えだ。突きが来る、左手の盾で右に受け流す。予想外の行動に相手の体が崩れた。剣を叩す。これで3勝、こいつら馬鹿ではない。前を参考に戦い方を考えてくる。

「それまでだ。次！」

次の男がすぐに剣を合わせてきた。剣の合わせ方が強い、そのまま突いてくる。突き、横薙ぎ、斬り返して左袈裟切り、俺の回避方向に合わせて次の攻撃をしてくる。さっきまでの相手と違う。手が止まった、次はこちらから攻撃をする。突き、横薙ぎ、斬り返して左袈裟切り、さっきと全く同じ攻撃をする。互いに跳び下がり距離をとる。俺は剣を納める。相手が一旦躊躇、突き出している剣に居合いで剣を当てる。剣は落ちないが右手が上に跳ね上がる。そこに俺が胴に軽く突きを入れた。

「よし、そこまでだ。」

「そこまでだな、俺様にはそんな手は通用しない。息を整えさせてやるつ。」

エックハルト子爵が尊大に告げる。俺は息を整えながら左手の盾を捨てる。もうこんな奴にかかわるのは御免だ。心気を整えバイキルトを使う。

「ふん、盾がないせいで負けたとの言い訳かつ！」

剣を叩き付けてきた。力負けしない様両手で剣を扱う。エックハルトは跳び下がって盾を前に構える。俺は両手持ちで上段、奴の動きはない・・・俺は剣を盾に思いっきり叩きつけた。木盾が真っ二つに斬れた。奴の眼前に剣を突きつける。

「まだ続けるか？」

「ふざけるなっ！」

俺の剣を強引に払おうとする。払われた勢いを利用して振り上げ、剣に向かって振り下ろす。木剣が斬れた。

「もういいだろう。あんたじゃ誰にも勝てない。」

「こんなのあるか！盾も剣も不良品だ。そうでなければこんなことあり得ない。それにお前の戦い方には品がない。こんなもの認められん！」

「なるほど、それがあんたの誇りか。じゃあ相手がドラゴンだったら火の息を使うのは卑怯だ。ストーンマンは図体がでかいのは卑怯だ。そういえばいい。次の瞬間には消し炭かぺっちゃんこだ。」

エックハルトが歯を食いしばり、声を出せずにいる。

「まだ公表していないが・・・」

ここで近衛隊長を見る。隊長が首を縦に振る。

「魔物の中には騎士と同じく隊列を組む者がいる。さらにあんたらと同じ剣術を使う。先の大戦のように力任せの攻撃ばかりではない。骨だけの魔物、鎧だけの魔物、あんたらの常識だけでは通用しない。」

「しかし我らの誇りは……。」

「誇りで勝てるならそうするがいいさ、だがあんたと隊列を組む仲間はいかに面白いそうだな。常識や誇りに固執して気づくとすでに死んでいる。隊列が崩れた仲間は順に撃破されるだろう。」

もう何も言えなくなったエックハルトに更に言う。

「これから近衛、それもあんたら貴族には屈辱的な任務が命令されるぞ、もう俺にかまっている暇なんかなくなるさ。次に会えるのは何時になるかな、もしかしたらもう二度と会えないかもしれない。互いに危険な任務だ。じゃあな！」

俺は剣を放りだすと出口へと歩く。乾いた音が響く。止める者はいない。

騎士の誇り（後書き）

感想に質問があったのでここに書きます。

1ゴールド＝100円

城の兵士一月の給料は1000Gです。一般人より高給取りです。

心配の塊

部屋に戻りガイラの荷物を持ち出す。二人を探す、もう病錬にはいない、どこへ行ったのだろう。城の中を探すがいない・・・結局見つけたのは宿屋だった。

「ここに移るのなら先に言っておけよ。」

「すまん、あそこは居心地が悪くてな、昨日の内にこっちに移った。」

「そうですね、ケルテンさん。ここの宿屋の方が気楽でいいです。」

そういわれて嬉しそうな宿屋の親父がいる。なんか気持ちが悪い。

「まあもつともな意見ではあるがな。さっきも近衛の連中と衝突してきたばかりだ。」

「もしかして僕達のせいですか？そうだったら・・・」

アレフがとても申し訳なさそうに言うのと遮る。

「ああ違う、違う。個人的な問題だ。君らのせいじゃないから気にしないでくれ。それとガイラ、預かり物を返す。」

そういつてガイラの背囊を投げて返す。それと嚴重に梱包した銀の豎琴をアレフに渡す。

「絶対音を出すなよ。それ以前に梱包から出すな、いいな！」

アレフが恐る恐る手に取る。ガイラはもう触りたくなさそうだ。知らん振りで自分の袋を漁りだした。金色の籠手を見つけて取り出す。

「なんだこれは？派手すぎじゃないか、金色はないだろう。」

「だってしょうがないじゃないか、使える素材がドラキーマのしかなかったんだ。それでも前より性能は上がっている。文句があるなら今度はドラゴンの皮でも持って来い。」

そう説明するとガイラがこねくり回してあちこちを見ている。

「おい、なんでこんな所に宝石みたいのがついているのだ？」

籠手の先端の裏側につけておいた水晶に気づいた様だ。

「ああ、念の為だ。この間みたいになったら困るからな。保険をかけておく。それに一滴血を垂らしておけ。」

「ふ〜ん。こうすればいいのか？」

そう言いながらガイラが指の先端を噛み切る。垂らされた血で水晶が真っ赤に染まった。

「ああいいぞ、まあこんな物役に立たない方がいいがな。アレフ、ホイミだ。」

「はい、……ホイミ！あの……僕の分はないのですか？」

「はっ、何が？」

「いえ、その宝石みたいのです。ケルテンさんもマギーさんも持ってますよね。」

「なんだ、知ってたのか。もしかして欲しかったのか？」

「いえお二人だけなら迷惑かなと思っていたんですが、ガイラも貰えるなら僕も欲しいかなと。」

「そうか、欲しかったのに遠慮していたのか。」

「ああ宝石はある。お前の装備はまだ買い換える余地があるからどうしようかと思っていたんだ。何かあるか？」

「ああそうだ、それで思い出しました。ガライの墓でこんな気持ち悪いペンダントを見つけたのですが・・・」

アレフが袋から髑髏のついたペンダントをだす。うわっ！死の首飾りだ。

「よくそんな物、持って帰ってきたな。」

「こいつな迷宮の地図を全部埋めるまで、次の階に降りないんだ。それで無駄にいろんな物を見つけたんだ。」

「凝り性が、俺に似ているな。まあいや、それは死の首飾りだ。装備すると徐々に命が奪われる、しかも外すことのできない呪いの装飾品だ。売却するなよ、流通されては困るからな。」

慌ててアレフがテーブルの上に放り出した。

（俺はMPを18放出する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ
おお万能たる力よ、聖なる力となりて、これを浄化せよ、シャナク
！）

俺がシャナクを使用し髑髏の部分に触れる。髑髏が砕け散る、残ったのは鎖と空のペンダントヘッドだけ。アレフとガイラ、それと宿屋の親父が目を丸くしている。

「今の何やっただんですか？」

「うん！ああ古い物には結構呪いのアイテムがあるからな、解呪の法を知っているんだ。ここラダトームで習ったぞ。」

「お前さんには驚かないと決めていたが無理だったな。」

俺は自分の鞆から幾つかの道具を取り出す。ハンマー、ナイフなどを使ってペンダントヘッドを加工する。別に取り出した水晶をペンダントヘッドに嵌め込む。しばらく作業を続け出来上がったペンダントをアレフに渡す。

「こんなんでいいか？よかつたらさつきみたいに一滴血を垂らせ。」

アレフがしばらく眺めてから、ナイフで指先に傷をつけた、垂らされた血で水晶が真っ赤に染まった。

「これで4人ともお揃いですね。嬉しいです。」

アレフが首にかける。お揃いね・・・なんとも平和な響きなんだ

ろつか。

「さつきも言ったが役に立たない方がいい代物だ。それとガイラ、拾った物をむやみに触るなよ。王様や大臣から自重せよとありがたい言葉だ。俺がリムルダールに行つて帰つてくるまで無理はするな。」

「そうか、それは退屈だな。なんだつたら同行しようか？」

ガイラの何かを期待するかのように提案する。こいつは一度死んだくらいでは懲りないのだろうか？

「駄目だ。任務で行くのだから遠慮してくれ。その間に豎琴を渡してこい。いつまでも持っていては困る。」

「そうか、確かにその通りだ。」

「というわけで10日は戻つて来れない。その間は無理はするな。次の目標はメルキドだからそれに備えて金は貯めておけよ。」

「たしか25000Gぐらい必要だと言つてましたね？」

「ああそうだ。正確には24600G、炎の剣と水鏡の盾を購入予定だ。両方とも今の技術では作れない代物だからな。楽しみにしてろ。」

「だそうですよ、ガイラ。豎琴を渡したらマイラの村付近で稼ぎましょう。」

「そうか？ガライの墓の方が稼げるぞ。」

「却下だ。もう豎琴はないとはいえ、魔物の巣窟だ。頼む、自重してくれ。」

「判ったよ。お前さんが帰ってくるまでは自重する。」

ガイラはとても不満そうだ。多分こいつに言っても無駄だからアレフに頼んでおこう。

「アレフ、こいつの監視を頼んだ。」

「お任せ下さい。殺してでも止めます。」

「そうだ、その意気だ。」

「おい、なんかおかしくないか。目的と手段が間違ってるぞ。」

「じゃあ自重しろ。じゃあ俺はもう行くから。」

それから馬に飛び乗り城をでる。リムルダールまで10日、この時間を1時間でも短くする。あの二人から目を離すのは心配でたまらない。

心配の塊（後書き）

前回の後書きに続きまして一部設定を

一般人の平均月収は800G程度

物価は現在日本の1/3〜1/2です。

陰謀

出発して二日俺は毒の沼地の手前にいる。今回は俺一人と馬二頭、片方の馬に疲労がみえたら替え馬と荷を積み替えて駆けてきた。ここから一日は徒歩になる、さらに水や食料、飼葉が手に入らないので荷物を念入りに調べ、二頭に均等に積む。トラマナを使う、俺一人なのでこれで問題なく通過できる。ただし馬が歩きやすいよう海岸線に近い平らな場所を選んで通る。2時間おきに馬に水と飼葉を与え、トラマナをかけ直す。いつそのことトラマナを公表しようか。今回の様に俺だけがこき使われることは避けることができる。

日が落ちる前に海底洞窟の北口に辿り着いた。この洞窟を通り抜けるのに急いでも5時間はかかる、無理にこのまま進むか、一晚休むか・・・駄目だな。俺だけなら無理はできるが、馬はそうはいかない。洞窟を抜けた先でも馬には走ってもらわないと困る。今日はここで休もう。魔物の気配に緊張しながら睡眠をとる・・・物音や魔物の気配がする度に飛び起きる。明日洞窟を抜けたら、トヘロスを使ってゆつくり眠る、それが楽しみだ。

断続的だが8時間は寝ることができただろうか。頭はすっきりしないが洞窟を進む。水も飼葉も残り少ないから早く向こうまで行きたい。気は逸るが洞窟内を走らせるのは馬の脚を痛めるので、手綱を引いて歩く。まれに魔物がでてくるがメーダや魔法使い程度で強くないので即効倒す、馬も軍馬で多少の戦闘では逃げない。

3時間は歩いた頃だろうか、先方にたくさんの人骨らしき骨と金属鎧が散らばっている。地面や壁に火球を叩き付けたような跡もある。なるほど一見ここで魔物に襲われて死んだ者の死体の山・・・そんなわけあるか！俺は腰のポーチに手を入れ、アイテムを確認す

る。それから声をかける。

「無駄ですよ。そんな手に引つかかるほど馬鹿ではありません。」

「くつくつくく！やはりこんな手には乗らんか、だが16対1、貴様と言えどこの戦力差覆せまい！」

闇の奥から漆黒の鎧が現れる。その髪飾りは赤、鮮血の色。

「あの橋の時の悪魔の騎士だな、何者だ？」

聞いても無駄だろうが、思わず口にする。周りの骨が、鎧が立ち上がり、次々に武器を構える。

「お前には何一つくれてはやらん。死以外にはな！やれっ！」

それを合図にがいこつと鎧の騎士が隊列を組みにじり寄ってくる。前列に盾を構えた鎧の騎士8体、後ろに槍を構えたがいこつ8体。攻防一体の布陣、その後ろで嘲笑するかの様に立つ悪魔の騎士。

「数だけで俺に勝てると思うな、とりあえずこれでも喰らえ！」

手にもった聖水をぶちまける、聖水がかかった魔物から蒸気のようなものが上がる。

（俺はMPを2放出する、MPはマナと混じりて神に捧げん、

おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム
「！」

俺のニフラムによって骨と鎧が崩れ落ちる。奥の悪魔の騎士以外

んだ花を供える。ここを通るときにはかかさない。

リムルダールの橋を渡る。門番が二人立っている。見たことのある顔だ。

「ラダトーム城から国務大臣の使いできた。通行許可願いたい。」

「なんだ、ケルテンじゃないか。他人行儀な挨拶なんかいらなげ。」「
「そつだぞ、しかし変わらんか?」

門を護っていたゲオルグとドゥーマンが軽く返す。

「駄目だ、きちんとやるべきだ。何が起こるか判らん。これが大臣からの書状だ。」

俺は懐から蠟封のある書状を見せる。蠟封にはラダトーム王家の紋章、二人がそれを見る。

「よおし！通行を許可する！」

ゲオルグが真面目くさって言う。思わず嘖き出す。

「お前がやれって言ったんだらう、笑うなよ！」

「すまん、あまりに似合っていないので思わずな。馬を頼む、しばらく洗ってやっていないので綺麗にしてやってくれ。。。それでこの街はどうだ。粗略に扱われていないだらうな。」

馬を引き渡しながら質問してみる。

「ああ、むしろ大事にされている。あんたの知り合いと言うことで皆優しくしてくれる。」

「住むところも用意してくれたし、仕事も3交代制で無理はない。食うにも困らない。今日はクロウは休みだがあいつもうまくやっている。」

「そうか、ならよかった。じゃあ俺は爺様の所へ行く。急ぎの用なんだ。」

名残惜しそうな二人に別れを告げて、我が家に行く。

「あいつ、いつも忙しそうだな。」

「そうだな。俺達も何か手助けしてやればいいのにな。こんな所で門番じゃ何もしてやれない。」

「そう言うな。これもあいつに頼まれたことだ。ここを護ることでほんの少しでもあいつの負担を減らしている。そう思えばいい。」

「お前賢いな。そう言われればそうだ。しかし最初は恨んだものが、今はあいつに会えたことを感謝している。」

.....

「爺様、帰った。今日は公式の使者だ。私的な話は後にしてくれ。」

「そうか、ではまず書状を受け取ろう。」

俺が書状をリムルダール自治区長に渡す。書状の蠟封を確かめナイフを入れ、書状を取り出す。しばらく目を通して。深く考え込んでいる。

「なるほど、城下町に溢れている流民を引き取れということじゃな。最大で5千人か・・・人数的には問題ない。土地もあるし仕事もある。だがどうやってここに来る？」

「いや今は移住の許可だけくれればいい。方法はいずれ考える。」

「そうか、なら返事を書こう。もちろん受け入れる・・・それでお前はどうか。」

「何がだ？」

「お前さん自身の話だ、もう使者の話はいいだろう。仕事はうまくいっているのか、友人は？女はどうか？」

「ああ五月蠅い。担当している勇者二人とはうまくやってる。近衛にも気持ちのいい奴はいるし、仲良くさせてもらっている女もいる、心配はいらない。それより紹介した3人はどうか。」

「そうか友人も女もおるか、それはよかった。お前は相手によっては壁を作るからの。」

「俺のことはもういい。それでどうなんだ。」

「よくやってもらっている。街の人間ともうまくいっておるし、仕事も真面目だ。この街の兵士にかかっておった負担も軽減できた。いい人材を紹介してくれて皆感謝しておる。」

「そっか、それはよかった。あいつらもそんなことを言ってた。実はあいつらを勇者から解任したのは俺だ。少々問題があったのでな・
・懲らしめて解任した。それで返金の手伝いをしてやった。」

「ふむ、お前のことだ、厳しいがうまくやってやったか。それで立ち直ったのならないじゃないか。過去はともかく今はいい青年達だ。この街ではそれだけで十分じゃ。」

「これを俺が言ったのは秘密にしといてくれ、いずれ本人達と言うまでは知らん顔で頼む。」

「誰に物を言っておる。自治区の長ともなると腹芸の一つできぬわけがなかるう。」

「そつだな、爺様に全部任せた。俺の出る幕はないな。じゃあすぐに城に戻るぞ、放っておけないやつらが何人かいる。」

「そつか、そのうちそいつらを連れて来い。わしが死ぬ前にな！ワツハツハツハツハ・・・」

「そう簡単に死ぬものか！じゃあな、元気でいろよ！」

俺はそう捨て台詞を残すとすぐに出て行った。馬を受け取り即ルーラで城に帰る。城下街が騒がしい、城に戻ると不穏な雰囲気が出ている。俺がいないうちに何が起きたのだろうか？

罪と罰

ラダトーム城に戻った。ここをでてから10日、今日は7月10日か。

城下街では道行く人々が噂をしている。

（ここだけの話だ。この街にいた流民を近衛騎士によって処分されたらしい。）

（俺が聞いた話と違うな。流民を他の街に移住させようとして失敗したと聞いている。）

（正確な話をするべきだ。近衛によって追い出された流民が魔物に襲われて死んだ。そういうことだ。）

もしかして移住計画が失敗したのか？正確な情報が欲しい。急いで城に戻るが静まり返っている。皆青白い顔をして何かを口にするのも憚れる、そんな表情をしている。大臣か近衛騎士隊長に話を聞こう、そう考えて2階へ急ぐ。衛兵に止められた。

「国王様の謁見の準備をしております。いかなる者も通すなどの国務大臣の仰せです。」

「そうか、私は国務大臣付きの特務隊士だがそれでも駄目か？」

「あっ！失礼しました。ですが特例については聞いておりません。問い合わせ致しますのでお待ちいただけますか。」

「無理言ってますまない。そうしてもらえるか？」

衛兵の一人が階上に駆け出す。

「ところで何があった？急遽の謁見があるとは聞いていないが？」

「詳しくは聞いておりませんが、どうも近衛騎士の不手際に対する
査問だそうです。」

「もしかして隊長に何かあったのか？」

「いえ、違います。ガライに派遣された部隊の近衛騎士が虚言をし
たとのこと。これ以上のことは言えません。城中ではこの話を
することは禁止されています。」

「ありがとう。あとは大臣が隊長に聞くことにする。すまなかった
な。」

さっき上がっていった衛兵が急いで戻ってきた。

「すぐに執務室に来いとのこと。」

「承知した。礼を言う。」

俺は階段を駆け上がった。そこには一人の文官がおり、俺を執務
室に案内した。2階では謁見の準備の為にたくさんの方が忙しく働い
ている。

「特務隊士ケルテン、只今戻りました。こちらがリムルダールから
の書状です。」

国務大臣がおさなりに受け取る。

「ご苦労であった。だが無駄になったかもしれぬ。」

「どういうことですか？」

「ふむ、そなたは知らぬのも仕方あるまい。6月1日よりガライとマイラに各100人ずつの移民団を派遣した。それぞれ近衛騎士一個中隊の護衛をつけた。」

「なるほど近衛騎士の半分を護衛につけましたか。妥当な数ですね。」

「そなたに言われるまでもない。だが5日経ってガライに向かわせた近衛騎士の4名だけが戻ってきた。派遣の途中で魔物に襲われ全滅したとの事だ。」

「それは困ったことですね。しかしガライまでなら近衛一個中隊でかなわぬ魔物などおりませんが。」

「そこを不信に思って近衛騎士隊長と詰問したのだが、鎧の魔物、骨の魔物が主に、キメラなる魔物も現れたらしい。それもこちらの一個中隊を上回る二個中隊ほどの戦力だったらしい。それで戦闘になったが少しずつ戦力を削られ、護衛対象である流民も殺されたか逃亡した為帰還したとのことだ。」

「なるほど竜王側もずいぶんとたくさんの魔物を送ってきたものです。それで何が問題なのですか？」

「それが今日になって全滅したはずの他の騎士が戻ってきた。その者らの言によると魔物との戦闘は劣勢なれど膠着しておっただけらしい。」

さらに流民も逃亡せず戦いに加わっていたそうだ。だが一部の近衛騎士が馬で駆け出し離脱、そしてルーラで消えたということだ。残された者達でなんとか撃退はしたが近衛騎士8名が戦死、流民も約半数が死亡、それでも残りの流民をガライに届け今日戻った。そう報告を受けておる。」

「それは本当ですか？もしそうなら由々しきこと、王国の尊厳に関わります。」

「そうだ。それで双方の話を聞くために、これから王様の前で査問を行なうことになった。そなたも出よ。時間が無いゆえそのままだよ。儀礼用のマントを用意させる。」

大臣はそれだけ言うと机に戻った。忙しそうに文官となにやら話している。それにしても大変な事件がおこったものだ。一般人を連れたの行軍となると通常の倍の時間がかかるのは仕方がない。さらに魔物に襲われたのも不可抗力だ。しかし護るべき者を残して敵前逃亡したとは近衛騎士の面目は丸つぶれだ。いやそれだけではすまない。城下街の噂が物語っている。

- - - - -

謁見室である。いつも通り玉座に王様、左に立つのは近衛騎士隊長、以下近衛騎士4名、右には國務大臣、その下にシュミット、次に俺以下文官2名が立つ。そして真ん中に畏まるのが近衛騎士4名。

「この度はそなたらに虚言があったと報告があった。近衛騎士エックハルトよ、何か申すことはあるか！」

大臣が怒気を隠さず告げる。エックハルト、逃げたのはお前か・

「何を根拠にそのようなことをおっしゃられますか、我ら一切虚言など申しておりませぬ。」

「そうか、では証人をここに！」

後ろの扉が開き、ボロボロになった騎士の鎧を着た近衛騎士サイモンが入ってきた。その顔には隠すことのできない怒りがある。その怒りの視線を浴びたエックハルト等が明らかに動揺する。

「では改めて近衛騎士エックハルトよ、申し述べることはあるか！」

「ぐっ！しかしあのような下賤な者どももの護衛に近衛騎士を当てたこと自体が間違いだ。我等近衛騎士は国王様を護るためにあるのだ。下賤な者の為に失う命などない！」

「てめえ、もう一度言ってみろ！」

サイモンがエックハルトに飛び掛る。駄目だ、完全に怒りに我を忘れてる。俺は刀を鞘ごと抜き、一足飛びにサイモンの首に突きつける。

「御前です。お止め下さい。」

「ケルテン止めるな。こいつのせいで俺の友が・・・」

「よい、余が許す。その者に述べさせよ。」

「近衛騎士ローゼンシュタインよ、国王様より直言の許可である。」

俺は刀を納める。サイモンが振り上げた拳を下ろす。握られた拳がぶるぶる震えている。

「あの魔物の襲撃の際、敵は約二個中隊、我等近衛騎士は一個中隊なれど、流民との協力もありなんとか戦えていた。だがこいつらが戦線から離脱したせいで、そこから戦線が崩れた。それでも我等は命に賭けて勅命を護ったのだ。・・・我等が全滅しただと、馬鹿な！なぜこいつらはここにいる！こいつ等は敵前逃亡をしたからここにおれるのだ。しかも言うに事欠いて下賤な者のために失う命などないだと勅命をなんだと思っているのだ。お前達の為に死んだ同僚に何か言えるか！！言ってみろ！」

サイモンの怒声がこの大広間に響く。サイモンに睨まれたエックハルトは血の気を失った顔で震えている。

「そうか、近衛騎士エックハルトよ、そなたは責任を逃れる為余に虚言を申した。そうなの？しかも余の勅命には従えぬ、そう聞こえたの余の聞き違いか？」

「しっしかし陛下！」

「國務大臣、余はこの者に直言を許してはおらぬ。」

「はっ！近衛騎士エックハルトよ、黙るがよい。そなたが虚言を述べたこと、勅命に背いたことは明白である。」

「恐れながら申し上げます。」

エックハルトの後ろに控える一人の近衛騎士が伏せたまま述べる。大臣が王様と目を合わせる。王様が首を縦に振る。

「申せ、正直に申すがよい。」

「はっ！あの時エックハルト様は我々の小隊長でした。その小隊長の命令で敵を強行突破しました。そしてこの後「黙れ！それ以上は許さん！ぶぎゃっ！！！」」

エックハルトが口を挟んだ。その瞬間近衛騎士隊長の剣がエックハルトを打つ。あまりの屈辱、情けなさに隊長の剣が震えている。

「続けよ」

「はい、反転して再突入するものだと思っておりましたが、突然小隊長がキメラの翼を使用しました。その後は黙っているよう命令されました。我々は元々エックハルト子爵家より選出された者でその命令には逆らえません。私の罪は明白ゆえここに正直に申し上げます。申し訳ございません。」

その騎士は涙ながらにそう話した。見覚えがある、あの模擬戦で4番目に戦った男、あの中で一番腕がたっていた。そうか子爵の家来だったのか。

「そうか、よく正直に申した。余はそなたの罪は問わぬ。さて國務大臣、ここはどう処置を行なうか？」

「ではエックハルト子爵は爵位と騎士の位を剥奪、さらにラダトームより所払いと致しましょう。国王様が罪を問わぬとおっしゃられた者以外の二名は小隊長の命令に従ったのみと言えど、事実を隠蔽

したことは間違いない。よって罰としての降格が相当と臣は考えます。」

「そうか、近衛騎士隊長はどうか？」

「寛大な処置に感謝いたします。我等近衛騎士一同更なる忠誠を誓います。」

「ではその者をここより連れ出せ。顔をみるのも不愉快だ。」

「はっ！」「はっ！」

項垂れているエックハルトが、控えていた近衛騎士に引きずられるように連れ出された。もう何も言えないようだ。

「それではこの謁見は終わりでよいな。余は疲れた。」

「はっ！ではこれにて終了いたします。皆の者、大儀であった。」

その言葉で王様が玉座より去った。俺はサイモンの肩に手を当てる。かける言葉は思いつかない。それでも俺は手を当てたまま立っていた。床にサイモンの涙が零れ落ちた。

ラルス16世の心境

国王の私室、国王と国务大臣が二人だけにいる。

「国王様、先の処分はあれでよろしかったでしょうか？」

「いまはお前しかおらん、そのような畏まった話し方は無用じゃ。全て剥奪の上追放か、死した者からすると生ぬるい処分かもしれんな。」

「そうですね、兄上。しかし爵位ある者に対していきなり死刑との前例はありませぬ。あれで妥当な線では？」

「そうか・・・まああの者にとってはその方が過酷やもしれん。屈辱の中野垂れ死ぬがいい・・・そうだ、さっきの近衛、あの怒鳴っておった者と白状した者だ。あの者等に褒美をだすのを忘れていた。呼んでくれるか？」

「ここにですか？」

「ならば大広場でも構わぬ。そんなに心配ならそなたの配下も呼ぶといい。なんと言ったかの？」

「はい、シュミットとケルテンなる者です。」

「そうだ、その二人だ。勇者の話も聞きたい。呼んでくれ。」

「わかりました。しばしお待ちを。」

俺とシュミットが国王様に呼ばれた。二人で顔を見合わせる。

「もしかして、竜王討伐か王女救出の催促か？」

「ありえるな、俺の方も手駒を失ったばかりでいい材料がない。」

「とりあえず急ごう。怒られる材料は少ないほうがいい。」

俺達はわざわざ謁見の大広間の正面から衛兵の許可を得て入室する。普段の公務では大臣執務室から直通の扉で入っているから、なんとなく緊張する。玉座に国王、隣に国務大臣、二人しかいない。護衛一人すらいない。俺達が片膝を付き頭を垂れる。

「両人ともしばし待て、もう2人呼んである。」

黙って待つ。しばらくすると怪訝な顔をしたサイモンとさっきの騎士が入室する。表情は固い。

「よう来た。余の勅命を護って奮戦した者には褒美をやらねばならん。それが特に困難な場合は十分な褒美が必要だの。そなた、なんといったか？」

「この者はローゼンシュタイン男爵家サイモンでございます。未だ家督は継いでおりません。」

大臣が名前と告げ、意味ありげに一言付け足す。

「そうか、男爵の家の者か。何ゆえ家督を継いでおらぬか？」

「父が存命、さらに私は次男ですのでその権利がありません。先の大戦で兄が戦死した為近衛騎士に抜擢されました。」

「なるほどのう、では今回の褒美に男爵家相続の件許可しよう。大臣、問題ないな。」

「問題はございません。早速典礼のものに申請致します。」

「そういうことだ。余からの褒美受け取ってくれるな？」

「はっ！ありがたき幸せ。されど私だけが褒美を頂くわけにはいきません。それに死した者は何も受け取ることができません。なにとぞその者等の魂が安心して神の元にいける様ご配慮頂けませんでしょうか？」

「近衛騎士サイモンよ、言葉が過ぎるぞ！」

大臣がその無礼を嗜める。

「よい、余は構わぬ。そなたは素直で率直だのう、うらやましくあるな。心配することはない、そなた以外の者にも順次褒美を用意させる。また遺族に苦勞させることは一切させぬ。それでよいか？」

「はっ！ありがたき幸せ。全ての者に代わりて御礼申し上げます。」

サイモンが涙を流して礼をする。

「よい、次にそなたは元エックハルト子爵家の従士と言ったな？」

「はい、近衛騎士ステファンと申します。平民ゆえ家名はございません。」

「そうか、平民か、苦勞したであろう。そなたにも褒美をやるう。なにかあるか？そなたが希望するなら然るべき貴族の家に養子縁組させることも可能じゃ。」

「恐れながら私には褒美を頂く謂れはございません。陛下のご期待に答えることができなかったばかりか、事実の隠蔽を行いました。万死に値します。願わくば死を賜らんことを、それが一番の願いでございます。」

「聞いたか、大臣。平民出の騎士の方がよほど騎士らしいの。」

「御意、格式を重んずるばかりの者よりなんと騎士らしいことか。」

「そうだの、しかし余はそなたの一番の願いを叶えてやることはできぬ。すでに8人の近衛騎士が戦死し、一人が追放、二人が降格。つまり余は11名の近衛騎士を失ったことになる。ここで更にそなたを失うわけにはいかぬ。自死することも職を辞することもならぬ。よいか、これは勅命だ。この勅命をもって褒美としよう。」

「はっ！近衛騎士ステファン、勅命承りました。」

「そうか、それはよかった。では大儀であつた。二人とも下がつてよいぞ。」

二人が退室する。お叱りもなくなるとも温情のある沙汰、ほっとした。

「特務隊士シュミット、ケルテン、両人とも前へ。」

「はっ!」「はっ!」

大臣に促されて前にでる。頭は垂れたまま片膝をつく。

「よい、面をあげよ。他に人はおらぬ。そなた達には特に苦勞をかけておる。此度は勇者の活躍の話聞きたくてそなたらを呼んだ。」

シュミットが少し前にでて沈痛な声で詫びる。

「私の担当する勇者4名とも失いました。遺体も残っていないため蘇生すら叶いません。ご期待に答えることもできずに誠に申し訳ありません。」

「別にそなたを責めているのではない。しかしそれはかわいそうな事をした。もしその者等に身内があるなら厚く遇するがよい。」

「はっ!必ずそのように致します。」

「ふむ、そなたはケルテンと言ったな。そなたの勇者はどうだ?この間蘇生させたばかりだの。」

「はい、現在ロトの残した3種の神器の一つ、雨雲の杖を手に入れた頃だと思えます。何分私も先ほどリムルダールから帰ってきたばかりで確認は取れていませんが、その様に手配していました。」

「そうか、順調にいつておるか、それはよかった。しかしリムルダ

「ルとはいかな用事じゃ？」

「私の命令でリムルダールの長に書状を託しました。移民の件でございませぬ。先方の許可を得ることはできましたが無駄になったと思われませぬ。」

「そうじゃな・・・ガライへの移民の失敗、あの馬鹿者のせいで無に帰するか。腹立だしいことよ。」

「御意。しばらくは移民の話に乗る者もありますまい。」

「言っても仕方のないこと、次の手を考えよ。そなたの手腕、期待しておる。・・・それと我が娘ローラの行方はどうじゃ？・・・生命なくとも・・・せめて身体だけでも・・・ここに帰してやりたい。」

悲痛な言葉、搾り出すように話す。本当は何処にいるのか、俺は知っている。まだ公表はできないが希望だけは伝えよう。

「まだお亡くなりになったとは限りませぬ。希望はお捨てになりませぬよう申し上げます。」

「そうか、そなたは優しいのう。だが姿を消して約半年、最悪は想像しておかねばならぬ。それも王族の勤めよ。栓ない事を言った、忘れてくれ。そなたらは竜王の討伐にのみその力を注ぐがよい。大儀であつた。そなた等の職務に戻るがよい。」

「はっ！それでは期待に沿えるよう職務に勤めます。」

「はっ！失礼いたします。」

俺とシュミットが大広間から退室する。静まり返った城中を並ん

で歩く。

「ケルテン、なんだったのだろうな？俺の勇者のことを聞かれた時は心臓が止まるかと思った。」

「そうですね、しかし王様はあのように言っておられたが王女様のごことは捨ておくわけにはいかん、何とか致しましょう。そう決意しました。」

「そうだな。しかしまあ何時の間に雨雲の杖を手に入れたのだ。俺の勇者ではガライの墓には行かせられなかった。」

「シュミットがいない間に行かせました。多少の誤算で一人が死にましたが陛下の温情により蘇生が叶いました。ありがたいことです。」

「そうか、それはよかった。お前なりによい忠言をしてるか、俺にはもうできないことだな。」

「・・・ではメルキドは駄目でしたか？」

「ああ、主だった者は先の大戦で亡くなっただけ。特にゴーレムの狂乱に巻き込まれて死んだ者達が惜しいと長も言っておられた。」

「そうですか。それで大臣は何か言っておられましたか？」

「それが何も。とりあえず情報を集めよと言われた。毒の沼地の通行方法については特に強く言われている。」

「それも無用になりました。移民に応じる者などもういません。城

下の噂を聞きましたか？」

「ああ聞いた。近衛騎士で流民を処分したとな。あながち間違っていないな。」

二人で大きなため息をつく。そのため息で任務を思い出したかの様に二人が異なる方向に歩き出す。その方向は明るい未来だろうか、これから訪れる困難にさらにため息がでる。

ラルス16世の心境(後書き)

設定集

城に勤めている者の給料(月給)

近衛騎士隊長	3	0	0	0	G
近衛騎士	2	0	0	0	G
一般兵	1	0	0	0	G
國務大臣	0	G			
高給文官	1	5	0	0	G
文官	1	0	0	0	G
特務隊士	2	5	0	0	G

魔法談義？

7 / 10 勇者支援生活71日目

今日はほとんど終わっている。激動の一日であったが本来の仕事
をしよう。アレフとガイラは何処にいるだろうか？それを確認する
ため大臣の執務室にいる。魔法の地図を見ると光点二つはともにマ
イラにある。わざわざ確認しなくてもそれが二人と判ってしまうこ
とが悲しい。

アレフの血の契約書を見る。レミールを使用して再度確認するが
やはり呪いのような文字はある。呪いか・・・シヤナクで解除でき
るだろうか？だめだな、これはあいつらの命綱でもあるから解除す
るわけにはいかない。そもそもこれは呪いなのだろうか？装備して
いるわけではないし、今その呪いが発動しているわけでもない。や
はりあれに頼るしかないな、もう種は蒔いてある。

二人の位置だけ確認して執務室を辞する。図書館へと足を向ける。
10日も放っておいたから何か土産が必要だろうか？何も持ってい
ないけどな。

「やあ、マギー。今帰ってきた。」

「おかえり、そろそろ来てくれると思ってたわ。」

「なんでそう思ったの？」

「血の契約よ、この地図で判るの。ほらっ！」

手元にある本の1ページを俺に見せる。

「本当か！何時の間にそんな秘術を！！！」

覗き込むと開かれた一面には地図など書かれていない。

「嘘よ、謁見の話を聞いただけ。王家の秘術なんて判る訳ないでしょ。でもあなたの驚いた顔は面白かったから、それで気が済んだわ。」

「やられたよ、俺の負けだな。よしじゃあこの間使った魔法を教えよう。これは人間には全く効かないけど有効な魔法だ。いつもの用意をしよう。」

そう言いながら黒板を準備する。マギーが嬉しそうに教卓を引きずってくる。

「じゃあ始めよう。さっきも言ったがこれは魔物、それも実体を持たない魔物にしか効かない。」

「そんなの意味あるの？」

「意味あるも何も、つい一週間前にそれで危機を脱したさ。その魔法の名前はニフラム、神に祈り魂を正しく導く魔法だ。」

「魂を導く？魔物の魂をどうして神の元に導けるわけ？」

「そうだね、本来魔物の魂は神には導かれない。ましてや生きている対象の魂を神の元に送れるわけがない。ではマギー、なぜできるのか？その導くことのできる魔物とは何か？」

「なに、ヒントだけなの。そうね〜・・・」

マギーが首を捻って考えている。俺は黙って見続ける。

「そうか、わかったわ！ゴーストね、あれこそ魂そのものだわ。」

「それでは1/3だ。まあこれは公表されていないことだから仕方がないか。あとはがいこつ、鎧の騎士だ。やつらは実体はあるがあれは仮の姿、それを動かしているのは魔に犯された魂だ。」

「そんなこと聞いていないわ、それ本当なの？」

「ああ、俺の経験測を一部の人間にのみ公表している。元々の人間の強さで魔物の強さが変わると思っている。ちなみに生前の技能も使える。君もがいこつとは戦っているだろう。」

「ええ、直接は戦っていないけどアレフやガイラが戦っているのは見ていたわ。」

「この間海底洞窟であれと鎧の騎士合わせて16体と戦闘になった。そこで全部の魔物の魂を開放してやった。」

「はあ、それはすごいわね。いくらあなたでも普通には勝てないわね。」

「そうだね。ここでその二フラムについて・・・」

黒板に詠唱文を書く。(私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん)

・・・と二行目まで書いたが、他の魔法と異なる部分がある。これと同じ魔法が他にも2つあるが気づいたかい？」

マギーが俺の魔道書の付箋のついでと開く。二フラムのページ、ザオラルとザオリクの見開きのページ。自慢げに俺に見せる。

「そつだ。これらの魔法は万能たる力を神に捧げる魔法。ここが神を意味する単語、こつちが捧げるといふ動詞だ。」

「なるほど、じゃあこの下は“おお***神よ”ね。」

「そつだ、“おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、二フラム”が正解だ。これでこの魔法は使えるようになる。これは切り札になるから特別に教えた。もし魔物に知れてもこちらは困らない。」

「そつね、さつそく会得させてもらつね。でももう二つの魔法はなに？神に奇跡に関わる魔法・・・」

マギーがザオラルとザオリクの魔法をなぞる。神を表す単語、そして魂を表す単語。

「・・・もしかして魂を戻す魔法、ということとは蘇生の魔法、王家の秘術ね。でも二つあるのはどういふことかしら？詠唱文も部分的に異なるだけでほとんど同じだわ。」

「ああそれは消費MPの少ないほうは大まかに神に祈りを捧げている。それと違ってMPの多い方は具体的に神の名を告げ、願いを伝

える。効果の違いは成功する確率だけ。」

「そう、ここアレフガルドでは精霊ルビスが信仰されているけど、本当はもっとたくさんの方々が存在しているはず。その一つの名か・
・やっぱりあなたは怖いわ。今度は神の領域に入ったわ。」

「そんな大層なことじゃない。まあ蘇生の魔法は覚えなくていい。使用に制限が多い。まず第一に戻ってくるのは魂だけで、傷ついたら治らない。遺体のない場合、魂が戻っても再び死んでしまう場合は意味を成さない。さらに個人情報を知らない相手は対象にできない。」

「判ったわ。とりあえずニフラムを会得する。他に注意することは？」

「実は聖水がニフラムに近い効果を持っている。さっきの魔物に直接振り掛けると魂の拘束力が落ちる。これとニフラムを併用するとより強い効果が期待できる。この前も最初に聖水をばら撒いてから魔法を使った。覚えておくといい。」

「ふ〜ん。でもよく聖水なんて持っていたわね。」

「護身用さ、常にトヘロスやルーラが使えらるとは限らないから、その代理のアイテムを持つのは常識だ。」

「なるほど、アレフが護身用にキメラの翼を持っていたのはそういうことね。納得したわ。」

「ああそうだ。それで思い出した。明日にでもアレフをマイラまで迎えに行く。戻ったら次はメルキドを目指す。今度は危険だから俺

も同行する。だからまたしばらく会えない。」

「私もついて行く。」

「駄目だ。今度の危険はこれまでの比じゃない。君を護衛しながら行くわけにはいかない。」

「でもそんなの嫌よ。私だけ安全な所にいるなんてっ！」

マギーは本気だ。それが判るだけに今回は連れて行かない。

「もう一つ理由がある。君にしかできないことがある。」

「私にできること？」

「ああ、アレフが戻ってきたら雨雲の杖を勇者の部屋に保管する。管理を頼む。」

「でもあそこなら誰も取り出せないわ。」

「うん、そうだね。でも神器だから・・・もしかしたら感のいい人なら何か気づくかもしれない。偶然でも見つかると困る。君ならなんとか誤魔化せるだろう？」

「まあそうね。なら持っていけばいいじゃない。」

「それこそ駄目だ。もし失ったら取り返しがつかない。だから君に頼みたい。」

「もういいわ。陳腐な言い訳だけどそれで納得してあげる。その代

わり今日は私の屋敷で夕食を頂くこと。それが交換条件。」

「喜んでご馳走になるよ、ここ10日ほど碌な物を食っていない。」

「なんだ、俺の言い訳は全部お見通しか。でも本当に今回は連れてはいけない、危険すぎるからな。きっとそれもお見通しなんだろう。」

新たなる出発

7/11 勇者支援生活 72日目

朝久しぶりにここで鍛錬をしようと訓練所にきました。普通にアレフとガイラがいました。昨日の夜に帰ってきたそうです。俺が見つからなかったのでここで待っていたと言われた。これからの方針を告げる。

「二つ聞きたいことがある。答えによっては予定が変わる。」

「ああ、いいぜ。」

「まず第一、ゴーレム対策はどうなった？」

「これを使います。この妖精の笛の音はゴーレムを眠らせることができるそうです。」

「よし、次。幾らぐらい貯まった？」

「この間のゴールドマンの金塊と合わせると25000Gはあります。」

「そうか、ならメルキドに行こう。今回は俺も同行する。」

アレフとガイラが嬉しそうにする。

「本当ですか？」

「ああ本当だ。二人だけではまだきびしい。だから3人で行く。」

「それは頼もしいな。あの時もそうだったな。もうゴーレムに追いかけられるのは嫌だぜ。」

「ガイラ！少し危ないことを口走っているぞ。」

「ああそうだった。あれは秘密だったな。」

「本当に頼むぞ、今回はここから馬で行くからすぐに準備をしてくれ。出発は9時だ、ガイラの馬は宿屋だな。」

「そうだ。じゃあ宿屋で待ってるから。」

いつもの鍛錬を終えてから一旦別れる。俺とアレフの分の馬、さらにもう一頭を用意して宿屋に向かう。3頭目の馬にはたくさん荷物が積んである。俺と一緒にマギーとシュミット、そしてサイモンがついてきている。宿屋の前にガイラたちが立っている。すでに出発の準備は整っているようだ。

「かさばる荷物はこっちに載せてくれ。野営用品や水、食料、飼料が積んであるがまだ積載できる。それ用の馬を用意した。」

二人が自分の荷物から毛布を取り出し載せる。雨に濡れない様上から防水加工をした革を被せる。こういったことをやらせるとガイラの右にできるものはいない。

「じゃあ行ってくる。マギー、俺達の居場所はシュミットに聞いてくれ。例の地図で毎日モニターしてくれるはずだ。シュミット、もし俺達になにかあったら後は頼む。サイモン、お前は無茶するなよ。」

よかつたんじゃないですか？」

「きりがない。それに今生の別れでもないさ。もし何かあったとしても俺の遺書はシュミットに渡してある。」

「その事務的なことが気に食わん。」

「そうですね、遺書なんて縁起でもない！」

二人から猛抗議を受ける。

「そう文句を言うな、覚悟の問題だ。それと何かあったとして無責任に消える方がずっとよくない。少なくとも自分が関わった幾人かには責任を取りたい、そんなところだ。」

そう言い放つと二人が黙る。多少は理解してもらえたらしい。人それぞれ思うことはある。それだけ理解してくれればいい。話題を代えよう。

「マイラに移民はついたか？お前らなら知っているだろう。」

「ああ、来たぜ。100人ぐらいだったか、結構な護衛がついてきたぜ。」

「そうか、無事についたのだな。聞いているか？ガライへの移民の件。」

「宿屋の親父に聞いた。酷い話だな、民を護るはずの兵が真っ先に逃げ出すとはな。」

「昨日の夜帰ってきたら、酷い噂でいっぱいでした。今朝になったら公式の発表があったと宿屋で聞きました。まだ情報は町中には広がってませんがしばらくは大変そうですね。」

「公式発表はされたか。どの程度の発表だ？」

「さっきガイラが言ったのが全てです。流石に逃げた兵が誰なのかとか、犠牲がどの程度でたかは知りません。」

「そうか、じゃあ教えよう。マイラと同じ程度の移民団をガライに送った。途中でがいこつ、鎧の騎士、キメラ混合の二個中隊に襲われた。護衛していたのは近衛騎士一個中隊、そのうち一個小隊が敵前逃亡した。その為近衛騎士8名が戦死、移民団も約半数がなくなつた。それでも残つたものがガライまで送つた。」

「酷いな。それでその逃げたのはどうなつた？」

「ああ、城に逃げ帰って全滅を告げた。だが後で帰ってきた騎士によつて糾弾され身分の剥奪、追放処分となつた。」

「それで終わりですか？そんなの納得いきません。」

「平民感情ではそうなるだろうな。だが逃げた騎士は子爵の位にあつて、前例ではいきなり死刑になることはないらしい。だから爵位と財産を取り上げて追放した・・・多分生きてはいけなだろうね。」

「そうだな、俺があつたらぶつ飛ばしてやる。」

「まあそんなところだ。ちなみにアレフ、お前は面識がある。一度

ラダトーム城からそう遠くない場所で、近衛騎士の鎧を着た男がふらふらと歩いている。その鎧の胸には×印が紋章の上に刻まれている。俗に言う不名誉の証。

「おのれ、おのれえ、俺がいつたい何をしたというのだ。絶対に間違っている。俺は正しいはずだ。下賤な者の命など我等高貴な血の礎にしかならぬ。」

呪詛にも似たうめき声、それを聞く者はだれもいない。はずであつた。

「復讐を望むか、己が正義を証明したいか？」

「誰だ？」

「誰でもよい。もしお前にその力を与えてやる。そう言ったらどうする？」

しばらく無言が続く。元近衛騎士は考え込む。静かにそれでいて力強く答える。

「それが本当なら何でもくれてやる。だからその力をよこせ！」

「その望み叶えてやろう、その代わり代償はもらう。」

「何でもくれてやる、二言は無い。俺は力が欲しいのだ。誰にも負けぬ力が！」

「よし契約はなされた。力を受け取るがいい。」

木陰より現れた金色のローブ姿、その手の杖から湧き出た黒き霧が男を包む。

「ぐわあー！ー！ー！ー！」

黒き霧に包まれた男が倒れた打ち回る。静かになった男がしばらくして立ち上がった。その鎧は漆黒に染まっている。男のどす黒い怨念、執念を現したかのように。

「くっくっく！ようこそ我が闇へ……では行くぞ、ついてまいれ。」

悪魔の鎧となった元近衛騎士はその命令に黙って従った。

アレフの不安

7 / 14 勇者支援生活 75日目

眼前に広がる砂漠の向こうに町が見える。

「向こうに見えるのが砂漠都市ドムドーラだ。近くに見えるだろうが実はかなり遠い。馬はここでは走れないから徒歩で1日以上かかる。」

「何を今更、そんなこと知っている。」

「お前には言っていない。アレフは初めてだろう、今はあそこに行かないが覚えておくといい。」

さつきからアレフが目を丸くしている。

「こんな所来たことないから、驚きました。すぐそこにある様に見えるが？」

「塵気楼という気象現象だ。今回はこの砂漠を回避して南に向かう。さあ行こうか。」

馬を南に向ける。砂漠の西側のまだ草木の生えている場所を進む。

「なあ学者、ドムドーラはどうなってる？」

ガイラが何かを期待しているかの様に俺に聞く。隣のアレフも何か言いたげだ。

「そうだな、魔物が闊歩している。その一言に尽きる。もちろんその魔物の質は最上級だ。」

「そうか、俺達でやれるか？」

「無理だ。俺とお前ならまだしも、今のアレフでは無理だ。」

「僕では足手まといですか？」

アレフが気落ちしている。

「そうじゃない。腕の問題じゃないさ、武具の問題だ。俺もガイラもミスリルの武器を持っている。それほどやばい敵だと思ってくれ。だから早くメルキドへ急ごう。」

「そうですか、でもこの鋼の剣もそれなりに使えますよ。」

「そうだな、短期の勝負なら問題ない。だが連戦となると消耗に耐えられない。お前が持っている装備で俺達に勝るのはその魔法の鎧だな。そこに炎の剣と水鏡の盾が加われば、俺達に勝るとも劣らないアレフの出来上がりだ。」

「そんなものですか？お前は弱いが武具が強い、そう言われているみたいです。」

「馬鹿かアレフ！いいかどんな武器でも使いこなせなければ只の雑魚だ。お前はそれが使いこなせる。そう思うから学者がメルキドくんだりまで同行しているんだ。そう自分を卑下するな。」

ガイラめ、俺の言いたいことが全部言われた。おいしい所を持っていきやがって！

「まあそう言うことだ。この間のシュミットも同じような悩みを持っていた。家宝の炎の剣を使うのだが、それが気に入らない騎士にとにかく言われたらしい。一度は貸してやったやつが灼熱したブレードで自傷したらしいがな。」

「そうなんですが、じゃあシュミットさんも強いのですか？」

「ああ十分に強い。俺と同じで騎士になるには少しちからが弱い。だけど炎の剣はちからで使う武器じゃないから相性がいい。一緒に戦った経験からすると・・・ちからB-、すばやさB+、かしこさB-といったところかな。多分相当苦労したんだろう。貴族の近衛連中には認められなかったかもしれないが、俺は評価している。」

「そうか一度お手合わせ願いたいな。」

「またガイラの悪い癖だ。だれかれ構わず勝負したがる。心配しなくてもお前より強い相手は一人しか知らないよ。」

「聞き捨てならねえな。誰だよ、その一人は？」

しまった、口を滑らせた。仕方ない一応教えておくか。

「近衛騎士隊長アイゼンマウアー殿だ。雷神の剣、魔法の鎧、水鏡の盾、腕も武具も一流だ。当然魔法も使える。本人は武器を構えているときには使えんと言っていたがな。」

「ふん、お前さんがそう評価するとは楽しみだな。」

「いや、まじで簡便してくれ。どっちが勝つにしろ只ではすまない。」

「そうか残念だ。竜王を倒したら褒美に勝負させてもらっかな？」

「OK、それでいい。それなら俺も文句は言わん。だから今は竜王を倒すべく邁進してくれ。」

俺がため息交じりにそう言う。アレフが小声で話に割り込む。

「前方右で不自然な影の動きがあります。距離は50m。」

アレフが言った場所をよく見ると、幾つかの影が影に潜んでいる。

「アレフ、ガイラ！あれは影の騎士だ。おそらく俺達を一旦やりすごして、後ろから奇襲するつもりだろう。どうする？」

「今すぐ突っ込もうか？」

「30点。せつかくあいつ等が隠れたつもりでいるんだ。何も知らない振りをして近づいて襲撃しよう。俺が馬を引き受けるから二人で行け。襲撃する距離は任せる。」

「了解。」「任せろ！」

二人が騎乗のまま並んで歩く。20m、10m・・・5m、二人が飛び降りる、一足飛びで影に襲い掛かる。反応が遅れた影の頭がガイラの拳で割れる。アレフの左切り上げ、影の騎士の肋骨が斬り裂かれる。唐竹割りで追撃。これで2体、あとは・・・不利を

悟ったのか心配が消えた。

「よくやった。もういいぞ、敵は逃げた。」

そのまま敵に備えている二人に声をかける。

「不気味なやつだな。真っ黒ながいこつか。」

「こいつらは奇襲専門だ、夜でなくてよかった。」

「そうですね、夜だと見えなしかもしれません。」

引いていた馬の手綱を二人に渡す。二人が飛び乗る。

「そうだな、夜はいつもより安全を確保してから休もう。無理をする必要はない。ガイラのトラップがあればよほどのことがない限り奇襲されることはない。」

「任せてもらおうか、俺の得意分野だからな。ただ仕掛けるのに時間がかかるから、後一時間進んだら野営地を決めよう。」

「ガイラ、お任せします。生存の達人の業、楽しみです。」

「よし進もう。日が落ちるまで後2時間。できるだけ距離を稼ごう。」

4頭の馬が駆け抜ける。それを見つめる黒い影、深夜の急襲は確実だ。

アレフの不安（後書き）

設定資料集

近衛騎士の鎧はカスタムメイドですので他人が装備することはほとんど無理です。

戦死、退役などで不要になった場合も作り直して他の人に支給されることはまずありません。ましてや騎士剥奪になった者の鎧を受け取る者は絶対にいません。

さらに一般的に売却することも不可能です。

騎士を剥奪された者は屈辱を刻まれた鎧だけで魔物が跋扈する街の外に放逐され野垂れ死ぬ、格式や名誉を重んじる騎士にとって最大の罰になります。

裏切り者

7 / 17 勇者支援生活78日目

「今夜も来ると思うか？」

「来るな。どうする、鳴子の範囲を広げるか？」

「いや、結局襲撃するふりが増えるだけだな。あいつらしつこいからな。」

こんな会話がされるのは、毎夜1時間おきに鳴子を鳴らされているからである。その度に寝ていた者も飛び起きている。おかげでこの三日ほどまともに寝ていない。性質が悪く本当に襲撃してくる場合もあるから、無視するわけにはいかない。そのくせ少しでも不利になると逃げてしまう。

「いつそのこと殺傷能力の強い罨にしたらどうですか？あいつら殺つたら気分いいですよ。くふふふ！」

いろんな意味でやばいな、アレフが壊れかけている。

「それもそうだな、なら今日は早めに野営地を探そう。洞穴とか水際とか襲撃方向が限定される場所がいい。」

「判った。俺が罨を仕掛け易い場所を探す。それでできる限り強力な罨を仕掛ける。」

「よし、そうと決まったら・・・見えるか？向こうに小高い丘が見

える。あの辺へ向かおう。アレフ、判ったな。」

「えっ！なんですか？」

「嗚呼、まあいいや。あつちに向かうぞ、ついて来い。」

俺はアレフの前に馬を進める。アレフが反応するより早く馬が向きを変える。

- - - - -

崖を背に、左側が川、右が深い森、川に沿って砂地、そんな場所を野営地を選んだ。川は深さ1m、幅は50m程度、流れはそこそこある。これなら体重の軽い影の騎士は渡って来れない。背にした崖は角度が70度くらい。ガイラと手分けして罾を仕掛ける。さらに川に面した側に毛布を張り飛び道具に備える。

「アレフ、今日はここで寝る。無理に起きなくていいぞ。」

「はい、すみません・・・。」

俺とガイラで焚き火を囲む。すでにアレフは夢のなかだ。

「もう少ししたら手筈どおりやるぞ。ガイラ、眠気はないか？必要なら無理にでも覚ますぞ。」

「大丈夫だ。これが終わったらぐっすり寝る。」

「OK、じゃあ念の為にアレフにラリホーをかける。」

3時間後、焚き火の火が小さくなっている。崖を背に一人が毛布に包まっている。焚き火の横の座っている二つの影も動きはない。誰かが鳴子を鳴らす、起きた気配はない。一時間前も起きなかつた。もう一度鳴子を鳴らす、やはり動きはない。

直立した影が闇から浮かび上がる。数は6体、その後ろから赤いロープを着た影が現れた。無言で手を振る。6体の影の騎士が襲い掛かる。一人に2本ずつ、剣が突き刺さった。予想された悲鳴も血も出ない。

うまくいった。囷に剣が突き刺さった瞬間、崖の上から用意しておいた聖水をばら撒く。動きが止まった、さらに思考詠唱、《私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん。おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラム》

影の騎士が糸の切れた操り人形のように崩れる。動揺したロープが背を向け逃げようとする。その背中に飛礫、バランスを崩して倒れる。ここまでする中、事が進んだ。

「よしっ、逃げられると思うな！」

ガイラが飛び降りた。おいおい、下まで10mはあるぞ。ガイラが完璧な五点着地、すぐに走り出す。起き上がったロープが火球をガイラに放つが、その左手の籠手で弾かれる。ロープは驚愕の表情を浮かべたまま、ガイラの拳を顔に受けた。グシャッ！嫌な音がしてロープが倒れた。

「終わったぞ、ケルテン降りられるか？」

「ああ、アレフを降ろすから受け取ってくれ。」

毛布に包まったアレフの腰にかけたロープを少しずつずらしながら降ろす。下でガイラが受け取った。俺も崖を少しずつ降りる。ガイラみたいな器用な真似はできない。

「雑な作戦のわりにはうまくいったな。しかしお前の魔法は相変わらずすごいな。」

「お前には負ける。よくあそこから飛び降りれるな。しかしまあ、こいつはよく寝てるな。」

アレフの頭をなでる。ガイラも笑いながらつつく。

「お前が魔法で寝かせたんだろう、まあ寝かせてやれ。」

「そうだな・・・ああそうだ。お前が殺ったこいつは何だろう。」

俺はガイラが倒した死体まで歩く。頭がない死体のロープを捲る、これは！

「ガイラ、これを見る！」

「なんだよ、今更魔物の死体なんか見てもしょうがねえよ。」

「いや、こいつ人間だ。妙に人間っぽい作戦をとると思ったらそういうことか。」

「なんだって！そんな馬鹿な、なんで人間がそんな真似を・・・」

ガイラが黙り込む。

「これは川にでも流そう。アレフには見せられない。」

「そうだな、これは俺達の心にしまっておこう。城の連中にも教えられないな。」

「そのほうがいいな。もしこれが知れたら大混乱だ。まあそれはいいとしてガイラ、お前眠れ。しばらくは俺が火の番をする。」

「ああ、そうさせてもらう。」

アレフの横でガイラが毛布に包まって眠る。火を眺めながら思考にふける。さっきの奴は自分の意思で竜王に着いたのだろうか？世界の半分をくれてやる・・・そこまではいかなかったも竜王の元で立志させる、いや、できると感じさせることで寝返らせたとしたらこいつだけでは終わらない。

.....

一方その頃、毎夜起こる斬殺事件にラダトームは震え上がっていた。事件を目撃して運良く命があった者の言によってさらなる混乱が起きていた。

「犯人は騎士の鎧をきていた。それも胸に×印があった。」

「黒い甲冑の男だった。気持ちが悪い声で笑いながら、下賤な血は消えろと言っていた。」

「城の連中は流民を邪魔に思い、その存在を消そうとしている。」

「もう王家も信じられない。だが何を信じればいいのか。教えてく

れ、俺達は死ぬしかないのか！」

噂を重くみた王家は先の近衛騎士の敵前逃亡、その者の爵位と近衛騎士の位の剥奪を発表したがそれは余計な混乱を招いただけであった。護るべき民を捨てて逃げた騎士、甘い処分、それによって招かれた斬殺事件、ラダトームに住む平民の怒りを掻きたてた。

王家と近衛騎士の権威は地に落ちた。近衛騎士は汚名を返上するべく夜間、街を巡回している。その中にサイモンを小隊長とした4名が巡回している。

「ローゼンシュタイン小隊長、犯人はエックハルト様で間違いないでしょうか？」

「ステファン、ローゼンシュタインは止めてくれ。俺じゃないみたいだ。それと身分を剥奪された奴に様はいらないな。」

「すみません。つい癖で……。それで犯人はやはりそうなのでしようか？」

「なんとも言えん。もしかしたら捨てられていた鎧を着た者の愉快犯とも考えられる。いやその可能性は薄い、残念ながらお前の希望には副えないな。」

「そうですね、あの時私が止めることができたら、こん「ぎゃあああああああ！」

「聞こえたな。あつちだ、急げ！俺とステファンはこっちだ、お前達はあつちから挟め！」

二手に分かれて悲鳴が上がった方角に走る。黒い人影が走るのが見えた。行き先を遮る。挟まれて立ち止まる漆黒の騎士の甲冑。

「近衛騎士だ。何者だ、兜をとれ！」

サイモンがきつい口調で問いかける。その男は兜を脱ごうともしない。

「くつくつくつくつ！誰だだと、貴様も偉くなつたものだ。それとステファンなぜお前がそこにいる。なぜ生きておれるのだ。」

「やはりエックハルト、貴様こそなぜここにいる！」

「答えることなどない。お前もステファンも俺を売って地位でも得たか。そうまでして得た地位、命は気持ちがいいか！」

「エックハルト様、私は「止める！もうこいつは子爵でも騎士でもない反逆者だ。ステファン、剣を抜け！お前の手で反逆者を討て！」

一瞬の躊躇いの後ステファンが剣を抜く。サイモンと残りの二人の騎士が退路を塞ぐ。

「ステファン、お前ごときが俺に勝てると思うな。お前が俺に勝った事は一度たりとてない。」

そう言い放つと悪魔の騎士となったエックハルトが剣を叩きつける。ステファンが冷静に盾で受け流す。反撃はしない。

「確かに私はあなた様に勝ったことはありません。」

「そうだろう、これから先も永久に勝つことなどできぬわ！」

エックハルトの猛攻が続く。その全てをステファンが軽くないです。エックハルトの姿勢が崩れた瞬間、ステファンの剣が兜を捉えた。兜が脱げエックハルトの顔がむき出しになる。

「エックハルト様、私は勝てなかったではありません。勝たなかったのです。」

「なんだとっ！貴様、なにを言っつて ザシユッ！！」

ステファンの剣が横に振られている。エックハルトの首が地面に落ちる。首のない甲冑が倒れる。

「近衛騎士ステファン、反逆者・エック・ハ・ル・トを……討ち・まし……た。」

ステファンが涙を流しながら報告する。

「よくやった、ステファン。ここにいる3人が見届けた。」

首無し死体の横で4人の騎士が立ちずさむ。しばらくの黙禱の後、一人が城へと駆け出した。

裏切り者（後書き）

設定資料

国務大臣以外に大臣はいません。そのかわり国務大臣により文官に職務を振り分けられます。その職務により手当てという形で俸給が増えます。

近衛騎士サイモンの回想

7/18 ラダトーム城下 中央広場

男の首が晒されている。その横には不名誉印を刻まれた黒い鎧が置いてある。立て板には男の身元、罪状が書かれている。通りがかる者は唾を吐きかけるか、石を投げつける。無念そうな男の首は何も言わない。

昼過ぎの近衛騎士控え室で雑談をしている者たちがいる。

「ステファン、お前褒美を固辞したのは本当か？」

「本当ですよ、サイモンさん。これで全てが決着した、そう言ってお断りしました。元とはいえ自分の主人を討って手柄を得るなんてできません。騎士の手柄は戦場で立てるものです。」

「ふ〜ん、なるほどなあ。お前真面目だな、貰える物はもらってあげばいいのに。」

「そういう貴官も貴族らしくないですね。男爵の家系ですのに。」

「ああ、くそ真面目な兄貴に反発して結構悪いことばっかりしてた。最初はわざと悪く振舞ってたが、いつの間にか板についてしまった。まあその頃の経験が今になって生きている、なんとも皮肉な話だ。」

サイモンが頭をかきながらそう言う。ステファンがそれを見て微笑む。

「貴族らしくない貴族に、貴族より騎士らしい騎士ですか。私はこのスタイルを貫きます。せつかく陛下に頂いた生命です。陛下の御為に使用致します。」

「そうだな、お前はそれでいいと思うぜ、俺は俺のままでもいい・・・それはそうとお前結構使えるな？」

「何がですか？」

「いや、剣の腕だ。この間のケルテンとの模擬戦でそれなりに使えろと思っていたが、あれほどは・・・それも長年あいつに強さを隠していたのだろう？」

「ええ、あの方は負けることを極端に嫌っていました。それでお手合わせする時はそうと判らない様に加減をしていました。もうそうする必要もなくなりました・・・ケルテンというのはあの時の特務隊士の方ですね。」

「ああそうだ、俺のダチだ。俺に土をつけた数少ない内の一人だ。普段は優しそうにしてるが怒らすと容赦無い。お前も聞いているだろう？フレーゲル殿下を牢屋に放りこんだ話を。」

「噂でしか聞いていません。あの話は内密になっていますから・・・そうですか、あの模擬戦、違いますね、一方的で理不尽な五番勝負の時は、確かにかなり怒っていました。まさか木とはいえ盾や剣を斬り裂くとは信じられません。」

サイモンが自虐的にフツと笑う。

「あれな、この城に一番先にやられたのは俺だ。あいつの新人テス

トに乱入した時だ。俺が卑怯な手で一本取ったらお返しと言わんばかりにやられたよ。」

「卑怯な手とは、貴官何をされたのですか？」

「最初の号令の次の瞬間に、こう蹴りを入れてやった。」

そう言いながら、蹴りを見せる。

「それは酷い。実戦ならともかく兵士の試験でやることじゃありませんね。」

「その通りだ。あいつが他の新人を相手に上品に立ち回っているのが癪に触ってな、思わずやってしまった。」

「それでどうなったのですか？」

「ああ、澄ました顔で立ち上がって二本目の勝負を促した。盾を捨てたと思ったらいきなりベギラマ、それで仰け反ったところに同じく蹴りが来た。」

「それはそれは、貴官の自業自得ですよ。」

「まあそうだな。まさか魔法も使えるとは思わなかったからな。三本目は魔法を警戒して飛び込んだら、あの抜き打ちだ、嫌な予感だったのでむりやり踏ん張って止まったところに、追撃で盾ごと左腕をもっていかれた。ひびが入ってたな。」

「あの抜き打ちには驚きました。剣を落とされるまで一瞬でした。初撃だけとはいえよく避けることができましたね。」

「それが只の勘なんだ、ちなみにその後来た近衛騎士隊長は、鼻先で見切って上段からの一撃を寸止め、一合だけの勝負とはいえ、あれよりすごい勝負は見たことがない。」

ステファンがしきりに感心している。自分の手を使ってそれっぽく再現する。

「あいつが戻ってきたら、朝6時に兵舎の訓練所に行くといい。面白いものが見れるさ。」

「楽しみです。さあ今日も職務に励みましょう。城下街の巡回頑張らしましょう。」

そう言ってステファンが立ち上がる、近くで聞いていた騎士も立ち上がる。

「そういうのは小隊長である俺の号令なんだけどなっ！まあいいや、よし行くっ。」

日の光を浴びて街を巡回する4人の騎士に後ろめたいことはない。胸を張り堂々としたその姿はまさに近衛騎士だった。

.....

ガイラの飛礫がメイジカメラを落とす。鎧の騎士と対峙していたアレフが一步下がってベギラマでメイジカメラにとどめをさす。そこに詰める鎧の騎士にガイラの拳が叩きつけられる。

うん、見事はコンビネーションだ。二人とも自分のできることを把握して、やるべきことをやっている。俺はというと馬上で肘をつけて見ている。しばらくすると掃討し終わった二人が戻ってくる。

「おい学者っ、お前も戦えよ！」

「馬鹿言え、俺は勇者支援官として後方支援の任に努めているだけだ。お前が戦いの愉悦に勤しんでいる間に馬がやられたらどうするんだ？」

「なに、俺のライはそんな柔じゃねえ。」

「お前一人ならそれでいいだろう。だがアレフや俺の馬もいるし、荷物を運んでいる馬もいるんだ。まだ先は長い、馬を失いたくはないだろう？」

「ガイラ、いいじゃないですか、あの程度の敵なら二人だけで十分ですよ。」

アレフが横から仲裁にでる。ガイラが不満げに言う。

「あゝあ、これだからこの師弟はかわいくねえ。理屈っぽい師匠に優等生の弟子、俺の立場がねえ。」

「言ってる、さあ先を急ぐぞ。」

馬を引き渡して先頭にでる。ガイラが不承不承ついてくるのが判る。

「まだまだ先は長い。それにゴーレムとの戦いもあるんだ、この程

度で文句を言われたくないな。そのゴーレムだが・・・アレフ、笛は吹けるよな？」

振り返ってアレフに聞いてみる。アレフが腰の袋から妖精の笛を取り出す。

「練習しました。ただ吹くだけでなく決められた旋律もあるとのことで、雨の祠のお婆さんに習いました。」

そう言ってアレフが笛に口を当てる。

・・・・・・・・！！

俺の記憶にある旋律、それが流れる。

「OKだ。じゃあゴーレムと戦う時は俺とガイラでゴーレムの気を逸らす。ガイラ、それでいいな。」

「判ったよ、それまでは楽にしていってくれ。どうせお前のこった本当に困ったら助けに入るんだろっ？」

「さてね。ガイラはもう一回ぐらい痛い目にあった方がよさそうだな。」

「ひでえ事を言う。アレフ、やっぱりこいつは鬼だ。・・・ちょっと待て、もしかしてお前妖精の笛のことも知っていたらどう？」

「何のことやらさっぱり判らないな。じゃあ少し急ぐぞ、雨が降りそうだな。」

強引に話をきって、馬の足を速める。雨が来る前に濡れない場所を探そう。濡れると体力の消耗が激しくなる。

終わらぬ恐怖

7/19 ラダトーム城下街

再び城下街が恐怖に震える。昨晚の間に起きた無差別撲殺事件、犠牲者は先と同じく流民十数人。その容疑者は・・・晒されていた黒い鎧に返り血がついている。近衛騎士達が立ちすくむ。

「これはどういうことだ。まさかこいつが動き出して殺してまわったとしても言うのか！」

サイモンが手にした剣で血だらけの鎧を突付く。なんの抵抗もなく鎧が崩れ、ガランと音を立てる。

「まさか、これは犯罪を誤魔化すために、こいつに血をかけたのでしょうか。」

「そうだろうな。その証拠に今はこの通り少しも動かぬ。外で戦った鎧の騎士や悪魔の騎士なら反撃ぐらいしてくるだろう。」

近衛騎士達が重く沈む。戦場での不名誉から始まった連続事件、いつになったら終わるのか見当もつかない。

「言っても詮無いことだが、あの五番勝負の時もっと痛い目にあわせておけば良かったのかもな。そうすればあいつが出撃することもなかったかもしれん。いや、そうじゃない、これは近衛騎士全体の問題だ。」

「そうですね、それを言ったら私があの方に手加減などしなければ、

己を理解してもらえたかもしれません。私は自分の身がかわいばかりに偽ったその結果とも言えます。」

「それこそ言っても詮無いことだ。もう過去のことは忘れよう、とりあえず今晚からの巡回を強めるように総隊長に進言してみる。こんな時にあいつがいてくれたらなあ・・・何か解決策を考えてくれそうなんだが・・・。」

「特務隊士殿ですか？そんなことまでできるのですか？」

「ああ、戦う学者、そんな異名を持っているそうだ。魔法、魔物、歴史、アイテムなどの全てに亘った知識がある。どこでそんな知識を得たのか判らんが頼りになるな。強さだけで特務隊士になっただけじゃない。」

「なるほど、強さにはいろんな強さがあるんですね。」

「ああ、戻ってきたあいつに馬鹿にされないように解決しておこう。」

「そうだ、あいつの真似をするか、確か言っていたな・・・必要なら何でも使う。それが権力だろうが、暴力だろうが関係ない、ただ自分より弱い立場の者を虐げることだけはしない・・・か。そうだあいつを見送ったときの3人で相談しよう。みんなあいつに負けたくないはずだ。」

.....

いつも通りマギーは図書館で魔術書を読んでいる。付箋の数はさ

らに増えた。書き込むわけにはいかないので別のノートに書き写す。その時図書館の扉が急に開いた。慌てて魔術書を片付ける。

「すまん、嬢ちゃん。困ったことがあって相談にきた。」

「なによ、近衛と特務隊士が揃って困ったこととは？でも珍しいわね、ここに近衛がくるなんて何時ぶりかしら。」

「そりゃあ、馬鹿は嫌いとからかに公言した筆頭魔術士どのが悪い。」

「筆頭魔術士なんて呼ぶのは止めて！それと嬢ちゃんも止めてよ。私にはマギウスと言う名前があります。マギーでいいから。」

「わかった。じゃあ相談ごときだ、ケルテンに戻るまでに片付けたい。多分あいつがこの顛末を知ったら責任を感じるかもしれない。」

「責任、何のこと？ここにいないケルテンに何の責任があつて？」

「例の不名誉騎士の件だ。実はあの事件の前にケルテンとやりあっている。まあいつものようにとっちめたのだが、その後でのあのざまだ。」

サイモンが一通り説明する。マギーがしかめっ面で考えている。

「そうね、責任を感じるかもしれない。」

「そこでサイモンと相談して、3人で解決しようとしてここにきた。研究に励んでいるところを悪いが手伝ってもらおう。」

「元従士の騎士と普通に会話していた、俺が証人だ。」

「間違いなく死んだのね？」

「ああ、首が飛んで生きていられる人間はいない。」

「よく似た人とか替え玉とかそういうことはない？」

「ない。あの会話は本人達でなくてはありえない。」

「とりあえず、今夜も巡回するのね？」

「もちろんだ。これ以上の被害はだせない。」

マギーがここまでを紙に書き留める。それから一息つく。

「判ったわ。現時点でできることはそれしかないわね。ならその鎧を見張って貰えるかしら。」

「もちろんすぐ横で見張ることになっている。馬鹿馬鹿しいという意見もあるが。」

「その見張りは鎧から隠れて行って下さい。もし動くなら見張られていては動きづらいでしょう。」

サイモンとシュミットが思わず顔を見合せ、同時にため息をつく。

「私だって馬鹿馬鹿しいと思うわ。でも可能性があるなら疑ってみないといけない。」

「わかった、わかった。他の奴には任せられないな。俺がやる。」

「そうか、俺も手伝おう。大臣から敕命を受けている。やらざるを得ない。」

「では結果については教えてください。いつもここにいますから。場合によっては次の手をうちます。」

「わかった。では夜に備えて今から寝ておくとする。また明日にも来る。」

「おれもそうする。その前に大臣にも報告しておく。」

二人が立ち上がって図書館を出て行く。残されたマギーがニフラムのページを開く。もしかしたらこれを使わないといけないかもしれない。私の一存で公表することになるかもしれない。ケルテンならどうするかしら？聞いてみたいと思ったが今ここにケルテンはいない。

- - - - -

城の廊下に二人の足音が響く。

「しかしまあ、あの何か考えている時の顔は綺麗だな。際立って見えた。」

「しばらく黙って聞いていると思ったら、あんたそんなこと考えていたのか？」

「ああ、美しいものを美しいと言つ、俺の性だ。」

シユミットがサイモンを相手に茶化す。

「駄目だぞ。手を出すのは俺がゆるさねえ。」

「わかつてる。人の女を奪うようなまねはしない。それとあいつを怒らせるのは得策ではない。」

「そうだな、じゃあ俺はこっちだから。十時に鎧の場所に集合だ。」

「了解した。」

二人が二手に別れた。十時まで3時間、今夜の見張りは特に眠くなりそうだ。そうならない様にしっかり眠っておこう。サイモンはそう思った。

マギーの覚悟

「なあ、シュミット！あいつ動いたか？」

「いや、動いていないな。」

暗闇で座り込んだ二人が薄明かりの下の鎧を見ている。その声に力はない。

「何時になったら動くんだ？」

「俺に聞くなよ、あいつに聞いて来い！」

「なあこの会話、さっきもしなかったか？」

「ああ、これで7回目だ。30分毎に聞くな、不毛だ。いいかげんにしてくれ。」

「そうだな、いいかげんに動いてくれ、俺はもう限界だ。」

「違う、俺が言っているのはお前にだ、サイモン。いちいち答える方の身になってくれ。」

二人とも代わり映えしない状況に苛立っている。そんな折、城の方向から複数の足音が聞こえる。

「誰だろう？こんな時間に誰か来るなんて聞いてないぞ。シュミット、お前の指図か？」

シュミットが黙って首を横に振る。二人が暗闇に姿を隠す。歩いてくるのは水色のローブを着た魔術師、鎧姿の騎士が両脇を固めている。

「あら？あの二人がいないわ。どうしたのかしら？もしかして寝ちやった？」

「寝てねーよ！」「誰が寝るかっ！」

思わず二人が暗闇から顔を出す。

「なんでここに来てんだよ、明日にするんじゃないのだったのか？」

「そうね、自信と覚悟ができたってところね。ぶっつけ本番の手を使うから手伝って。」

真面目な顔をしたマギーが護衛の騎士に声をかけ、荷物を受け取る。そこから二本の瓶を取り出すと一本ずつサイモンとシュミットに渡した。

「何だよ、これは？」

「聖水よ。あいつが動き出したらそれをかけて！それで動きが止まるはず。」

「はずって、そんな不確実なのか？」

「しょうがないじゃない、さっきも言ったようにぶっつけ本番なの。ケルテンに聞いた方法だからそれ以上のことは言えないの！」

「でも動かなかつたらどうする。」

「それこそ知らないわ、それに私の予想だとそろそろ動くはず。」

「なんでそんなこと判る？」

「瘴気が最も濃くなる時間帯なの。だからもう黙って待つ、いいわね！」

マギーの強い口調にサイモンとシュミットが身をすくめる。護衛の騎士を帰して三人が闇に姿を隠す。それから30分後、じっと見つめていたマギーが話す。

「ねえ、動いていない？なにかが鎧を装備しているみたい。」

他所を見ていた二人も慌てて鎧を見る。不思議な光景だった、そこに見えない人がいるかの様に鎧の部品を見えない腕、足、胴体に装備していく。最後に兜が頭があるべき所に置かれる。そこには間違いなく悪魔の鎧と言われる魔物が存在する。

「今よ！」

マギーの掛け声にサイモンとシュミットが駆け寄る。あと2mの距離から聖水を振り掛けた。駆け寄る二人に反応した悪魔の鎧の動きが鈍る。

『私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん。おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラムッ』

ラストワードから一瞬の後、悪魔の鎧の身体が白く輝く。その光

が消えた時、鎧は崩れ去った。マギーが安堵の表情を浮かべる。あとの二人は開いた口が閉まらない。しばらくして我に返ったシュミットが問う。

「なんだ今のは？そんな魔法聞いたことないぞ。」

「だから言ったでしょ、使ったことないからさっきまで練習してたの。うまくいってよかったわ。」

「そう簡単に言うなよ。もしかしてロストマジックか、どんな効果だ。教えてくれ！」

その問いにマギーが頷く。

「さっきも言ったけど覚悟がついたのはそのこと、あなた達の前で使ったら公表することになる。その覚悟がつくまで時間が必要だった。それと間違えない様にしっかり覚えて、詠唱の練習に時間が必要だった。だから明日にしようと思ったの。でもそこまで待ってられないかった。実利より好奇心に負けたわ。」

「なるほど、効果を目で見たい、その好奇心は何よりも強い。たとえ俺に見られてもそうせすにはいられなかったか？それで効果を教えてくれ、他言はしない。」

「その通りよ。今の魔法はニフラム。神に祈り、魂を正しく導く魔法。」

「そうか、魂が宿る魔物を強制的に成仏させるか……。」

サイモンが崩れた鎧を手を取っている。長い話に飽きたよう得手

にした鎧を明かりの下で眺める。

「おい見ろよ、漆黑だった鎧が白銀に戻っている。」

マギーとシュミットがそれを確認する。全てのパーツを一つずつ調べる。

「もうこいつは只の鎧だ。さっきの魔法で全てが終わった。そう報告しなくてはいけない。マギーどうする？」

「そうね、覚悟はできているわ。そのまま報告して下さい。」

「すまないな、俺達の力が足りない故にあんたに苦勞をかける。」

「いいわ、必要なら私からも説明する。大臣でも陛下にでも……」

「シュミット、もういいだろう。マギーの判断に任せよう。お前はありのままを大臣に報告しろ。それがマギーの覚悟に答えることになる。」

「わかった。夜が明けてから大臣に報告する。それまでゆっくり眠ってくれ。」

マギーがそこを離れて屋敷に向かって歩く。あわててサイモンが屋敷まで送る。残されたシュミットが鎧を集めて城に持って帰った。その表情はきびしい。

ラダトーム城、謁見の大広間

玉座に国王、右に國務大臣、左に近衛騎士隊長、以下文官4名、近衛騎士4名が立ち並ぶ。中央には特務隊士シユミット、近衛騎士サイモン、そして筆頭魔術士マギーが控える。報告を聞いた國務大臣が早急に召集したのだ。

「陛下、この度の元近衛騎士乱心による事件が、この者らによって解決したことを報告します。」

「そうか、ご苦労であった。事の顛末を聞いてよいか？」

「はっ！特務隊士シユミットでございます。陛下の許可を得まして直言致します。此度の事件は人間による事件ではありませんでした。正確には元々人間による犯罪でしたが、死した後に魔物になったと小官は愚考致しました。ここに控える近衛騎士サイモン殿、筆頭魔術士マギウス殿の協力によってその魔物を消滅いたしました。」

「なるほどのう、しかし大臣より一つ納得のいかぬことがあると聞いた。」

「はい、臣が思うに犯行に及んだ者は漆黒の鎧を着ていたと聞きます。しかしながらここな鎧は白銀。不名誉の証があることから同様なのは明らかです。ならば如何なる方法でこの魔物を退治、浄化したのか不明であります。」

「そうか、誰ぞ説明はしてもらえぬか？」

サイモンとシユミットが顔を見合わせ、マギーを見つめる。マギ

ーが首を縦に振ると説明を始める。

「筆頭魔術士マギウスにございます。此度魔物を消滅させたのはロストマジックの一つ、ニフラムなる魔法です。この魔法は神に祈り、魂を正しく導く効果をもちます。これで納得いただけますでしょうか？」

その場にいた全ての者があつと驚く。ロストマジック、その響きに驚かぬ者などいない。

「なんとロストマジックと申したか。その詠唱、今ここで教えてはくれぬか？」

「構いません。ただし極秘により人払いを。」

「それもそうじゃ、大臣、近衛騎士隊長を除く全ての者は下がるが良い。大儀であった。」

その言により文官、近衛騎士達が下がる。最後にサイモンとシュミットが心配そうにその場を去る。大広間の大扉が閉まった後、大臣が告げる

「そなたの望みどおり人払いは済んだ。」

「はい、では・・・」私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん。『「あつ！」「あつ！」」

ここまで静かに聞いていた大臣と近衛騎士隊長が思わず大きな声をあげた。

「いや、済まぬ。続けてくれ。」

「はい、『おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ。ニフラム』……と以上になります。」

「驚いたの、大臣。詠唱の半分程は聞いたことがある節だ。マジウスと言ったな。これはそなたが見つけた魔法か？」

「……はい、私が書物から発見し、解読致しました。」

「そうか、余は以前にも同じような質問をした覚えがあるな。」

王様に見つめられたマジューは口を閉じた。

「なるほど、その者も今のそなたと同じ反応をした。まあよい、そういうことにしておこうか。それでこの魔法は秘術としておくか？」

「いえ、この魔法は一部の魔物にしか効果がなく、普通の人間には効果がありません。それゆえ魔法の技術が確かな者には伝授してもよいかと存じます。」

「そうか、近衛騎士隊長よ、そなたがまず伝授されるがよい。その後はそなたの判断で伝授すべき者を吟味するがいい。」

「御意。しかるべく致します。筆頭魔術士殿、よろしく願いします。」

「はい、では後ほどお伺いいたします。」

「いえ、師事するのはこちらです。こちらから伺つのが筋です。」

「判りました。では図書館にてお待ちいたします。」

それを眺めていたラルス16世が微笑む。

「此度の事件解決、及びロストマジックの発見、何か褒美が必要だの。大臣何か見繕ってくれるかな？」

「はい陛下、お任せくださいませ。」

「よろしい、ではご苦労であった。下がってよいぞ。」

「はい。」

マギーがこの場を辞する。背中に冷たい汗が流れる。ケルテンを守る為についた嘘を見抜かれている、そんな気がした。

長い旅路

7 / 20 勇者支援生活 81日目

ドムドーラ砂漠を抜けた。スターキメラ、大魔道、ドラゴン、キラリリカントが出没する土地に近づいたはずだ。できるだけ戦闘は避ける為、発見したら隠れるようにする。今はドラゴンをやり過ぎている。

「アレフ見たか、あれがドラゴンだ。」

「大きいですね。ゴールドマンも大きかったですが、それ以上に見えます。」

「ああ、そうだな。全高では負けるが、全長では遥かに長い。威圧感が違うな。」

「あれよりでかい固体も見たことあるな。学者が駄目だと言つから相手にはしてない。」

「まだ駄目だ。アレフの装備強化が済んでから戦ってもらつ。」

俺の言葉にガイラの目が輝いた。

「そうか、やっと相手にできるか。楽しみだ、メルキドに急ぐぞ。」

「なんか申し訳ないです。」

「気にするな。どのみち相手にしてもらつのは決定事項だ。最後に

相手にするのは竜王だぞ。これくらい倒してもらわねば困る。よしもうやり過ぎせたようだ、先を急ごう。」

俺は抑えていた馬に飛び乗り、馬を進めた。アレフが続く、最後尾はガイラ。今のところ、この順番がもっとも効率がいい。

東へと駆ける、ドムドーラ砂漠を抜けて橋を渡ったのは昨日のことだ。この辺も昔は街道があつてそれなりに商人や旅人が通っていた。今はその道にも雑草が茂り、馬での通行がし辛くなっている。

「上だ、前方100mにスターキメラだ。数匹のメイジキメラを連れているぞ。どうする?」

突然、ガイラから警告。先頭を走る俺は通れる場所を確保する為、下しか見ていない。だから後ろの二人が敵を発見することが多い。

「駄目です。発見されました。こっちに来ます。」

「判った、まだ距離があるから北側の森に入る。あいつらに自由に空から攻撃させることはない。」

「了解です。」「承知。」

俺達は馬を降りて馬を引く。適当な木を見繕って馬をつなぐ。

「アレフ!あいつ等の傾向と対策は?」

「はい!メイジキメラのラリーホー、スターキメラはベホイミを使うと聞いてます。戦ったことはありません。」

「じゃあどうする？」

「まず、スターキメラを倒します。回復されると長引きます。ここは空から集団で攻撃できませんから、発見次第ベギラマで落とします。」

「それでいこう。皆散開して隠れる。スターキメラだけに固執することはないが優先的に倒そう。」

3人とも木々の陰に潜み、互いに大体の位置を確認しながら進む。アレフが中央、ガイラが右前、俺が左前、間隔は5mほど。木の枝を避けながらメイジキメラが飛んでくる。こちらを見失った様だが見逃す気はないらしい。数羽？のメイジキメラがバラバラに動く。

「ギャツ！」

ガイラが一匹のメイジキメラを飛礫で落とした。その悲鳴に散っていたメイジキメラが集まろうとする。

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、眠りの霧となりて奴等に纏わりつけ！》

「ラリホー！」

俺のラリホーは範囲魔法、だからラストワードをあえて発声する。集団戦闘では魔法を使用する際、味方への影響や誤射を防ぐ為に発声することになっている。メイジキメラの集団を中心に霧がかかる。5羽の内3羽のメイジキメラが墜落する。眠りの霧はすぐに晴れる、そこにアレフとガイラが突っ込んで落ちたメイジキメラに止めを刺す。残ったメイジキメラが木の枝を折りながら強引に飛び去ろうと

する。

「ベギラマ！」

アレフのベギラマが撃墜した。念のため止めを刺す・・・スターキメラの気配はない。しばらくの静寂。

「劣勢を悟って逃げた様だな。また襲撃してくるかもしれないな、学者どうする？」

「どうにもならんな。急いでここを離れよう。」

「スターキメラは知能が高いのですか？」

「ああ、かなり高い。キメラやメイジキメラは遙か昔に、鳥系の魔物と蛇系の魔物を合成した魔物だ。蛇系の習性で本来群れて戦うことはなかったらしい。」

「でもうまく連携して襲ってきますよ？」

「ああ、それを打開する為、魔族が自らキメラと合成した。それがスターキメラの始祖、そのスターキメラによって連携して狩りを行なうようになったと古い書物にあった。」

「なんとも信じがたい話だな。まあ学者先生の話はそこまでにして、先を急ごう。」

「あつすいません。僕のせいで無駄話が過ぎました。」

ガイラが馬を進める、先頭を務めるつもりらしい。アレフと荷馬

を挟んで俺が続く。アレフ、知識に無駄はない。そう言おうとも思
ったが馬の足音に声は届かない。俺は消えていったであろうスター
キメラに備えて空に気を配いながら馬を進める。

- - - - -

ラダトーム城図書館。真剣な顔のマギーが黒板を指示棒で指して
いる。その前には椅子に座って真面目な顔をしたアイゼンマウアー
近衛騎士隊長。

「この文節が従来の魔法と異なります。まずここから発声を練習し
て下さい。」

「ふむ、先ほども気づいたのだが、それは陛下の使用なさる蘇生の
秘術と同じだな。」

「そうですね、大臣も気づかれたようですが・・・。」

「人払いをお願いした理由が判りましたよ。冷や汗が止まりませ
んでしたがね。いや話が逸れました、続けましょう。」

近衛騎士隊長が今搔いてもいない汗を拭く。

「発音が少々難しいですので、私の後に復唱して下さい。」

マギーの発声の後に近衛隊長が復唱する。それを5回繰り返す。
ここアレフガルドでは通常魔法はこのように口頭でしか伝えられ
ない。もちろん一つ一つの単語、文節の意味は知らない。

「しかしヴィッツセンブルン殿、この魔法は別の意味でむずかしいですな。」

「わかりますか？」

「ええ、この魔法の一番の難しさは練習ができないことです。この場に対象になる相手がいません。魔法効果の成否の確かめようがありませんね。」

「その通りです。昨晚にもこれを行使する為、2時間ほどずっと口述詠唱の練習をしました。近衛騎士と特務隊士を巻き込んで、できませんでしたでは済みませんからね。」

「いえ、このような重大な秘密を公にする危険を犯してまで、我等近衛騎士の不祥事に貢献して頂けたこと、近衛騎士を代表してお礼申し上げます。」

アイゼンマウアーが丁寧に頭を下げる。マギーが少し困った顔で手を振る。

「では後10回ほど復唱しましょうか。大体の発音は手元の紙に記述してありますが、細かいニュアンスは聞かないと覚えることはできません。」

「ではお願いいたします。」

また発声の練習を続ける。繰り返す度に精度が高まる、それを感じてマギーが納得したような顔をする。

「もう覚えられたようですね。後は御自分で練習なさるとよろしい

でしょう。」

「ありがとうございます。しかし伝承は本当に私の権限で行なうてよろしいのでしょうか？」

「陛下の仰せです。それに近衛騎士隊長殿は信頼に足る人物だと今感じました。ある人物から心、技、体全てにて敵わないと聞いてます。」

「買いかぶりと言うものですよ。ある人物ですか……もしやこの魔法は……。」

はっと言葉に詰まる。その意味を察したマギーが手で遮る。

「そこまでにしましょう。この魔法を発見、解読したのは私、どうかそうしておいて下さい。」

「そうですね、陛下のお墨付きです。そういうことにはしておきましょう。では私に高評価をしていただいた方に私が感謝していたとお伝え下さい。」

そう言うときアイゼンマウアーは席を立ち、一礼してから図書館から出て行った。

本当にこれでよかったのかしら？近衛騎士隊長と陛下は多分全て判っている。ケルテン、早く帰ってきて欲しい。私の答えが正解だったか、それを聞きたい。

ゴーレム攻略

7/22 勇者支援生活 83日目

メルキドの石壁が夕焼けで赤く染まる。その直前に身の丈10mのゴーレムがそびえる。

「メルキドよ、私は帰ってきた!」

ガイラが何か言っている。まあこの間はここでゴーレムに追いかけて逃げたからな、気持ちはわからんでもない。

「来た事あるんですか?」

「ああ、何度も来ている。ただこいつには因縁があるからな。ここでその借りを返す。」

「はあ?でもあれは壊していいのですかね?」

「どういう意味だ?」

「一応、混乱しているとはいえ、街を守ってますよね。壊したらその後の防衛はどうなるのでしょうか?」

「さあ?」

「大丈夫だ。この前シュミットに聞いたら、街の人間も困っているらしい。外に出なければ襲われれないとはいえ、何時その矛先が内に向くか恐れている。街の防衛ならあの石壁でなんとでもなるさ。さ

らに正門が使えないと、物流が途絶えたままになる。まあ今は関係ない話だがな。」

俺が話に割り込む。平和になってからの話が出てくるところが商人の町らしい。とはいえ平和になったらこの街の繁栄は望めない。一番近くにあったドムドローが滅んだということは、この街がとんでもない辺境に存在することに他ならない。事実これから200年後、ロト三国の時代には影も形も無くなっていた。

「そうですか、では倒すことにしましょう。そろそろ宿屋でゆっくり寝たいです。」

アレフが荷物から妖精の笛を取り出しながら、冗談交じりにそう言う。三人ともそれは同感だろう。誰からというわけでもなく近くの木に馬をつなぐ。やる気はまんまんだ。

「よし、作戦を言っておこう。まずこの前言ったように俺とガイラで陽動、アレフが妖精の笛で眠らせる。そこまではいい。そこで次だ、ゴールドマンと同じように、ゴレムには仮の命を吹き込むための魔道装置があるはずだ。多分頭か、胸の辺りだ。初めから壊すことを念頭においたゴールドマンと違い、内部に埋め込まれているだろう。」

「つまり眠らせて弱点のありそうな場所を壊して弱点をむき出しにする。それからそこを破壊するということだな。」

「ああ、ただあいつの外装は見たとおり硬い岩でできているから、ガイラのミスリルナックル頼みだ。それでどっちをやる。頭か、胸か？もし外れたらまずお前の命はない。」

「なるほど、気持ちよく寝ていたゴーレムを起した俺は寝起きの一撃を受けるとそういうのだな。いいぜ、俺は分の悪い賭けは嫌いじやねえ。で、お前さんの見立てではどこだ？」

「そうかそうか、俺にお前の命をチップに賭けをやれと……。そうだな、俺がゴーレムの作者だとする。ならあの巨体を動かす為にそれなりの大きさの魔法石を埋め込む。これくらいかな？」

そう言って両手を丸を作る。多分水晶に万能たる力を蓄積させた物を使うだろう。

「相変わらずお前の説明は難しいな。めんどくさい理論はいいから結論を言え。」

「まあそう言っな、まあ聞け。頭部か、右胸、左胸、もしくは胸の中央あたりに仕込むことを考える。あんまり低い位置に設置する馬鹿な事はしない。」

「まあそうですね。まぐれでも攻撃が当たったら終わりですから。」

「さらに……。擬似とはいえ命を吹き込むのだからなんとなく心臓の位置か、脳の位置を選択する。どちらかという心臓の位置かな。頭は転倒した時に壊れる可能性があるし、そこまで装甲を厚くできない。」

「で、考察はいいから結論を言ってくれ。」

「判った……。頭3、心臓6、その他1……。心臓の位置にお前の命を賭ける。」

「お前の判断に従おう。もし死んでもお前を恨んだりはいしない。」

「馬鹿が……。装甲を破壊したら水晶の塊が出てくるはずだ。それを打ち砕け。これもお前にしかできない。それでゴーレムは二度と動かなくなる。」

「よし、じゃあ行こうか。」

俺のミスリルブレード、ガイラのミスリルナックル、アレフの鋼の剣を打ち合わせる。これが最後になるかもしれない、その不安を消す戦いの前の儀式。

俺がゴーレムから見て右、ガイラが左で近づく。距離が50mになった瞬間、ゴーレムの目が光る。ゴーレムが一步を踏み出す。その一步はおよそ5m、あと10歩足らずで俺達に届く。

「よし、俺から出る。ガイラは10m離れて後から来い。」

返事も聞かずに走り出す。もちろん自己強化魔法はすでにかけてある。ゴーレムが歩く方向を変える。あと10m、そこでゴーレムの動きが止まる、俺のいた場所を右脚が踏みつける、地面が大きく揺れた。俺はすでにそこにはいない。ゴーレムの股の下をくぐり、後ろに回る。ゴーレムが俺の方に向きを変えた。そこでアレフの笛の音が完成した。バランスを崩してゴーレムが仰向けに倒れた。ガイラがゴーレムの胸の上に飛び乗り、構える。

「さあ行くぞ。この賭けに勝つたら今日は俺に酒を奢れよっ！はああああ……。せいやっ！」

「これはこれは失礼いたしました。もしものことがあります故、確認させて頂きました。失礼をお詫び申し上げます。もちろん街に入っていただいて構いません。城塞都市メルキドにようこそ、勇者さま。」

わざとらしいぐらいのその挨拶は、静まり返った民衆の中響き渡る。アレフが長と握手をした瞬間、歓声に包まれた。続いてガイラが握手をする、歓声は止まない。俺も握手をする。

「到着していきなりで申し訳ありませんが、我々はここまでの道中で大変疲れています。すぐにでも宿の手配をおねがいたいのですが。」

「これは失礼しました。街で一番の宿を用意させます。もちろん代金は要りません。」

そう言うつと背後の男に何か告げる。それから群集に向き直り大きな声で宣言する。

「こちらはラダトーム城より派遣された勇者アレフ様、ガイラ様です。竜王討伐の旅の途中に我等が街メルキドを開放しに来ました。その偉業は今成されました。街を代表して歓迎するしだいです。」

この宣言にさらに歓声が響く。俺達は歓迎の中メルキドに迎え入れられた。メルキドを開放するべくゴーレムを倒したのは勇者アレフと勇者ガイラ、俺の名は記さない。

メルキドの事情

7 / 23 勇者支援生活 84日目

昨晚は全てのお誘いをお断りして爆睡した。多分俺以外の二人もそうだろう。それほどまでに12日に及ぶ旅路は厳しかったのだ。それでも朝6時になると目が醒める、完全に習慣になっているのだ。与えられてた宿屋はこの街でも最上級に属するようだ。広い庭に下りて鍛錬を行なう。

「おはようございます。久しぶりによく寝ました。」

アレフも剣を持って現れた。並んで剣を振るう。

「何だ、お前らここでも鍛錬か？真面目だな。」

ガイラが現れる。非常に酒臭い・・・もしかしてこいつお誘いを受けて酒宴に浸ったのか。

「呆れるほどタフだな。」

「いいじゃねえか、お前らと一緒にだと酒を浴びることはねえからな。学者は少ししか飲まねえし、アレフと一緒に飲むにはまだ早い。」

「酒を飲みすぎると頭の回転が悪くなる。それで不覚を取りたくないだけだ。」

「僕はお酒を買う余裕がなかったので、ほとんど飲んだことありません。」

「ああいいさ、昨日はここのお姉ちゃん達とおいしく飲めたから。」

「ほつとけ、あいつと同類とは思われたくない。お前は正統な勇者を目指すんだ。今日は街の中を見て回れ、必要と思うものがあつたら購入するといい。それとくれぐれも変なお誘いに乗るなよ。」

アレフが怪訝そうな顔をする。

「あれっ？炎の剣と水鏡の盾を購入するではありませんか？」

「ああそうだよ。この街は商店が多い、その中から然るべき店を見つけるのも修行の内、情報収集も兼ねているいろ回るといい。俺は別の用事ができた。」

俺はそれだけ言うと部屋に戻る。朝食の後に区長の屋敷に行く。

今メルキド自治区の長の屋敷の応接室にいる。余計な飾りのない実務的な部屋だが金がかかっている。リムルダールの俺の家よりずっと豪華だ。そこに長が入ってきた。俺も立ち上がって相對する。

「これはお待たせいたしました。お養父上はお元気ですかな？」

「なんだご存知でしたか。ええ元気ですよ、私を王家に売って街を護ることを考えるぐらい元気です。」

「それはよかった。昔あの方には、同じ自治区の長としての心構え

や交渉の仕方などを手ほどきして頂きました。・・・まあその話はいいでしょう。今日のお越しは何か用件があるのでしょうか。ラダトーム王家からの正式な使者ですか、それとも大臣からの非公式の使者ですか？」

「どちらでもありません。今日の用向きは個人的な責任を取る、そういったものです。」

「責任とは？」

「ゴーレムを破壊しました、そのせいで街の人に被害がたら気分がよくありません。特に勇者アレフは若く重荷になりかねません。」

「くくくつ、いや失礼。その若さのわりに結構な見識、驚きですな。ではその責任とやらをとってもらいます。リムルダール防衛責任者の手腕を期待しましょうか。」

「恐縮です。そこまでご存知でしたか？」

「ええ、3年ほど前にあなたの養父上に、近い未来ロトの予言が当たる可能性があるかと警告されました。それで極秘に調査したところ、外敵に備える準備をしていると。もちろんその中心人物について調べないことはありませんな。」

「そこまでご存知でしたか、それでは防衛施設や人員を見せていただきます。失礼ながらあまり十分な守りとは見えませんでしたね。」

「我々はゴーレムに頼りすぎていました。まさかあのようなことになるとは誰が予想できたでしょう。過去の話はよしましょう。ではご案内いたします。何か気付いたことがあったら教えてください。」

それから半日ほど街のあらゆる所をまわり、護りの不備、適正な人員の配置、ここにはない兵器の設計など様々なことと指摘、教授した。個人的には大変楽しい一日でした。

.....

宿屋に戻って夕食を頂く。誰の思し召しか非常に豪勢だ、アレフが恐る恐る手を出し、ガイラが豪快に食べる。食事をしながら今日の収穫を聞くと、途中から二人で行動していたらしい。

「町中回ったけど、どこにも売ってなかったぞ。本当に売っているのか？」

「ああ、3年前は売っていたぞ。汚い小売店だったけどな。」

「この街は本当に商店が多いです。それでもほとんど回ったと思うんですが。」

「仮にも国宝級のアイテムだからね、表に飾ってあるわけじゃない。まあ明日一緒に行くでしょう。」

「そうですか。ケルテンさんは今日何をしていたのですか？」

「ああ、この街の防衛施設の視察に行ってきた。ゴーレムがなくても大丈夫だろう。」

「なんだ、お前心配だったのか？メルキドのことはメルキドの人間に任せておけよ。」

「事実を言ったままで。あの時は無理を言っつてすまなかつたな。」

「いや、こっちこそ頼りにならなくて悪かったと思ってる。それでどうなった？」

「ああ、これだ。好きなだけ見てくれ。」

そう言っつて腰の刀を鞘ごと渡す。店の主人が鞘から刀を抜き、刀身を眺めた。なにかうなづいている。

「これはあの時のミスリルか？どうやって加工した？」

「ある村に伝わる秘伝の技術だ、教えるわけにはいかない。」

「秘伝か・・・そうだな、気軽に教えてもらっつていいものではないな。」

俺と店の主人二人で盛り上がる。後ろにいたアレフが控えめに話に割り込む。

「あの〜話が見えないのですが、お知り合いですか？」

「ああ、昔この刀が壊れた時にここに来た。修理を頼んだが無理だな、その代わりとんでもない物を勧めてきた。」

「とんでもない物？もしかして・・・」

「ああ、そうだ。炎の剣だ。これに匹敵するのはこれしかねえ、俺の自慢の商品だつて勧められた。」

「その刀とやらを見たときは驚いたぞ。種類の違う鉄を使った理に適った構造、鍛冶屋としてこれ以上の驚きはなかった。だから俺の秘蔵の炎の剣を勧めたんだがな、見事に断られた。忘れられん奴だ。」

「なるほど、お前そんな前から変な奴だったんだな。」

「変な客だったことは間違いない。それで今日は何の用だ、それを見る限り、まさか炎の剣が欲しくなったってことはないだろう。」

「そのまさかだ。俺じゃないけどな。」

「もしかしてこっちのゴツイ奴の武器か？」

胡散臭そうにガイラを指差す。俺は黙ってガイラに拳を突き出す。

「俺じゃねえ、俺にはこれがある。」

ガイラがミスリルナツクルを前に突き出す。それをまじまじと眺め、少し躊躇ってから言う。

「少しいいか？」

「ああ、いいぜ。」

ガイラが手渡したミスリルナツクルをあらゆる方向から眺める。一本のナイフを取り出して軽く当てる。もちろん傷一つ付かない。

「さっきの刀と同じミスリルだな。どうしても教えてもらおう、こいつを作ったのはどのどいつだ！」

「じゃあ炎の剣を売ってくれ。使うのはこいつだ。」

ここでアレフを前に押し出す。さっきまでのいきり立っていたのが嘘みたいに真剣な顔になった。

「この坊主がか？こいつに使いこなせるとでも言うのか？玩具じゃないぜ。」

「もちろんだ。俺の弟子だ、腕は俺が保障する。」

「そうか、おい手を見せろ。」

強い言葉にアレフが右手を出す。その手を取り手のひら見る、ひっくり返して手の甲を眺め、そのまま筋肉の付き方を見る。更に左手を出させて同じく見る。アレフの手を離すと店の奥に入っていく。

「どうしたんでしょうね。行っちゃいましたよ？」

俺は大きさに肩をすくめる。しばらくすると豪華な作りの剣と盾を持って戻ってきた。

「よし坊主、これを持ってみる。」

アレフが剣と盾を持つ。店の親父が一つの鉄の鎧を狭い廊下に立てる。

「よし、これを斬ってみる。」

「ここですか？」

「ここは武器を振るうには狭い。十分な腕が無ければ振ることすらできない。」

「できないなら売らない。たとえ王様に言われようが俺の気に入らない奴には売らない。」

「判りました。少し下がってください。」

俺達下がって場所を空ける。アレフが居合いの構え、空気が静まり返る。

「えいつ！せいや！」

アレフが気合と共に左斬り上げ、踏み込んで唐竹割りでの追撃。鉄の鎧の前面が斜めに斬り裂かれ、さらに右左に真つ二つに斬れる。すでに剣は鞘の中。アレフが笑みを浮かべる。

「これでよろしいですか？」

店の主人が壊れた鎧を手に取り眺める。しばらくすると振り返ってアレフの両肩に手を置く。

「坊主、これは今からお前の物だ、使ってくれ。」

「坊主じゃありません、アレフです。」

「そうだな、ここまでの腕を持つ者に坊主は失礼か。アレフ、お前になら只で譲ってもいい。」

「ありがとうございます。お金なら師匠に言われて24600Gにここに用意してあります。」

「判った、その金で売ろう。しかしまああなたもずいぶんと根回しのいいこった。俺が売らないとは考えなかったのか？」

「さあね。じゃあもう一つの約束を果たそう。マイラの村の一字という鍛冶屋を訪ねるといい。俺は紹介もなにもしない。」

「マイラの一字だな、覚えた。紹介なんぞいらぬ、鍛冶屋が誰かの紹介で弟子入りなんてするもんじゃねえ。」

代金を払う。買うアレフも売る店の主人も満足そうだ。これで装備は整った、城に帰る前にこの辺りに闊歩しているドラゴンを倒そう、そう思った。

ドラゴン攻略

武器屋を出た足で正門まで歩く。

「さつき何も言わなかったですけど、こっちの盾が水鏡の盾ですよ。ね。」

「ああそうだ。炎の剣に見合う盾はそれしかない。」

「よかった。下手なこと言って機嫌を損ねたくなかったので黙ってました。」

「見る目が無いと思われるのも損だ。己の目に自信があるならそれでいい。」

「いえ、隣でケルテンさんが黙っていたのでそれがあってるか・・・。」

「そうだ、自分に自信がねえなら一番使える奴に任せる。こいつといると便利だ。」

「ガイラ、好き放題言ってくれる。まあそれも正解なんだけどな、できないことは他人に任せる、それができれば楽だ。俺も魔法のことならマギーに任せた方が楽だ。」

「あれっ！もしかしてしばらく会ってないから恋しくなりましたか？」

珍しくアレフが俺を冷やかす。

「そうかもな。昨日は久しぶりに人と棘のある会話をした。もっと楽しめる会話がしたい。」

「そりゃあ俺達では無理な話だ。俺にできる会話はこれだけだ。」

ガイラが拳を突き出して戯言を言う。武闘家は拳で語るか、それはそれでいいのだろうか。

「じゃあ、これからそれで会話をしてもらおうか。相手はドラゴンだけど、後で何と言ってたか教えてくれ。」

「なんだよ、それ！そんなの判るわけねえだろうが！」

俺は完全にその文句を無視して歩く。正門にいる衛兵に声をかける。

「今日はドラゴンは見えていませんか？」

後ろの二人に気付いたようで敬礼をする衛兵。

「昨日からいろんな魔物が近くに来ています。大体は遠くでこちらを眺めてから姿を消します。今日見たドラゴンは東へと歩いていました。」

「ありがとうございます。足跡を追います。」

「あの・・・危険です。お止めになった方がいいのでは？」

「アレフ、ガイラ、危険だとき。何か言いたいことがあるだろ？」

「へっ！楽しみにしてたんだ。止めても無駄だぜ！」

「最終的には竜王を倒さねばなりません。その前に必ず通る道だと思ってます。」

「だ、そうだ。だから行ってくる。それにこの街のためにも倒しておいた方がいい。」

「すみません、では御武運を祈っています。」

衛兵の最敬礼に見送られた俺達は正門を出た。この街を護る石壁は高さ5m、所々に10m程の塔が立っていて常時回りを見渡している。スターキメラや大魔道、キラリカントは城壁からの弓矢でも追い返せるだろうが、ドラゴンの巨体にはそれは効果が薄い。昨日の視察でそれがわかったので簡単なバリスタや投石器を設置できるように設計図を描いて渡した。それでも実際に設置できるまでには時間がかかるだろう。なら今のうちに倒しておいた方がいい。

「ガイラ、ドラゴンの足跡を追う。先頭を頼む。」

「任しとけ、まあ見逃しようのない足跡だけだな！」

「ドラゴンと戦うときの布陣は中央がアレフだ。俺とガイラが左右に散る。それでいいか？」

ガイラが少し不満そうな顔をしている。

「俺が真ん中では駄目か？」

「炎の息に対しては俺とガイラの装備では心もとない。アレフが盾

を構えて耐えるのが一番いい。」

「中央は譲りません、ガイラ。一番重装備の僕に任せて下さい。」

「言ってくれるねえ。よしじゃあ任せた。」

「それだけじゃないぞ、俺とガイラで前足に攻撃を与える。ドラゴンの鱗は硬いから一撃ではやれん。隙があったら炎の剣でその傷を抉ってくれ。」

「了解です。なるほどこの炎の剣が適任ですね。」

「ガイラ、お前欲張るなよ。奴に踏まれたら終わりだぞ。」

「なんか俺信用がないな。そこまで馬鹿じゃないつもりなんだけど。」

「いや馬鹿だ。俺の言いつけを護って二回も死んでいる様なやつは十分に馬鹿だ。とりあえず後ろにはまわるなよ。ドラゴンの尻尾は受けたり避けたりできるものじゃない。」

「判った判った、最初はお前の言う通りやってやる。」

「アレフも欲張って攻撃するなよ。前脚を潰して動きを止めてから頭を攻撃するぞ。」

「よく判りました。気をつけて戦います。」

それから1時間後、揺れる大地にドラゴンの気配を感じた。

「いるぞ、あと200mぐらいか？」

「ああ見えてる。アレフ、初めに俺とお前でやつの顔にベギラマだ。片目でも潰せたら儲けものだ。」

「はい、では見つからないように近づきましょう。」

息を殺して近づく。ドラゴンの尻尾が目の前で左右に振れている。

(どうする？前にでるか。)

(いや、無理に前にでることはない。こっちを向かせる。)

(どうするんですか？)

俺がいきなり枯れ木を踏みつける。ベキツと乾いた音が響く。ドラゴンが不思議そうに首だけで後ろを振り向いた。

「今だ！……………ベギラマッ！」 「ベギラマッ！」

俺とアレフのベギラマがドラゴンの顔を撃つ。怒り狂ったドラゴンが全身でこっちを向く。

「右目が潰れていますね。」

「そうだな。ガイラ、右足は任せる。俺が左を受け持つ。行くぞっ！」

俺達が散開した瞬間、俺達がいた場所に炎の息が吹きつけられた。アレフが水鏡の盾を構えて耐える。水鏡の盾は炎に対して耐性がある、それでも痛くないわけがない。しかしその間に懐に入ったガイ

ラが右前脚に拳をミスリルナツクルを叩きつける。その痛みには炎の息が止む。

「ベホイミ！」

俺のベホイミの光がアレフを包む。それを確認したアレフも右脚側に飛び込む。ドラゴンが二人を見失って右に向き直る。俺が左脚に斬りつける、硬い！俺の一撃は表面にうつすらと傷をつけただけ。右脚はどうなった？確認するため一旦大きく距離をとる。俺の目の前を大きい物が通り過ぎる。尻尾によるなぎ払い、危なかった、距離をとっていなかったら直撃していた。

「ギヤオオオ！！！」

ドラゴンの奇声が響く。よくみるとアレフの炎の剣が、右脚の膝辺りに深々と突き刺さっている。ドラゴンの顎がアレフを襲う、それを見越したガイラの拳が潰れた右目に突き刺さる。その隙にアレフが剣を抜き離脱するが、ドラゴンが痛みへのけぞりガイラが宙を舞う。受身を取れずに背中から落ちる。

「・・・ベホイミ。」

再び俺がベホイミを唱える。ガイラが跳ねる様に飛び起きる。ガイラがいた場所にドラゴンの炎の息が襲うがすでにガイラはいない。それを確認した俺は再度左脚に斬りつける、鮮血が飛び散る。ドラゴンが悲鳴を上げて右側に傾いた。こっちは見えませんが右脚を潰せたようだ。

「ベギラマッ！」

左脚の傷口に直接手を当ててベギラマを流し込む。肉が焦げる嫌な臭い、これでこっちも潰れたに違いない。前脚を失ってドラゴンが頭だけで強引な攻撃をする。その隙をつき俺が左目を刺す。これで勝負はついた。あとは動きが止まるまで徐々に攻撃を加える。アレフの剣が右目から深々と刺さり、ガイラの拳が頭をかち割った時、ドラゴンはその動きを止めた。

横たわるドラゴンを横目に俺達が座り込む。

「何とか倒せたな。空中に飛ばされた時はやばかった。学者か？ベホイミをかけてくれたのは。」

「ああ、ちょうど俺からよく見える位置で飛んだからな。」

「あの回復がなかったら焼かれていたな、礼を言う。」

「調子に乗って目なんぞ抉るから飛ばされるんだ。反省しろ。」

「いえ、僕を逃がすために時間を作ってくれたんです。反省しろとは酷いですよ。」

アレフが弁護する。アレフも深く刺したはいいが、抜けなかったのだ。

「まあ、皆失敗はあったがうまくいった。失敗を反省して次に生かそう。」

「おう、そうだな。そういえばこいつの皮と鱗で俺の籠手をバースジョンアップしてくれる約束だったな。」

ガイラが嬉しそうにそう言うと、ドラゴンの死体を解体し始めた。俺もアレフも手伝う。それはとても大変な作業だったが初めて倒せた喜びと、これで作ることができるであろう装備への期待で、心地よい疲労となった。

その後街に戻った俺達は、衛兵を始めとするすれ違う全ての街の人に心配された。返り血に気付いていなかったのは三人だけの秘密にすることにしたのは言うまでもない。

ドラゴン攻略(後書き)

ドラゴンはやたらと強く設定しました。

筆者は弱いドラゴンなど認めません。

メルキド攻防戦？

7 / 25

ドンドンドンッ！ドンドンドンッ！

部屋の扉が多いな音を立てている。寝ぼけ眼で外を見るがまだ暗い。

「すみません！すみません！起きてください！大変です。」

扉の向こうで慌てた声がある。誰だよ、まだ起きるには早いぞ、あと1時間は寝れるはず……。

「魔物の襲撃です。すみません、起きてください！」

ガバツ！魔物の襲撃だっ！俺は飛び起きた。

「判った。すぐ行く！」

慌てて扉の向こうに返事をする到着替える。最低限の装備をつけると部屋を飛び出した。ロビーへ向かう、そこには青い顔のホテルの支配人と役人風の男が立っている。

「朝早く申し訳ありません。長より至急お越しいただけるよう申し付かっております。」

「ああ構わない、緊急時だその言葉遣いもいらぬ。詳しい説明は歩きながら聞こう。あと支配人さん、うちの勇者が起きたら、区長

の屋敷に来る様伝えて下さい。」

それだけ言うとさっさと歩きだす。慌てて俺を呼びにきた役人もついてくる。

「何がおきた？」

「はい、街の外に続々と魔物が結集しています。その数100は下らないと聞きます。」

「一大事だな。ゴーレムを倒したことの弊害がもうでたか。」

もう歩いている場合ではない区長の屋敷まで走る。その玄関には十数人の兵隊が立っている。青い顔をして各々が武器を手入れしている。応接室まで案内されると、そこにはメルキド自治区長ともう一人偉そうな人が座っている。やはりその顔色は青い。

「お待たせして申し訳ありません。」

「あ、ああ、こちらこそ朝早く起して申し訳ありません。紹介しておきます、こちらがラダトーム王家メルキド駐在弁務官のブルーメ男爵です。こちらは国務大臣付き特務隊士デルテン殿です。」

俺の視線が一瞬そっちに泳いだのに気付いてポーマル区長が互いに紹介した。一応一礼するが反応は薄い。

「緊急のようですので簡潔にお願いします。私は何の為に呼ばれたのでしょうか？」

「何を暢気なことを言っておる！魔物が攻めてくるのだ。勇者を率

いて迎撃せよ！」

弁務官とやらがなんか偉そうに横から命令する。かちんときたので言い返すことにする。

「失礼ながら男爵、敵の数は100を越えると聞きます。勇者2名、私を含めて3人でどう迎撃せよとおっしゃるのですか？」

「なんだとっ！こついつとときの為にそなたらの様な者が飼われておるのだっ！つべこべ言わんとさっさと行ってこい！」

口から泡を吹き出して怒鳴る。横の区長が苦い顔をしている。

「区長殿、失礼ながら弁務官殿は興奮しておられる。どこか安静にできるお部屋にご案内されてはどうですか？」

「そのようです。弁務官殿、ここは我々に任せて頂きたい。あちらにお部屋を用意させますので、どうかそちらへ。」

右手を軽く挙げ執事に促す。執事が小声で弁務官に話しかけ退室させた。

「これでやっと話ができます。私としてはたった3人で対抗させるつもりはありません。魔物との戦闘の専門家としてアドバイスして頂きたい。できれば指揮をとって頂きたいと思います。先の責任とやらを果たしていただけるものと理解しております。」

「率直な意見で判りやすいですな、お受けせざるを得ませんな。」

ボーメル区長が明らかにほっとした顔をする。

「では現状を整理しましょう。敵の数、種類、編成。それと守備の人員を教えてください。」

「では魔物に関しては、斥候に出した者に説明させますのでしほしお待ちを。その間にこちらの陣営について説明します。現状この街で登録されている兵隊は50名、あとは私の私兵が10名です。」

この街の人口は5万人、妥当な人数だな。だとすると後はいままから募集するしかない。

「それはすぐに召集して下さい。しかしそれでは圧倒的に足りませんね。」

そこに一人の兵士が入ってきた。区長に一礼して俺の方に向き直る。俺が口を開くのを待っている。

「報告は簡潔にお願いします。形式的な挨拶はいりません。」

「はい、では敵の陣容を説明します。ドラゴン3、金色の魔法使い1、赤い魔法使い10、金色のリカントが50、キメラ系の魔物が50。まだまだ集まってきました。」

「大体判りました。金色の魔法使いは大魔道、赤いのは魔道士、リカントはキラリカント、キメラの種類は赤茶色の固体がメイジキメラ、ピンク色の固体がスターキメラです。まず全員に固体名を徹底させて下さい。よろしいですか？」

「す、すいません。一度では覚え切れませんでした。もう一度お願いします。」

「では書きましょう。紙とペンをお願いします。」

執事が紙とペンを用意して俺に渡す。俺がそれにさっき言ったことを記述して渡す。

「では急いで伝えてください。誤った認識は負けに繋がりますので徹底してください。」

礼もそこに兵士が飛び出していった。

「私の部下が失礼致しました。それで後はいかが致しましょう?」

「それでは至急民兵を招集して下さい。この街の危機ですので強制的に集めて下さい。」

「強制と言われましても、こちらの言うことを聞いてくれるかどうか。」

区長が額の汗を拭く。召集する自信がないようだ。

「できないのならこの話はなかったことにしましょう。我々は城に帰還します。あなたがたも命が惜しければキメラの翼でも使って逃げるといいでしょう。まあ財産の持ち出しは無理ですけどね。」

「そっそれは困る。しかしどうやって集めればいいのか。」

「まず町の存亡の危機だと認識させて下さい。先も言いましたが逃げるという選択肢も伝えて結構です。ただしドムドローラからの流民が、幸せに暮らしているとは思わないで下さい。」

「そこまで酷いのですか？それを私に伝えると！」

「城下街の片隅に流民街ができています。それはそれはひどいものです。生きるか死ぬか、地を這って生きるか、その選択をしてもらいます。」

「……………」

「集める民兵は最低で500。半数は20歳以上の男性を、残りは女性でも構いません。」

「しかし、戦えるものを集めるにはどうすればいいか……」

「ではまず狩人を弓兵として使います。多分得意分野ですので召集に答えてくれるでしょう。次に各家庭から男手を出させてください。ただし男が一人しかない家庭からは召集しないこと。父一人、子一人の家庭なら父一人を召集、子が二人以上いる家庭は下の子を召集すること。これを徹底させて下さい。街が助かって人も人がいなくなつては意味がありません。もちろん十分な報酬をだすことも伝えてください。それでも足りない場合は女性でも構いません。戦う意志のない兵士は要りません。」

「……わかりました。そうします。」

「先日の指摘した備蓄品は用意してありますか？」

「まだバリスタや投石器は完成を聞いていません。ですが油、大鍋、薪、杓、矢、木盾は十分に用意させました。」

「結構です。では兵の指揮権限をもらいます。今ある兵員で2時間魔物を止めます。2時間経って応援が来ない場合は撤収します。よろしいですね。」

「お任せします。こちらも急いで集めますのでそれまでお願いします。」

「では行きます。」

俺が屋敷の玄関をでるとガイラとアレフが兵士に紛れて立っている。すでに戦うつもりのようだ。

「では皆さん、行きましょう。大丈夫、心配するな！我々だけではない、じきに区長殿が民兵を連れてきてくれますよ。」

俺を中心にガイラ、アレフが左右につく。その後ろに兵士30名ほどが続いた。

メルキド攻防戦？（後書き）

原作にはないイベント発生です。

勇者が動くことによるバタフライ効果です。

メルキド攻防戦？

城壁の上に立つ。眺めは最高だ、悪いほうだが。まだ夜は明けていない、空が東から薄っすら明るくなっているだけだ。多分攻撃は夜明けからだろう。キメラ系の魔物は鳥の習性で夜目が利かないはずだ。夜明けまであと15分程度か。

「アレフ、ガイラ、どう思う？」

「ドラゴンって個体差があるんだな。この間の奴の方が大きかったぞ。」

「そういう問題ですか？しかしこれだけ魔物が揃うと圧巻ですね。」

「いや、感想を述べてくれと言ったつもりじゃないけど・・・。」

「作戦、指揮はお前に任せる。いつも通りだ。」

「そうですね、後ろの皆さんも指示を待ってます。」

その会話を聞いた兵士達が真面目な顔で頷く。俺は一段高い場所に登り、振り向く。

「よし、では班を3つに分ける。弓が得意な者は俺から見て右、そうでない者は左に移れ。」

その言葉に30人近くが右に移る。

「では弓隊の指揮はガイラに任せる。空中の魔物だけを攻撃してく

れ。残りの者は用意した油を煮て敵襲を待つ。敵が登ってきたら頭からかけてやれ。油班の半分は俺、残りはアレフが指揮を執る。」

その命令に兵士がそれぞれの班長につき従う。俺の元には15人、アレフの元に15人、ガイラが30人を受け持って困った顔をしている。

「ガイラ、人数が多いなら一人副長を指名しろ。ここを中心にして半分を受け持ってもらえ。」

「そうさせてもらう。どうも指揮するなんて慣れねえ。」

俺とアレフの兵士に大鍋を用意させる。油をなみなみと注がせて、薪でがんがんと熱する。

「アレフ、油をかぶった魔物には、お前の炎の剣で着火してやれ。パワーワードは、“炎よ、敵を撃て”だ。狙いたい場所に剣先を向けるだけでいい。城壁に登られる前に必ず落とせ。槍で突け、剣で斬れ！」

兵士たちが真剣な顔で自分の担当場所に予備の薪を積み、油の入った樽を置く。

「ガイラ、弓隊で木盾を並べてくれ。」

「OK!・・・これは濡らしてあるのか？」

「ああそうだ。ギラや炎対策だ。」

「なるほどな、よおーし皆、等間隔に並べるぞ。急げよ！」

俺が用意させた木の盾は縦2 m、横1.5 m、厚さ10 cm。斜めに立てられるようにしてある。ずいぶんと重たい。運ぶのに苦勞している、街の人々がそれも女、子、年寄り合わせて十数人が城壁に登ってきている。。

「何をしている？危険だぞ。」

「何言ってるの、この街が危険なんですよ？逃げる場所なんてないわよ！」

「そうだ、兄ちゃん。俺達にも手伝わせるよ。」

「そうじゃ、若い者ばかりに任せるわけにはいかんな。ここはわた達の街じゃ。」

「はあ・・・わかりました。皆さん、油の鍋をお願いします。危険ですから敵から見えない場所で作業してください。それと温度が上がりすぎると自然に燃えますから、気をつけて下さい。」

俺が大声で叫ぶ。兵士たちが鍋から離れて、盾の設置を手伝う。女、子供、年寄りが盾に隠れる位置に新たな大鍋を置き、薪に火を点ける。

さてここまで準備して、いきなりドラゴンで攻めてきたらどうしようか？・・・その時は覚悟を決めるしかないな。

朝日が昇る。金色の絨毯がこちらに向かってくる。空からは羽音が襲ってくる。見極める、今一番怖いのはドラゴンだ。目を凝らす・・・ドラゴンには動きはない。敵との距離はあと100 m、矢が空を飛ぶ。ガイラと副長に選ばれた男の声が響く。

「まだ遠い！無駄に矢を使うな！」
「よく狙え。矢は効果的に使うんだ。」

近づいてきたキメラ数匹が矢に当たって落ちる。ホバリングして炎の息を放ってくるが、射手は一矢撃つ度に盾に隠れている。キラリリカントが城壁に取り付いた。城壁の高さは5m、キラリリカントは2mを越える。一跳びで城壁の一番上に手がかかる。あちこちで煮えたぎった油を浴びたキラリリカントの悲鳴が上がる。兵士の間を縫って登ってくるキラリリカントの首を斬り裂く。噴出す鮮血、落下を確認する。

緒戦はまずまず、ボランティアの参加が嬉しい誤算だ。

「まだまだ油はあるよ！」

「これでも喰らえっ！」

女が油を次々に準備し、子供が小石を投げる。矢が次々と放たれる。相手に飛び道具がないのが救いだ。しかしあちこちで幾人かが急に動きを止める。メイジキメラのラリホー、俺は手近な兵士を蹴りつけて起す。そこに登ってきたキラリリカントに斬りつける。

「すみません。助かりました。」

「礼は後でいい。敵の侵入を許すな！」

周りを見渡す。何匹かキラリリカントが城壁に登っている。近くの魔物に斬りかかる、足元の兵士が血を流してのた打ち回っている。数合でキラリリカントを倒す。兵士は・・・近くにいた爺さんが脚を引っ張って盾の影に移している。俺が駆け寄ってホイミを使おうとする。

「ええ、ええ、わしがやるから、兄ちゃんは戦を見るんだ。」

「すまない。」

言われた通り戦況を見る。登ってきた魔物はアレフやガイラに倒されている。何箇所かで松明のようにキラーリカントの死骸が燃えている。少し攻撃の手が緩んできている。第一波はここまでだろうか？

「があああああー！」

ドラゴンの吼え声が響く。その声に次の攻撃の波が襲ってくる。飛んでくる火の球、魔道士によるギラでの攻撃、皆が盾の後ろに隠れる。空いた場所からキラーリカントが登ってくる。城壁の上で白兵戦が始まる。

「非戦闘員は城壁から降りて！無理はするな！」

声を限りに叫ぶ。かけられていた梯子を降りる者はいない。子供が柄杓で油をかける。女たちが薪を投げつける。ひるんだ魔物に槍が突き刺さる。負傷した兵士たちが復活してきた。俺が、ガイラが、アレフが城壁を走る。俺が斬りつけ、ガイラが突き落とし、アレフが燃やす。白兵戦をしているところには魔法は飛んでこない。立ち上がった兵士たちも奮戦する。また攻撃の手が緩んだ。

魔物が引いていく。敵は100mほど距離を置いて陣を張る。ドラゴンを中心にキラーリカントが集まる。空にはキメラの大群。さつきより魔物が増えている。盾に隠れて息を整える。ドラゴンが来たらどうする？眠らせる・・・駄目だ。敵も一匹じゃない。

「アレフ！ガイラ！ドラゴンが来たら降りるぞ！」

「おうっ！承知。」

「了解です。」

「があああああー！」

ドラゴンの咆哮、予想通りにドラゴンを先頭にキラリカントでの魚鱗、城門に突撃してくる。

「お前達は降りるな。弓が苦手な者も弓で援護してくれ。弓隊はいままでどおり対空攻撃いいな！」

俺が飛び降りる。ガイラが、アレフが続く。ドラゴンは目の前、キラリカント達が迫る。

メルキド攻防戦？

ドラゴンがものすごい勢いで迫る。城門にぶつかっただら開門してしまうだろうか？とはいえ突進を止める方法はない。ならば・・・。

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお万能たる力よ、纏わりつく影となりて、敵を縛れ。ボミオ
ス！》

ドラゴンの突進が鈍るのを確認、さらに

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお万能たる力よ、内なる光となりて、我等と駆けよ。ピオリ
ム！》

さらにもう一つだ。

《俺はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお万能たる力よ、鋭き刃となりて、わが武器に宿れ。バイキ
ルト！》

感覚が鋭くなる。ガイラとアレフが驚いた顔で俺を見つめる。

「学者っ、お前何をした!？」

「なんですっ?この感覚!！」

「話は後で聞く、ドラゴンを一気にやるぞ。」

このドラゴンは先日のドラゴンと較べると一回り小さい。首に攻

撃が届きそうだ。動きが鈍ったドラゴンの懐に飛び込み、首を左から斬り裂く。まだ浅い、すぐに横に飛びのく。ほとんど同じ場所をアレフの炎の剣が右から切り裂く。喉が切り裂かれて血が噴出す。アレフが飛び去った後に、ガイラの拳が突き刺さる。嫌な音がしてドラゴンの首がありえない方向に折れる。倒れたドラゴンが正門を塞ぐ、これでもう正門は開くことはない。

城壁の上から大歓声、俺達の周りから怒声が響く。キラリリカント達が俺達を襲う。だがアレフにもガイラにもその動きは遅く見えず。キラリリカントの爪がアレフを襲う、アレフが飛び去った後にはキラリリカントの腕が落ちている。ガイラがそのキラリリカントの頭を砕く、倒れたキラリリカントの脚をつかんで他の魔物に投げつける。投げつけられたキラリリカントが仰向けに倒れる。その首を俺が斬り飛ばす。

鬼人のごとき働きに魔物たちがありえない恐怖に慄く、立ちすくみ、後退る。俺達に一切の容赦はない。俺の刀が、アレフの炎の剣が、ガイラのミスリルナツクルがキラリリカント達を駆逐する。鋭敏になっていた感覚が元に戻るころ、俺達以外に立っている者はいない。

城壁の上から縄梯子が下ろされる。あわてて登る。城壁の上で大の字になる。胸が激しく上下する、息を整え声を絞り出す。

「敵はどうした？」

「200mほど離れた所で集結しています。動きはありません。」

アレフとガイラが俺を見下ろす。二人の息も荒い。

「後はドラゴンが二匹と本命の大魔道だ。悪魔の鎧と鎧の騎士が大魔道を護衛している。その後ろに骨の軍勢だ。」

「キメラたちを率いているのはこの間のスターキメラですね。なんとなく覚えがあります。」

「魔物のオールスターズだな。まだ民兵は来ないのか？」

「ああ、まだだ。油も矢ももう少ない。」

息が整ってきた。上半身を起して差し出された水を飲む。

「まだまだいっぱいいるな。あと何回耐えられるかな？」

「今のままだと後一回だ。兵士も物資も限界が近い。」

立ち上がって魔物の軍勢を眺める。

「鎧の魔物は城壁を登ることはできない。骨なら・・・できるだろうな。しかし矢が足りない、キメラたちの攻撃に対応できるのは後一回だな。よし誰か区長の屋敷に走ってくれ。もう限界だ、次追い払ったら撤退を考えるぞと伝えてくれ。」

「私が行きます。なにか伝令の証を下さい。」

水を差し出した若い女がそう言う。王家の紋章の入ったナイフを渡す。女が駆け出した。

「よーし、援軍の催促はしたぞ。さあ次はどうくる？」

鎧の軍団が前衛、骨の軍団が後衛となり前進してくる。

「あいつら、何をやる気だ？学者わかるか？」

「いや皆目、検討がつかん。あの布陣ではこの城壁は破れんぞ。」

次の瞬間、無数の矢が降ってきた。慌てて盾の後ろに隠れる。何人かの兵士が矢で倒れる。

「なるほど、骨の連中は弓が撃てたか。なかなかやってくれるじゃないの。今までの被害を報告してくれ。」

「死亡10、重傷15、軽傷20です。」

「ふむ、治してやろうにもこの矢の中移動するのは大変だな。んっ？」

撃ってきた矢を数本集める、やはりそうか。こっちが放った矢が混じっている。あの大魔道め、けっこうな策士だな。もうこっちの矢が少ないことを見越しての攻撃か。

「アレフ、重傷の兵にベホイミを頼む。お前の装備なら行けるだろう。俺もこっち側の兵を治す。」

「でもその軽装でいけますか？」

「ガイラと盾ごと動くから大丈夫さ。さあ行け！」

アレフが盾を構えて重傷者のいる所へ走る。時々矢が当たっているが魔法の鎧と水鏡の盾に弾かれている。

「というわけだ、ガイラ動くぞ。」

「おう！力仕事なら任せろ。」

ガイラとそばにいた兵士と俺で木の大盾を少しずつ動かす。矢が集中して飛んでくる。何か焦げ臭い。

「学者、火矢だ。」

「ああ、気休めの水では持たなさそうだな。しかしまああれこれよく考える、ご苦労なことだ。」

「暢気なことやってんじゃねえ、どうする？」

「仕方ない、俺は走る。お前らは城壁にうまく隠れる。」

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混ぜりて万能たる力となれ、
おお万能たる力よ、不可視の盾となりて、俺を守れ、スカラ》

スカラを頼りに走り出す。後ろでガイラがなにか言っているが無視だ。

俺は走って重傷者のいる場所に行く。たまに矢が当たるが手前で弾かれる。寝ている兵士を城壁の矢避けまで引つ張りベホイミをかける、それを繰り返す。それでも2名の命は助けることはできなかった。アレフの方はどうだろうか？ここからは見ることはできない。

しばらくして矢の雨が止んだ時、木の盾は全て燃えつきた。油の鍋も火矢によって燃えてもう使い物にならない。次はキメラと骨た

ちの攻撃だろうな。判つていても止める方法はすでない。逃げようにも一緒に隠れている民間人を見捨てて逃げるのは、俺はともかくガイラやアレフにはできまい。

メルキド攻防戦？

矢の雨が止んだ戦場に硬い物を叩く音が響く。正門の方向からだ。上から覗きこむと鎧の騎士が手にしたハンマーで鉄の扉を叩いている。さつきドラゴンで塞いだはず・・・なんたることだ、ドラゴンの死骸が少し動いている。現に今も鎧の騎士によって引っ張られて動いている。このままでは正門が破られる。

「アレフ、ガイラ、見えるか!？」

できる限りの大声で呼びかける。正門の真上まで走る。ガイラとアレフはキメラに邪魔をされて近づくことができないでいる。くそっ！援軍はまだか！もう打つ手がない。

遠くから視線を感じる。大魔道がこちらを見ている・・・金色のローブ、見えない顔が笑っているような気がした。勝ち誇っているのか、怒りがこみ上げる。ふざけんじゃねえ、俺が片手で戦ってやっっているようなものなのに勝ったつもりだと・・・。

「くっくくくっあっはははっ！ならば勝ち誇ったまま死ね！」

《俺はMPを30消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、神の怒りとなりて・・・「ケルテンさん！ケルテンさん！」

誰だ？俺の邪魔をするのは！俺の肩を揺さぶる者がいる。我に返る、アレフか。アレフが後ろを指差す。そこには多くの人々、それも武装したも達。たくさんの矢が飛来する。次々とキメラたちが

撃墜される。

「援軍です。援軍が来ましたよ。」

アレフが座り込む。俺も力が抜けて座り込む。今初めて気づいた
が雨が降っている。朝日が昇るのは見ていたが、その後は天候の変
化に気づいていなかったようだ。

「これでなんとかなるか？」

駆け寄ってきたガイラに聞かれる。

「まだだな。まだやつらにはドラゴンがいる。あれに暴れられたら
民兵では敵わん。それに下の鎧の騎士を止めないと門が破られる。」

「なら俺が下の奴等を止める。」

「無茶だ。敵の数を見る！お前一人でどうなる？」

ガイラが俺を見て意地の悪い笑みを浮かべる。

「そうだな、俺一人の力じゃ無理だ。だからさっきのをくれ。あれ
はやばいな、癖になりそうだ。」

「……馬鹿が。わかった、やってやる。だが10分だ、それだ
けしかもたんど。」

ガイラに手を当て、無言で魔法をかける。

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、内なる光となりて、我等と駆けよ。ピオリム！》

《俺はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、鋭き刃となりて、この武器に宿れ。バイキルト！》

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混ざりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、不可視の盾となりて、彼を守れ、スカラ》

「よし、行ってこい！さつきより強烈だぞ、楽しんで来い！」

「よっしゃっ、まかせろっ！」

ガイラが勢いよく城壁から飛び降りる。門に取り付いた鎧の騎士を一撃で粉砕する。ガイラの勢いは止まらない。手当たり次第殴りつける、その姿はまるで狂戦士のよう。

城壁の上に援軍が登ってくる、外側から登ってこようとすがいこつ達を槍で追い落とす。まだ飛んでいるキメラ達に向かって矢を放つ。勝ちは見えた、あとは仕上げだ。アレフに小声で伝える。

「アレフ、俺が合図をしたら正門の上に立って、こう言ってくれ。

は。***よ、**に***に***。***だ！」

「はい！」

俺は集結した民兵を指揮すべく大声をだす。

「城壁の外には下りるな。」

「門の内側に兵を集めよ！」

「ガイコツどもを突き落とせ。鎧の魔物は相手にするな！」
「キメラを撃ち落せ。ピンク色のがボスだ！」

指揮をとっていたスターキメラに矢が集中する。避けきれずに墜落する。地面でのたうちまわるスターキメラに次々と矢が突き刺さる。ピンク色の塊がその動きを止めた。キメラとメイジキメラの統率が乱れる。

「次は魔道士を撃て！」

離れた所でキラヤリホーを放っていた魔道士に矢が撃たれる。雨のように矢が降り注ぐ。

大魔道を見下ろす。さつきとは逆の立場になった。人間の団結力を甘く見たのがお前の敗因だ。奴にむけて首を掻き切るジエスチャ。大魔道に怒りが感じられる。もっと怒れ、感情のままに突っ込んで来い。

大魔道がドラゴンに騎乗する。杖を振り上げ、前に突きだす。その合図にドラゴン二頭が前進する。後ろに悪魔の鎧一個中隊ほどがつき従う。

そうだ、もうお前には逃げ帰る場所はない。玉砕を覚悟に特攻するしかない。アレフに視線を送る。アレフが城門の上に立ち、手にした炎の剣を天に突き上げる。

「俺はMPを30消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

「おお万能たる力よ、神の怒りとなりて、天より落ちろ！」

誰かが何かを言っている。

（あの魔法はなんだ、お前は何を隠している。）

（あの魔法はなんだ、お前は何を隠している。）

（あの魔法はなんだ、お前は何を隠している。）

（最初からそうすればよかったではないか。）

（なぜ力を見せない。）

（お前は皆を偽っている。）

俺を詰問する声が聞こえる。五月蠅い、止めてくれ。頭がガンガンする。割れるようだ。

誰かが俺の名を呼んでいる。誰だ、今は静かに眠らせてくれ。

はっ！誰かが俺の肩を揺さぶっている。

「ケルテンさん、ケルテンさん！大丈夫ですか？」

アレフの顔が目の前にある。両肩に手が置かれている。

「どうしたのですか、うなされていましたよ。」

あれっ！俺は戦の指揮をとっていたはず。

「アレフッ！戦はどうなった？」

「何を言ってるのですか。我々が勝ちました。ケルテンさんが勝鬨を上げると言っただじゃないですか。」

ああそうだった。ギガデインをアレフを隠れ蓑にして使った。なるほど俺はそれが後ろめたいからあんな夢を見たのか。だがもうこれでアレフは勇者としての伝説を残した。

「……………そうだった、神の雷を背にしたお前が神々しく見えたような気がした。」

「もう止めてください、みんな同じことを言うので困ってます。」

「諦める、勇者として名乗り上げたのはもう二ヶ月も前のことで、力量と功績が認められたのが今だということだ。お前の務めを果たせ。」

「務めですか？」

「ああそうだ。王女ローラ様を助け、竜王を倒す。民衆の希望になるのも勇者の務めだ。」

「希望ですか……………」

「難しく考えるな。どうせ引き返せるものでもない……………すまないがもうしばらく眠らせてくれ。勝ったのなら眠っていても誰も文句は言わないだろう。」

俺は目を瞑る。アレフが静かに部屋を出て行く音が聞こえる。俺は心地よい眠気に身を任せた。

……………

「どうだった？」

「すぐくうなされてしまったので、無理矢理起こしました。そうしたら戦はどうなったと聞かれました。」

「そうか、夢の中まで戦をしていたのか。」

ガイラとアレフがため息をつく。

「そうみたいです。それで僕に勇者として勤めを果たせと仰いました。民の希望になれと。」

「そうだな。ロトの伝説ほどではないが、お前も伝説を残した。すでに神の申し子の二つ名ができた。」

「あれは僕の力じゃないですよ。戦に勝ったのも皆の力のおかげじゃないですか。僕だけいいところをもっていくなんて申し訳ないです。」

アレフが両手をふって否定をする。

「がっはっはっは！俺も学者もそんな柄じゃないな。学者が指揮して、俺が奮戦して、お前が鼓舞する。それでいいじゃないか、それがやつと言う勤めというやつだ。諦めろ。」

「そんなものですかね。なんか釈然としないなあ。」

「それだけ期待されているんだ。まあそんな話はいいさ。俺はこれから飲んでくる、誘いがいっぱい断れねえや！」

それだけ言い残してガイラが出て行く。一人残されたアレフが佇む。

「期待……ですか？」

返事をする者はいない。

逃亡者

時は7月25日早朝に遡る。ケルテンが戦を開始した頃、ラダトームにて異変が起きた。メルキドから脱出してきた者達が、城下街の入り口に溢れたのである。その数およそ百名、裕福そうな服装にじゃらじゃらと宝石類を身につけた者が多い。いきなりの来訪に衛兵が制止している。その中でも一番偉そうな男が衛兵にかなりたてる。

「おい、私はメルキド自治区駐在弁務官のブルーメ男爵だ。至急大臣に報告せねばならぬことがある。城まで護衛をせよ！」

「しつ失礼しました。しばしお待ちを！」

衛兵の一人がすぐ横の控えの小屋に入ると、隊長に問いかける。

「あの、メルキドの弁務官とやらが城まで案内しろと言ってますがどうします？」

「あっ？名前を聞いたか？」

「ブルなんとか男爵とか言っていました。」

「まったくいきなり大勢で来やがって、こっちの身にでもなれよ。お前とりあえず城まで走れ。文官の誰かに報告してこい。必要ならなんらかの命令が下るだろう。」

報告してきた兵士に投げやりな命令をすると、隊長が小屋からでる。頭を掻きながらざわざわしている集団に話しかける。

「それでは皆さん、まだ朝も早いですし騒ぎになると困りますので、こちらに並んで頂けますか？」

「おい、こんなやつらと一緒に扱うとは無礼であろう。先の兵士はどうした？城に案内せよと言ったであろう！」

「只今城の役人に照会しております、それまではお待ち頂きたい。私も職務ゆえお許し頂きたい。」

その言葉に隠された殺気にブルーメ男爵が退く。

「そつそうか！職務ならしかたないな。待つとしようか、しかしここではなんだ、その小屋にでも入れてはもらえぬか？」

「わかりました。手狭な所ですがここでよければどうぞお入り下さい。」

兵士が男爵を案内して小屋に入れる。小屋の外では隊長、兵士による聞き取りが行なわれる。話を聞いた者の顔色が変わる。ドムドムラ陥落の再来、最悪の予感がする。早く城に伝えねばいけない。隊長はさきの命令を後悔した。もう伝令はだした、帰ってくるのを待つしかない。長く感じる10分の後、先ほどの兵士が馬車と近衛騎士一個中隊を連れて戻ってきた。そこから近衛騎士隊長が現れる。

「近衛騎士隊長のアイゼンマウアーだ。メルキド駐在弁務官殿はいずこか？」

この街に住む者で知らぬものはいないと言われる近衛騎士隊長の登場に、兵士達が敬礼をする。

謁見の大広間にラルス16世が玉座に座り、国務大臣と近衛騎士隊長が左右に並ぶ。近衛騎士と文官が並ぶ。特務隊士のシユミットもいる。中央にブルーメ男爵が控える。国務大臣が非常に不機嫌な声を出す。

「メルキド自治区駐在弁務官がなぜここにいるか、説明せよ。」

「メルキドに魔物の襲撃がありました。重大な異変でございますので至急ご報告に上がりました次第でございます。」

油汗を流しながら弁明するブルーメ。それを聞いた大臣の顔がさらに険しくなる。

「魔物の襲撃だと、それは何時のことだ？またメルキドはすでに落ちたのか？」

「今日の夜明け前にございます。城門が破られ魔物がなだれ込んできました。早急に報告に致す為にルーラにて帰還致しました。」

メルキドの陥落の報に謁見室がどよめく。

「静粛にせよ、御前である。ブルーメ男爵よ、その報間違いないな。魔物の数は？種類は？迎撃に当たった者はどうした？」

「魔物の数は500以上、ドラゴンが数頭いると聞きました。それと特務隊士のケルテンなる者が迎撃の任につきました。」

「ふむ、なるほどのう。」

それだけ言うとシュミットを一瞥する。シュミットがラルス16世に一礼をし踵を返すと大臣の執務室へ向かう。謁見の間にしばらく静寂が包む。シュミットが戻り大臣に耳打ちする。

「近衛騎士隊長、この者を拘束せよ！」

その言葉に近衛騎士隊長が手を挙げる。並んでいた近衛騎士2名がブルーメ男爵に駆け寄り跪かせ、後ろ手に取る。

「国务大臣、これはどういうことですか？私は何をしたというのです？」

「馬鹿者がっ！まだメルキドは陥落しておらぬ。そなた恐ろしくなつて逃げてきたな。」

「なぜそのようなことが判ります？私は見てきたのです。」

「まだ嘘をつくか、お前が言った特務隊士ケルテンがおるなら、私はそこにいるかの様に見ることができると現に奮戦しておるそうじゃ。」

「そんな馬鹿な。その様なことできるはずがありません。」

ブルーメ男爵が口から泡を飛ばす。

「まだ言うか、そなたと共に城に来た者からも話は聞いておる。あの者等はメルキドが攻撃を受ける前に逃げ出したそうだ。緊急の民兵の強制召集から逃げたとも聞いておる。近衛騎士隊長、間違いないな。」

近衛騎士隊長が一步前にでて告げる。

「全ての者から話を伺っています。互いに口裏を合わせられない状態での証言です。間違いはありません。」

「だ、そうだ。もう言い逃れはできぬ。そなたの処分はメルキドの戦が終わってから決めるとしよう。それまでは牢屋にでも入れておけ。」

ブルーメ男爵が頂垂れる。もう逃れられぬと悟ったようだ。そのまま近衛騎士によって引きずり出された。

「国務大臣よ、それでメルキドはどうなったか？」

ラルス16世が初めて口を開く。国務大臣がシュミットに発言させる。

「はい、私の同僚、特務隊士ケルテンと勇者2名、数十人の兵士と共に奮戦中にごさいます。」

「そうか、それで勝機はあるのか？」

「難しいかと思われます。なにしろ敵の数が膨大ですのでいずれ力尽きるかと。」

あまりに冷静で冷酷な判断に場の空気が凍りつく。

「では希望はないのか？」

「……………」

「無理です。技術的にはできますが、その意志が感じられません。」

シュミットが冷静に返す。水晶に映る戦況が変わった。

「後ろから矢が飛んできていますね。援軍でしょうか？」

「そのようだな。城壁に兵士が来ておるな。これでなんとかなるか？」

シュミットが黙る。水晶に移る景色から情報を得る。

「まだです。ケルテンの視線が物語っています。ドラゴンとそれを率いるあの大魔道を何とかせねばいけません。それに城門が破られてもいけません。」

映像にはガイラが城門前に降りる姿が映る。

「この勇者は何と言ったかの？」

「勇者ガイラです。なかなかの手錬です。白兵戦のみとは言えこれ以上の手錬は見たことがありません。」

二人がその戦いを黙って見続ける。見ていることしかできない、その時間は無限に感じられた。しばらくして戦況が好転する。大臣がほっと息をつく。

「まだです。ドラゴンによる特攻です。最後にして最大の攻撃、これを止めることができねば勝ったとは言えません。」

大臣が黙って水晶球を見つめる。勇者アレフが天に剣を向ける。次の瞬間、眩しい光が部屋を満たす。

「何が起きた。」

大臣が水晶球に詰め寄る。手が滑って水晶球が机から落ちて割れた。

「しまった！戦況はどうなった？シュミット見えたか。」

「いえ見えませんでした。確認する術もなくなりました。しかしまだ勇者の光点は存在しております。」

二人とも魔法の地図の光点を眺める。その光は10分経っても、20分経っても変わらず存在している。

「どうやら生きてはおるようじゃな。」

「そのようです。では帰ってくるのを待ちましょう。」

シュミットが一礼して退室する。さっきみた光は雷、天からの雷か！もしかやあれは伝説の魔法・・・いやあの時勇者アレフは天を指していただけで、そんなことはありえぬ。判らないことばかりだ、早く戻って来い。聞きたいことは山ほどある。シュミットが浮かない顔で廊下を歩く。すれ違う者達も浮かない顔をしている。

戦の後

7 / 26 勇者支援生活87日目

朝がくれば目が覚める。これは幸せなことだ。いつものように鍛錬をおこなう、隣にはいつも通りアレフがいる。その顔は何かを言いたそうだ。

「何か聞きたいことでもあるのか？顔にそう書いてあるぞ。」

「ええ、昨日のことですが・・・」

アレフがとても言いにくそうにしている。俺が手で促す。

「昨日、いくつか知らない魔法を使いましたよね？」

「ああ、使った。俺が発掘してきたロストマジックだ。」

答えてもらいたいことが足りないのか、まだ不満そうである。

「わかったよ。まず効果を感じただろうが味方の敏捷性を高めるピオリム、ガイラに使った不可視の盾スカラ、武器を強化するバイキルトだ。こんなところか？」

「それである時、自分の感覚が鋭くなったような気がしたのですね。あと最後の・・・」

アレフの言が止まり、視線が俺の後ろにずれる。俺が振り向くとガイラが壁に手をあて、脚を引きずりって歩いている。さながらゾ

ンビのようだ。

「ガイラ、どうしたんですか？」

「ああ、全身筋肉痛みたいだ。ここ数年これほどの筋肉痛に襲われたことはねえな。」

「ああ、あの状態で酷使しすぎたせいだな。アレフ、ベホイミをかけてやれ。それで軽快する。」

「はい……………ベホイミ！」

ガイラの体が薄つすらと光り輝く。今ガイラの体では新陳代謝が促進されて、千切れた筋肉組織を修復しているはずだ。ガイラが凝り固まった体をほぐす様に、柔軟体操を始める。

「いや、起きたときは何がおきたか理解できなかったぞ。体が動かなかつたからな。いや助かった、礼を言う。」

「そうか、それはよかった。それでアレフ、なんだったけ？」

「……………いえ、何でもありません。」

まだ何か聞きたそうであったが口をつぐんでしまった。いずれ説明しなくてはならないときはくるだろう。

「そうか。じゃあ区長に挨拶したら城に帰ろう。報告しなくてはいけないことがたくさんある。」

俺はその場を後にする。報告しなければいけないことか、どこま

で報告すべきだろうか？

- - - - -

三人共に区長の屋敷の応接室に来たがこの屋敷の主はまだいない。城への帰還の挨拶に来たとは伝えてある。ポームル区長が応接室に入ってきた。顔色は浮かない。

「お待たせしました、遅れて申し訳ありません。お城に帰ると伺っています、しばらくこちらに残る気はありませんか？」

アレフもガイラも怪訝そうな顔をする。

「なぜその様なことを言われるのですか、用心棒としてですか？それとも・・・」

「いえ街の防衛のことは心配しておりません。此度のことです。街の団結力が高まりましたので我々だけでも守ることはできます。それにバリスタや投石器を急いで作らせています。」

「ではなぜ？」

「この街から逃げ出した者がたくさんいます。富裕層に属する者がキメラの翼でラダトームに逃げたと思われれます。じつは弁務官の居場所がしれません、同じく城に逃げたと考えた方がいいでしょう。」

「今頃、ラダトーム城は大混乱でしょうね。落ち着くまでは帰らない方がいい、そう言われるのですね。」

「そう愚考いたしました。あなたがたの責任や職務の都合もあると思いますが、わざわざ嵐の中に飛び込む必要はないでしょうか？」

「忠告ありがとうございます。しかし私の仕事はその嵐を収めることにありますので、帰ることにします。あそこには待たせている人もいますから。」

ボーメル区長がフツと笑う。俺も照れ隠しに笑みを浮かべる。

「そうですね、では帰らなくてはいいけませんね。屋敷の外までですがお見送りいたしましょう。」

俺達は屋敷を辞することにした。さっきの言通りに玄関まで見送りにでてくる。ふと思いついた様に口を開く。

「そういえば民兵の方に装備して頂く武器や鎧を無償で提供されました。なんでもその方が言われるにはもう代金は勇者アレフ殿から頂いているとのこと。なにか心当たりはありますか？」

俺達は顔を見合わせる。

「僕がこの炎の剣と水鏡の盾を譲って頂いた武器屋の方だと思います。その方はどうされましたか？」

「ええ、ことが終わってから代金をお支払いしようと思いの者を出しましたが、すでに店は引き払った後でした。隣の店の方に聞いたら旅にでると言っておられたそうです。もしお会いになられましたら私が御礼を言っていたと伝えて頂けますか？」

「必ず伝えます。行き先にも心当たりがありますから。」

「そうですね、ではまたお会いいたしましょう。城塞都市メルキドはこの街を助けて頂いた勇者等を忘れません。」

硬い握手を交わす。照れくさいので少し離れてからいきなりルラを唱える。眼下で城塞都市メルキドが小さくなっていく。

「行ってしまわれましたね。」

「ああ、彼等が再びここを訪れる時には、彼等の奮戦に恥ずかしくないメルキドを見てもらおうではないか。これから忙しくなるな。」

区長と執事が屋敷に入る。その顔には希望が見えた。

.....

ラダトームの入り口に降りる。久しぶりのラダトームだ、感慨に耽る暇もなく衛兵が飛んでくる。

「お待ちしておりました。帰還次第、出頭せよと大臣の仰せです。」

「だろうね。いいよ、すぐに出頭する。彼等は別に行かなくてもいいよね?」

後ろに立つアレフとガイラを指差す。

「いえ、一緒に出頭するように厳命されています。」

「はあ……すまないね、一緒に城に来てもらうことになったよ。」

「しょうがないさ、付き合っぜ。」
「謝罪なんていりませんよ。それも勇者の務めですから。」

二人がニヤリと笑う。黙って城に向かって歩く、その後ろに二人が付き従う。

「なあ、ガイラ！その格好のままでもいいか？」

「なんでだ。いつも通りだろう？」

「いやガイラ、あちこち破れて酷い有様です。背中が爪で切り裂かれていますよ。」

後ろに回ったアレフが革鎧の傷を指差す。

「いいさ、ありのままを見てもらったほうがいい。俺達の奮戦を伝えるべきだ。」

「そうだな、ガイラ。旅の汚れだけ払ってくればいいよ。」

「じゃあ、僕もなにか見てもらいますか？」

アレフの装備をしてみる。魔法の鎧と水鏡の盾に傷は一切ない。鎧下はすでに別の物を着ているから奮戦の跡は見えない。ガイラも眺めている。

「まあいいだろう。無理して大変だったと言うこともない。立派な装備をしている、それでいい。」

これから大変なことになる前とは思えない緊張感の無さ、あの戦
の過酷さに較べればこんなものはなんてことはないことだ。俺達
人の認識はそんな物だった。

戦の後（後書き）

設定資料

ギガデインの魔法が勇者専用との指摘があります。

本文でも書きましたが同じ勇者専用のライデインを、誰でもベギラマとして使用できることから専用魔法ではなく、一子相伝の魔法だとしました。

勇者ロトと一緒に旅をした賢者が横で詠唱を聞いて覚え、書に記したと仮定しました。

アレフとシュミットの悩み

城の入り口にシュミットが待っている。俺を見つけるとものすごい勢いで走ってきた。

「おい、こっちに来い！」

俺の手を強引に引っ張って城にある密談室に連れて行く。もちろん二人もついてきている。その部屋の扉を閉めて机をはさんで着席を促す。その勢いに負けて黙って座る。

「この部屋は外へ音が漏れない様に魔法で処理がされている。それは知っているな？」

「ああ、もちろんだ。」

「ならばお前らにとって都合の悪いことは全て秘匿する。それを踏まえて質問するぞ。」

いつものちゃらい感じと違い真剣な顔だ。俺は頷く。

「お前らの戦いを水晶球でモニターしていた。お前等や民兵の奮戦はいい。だが最後のあれはなんだ？」

「あっ！それは僕も聞こうと思っていました。」

ギガデインか。アレフが聞くだらうことは予想していたが、まさかこいつまで見ていたとはな。

「ただの気象現象だ。ほんの少し細工はしたがな。」

「気象現象だと！？そんな都合よく雷が落ちるわけないだろう！！」

シュミットが立ち上がって机を叩く。

「事実だ。アレフもガイラもあの時雨が降っていたのは覚えているな？」

「まあ、終わってから気づいたが、確かに降っていた。」

「僕もです。」

「それがどうしたと言っただ。」

「最後にドラゴンが突撃する前に気づいたのだが、空には雷雲が広がっていた。いつ雷が落ちてきてもおかしくない状態だったので、アレフに一芝居をさせた。」

「あの天に剣を突き上げるやつか？」

「そうだ、声は聞こえなかったと思うが、“私の名は勇者アレフ。神よ、天に仇なす者どもに天罰を与えたまえ！”と言わせた。もしお前が敵ならどうする。」

シュミットが顎に手を当てて考える。

「そうだな、感情的にも戦術的にもそんな放言をするようなやつは潰す。」

「だよな、そこまで計算してやらせた。奴、大魔道もそう考えてその時にできる一番の攻撃をした。つまりベギラマだ。ベギラマで発生した電撃をガイドに雷がやつらに落ちた。そういう小細工だ。納得したか？」

もちろん嘘だが、今朝アレフに質問されかけた時に考えた言い訳を披露する。

「もし落ちて来なかったらどうする気だったのだ？絶対成功するとは限らないだろう。」

「策を弄して損はない、駄目なら奮戦するのみだ。どうせあの時には他にやりようはなかった。」

「お前すげえな。あの中でそこまで計算していたのか？俺は暴れるのに夢中で何一つ気づかなかった。」

「自分でもこんなことに何の意味があるのかと思ってやりました。」

「ということだ。納得しとけ。」

無理矢理話を締める。シュミットがなんとも神秘的な顔をしながら座る。

「そうだな、大臣にもそう報告するがそれはかまわないか？」

「かまわない。もしかして大臣も見ていたのか？」

「ああ、ただあまりの光に目がくらんでよく判らなかったようだ。その後すぐに誤って水晶球を落としてわった、もうあれは使えない。」

「そうか、残念だ。もしかして勇者以外は場所の確認ができなかったのじゃないか？」

「そうだ、最後にみていたお前と勇者二人の光点以外は見れない。」

まじか、水晶で映像が見れなくなったのはいいが、俺の居場所が常に知れるのは困るな。

「まあ心配するな、もう勇者は公募しないからそんなに困ることはない。」

俺の心配ごとを勘違いしたらしいシュミットがそう話す。

「そうなのか、しかももうメルキドでは勇者アレフの名が知れ渡っているぞ。神の申し子との異名がついた。」

「そりゃあそうだろう。神の怒りを落としたんだ……待てよお前・もしかしてそこまで計算して……。」

「さあな、でこれからどうなるんだ？」

「人をくった奴だ。これから謁見だ、しかるべく対応しろよっ！」

シュミットが半分怒って出て行った。まあ納得半分といったところか。ついでだ、謁見の前に二人にも釘を刺しておかねばなるまい。

「アレフ、ガイラ。悪いがお前らに使った魔法は秘密にしてくれ。無差別に教える気はない。」

「お前がそう言うのなら、俺は黙ってる。説明しろと言われてもできねえし。」

「でもあの魔法があったら魔物の軍団に対抗できる様になります。それでも秘密ですか？」

「そうだね、その手もある。でも使えるようになるのは人間だけじゃない。魔物も使う様になる可能性がある。」

「人間にしか教えなければいいのではないですか？」

「アレフ、お前は素直でいい奴だ。もし人間全員がそうなら伝授してやってもいい。」

「どついう意味ですか！」

ふざけて返事をしたと思ったのかアレフが強い口調で聞き返す。

「莫大な報酬を目当てに裏切る奴がいないとは言えない。」

「そんな馬鹿なことありません。人間が魔物に味方するなんて！」

「それがあつたんだ。お前は寝ていて知らないが、影の騎士を操っていたのは人間だった。ガイラが証人だ。」

「そんなっ！」

「いや本当だ。俺も目を疑ったが事実だ。俺が殺った魔道士は間違いない人間だった。」

アレフが黙り込んだ。

「もう一つ言うと、敵に捕まった者が拷問の末、教えてしまう可能性もある。」

「それを言うなら、ケルテンさんもそうならないとは限らないのではないですか？」

「もちろんそうだ。だから口述では詠唱しないし、使えることを秘匿し続けている。この前はやむを得なかったから使った。俺達の敗北はメルキド5万人の死になるからな。それとお前なら秘密にしてくれると確信している。ガイラとは短くない付き合いだが、俺の秘匿している魔法については完全にスルーだ。」

ガイラが照れくさそうに笑っている。

「そんなの卑怯ですよ。そんなこと言われたら誰にも話せないじゃないですか！」

「ああ卑怯だな、それも計算尽くだ。」

「ではもう一つだけ、もし誰かに使えることが知れて、拷問を受けることにでもなったらどうするのですか？」

「秘匿したまま死ぬ。相手を道連れに死ぬ魔法もある。使いたくはないけどね。」

「そこまでの覚悟ですか、わかりました。なら僕も何も言いません。ケルテンさんを死なせるわけにはいきませんから。」

「すまん、しかしこれから大変だぞ。王様に謁見したとき、何を話せばいいのかね？」

「知らんな、お前が説明してくれ。武闘家は拳でしか語る術を持たない。」

「あつずるいな！都合のいい時だけそれか！そういえばドラゴンが何と言ってたか聞いてなかったな。」

「貴様とか、この虫けらがとか、死ねとか聞こえたぞ。」

「フフフツ！もういちいち面白いですね、お二人は。もういいです、悩んでいた僕が馬鹿みたいだ。全部おまかせしますよ。」

その言に俺とガイラが笑う。つられてアレフも笑い出す、密談室に笑い声が響く。その笑い声は外には一切届かない。

新たなる勇者の物語

謁見の大広間にいる。王様を中心に右に大臣、シユミット、文官3名と並び、左に近衛騎士隊長、近衛騎士が4名並んでいる。へえー、こつちからまともに見ると結構威圧感あるな。この前ガイラの蘇生の時には気づかなかった。俺の右にアレフ、左にガイラが控えているが、緊張しているようだ。

「特務隊士ケルテン、勇者アレフ、勇者ガイラ、城砦都市メルキドより戻りました。」

名乗り上げ、帰還を報告する。余計なことは言わない。当然大臣が何かを言ってくるだろう。

「ご苦労であった。メルキドより逃亡してきた者より、メルキドが数百の魔物に襲撃を受けたと聞いておる。どうなったか報告いたせ。」

質問の内容をあえて特定しないか、ならばこちらも詳細を語ることはない。

「魔物の襲撃は初めは百数十ほど、最終的には500以上、我が勇者2名とメルキドの兵士と民兵の奮戦により、約3時間の戦闘の結果撃退することに成功しました。」

おおっー！その場にいる者から声が上がる。大臣が場を見渡すとその声が静まる。

「聞いた話によると、そなたら3名と兵士数十名で防衛を始めた」と

聞くが、誠か？」

「正確には違います。さらに十数名の民間の者の助力がありました。」

「では圧倒的に不利な状況ではないか。空を飛ぶ魔物もいたと聞く。いかにして防衛できたか？」

「矢を射、熱した油をかけ、槍で突き落とす。いたって常識的な方法にて防衛致しました。仔細は後で近衛騎士隊長に書面にて提出します故、この場での説明はご容赦下さい。」

全てをここで語る必要はないと言外に言ってみる。

「そうか、ではここからが本題であるが、最後に天より雷を招来させたと聞く。それははるか昔にロトの勇者が行使した雷の魔法に他ならぬ。その秘術を公表せよ。」

「残念ながら違います。あれは気象現象を利用した策に過ぎません。もしかすると勇者アレフの声に天が応えた結果かもしれません。」

ざわざわ、ざわざわ。立ち並ぶ者たちがざわめく。俺を見つめるラルス16世だけが冷静に俺を見つめている。

「國務大臣、そこまででよかろう。その者達はメルキドを守った労ある者で罪人ではない。そう詰問するものではないな。だが余も聞きたいことがある、質問に答えてくれるか？」

威厳はあるが慈愛に満ちた声が響く。

「はっ！答えられることであれば。」

「そうか、では勇者アレフよ。そなたの天への呼びかけを見たいものだ。今ここでやってくれるか？」

「ここですか？抜剣をしましたがよろしいでしょうか？」

本来ここで武器を抜こうものなら、即取り押さえられるか斬り捨てられる。許可は得ておかないといけない。

「かまわぬ。余から頼んでおる。勇者アレフよ、余の頼み聞いてはもらえぬか。」

アレフが俺をちらりと見る。軽く頷いて促す。

「では、失礼します。」

アレフが炎の剣を抜く。天を剣で指し示し

「私の名は勇者アレフ。神よ、天に仇なす者どもに天罰を与えたまえ！」

そしてアレフの剣がそこにはいない敵を指し示す。場が静まる、誰も何も言わない。いや圧倒されて何も言えない。アレフが剣を納めて恥ずかしそうに下がる。

パチパチパチッ！アレフ16世の拍手が鳴り響く。

「すばらしい、歌劇の名シーンのようだ。その場で見たかったものよ。のう、皆の者よ。」

「はっ！御意にございます。」

ラルス16世の無邪気ともいえる賞賛に毒気を抜かれた大臣が答える。

「その通りでございます、陛下。武人としてこれほどの高揚を感じたことはありません。」

近衛騎士隊長が賞賛する。そりゃそうだ、前線に立つ指揮官が、兵士を鼓舞する為に使う台詞をわざわざ選んだんだ。

「そうであるな。近衛騎士隊長よ、竜王が現れてここまで明るい話ではなかったが、ここに来てなんとも痛快な話が聞けてよかった。国民にも触れ回るがよい、勇者アレフと勇者ガイラの活躍を！」

「御意、仰せのままに。」

「特務隊士ケルテンよ、ご苦労であったな。そなたの活躍は公表するわけには行かぬが、余の心に留めるとしよう。それでよいか？」

「ありがたき幸せ。」

なんとも言えぬ怖さがある。これは戯れ、それとも……。

「では3名とも大儀であった。そなたらには休息が必要であろう。下がってよいぞ。」

俺達は最後に礼をして、大広間から下がる。なんとも言えない汗が流れている。

俺達が城の中を歩く。俺達を見る目が変わったのがわかる。まあ相変わらず近寄ってくる者がいないのはかわらないが、陰口を叩かれるよりはずっとましだ。遠巻きで英雄を見る目をしている。

図書館の扉を開ける。目の前にマギーがいる。

「マギー帰ったよ。」

マギーの目が俺を見つめる。上から下まで眺めている。

「なんかついてるか？いつも通りだけど。」

「いつも通りじゃないわよ！あっちこっちずたずたじゃない、何してたのよ！」

自分で見てみるとガイラの装備と同じく、あっちこっちに傷がついている。

「そうみたいだね。いやメルキドを守ってきただけだ。」

「馬鹿っ！そんなのわかってるわよ！そんなことより自分を大事になさいよ！」

マギーが胸に飛び込んでくる。ああまた泣かしてしまったな。

「ゴメン、心配かけたね。」

マギーが胸の中で泣きじゃくっている。もう抱きしめる以外にできることはない。

「学者、すまん。行く所ができたから俺は行くぞ。明日でいいから俺の鎧も治してくれ。」

ガイラが出て行った。

「僕も行きます。お疲れ様でした。」

アレフも出て行った。雰囲気を感じて二人とも気を利かせてくれたようだ。

.....

10分ぐらい経っただろうか。マギーが顔を起して袖で涙を拭く。

「あーっと、何か拭くものを渡すべきだけど、汚れた物しかないや。」

「いいわ、大変だったんでしょ。でも私、あなたに謝らなければならないことがあるの。」

「何、別に謝られる様な覚えはないけど。」

「ニフラムの魔法を公表したの。」

「そうか、公表しちゃったか。なにがあったの?」

「説明するわ、座りましょう。」

マギーが俺から離れて椅子に座る。俺も机を挟んで座る。

「あなた達がここを出てすぐに、街で無差別連続殺人事件が起きたわ。」

「それは酷い、犯人は？」

「胸に不名誉の証をつけた漆黒の近衛騎士。」

「最悪だな。取り込まれたのか・・・それでニフラム・・・」

「いえ、まだ続きがあるの。一度は例の従者をしていた騎士に討ち取られた。兜を打ち落として顔を確認して、さらに会話をしたそうよ。」

「んっ？俺が海底トンネルで会ったものに近いな。」

「そうなんだ。でもそこで首を落とし、首と鎧を晒して全ては終わったはずだった。」

「だったと言う事は、終わらなかったんだ。」

「そう今度は、鎧だけで動き出したわ。」

「なるほど、本当の悪魔の騎士になってしまったのか。そこまで行く執念というか怨念を感じるな。」

「それで、シュミットとサイモンが解決するべく私に相談が来たの。それで悩んだ結果、ニフラムを使うことにしたわ。」

「ふーん、まあ間違っていないね。そこまでの怨念になると魂を救わないといけないだろうね。君の判断も間違っていない。謝る必要はないよ。」

「いえまだ続きがあるの。陛下に私が発掘、解読したと報告したわ。本当はあなたの手柄なのに。」

なるほど俺でなくか・・・手柄が欲しかった？そんなわけないな。そうか俺の盾となったのか。

「でも陛下は全てを理解しているかのようで、そういうことにしておこうと言われたわ。」

「ああ多分そうだろうね。蘇生の魔法の時もさっきもそう感じた。踊らされている気分だった・・・まあいいさ、悪意は感じなかったし。」

そう言うと、マギーが少しほっとしたような顔をした。それからいつもの笑顔に戻る。

「じゃあ、あなた達の活躍も聞かせて、まさか私にも内緒とは言わないよね。」

「OK、でも喉が渴いた、お茶を用意してからにしよう。話は長くなるよ。」

俺達の冒険の話が始まった。

魔法談義？

「と、ここまでではいいかな？」

俺は今マギーに先日防衛戦の説明をしている。ついでに近衛騎士隊長に提出する書類を書いている。

「ふうん、結構いろんなことするのね。油を撒いたり、火をつけたり大変ね。騎士の訓練だともっと華麗なだけだ。」

「こんなので驚いていたらまだまだだ。必要なら岩を落とす、投石器で岩を飛ばす、バリスタも使う、今メルキドではクロスボウを500程用意させている。全部リムルダールでは導入済みだ、俺が去年に用意させた。」

「待つて！去年ということは魔王復活を予期してたの？」

「もちろん、ロトの予言と昨今の魔物の出没記録から予期してたさ。準備だけしておけばリムルダールは防衛しやすい方だよ。ほとんど攻めてこなかったけどね。」

「守りやすいのはなんで？」

「ああ、そうか。君は見たことがなかったか。リムルダールは湖の中央に位置する街だ。街の中から対岸が見えないくらい広いから陸を進む魔物は襲ってこれない。もし泳いできても水際の柵で止めることができる。怖いのは空を飛んでくる魔物だが、それもバリスタやクロスボウで簡単に落とせる。備えあれば憂いなしだ。」

「へえ、でも何で弓では駄目なの？」

「弓では熟練の技がいるからね。いざとなったら一般召集の民兵でも狙いやすいクロスボウの方がいい。」

「いろいろ考えているのね、軍人のようね。」

「馬鹿言っちゃいけない、こんなもの座学のレベルだ。現実はおつと生生しく不愉快だ。兵が傷つき死んでいくのを冷静に見続けなくてはいけなかった！」

「そんなに興奮しないで！・・・ごめんなさい、軽率だったわ。そうあなたはそんな気持ちで戦っていたのね。」

何時の間にか、俺は大声をあげていた。先日の戦いで俺の指揮の下、幾人もの兵士が傷つき死んだ、多分協力してくれた一般の人もそうだろう。華々しい勝利の裏に犠牲になった人々がいる。だから俺は陛下や他の皆に褒められても素直に喜べなかった。

「興奮して悪かった。軍事的なことはこのまま近衛隊長に提出しておく。この街の防衛の参考にしてもらわねばならない。400年の平和は長すぎたよ。」

「平和が長すぎたなんて皮肉ね。」

「確かにそうだ。言われてみれば嫌な響きだな・・・。」

俺が黙り込む。その雰囲気にしたまれなくなったマギーが、俺の魔道書を開いて明るい声で話しかける。

「それですごい魔法を使ったと聞いたけどどれなの？」

「誰もがそれを聞くんだけどね、雷が落ちただけだよ。」

これはなるべく教えたくない、そう考えて心を落ち着けてから答える。マギーが軽く笑う。

「馬鹿ね、私に嘘をついても無駄よ。顔にそう書いてあるわ、私にはわかるの。」

「……そうなのか？」

「もちろんよ、どれだけ見てると思ってるの。」

「……。」

黙って魔道書のあるページを開く。見開きでライデインとギガデインのページだ。マギーがそのページを眺める、指でなぞり文章を確かめる。

「こっちはベギラマと全く一緒、前に言ってた魔法ね。気づいていたわ。それじゃあこっちがその上位魔法……そう手から電撃を放出するのではなくて、天から落とす魔法、前言ってたあれね。」

「ああそうだ、だから誰にも教えないつもりだった、使っつもりもなかった。」

マギーの指が何度もスペルをなぞる。

「すごいわね、消費MP30なんて、どれだけの集中をしなくては

ならないかしら？」

「30秒はかかる、しかもその力を霧散させないようにするのも大変だ。もちろんおこす現象をイメージするのも狙いを定めるのも同時、だから誰にでも使える魔法ではない。10人に教えて1人が使えればいい方じゃないかな？なんせ勇者ロトの家系にのみ伝わる魔法だ。だから君にも教えない、使いたければ自分で解読すればいい。」

「そうね、私はそれでも構わない。まずこっちのメラ、ギラ、ヒヤド、バギ、イオの魔法から解読するから。」

ページを次々開きながら、5系統の魔法を告げた。

「これは驚いた。もうそこまで解読していたのか。もしかして使えるのか？」

「ええ、下級呪文はね。」

「中級、上級魔法はこんな所で練習するなよ。下手したら死人が出る。」

「えー！じゃあどこで練習すればいいの？」

「そりゃあ山奥とか海岸とか、広くて誰もいない所で練習するのさ。俺はそうしてきた。」

「じゃあ、いつになったら使えるようになるのかしら？」

俺は慌てて他のページを開く。スカラ、ピオリム、バイキルトな

どの自己強化系の魔法だ。

「そういった派手な魔法はなるべく使わない。効果がわかりやすいからね。だったらこっちの魔法を使えるようにした方がいい。」

「そこ辺の魔法は効果がよく判らないのよ。ホイミとかに近い感じはするけど、内容がわからないの。」

「ガイラやアレフに聞くといいさ。この前使ったから。じゃあこれ提出してくるから行くよ。」

「そう、今晚あなたの部屋に向かえを寄越すからお腹を空かせておいてね。」

俺は右手を挙げて返事をする。ラダトームに帰ってきた、今それを実感した。

.....

「あれでよろしかったのですか？」

「ああ、構わんよ。しかし伝説の魔法か……。見物したのはそなたと弟だけで間違いないか？」

「間違いありません。大臣もはつきりとは見ていません。」

「そうかそうか、あれも漠然と違和感を感じただけか。」

「そうですね。しかしよくできた言い訳でした。」

「そうだな、もっともらしい言い訳だったの。あの場の者も納得しておったから、それでいいとしようではないか。」

「御意。それでこの先はいかが致しましょうか？」

「監視をするだけでよい。あの者に害意は感じられぬ。」

「確かにその通りです。」

「それより弟の動きに気をつけよ。」

「と言われますと？」

「余が何も知らぬと思って好き放題しておる。」

「はっ！これまで通り監視いたします。」

「フフツッ！王家のみの伝承、国王のみの伝承、アレフガルドに散らばる伝承を集めし者か。さて誰が一番ものを知っておるのかのう。」

「……………」

「では下がってよいぞ。ご苦勞であった。」

男が闇に消え去る。残っているのは世を捨てたような目をした男だけ。

弓とクロスボウ

7 / 27 勇者支援生活88日目

目が覚める。こんなに安心して寝たのは何日ぶりだろうか？隣のマギーを起さないようにベッドから出る。天蓋付きの立派なベッドだ。

「また私に黙ってどこに行くの？」

「起しちゃったか。いや、おはようだな。いつもの習慣さ、鍛錬をしないと落ち着かないから。」

「そこまでいくとほとんど病気ね。いいわ、私も行くから待ってて。」

「いいのか、脳筋の塊みたいのしかいないから嫌いだって。」

「なんとなく慣れたわ。ガイラとかサイモンとか筋肉の塊だけど、嫌いではないわ。それに見たいことがあるの。」

「そう、じゃあ玄関で待つてる。」

部屋からでて屋敷の廊下を歩く。すれ違う使用人が笑顔で会釈をする。なんとなく返す。玄関にて執事のシャッテンブルグと会う。全部知られているようでなんとなく照れくさい。形式的な挨拶の後の不意打ちがきた。

「ケルテン殿、屋敷の者全てを代表して御礼申し上げます。」

「えっ！とくに何もしてないよ、いや君達からしたらよからぬことしかしてないような……。」

「ひさしぶりにお嬢様の笑顔を見ることができました。」

「そうか、マギーはそんなに沈んでいたのかい。」

「はい、例の漆黒の騎士の件以来、ずっと籠もりきりで何か悩んでいました。」

「ふむ、それも俺のせいかも知れないけど、それでもいいのかい？」

「お嬢様があなたの為に悩んで喜ぶのなら、それについて我々から申し上げることはありません。」

後ろでわざとらしい咳が聞こえる。

「シャッテンブルグ！私のいないところで勝手なこと言わないで！」

「失礼いたしました。それでは私は失礼致します。ケルテン殿、お嬢様をよろしくお願いします。」

マギーが俺の手を引っ張って玄関から出る。

「もう皆して私を子供扱いする。ケルテンも子ども扱いしたら許さないわよ！」

「してないよ。まったくそんな気はない。」

この話題はやばそうなので逃げるように歩く。

.....

ひさしぶりの訓練所だ。中央に人だかりができている。よく見るとアレフを中心に人が輪を作っているようだ。アレフが困った顔をして質問に答えている。俺を見つけると助けを求めるように話かけてきた。

「おはようございます。今日はマギーさんも一緒ですか？」

その場の視線が俺に集まる、次の瞬間に後ろのマギーに視線が移る。

「ああ、おはよう。マギーが見たいことがあるそうだ。」

「そうですか、それで何を見たいのですか？」

うまく話題が逸れたアレフが逆に質問する。

「弓とクロスボウを見たいの。誰か持ってきてくれない？」

俺が俺がと皆が騒いでいる。收拾がつかなさそうなので俺が口を挟む。

「ジョルジョ君、頼めるかい。」

「はい、では持ってきます。しばらくお待ち下さい。」

「ああいいよ、それと皆さん、ここは訓練所です、雑談所ではありません。手が空いているなら誰か私と手合わせ頂けませんか？」

途中から口調を変える。蜘蛛の子を散らすように人が散らばる。

「ケルテン、あなた相当恐れられてるのね。」

「失礼だな、俺はこんなに紳士なのに。」

そこにジヨルジヨが戻ってきた。話が聞こえていたようで少し笑っている。

「持ってきましたよ。何をしましょうか？」

「とりあえずどこでもいいから、両方とも撃つてみて。」

言われたジヨルジヨが弓を構えて、20m先の的を狙う。放たれた矢は的から外れた。続けてクロスボウを構えて放つ、的に当たった。マギーがじっと見つめている。

「すみません、弓は苦手なんです。こっちならまだ使えるのですが。」

クロスボウを片手にジヨルジヨがそう言う。

「その様ね。いいわ、ちょっと貸して！」

「ちょっと待って、今まで扱ったことはあるのか？」

「あるわけないじゃない。あつたらこんなことしてないわよ。」

「アレフ！その辺の奴等全員に盾を持たせる。怪我人がでるぞ。」

俺が大声で警告をだすと、近くで見物していた者が急いで盾を構える。気づいていなかった者もアレフに言われて慌てて盾を持った。撃つ本人が怪我をしては困るので、俺が後ろに回って一緒に弓を構える。

「いいかい、このまま後ろに引いて、放してっ！」

放たれた矢はでたらめな方向に飛ぶ。人には当たってない。

「当たらないじゃない。」

「当たり前だ。かなり練習しなくてはまともに撃つことすらできない。」

「そう、簡単そうに見えるけど。いいわ、じゃあクロスボウを貸して。」

少し避難していたジオルジョが出てきて弓とクロスボウを交換する。すでにクオレルはつがえてある。

「まだ下を向けたままだぞ、絶対人に向けるな。」

「うるさいわね、わかってるわよ。こっ構えて引き金を引けばいいのね。」

マギーが立つたまま的に向かって構える。引き金を引く、的からは外れるが近い所に刺さった。見ていた者達からほっとしたような

声が上がる。

「なるほど、これなら私でも撃てるわね。昨日言ってた意味が解つたわ、それで矢はどうやってつがえるの？」

「えっ！まだやるの？」

「やっっちゃ駄目なのかしら？」

「いや、駄目じゃないけど……。わかったよ、まずここに足をかけてこっちの弦を引っ張る。できる？」

マギーがクロスボウに右足をかけ、屈みこんで弦を引っ張ろうとする。周りからおおっ！と歓声があがった。それもそのはずロープが捲くれ上がって足が見え、豊かな胸を強調するかのように屈んでいるのだ。

「マギー、俺がやる。君のその格好は刺激が強すぎる。」

クロスボウを取り上げてクオレルをつがえる。それを渡すと再び的に向かって放った。的には当たらない。

「もういいだろ、危ないからもう止めよう。」

「危ないってどういう意味よ。まあいいわ、そんなに言うならもう止めてあげる。」

ちよつとふくれっ面で俺に渡す。クオレルをつがえて手にする。

「こつやっつがえれば誰が撃つても同じ強さのクオレルが飛んで

いく。ただ誤射の危険があるのでこの状態では人に向けてはいけない。それと撃つときは安定させるためにこう顎につけて撃つ。もつと安定させたいなら膝立ちになるか、うつ伏せで撃つたりもする。何かの上に置いて撃つてもいい。これだけ気をつければ誰でも撃てるし、そのうちコツもつかめる。」

「なんとなく解ったわ、でも私は魔法の方がいいわ。」

「ああ、そうしてくれ。見てる方が怖いから。」

そう言うってから無造作に的に向かって撃つ。クオレルが中心に突き刺さる。マギーが呆気にとられている。周りで見ていた連中からも感心したような声がする。

「何でもできて気持ち良さそうね。うらやましいわ。」

何か棘のある言い方だ。

「この距離なら外すことはない。言っただろう、街にたくさん用意させたつて。その時に散々練習をしたのさ。俺が使えなければ用意させた面目が立たない。」

「まあいいわ、そういうことにしてあげる。」

話題を変えるべきだな。

「ジオルジヨ君、悪かったな。これは返しておいてくれ。」

「はい解りました。それと一つ報告したいことがありました。」

「なんだい？」

「正式に近衛騎士に推挙されました。これもケルテン殿の教えのおかげです。」

「俺は何もしてないよ。君が騎士に相応しいと判断されたんだろう。でも誰の推挙だい？」

「ローゼンシュタイン殿です。」

「ああ、サイモンか。あいつもたまにはいいことをするな。」

「ええ、感謝しています。それとケルテン殿にも御礼を言いたかったのです。」

「そうか、よかったな。困った騎士にだけはなるなよ。」

「胆に命じておきます。」

それだけ言うとジオルジヨは立ち去った。やっと鍛錬ができる。俺は空いた場所を探して刀を振る。ここで鍛錬を行なうのは久しぶりだ。横でマギーがしゃがみ込んで見ている。そんな雑念も刀を振っているうちに消えた。

再会

鍛錬が終わって朝食をとる。兵舎の食堂に連れて行くわけにはいかないの、城下街にでた。アレフに聞くと、ガイラはまだ宿屋にいそうなので宿屋へ行くことにした。

「それにしてもその鎧ひどいわね。買い換えたらどう？」

改めて自分の姿を眺める。確かにひどいな、胸や籠手の一部が裂けて中のミスリルが見えかけている。

「これ一品もので買い換えることはできないんだ。」

「そう、どこで作ったの？」

「メイド イン 俺。」

「・・・相変わらずなんでもできるのね。アレフ知ってた？」

「ええ知ってますよ。ガイラの籠手もケルテンさんの作品です。」

「そういえばそうだったわね、修理ぐらいだと思ってたわ。」

「今回は新しい素材が手に入ったから、今よりいいものが作れるな。」

「新しい素材？」

「ああドラゴンの素材だ。鱗を使うか、皮を使うか、ガイラと相談

だな。」

「でも街の前で倒したドラゴンはもったいなかったですね。全部メルキドに差し上げましたから。」

俺は気絶していたから忘れていたのだが、目が覚めた後で区長に無くなった人や強制招集した人への手当てに使わせてもらいます、と言われれば断ることなどできなかつたわけだ。

「まあ仕方がないさ、これからの防衛に必要ななるし……。」

「防衛に必要なってどういうこと？」

「うん、鱗を使って盾を作るんだ。ああ盾といっても手にもつ奴じやなくて、立てかけて使うやつね。それと骨とか牙で鏃とか槍先を作ってもいいな。」

「加工できる物なの？」

「難しいね。でもそこまで責任もてないな。さあもう宿屋だ、まず食事にしようか。」

扉を開けて宿屋に入る。ここに来るのも久しぶりか、俺の顔を見つけた宿屋の親父が声をかける。

「おお、あんた大活躍だったってな。こいつに聞いたぜ。」

飯を食っているガイラを指さして言う。

「まあその話は後だ、飯3人分な。急いで頼む。」

「おう、ちょっと待ってる。」

親父がカウンターの裏に入る。俺達はガイラと同じテーブルに座る。

「昨日も酒宴だったのか？」

「ああ、いろんな奴に誘われてな。俺断るの苦手だろ。」

「ガイラは断るのが苦手じゃなくて、断る気がないだけです。」

「アレフ、正解だ。この馬鹿は死んでも治らない。」

マギーが横で笑っている。こんな光景も慣れたようだ。しばらくすると朝食が運ばれてきた。結構な量である。

「ちょっと多くない？」

「まあ、冒険者向けの宿屋だからこんなものだね。余ったら誰か食べるよ。」

食べながらこの前の冒険譚を話す。宿屋だけに聞き上手だ。

「学者、それで俺とお前の鎧はどうする？」

「ドラゴンの鱗と皮はとってあるな？まさか売っぱらってないよな。」

「僕が預かってます。飲み代に化けたら困りますから。」

「そうか、鱗一枚でいいから持ってきてくれないか？」

アレフが部屋に向かって走る。速攻、竜の鱗を手に戻ってくる。手渡された鱗に懐から出したナイフの先端を当てる。ほんの少ししか傷がつかない。

「やはりな、硬くてまとも加工できない。」

「じゃあどうするんだ？」

反射的に文句を言ったガイラを無視して、今度は俺の刀を抜いて先端を当てる。これならいける。

「鋼程度では加工に時間がかかりすぎるから、ミスリルを使わないといけないな。」

「おいおいお前ら何とんでもないこと言っているんだ？」

宿の親父が口を挟んだ。

「そういえば知らなかったか、俺のこれはミスリルだ。アレフの盾もそうだ。ガイラの武器もな。」

「……何をさも当たり前みたいに言ってるんだ。」

「まあ事実なんだけどね。じゃあ加工する為に道具から手配しないといけないな。」

「ならマイラへ行きますか？」

「そうするか、温泉で療養するのもいいな。」

「ならちようどいい。一つ頼んでいいか？」

宿の親父がまた口を挟んだ。

「なんだ、護衛の依頼でも入ったのか？」

「その通りだ。昨日からの客なんだが、マイラの村まで護衛してほしいと依頼された。こんな時勢なので受けてくれる冒険者などいないと、言ったんだけど聞かなくてね。5000Gまで出すと言って聞かない。お前らがマイラに行くなら頼まれてくれ。」

「構わんぞ、お前らはどうだ？」

「ガイラ、当たり前のように返事をするな。」

「僕も構いませんよ。」

「アレフ、そこは少し渋るとか、報酬の交渉とかするものだ。まあいいさ、受けてやるよ。」

「すまん、恩に着る。これは俺のおごりでいいから。じゃあ依頼人を連れてくる。」

依頼人を向かえに二階に駆け上がっていった。気分は上々の様だ。

「フツッ！儲かっちゃったね。」

「そうでもないよ、5000Gの報酬なら、仲介料の1割つまり5

00Gがあのお親父の懐に入るからね。」

「へえ、それなら奢りも解るわ。」

依頼人の男を連れて戻ってきた。見たことのある男だ。

「紹介します、鍛冶のリヒャルトさんです。」

「ああ知ってる。メルキドの武器屋だった人だ。」

「何だ知り合いか。」

「僕の武器と盾を売ってもらいました。しかし店の武具を全部無償で提供したと聞きました。よろしかったのですか？」

アレフが申し訳なさそうに質問する。

「あいつら碌な武具も持たずに戦に出ようとしてやがった。見てられなくてな、それで全部放出した。全部なくなつた店を見てたら、何の未練もないことに気づいて街を出てきただけだ。行きたい所は決まってるからな。」

「そうですね、ではマイラまで僕が送ります。よろしいですか？」

「よろしいも何もこっちから頼むさ、アレフ。」

アレフとリヒャルトが硬い握手を交わす。妙に波長があつた二人だ。

「まあついでの話だ、皆で行くよ。」

「じゃあ、私もついて行くわ。いいわね？」

語尾に強い口調、これは何を言っても聞かないパターンだ。アレフトガイラがニヤニヤしている。

「解ったよ、今回は馬車を用意してくれるかい？」

「いいけどどうして？」

「いつもの様に突っ走る訳にはいかないよ、あれは普通の人には酷だからね。」

「いいわ、じゃあ昼までには準備させるわ。それでいいわね？」

マギーが依頼人のリヒャルトに確認する。リヒャルトが困惑した顔をしたまま首を縦に振った。

「じゃあ一旦屋敷に戻るから、ここで待っててね。」

それだけ言い放つと嬉しそうにマギーは出て行った。

「よかったですか？結構いいところのお嬢様みたいですけど、俺ごときに馬車までだしてくれて？」

「いいところのお嬢様どころか、貴族の当主だよ。まあ当人が喜んでやるって言うてるんだ。断る理由もないさ。」

「はあ。」

困惑する二人に俺達三人は笑っている。また一緒に旅ができるのだから、それは楽しいものになるだろう。

護衛の旅路

宿屋の前に止められた馬車にリヒャルトが目丸くしている。アレフとガイラが当たり前の様に荷物を運び込んでいるのが対照的で面白い。

「なあ、あんた。これ本当に乗っていいのか？後でとんでもない料金取られるとか無いよな。」

「無い無い。遠慮しないで乗ってくれ。なっ！マギー。」

「ええ、いいわよ。どうせ屋敷に置きっ放しの馬車だし、たまには使わないとね。」

「はあ？じゃあ失礼して・・・よっと！」

リヒャルトが困惑した表情のまま、遠慮がちに馬車に乗る。俺は御者台に乗り手綱を握る。アレフとマギーが馬車に乗り込んだのを確認してから発車させる。ガイラはライに乗って並走している。

「あんまりスピード出すなよ。今回の旅はのんびり行こう、4日ぐらいかかるかもな。」

「了解。こんな旅も悪くないな。」

のんびりと馬を進める。ガイラの姿が見えないと思ったら、兎を狩って戻ってくる。疲れたらアレフと交代する。トヘロスが効いているので近づく魔物はいない。

「俺はいいぜ。アレフは真ん中で辛いぞ、代わろうか。」

「僕もそれでいいです。馬車の中でゆっくりしてましたから。」

「食事が終わって食器を片付ける。いつもは食器なんて使うことはないから洗うのが面倒だ。しばらくしてアレフ、ガイラ、リヒヤルトがテントに入った。念の為にもう一度トヘロスをかけて、焚き火を前に座る。話しかける相手もない時間が過ぎる。前はこんなことは当たり前だったのに、静寂が身に沁みる。衣擦れの音、魔物か！焚き火の明かりにマギーの姿。」

「眠るには早いわ、ちよっといい？」

「なんだ、マギーが脅かすなよ。なんの用だい。」

「これよ。」

「マギーの手に数枚の紙、そこには幾つかの魔法が記述してある。」

「アレフ達には聞いたのか？」

「ええ、時間はいくらでもあったから。自己強化魔法みたいね。」

「そうだよ、地味で見た目からは効果が知りにくい魔法だ。」

「なるほどね、遺失魔法を秘匿するケルテンらしい選択だね。」

「焚き火に薪を投げ入れて間を繋ぐ。」

「それだけじゃない。消費MPが少ないから俺には負担が少ない。」

それと詠唱時間を短くする意味もある。」

「へえ、そこまで考えてたの？でも私とあなたじゃ、そんなに使用できるMPが違うのかしら？」

「ああ、全然違うね。俺が大体150、君は200以上だ。一度限界まで魔法を使って調べてみたいな。」

「そんなに違うの？それやってみたことあるわよ。前そんなこと言ってたでしょ。」

「そういえばそんな話をしたな。それで答えは？」

「ベギラマで28回、そこからホイミ2回、約230かな。」

「まあ予想の範疇だな。とはいえMP12や18の魔法を連発するのはお勧めできないな。だからさっきの自己強化魔法がお勧めだ。正確な効果と詠唱文は……」

俺の教えた魔法をマギーが使う。効果を確認してそれを繰り返す。俺の魔法講座はアレフが起きてくるまで続いた。

.....

朝になって俺達がいつもの鍛錬をする。マギーはまだ起きてこない。俺達を見ているリヒャルトがまたまた目を丸くしている。全て終えてからリヒャルトに近づく。

「いや、アレフの手を見たときから解ってはいたが、改めてあんならうのすごさが解ったよ。」

「こんなのは毎朝の習慣さ。」

「そう言えるのがすごいことさ。しかしまあ、師匠と弟子と言ったけあってあなたとアレフはそっくりだな。」

「そうか？構えも剣筋もまったく違うと思うがな。」

「そういつものじゃないな。説明しづらいが戦いに対する姿勢というか、雰囲気がよく似ている。」

「ふん。そんなものかね。俺が教えたのは基本動作の徹底、剣速の速さ、そこに込められた力、そして油断をしないことだけだね。」

「それだけ教えれば十分だ。アレフはいい師匠を持ったようだな。」

そこに鍛錬を終えたアレフが近寄ってきた。

「何の話をしてるのですか？」

「ああ、お前が強いという話だ。」

「いや、止めてくださいよ。僕なんてまだまだです。」

「そりゃあ、お前さんの比較対象が大きすぎるな。俺みたいな一般人から見ると十分強い。」

「そこまでしておこうか。アレフの目標は竜王討伐だ。こんなも

ので納得してもらっては困る。」

リヒャルトが納得したかのようにふむふむうなっている。アレフも隣で照れくさそうにしている。

「じゃあ俺は今最高の護衛を雇っていると思っていいみたいだな。」

「おい、飯ができたぞ。」

ガイラの声が響く。こんな時勢に旅の途中で安心して食事が楽しめる。そう考えると最高の護衛というのも納得できる。

職人二人

8 / 1 勇者支援生活93日目

マイラの鍛冶屋一文字に來ている。今俺の目の前で鍛冶屋一文字が、俺の出した竜の鱗の山を相手にいろんな道具を試している。

「確かに硬いな。」

「そうだろう、俺としてはこれでスケイルメールを作ろうと考えてる。」

「なるほどな、鉄で作っても重さの割に防御効果が見込めないので流行らない鎧だが、これならありだ。だがどうやって穴を開けるかが問題だな。」

「だからここに来たんじゃないか。ミスリルで錐と針を作ってくれ、径は2mmぐらいでいい。材料はまだあるだろう?。」

「簡単に言ってくれるな。どうやってそこまで加工する?叩いて薄くするのはまだ簡単だが細くするのは難しい。まさかそこまで削れとでも言うつもりじゃないだろうな?。」

少し険悪な雰囲気、俺と一文字以外の皆が息をのんでいる。

「俺の刀の時みたいに、薄く延ばしてから畳んで少しずつ細くすればできないか?。」

「お前なあ、あれ作るのに3ヶ月かかったのを忘れてないか。それ

と細さが違う、ずっと繊細な作業になる。」

「そうだったな、忘れていたよ。」

「板になった物を切るわけにはいかないのか？」

横からリヒャルトが割り込んできた。

「あつ！お前誰だよ？素人が口を挟むんじゃねえ！！」

腹立ち紛れに一文字が怒鳴る。怒鳴られた本人は涼しい顔をしている。むしろ後ろの3人の方が青い顔をしている。

「すみません、紹介が遅れました。僕の炎の剣と水鏡の盾を売ってくれた武器屋で鍛冶屋のリヒャルトさんです。」

「何！炎の剣と水鏡の盾だと・・・見せてみる！」

その勢いに負けたアレフが剣と盾をさしだす。しばらく眺める、剣を鞘から抜きあちこちを斬りつける。

「熱っ！」

ブレードの部分を指で触れる。火傷をしたのは全く気にしていない。次に水鏡の盾に手元のハンマーを叩きつける。続いてナイフで表面を引っかく。もちろん傷一つつかない。

「噂には聞いていたがすごい代物だな。あんたが作ったのか？」

「残念ながら違う。うちに代々伝わる武具だった。」

「なんで手放した？」

リヒャルトがアレフを前に押し出す。

「こいつが使うに相応しいと判断した。武具は使う人間を選ぶ、そうじゃないのか？」

二人がしばらく睨みあう。他の4人は声も出せずに成り行きを見守るだけである。二人がほとんど同時に笑い出した。俺達は呆気にとられている。

「面白い奴を連れてきたな。メルキドからとは酔狂な奴だ。店はいいのか？」

「ふん、この前の魔物襲来の際に全部放出した。それでここにミスリル加工の業を習いに来たわけだ。」

「リヒャルトさんは非常招集された民兵の為に、武具を無償で提供したんです。」

アレフが口を挟む。少しでも助けになろうとしているのが解る。

「なるほど、俺のところに業を盗みに来た、そういうことだな。」

「違いねえ、言い方は悪いがその通りだ。」

一瞬の間の後、また二人が笑う。

「いいぜ、どうせ俺もこいつに解読してもらったただけだ。俺だけの

技術じゃない。」

「一文字が俺を指さす。その言葉にリヒャルトが呆れたような顔をする。」

「あんだ、答えを知っていて黙っていたのか？」

「ああそうだ、俺はここに伝わる秘伝書を読んだだけだ。勝手に教えていいものじゃないだろ。」

「その通りだ。まあそれはいいさ、それでさっきの質問に答えてくれないか？」

「ああ、切れるかという質問だったな。熱しても溶けるまではいかない。赤熱化して柔らかくなったこいつを叩いて変形させるのが限度だ。」

「そうか、あの拳につける武器は削って作ってあったが、それはどうした？」

「これを使う。」

数本の棒やすりを机の上に並べる。リヒャルトが手にとって水鏡の盾にこすりつけようとすする。

「これは駄目です。」

アレフが慌てて盾を取り上げた。一文字が余っていたミスリルの塊を差し出すとやすりを当てて削る。

「これは何でできている。この粉末は何だ？」

「俺も知らない、こいつ特製の粉だ。作り方も教えてくれない。」

二人が俺を見る。さらに何か言いたげなので肩をすくめて誤魔化す。

「一つ考えがある。このミスリルの粉末はあるか？」

「ああ、もったいないから全部とってある。どうするつもりだ？」

「これなら溶けるかもしれん。」

「なるほど……………だな。」

「やってみよう……………」

完全に二人だけの世界に入ってしまった。俺達はここをでることにした。

「何はともあれ、リヒャルトさんも良かったですね。」

「そうだな、弟子という感じではなかったけどな。」

「またへんな奴が増えたな。」

「そうね、この人に関わると大体人生が変わるわ、良くも悪くもね。」

「良くも悪くもとはえらい言われようだな。まあ俺のせいで不幸に

なつたやつがないわけじゃないか。」

「僕は不幸になんかなってませんよ。きっとガイラもマギーさんもそうです。」

俺を見つめる3人の目が優しい。そうだな、これからもそうあってほしい。そうするべくこれからも努力をしよう。そう思った。

- - - - -

ある屋敷の暗い部屋に顔を隠した男が二人、テーブルを挟んで座っている。

「約束と違うではないか？」

「約束とは？」

「互いに軍事活動はしない、そう決めたはずだ！」

「その通りですな。何かありましたか？」

「メルキドに軍隊が攻めてきたと報告を受けておる。」

「知りませんな。きっと一部の者の暴走でしょう。それより先日ラダトームより100名ほどの軍隊らしき集団が動きましたが、あれは何でしたかな？」

「あれは貴殿らが追いだしたドムドーラの民だ。いつまでも城下に住まわせるわけにはいかぬ。」

「なるほど苦勞してますなあ、では互いに何もやましいことはないですな。」

「くっ！では漆黒の騎士、あれは何だ？」

「それこそ知りませんが、そちらこそ勇者なる者どもに何かさせておるようですが？」

「あれこそ軍隊とは直接関係ない。一部の有志の活動だ。」

「そうですか。しかしそれ以外にもなかなかの手駒をお持ちですな。まあ飼い犬に手を噛まれぬ様、気をつけた方がよろしいですよ。」

「何のことやら解らぬが、忠告ありがたく受け取っておこう。」

「そうですな。では失礼致します。私も報告とやらを受けねばなりません。」

闇の中に金色のローブが消えていく。残された男が呟く。

「好き放題いいおつて！・・・しかし飼い犬に噛まれるとは・・・」

屋敷の外を足音も立てずに離れていく金色のローブ。

「我々を利用しようとはおろかな男だ。我が息子を次の王にか・・・気持ちは判らんでもないがな・・・。しかしあの時の雷はなんであつたのだ？勇者アレフといつたか、まさかあの口卜の勇者に連なる者ではなかるうな。ならば今の内に手をうつておかねばならん。あ

の者を使うか……。」

闇の中、支えを失った金色のローブが地に落ちる。主人を失った布が、風に吹かれていずこかに消えていった。

マギーの参戦

8 / 2 勇者支援生活94日目

ドラゴンの皮はなめして革にしなければいけない。自分でするには量が多いので鍛冶屋一文字に紹介してもらったマイラの工房に発注することにした。ちなみに一ヶ月かかると言われたが、特急料金を払って10日でお願ひしてある。

さて注文した錐ができたか鍛冶工房に見に来た。むっとした熱気の中で二人が作業をしている。

「どつだ、うまくいったか？」

「昨日のうちに鑄造しておいたのがこれだ。今削っている。」

二人でミスリルの棒にやすりを当て少し削って、ドラゴンの鱗で試すことを繰り返し返していたようだ。割れたドラゴンの鱗がいくつか散らばっている。

「何時できるんだ？とりあえずでいいから一つくれ。」

「とりあえずの品物などやれん！」

二人同時に怒鳴らなくてもいいのに……。

「わかった、わかった。ただ時間が惜しいから早くよこせ。針の方は10日後でいいから。」

「俺のは駄目だ。リヒャルト、そっちはどうだ？」

「もう少し調整すればいけそうだ。30分待ってくれ。」

「じゃあそつする。」

シャツシャツシャー！ゴリゴリゴリ！シャツシャツシャー！ゴリゴリゴリ！……手持ちぶさなので穴を開けられた鱗を手にとって見る。まずまずの出来だ、こっちは駄目だなと一人でつぶやく。30分待って声をかけて、さらに30分待たされる。

「まあこんな物か。いいぞ、持ってけ！」

リヒャルトから渡された錐を、割れたドラゴンの鱗に当てて回すと軽い力で穴が開いた。

「うん、いい出来じゃないか。あと5本ぐらい作ってくれ。」

「おう、それじゃ例の粉をくれ、もう在庫がない。」

「了解、じゃあこの袋はもらってくぞ。」

石炭の袋を一つ担いで外にでる。後ろでなにやら聞こえるが無視することにした。

「おい、石炭をどうするんだ？」

「知らん、いつもあれを持っていく。絶対に教えてくれんだ。」

まさか遺失魔法で作ってますなんて言えない。背中に視線を感じながら宿屋へと急ぐ。しばらくはここに逗留することにしたので、

宿屋の一室を俺専用の工房にしてもらった。4人部屋のベッドを取り除いて大きな長机を置いてある。その机にはドラゴンの鱗が山と積まれている、座っていたマギーが俺に気づく。

「やっと終わったわ。もうこんなの嫌よ！」

少しお冠である、まあドラゴンの鱗をサイズごとに分別させたから仕方がない。

「まだまだ、これからそれに2個ずつ穴を開ける必要がある。」

「それ本気で言ってるの？こんなにいっぱいあるのよ。」

「もちろん本気さ。これで俺の鎧を作るんだ、俺の命に関わるからね。」

「そう、命がかかってるんじゃないね。私も手伝うわ！」

「うん、ありがとう。でもまだこれ一本しか道具がないからいいよ。ああそれよりガイラとアレフは何処へ行った？」

「まだ村の中にいるはずよ、昼から外に行くと行ってたから。」

「そうか、じゃあマギーも一緒に行くといい。」

マギーが少し不満そうな顔をする。

「例の自己強化魔法の実践だよ。実際に使ってみないとね。」

「まあそうだけど、あなたはどつするの？」

「ここで作業してる。10日までに自分の分は作っておきたい。それが終わったらガイラの服を作る。次行く敵に備える。」

マギーが今度は不思議そうな顔で俺を見つめる。俺は目を逸らして手元の作業をする。

「次の敵？どこへ行くつもりなの？」

「あゝ、そう遠くない場所だ。」

「誤魔化さないで！また危険なことなんでしょ？」

俺は作業の手を止めない。次はローラ王女を助けに行くつもりだ。危険なことは解っているがドラゴンは二度倒しているから不可能ではないはず。個体差と場所だけが問題だ。

「ちよつと聞いているの！」

「ああ、聞いているよ。この先危険じゃないことなんてない。でも俺の予想では今のままでも竜王に勝てる力はあると思う。」

「はあ！なに言ってるの？」

「まあ目の前に竜王がいて戦えるならの話だ。実際は敵の真っ只中を行かなければならないから無理だね。だから強そうな敵は先に潰す。それと現状の膠着状態を壊す。その為の一手だ。」

「もういいわ、アレフもガイラも勇者だったわね。だから成すべきことがある。それはケルテン、あなたもそう、私に止める権利はな

い……。どうせ止めても聞いてくれないでしょ？」

「ああ、止めない。止めて平和がくるならそうするが、今のところそうはならないと思う。」

「じゃあ、私も連れて行って！もう待っているだけなんて嫌！」

「えっ！危険だって……。」

「危険は承知してる、それでもいい。もう無事を待っているだけなんて絶対に無理！私にだってできることはあるはずよ。」

返事を返すことができない。しばらく無言が続く。部屋の外からノックが聞こえた。

「どうぞ。」

遠慮がちにアレフとガイラが入ってくる。

「すみません、全部聞こえちゃいました。」

「悪いな、昼が近いから飯に誘おうと来たら、扉の外まで聞こえた。聞く気はなかったがな。」

「こっちこそすまん……。お前らの意見は？」

「俺は構わんぞ、誰が入ろうが俺の役割は変わらん。」

「僕もいいですよ。何回か一緒に戦ってますけど、マギーさんがいると僕も前に出て戦えます。」

「簡単に言うな。マギーに接近戦はできないから、誰かが守ってやらなければいけないんだ。」

「別に守ってもらわなくてもいいわ!」

「お前馬鹿だろう?」

「俺が馬鹿だと、もう一回行ってみろ、どついう意味だ!」

「ああもう一回行ってやる、馬鹿だ!こんな簡単なことが解らないとはらしくないな。」

「簡単だと?」

「そうです、簡単ですよ。ガイラと僕が前衛、マギーさんが後衛、ケルテンさんが中衛でマギーさんをまもればいいんです。」

「あつ……。」

確かにそうだ。戦いに連れていけないことを前提に考えていたから、気がつかなかった。武闘家、勇者、賢者、魔法使いのパーティーと考えれば理想的だ。もっとも俺はパラメーターの割り振りをミスった賢者だけど。顔を上げて三人の顔を見ると、二人の賛同を得たマギーの目が輝いている。

「はあ……どうせ言っても聞かないのは君だろ、マギー。」

「そうよ、私はわがままな貴族の一人なの。決めたことは王様にでも言われなければ変えない。」

マジギーが冗談めかしてそう言う。その二人、暖かい目で見守るな。

「俺一人が悪いみたいだな。まあいいか、次は連れて行く、その後のことはまた考える。それでいいな！」

「それでもいいわ。アレフ、ガイラ、改めてよろしくね！」

「よろしくお願ひします。」

「おう、よろしくな！」

三人で盛り上がっている。俺としては考慮しなくてはいけないことが増えて頭が痛い。ローラ王女を救出するまで最短で2週間か・
・それまでに十分な準備をしよう。

魔法談義？

8 / 5 勇者支援生活 97日目

ここ数日の日課

6時 起床 鍛錬
8時 朝食
9時 鱗の加工、アレフ含む 兼 魔法講習、マギーのみ
なめし工房の手伝い、ガイラのみ

12時 昼食
13時 ドラゴンスケイルの製作 実戦、俺以外
18時 夕食
19時 魔法講習
21時 就寝

この様に何かなければ俺は宿屋からほとんど出ていない。たまに鍛冶屋に使えなくなった錐を交換しに行くだけだ。アレフ曰く、マギーは自己強化魔法を効果的に使えるようになったらしい。そのせいかガイラとアレフの筋肉痛がひどい。朝になるとアレフがベホイミをかけているのを見る。

ドラゴンスケイルの加工も先が見えてきたので、今日の魔法講習は新しい魔法を教えようと思う。

「マギー、今日はこれからの戦いに必須の魔法を教える。」

「必須、そんなにすごい魔法なの？」

「すぐくはない、むしろ地味とっていい。その名はフバーハ、炎

の息を和らげる魔法だ。」

「ずいぶんと限定的な魔法ね。」

「そうだね。でも大事な魔法になるから必ず覚えてくれ。この魔法は空気の膜を張って外側からの熱気のある程度減少させる。詠唱文は、

『私はMPを6消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、空気の球となりて、この場に留まれ、フバーハ!』

と詠唱だけならそう難しい魔法でもない。魔物に知られても困らない。」

マギーが手元の紙に記述している。書きながら口にはしている。

「そうね、じゃあドラゴンが出てきたら使えばいいのね。」

「駄目、これは一定の気流のある場所を作る魔法なので、どこに作るかを見極めないといけない。敵も移動できるし、敵の懐に飛び込むガイラにはあまり意味がない。OK?」

「なるほど、ドラゴンを間近で見たことないからイメージできないわね。」

「最低でも自分だけは守ってくれ。まあ全員炎への耐性はある装備だからそれで構わない。」

「そうなの？」

「ああ、俺はドラゴンスケイル、ガイラは竜鬨着、アレフは水鏡の盾、君は水の羽衣、みんな炎の耐性がある。もっとも俺とガイラのはまだ未完成だけどね。」

「だからあんなに必死に鱗に穴を開けていたのね。」

「そうだよ、それに今の鎧よりずっと防御力が高くなるからね。何年も前から作るつもりだったんだ。」

「魔法の鎧とか金属の鎧は着ないの？」

「金属の鎧は重いから嫌だ。魔法の鎧なら軽いからいいけど、肩当てがいらぬ。あれがあると腕の動きを阻害して、俺の流儀に合わぬ。」

「いろいろ考慮しなければいけないのね。」

「マギーがしきりに感心している。俺もちからがBあれば、他の選択もあつただけどね。」

「あともう一つ魔法を覚えておく。俺には使いこなすににくい魔法だ。」

「そんな魔法、私に覚えて？」

かなり不思議そうな顔だ。

「魔法自体は俺でも使える。だが消費MPが18だから俺にはきび

しい。」

「ああ、なるほどね。でもそんな魔法が必要になるの？」

「なるよ、マギー、ベホマは知ってるかい？」

「もちろん、ホイミ、ベホイミの次に書いてあったから解読しやすかったわ。」

「そうか、じゃあその次にあったベホマラーだ。これは一定の範囲にいる者全てにベホイミをかける魔法だ。一度に複数の目標が回復するから、いざという時に使える。」

「ベホマの後にあった魔法ね、第4小節だけ解読できなかったのはそういうことだったのね。」

「そうだね、そこと消費MP以外はベホイミと一緒にだからね。さつきも言ったけどエリアにかける魔法だから難しい。なんせ敵にも効果があるからね。詠唱文は

『私はMPを18消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ。』

おお万能たる力よ、血、肉となりて、かの地にある者を癒したまえ、ベホマラー！』

だ。範囲の設定が大事だからよく練習しておいてくれ。」

「ちょっと待って、その次にも同じ様な魔法があった覚えがあるけど？」

「ああ、あるよ。同じくエリア回復魔法だ。その名もベホマズン、消費MP62、全ての者を全快させる魔法。正直実戦で使いこなせる自信はない。」

「消費MP62！力の融合と維持にどれだけの集中がいるのかしら？」

「俺は練習で1分かかった。知ってる魔法で一番消費MPが大きい。だからこれは無理に覚えなくていい。詠唱文は想像どおりベホマとベホマラーを足したものだ。」

「じゃあまずベホマラーを覚えることにするわ。」

それだけ言うとマギーは教えたフバーハとベホマラーの詠唱練習を始めた。複数の強化魔法、フバーハ、ベホマラーとこれだけあれば対ドラゴン戦も大丈夫だろう。とりあえず教えることがなくなつた俺は、ドラゴンの鱗に穴を開ける作業を再開した。

- - - - -

今日は俺も昼からついていくことにした。俺以外の3人は楽しそ
うだ。

「予め言っておくが、俺は手を出さない。いつも通りにやってくれ。」

「せっかくなんだから一緒に闘ってくれてもいいじゃない！」

「そうですよ、たまには体を動かした方がいいですよ。」

「学者、サボるな。」

三人が異口同音で俺を戦わせようとする。

「そうだな、必要だと思っただらそうする。まあこの辺ならその必要もないだろうがね。」

そうこう言っているうちにがいこつの集団を見つけた。アレフとガイラがマギーに近づく。その瞬間にマギーのピオリムが発動する。二人が敵に向かって走る。さらにマギーのスカラがガイラにかけられる。アレフとガイラが敵中で無双状態だ。マギーは近づく敵に備えている。しばらくして敵を駆逐した二人が戻ってくる。その表情は自慢げだ。

「マギー、魔法の選択とコンビネーションはそれでいい。お互いの意志の疎通が十分にできているようだな。」

「それはもう5日も一緒なのよ、当然だわ。」

「そうか、攻撃魔法は使ってるか？」

「まあ、極まれにこっちに来る魔物がいる時ぐらいかしら。」

「もしかしてさっきみたいに完全思考詠唱か？」

「そうよ。」

「攻撃魔法を使うときは、ラストワードだけは発生するようにした方がいいな。誤射の心配がなくなる。」

「解ったわ、誤射のことは考えなかったわ。」

「まあね、いつも余裕があるわけじゃない。もしかしたら君が狙われていると思ってカバーに来た味方を、誤射するかもしれない。そういう時の合図になる。焦っている時には何が起こるか解らない。」

「そっぴゃあ、学者と一緒にの時はそうだったな。言われて初めて気づいた。」

「ガイラ、僕もそうしてましたけど。」

「そうだったけ？全く気づいていなかった。ガハハハッ！」

ガイラが豪快に笑う。つられて皆が笑う。困ったものだ、これからもっとコンビネーションを良くするよう考えなくてはいけない。明日からも実践に付き合うことにしよう。

竜闘着

8 / 10 勇者支援生活 102日目

いつも通り朝の鍛錬をしている。最近ふと気づいたことがある。

「ガイラ、お前もしかして、ちから上がってないか？」

「お前もそう思うか？前に比べて速く強くなったような気がしてた。

「ああ、なんとなくだが業の切れが違う。なにかあったのか？」

「さあ？特別なことはしていない。毎日朝の鍛錬、なめし工房での手伝い、昼からの実戦、それだけだ。」

「あの、僕もなんとなくそう感じているのですけど。」

横からアレフが口を挟む。

「アレフもか？ちょっと基本動作を見せてくれ。」

アレフが剣を振るのを眺める。前、後ろ、横から見ると、確かに鋭くなっているな。俺は変わっていない……。何が影響した？

「もしかしてピオリムじゃない？ここ10日ぐらいほとんどの戦闘で、私がピオリムをかけているわ。」

「なるほど、メルキドでも俺が使ったな。あの後は筋肉痛に悩まさ

れていた。ガイラ、最近はどうだ？」

「そうだな、前みたいにアレフに回復してもらうほどではなくな
た。」

「じゃあそれで間違いないな。」

「そんなことあるのですか？ただ魔法の効果で素早くなっていただ
けですよ。」

「ああ、限界に近い負荷を与えてから十分に休息を与える、そうい
うトレーニングがある。超回復というのだけど、まさかこんなやり
方があったとはな。」

「まあいいじゃないですか、僕もガイラも前より動けるようになって
たのですから。」

「だな！筋肉痛に耐えてきた甲斐があったというものだ。」

二人が素直に喜んでいいる。待てよ、見たところ各自の能力はこん
な感じか。

アレフ	A -	A	B	B +	B -	B +	C +
ケルテン	C	B	B	A	C +	B -	
ガイラ	A	A +	B +	A	C	A -	F
マギー	D	C	A -	C -	A		

もう俺では相手にならんとくるまで来たな。

「そうよ、勇者が強くなって悪いことなんかないから、それでいい

じゃない。」

「確かにそうだ。ただ維持するためには、しばらく同じ位の負荷を続けないといけないかもしれない。」

「そんなの私がいれば問題ないわ。」

いやそれは君がMPタンクだから言えることだ。俺は必要なければわざわざピオリムなんか使わない。

「まあいいや、ガイラ、例の革はもつできていそうか？」

「ああ、昨日の話だと予定通り納品できると言ってた。」

「なら朝食の後に取りに行くか。お前の装備を作ってもらうぞ。」

「そうか、楽しみだ。」

鍛錬を終えて朝食をとる。ガイラが速効で食事を済ませて、そわそわしている。俺はわざとゆっくり食事を取る。いつもと同じ時間に行けばいいのだ。

.....

革工房ブリー、この10日間ドラゴンの皮をなめしてもらっている工房だ。これが何の皮なのかは伝えていない。ガイラにも言わないようにしてある。目の前に茶色に染まったドラゴンレザーがある。手にとって触ってみる、革としては上出来だ。

「ちょっと端を切るぞ。」

懐からナイフを取り出して刃を当てる、切れないほど硬いことはない。耐火性を調べてみたいがここではできない。

「いい出来だ。ではここからこいつの服を作って欲しい。」

「これでか？普通の革に比べて丈夫だからいい物はできると思うが、問題があるな。」

「それは想定外の範囲だ。一文字に頼んだ専用の針がここにある。」

「なんだ用意がいいな。今手元にある針では縫えないと話をしていたところだ。引き受ける前に一つ質問がある。いったいこれは何の皮だ？」

「はあ・・・まったく職人という奴はどこに行っても同じだな。実はドラゴンの皮だ。この間メルキドで狩ってきたばかりだ。」

「なるほど今まで扱ったことのない皮だと思っていた。よし、その針を貸してみろ！」

俺が懐から皮で包んだ針を取り出して渡す。針を革に刺して反対側に抜く。

「これもすごいな。兄ちゃん、あんた何者だ？城の人間なのは知っているが・・・。」

「国務大臣付き勇者支援官だ。横にるのが勇者ガイラ、竜王を倒す為にどうしても必要な装備だ。」

「本当か！わしが10日もこき使ってたこいつが勇者か？」

「正真正銘、勇者だ。だからこれで服を作ってくれ。こいつの流儀に相応しい服だ。名前だけは決めてある。竜の革で作られた武闘着、竜闘着だ。」

「竜闘着か、いい名前だ。その名前に負けない物を作らせてもらおう。」

「ありがたい、頼む。」

その言葉にガイラと親父が固い握手をしている。

「幾つか注文がある。いいか？」

「ああ言ってくれ、中途半端な物はつくらねえ。」

「まず作りは今こいつが着ている物と同じにしてくれ。それでこいつが納得するまで付き合ってくれ。」

「当然のことだな。次はなんだ。」

「縫い目が表に出ないようにしてくれ。予想では耐火性が強いはずだ、縫い目から燃えては困る。」

「それも当然だ、縫い目が表になるような無様な作りはしない。」

「なるほど、そう言われればそうだ。あとはこれを使ってくれ。」

懐から袋を取り出して渡す。中身を確認している。

「これもドラゴンの素材か？」

「そうだ、鱗だ。この部分をこの鱗で補強してくれ。」

ガイラの服の心臓の位置、前も後ろも空いた穴を縫ってある場所を指し示す。

「これはひどいな。あんたよく生きてたな？」

「いや、その、なんだ。まあ、運が良かっただけだ。」

ガイラが困った顔で答える。まさか一度死んだとは言えないからな。

「注文はそんなものか？必要なら染めることもできるがどうする？」

「時間が惜しい。いつまでも魔物をのさばらせてはおけない。」

「確かにそうだ。解った、特急でやらせてもらう。おいその服をすぐに脱げ、すぐに取り掛かるぞ。」

ガイラの武闘着が脱がさせる。革工房ブリー、総員での作業が始まった。

出発、王女救出

8 / 15 勇者支援生活107日目

なんと5日で竜鬪着が完成した。革工房ブリーでは目の下に隈ができている職人でいっぱいだ。もっとも持ち主となるガイラの目の下の隈が一番ひどい。ここ3日ほど一時間置きに仮縫いと調整に付き合っていたからだ。それでもそのガイラは、今俺の目の前で完成した竜鬪着に袖を通して御満悦だ。

「どこかおかしな所はないか？なければそれで完成だ。」

「ああ、もういいぜ。少し新品の堅さが残っているが、直に柔らかくなるだろう。」

「少しでも変なことがあったら持って来いよ。いつでも手直ししてやる。」

「了解。じゃあありがとな！」

それだけ言うとガイラが出て行った。眠そうな顔をしていたから速攻で宿屋だろうな。まだ用件が済んでいないのに困った奴だ。

「まだ料金を払ってませんでしたね。なめしの料金を含めて15000Gでしたね。」

「5000Gでいい。」

「それじゃあ割りが合わないでしょう。正規の料金と特急料金は払

いますよ。」

「いや、それはいい。ただ条件がある。次にドラゴンの皮が手に入ったら優先的に売って欲しい。あんな素材を他所の工房に渡すのはもったいない。」

なるほど、職人魂が騒ぐか。紹介した奴もそうだったな。

「わかった。近いうちに手に入る予定がある。まずここに持つてくるよ。はい5000G、ここに置いとくよ。」

金の入った皮袋を作業台の上に無造作に置く。目前で金を数えている、しばらくして納得したのか、懐に収めた。

「じゃあまた来る。残った革はそちらで処分してくれていい。」

「そうか悪いな。ありがたく貰っておく。」

俺が工房から出る。これで装備は揃った、技量も人材も十分だろう。ローラ王女を助けたら一気に物語は進むはずだ。とりあえずガイラが十分に休んでから、海底洞窟に向かおう。

- - - - -

翌朝になってもまだガイラは起きてこない。俺とマギー、アレフはすでに朝食を終え、宿屋のロビーでガイラを待っている。すでに荷物はまとめていつでも旅に出かけることはできる。

「あゝ、久しぶりに良く寝た。まったく職人という奴は頑固で困る。」

「まあそう言うな。そんな奴でなければ任せられん。」

「確かにお前の言う通りだ。で、なんでそんな旅支度なんだ？」

「なんの為に装備を整えたんだよ。」

「本番ですよ、次の目的地へ行きますよ。」

「本番？何処へ行くんだ？」

ガイラの目が急に輝く。戦いの話になると人が変わったかのようにだ。

「海底洞窟だ。例の勇者4人組が全滅したところだ。何がいると思うっ？」

「半分溶けた鉄の盾を見つけた場所だな。ドラゴン、それも強い个体だろうっ？」

「正解。なんでそう思う。」

「あの時お前は必死で止めた。メルキドでアレフの装備を買って、ドラゴンを実際に倒した。さらにここで俺とお前の装備を作ってから、自信有り気に行くとなった。答えは明快だ。」

「そこまで解ったのなら、早く準備をして来い。」

ガイラが自分の部屋に駆け込む。5分とたたずに戻ってくる。

「ほら何をしてるんだ。早く行くぞ。」

アレフとマギーが呆れ顔だ。もちろん俺も呆れている。言ってもしょうがないので黙ってついて行くことにした。今回は馬を用意していないのでガイラの馬に野営用品を載せ、全員徒歩で進む。

「これからの予定だが、毒の沼地まで2日、毒の沼地の横断に1日、海底洞窟で1日か2日。それで目的地に着く予定だ。」

「どうやって毒の沼地を通るの?」

「前はガイラの薬草を使いました。今回もそうしますか?」

「いや、俺が魔法を使う。公開する予定だった遺失魔法の一つトラ Manaを使う。」

「どんな魔法なのかしら?」

「ああ、外部の影響を中和する空間を作る魔法だ。効果範囲は術者から半径2mほど、術者と共に移動することができる。」

「ずいぶんとピンポイントな魔法があるのね。」

「元々は溶岩の上を安全に通ったり、魔法の結界の中を通ったりする魔法だ。もちろん毒の沼地にも効果がある。」

「学者は相変わらず便利だ。アレフ、お前もそう思うよな?」

「便利って道具みたいに言っちゃ悪いですよ。」

「なんとも言え、実際便利な魔法だ。」

「マギーがいるのでいつもより速度は遅い。歩きながら会議をしているような感じもある。」

「それにしてもなんで前のドラゴンより強いやつが、あんな場所にいるんだ？」

「さあな、守るべきものでもあるんじゃないか？」

「魔物に守るべきものがあるのですか？」

アレフが驚いて聞き返す。マギーもガイラも同感な様だ。

「おいおい、君等は魔物全てが破壊の権化だと思っているのか？」

「いや、まあ俺にとっては関係ないから気にしていない。」

「なるほど、ガイラらしい答えだ。敵か味方が、簡単でいいな。アレフはどうだ？」

「正直考えたことありませんでした。」

「私もそうよ。魔物は人間を襲ってくるもの、そういう認識でしかないわ。」

「実に残念な答えだ。まず魔物に対する認識を変えよう。魔物にはいくつか種類がある。第一に野生生物が瘴気によって凶暴化したもの。スライム、ドラキー、メーダ、キメラなどがこれにあたる。次

に魔王の意志に従う魔物。魔王の手下ではドラゴン、魔法使い系、リカント系がこれだ。そして成仏できない魂の魔物、鎧系、骸骨系、ゴースト系だな。」

「それが本当なら魔王がいなくなったら、襲ってこなくなる魔物もいるってことね。」

「そうだな。まず魔物にされた魂は成仏するだろうね。それと野生生物も滅多なことでは襲ってこない。ガイラもそれは知っているだろう?」

「そうだったな。魔王が現れる前から、その野生生物に該当する奴等はいた。巢に近づくとか繁殖期でもなければ襲ってこなかったな。まあ大量発生した時は退治の依頼がきたもんだ。」

「そうだ、よく旅費を稼ぐのに依頼を受けたものだ。」

「そんなことしてたのですね。」

「結構いい金になったんだ。まあそれはいいとして、問題なのは自分の意志で魔王に従う奴等だ。意志がある、つまり自分で考えて行動することができる。」

「ここまで話して一息をつく。俺以外の三人も考えもしていなかったことに息を飲んでいる。」

「竜王自身も破壊の権化でないことも解っている。光の球を盗んだり、王女を誘拐させたりと忙しいやつだ。破壊の権化ならアレフガルド中を暴れまくっているはずだな。」

「それもそうね。だから竜王と意志を持っている魔物は恐ろしい、
そう言いたいよね。」

「ああ、なんらかの策謀があるかもしれない。竜王側に勧誘を受け
る者もあるだろう。」

「それは考えすぎじゃない。いくらなんでも竜王につくなんてない
わよ。」

「マギー、俺達を3日に亘って狙い続けた影の騎士を操っていたのは
人間だった。それと君が解決した漆黒の騎士も、俺を襲ってきた
赤い飾りの悪魔の騎士もそうだったと考えている。」

マギーが黙って考え込む。アレフとガイラも深刻な顔をしている。

「今言ったのは公にしないでくれ。疑心暗鬼になった挙句、人間同
士で争うことになる。まあそういったことのできる敵だと思ってい
けるだけでいい。」

三人が黙って頷く。竜王の最後の誘惑にかられる様な人物ではな
いことは解っているが、念の為に伝えておく。

「さあ、もう少し急ごうか。先は長いぞ。」

わざとらしいくらい明るい声をかける。まずローラ王女を救出し
て人間にとって明るいニュースをもたらす。そのことによって竜王
の誘惑にかられる者は減るはずだ。

竜王の眷属

8 / 17 勇者支援生活 109日目

毒の沼地が目の前に広がる。

「じゃあ通れる様に魔法を使うぞ。」

俺はMPを2消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、浄化の力となりて、我に付き従い穢れを取り除け、トラマナ！」

俺の周りに薄っすらと光る空間ができる。三人が俺と一緒に歩く。ガイラの口には特製のマスクが装着されている。

「半信半疑だったがなんともないみたいだな。」

「そう言う台詞はその口についてる物を取ってから言え。」

ガイラが黙ったままマスクを外した。マギーが魔法の効果範囲から顔を出す。顔をしかめてむせている。

「けほっけほっ！毒の沼地って嫌な臭いがするのね。」

「マギーさん、止めた方がいいですよ。長い間吸うと体調が悪くなりますよ。」

「ええ、もう頼まれても吸わないから。ねえケルテン、この魔法は熱や魔法障壁にも効くと言ってたわね。本当に何でも効果があるの

「？」

「ん？対象となる障害によって詠唱文が違うよ。」

毒の沼地の南側、海岸線に沿って歩く。マギーが何かぶつぶつ言っている。

「あのさあ、これで熱を防ぐことができるなら、フバーハはいらないのではなくて？」

「この魔法は効果が現れると少しずつ浄化の力が失われていく。だから強い炎とかにはすぐに効果を失ってしまう。フバーハなら効果時間以内なら効果を失うことはない。」

「なるほどねえ、でも溶岩の上も歩けると言っただけだった？」

「言ったよ、でも効果時間が短い。もっともこのアレフガルドに溶岩を通過しなくてはいけない場所なんてないから必要ないね。」

「たしかにそうね。じゃあ魔法障壁は？」

「ラダトーム城の一部、メルキドの一部にそんな空間があるよ。効果は実践済みだよ。」

「おしゃべりはいいから急ごうぜ。」

ガイラが急いでいる。俺の歩く速度が遅くなっていることに苛立っているな。

「悪い悪い。じゃあ先を急ごう。マギー、また詳しく教えるから。」

俺が足を速める。皆が寄り添って歩く。トラマナの光が徐々に薄れると、再びトラマナをかける。

- - - - -

夕方に海底洞窟の北口に辿り着く。前と同じく、夜は洞窟内で過ぎた。

「マギーは来たことなかったな。ここから南が本道だ、リムルダールのある島に続いている。ちなみにこの洞窟は400年前に手掘られたものだ。」

「ふん、それは大変だったでしょうね。」

「だろうね。それでこっちが自然道、多分掘ったときに偶然見つかったものだろう。こっちは特に暗いからマギー、明かりを頼む。」

そう言って背囊から松明を二本取り出して渡す。マギーがレミールを使う、一本はガイラ、もう一本はマギーに持たせる。隊列はガイラ、俺、マギー、アレフの順番だ。広いところでは二列で進む。

「こっちでいいのか？お前しか道を知らないぜ。」

「前は真っ暗の中進んだから、いまいち記憶に自信がない。左手の法で進んでくれ。」

「おっ、アレフの言ってたあれか。」

「そうですね。すみません、ガイラ止まって下さい。まだ地図が書けてない。」

マギーが明かりで手元を照らし、アレフが紙に地図を書いている。ガイラが呆れた顔をしている。

「またこれだ。ガライの墓でもこうだったぞ。」

「これは必要なことなんです。この海底洞窟は東側だけしか書いてなかったから、気になっていました。」

「アレフ、これすごいわ！帰ったら持つてる地図を頂戴。図書館に収めるから、いい？」

マギーが興奮気味で話している。少し気になったのでアレフの手元から一枚手に取る。道の幅、長さ、高さまで全て書かれている。

「ずいぶん詳細な地図だな。俺でもここまで書かないな。」

「やりすぎですか？」

「もうちょっと簡略化してもいいが、マギーが図書館に地図として収めてくれるなら、これぐらいでもいいかな。勇者アレフの地図として自信を持って後世に残せるな。」

「なあ、もう進もうぜ。俺は帰る道さえ確保できればいい。」

「すみません。じゃあこんな感じでいいです。」

アレフが地図を懐にしまう。5分おきにアレフが立ち止まって地

図を書きながら進む。前にシュミットと来たときと違い、明かりがあるせいなのか、人数が多いせいなのか、襲ってくる魔物もない。およそ半日で目的地についた。

「この辺だ、ここを曲がった先からは未知の領域だ。」

「少し獣臭いような、焦げ臭いような・・・ちょっと見てくるか。」

ガイラが足音を忍ばせて先行する。しばらくして戻ってくる。

「そこを曲がった先は大空洞になっている。敵は見えなかった。このまま進むか？」

「行きましよう。ここで逡巡していても仕方ありません。僕達以外の勇者が亡くなった場所ですから、調べるべきでしょう。」

「俺も賛成だ。ガイラもマギーもいいな。」

二人が頷く。4人で進む、曲がったそこはドーム状の大空洞。何かがある気配はない。壁に沿って進む、いきなり大空洞に男の音が響いた。

「これはこれは高名な勇者アレフ殿ですな。お会いできて光栄です。」

暗闇に礼服を着た端正な顔立ちの男が立っている。こいつが声の主のようだ。

「失礼ながら、あなたは誰ですか？なぜ僕のことを？」

「これは失礼しました。私は竜王様の眷属のオピオン、短い間ですがお見知りおきを。」

うやうやしく頭を下げる、だがその言葉には人を馬鹿にしたような雰囲気がある。

「竜王の眷属だと、ならばなぜドラゴンの姿をしていない！」

「これは仮の姿です。それより勇者アレフ、あなたの話をしましょう。我々の手の者より聞いてますよ、天に祈り雷を落とすことができます。それは誠でしょうか？」

「アレフ、答える必要はない。」

「失礼な人ですね。今私は勇者アレフと会話しているのです。少し黙っててもらえますか？」

オピオンなる者が殺気を放つ。アレフとガイラが構え、マギーが一步退く。

「アレフと会話したいなら、まずその人を馬鹿にしたような話し方をやめるんだな。聞いていて虫唾が走るぜ。」

「人間ごときにずいぶん舐められたものです。あなた方などで消し炭にできるのですよ。」

「馬鹿が貴様、そんなことは対策済みだっ！」

「ガイラ！余計な事は言うな。」

「なるほど、あの者が言っていた曲者とはあなたですか。では対話の相手を代えましょう。あなたは何を知っているのですか？」

「ふん、大物ぶつてはいるがお前自身が何者か解っていないようだな。竜王の眷属だと？可笑しくて腹がよじれるわ。」

「どう言う意味だ！」

俺の言葉に、オピオンが声を荒げる。

「竜王に眷属などいない。」

俺以外の全ての者が呆気に取られている。

「もしかしてお前、竜王の本当の姿を知らないんじゃないか？もしそうならお前、信頼されていないな。かわいそうに・・・捨て駒だったりして、プププッ！アハハッハハハハハハッ！」

思わず噴出す。広い空間に俺の笑い声だけが響く。端正な顔をしたオピオンの顔が真っ赤に染まる。鬨いは近い。ここにいる者全てにそれだけは解った。

王女救出

「何が可笑しいっ!!!」

一人馬鹿笑いをする俺に激高したオピオーンが怒鳴った。俺は馬鹿笑いを止める。

「もう許さんぞ、奴との約束など知るもんか！人間どもよ、跡形も無く消してくれるわっ！」

オピオーンの人型が薄れ、その影が徐々に大きくなる。俺は左手を後ろに回して人差し指と中指を立てる、さらに手を開く。

「アレフ、前へ。ガイラ、右頼む。皆固まれ！」

二人に声をかけてからピオリムを使う。

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお万能たる力よ、内なる光となりて、我等と駆けよ。ピオリム!》

目の前に巨大なドラゴンが姿を現す。口を大きく開け、思いつき
り息を吸い込む。次の瞬間、ものすごい勢いで炎が叩きつけられた。
激しい息を吐き終えたオピオーンが勝ち誇って、炎の跡を見つめる。

「何・・・だと・・・？」

そこには盾を構えたアレフを先頭に無傷の4人が立っている。ドラゴン、オピオーンは口を開いたまま立ち呆ける。

「マギー、アレフを頼む。ガイラ、アレフ行けっ！」

同時に右手を横に突き出して、親指を立てる。さらにガイラを目標にバイキルト。

《俺はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、鋭き刃となりて、かの者の武器に宿れ。バイキルト！》

飛び出したアレフの炎の剣がドラゴンの左前脚の鱗を切り裂く。そこにガイラの右ストレート、鮮血が飛び散る。

「ガアアアアアア！おのれえー、人間めえ！」

痛みと屈辱にドラゴンが吼える。アレフとガイラがいる場所に右脚が横殴りに振られる、すでに飛びのいて二人はいない。

「マギー、俺にもだっ！」

ドラゴンの懐に飛び込む。

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、酸となり、この者の蝕め、ルカニ！》

ドラゴンに手を当てて魔法を発動する。さらに飛びのきざまに居合いでその場所を切り裂く。魔力の乗った刀がドラゴンの鱗を切り裂く。

「うがあああ、馬鹿なっ！俺様の鱗があ・・・貴様っ、何をした！？」

自慢の鱗をいとも簡単に切り裂かれたオピオンが、思わず疑問を口にする。間が開いて、俺達が仕切りなおす。アレフがマギーの前に戻り、ガイラが大きく右に離れる。俺はガイラと正反対の位置。

「たいした鱗でもないな。お前、カルシウム取ってるか？」

右手の人差し指でドラゴンを指しながら、またまたわざとらしい挑発をする。ドラゴンの首が反射的に俺の方を振り向く。

「ベギラマッ！」

マギーの手から放たれた電撃がドラゴンを射抜き、左目が弾けた。

「ぐああああ！」

ドラゴンの顔が苦痛に歪む。それでも首をもたげて大きく息を吸う。

「すつうううう！ぐふっ！」

大きく息を吸った隙を突いて、ガイラが懐に飛び込みわき腹に強烈な一撃。ドラゴンが思わず吸った息を吐き出してしまふ。アレフが位置の下がった首を切り付ける、一瞬遅れて鮮血が飛び散る。痛みのにた打ち回ったドラゴンの頭がむちゃくちゃに振られ、巻き込まれたアレフは吹っ飛ぶ。俺とマギーの目があう、マギーが頷く。一瞬の隙を突いて息を吸ったドラゴンの火の息が、倒れたアレフを

「最後はやりすぎじゃなかった？」

マギーが咎めるかの様に俺に呟く。

「そうだね。」

俺も呟く。何時の間にかアレフとガイラも近くに立っている。二人は俺を咎めることはない。

「学者、お前とマギーでやってたハンドサインはなんだ？俺達は聞いてないぞ。」

ガイラがふざけて俺に聞く。

「ああ、敵に情報を与えてやる必要はないからな。二人で決めておいた。人差し指を立てて敵を指す、これは攻撃の合図。二本指を立てたら、フバーハの合図。手を完全に開いたら全員を回復、親指を立てたら武器の強化、他にもいろいろある。」

「僕へのベホイミもそうですか？」

「それは違う。俺とマギーのアイコンタクトの結果だ。」

「そうよ、私が回復すると合図をしたわ。」

「助かりました。ありがとうございます。」

「礼なんていらないわ。アレフが最初に前で炎を受けたのも、ガイラが飛び込むのも、私が回復するのも全部役割があつてのこと。そうでしょ？ケルテン！」

黄金のローブを身に纏った者が、ドラゴンと人間達の死闘を眺めていた。

「まさかあのオピオンがああも簡単に殺られるとは……しかしオピオンも口ほどにもない。せめて奴等に奥の手ぐらい使わせてから死ねば……。何も収穫を得ることはできなかつたではないか。」

視線の先で人間達が牢屋に集まる。

「あの者との約定は果たせなかつたか。もう縁は切るつもりだったからよしとするか。どうせならローラ王女は生きておる、返してやるつか。そう伝えた時の驚く顔でも見たかつたのだが……。」

足音も無く黄金のローブが移動する。

「鎧の騎士と骸骨の一個中隊、影の騎士による暗殺部隊、メルキドに送った軍、そしてオピオン。全てあの者の手駒を中心によられておる。私も危うく数百年の英知を失うところであつた。まずこの手駒を奪うことにするか。」

黄金のローブが床に落ち、朽ち果てた。すでにそこには何もいない。

アレフとローラ

「ひどい……………」

アレフがあまりの凄惨さに絶句する。牢屋の中には生活に必要なそうな物は何一つとしてない。汚い皿とおそらく排泄物を入れる壺、粗末な毛布だけ。そこに何とか服装で女性と解る人物が倒れている。

「誰なんでしょうか？」

アレフが聞いて当然の質問をする。俺は答えを知っている、それでもこの倒れている人物がローラ王女とは思えない。

「誰でもいい、助けるぞ。アレフ、鍵を出せ！」

ガイラが強い口調で命令する。慌ててアレフが魔法の鍵を取り出して牢屋を開ける。俺とガイラが中に飛び込む。俺達の気配に目を覚ました女性がか細い声で悲鳴を上げた。

「いやあああ—————！来ないで!!!!」

その女性が壁際に逃げ、弱々しく俺達を拒絶する。俺とガイラが近づくとさらに逃げようとする。

「駄目だ。俺達では怯えさせるだけだ。」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう。僕が無理にでもここから出します。」

マギーがその服の裾を手に取り調べてみる。

「ここまでの服は私も持っていないわ。それにこの御顔は間違いなくローラ王女様よ。」

「そうか、ならマイラに連れ帰って養生してもらおう。」

俺の言葉に三人が不思議そうな顔をする。

「なんで？すぐに城に帰るべきよ。」

「マギーさんの言う通りです。王様もお待ちのはずです。」

「学者、こればかりはお前が間違っていると思っぜ。」

三人から猛烈に批判される。普通ならそう考えるだろう。しかし俺はアレフとローラ姫のフラグを立ててやりたい。屁理屈をこねても俺の意見を通してみせる。

「駄目だ。今の姿のまま城に連れ帰ることはできない。きっと本人にとっても後々まで残る屈辱になり兼ねない。マギー、もし君ならこの姿で連れかえりたいか？」

「そつ、それはお断りしたいわね。」

「そうだろう。せめて自分で歩けるぐらいまでは養生させたい。自分自分では歩けないだろう。」

皆の視線がローラ王女の足に集まる。痩せこけて骨と皮だけだ。

「改めて見ると酷いな。確かに自力で歩けるとは思えんな。」

「そうだ、ガイラ。それに何ヶ月も体を洗っていないだろうからマイラで綺麗になってもらいたい。アレフ、納得したか？」

「それでも2、3日したら城に連れ帰るべきです。」

「そうだな、精神が正常ならその選択もあるだろう。」

「精神が正常？どういう意味ですか？」

「さっき俺とガイラを見て逃げようとした。たしかに見下ろすように立った俺達に非があるが、それにしても怯えすぎだ。多分精神に異常をきたしているだろう。こんな状態で城に帰ったら取り返しつかないことになる。」

俺の屁理屈に三人が押されている。

「まあ、俺の取り越し苦労かもしれん。まずマイラへ戻ろう。」

「そうね、様子を見てから考えましょう。じゃあすぐにルーラで行きましょう。」

「そうだ、ルーラでマイラに戻ればすぐだな。……あれ？なんか忘れていたような気がする。」

「あっ！ルーラは駄目だ。」

「なんでよっ！こんな時まで何言ってるの！」

「俺達3人は常に居場所が知られている。ここから急にマイラに戻るわけにはいかない。」

「じゃあ、どうするのよ。もうルーラを公表してしまえばいいじゃない！」

マギーが俺に食ってかかる。

「これだけは駄目だ。あまりにリスクが大き過ぎる。」

「リスク、リスクって、あなた心配しすぎじゃない。今は緊急時のよー！」

「絶対に公表しない。これはずっと前から決めていたことだ……
……よし、ならこうしよう。マギー、王女を連れてマイラへ跳べ。それで宿屋で静養させる。俺達はなるべく急いで戻る。」

「でも私一人では運べないわ。」

「村の入り口に着いたら、門番に頼んで協力してもらえばいい。魔物に捕らわれていた人を助けたとも言えば手伝ってくれるだろう。」

「解った、口論している時間が勿体無いわ。なるべく早く戻ってきてね。」

アレフが自分のマントにローラ王女を包んで地面に降ろす。マギーが手を当てて眩く。リレミトの魔法が発動して二人が消えた。

「さて、アレフ。お前も急いで戻れ、ガイラの馬を使えば、お前だ

「けでも早く戻ることが出来るだろう。」

「なんでですか？別に僕じゃなくてもいいじゃないですか。ケルテ
ンさんなら何かできるでしょう。それにガイラだって薬師としてで
きることもある。僕は何もしてやれない！」

アレフが悔しそうに言い放つ。

「いや、駄目だ。俺やガイラでは恐れさせるだけだ。さつきも見た
だろう。」

「そうだ、アレフ。俺のライを貸してやる、すぐに戻れ。マギーの
嬢ちゃんの言い草じゃねえが時間が惜しい。そうだろうっ！」

ガイラはそれだけ言うと口笛を吹く。待機させておいたライが走
ってくる。ガイラが鼻筋を撫でながら声をかける。

「ライ、悪いがこいつを乗せてやってくれ。暴れるんじゃないぞ。」

そしてアレフに手綱を渡す。ガイラが手を離しても暴れることは
ない。

「すみません。お借りします……………リレミト！」

アレフとライの姿が消える。俺とガイラがため息をつく。

「おい、なんでそんな必死にアレフを行かせたんだ？」

「さつきも言っただろう。俺達では怖すぎる、それだけだ。」

「下手な言い訳だな。そうとは限るまい、他に理由があるだろう。」

俺はさらに深いため息をつく。最近よく思考を読まれているようだ。

「俺やお前が城に王女を連れ戻る、その光景を想像できるか？」

「いや、俺の柄じゃないな。・・・なるほど、勇者アレフに箔をつけるか。神の申し子、勇者アレフが誘拐された王女を連れ帰る、最高の光景だな。」

「そういうことだ、俺は影でいい。お前も自由でいたい。アレフは勇者としての覚悟ができてきた。俺は背中を押してやるだけだ。」

「勇者の師匠として名前が残るかもしれんぞ。」

「ふん、言ってる。さてと帰る前にとっとドラゴンを解体するぞ。革工房に約束してたんだ。」

「そついやそんな物あったな。オピオンだっけ？かわいそうだから名前だけは覚えといてやるか。」

二人で黙々とドラゴンを解体する。手を動かしながら思考が巡る。アレフとローラを会わせる、これをしないと未来の歴史が大きく変わってしまう。これからの歴史を誘導していることに恐怖を感じた。

心の病

8 / 2 1 勇者支援生活 1 1 3 日目

マイラの村に戻った、すぐに宿屋に駆け込む。あまり広くない口ビ―にマギーが座って佇んでいる。

「今戻った。マギー、こんなところでどうした？」

「ああ、おかえり。姫様がアレフ以外誰も近づけないの。私はまだ
ましかけど、他の人に会おうものなら悲鳴あげて逃げ出しちゃうわ。」

「やはりそうか、とても城に帰れるような状態じゃないな。」

「そうよ、それでアレフが四六時中一緒にいる。部屋の中でずっと
手を握ってるわ。魔法か秘術で何とかできないの？」

「そんな便利なもの知らないよ。できるのは目を覚まさせることと、
一時的に混乱させることぐらいかな。どちらも意味ないな。ガイラ、
精神に効くような薬は知らないか？」

「残念ながら知らないな。うちの流儀ではまず精神を鍛える、とい
うことになっている。」

「あつそう。なら徐々に日常に戻すとするしかないな。」

「日常ってどついでいこと？」

「そうだな・・・いつもの食事に、いつもの衣服、使い慣れた物があるとなおいいかもな・・・よし一度城に戻って何が持ってこよう。」

俺のその言葉に二人が不思議そうな顔をしている。

「城には知らせないんじゃないか？」

「そのつもりだったが、そうはいかないようだ。一部の信頼できる奴に頼もう。」

「誰に頼むの？」

「シユミットしかいないな。できれば大臣にも伝えたくないんだが、最悪知られてしまいかもしれない。」

さらに不思議そうな顔をされる。

「大臣にも秘密なの、なんで？」

「大事にしかねない。すぐにでも近衛騎士団をつれて向かえに来る可能性が高い。」

「ありそうね。あの人体面を気にする人だから。」

「はあ、そういう訳でガイラ、留守番頼めるか？俺とマギーで城に戻る。」

「ああ構わんよ、それで俺は何をすればいい。」

「そうだな、姫様の食事を頼む。できるだけ滋養強壮効果のある食事がいいな。得意分野だろ。」

「まかせとけ！俺の得意分野だ。」

「OK、あとはドラゴンの素材を鍛冶屋と革工房に卸しておいてくれ。戻るのは早くて3日後だ、じゃあマギー行くぞ。」

背負っていた荷物を降ろすとそのまま宿屋をでる。マギーの馬車ごと城に戻るべく厩舎まで急いで歩く。馬車に馬を繋いでからルーラを使う。次の瞬間、久しぶりのラダトームの景色が見える。

「悪いが俺は急いで城に戻る。マギーは屋敷か図書館にいてくれ。」

それだけ伝えて城に走る。後ろでマギーが何か言ってたようだが耳に届かない。城に入ってから走のを止めて、急ぎ歩く。基本的に城内は走るとは禁止されている。なにか俺とすれ違う武官が騒がしい。文官はそうでもない。二階に上がる、近衛騎士の控え室が目の前、そこにいたほとんどの騎士が驚いた顔をしている。

「あれっ？どうかしたか……。」

「お前、それ……。ちょっと来い！」

たまたまそこにいたサイモンが俺を控え室に引っ張り込む。

「なんだよ、俺は忙しいんだ。用があるなら急いでくれ。」

「お前、わざとやってるのか？その鎧はなんだ、見ない鎧だな。」

しまった、ドラゴンスケイルのままだった。どう誤魔化そうか……。

「ああ、特注の鎧だ。今までの鎧はメルキドで悪くなったから作り直してもらった。」

「なるほど……それドラゴンの鱗だよな。」

その声にその場にいた全ての騎士がざわつく。

「やっぱり解るか?」

「解らんはずがないだろう。そんな大きい鱗なんか他にない。」

「しまったな。公表する気はなかったんだが……手遅れだよな。」

「そうだろうな。まあドラゴンを狩ったお前等にしか作れない鎧だからな、もしかすると欲しいと言う奴が現れるかもしれない、覚悟はしておけよ。」

「おう、忠告はありがたく受け取っておく。」

それはまずいな。幾ら金を詰まれても売る気はないが、面倒くさいことになるかもしれない。いやいや、今はそれどころではない。

「サイモン、シュミットを見ていないか?」

「知らないな。誰か特務隊士のシュミット殿を知らないか?」

近衛騎士達がいろいろ言っている。ほとんどの者が知らないよう

だ。

「思い出した。そういえば3日ほど前にドムドローラに行くと言っていた。なにか調査することができたらしい。」

ドムドローラに何の用だろうか？魔物の巣窟に忍び込んでまで調べることなんかあるだろうか？しかしシュミットがいないとなると誰に相談するべきだろうか。

「隊長は？」

「ああ、隊長なら部屋にいるぜ。」

無言で立ち上がると近衛騎士隊長の部屋まで歩き、ノックをする。返事も待たずに入室する。そこには書類に埋もれたアイゼンマウア―近衛騎士隊長が座っている。俺を訝しげに見る。

「緊急に付き非礼はお許し下さい。他に相談できる者がいません。」

「緊急かつ誰にも相談できない話か。お前がそこまで慌てるとは相応な問題だろうな。解った、聞こう。」

俺は扉を閉めて、誰も聞いていないか確認する。

「この部屋は外部に音が漏れない様になっている。心配はいらない。」

「そうですね。ではいきなりですが本題に入ります。実はローラ王女様を助けだしました。」

「なんだとっ！それは誠か！」

いきなり立ち上がって声を荒げる。

「誠です、今はマイラの村で保護しています。ただ長い牢生活で健康を害し、さらに精神を病んでいます。」

「なんと、ではすぐにでも迎えを出さねばなるまい。」

「いけません。現状ではアレフ以外の誰にも心を開きません。この城から大挙して押し寄せれば取り返しのつかないこととなります。故に他の誰にも相談できないのです。」

「ではどうせよと言うのだ？」

アイゼンマウアーが難しい顔をしている。

「まず健康を取り戻してもらいます。同時に病んだ心も癒して頂きます。誘拐される前に着用していた服や寝具などを用意して下さい。それで日常に戻るように取り計らいます。」

「心の病か・・・それは近衛の領域ではない。お前の見立てに頼るしかないな・・・よろしい私がかししよう。これは陛下にも話してはいけないか？」

「話さない方がよろしいでしょう。元に戻らない可能性もあります。余計な希望は抱かせない方がよろしいかと・・・。」

「・・・そうか。わかった、そうしよう。それで用意した物はどうすればいいか？」

「ヴィッセンブルン家の屋敷にお持ち下さい。そこに馬車を用意しています。」

「では明朝5時に持っていく。それでいいな。」

「お願いいたします。苦勞をかけます。」

「元々近衛騎士の不手際から始まった話だ。王家の為に尽力するのは近衛の務めである。」

「確かにそうですね。では失礼致します。」

俺は退室した。その部屋の中で近衛騎士隊長が決死の覚悟を決めたことには少しも気づいていなかった。

託された物

8 / 22 勇者支援生活 114日目

早朝5時、ヴィッセンブルン家の屋敷にいる。

「アイゼンマウアー隊長は来てくれるかしら？」

「今は待つしかない。隊長の気が変わって俺達を拘束する為に、兵士を連れてくる可能性もある。もしくは入手に失敗して捕まっている可能性もある。」

「もし拘束しに来たらどうするの？」

「全力で抵抗する。黙って捕まる気はない。」

「そう、あなたらしい、そういう時だけは覇気と自信に満ちているわね。」

「普段の俺にはそれがないみたいな言い方だな。」

「そうよ、せいぜい学者の卵っていうところかしら？武を職業とする人には見えないわ。」

「それは俺にとって褒め言葉だな・・・静かに！誰か来た。」

俺達は馬車の影に姿を隠す。薄く明るくなった空の下こちらに向かってくる人がいる、人数は3人か。先頭にいるのはアイゼンマウアー隊長か。

「私だ、ケルテン、いるか？」

間違いないアイゼンマウアー隊長だ。俺が姿を現すとほっとしたようだ。

「よく来ていただけました。来てくれないかと思ってました。」

「話は後だ、荷物はここに積みばいいのか？」

「そこをお願いします。」

アイゼンマウアーと残りの二人が荷物を馬車に積む。トランクケースが二つ、布団らしき包みが二つ。

「確かに渡したぞ、姫様のことを頼む。」

アイゼンマウアー隊長が祈らんばかりに声を絞り出す。その言葉に嘘はない。

「私が嘘をついているとしたらどうしますか？」

「地の果てまで追いかけてでも殺す。だがお前は嘘はついていないことは私には解る。」

「大した自信ですね。その根拠はなんですか？」

「お前が嘘をつくときは完璧な理論武装をする。現状でお前の知識と分析力を上回る人材はいないから、そのもつともな理論に騙させない者はいない。だが今回の頼みにはそれがない。それでも人を見

る目には自信がある。」

「そこまで信頼されたら期待に答えなくてはいけませんね。誠心誠意務めさせていただきます。でもなんでそこまでしていただけるのですか？」

「私の忠誠は陛下の為だけにある。たとえ一時的に陛下のご不興をかったとしても、それが陛下の為ならなんでもやる。」

「只一人の為の忠誠ですか、それで納得できました。」

「俺の話はもういいだろう。もう行くがいい。」

俺は一礼して手綱を握る。

「待てっ！これを渡しておく。」

アイゼンマウアーが懐から巨大な赤い宝石のついたペンダントを出して俺に渡す。

「これは？」

「解らん、お前ならこれが何か解るだろう。」

「なぜこれを私に？」

「解らん、昨日お前の話を聞いた後、家で何気に見つけた。気になったので持ってきた。」

「これが何か知ってますか？」

「だから知らぬと言っている。ただ我が家に大昔から伝わる物とだけ聞いている。こうして手にしたのも20年ぶりぐらいだ。なぜ昨日手にしたか不思議でたまらん。」

「そうですか。前にも言いましたが隊長は勇者と共に闘った戦士の末裔です。これは勇者が戦士に託した太陽の石、つまり勇者の三種の神器の一つです。」

「なるほど、勇者ロトの導きか。ならばお前の勇者に渡せ。そして竜王を倒すのだ。」

「たしかに承りました。必ず期待に答えます。」

「よし、もう行け！」

俺は手綱で馬に合図を送り、城下街をゆっくりと走る。しばらく走らせると後ろに乗っているマギーが呟いた。

「まだ見送ってるわよ。」

後ろを確かめたマギーの一言に何か言い知れぬ不安を感じた。

.....

ラダトーム城に朝が来る。そこに異変が見つかった。一人の侍従が國務大臣の執務室に駆け込んでくる。

「大変です、王女様の部屋に異変です。」

「なんだとっ！どういうことだ！！！」

「解りません。毎朝の掃除に入りましたところ、寝具がなくなっているのを発見しました。」

「案内せよ！私自行く！」

その侍従が大臣を連れて城内を走る。そのあまりの剣幕にすれ違う人が割れる。ローラ王女の部屋の扉を開ける。天蓋付きのベッドにあるはずの布団がない。

「なんだ、これは・・・説明せよ！」

「いえ、私はいつもの様に朝のベッドメイキングに入っただけです。その時にはこうなっていました。」

「ぬう、もうよい！昨晚の見張りは何処だっ！？」

その怒声に外に立っていた近衛騎士二人が慌てて近づく。

「我々は朝からです。昨夜の者は交代しておりません。」

「すぐに連れてこい！」

一人がすぐに早足で離れる。しばらくして先ほどの騎士に連れられた眠そつな騎士二人と近衛騎士隊長がやってきた。

「こんな朝早くからどういたしましたか？」

「どうしましたかではない、近衛騎士隊長どの。これを見たまえっ
！」

アイゼンマウアーと二人の騎士が部屋を覗き込む。

「寝具がありませんな。侍従どのが片付けたのですか？」

「いえ、私が入ったときにはすでにありませんでした。」

「それは不思議ですな、それだけですかな？」

「解りません。」

「では侍従殿、調べてください。なるべく他の者は立ち入らぬ様に
しましょう」

侍従が机、鏡台、筆筒を調べる。いくつかの筆筒が調べられた後
に報告する。

「いくつかの衣服がなくなっています。盗まれたのでしょうか？」

「それは確かですか？勘違いということはないでしょうかね。」

「間違いございません。侍従を務めて30年、どこに何があるかは
はっきりと解っています。」

「では盗まれたと考えるべきでしょう。お前達、昨晚に異常はなか
ったか？」

「いえ、特に異常はありませんでした。」

連れてこられた騎士二人が互いに顔を見合わせて答える。顔を真っ赤にした大臣が怒鳴る。

「現にこうして盗まれておる！近衛はたるんでおるのではないか！近衛騎士隊長どの、なんらかの責任は取っていただけないといけません。この件は陛下に報告します、よろしいですな！」

「仕方ありません、そうして下さい。」

大臣がどンドン足音を立てて早足で立ち去る。

「隊長、申し訳ありません。」

「嗚呼、私に任せておけ。お前達に悪いようにはしないから控え室に戻りなさい。」

アイゼンマウアーの手が近衛騎士の背を軽く押す。肩を落とした騎士が足を引きずるように戻っていった。

ことの結末

ラダトーム城 謁見の大広間

ラルス16世が玉座に座っている。左に国務大臣、縦に文官が並ぶ。反対側には誰も立っていない。国王の眼前に近衛騎士隊長と近衛騎士2名が片膝をついて控える。

「陛下、誠に残念な報告をせねばなりません。」

「残念とな、しかしなぜ近衛騎士隊長がそこにおるのか？」

ラルス16世の問いにも、顔を伏せたままのアイゼンマウアーの顔色は一切変わらない。

「それはこれからの報告に関わりあることでございます。昨晚ローラ王女の部屋に盗賊が入りました。王女の衣服や寝具の一部が盗まれています。その警備を行っていた者と警備の責任者でございます。」

「そうか、余の未練のせいでこの者達に罪を犯させてしまったか、すまぬな。」

ラルス16世の意外な一言に国務大臣がさせる。

「えっ！いえ、陛下。そういう問題ではありません。警備の職にある者の怠慢にて盗難を防ぐことができなかった。そのことに罪がござります。」

「そう言つてやるな。誰もいない部屋の警備など緊張感を持つてできるものでもあるまい。」

「恐れながら申し上げます。」

近衛騎士隊長アイゼンマウアーが直言の許可を得る。

「大変ありがたいお言葉ですが、陛下の御意志に添えなかったのは私の罪でございます。綱紀粛正の為にも罪に相当する罰を賜える様お願い申し上げます。」

「そつ、その通りでございます。罪に対する罰をおろそかにしては国家の根幹に関わります。」

国務大臣としては罪がなかったことになりそうな雰囲気には困惑していた。そこに罪人である近衛騎士隊長自身の告発があり、それに同調する形で断罪する。

「そつか、近衛騎士隊長自身がそう言つのなら罰せぬわけにはいかぬか。しかしその罪に対してどの程度の罰が相当するのか解らぬな。国務大臣、そなたはどう思うか？」

「はっ！警備担当の者は2週間から1ヶ月の登城停止、責任者である近衛騎士隊長は3ヶ月から半年の俸給の返上ではどうでしょうか？」

「なるほどのつ、流石国務大臣のさじ加減は上手であるな。近衛騎士隊長、それでどうだろう。」

「恐れながら、罪は私だけに留めていただきたい。どうか部下には

緩急な処置を。」

「何を馬鹿なことを！せつかくの陛下の温情に異議を唱えるか！」

自身の意見を否定された大臣が憤慨する。

「いえ、何と言われましても聞けませぬ。ここ2ヶ月で近衛騎士のうち11名を失い、さらに2名を失うことはできません。これも全て私の指導力不足故にございます。」

「ではそなた一人でどう責任を取るのだ？」

「指導力の足りない者では隊長の任は務まりません。それ故に私は近衛騎士隊長の任を辞するつもりであります。」

「しかし、現役の近衛騎士隊長が辞任するなど前例がありません。」

あまりのことに大臣が動揺して、異論を述べる。ラルス16世と近衛騎士隊長アイゼンマウアーの視線が交わる。アイゼンマウアーの真剣な目にラルス16世がふつと笑みを浮かべた。

「辞めたいと言う者を止めるのは無理であろう。その願い聞き入れてやるうではないか。それで他の者は一切不問、余はそれで構わぬ。」

「はっ！ありがたき幸せ。」

「しっ、しかしそれでは……いや、どうしていいのか……」

・・・」

大臣も困惑が過ぎて何を言っているのか解らない状態になっている。

「もうよい。余が決めたことだ。アイゼンマウアーよ、長いことご苦労であった。もう下がってよいぞ。」

「はっ！では失礼いたします。」

最後に大きく頭を下げるとアイゼンマウアーが大広間から退場した。さらにその後について二人の近衛騎士も退場する。その場に残された者は重い雰囲気と言葉を発することもできない。

「そなたらも下がってよいぞ。もう用件は済んだであろう。」

ラルス16世の言葉に救われた文官たちが退場する。最後に退場しようとした國務大臣に声がかかる。

「國務大臣、そなたは残るがよい。」

「はい、何用でしょうか？」

全員が完全に退場するまでラルス16世は口を開かない。大臣もそれは解っているので同じく口を閉ざす。そして二人だけが大広間に残された。

「そなた、ならぬぞ。」

「はあ？何がでしょうか？」

「退役した近衛騎士隊長がどんな形であろうとも、すぐに死すようなことはあつてはならぬな。」

「おつしやる意味が解りません。」

「そうか、ならばよい。つまらぬことを言った。下がってよいぞ。」

「それでは失礼致します。」

國務大臣が不満そうに立ち去る。玉座に残つたラルス16世が一人呟く。

「何が起ころのかさっぱり解らなくなつてきたな。さてこの戯曲を書いたのは誰であろうか？できれば最後までこの戯曲をみたいものだ。」

.....

「なんで隊長が辞めなければならないのですか!？」

近衛騎士の中でも最も遠慮がなく声が大きいサイモンの声が控え室に響く。その言に半数の近衛騎士が頷く。

「それは私に罪があるからだ。」

「しかし、あの様な軽微な罪で辞めることはないでしょう?」

「いや軽微ではない。それにそれを決めるのは私自身だ。」

「でも隊長の代わりなんていません！力量でも人格でも隊長に匹敵する者などいません。」

サイモンが必死で食い下がる。半数ほどの近衛騎士もそうだ、そうだと口にする。残る半数はそうでもないようだ。

「後任に関しては陛下と国务大臣が決定するであろう、それに従うべきだな。それに私が辞めることに納得しておる者もあるようだ。やはり辞めることを決めたのは間違っていない。」

周りを見渡したアイゼンマウアーの視線を避ける者達をサイモンが睨む。それは貴族階級にある者達、サイモンにはそれが腹立たしい。

「俺のことはもういいだろう。いま近衛騎士そのものの存在に疑念が生じている。瑣末なことで内紛をしている場合ではないだろう。近衛騎士は陛下にのみ従う、その本分を忘れるではない。ではしばらくは引継ぎ事項を書類にせねばならぬので部屋にこもる。誰も邪魔をしてくれるな。」

それだけ言うと近衛騎士の隊長室にアイゼンマウアーが入る。近衛騎士控え室になんとも言えない暗い空気が漂う。

- - - - -

荒野を馬車が疾走している。

「もう少しで日が暮れるな。馬車を止めるぞ。」

「ええ、そうしましょう。この子達ももう限界だわ。無理しすぎじゃない？」

「なるべく急いで戻りたいからな。馬にはベホマでもかけてやるさ。」

「回復呪文を馬に使うなんて聞いたことないわ。」

「まあそうだろうね。それはいいとして、荷物は何かあった？中身は確かめたんだろう？」

「布団上下が一式、枕一つ、替えのシャツが2枚、寝巻きが3組、下着も3組、普段着ていた服が一式、そんなところかしら。」

マギーが上目遣いで指を折りながら答える。

「急の話にしては十分だな。しかしどうやって用意したのだろう？無茶してなければいいけど。」

「そうね……さっきの宝石を見せてくれるかしら？」

「ああ、これだ。」

腰の袋から取り出して渡す。その見事な宝石にマギーの目が丸くなる。

「これすごいわね。さっきも見たけど手にしてみると圧巻ね。これが太陽の石って本当？」

「間違いない、ものすごい魔力を感じる。それに隊長が持っているのは予想していた。どうやって受け取るかが問題だった。これほどの物だ、ただ下さいと言って貰える物ではないだろう?」

「確かにそうね。魔法の品としてでなくても宝石としての価値も想像できないわ。でもなんで隊長が持っていると思ったの?」

「ロトの勇者が3人の友に託した神器だ、一つは僧侶、一つは賢者、そして戦士の家に代々引き継がれていると考えていいだろう。隊長は武具から戦士の家柄と解っていたからね。」

「まあ、そうね。じゃあこれで後一つね。」

「うーん、それがそうでもないんだよね。」

「どつという意味?」

「賢者の子孫は偏屈だね。勇者の印を持って来いと言っているんだ。前にアレフとガイラがそれで追い返された。」

「何よ、それ!」

「まあいいさ。当面の問題から処理しよう。マギー、今日からは不寝番もやってもらおうよ。」

「解ったわ、まず食事にしましょう。」

それから馬車に積んできた食事を取る。今回は人数が少ないのと馬車からあまり離れたくないので携帯食料を3日分積んできている。あまりおいしくない、いやまずいと言っべき物だが贅沢は言っ

れない。それが解っているのでマギーも文句を言わなかった。

魔法談義？

8 / 24 勇者支援生活 116日目

今日中にはマイラの村につきたい、そう思つて馬に無理をさせている。それで馬の息が上がる度に二人で手分けしてベホマをかけた。一度馬車を止めて桶二つを持って水場に走る。いくらベホマを使つても水がなくては馬がもたない。水をいっぱい汲んでから馬車に戻つた。マギーが馬のそばに立っている。

「マギー、ベホマはかけてくれたか？」

「まだよ、一つ試して欲しいことがあつて待つてたの。」

「ふん、で、何がしたいんだ？」

「同時にベホマを使用して欲しいの。私がこつちであなたがそつちの馬、比較したいから口述詠唱で頼むわ。」

「何をしたいのかはよく解らないけどいいよ。」

「じゃあ、いくわよ。せーの！」

『俺はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ。私はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ。』

おお万能たる力よ、血、肉、骨となりて、この者を癒したまえ、
ベホマ！』

おお万能たる力よ、血、肉、骨となりて、この者を

癒したまえ、ベホマ！」

俺の方が気持ち早く詠唱が終わり、馬に光に包まれる。続いてもう一頭の馬も光に包まれた。

「やっぱりそうだ。」

マギーの眼が輝いている。何か発見した時の眼だ。

「それで何が解ったんだ？」

「私の方が発動が遅い。」

「ただ単に熟練の問題じゃないか？俺が教えたわけだから、君の方が遅くてもおかしくないよ。」

「そうじゃないわ、前半部分はほとんど同じ速さだったけど、後半の回復イメージの辺りから違いが出てくるの。」

「そうか？それこそたまたまじゃないかな。」

「いいえ、違うわ。昨日から何回か見てたけど毎回同じだった。確認の為に口述で詠唱してもらったというわけよ。」

「ふん、じゃあ詠唱の熟練の問題はどうなんだ？」

「それこそ愚問ね、ただ文として読むならもつと速くできるわ。つまり魔法効果の発現速度には個人差がある。そう仮説していたけどそれが証明できたわ。」

「……なるほどね、つまり回復魔法は俺の方が得意ということだけは解ったんだな。」

「そうね、他の魔法に関しては検証が必要になるわ。」

「さてと、仮説の話は後にしようか、水を積んだら出発しよう。」

草を食んでいる馬をマギーに任せて、もう一度水を汲みに行く。桶に蓋をして馬車に積む。馬を馬車に積みなおして御者台に座る。マギーが乗ったのを確認して発車させる。しばらくして隣にもぞもぞとマギーが移動してきた。

「どうした？後ろでゆっくりしていてもいいぞ。」

「ちょっと気になることができたわ。さっき何か考えたでしょ？ちよっと間があったわ。」

「あいかわらず聡いな。ちよっとだけ披露しようか。」

手綱を軽く引いて速度を落とす。

「魔法は大まかに分けて二系統がある。魔法使いの魔法と僧侶の魔法だ。」

「魔法が使える者が魔法使いじゃないの？」

「まあその通りなんだけどね。大別すると敵に効果を及ぼす魔法と、それ以外の魔法だな。」

マギーが怪訝そうな顔をする。

「もつと簡単に言うと攻撃魔法が魔法使い、回復魔法は僧侶と思えばいい。今のアレフガルドでは高等な魔法がないからごちゃ混ぜで使用されている。本来魔法使いの素質がある者が魔法使い用の魔法を使い、神に仕える者が僧侶魔法を使用する。そのどちらも使える者が賢者と言われた。」

「ふうん、じゃあ私は魔法使い寄りで、あなたは賢者なのかしら？」

「どうだろうね、俺は賢者にしてはMPが少なすぎる。まあ今の時点では解らないことばかりだ。検証が必要になるな、それもたくさんのサンプルデータが必要だ。いずれ平和になってからやりたいことが増えたよ。」

「それ面白そうね、私も手伝うわ。だから平和にしましょう。」

そう言ってマギーが俺の肩に顔を寄せた。

「じゃあ急ぐぞ、しつかり掴まってる！」

馬を走らせる。そうすることで平和が少しでも近づく、そう思った。

.....

日が落ちるころ遠くにマイラの村の明かりが見えてきた。もう見えるぐらいの距離だがまだ1時間以上かかりそうだ。もうすぐだ、今日中に到着したい。だが馬も限界に近い。そうだいいことを思いついた。

「マギー、ルーラを使うぞ。」

「いいの？ルーラは公表したくないと言ったのはケルテン、あなたよ。」

マギーが少し不満げに言う。

「根にもつね。まあそうだけど、このぐらいの距離を跳んでもあの地図じゃ解らないさ。縮尺の問題だよ。」

「確かにそうね。じゃあ私が魔法を使うわ……………」
「……ルーラ！」

マイラの村の入り口に辿りついた。門番が驚いているが、もう俺達がこの村に来て結構な日にちが経っているので顔見知りだ。

「なんだ兄ちゃんらか、脅かすなよ。また変わった実験か？」

「あ、ああ、まあそんなところだ。入ってもいいかい。」

「ああいいよ、何をいまさら！」

「じゃあ、通るよ。」

すぐに宿屋に馬車をつける。その音にガイラが飛び出してきた。

「戻ったか、もう今日は来ないかと思ってたぞ。」

「これでも結構急いだんだけどね。で、姫様はどうだ？」

「んー、まあアレフ以外を近づけないのは変わらない。食事は取れるようにはなった。それと昨日ぐらいからアレフと話せるようになった。」

「そうか、進歩はあったんだな。なら荷物を運んでくれ。とりあえず部屋の前までいい。」

「了解。」

ガイラと俺で大きい荷物を運ぶ。小さい荷物はマギーだ。ローラ姫の部屋からはなにか声が聞こえる。小さくて何を言っているかは解らない。軽くノックをする。

「アレフ、戻ったぞ。」

中で物音がする。しばらくして焦燥しきったアレフが出てきた。

「お前、寝てるのか。顔色が悪いぞ。」

「大丈夫ですよ。これぐらいいたしたことありません。それで持ってきてもらえましたか？」

「ああ、ここに。運ばったか？」

「いえ、僕がやります。まだ他の人には会わせることはできません。」

「そうか、じゃあお前に任せる。なにかあったらすぐに言えよ。」

俺はガイラとマギーに目で合図をしてここから立ち去る。しばらくして扉が閉まる音がした。

正気

8 / 25 マイラの村 宿屋

一番奥の部屋に豪華な布団にローラ王女が、すぐ横の椅子にアレフが座ったまま寝ている。

「うーん、よく寝たわ。セバスチャン、お水を持ってきて頂戴・・・
ってここはどこなの!? きゃあああああ!!! あなた誰!?!」

背伸びして起き上がったローラ王女がいきなり悲鳴を上げる。その悲鳴にアレフが目を覚ました。

「あの・・・ローラ・姫様?・・・どうか致しましたか?」

あまりの言い草に、アレフは動揺して月並みな返事しかできない。

「説明しなさい。ここは何処なの?」

「・・・あの〜ローラ姫様、まず落ち着いて下さい。いいですか、ここはマイラの村の宿屋です。」

その答えにローラ王女が首を捻る。その顔は助け出したときよりはふっくらして、表情が表に出た分綺麗に見える。不謹慎ながらアレフはそう思った。

「あっ! 私!?!?!」

口に手を当てて驚く。そして今いる場所と自分の姿、そしてアレ

フを順番に眺める。

「あっあのく、ごめんなさい。ちょっと驚いておかしなことを言いました・・・いえ、まずお礼を言わなくてははいけません。勇者アレフ様、助けていただいてありがとうございます。」

「思い出してもらえましたか。急に驚きました。でもよかった・・・。」

アレフが笑顔を見せ、その目からは涙が流れている。ローラ姫が手を差し伸べ、その涙を拭いた。

「私の為に涙を流してもらえるのですね、アレフ様・・・。ありがとうございます。」

「えっ！いえ恐れ多いことですが、ローラ姫様。でも本当によかったです。ずっとあのままかと思っていました。」

「ずっとあのまま・・・あっ！」

アレフに介護させていたこの4、5日の醜態を思い出してローラ王女が真っ赤になって布団を頭からかぶる。布団から少しだけ顔をだして質問する。

「あの・・・アレフ様。私になにか変じゃなかったでしょうか？」

「い、いや、その、特に・変なことはありません・・・でした。」

とっさのことに返事に困ったアレフがどもる。当然のことながらローラ姫は変だった。突然奇声を上げる、誰かの気配に怯えて逃げ

ガイラとマギーが安堵の表情を浮かべる。多分俺もそうだろう。

「ならとりあえず着替えていただく。寝間着のままでは俺達が困る。マギー、着替えをアレフに渡してくれ。」

「わかったわ、ちょっと待ってね。」

俺に促されたマギーが服を取りに急ぐ。あっという間に戻ってきてアレフに渡した。

「昨日までと違いますが僕でいいのですか？」

「仕方ないわ、前に私が着替えさせようとした時は駄目だったのよ。まだアレフ以外には任せられないわ。」

「そうですね、ではそうします。では行ってきます。」

アレフが着替えを持って出ていく。

「まさか一晩で戻るとは思わなかったぞ。いや、学者やっぱりお前はすごいな。」

「褒められても素直に喜べないな。アレフの介護が功を奏したのかもしれないし、用意した寝間着と寝具のおかげかもしれない。ただ単に自然回復の可能性もある。俺が一番驚いている。」

「なににせよ、よかったじゃない。」

「そうだな。あとは王女様にお会いしてから考えよう。」

「そうだな、無礼者って言われたらどうする？」

「その時は平身低頭謝るよ。」

正気に戻ったと聞いてほっとした。だがまだこれからが問題が山積みだ。

- - - - -

アレフが着替えを持って部屋に入る。一人残されて心細くなっていたローラ王女が安堵の表情を浮かべた。

「ローラ姫様、着替えをお持ちしました。ご自分で着替えられますか？」

「ええ、自分でできますわ。」

「ではここに置いておきます。私は部屋の外に出ていますので着替え終わったら呼んで下さい。」

アレフはベッドの横に着替えを置く。そしてローラ王女に背を向けて出て行くこととした。

「駄目っ！一人にしないで！」

「でも僕がいたら着替えられないでしょう。」

「それでもここにいてっ！お願いアレフ様、もう一人にしないで下さい。」

思わず振り向いたアレフは涙を流して懇願しているローラ王女を見た。その姿を見たアレフに、懇願を断ることは不可能だった。

「解りました、僕はどこにも行きません。ではここで後ろを向いていますから、その間に着替えて下さい。」

背中を向けたアレフの後ろで衣擦れの音が聞こえる。その衣擦れの音に振り向きたい衝動がアレフを襲う。正直昨日までアレフが着替えさせていたのだが、人形の着せ替えをしている様で何も感じなかったのだ。しかし今は勝手が違った。なんとも言えない感情にアレフが戸惑う。

「アレフ様、もうこっちを見てもよろしいですわ。」

ローラ王女の言葉にアレフはほっとしたような、残念なような気がした。

「では振り向きますね。ローラ姫様。」

改めて許可を得るとアレフが振り向いた。そこには綺麗な服に着替えたローラ王女が立っていた。まだ痩せてはいるが美しいその姿にアレフが声を失う。

「どこか変でしょうか？」

「そつ、そんなことはありません。とても綺麗です。」

「アレフ様……」

「ローラ姫・様……」

そして二人の姿が重なった。

ローラ王女の我が俤

アレフとローラは立ったまま抱き合っている。別に何をするわけでもないのだが、二人にはそれが一番心地よく感じられた。外から控えめなノックが聞こえる。

「失礼致します。なにか不都合でもございましたか？」

女性の声が聞こえた瞬間、二人はとつさに離れる。互いに目が合いつきの痴態を思い出して顔を伏せる。そこにもう一度外から声がかかる。

「大丈夫でしょうか？」

「あ、すみません。もう少しで終わります。」

外からの催促にアレフが慌てて返事をする。ローラ王女も慌てて着崩れた服を整える。整え終わったところでアレフに悪戯を注意された子供のような笑顔で合図をする。アレフがにっこり笑ってから外に声をかけた。

「お待たせしました。皆さんをお連れ下さい。」

ローラ王女がアレフに差し出された椅子に腰をかける。アレフはその隣に立つ。再び扉からノックが聞こえる。

「失礼致します。入ってよろしいですか？」

アレフが歩いていき、軽く扉を開ける。

「どうぞお入り下さい。王女様がお待ちです。」

こうしてやっとのことで王女への謁見がなった。

.....

5分前のこと。ローラ王女の部屋の二つ隣の部屋に俺とマギー、ガイラがいる。アレフが出て行って15分は経っただろうか？

「おい、遅くないか？」

「ああ、遅いな。マギー、そんなに着替えに時間がかかる服だったか？」

「そんなことないわよ、5分もあれば着替え終わるわ。」

三人とも黙ってしまった。どうしたものだろう……。

「おい、学者、声かけて来いよ。」

「なんで俺だよ。ほとんど面識ないから嫌だよ。そっだ、マギー。君が行ってくれ。少しは話したことあるだろう。」

「えっ！私？」

「外から軽くノックして声をかけるだけでいいから、頼む！」

右手を顔の前で立てて頭を下げる。

「もうしょうがないわね。」

文句を言いながらマギーがでていった。残された男二人がほっとしている。さらに待つ……5分ほど経っただろうか？マギーが戻ってきた。

「もういいって、ケルテン、言上は頼んだわよ。」

「ああ解ってる。俺の独断でなったことだ、責任は取る。」

俺が先頭に立って部屋をでる。王女の部屋の前で声をかける。

「失礼致します。入ってよろしいですか？」

軽く扉を開き、アレフが顔を出す。少し顔が赤い。

「どうぞお入り下さい。王女様がお待ちです。」

アレフが俺達を案内する。部屋に入ると奥の椅子にローラ王女が鎮座している。俺が先頭、右にマギー、左にガイラがつき、片膝をついて頭を下げる。

「まず王女様におかれましては、ご無事お祝い申し上げます。」

「そのような堅苦しい言葉はお止め下さい。私は助けていただいたのです。まだお礼を言っませんでしたね。お名前を教えてくださいませんか？」

「はい、私は国務大臣付き特務隊士ケルテン、こちらに控えるのが

もう一人勇者ガイラ、そして王国魔術士ヴィッセンブルンにございます。」

「まあ叔父様の部下でしたのね。それと勇者ガイラ様、その節は大変失礼致しました。せつかく助けに来ていただいたのに逃げるようなことをしました。」

「いや、俺は気にしてない。」

「ちよつとガイラ！」

慌ててマギーがガイラをたしなめる。ローラ王女が咎めることはない。

「構いません。先も申したように助けて頂いたのはこちらです。ヴィッセンブルン嬢、代々筆頭魔術士の家系の者ですね、魔術士でありながら危険を承知で助けに来ていただき、誠にありがとうございます。」

「誠に恐れ多いことにございます。そのお言葉、亡き父、兄も神の元で喜んでいると思います。」

マギーが改めて頭を下げる気配がした。ここまでは只の挨拶だ、問題はここからだ。

「一つ問題があります。申し上げてよろしいですか？」

「問題？どうか致しましたか？」

「はい、王女様を救助した後城に戻らず、ここにて静養させたこと

は私の独断です。もしこのことが罪に問われることがあったとしても、他の3人は不問にして下さい。」

顔を上げてじつとローラ王女を見つめる。その迫力にローラ王女がたじろいだのが解る。

「その独断には罪があるのですか？」

「ないとは申せません。陛下よりは王女様の救出は厳命されていませんでした。君主としては正しい判断と思われれます。しかし國務大臣からの厳命は、救出後すぐに城に連れて戻るべしとされていました故、私に罪ありと思われれます。」

「・・・ではなぜ厳命に背いたのでしょうか？」

「まず第一にあの時王女様は正常な精神状態ではありませんでした。」

「その通りです。今考えても寒気がします。それで？」

「次に体調の問題です。ご自分で歩くことができないぐらい衰弱していましたので、静養が必要と判断しました。」

「それはお城に戻ってから静養してもよいとは考えなかったのですか？」

「理由が二つあります。まずあの姿のまま城に帰ることで、王女様の恥辱となることを避けました。」

「たしかにあの姿のまま帰るのはあまりに恥ずかしいことですね。」

「さらにあの姿では王女様ご本人と確認できない可能性があります。穿った物の見方をすれば偽者、もしくは魔物の策謀とも取れますので正気に戻るまではお連れできませんでした。」

「よく解りました。まだしばらくはここに逗留することにしませう。」

「よろしいのですか？もう帰ることはできると思いますが？」

「そうですね？アレフ様、鏡を貸して頂けますか？」

ローラ王女が横に立っていたアレフに声をかける。アレフがベッドの横から鏡を取り手渡す。鏡を手にしてローラ王女がいろんな角度で自分の顔を眺める。

「はあ、こんなげっそり痩せた顔でお父様にお会いになることはできませんわ。これは私の我が儘です。私の命令には従えませんか？」

「いえ、王女様のご随意に。」

「ありがとうございます。では今日は疲れましたのでこれで終わりにしていいかしら？」

「では我々は失礼させていただきます。なにかあったらお呼び下さい。王宮なみのお世話はできませんができる限りのお世話をさせていただきます。」

「では一つお願いがあります。しばらくはこのまま勇者アレフをお貸し頂けませんか？」

「どうぞ。勇者の称号は陛下との契約にございますから、異論はありません。」

「そうですね。ではアレフ様、これからもよろしくおねがいますね。」

「はい、お任せ下さい。」

アレフが王女の隣で片膝をついて礼をする。もう二人の視線は俺達を見ていない。俺達は声もかけずに退室することにした。後のことは知らない。

夕べは（以下略）

「なあ、あれでよかったのか？」

「何がだ？」

「姫さんとアレフのことだよ。」

「仕方ないだろ、アレフしか受け付けないんだから。」

「でも何があつたのかしら？」

「うーん、どうなんだろうな。つり橋効果とか、刷り込みの一種かな。なんにせよ究極の恐怖から救ってくれたのがアレフだった。それだけのことだな。」

「でもあのままでいいの？まずくない？」

「まずい。でも俺達が王女様の機嫌を損ねたらもつとやばい。」

三人ともため息をつく。俺としては計算通りではあるが、なんとも言い難い状況でもある。

「それにしても思っていたより聡明な方かもしれない。まず城に連れて帰らなかつたことを理解してもらえる様に誘導した。それに対して私の我が侂でここに滞在するとされた。」

「あなたの言うことを理解して、旨く口裏を合わせる、そう表明したのね。」

「ああそうだ。しかし、私の我が侂ですときたか。あの陛下の子だ
けはある。」

「学者よ、それは褒めているのか？」

「まあそんなところだ。実はもう一つ危険な話を混ぜた。気づいた
か？」

ガイラが首を捻る。その隣でマギーが得意げな顔をしている。

「当然よ。ケルテンが言った“陛下よりは王女様の救出は厳命され
ていませんでした。君主としては正しい判断と思われます”この言
葉は不敬と言われても仕方のないことで、それを理解して受け流し
たのよ。」

「ふん、そんなものか？」

「俺が臣下でありながら主君の行為を評価したんだ、大臣がいたら
激怒していただろう。もっとも陛下ならやはり笑って聞き流しただ
ろうな。」

ガイラがまだ難しい顔をしている。納得していないようだ。

「まだ解っていないみたいね。陛下は王女の命はどうでもいい、そう
言ったとわざわざ教えてやったのよ。」

「それ人の親としておかしくないか？」

「ああ人の親としては間違っている。君主は全ての民を平等に扱う

べきである。だから君主としては正しい。俺はそう言ってやった。」

「難しいことを言う、流石学者だ。まあ俺はいいさ、アレフと姫さんの恋路がどうなるうが、王家のしきたりがどうだとか知ったこっちゃねえ。目の前のだれかが不幸せになるのは見たくない。」

「ふん、だったら無粋なことを言っていないで見守ってやれ。マギーもそれでいいか？」

「反対するぐらいなら、あなたと一緒になんか居ないわ。」

確かにその通りだ。マギーは貴族の付き合いより俺を優先している。つまりローラ王女のことでも理解しているということだ。仲間の協力も得られた、当の本人達の意志も間違いないだろう。後は時を待つのみだ。

.....

時は3日ほど遡る。ラダトーム城下街の古ぼけた屋敷の一室で男が座っている。他には誰もいない部屋で一人で酒を飲んでいる。

「なあ、アイゼンのだんな！本当にあれでよかったのか？」

「何がだ？」

突然影から男の声がする。驚きもせず返事をする。

「俺っちなら何の痕跡も残さずに盗むこともできたんだ。それをわざわざ解るようにやれとは、まったく意味が解らねえ。」

「それでは意味がない。私のさせたことは陛下を偽ることに他ならない。たとえそれが陛下の為とは言え、偽ったままお仕えすることなどできない。」

「相変わらず不器用なやつだな。俺っちみたいに器用に生きようぜ。」

「器用な奴は退役した近衛騎士隊長の所には来ないな。もう私と一緒にいても何の益もないぞ。仕事を回してやることもできぬからな。」

自虐的にそう言い放つ。

「損得だけでだんなの所に来てるんじゃない。ただ俺っちのせいでだんなが辞めさせられたと聞いて、わざわざ忍び込んできたんだ。そう邪険にするなよ。」

「では心配してくれてありがとう、とでも言えばいいのか？」

「止してくれ、だんならしくねえ。何か手伝ってやれることはないか？」

「特にないな。私が陛下の為にしてやれることはすでにない。それに一族の務めとやらも意図せずに終わった。昔お前が盗みに来た例のあれのことだ。」

「もしかしてくれてやったのか？もったいねえ。」

「価値の解る者に託した。ロトの勇者の秘宝、太陽の石とはな。あ

の者に教えてもらわねば、私のルーツも一族の務めにも気づかなかった。」

「そんなすごいお宝だったとはな。やはり俺たちごときの手に入るお宝ではなかったか。まあそれはいいや。だんな、本当に心残りはないのか？」

男の問いにしばらく無言で考えている。

「そうだな、姫様のことが気にならないと言ったら嘘になる。私が言えることではないがな。」

「なら俺たちが見てきてやる。それでだんな絡みの仕事は終わりだ。」

「迷惑をかけるな。そうだ、もしケルテンという男にあつたら私がよろしく言っていたと伝えてくれ。なかなか面白い男だぞ。」

「承知した。」

一言だけ残して影の気配が消える。残された男はグラスに残った酒を一気におおる。

.....

マイラの村に朝がやってくる。あれからアレフとローラ王女の姿は見えない。ガイラが食事を部屋の前まで運び、それが食されたことだけは知っている。朝の空気を吸いにロビーにでてくると、宿屋の主人が声をかけてきた。

「お連れ様は夕べお楽しみだったようですよ。」

「余計なことは言わない方がいいな。命がいくつあっても足りないぞ。」

俺の脅しのような返事に不思議そうな顔をしている。

「逗留している客が誰であろうと何をしようとか他言無用、まあそう言うことだ。」

意味深な言葉を残して宿屋から外にでて村はずれを歩く。さてしばらく逗留するとは言っていたが、何時までここにいればいいだろうか。その間、何をしようかな・・・。

木陰から何かの気配、刀の柄に右手を当てる。

「何だ？誰かいるのか？」

「なんだ、俺つちに気づいたのか、感のいい奴だ。」

ヒュッ！何か光る物が俺に向かって飛んで来る。刀ではじき落とす。木陰からにやついた男が姿を現す。その立ち振る舞いに隙はない。

「やるねえ、そんな簡単にいなされると自信をなくしそつだ。」

「誰だと聞いている。竜王の手の者か？」

正眼に構えてまま、答えを待つ。返事はない。

「答える気はないようだな。」

男に向かって踏み込み斬りつける。すでにそこには誰もいない。

「確かに面白い奴だ。アイゼンのだんなからよろしくだとよ。確かに伝えたぞ。それと俺っちからの忠告だ。大臣には気をつける」

「アイゼンのだんなだと・・・近衛隊長がどうかしたのか？」

木陰から気配が消えた、返事は返ってこない。大臣・・・？近衛騎士隊長・・・？城に何か異変が起きているのだろうか？

湯浴み

控えめにノックをする。物音がしてしばらくしてから、扉が開いてアレフが出てきた。

「やあアレフ、夕べはお楽しみでしたか？」

「あつ、あの、すみません！」

真っ赤になったアレフがものすごい勢いで謝罪する。

「なんだ、謝らなければならぬことでもしたのか？」

「いや、でも僕、ローラ様にあんなことしてしまって……」

「もしかして無理矢理なのか？」

「違います！！そんなことしません！」

大声で否定する。これには怒気が混じっている。

「じゃあ、俺がとやかく言うことじゃないな。謝る必要はない。俺も貴族の名家のお嬢様に手を出しているしな。」

「でも王女様ですよ。」

「関係ないな。城に戻ったら元の駕籠の鳥、今は夢の中……そう思えばいい。」

「夢の中・・・ですか？」

「だから今だけは好きな様にさせてやれ。・・・そうだ、湯を持ってきたんだ。せっかくの美人だ、綺麗にしてやれよ。」

俺は持ってきた台車をアレフに押し付ける。ビア樽いっぱい温泉の湯、大きなたらい、まっさらなタオル数枚が乗せてある。

「じゃあな、またしばらく留守にする。一週間後にも迎えにくるから後は任せた。」

それだけ言ってさっさと背中を向けてそこを後にする。台車の軋む音、扉が閉まる音が聞こえた。

.....

「ローラ様、お湯をお持ちしました。」

「聞こえていました。身体を綺麗にしたいです、アレフ様手伝っていただけますか？」

「しかし、いいのですか？」

「アレフ様、もう私にはあなたに隠すことはありません。ですから手伝って下さい。」

「・・・はい、ではこちらにたらいを用意します。」

たらいをベッドから離れた場所に置いてお湯を張る。そこまで抱

き上げて連れて行く。まだローラ王女は一人で歩けるほどは治ってはいない。アレフが後ろからお湯をかけて、金色の髪を洗う。

「怖い方だと思っていました。」

「ガイラですか？見た目は怖そうですがいい人ですよ。」

「違います、さっきの方です。オットー伯父様の部下だと言ってきましたから、なにかあると思っていました。」

「伯父様とは國務大臣のことですか？」

「そうです。お父様の弟で國務大臣、王位継承権第2位。さらに王位継承権4位のフレーゲル様の父上です。私が生きて帰ることは喜ばないでしょう。私がいなくなればいずれフレーゲル様が次の国王となることは明白ですから……。」

深く沈みこんだローラ王女の声がアレフにだけ聞こえる。

「たとえそうだとしても、ローラ様に害をなすことはありません。」

「大した自信ですね。どうしてそう思うのですか？」

「僕の師匠なんです。戦いの心得、剣から魔法まで全て、旅の仕方、町の防衛、何から何まで教えていただきました。意味もなく人を傷つけたりしない人です。」

「信頼されているのですね。実はさっきの会話で解っていました。」

アレフ様に対する思いやりが感じられましたから……。でも意地悪ではありませんね。」

ローラ王女がくすくす笑いながらそう言つと、アレフが口を尖がらせて付け加える。

「それは間違いありません。わざと大切なことを言わないことがあります。」

「それも思いやりの一部なのでしょう。昨日の会話をおぼえていますか？」

「まあ大体は……。」

「私はあの方にここにしばらく逗留すると言わされたのです。解りましたか？」

ローラ王女の頭から湯をかけて汚れを流す。数回繰り返してからタオルで水気を取る。

「……そうなのですか？」

「そうですね。自分の意見を押し付けるのではなく、選択肢を少なくすることで答えを誘導してきたのです。しかもその答えは自身の上司の思惑に添えないことなのに、顔色一つ変えないで私をじつと見つめてきました。やはり怖い方、敵にはしたくないですね。きつと伯父様も使いこなせていないのでしょうか。」

「あの会話にそんな意味があつたのですね。気づきませんでした。」

思い出したかの様に新しいタオルを取り出して、ローラ王女の身体を拭く。

「もう一つ恐ろしいことがあったのですよ。私の命はいらない、そうお父様が言ったと言いました。」

「そんなこと言いましたか？」

「ええ、間違いなくそう言いました。しかもそれが王の務めだとも言いましたね。あの方にとっては王家も貴族も、他の全てが手段に過ぎないのかもしれませんが。どういった出自のですの？」

「リムルダールの自治区長の家で育ったと聞いてます。ただ養子だそうですが……。それと魔物が蔓延る前からアレフガルド中を探検していたそうです。ガイラがつけたあだ名は闘う考古学者です。」

「闘う学者ですか……。なるほどあの見識はそこから来ているのかしら？他の方にもあだ名はあるのですか？」

「そうですね。ガイラはサバイバルの達人だそうです。野外生活、薬草、食料の調達の人です。」

「すごいですわね。想像もつきませんわ。それと疑問があったのですが、なぜ勇者様が二人もいるのですか？」

「王様がお触れを出して勇者を募ったのです。その勇者の支援をしているのが特務隊士の師匠なんです。」

「じゃあ、もつとたくさんいますの？」

「いえ、20名ほどいたそうですが、今は僕とガイラの二人しかいません。」

「そう、とても大変なことなのですね……。もう一つ聞いていいですか？ではあなた達の中で一番誰が強いのですか？アレフ様ですか？」

「僕なんて足元にも及びません。それ以前に純粋な戦闘力ならガイラ以上の者なんていませんし、魔法を行使させたらマギーさんに敵う者もいません。でも師匠はそのどちらにも引けを取りません。」

「アレフ様はどうなんですか？」

「師匠が言われるには、僕は高水準のバランス型だそうです。何でもできるが一流ではない、そう言われているような気がします。」

「アレフ様は何でもできるのですね。私には何もできませんから、うらやましいです。」

「……………」

アレフは黙って体を拭き続ける。そこに込められた力から何かがローラ王女に伝わる。

「城に戻ったら駕籠の中の鳥に戻ってしまいます。今は夢の中として私の好きな様にさせて頂きますね。」

身体を湯で流し終えたアレフが乾いたタオルで水を拭き取る。

「これで終わりです。新しい寝間着を用意します。」

「そうですね。体が温まったら少し眠くなりました。しばらく眠る

と致しましょう。」

アレフが手伝って用意した寝間着に着替える。着替え終えたローラ王女をアレフが抱き上げてベッドへ運ぶ。

「せっかいですから話に聞くマイラの温泉にも入ってみたいですね。」

「そうですね。でしたらよく食べてよく寝て元気になりましょう。」

ローラ王女が頷いてから目を瞑る。その手はアレフの手を握ったまま、ベッドの横の椅子に腰掛けたアレフはそのままローラ王女を見つめている。

後任人事

「さてこれからどうしよう?」

「なんだ、珍しいな。お前らしくもない。」

「俺が悩んでいたら可笑しいか?」

「ああ、可笑しいな。大体は俺達が何か聞いたら、即答するのが学者だ。そつだよなマギー。」

「そつね、ガイラの言う通り。何を悩んでいるかしら?」

「実に不本意な言われようだな。アレフを待つことなく城に戻るかどうか考えている。」

「わざわざ戻る必要があるのかしら?」

「ああ、今朝、村はずれで俺を見張っている奴を見つけた。声をかけたらナイフを投げてきた。結構な手練だ……。」

「そついうやつは俺の所に来いよ。面白そつだ。」

ガイラが楽しそつに俺の言葉を遮る。

「最後まで言わせるよ。アイゼンのだんなからよろしく、それと大臣に気をつける。そついい残して消えた。近衛隊長や大臣に何かあったのだから、どちらか調べるには一度城に帰らないといけない。」

「

「帰ればいいじゃないか、アレフと姫さんはあと一週間は戻らない予定だろ。」

「その通りだとは思うわ。何を悩んでるの？」

「大臣に気をつける、これがひっかかる。極論を言うと大臣は王女が戻ることを望んでいない。」

「ひどい話だな。それは本当か？」

「確証はない。ローラ王女がいなければ大臣かその息子が次の王だ。俺が大臣なら今のうちに暗殺を考える。」

ガイラが足元の小石を蹴飛ばす。

「嫌な考えだな、それを考えることのできるお前が嫌だ。」

「そうか？ マギー、俺が言っていることはおかしいか？」

「残念ながらそうは言えないわ。私の図書館には王国の歴史、それも表向きに公開できない歴史がいっぱいあるわ。そういった例で溢れているわ。」

「かぁー、なんでもっと気持ちよく生きられないかな。」

「どちらにしてもここには何も解らないわ、戻りましょう。なんだったら私だけでも戻るわ！」

「方法としてはありだな。だが藪を突付くと蛇がでてくるかもしれ

ないぞ。」

「望むところよ、私を軽く見ると痛い目にあうわ。何か解ったらル
ーラで戻ってきて教える、それでいい？」

マギーの目が輝いている。

「学者、俺にも解ってきたぞ、これは止められないな。」

「正解だ。なら幾つかやって欲しいことがある。まずアレフは例の
海底洞窟で大怪我をしたことにしてくれ。これで俺達がここにいる
理由ができる。次に近衛騎士隊長にあつて何があつたか聞いて欲し
い。意味深によくとは気になる。あとこれを例の部屋に片付け
ておいてくれ。」

懐から太陽の石を取り出してマギーに渡す。ガイラが目を丸くし
て覗き込む。

「おい、なんだよこれ？ すごい宝石だな。」

「太陽の石だ。」

「ほう、太陽の石って名前がついてるのか。色といい大きさといい、
相応しい名前だな。」

「ケルテン、適当に教えないですよ。ロトの三種の神器の一つでしょ
！」

「まじでかつ！ 見つけたのなら早く言えよ。じゃあと一つじゃね
えか！ 聖なる祠のじじいさえ説得できれば全部集まるぞ。」

「じゃあ勇者の証を見せるのだな。」

「それが解らんから困っているんだろうが、まあ姫さんを城に帰してからにするか。」

「まあそう言うことだ。マギー頼んだぞ・・・そうだった！一週間後までに白馬も用意しておいてくれ。」

「白馬？へんなこと頼むのね。全て私に任せておきなさい。じゃあ行くわね。」

マギーが厩舎へ歩く。俺達もついていって見送る。目の前で馬車ごと光となって消えていった。

.....

「陛下、近衛騎士隊長の後任人事の件でお話があります。」

「ふむ、そうであったな。何時までも空白であってよい問題ではないな。だれか適任者はあるか？」

「むずかしい問題です。前任者はやはり平民出身ということと、貴族出身の近衛騎士をまとめることができなかつた。この点を考慮せねばなりません。」

「ではそれに相応しい者を近衛騎士から隊長に上げるのか？この前のローゼンシュタインなる者はどうだ。見込みはありそうだの。」

ラルス16世が楽しそうに言う。

「それはなりません。まだ小隊長ですので飛び越された者を纏めることはできないでしょう。」

「そうか、なかなかの名案だと思ったのだが。では副隊長から昇格させるのが適切か。」

その言に国務大臣の顔が曇る。

「駄目でございます。先代に武ではるかに劣ります。今の近衛騎士を纏めるには何かと不足でしょう。」

「難しいのう、ではどうすると言うのだ？」

「ここは武ではなく格によって纏めてはどうでしょうか？」

「ほう、格とは何を意味するか？」

「地位や家柄であります。現状の近衛騎士全てよりはるかに上の格の者で纏めます。いかがでしょうか？」

「なるほど、名案だの。では誰か心当たりがあるのかな？」

国務大臣の表情が明るくなる。強引な理論によって自分の意見を通すことができた時、この男はなんとも言えない快感を得る。さらに今回は特別である。

「ここは王家の者によって纏めるつもりです。つまり私の息子フレゲルをこの任に当てます。よろしいですね。」

「お前は本当に優等生だな。まあお前は大臣の多数派工作に乗っていないよな。」

「当然です。反対すべきことには反対をしなくてはいけません。そこに金や地位が関わってはなりません。」

「他の連中もそれぐらい優等生だったら、こんな不愉快な人事に文句を言う必要なかったんだがな。まさか平民出身者のうち半数以上が賛成すとは思わなかったぞ。」

「仕方ありませんよ。金や地位で言うことを聞かなかつたら、次は家族を盾に取った脅迫です。ここまでされると賛成に回らざるを得ません。」

サイモンがテーブルを拳で思いっきり叩く。その物音に何かを言う者はもうここにはいない。いつの間にか食堂にサイモンとステファン以外はいなかったのである。

「くそっ！こうなりや魔物が襲撃してこないことを祈るしかねえぜっ！」

サイモンが残りの酒をあおり、食堂から出て行った。テーブルの上に残された数え切れないグラスが、存在感を主張している。それでもサイモンの足取りは酔っているようには見えなかった。

マギーの闘い

マギーはルーラでラダトームに戻った足で即城に走る。ふと気づくと慌てているのは自分だけではないことに気づいた。文官、武官ともに慌しく歩き回り、何かを運んだり、書類を渡したりしている。立ち止まっているのは門番の衛兵のみであるのだ。

「ねえ、何かあったの？」

その門番に問うてみる。

「フレイゲル殿下が近衛騎士隊長になられるとのことで、閲兵式の準備で大変だそうです。」

「はあ？意味解んないですけど……。なんでフレイゲル殿下が隊長？アイゼンマウアー隊長はどうなったの？」

「さあ？よく解りませんが警備不首尾の責任を取って辞任したらしいですよ。それで後任にフレイゲル殿下が選ばれたのです。」

「なによそれ！それで誰もが納得するとも思っの！」

「私に言っても知りませんよ、只の一兵卒に過ぎませんから。もういいですか、これ以上はやばいので……。」

「ごめんなさい……。でもよく分かったわ、ありがとう。」

そう言ってマギーはそこを早足で去る。開放された衛兵はほっとして、もう一人いる門番と顔を合わせた。

國務大臣の執務室入り口で、マギーが執務官に用件を告げる。普段直接の用件がないので面倒な取次ぎが必要なのだ。目の前で早急の者が順番を飛ばして大臣に会う。待たされる時間をいらいら過ごす。ふと顔を上げると大きな地図が目に入った。

「あれが例の魔法の地図ね・・・なるほど、確かにマイラの村付近に三つ光点があるわ。あれさえなければもう少しケルテンも自由に動けるのに・・・なんとかできないかしら？」

マギーが思考に更ける。気づくと誰かに肩を叩かれていた。

「順番です。國務大臣がお会いになられます。」

「ごめんなさい、失礼いたしました。」

マギーは3mほど進んで大臣の執務机の前に立つ。國務大臣が書類から顔を上げてマギーを見た。

「これは珍しいこともあるものだ。司書官殿をしばらく見なかったと記憶してあるが、いかが致しておった？」

「はい、新しい武具の技術の研究にマイラに行っていました。それに関してはいずれ書類にて報告致します。」

「ほう、新しい武具とな？興味深い話ではあるな。報告を楽しみにしよう。それで用向きはなんだ？」

「特務隊士殿から、海底洞窟の探索の際に勇者アレフが大怪我を負ったとのことで、しばらくマイラから動けませんと伝言を承っています。」

「そうか、仕方あるまい。特に急ぐ用件はない、もし会うことがあつたら大事に致せと伝えてくれ。」

「必ずお伝えします。それと挨拶が遅れましたが、殿下の近衛騎士隊長内定おめでとございます。」

「ふむ、素直に礼を言っておこうか。何代か振りの閲兵式を行なうと、あれも張り切っておる。今はその準備で忙しいのだ。用向きはそれで終わりか？」

「はい、ではお忙しい様ですので失礼すると致しましょう。」

マギーは執務室から立ち去る。それと入れ替わりで別の者が大臣に対する。用件が終わって冷静になってみると順番待ちの列に並ぶ者達の異常さに気づいた。普通なら文官しかいないはずなのに、大勢の武官も混じっていた。

（なるほどね。まだ就任していないから、その分こちらの仕事が増えていのか。この人事を決めたのは大臣だから自業自得よね。そうだ、前近衛隊長はどうしたのかしら？）

マギーの足が近衛騎士の控え室に向かう。距離は遠くないので一分も掛からず辿り着いた。入り口に立っている騎士が暗い顔をしている。中からは対照的に馬鹿みたいに陽気な声が聞こえる。

「中の人達は楽しそうね。あなた達はどうなの？」

思わず入り口に立っている騎士に声をかける。マギーにだけ聞こえる様に小さな声で話す。

「どうもごもごもないですよ。先代に押さえ込まれていた貴族出身の奴等が好き放題です。我々のような平民出身者は肩身が狭いです。」

「ふ〜ん、私も貴族だけど・・・。」

その言葉に明らかに困惑した表情を浮かべた。

「冗談よ、最近へんな人と一緒だから私も人が悪くなったかしら。まあいいわ、前近衛騎士隊長殿はどうしているか、知ってる？」

「性質の悪い冗談は止めて下さい。隊長のことはよく知らないんです。城下に家をお持ちとは聞いてますが場所は知りません。」

「そう、ありがとう。」

「これはこれは筆頭魔術士殿、今日は例の無礼な特務隊士殿と一緒にではないのですか？」

何時の間にか中にいたであろう近衛騎士達が割り込んできた。

「今日は私一人よ、あなた達と違って特務隊士殿は忙しいの！こんな所で油を売っている暇はなさそうよ！」

売り言葉に買い言葉、マギーが舌で攻撃する。

「ひゅ〜、怖い怖い。まあ下賤な者は辺境で忙しくしているのが相応しいな。」

その言葉に取り巻きが下品に笑う。

「そうね、こんな所でありもしない手柄を自慢するしかない連中に褒められても、特務隊士どのは不本意でしょうよ。」

「おかしなことを言われる。どうも下賤な者に交わると品がなくなるらしい。それは貴族の者としてどうかと思いますが……。」

また取り巻きから下品な笑い声を上げる。さらに下品な言葉が聞こえた。

「関わるだけでなく、本当に交わっているらしいぞ。」

「おお、汚らわしいこと。代々伝わる高貴な家柄に相応しくしないですな。」

「誠に……貴族の秩序を考えていたただきたいものですな。」

「ふん！陛下に顔も名前も覚えてもらえないような貴族とやらが何を偉そうに！立派なご先祖様の顔に泥を塗るようなことはしない方がいいわよっ！」

マギーの声が近衛騎士の控え室どころか、廊下を飛び越えて文官の部屋まで響く。何事かと何人もが顔をのぞかせる。

「ヴィッセンブルン嬢、そこまでにしよう。」

一人の近衛騎士がマギーの肩に手を置く。それを跳ね除け、睨みつける。

「サイモン！あなたもこいつ等の味方をするのっ！」

「そうじゃない。ここはあなたがいるのに相応しい場所じゃない。今は止めた方がいい、俺のいる場所であなたに何かあったらケルテンに会わず顔がなくなる。」

マギーがサイモンを睨みつける。サイモンはその視線を逸らすことなくじつと見つめる。怒気を逸らす様にふつと笑顔を浮かべて見せた。

「……………分かったわ。ローゼンシュタイン殿に免じてここは引きましょ。」

マギーが大きな足音を立てて出て行った。取り残されたサイモンが頭を掻きながら同僚に声をかける。

「こんな所で女性相手に口喧嘩をしている場合じゃないだろう。閲兵式まで時間がないぞ。」

その言葉に集まっていた者達が仕事を思い出したように消える。先ほどまで口論していた者達もぶつぶつ言いながら控え室に姿を消した。

「サイモンさん、助かりました。すみません、私達では止められませんでした。」

初めにマギーと話していた騎士が謝った。

「それは無理ってもんだ、謝る必要はない。しかし階下まで声が聞

こえたぞ。」

「本当にすみません。そういえばさっきの方が前近衛隊長のことを聞いてましたよ。なにかご存知ですか？」

「そうだな、全く知らないでもない。わかった、それとなく伝えることにする。」

サイモンは控え室に入ることなく、立ち去った。

「どうも俺の役割じゃないな。こういつ時こそ、あいつの出番だろうが……。」

サイモンが呟きながら歩く、その顔は険しい。

マギーの闘い？

憤慨したままマギーは歩く。自分のことはともかくケルテンのこ
とまで貶されたのは我慢ならなかった。もしあのまま口論を続けて
いたら、秘匿している魔法でぶつ飛ばしていたかもしれない。あそ
こで止めてくれたサイモンに怒りをぶつけたが、本当は謝るべきだ
ったかもしれない。冷静になったらそう考えることができた。

図書館の扉を開ける。マギーの代理で入っていた文官がマギーに
気づいた。

「早いお帰りですね。もつと長い間、ここにいななければいけないと
思っていましたわ。」

その言葉には棘はない。ただ素直に驚いているだけのようだ。

「ごめんなさいね、リンデ。まだ用事は終わっていないの、だから
もうしばらくここを頼めるかしら。」

「構いませんよ。この間教えていただいたニフラムはまだ修得に至
っていません。外は急に騒がしくなりましたからね。ここは静かで
いいですね。」

「そう言って貰えると助かるわ。ちょっと一人になりたいから、し
ばらく出ていてくれるかしら。」

「じゃあ、食事にでも行つてきます。一時間ほどで戻ります。」

マギーに従って素直に図書館から出て行く。彼女はジークリンデ、

愛称リンデ、魔法の弟子の一人で、文官の見習いをしている。素直で魔法の才があるのでマギーが司書官代理の名目で留守を任せている。

（太陽の石を隠さなければいけないわ。）

マギーがロトの部屋の扉の前から荷物をどける。扉が見えるようになってから、扉に手を当てて集中する。鍵が開く音が確認してからドアノブを握る。扉を開けて中に入る、念のため内側から鍵をかけた。

（ケルテンには言っていないけど、もうアバカムは使えるのよね。）

懐から太陽の石を取り出して雨雲の杖の隣に置く。棚には最後の鍵も元の宝箱に入れて置いてある。

（そのうち、ここは王家の宝物庫よりすごい財宝が並ぶかもしれないわね。それを管理しているなんて歓喜の極みね。）

扉を開けて外にでる。そこで思わぬ者に出会った。

.....

「マギーさん、さっきは悪かった。」

扉を開けながら軽い口調でサイモンが図書館に入る。

「あれっ！誰もいない。そんな馬鹿な、さっきここに入るのを見たし、代理の子が出て行くのも見たぞ。」

サイモンが図書館の中を歩き回る。棚と棚の間、魔法実習室、カウンターの内側、何処にもいない。

「おっ！何だこれは？でかい荷物だと思ったら台車に載っているのか・・・んっ？この扉は・・・。」

ガチャツ！いきなり扉が開いた。サイモンが驚いて飛びのく。

「誰っ！そこにいるのはっ！」

出てきたマギーが驚く。思わずしても無駄な質問をしてしまう。

「すまん、俺だ。サイモンだ。さっきのことを謝ろうと思ってきたんだが、謝ることが増えたみたいだな。」

「見たのっ！見たわよね。」

「ああ、扉があっただな。知らなかったよ。」

「ちょっと、どいて！」

マギーがサイモンを押し、扉の前から退ける。カモフラージュの荷物を元に戻す。黙ったまま図書館の中央まで歩く。仕方なくサイモンは後をついていく。

「何怒ってんだよ。」

マギーの辺りから魔法力の高まりを感じる。

「ちょっと待てよ、さっきの扉のことは誰にも言わないから物騒な真似はよせっ！」

「それ本当ね。もし誰かに言ったらあなたを殺すわ。言ってる意味分かるかしら。」

「ああ、君が本気なのは分かった。絶対誰にも言わない。騎士の名誉にかけて約束する。」

マギーの周辺に集まっていた魔法力が拡散した。

「今の一体何だよ、あんなに魔法力が集中したのは初めて感じたぞ。」

「それも秘密よ。その気になれば一人ぐらい跡形も無く消すこともできる魔法もあってよ。」

「おい！それもしかしてロストマ・・・」

マギーがその言葉を手で遮る。

「これ以上は詮索しないで！これは諸刃の剣なの。」

「諸刃の剣ね、分かりやすい喩えだ。了解だ、これ以上は詮索しないことにするよ。」

「よかった、あの人の友人を一人失うところだったわ。」

「そこまで本気かよ。怖い女だな。」

「そうよ、あの人の為なら何でもするわ。それがあの人の望みなのだから……。」

「ケルテンが羨ましいな、ここまで想ってもらえるとはね。じゃあ、俺の用件だけ伝えて帰るとするか。アイゼンマウアー隊長の居場所を探しているのだろう?。」

「そうよ、なんで知ってるの?。」

「さっきの騎士に聞いた。俺もどちらかと言うと少数派でね、なんとかアイゼンマウアー隊長の復帰を望んでいる。」

「結構不器用なのね、出世できないわよ。」

「余計なお世話だ、俺のことはほっといてくれ。アイゼンマウアー隊長だが近衛に入る前は冒険者をしていたらしい。だからその道の者に聞いた方がいいだろう。」

「そうしてみるわ。ありがとう、わざわざそれを言う為に来てくれたのね。」

「礼を言われるまでもない。さっきも言っただろう、俺は少数派だつて。だから俺なりにできることをしたまでだ。じゃあ俺は行くから後は任せな。」

サイモンはおどけた口調でそう言うとお出て行った。次にやるべきことは決まった。まだまだマギーの闘いは終わらない。

「すみません。アイゼンマウアーという冒険者を知りませんか？」

マギーは城下街の宿屋に来て、聞いている。宿屋の従業員の幾人に聞いてみたがよい答えは返ってこない。それでも諦めずに別の従業員にも聞く。

「ここ半年は冒険者も見なくなつたねえ。そのアイゼン何とかという人は何時ごろの人かしら？」

若い女の従業員に逆に質問される。そういえば何も知らない。

「いつの人だかは知らないわ。年齢は30半ばから上、多分ここ一二年はいなかつたと想うわ。」

「じゃあ知らないわ。だったらこの主人に聞いた方がいいわね。親父さ〜ん、親父さ〜ん、綺麗な女の人がお呼びよ〜！」

その女中が奥に声をかける。

「なんだよ、大声で人を呼ぶなつていつも言ってるだろうがっ！で、俺を呼んでいるのは誰だ！」

文句を言いながら宿屋の主人が表に出てきた。

「なんだ、あんたか。学者の知り合いだったな。俺になんか用か？」

「アイゼンマウアーという人を探しているの！知らないですか？」

「ほう、久し振りにその名前を聞いたな。近衛騎士になつた時にお

前には無理だと言ったんだが、いつの間にか隊長になったと聞いて驚いたものだ。で、それがどうした？」

「近衛騎士隊長を辞められました。それで居場所を探してます。何か知りませんか？」

「辞めただと、そうか続かなかったか。やっぱり平民では駄目なのかね。」

「そうではありません。自分から辞めたそうです、なにが理由があるはずです。」

「ふむ、辞任ねえ・・・責任感の強いやつだからな。町のはずれにあいつの家がある。まだ住んでいるか分からないが行ってみるといい。」

「どこの屋敷ですか？教えてください。」

「屋敷なんて大層なものじゃないさ、ただの家だ。地図を書いてやるからちよつと待ってる・・・よしこれでいいだろう。ほらっ！」

「ありがとうございます。失礼します。」

マギーの手に地図が渡される。受け取ったマギーがすぐに外に飛び出した。

マギーの闘い？

「どうしろと言うのだ。今から聖騎士の鎧を用意しろだっ！」

「昔使われたという王家の鎧のことか？あれなら王家の宝物庫にあつただろう。こつちに較べれば簡単だろ。」

「そつちが何だかは知らないがそう楽な問題じゃない。いいか、聖騎士王と呼ばれたラルス9世のしっかりとした体格に合わせた鎧が、あの殿下に合うわけないんだ。今、職人が必死で手直ししてるよ。間に合うかどうか、頭が痛いよ。」

「こつちも似た様なもんだ。王家の紋章を刺繍した純白のマントを準備せよとのありがたいお言葉だ。刺繍は金糸と銀糸を使った豪華な物をご所望だ。もちろん誰かのお古なんか出せるわけもない。こつちも職人が必死で作ってるさ。」

そこに更に別の者が割り込んでくる。

「それだけじゃないぜ。閲兵式が終わったら城下街をパレード、そのまま外にでて魔王の島を望むべく海岸で演習を行なうだとき、笑つちやうね。もちろん準備はこつちに丸投げだ。」

「それだけの予算は何処から出るんだ？」

「なんでも国務大臣の予備費からでるそうだ。」

「ん？流民対策費もそこからだったよな。足りるのか？」

「もちろん足りんよ。だからその対策費を流用するんだ。その理由がこうだ、近衛騎士が威風を示すことで魔王を押さえ込む。それが成れば流民問題など解決したも同然。」

「ひどい詭弁だな。全てうまく行くこと前提かよ。」

「……はあ。」

三人同時に深いため息をつく。それでも与えられた仕事をこなす為、各自の仕事場に戻っていった。

カーテンを締め切った部屋に佇む男に、声がかけられる。声の主の姿は見えない。

「アイゼンの旦那、変な女が旦那をことを嗅ぎまわってますぜ。」

「戻ってきたのか。もう俺に構わないでくれ、そう言ったのを忘れてたか？」

「忘れちゃいないさ、ただ旦那の伝言を伝えた特務隊士とやらが、想像以上にできる奴だね。面白そうなんでもう少し付き合ってもいいかなと……。」

「ふん！ 酔狂なやつだ。何があった？」

「影に隠れていた俺っちに気づいた。しかも投げつけたナイフをあつさり避けやがった。」

「余計なことをしてくれたな。それで？」

「あとは旦那からよろしくと伝えただけだ。ああ、ついでに大臣に気をつけると教えただけだ。」

「ふむ、それこそ余計な一言だな。となると俺を探しているのはヴィッセンブルン嬢だな。」

「どうします？ 邪魔になるなら処理しますが？」

「お前死にたいのか？ これ以上余計なことはするな。いずれ俺が会うことにする。」

「冗談ですよ、そんな怖い目で睨まなくても……。ではまたいずれ……。」

影から気配が消える。残された男は椅子に座ったまま、何か思考に更けっっている。

- - - - -

宿屋の主人から教えられた家は空振りとなった。手がかりを失ったマギーは城に戻る。図書館の前に男が立っている。

「ヴィッセンブルン殿ですね、フレーゲル殿下がお呼びです。ご同行いただけますか？」

「何の用かしら、今は忙しいはずですが私などに構っている暇はな

いでしょう?」

「申し訳ありません、主より用件は何っていません。至急のお呼びです。」

多分フレーゲルの執事であろうこの男は冷たく繰り返すだけだ。マギーは無意味な抵抗を諦めた。

「はあ、分かりました。」

「こちらでございます。」

マギーは城内のある一室に案内される。そこは王家の者しか立ち入りを許されない領域で、もちろんマギーも初めて入る部屋だ。そこにはその部屋の主が座っていた。

「これは筆頭魔術士殿、わざわざお呼び立てしてすまない。」

えらくご機嫌なフレーゲルが立ち上がって迎え入れる。込み上げる嫌悪感を押さえつけて笑顔で返す。

「この度は近衛騎士隊長就任おめでとございます。お忙しいと伺っていますが、御用は何でしょうか?」

「ふむ、では早速だが近衛騎士隊長に伝授されると聞いておる、例の遺失魔法を教えて頂きたい。」

「はあ?」

マギーは予想の斜め上に行く用件に間抜けな返事をしてしまう。

「いえ、失礼しました。代々近衛騎士隊長に伝授されるとは決まっていますか？」

「そうなのか？その魔法のお披露目時に、陛下より近衛騎士隊長に伝授するようにされたと聞いておる。先代の隊長から私に代わったのだが、何か不都合でもあるか？」

ちっ！マギーは心の中で舌打ちをする。確かに陛下には近衛騎士隊長に伝授するよう言われた。教えたくない相手だが明確に断る理由がない。

「何も不都合はございません。しかし修得の難しい魔法ですので閲兵式の後でもよろしいではありませんか？」

「そうはいかぬな。閲兵式後に我が騎士団の威風を見せ付ける為に、野外行軍を行なう。その時に役立つ魔法であろう。」

「確かにその通りでございます、では伝授させて頂きましょう。まず口述の伝授を行いますので人払いをお願いいたします。」

「そうか、しかしここにはそなたと私、執事と護衛の者しかおらぬが。」

「執事と護衛の方がいらっしゃいます。」

「無礼な！！殿下に何かあったらどうするっ！」

護衛の一人が怒鳴りつける。マギーは一切怯まない。

「これは陛下より秘伝と認定された魔法です。私が認められた者以外に聞かせるわけには行きません。それに失礼ではありませんか？これでも私は爵位を持っています。まさか王家の護衛の方に礼無しとは殿下の顔に泥を塗るようなことはされぬ方がよろしいかと存じます。」

「確かにその通りだな。こちらが師事する身だ、無礼があつてはならぬぞ。」

「しかし殿下、それでは御身に何かあつては、父上様に合わせる顔がありません。」

「構わぬ、女一人にどうにかされる私ではない！下がれ！」

何か逆鱗に触れることがあつたのか、フレーゲルが怒鳴りつけた。表情を強張らせた執事が護衛を連れて部屋の外にでた。部屋にはマギーとフレーゲルだけになった。

「これでよろしいか。部下の非礼を詫びよう。」

「いえ、こちらこそ失礼いたしました。では鎮魂の魔法ニフラムを伝授いたします。まず私が口述で詠唱しますので続けて詠唱して下さい。」

『私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん、』

『私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神・捧・』

『

『おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム！』

『おお・なる神よ、・達の魂を・・・まえ、ニフラ

△！』

「マギーについて復唱しようとするが、まともに詠唱できない。フレージェルの顔が歪む。

「一度で覚えられる魔法ではありません。根気よく続けましょう。」

「そっそっだな。流石に秘伝の魔法だけはある。難しいな。」

「マギーの慰めに機嫌を治したフレージェルが、秘伝の魔法だと強調する。」

「では続けましょう。』私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん……………」

「今日はここまでに致しましょうか。ほぼ覚えられたと思いますのであとはご自分で練習されるといいでしょう。」

「う、うむ。そうだな、今日はこの辺で終わるとしよう。」

「では、私は図書館に戻ります。不明なことがありましたら図書館に来られるか、使いの者を寄越して下さい。」

「マギーの講義は二時間にも及んだ。やっと終わりを告げられマギーが部屋から出て行った時、フレージェルは不覚にも開放されたことに喜びを覚えたという。」

武器の進化

8 / 28 勇者支援生活 120日目

マギーがラダトームに戻って3日経った。まだ連絡はない。

「こっちの二人は相変わらずか？」

「ああ、そうだ。まあ野暮なまねはするなよ。今は闘いは必要ない。

」

「じゃあ俺の出番はないな。で、学者、お前は何をしているんだ。」

「ああ、俺の刀が傷んできたので打ち直してもらっている。」

「ミスリルが痛むのか？信じられねえな。」

「そうじゃない。鉄と鋼の部分にひびが入った。この間ドラゴンの骨を強引に断ち切った時だと思う。この際だから、全てミスリルだけで作り直してもらっているのさ。」

「それは楽しみだな。見に行くとするかな。」

ガイラが立ち上がって鍛冶屋に向かって歩き出した。慌てて俺もついて行く。ガイラが遠慮なく鍛冶屋の扉を開ける。中からむつとした熱気が漏れる。

「おい、空気が冷える！はやく閉める！」

中から怒号が聞こえた。急いで中に入って扉を閉める。ちょうど窯に火を入れてミスリルを熱している。一文字がやっところでミスリルを挟み、リヒャルトが一生懸命ふいごで空気を送り込んでいる。

「どんな感じだ？」

「ああ、もう鉄の部分は溶けて無くなった。棒状に加工してあったミスリルを今から融合するところだ。いいところに来た、その筋肉の塊に手伝ってもらおうか。」

一文字がそう言いながらガイラに大鎚を渡す。

「筋肉の塊とはひどいな。で、なにをすればいい？」

赤熱化したミスリルのブレードとミスリルの棒を特製の金床の上に置く。

「こちら側から順に叩いてくれ。」

ガイラが大鎚を思いっきり振り下ろす。ガキンツ！と大きな音、火花が飛び散る。

「やはり力があるな。よしもつと続ける。」

一文字が少しずつやっところを動かして打つ場所を調節し、ガイラが大鎚を何度も振り下ろす。ミスリルの赤熱化が治まると火の中に差し入れて熱する。それを何度も繰り返す。どれだけの時間が経っただろうか？その二つが完全に融合して一つの刀の形になった。

「お前さんが来てくれたから思ったより早く終わった。礼を言う。」

一文字が軽く頭を下げる。リヒャルトがグラスに水を注いで持つてくる。一文字とガイラが一気に水をあおった。

「これは大変だな。俺の想像以上の技術だ。いやここに来てよかった。」

「それはよかった。でもここからが大変だぞ。削るのに根気が要る。前は半月掛かった、なっ！親父さん。」

「そうだったな。まああの時は0からだったからな。今回は刃の形がほとんどできているから急げば3日でできる。」

「そうか、じゃあ3日で仕上げてくれ。城に戻らねばならないんだ。」

俺の言葉に一文字が露骨に嫌な顔をした。

「しまった、余計なことを言った。仕方ねえな、リヒャルト！冷えたら気合入れて仕上げるぞ。」

「OKだ、こんな面白いことなら幾らでも付き合っつ。」

嫌そうな顔をしていた割には一文字は楽しそうだ。自慢の技術を披露できるからか、弟子が育つことが楽しいのか、俺にはその気持ちに分かる気がした。

「おい、これはなんだ？」

やることが終わって暇になったガイラがそこに置いてあった刃物

みたいな物を手に取る。

「ああ、それか。リヒャルトの考案で作った切断用のやすりだ。ドラゴンの骨を切断する為の道具だ。」

「それで切ることはできたのか？」

興味が沸いたので俺が質問する。リヒャルトが切ったと思われるドラゴンの骨を持ってきた。

「これだ。見てみる。」

「綺麗に切れているな。ガイラ、これでボタンを作ろう。そうすればボタンの所から燃えなくなる。しばらくこれを借りるぞ。いいな！」

許可を得ることなく勝手に持ち出した。俺とガイラは宿屋に戻って、まだ使っていないドラゴンの骨を取り出す。

「お前の竜鬨着の止め具は棒状だからこっちの細い骨を5cmぐらいの長さに切ろう。俺の丸ボタンだからこっちの太い骨を輪状に切つてから穴を開ける。おい、聞いているのか？」

「おっおっ、お前よくそんなに色々と思いつくな。まったく感心するぜ。」

「どんなことでも一つずつ改良するものだ。武器、防具、魔法、なんでもだ。足を止めたら前に進めないだろう？」

「違いねえ。しかしお前さんの防具はどんどん進化していくな。そ

れ何年使っている?」

二人でドラゴンの骨をゴリゴリ削りながら会話している。

「そうだな・・・3年は使っているかな。最初はただのレザーベストだった。ハードじゃなくてソフトレザーだ。」

「俺が見たときはもうベストじゃなかったな。」

「ああ、傷がついたのを隠す為にポケットを付けた。ついでだからそこに鉄板を入れておいた。」

「そこまで行くと何と呼んでいいか分からない鎧だな。」

「そうだな、言うなれば部分補強、ソフトレザーベストでも言うのかな。さらに今はそこにドラゴンの鱗を縫い付けてあるからレザー&ドラゴンスケイルベストだな。」

「なんとも大変な鎧だな。じゃあ籠手と脛当ても改良するのか?」

「ああ当然だ。ドラゴンの革で作り直してもらっている。この間の竜闘着の余りで何とかなるはずだ。」

「それで完成か?」

「わからん。技術の進歩で幾らでも上はある。例えばミスリルを使ったスプリントメイルやチェインメイル、ドラゴンレザーとかもあるな。ただこれは硬くするのに蠟は使えないから別の方法を考えなくてはいけないな。」

思わず俺の手が止まっていた。

「ああ、もういい。聞いた俺が馬鹿だった。そんな話は技術屋にしてやれ。」

「すまん、こつこつという話をするとう興奮してしまう。悪い癖だ。」

「いや、悪くはない。それで俺の武闘着も生まれ変わった。いくら礼を言っても足りない。」

「礼ならいらぬ。俺の職務でもあるし、だいたいお前の鎧を作つて礼を言われる筋合はない。」

照れくさいので作業を再開する。ガイラも手を動かし続けている。

武具の進化（後書き）

ケルテンの武具

武器

試作刀

部分ミスリル刀

ミスリル刀

頭

なし

鎧

レザーベスト

補強レザーベスト

竜鱗のベスト

腕

革の籠手

革の籠手（ミスリル板入）

竜革の籠手（ミスリ

ル板入）

脚

革の脛当て

革の脛当て（ミスリル板入）

竜革の脛当て（

ミスリル板入）

ガイラの武具

武器

無し

ミスリルナックル

頭

無し

鎧

武闘着

竜闘着

形状は桃白白と同じですが色は茶色、装飾無し。

腕

無し

左手のみ 革の籠手（ミスリル板入）

脚

閱兵式

8 / 29

ラダートム城から城下街を望むバルコニーから、フレージェルが下に向かつて手を振っている。立派な白銀の鎧、王家の紋章が刺繍された豪華なマント、腰には飾りがいつぱいついた宝剣を装備している。その顔は自信に満ち溢れ、無限の笑みを振りまいている。ただし、下からみている民衆の言葉が聞こえていたらそうはできないであろう。

「なんだよ、あれ。鎧に着られているぜ。」

「あいつ誰だ、貴族のぼんぼんか？えっ！フレージェル殿下・・・世も末だな。」

「閱兵式とやらで無理矢理徴集されて来たが、茶番も甚だしいな。あんなのが近衛騎士隊長になって何ができるって言うんだよ！」

「おい、止めろ！あそこの騎士がこつちを睨んでいるぞ。」

歩哨に立っている騎士の視線を感じた者がおしゃべりを止めさせる。その集団は無理やり笑みを浮かべ、バルコニーに向かつて手を振りだした。それを確認した騎士サイモンがため息をつく。

（言いたい放題言いやがって・・・民衆もよく分かっている。しかし俺は歩哨で正解かもな・・・あいつについて行軍なんてやってられない、ついてく奴等に同情するぜ。）

サイモンが心の中でぼやく。一番文句を言いたいののはサイモン自身だ。近衛騎士64名のうち半数と一般兵64名をつれて威力行軍

をするのだが、そのほとんどは国務大臣派閥の騎士達とその部下だけで占められている。当然不平屋のサイモンや、前近衛騎士隊長に抜擢された身分が低い騎士達は、セレモニーの歩哨と留守番を仰せつかったという訳だ。

しばらくしてセレモニーが終わる。今度はラダトーム城から城下街のメインロードの両脇を一定間隔で、騎士と一般兵が立たなくては行けない。サイモンは急いで所定の位置に走る。騎士達によって集まっていた民衆がわけられる、そこを堂々とした騎士達の行列が通過する。行列の中央の白馬に乗ったフレーゲルが集まった民衆に手を振りながら進む。

(馬鹿馬鹿しい、こんなに金をかける余裕があるのなら流民対策に使えばいい。今ここに集まっている民衆の憎悪の感情は、あいつには届かないのか?)

サイモンは己の仕事を思い出したように民衆を見張る。近くにいろのは周到に準備されたサクラの民衆、その後ろで行列を睨む粗末な服を着た人たちが見える。

(頼むから短気は起こしてくれな、俺は無力な民に振るう剣は持っていない。)

フレーゲルの行列が通り過ぎた。ほっとしたサイモンは行列を見送る。馬に乗った騎士の中に水色のローブの女性の後姿が見えた。

- - - - -

(なんで私まで付き合わなくては行けないのよ!)

マギーが今いるのは行列のど真ん中の馬の上である。セレモニーの直前になって、フリーゲルの側近に同行するよう言われたのである。当然断ったのだが、閲兵式には王宮魔術士が付き従うのが前例だと言われて仕方なく従ったのだ。

（でもこの眺めは為政者の自尊心を満たすには十分ね、皆にこやかに手を振ってるわ。さっきサイモンがいたわね・・・居残り組か、羨ましいわ。）

「筆頭魔術師殿、気分はどうですか？」

フリーゲルがマギーの横に来て話しかけてくる。

「近衛騎士隊長フリーゲル殿下、なかなかの気分ですわ。こんな気分を味わえるのは聖騎士王ラルス9世以来でしょうか？」

「そうだ、この私だからこそできた栄光と言わざるを得まい。わははははっ！」

「そうですわね。おほほほっ！」

マギーは込み上げる何かを押さえつけて微笑む。その表情のままフリーゲルがどこかに行くのを待った。

.....

行列が街の外に出てった後で、居残った騎士と一般兵が撤収する。

「おい、こら！おとなしくしろっ！」

みすばらしい服を着た男を兵士が取り押さえている。それでもその男は諦めずに暴れ続ける。それを通りがかる民衆が見ている。困った兵士たちが近くにいた近衛騎士サイモンを見る。

「どうした、なにかあったのか？」

「はい、この者が殿下の行列に向かって石を投げようとしたので、取り押さえました。」

「はあ・・・いいから放してやれ。」

「しかし、よろしいのですか？」

押さえ込む力が緩んだ拍子に、その男が兵士を振り払う。立ち上がった男がサイモンを睨みつける。

「てめえもあのかま野郎の手下なんだろうがっ！どっいつつもりだっ！少しでも慈悲深いところを見せようって腹かっ！」

「改めてそう言われると落ち込むな。俺はあいつの手下のつもりはない、近衛騎士は陛下にのみ従う、そう思っていたんだがな。」

サイモンの独白ともとれる台詞に怒りが逸れた。それでもサイモンを睨みつけることは止めない。

「あんたの気持ちはよく分かるさ、俺だって腹が立っている。だけどこんなことしてどうなる？」

「くっ！それでも何かしてやりたかった・・・ただそれだけだ。」

男は立つたまま涙を流す。サイモンが男の肩を軽く叩いた。

.....

32騎の騎士と64名の兵士、数名の魔術師が列を成して、整然と行軍する。それは行軍をさせた者の思惑通り威風堂々としていた。しかし誰かがそれを見て恐れを成しているのかは分からない。

「見る！我が軍を恐れていかなる魔物も我々を襲って来ないではないかっ！...！」

「はっ！その通りでございますな。」

「この調子で竜王とやらの城を攻めてやるつか、あっはっはははははっ！」

「それは剛毅ですな。いや殿下ならば竜王も裸足で逃げ出すことでしょう。」

（そりゃそうでしょうよ。この辺はスライムとドラキーしかいないからね。大体どうやってあの魔王の島まで行くつもりよ！）

フリーゲルと側近の会話にマギーが心の中で毒づく。信じられないことに同行している騎士のほとんどがその無責任な発言に同調しているのだ。反面、一般兵の顔色は悪くなる一方だ。

「しかし間には海がありますな。殿下、どう致しましょうか？」

「ふむ、船では行けぬのか？」

「竜王が現れてから海が荒れて船が出せないそうです。さらに魔王の島は断崖絶壁に覆われていますから上陸は難しいと思われます。」

その気はなかったのだが、マギーは思わず口を挟んでしまった。

「なるほど、流石に筆頭魔術士どのは博識だ。では他の手を考えようではないか。」

フリーゲルが無邪気に褒める。しかしその側近がフリーゲルに分からない様にマギーを睨みつけた。マギーは涼しい顔で受け流す。

（あんた達なんか怖くも何ともないわよ、目の前でドラゴンに炎を噴かれたことに較べれば涼しいものね・・・そう考えるとあの旅は役に立ったようね。昔の私では考えられないことだわ。）

「全軍、停止！しばし休憩。」

いきなり行列が止められた。フリーゲルが股間の痛みにも文句を言っているようだ。よく見ると側近の騎士たちも似たようなものである。マギーは近くの若い騎士に声をかけた。この騎士は先ほどからフリーゲル達の放言にいい顔をしていない。

「ホイミで治るから、そう教えてやりなさい。」

「そうなんですか、ご自分で教えて差し上げればよろしいではないですか？」

「嫌よ、ではよろしく頼むとか言われたら困るもの。」

その意味を理解したその騎士が頷いた。その騎士はフレーゲルから少し離れた側近に近づき、小声で話しかけた。

「馬に乗りなれていませんと痛いかもしれません。小官はそういう時はホイミで治したものです。」

その方法が小声で側近の間を伝わる。

「あなた、結構やるわね。下手な進言をしたら大変なことになっていたわ。」

「それぐらいのことはできますよ。あなたのことはサイモン小隊長から聞いています、マギウス・J・ウィッセンブルン殿。」

「あら、サイモンさんの部下なのね。よくこっちに入れたわね。」

「まあ、小官はあの人よりはうまく立ち回れますからね。それに殿下の側近ばかりでは軍が成り立ちませんから、ある筋から頼まれたというわけです。」

「ふうん、見てる人もいるようね。」

「行軍が再開するようですよ。」

フレーゲルから行軍再開の命令がされる。座り込んでいた兵士たちが、ぶつくさ言いながら立ち上がって歩き始めた。

襲来

竜王の城を望む海岸線に陣を張っている。とは言っても作業をしているのは一般兵がほとんどで、一部を除いた近衛騎士は作業をしていない。呆れたマギーが作業を手伝おうとしたが、それは流石に女性に土木作業はさせられませんと遠慮されて、手持ち無沙汰である。

「この陣は何の為に作ってるんだ？夜になる前に帰るはずだぞ。」

「訓練だとさ、俺達一般兵は普段から似たようなことをしてるから訓練の意味ないよな。」

「だよな、あいつらこそ訓練の必要があるだろうが・・・。」

「それに聞いたか、新隊長どのは天蓋付きのベッドでしか寝たくないそうさ。戦場でどうするのかね？」

「知らね、こんな作業、さっさと終わらせて帰ろうぜ。」

そんな一般兵を放っておいた当の本人は、魔王の島を眺めている。うつすらとしか見えない島は暗雲に包まれ、たまの落雷で邪悪な城のシルエットが見えるような気がした。とはいえ代わり映えない景色にフレイゲル以下側近が飽きてきた。

「つまらん、魔物の一匹や二匹、来てもよかるう。」

「いえいえ、やはり殿下の威風に恐れをなしているのでしょうか。それだけでもここで陣を張る意味があります。」

「ふむ、確かにそうであるな……ん？海の上に何か見えぬか？」
フリーゲルが海を指差す。そこにいた者達も指差す方を見る。そこには金色に光る何かが見えた。さつきまで雑談に勤しんでいた者達が無言でその何かを観察する。その何かは少しずつ近づいて来ている。

「人の様に見えますが……。」

誰かが言わなくていい一言を言った。そんなことはすでに誰もが分かっている。信じられないが金色のローブ姿の者が、海の上を歩いてこちらに近づいてきているのだ。その異様な光景に飲まれた一団にマギー達が気づき、視線の先を見る。

「金色のローブ！いけない、あれは大魔道よっ！気をつけて……！」

メルキド攻防戦について聞いていたマギーが、その魔物の正体に気づいて警告する。慌ててフリーゲルの取り巻きがフリーゲルを守るように臨戦態勢をとる。

大魔道が音もなく海の上を滑る様に近づいてくる。互いに顔が見える距離だろうか、どこからともなく声が聞こえる。

「これはこれはラダトームの皆さん、こんな所にわざわざお迎えとは光栄の極み。まさかそこに見えるのは國務大臣殿のご子息でいらつしゃいますか、どうしましたか、その姿は？まるで似合っていますね。」

ふてぶてしい馬鹿にした声に取り巻きが憤慨する。

「無礼なっ！魔物の分際で殿下に声をかけるなっ！」

（そういう問題じゃないような気がする・・・しかし文句を言う時だけは威勢がいいのね。）

自分でも可笑しいと思ったが、妙に冷静にマギーが分析する。

「くつくつくつ！何を基準に無礼と言っておるか判らぬな。まあ愚か者相手にあれこれ言っても仕方なかるう。ここで無意味に遊んでいるだけならまだしも、我等が竜王様にたて突く様な真似は許せぬな。」

「何だと！皆の者、いい機会だ！我等近衛騎士団の力を見せよっ！」

フレーゲルが氣勢を上げる。取り巻き全てが抜剣して対峙する。

「なるほど、なるほど、これは軍隊による威勢ととってよいな。よろしい、ここに約定は破られた！」

大魔道の宣言と共に右手の杖が振り上げられる。砂浜から骸骨が、朽ちた鎧が湧き上がり、陣を囲む。その数は100を越える。

「なんだ、これは！一体何が起きた！」

動揺したフレーゲルが疑問を口にする。もちろん答えは返ってこない。

「殿下、すぐに全員に応戦の命令を！」

「そつそつだ、全軍応戦せよ！」

陣を張る為に作業をしていた一般兵が、武器を手に取り応戦する。剣と剣が打ち合い、剣と盾がぶつかり、槍が鎧を貫く。一方だけが血生臭い戦いが繰り広げられ、その状況を大魔道が海の上から眺めている。数人の騎士に囲まれているフレীগエルがニヤリと笑みを浮かべた。

「ふははははっ！こんなこともあるつかと習っておいて正解だったわ、喰らうがいい我が秘術。」

『私はMPを2消費する、MPはマナと混じりて神に捧げん、

おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム！』

「殿下！いけないっ！」

マギーがその詠唱に気づいて忠告するが間に合わない。フレীগエルの魔法の完成と共に数体の骸骨が崩れる。

（しまった、まさか口述詠唱で使うとは思わなかった。これでもう秘術ではなくなる。ゴメン、ケルテン！）

いつの間にか大魔道がフレীগエルを見下ろす位置に浮かび上がり
咳く。

「なるほど、それが我等の軍勢を消した秘術か。ではこうしたらどうなるかな？……………マホトーン！」

魔法を封じられたフレীগエルが青ざめる。それを見た大魔道が杖を振り上げると、フレীগエルの一団の周りに鎧の騎士が沸く、さら

「私にそんな嘘が見抜けないとでも思っただけ!? 玉砕でもされたら残された者が迷惑します。」

「厳しいなあ、死ぬことも許されないのですか？」

「そうよ！わかったら、あの悪魔の騎士をお願いするわ、ケルテンから聞いているパーソナルカラーを持つ悪魔の騎士よ！」

最初の奇襲で1/4の兵を失い、フレージェルの離脱でさらに兵を失った。現時点で密集陣形を組んでいるのは40名強、敵の数はおよそ100。さらに大魔道が空で不気味に浮かんでいる。

まだまだマギーとステファンの闘いは終わらない。

ルピスの聖女

おそらく両手持ちであろう鉄の斧を片手で振り回す悪魔の騎士、その攻撃を冷静に鉄の盾で受け流し右手の鉄の剣で反撃するステファン。その剣は硬い鎧にはじかれる、それでもステファンは一步も下がらずに防御に徹していた。

そのステファンの奮戦に他の騎士、兵士達が気力を奮い起こし戦う。何時の間にか密集陣は二重となっていた。前に出ているものが傷つくか疲れたら、後方に下がり休息する。または後方にある者で魔法が使える者がホイミで癒す。

ステファンの体力的な損耗、強烈な攻撃を受け止める左手の損傷を補う為にマギーがホイミを使用し続けている。しかもその合間に鎧の騎士や骸骨の集団にニフラムを行使する。一度は悪魔の騎士を中心にニフラムを使用したか、効果は見受けられなかった。

空中から眼下を見下ろす大魔道がひとり呟く。

「あの女、なかなかやる。さっきの男と違って完全無詠唱で魔法を扱うか……。あとはあの騎士、奴の猛攻を凌ぐとは、いやはや・・・人材は意外なところにいるものだ。あの二人を殺れば残りの者どももの心を折ることができるだろう・・・・・ベキラマ！」

「キャッ！」

マギーの悲鳴が上がる。倒れこんだ彼女に近くの騎士が近寄る。

「大丈夫よ、こんなんで私は殺られないから・・・。」

伏せたままのマジターの体が薄く光り輝く。行使したベホイミによって痛みが和らいだ。攻撃してきた大魔道を睨むが、すでにこちらの魔法の射程外。

（なるほど、メルキドでケルテンが何を考えていたのか、分かってきたわ。使えるはずの魔法が使えないのがこんなにももどかしいとは、傷つき倒れていく兵士を見ていなければいけないのがこんなにも辛いとは……。だからこそ負けるわけにはいかない。だったらできることをするだけ、あの魔法の詠唱は？）

《私はMPを4消費する、MPはマナと混ざりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、不可視の盾となりて、私達を守れ、スクルト！》

（この魔法は重ね掛けができると言ってたわね。ならもう一回！）

《私はMPを4消費する、MPはマナと混ざりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、不可視の盾となりて、私達を守れ、スクルト！》

兵士たちに違和感ができた。ささほどに較べて敵の攻撃が弱くなっている様な気がするのだ。気のせいかもしれないがそれでも構わない。余裕ができた兵士達が徐々に反撃にでる。

ステファンもその違和感に気づいていた。さっきまでは盾で防御しても骨に響く斧の一撃が、それほどでもなくなっている。

（悪魔の騎士とやらも疲れるのか？私はなにを馬鹿なことを考えているのだ。）

頭を振って己の愚考を消す。冷静になって戦況を確認する。味方

が前に前に出ようとして、密集陣が崩れようとしている。

「駄目だっ、陣を崩すな!!!!」

慌てて大声で命令する。一瞬の間の後、ステファンが大きく吹き飛ばされた。悪魔の騎士から目を放した瞬間攻撃を受け止め損ねたのだ。悪魔の騎士が威嚇するかのように大きく斧を振りかぶり、ゆっくりと近づいてくる。ステファンは鉄の剣を杖の代わりに立ち、左手の盾を握りなおす。

（まだ体は動く、倒れている場合ではないな。）

ステファンの肩に誰かの手が当てられた。悪魔の騎士からは目を放せない。

「守るのも大事ですが、こちらからも手を出さないといけませんよ。」

女性の声が聞こえる。

「しかし傷一つつけることができません。」

「いいえ、あなたにはできますよ。……………さあ行きなさい！」

ステファンの背中が軽く叩かれる。“行きなさい”その一言に背を押されて一歩前にでる。振り降ろされる斧が遅く感じる、盾で綺麗に受け流す……から空きの右籠手が見えた。鉄の剣を振り下ろして切り飛ばした。

「グワアアアアアアア！」

飛び散る鮮血、怒声とも悲鳴とも分からない声が上がった。思わぬ声に動揺したステファンの手が止まり、悪魔の騎士が飛びのく。悪魔の騎士が痛そうに傷口を押さえている。

「覚えていろっ！」

捨て台詞を残して、悪魔の騎士の姿が光と消えた。意外な展開にステファンが立ちすくむが、今いる場所を思い出して戦いに戻る。

（うまくいったようね。最初のタッチでピオリム、背中を押すようにバイキルト、鼓舞しただけと思ってくればいいのだけど・・・）

戦況は一変した。堅陣の周りでステファンが戦場を駆け回る。ステファンが剣を振る度に鎧が割れ、髑髏が地に落ちる。もう体力も限界だが、それでも騎士が、兵士が傷ついた体を奮い起こす。

マギーを中心に光り輝く光球が出現した。光に触れた者達の傷が塞がり、疲れきった体から疲労が消える。歓喜の声、揚がる勝鬨。もう堅陣はいらぬ、兵士たちが各々攻勢に出る。ステファンも他の騎士もそれを止めない。

だがマギーの顔色は青い、剣撃の音が頭に響く度に頭痛が襲ってくる。

（ここでベホマラーはきつかったわ、これが急激にMPを消費した代償ね。でもまだよ、まだあいつがいる。互いに魔法を撃ち合っても勝ち目はないわ。しかも間合いの境をのらりくらりと移動してい

る。あれを使うしかない。」

マギーが手に持った杖を大魔道に向け、睨みつける。地上を見下ろす大魔道のローブの下に赤く光る目に怒りが見える。

「もう勝敗は決したわ、逃げると言うなら逃げていいわよっ！」

「おのれっ、人間め！調子に乗りおってっ！……ベギラマッ！……ベギラマッ！」

怒りに血が登った大魔道が一気に間合いを詰めて、杖から稲妻を放つ。マギーに稲妻が直撃、大魔道に勝ち誇った笑みが浮かんだように見える。

「やっぱりそうきたわね、私の勝ちよっ！……ベギラマッ！」

大魔道が放った稲妻がマギーの手前で光壁に当たって撥ね返る。撥ね返った稲妻とマギーの放った稲妻が大魔道を襲う。金色のローブがすたすたに刻まれ、燃えあがる。

「馬鹿なっ！なん・だ・今……のは？」

「ルビス様の加護よっ！私達人間は如何なる魔王にも屈しない。その覚悟があるかぎり精霊ルビス様はいつでも助けてくれるわ！」

「……」

大魔道のローブが燃え尽き、灰が飛び散る。静まり返った戦場に手にした杖で天を指し示すマギー。その姿はマホカントの効果で薄く光り輝いている。どこからともなく声上がる。

「聖女様だ……。」

「精霊ルビス様の化身だ。」

「ルビス様の聖女……。」

生き残った兵士たちが駆け寄る。マギーの耳には歓声は聞こえない。マギーの膝が力を失って崩れた。

ルビスの聖女（後書き）

魔法の詠唱文の表記について

口述詠唱を『私はMP……………』
思考詠唱を《私はMP……………》

と変更しました。詠唱している文章は日常使う言語とは異なる別の言語であることを意図しています。

もう一つの戦場

フレーゲル達の部隊が開戦し始めた同時刻、ラダトーム城でも異変が起きていた。その異変に気づいたのは城壁の見張り塔にいる兵士だった。

「おい、見るよ！魔物が集まって来ているぞ。」

「何言ってるんだ。どうせいつものスライムか、ドラキーだろ・・・えっ！うわっなんだあの魔物は！」

「たしか鎧の騎士とがいこつ、それと魔道士だ。あっちの狼みたいのはリカントか！」

「俺には分からん、すまんが急いで城に報告してくれ。俺は警告を出す！」

一人が塔の階段を落ちるように駆け下りる。もう一人は逆に駆け上がり、非常を知らせる鐘を鳴らす。つい先日まで数百年使用されていなかった鐘の音が城下に響く。その音に街の住人が屋内に逃げ込み、兵士が城壁に登る。さらにラダトームに入る全ての門が閉められる。

しばらくして、ラダトームに残された近衛騎士達が馬に乗って城下を駆ける。総勢32名だが隊長格の者はほとんどいない。正確に言うと現時点では小隊長すらいない、この度の人事変更でフレーゲルに従順な者だけが小隊長、中隊長になったのだ。

「ジョルジョ、近衛になっていきなり実戦とはついてるな。」

「サイモン殿、相変わらず不謹慎ですね。そんなだから降格されるのですよ。」

「ふん、上品で戦ができるものか！いいか、皆聞けつ、非常事態だ！つまらん身分や位は関係ねえ。俺達でこの城を守るんだ！文句あるやつはいるか！」

大声で叫ぶサイモンを騎士と兵士が信頼の目で見つめる。どうもその演説によって指揮官として認められたようだ。

「まず騎士は城壁に登って等間隔で並べ、一般兵は民兵を集める、難しいことは考えなくていい。自分で気に入つた奴1人を連れて騎士の下に集まれ、一人の騎士に部下4人だ。いいな！」

いったん言葉を区切って理解しているか確認する。皆真剣な顔でサイモンの言うことを聞いている。

「一般兵はクロスボウを使え。民兵は装填するだけでいいぞ。それとやみくもに撃つな！目標は騎士が決めるっ！俺とクルツ、ハインツは騎士見習いを連れて城門を守る。俺が正門。クルツは東門、ハインツは西門だっ！ジヨルジヨ、お前は俺につけ。では行け！」

騎士と兵士が手にボウガンを持って各自城壁の上に並ぶ。サイモンが城門の上の一段と高い場所を陣取る。眼下ではたくさんの魔物が集結している。

「隊長、あつちの空がおかしいです！」

ジヨルジヨが指で空を差す、ドムドーラ方面から暗雲らしきもの

が近づいてくるのが見える。だんだん大きくなる暗雲は何かの集合体のようだ。

「くそっ！キメラだっ。」

まだ攻めてくる気配はない。キメラの集団が集結している魔物に合流する。正門の前に陣取った魔物の中から金色のロープを纏った魔物が前にでてきた。

「おっ、大将のお出ましか、なにか言うのか？」

サイモンの期待虚しく、無言のまま右手の杖が振られる。魔物の猛攻が始まった。リカントが城壁に向かって走り、がいこつがクロスボウで援護し、キメラが空中から炎を吐く。鎧の騎士が破城鎚を持って城門へと突撃してくる。

「迎撃は各自にに任せる。ジョルジョ、バリスタの準備はいいか！」

「はい、いつでも撃てます。」

「よし、破城鎚の先頭の奴を撃て、ある程度近づくまで撃つなよ。」

「了解！」

鎧の騎士が4体で破城鎚を持って駆けてくる。十分に速度がのった破城鎚が近づいてくる。バリスタから大きな矢が発射される、先頭の鎧の騎士が矢によって地面に縫い付けられ、他の鎧の騎士が破城鎚ごと転倒した。城壁の上から歓声上がる。

「油断するな、次を準備しろ。鎧の騎士にはクロスボウは使うなよ、

よほど当たり所がよくないと矢は通らん。」

転倒した鎧の騎士達が破城鎚を引きずって下がっていく。他の破城鎚が城門に迫り来るが、またバリスタによって迎撃される。それが繰り返され、城門の前は地面に縫いとめられた鎧でいっぱいになった。

「これでもう破城鎚は使いづらくなっただろう。しかしどういってもりで攻めてきた！どう思う、ジョルジョ。」

「魔物の考えることなど分かりませんよ。兵士の半数が外に出ている隙を狙ってきたのでしょうか？」

「そつかも知れんな、どうも気にいらねえ。」

「閲兵式の計画が漏れていたのでしょうか？」

「ありえないことではない、大々的に発表していたからな。しかし詳細な計画が分かるわけもない・・・もしや内通・・・駄目だ、味方を信じられなくなったら終わりだ！」

「そうですね。じきに外にでた部隊が戻って来ますよ。」

湧き上がった疑念を打ち消すように希望を口にする。戦はまだまだこれからだ。

- - - - -

魔物の攻撃が始まって1時間経った。いまだ魔物の攻撃は続いて

いる。城壁の上の兵士が矢で、炎で傷つき倒れる。クロスボウが過酷な使用に耐え切れずに壊れる。部隊によっては矢が尽き果て、登ってくる魔物に対して白兵戦をしている。サイモンもジョルジヨも城門の上から離れて、近くに来た魔物を切って落としている。

「このままじゃ持たんな。やつらの兵力は無限か？減った気がしないぞ。」

「わかりません、もうがいこつと鎧の騎士は見飽きました。」

「言うねえ、戦場で冗談が叩ければ一人前だ。」

その時、轟音が鳴り響いた。

「くそっ！城門をやられたようだ。ジョルジヨ、降りろぞ。他の者も順次降りろ！」

サイモンとジョルジヨが、城壁の内側の階段を使って下に降りる。騎士見習いを率い、城門の下を陣取って入ってくる魔物を迎撃、城門を境に激しい攻防が行なわれる。

「ここは俺に任せろ。見習いは城内に逃げても構わんぞ！」

不慣れな騎士見習い達が徐々に倒れだした。何時の間にか城門の中央はサイモンとジョルジヨだけになっている。手にしていた鉄の剣は折れ、敵が落とした錆びた剣を使っている。敵の攻勢が一時的に止んでいる間に上がった息を整える。

「はあ、はあ、ジョルジヨ、まだ生きてるか？」

「なっなんとかまだ・・・生きてます。」

「後何回耐えられる?」

「分かりません・・・また敵が来ました。」

ジョルジヨは襲ってきた剣を盾で受け止める。しかし脚に力が入らず後ろに倒れた。振り下ろされる剣。ジョルジヨは目を瞑り死を覚悟した。何時まで待っても剣撃は来ない。

サイモンは信じられないものを見た。ジョルジヨが殺られる、それがはつきり分かった。しかし助けに入ることにはできない。次の瞬間、鎧の騎士は剣を振り上げた格好のまま、上半身と下半身に両断された。

「すまない、遅くなった。」

そこに立っていたのは先代の近衛騎士隊長アイゼンマウアー、雷神の剣に水鏡の盾、魔法の鎧を身に纏った戦士。サイモンの膝から力が抜け座り込む。

「もう休んでいていいぞ、あとは任せろ。」

アイゼンマウアーが一直線に駆ける。すれ違った魔物が全て一撃で倒される。雷神の剣によって剣だろうが、鎧だろうが、盾だろうがお構いなく切り裂かれた。

アイゼンマウアーが城門から外に出る。そこには大魔道が率いる魔物たちがいる。たった一人出てきた戦士を大魔道が嘲る。

「まだ威勢のいい奴がいたのか。しかしたった一人で何ができる。もはや我等の勝利は揺るがぬ。一思いに殺してやるうか……」
「……ベギラマ！」

大魔道の杖から稲妻が放たれる。アイゼンマウアーは水鏡の盾で稲妻を受け止めた。

「それで終わりか、ではこちらの番だな。」

アイゼンマウアーは雷神の剣を目の前に垂直に立てる。

『業炎よ！わが敵を焼き滅ぼせ！』

発声と共に雷神の剣で前方に弧を張る。集結していた魔物達が業炎に包まれる。リカントが炭化し、がいこつと鎧の騎士が炎の中で崩れ去る。大魔道はなんとか空中に逃れている。

「貴様、何をした！？」

「教える義務はない、その身で味わうがいい。『業炎よ！わが敵を焼き滅ぼせ！』」

再び雷神の剣が振られ、金色のローブごと大魔道が一瞬で燃え尽きた。鎧の騎士とがいこつが動きを止め、崩れる。負けを悟った魔道士が消え、キメラが空へと逃げ去った。城壁の上から歓声があがる。兵士たちが勝鬨を上げる。

そんな時だった。城門前に光の球体がいきなり現れた。徐々に光が薄くなるとそこにはフレールゲルを中心とした数人の騎士が立っている。皆総じて恐怖に顔が歪んでいる。その一団は崩れている鎧の

騎士、がいこつらを目にした次の瞬間、飛ぶように城の中へと逃げ去った。

愛刀完成

8 / 30 勇者支援生活 122日目

明日にはラダトームに帰るつもりだ。そう告げるために王女様の部屋に訪れている。王女はここに連れてきてからずっとアレフと一緒にだ。ここ2、3日は一緒に温泉に行ったり、村の中を散歩をしたりとよい兆候がみえる。

「もう目覚める時間になりましたか？」

ふむ、俺の用件が分かった上での発言か、しかもなかなか洒落た言い回しだ。

「そうですね、まだ朝日が昇るには時間がありますから、もう少し夢を楽しんで下さい。では失礼いたします。」

返事も聞かずにそのまま部屋から出る。王女の隣にいたアレフがきょとんとしていた。

.....

「変なことを言いますね。この通り、もう日は出ていますよ。」

アレフが窓のカーテンを開けて部屋に朝日を入れる。

「フフフッ！アレフ様もあの方も面白い方ですね。」

不思議そうな顔をするアレフにローラ王女が微笑む。

「あの方が深刻な顔をして部屋に来ましたから、私はもう城に帰らなくてはいけませんかと聞いたのです。前にここは夢の中と言われましたからね。」

「なるほど……。」

「そしたら、あの返事です。つまり明日の朝に迎えに来ると……そう言う意味を込めて瞬時にあんな返事ができるなんて、本当にただの市井の臣ですの?」

「はあ、なんとも言えない返事ですね。到底僕にはできない芸当です。」

「フツッ！アレフ様はそのままです。そのまま真っ直ぐに生きてください。」

「はあ？同じ様なことを師匠にも言われたことがあります。」

「きつとアレフ様をよく理解されていますね。それで本当にただの市井の人なのですか?」

「よく知らないのです。まだ会ってから4ヶ月ぐらしか経っていませんから。でも感心するほどの探究心の持ち主です。古来の魔法、伝説の金属の加工、魔物の素材の利用など、僕達には思いもつかないことも目の前で見せてくれました。」

「そう、では今日はあなた達の冒険のお話をして下さい。まず、アレフ様があの方に会ったところからでもいいですわ。」

「分かりました。それではまず僕が勇者として登城した日からお話ししましょう。」

.....

.....

「なあ、本当に明日、城に帰るのか？もう少しここにいてもよからうに。」

「何時までもここでアレフを遊ばせておくわけにはいかないな。そろそろ次の展開があってもいいころだ。それにローラ王女も理解してくれたと思う。」

「そうか、姫さんがそれでいいなら構わん.....しかし、次の展開をはなんだ？」

「人質を奪還された悪人が何もしない訳がないだろう。」

「なるほど確かにそうだ。ならこっちから討ってではどうだ！」

「もちろんそのつもりだ。しかしまだ魔王の城に渡る方法を手に入っていない。そっちの探索が先だ。」

「了解。そういえばお前の武器が完成している頃じゃねえか、見に行こうぜ。」

「そうだな、楽しみだ。」

ガイラが先頭に立って鍛冶屋へと歩く。その足取りは軽い。すぐに鍛冶屋一文字の工房に辿り着いた。昨日まで常に鳴り響いていた耳障りな音はもう聞こえない。

「ガイラだ、入るぞ。」

返事も聞かずにガイラが遠慮なく扉を開けて入る。そこでは作業台に突っ伏して眠る一文字とリヒャルト、作業台の上に置かれた刀身があった。俺達の気配に気づいた二人が目を擦りながら起きる。

「おう、来たか。注文の品はできている。見てくれ。」

「そのようだ。出来を見せてもらおう。」

柄がついていない刀身を手に取り眺める。ミスリルの刃の部分は前とあまり変わらない。峰との境に波紋ができている。

「これは全てミスリルじゃなかったのか？刃と峰で素材が異なっているような気がする。」

「分かるか、この間打ち合わせた部分は銀との合金だ。ミスリルの量が足りなかったのとリヒャルトの研究の成果でそうさせてもらった。」

「リヒャルトの研究？」

「ああ、俺が試しにやってみた。前にできたミスリルの粉を使っていろんな合金を作ってみた。金、銀、銅、鉄、鉛だな。」

「続けてくれ。」

嬉しそうな顔でリヒャルトが棚から幾つかの金属片を取り出して並べる。5cm×2cm、厚さ1mmぐらいで、一つ一つに小さな紙がついていて何との合金が分かる様になっている。

「見たとおりだ。鉄との馴染みは良くない。鉛は融点の違いすぎて合金化できなかった。金、銀、銅は似たような感じになったが、やはり色と質から銀が一番適当と判断した。」

銀との金属片を手にとって両手で力を入れてみる。すこしなつて元通りに戻る。それを見たりヒャルトが金と銅との合金を手にとって説明を始めた。

「金との合金は見たように色がついた。それとこの三つの中でもっとも柔らかい。銅でも似たようなものだ。お前が持っている銀のやつは柔らかいが弾力性が強い。」

「それで昔お前が言ったことを思い出したんだ。この刀という奴は硬い刃の部分と弾力のある峰の部分がある。そうだったな。」

「ああそうだ。刃の部分は硬くもろいが、斬った時の衝撃を弾力のある峰の部分で受け止める、それが刀をいう武器だ。」

「それでこの武器の改修には、この銀との合金を使わせてもらったというわけだ。」

「ふむ、よく覚えていてくれたものだ。いや感謝する。」

刀身に鍔、はばきを通し、柄に差し込み、目釘を打ち込んで固定

する。完成したその刀は重さ、重心など全く違和感はない。

「試していいか？」

「もちろんだ。ついでだからその辺の薪でも斬ってくれればいいな。」

「了解だ。」

大きな薪を一つ手に取り、作業台の端に置く。一度鞘に刀を収めて居合いに構える。ガイラ、一文字、リヒャルトがじっと見物している。

「やつ！せいっ！」

パチン！鏝鳴りの音が響く。薪に変化はない。

「おい！斬れてねえぞ。」

「ちゃんと斬ったさ。ガイラ、手にしてみる。」

ガイラが立ったままの薪に手を出す。すると上半分がさらに左右に分かれて落ちた。

「……すごい斬れ味だな。下はどうなってる？」

「途中まで斬れているはずだ。力を込めれば割れるだろう。台まで斬るわけにはいかないから、わざとのこした。」

「ふん、なるほどねえ。」

ガイラが手にした薪に力を入れる。わずかに残っていた部分が裂け、二つになった。

「出来はどうだ？」

一文字とリヒャルトが腰に手を当てて嬉しそうに問いかける。

「満足だ。大変だっただろう、幾ら払えばいい？」

鍛冶屋二人が互いの顔を見る。リヒャルトが首を横にふり、納得したように一文字が頷く。

「いらん！」

「待てっ！それでは俺の気がすまない。幾らでもいいから払っぞ。」

「いらんと言ったらいらん。俺もこいつもお前がいなかったらその辺の凡庸な鍛冶屋に過ぎなかった。それが今では誰にでも自慢できる一品を作ることが出来た。それで十分だ。」

「しかし……。」

「だったらまたミスリルを取って来い。それでいい。どうせ俺達でなくては加工できないだろうがな！ガッハッハッハッハッ！」

二人が豪快に笑う。ガイラも隣で嬉しそうにしている。

「分かったよ。どうせもう一度あっちに行く用事がある。その時に必ず取ってくる。」

「そうだな、そうしよう………ちょっと待てっ！なんで用事があると分かるんだ？」

「……そんな気がするだけだ。特に意味はない。いや、念願の武器が手に入った。使うのが楽しみだっ！はっはっはははははは……」

しまった、ついいらぬことを口にしてしまった。とりあえず笑って誤魔化す。次はドムドーラへ行ってロトの鎧を回収して、さらに足を伸ばしてロトの印を取ってこよう。その途中で少しぐらい道草をくってもいい。そう思った。

国王の決断

8 / 3 1 ラダトーム城 謁見の大広間

ラルス16世が不機嫌を隠さず玉座に座っている。右側に立っている国務大臣の顔色もよろしくない。大臣の下に文官4人が並ぶ。そろいも揃って難しい顔をしている。反対側にはいつもいるはずの近衛騎士は一人も立っていない。そこにいる全員の視線が、片膝をついて控えているフレーゲル近衛騎士隊長以下数名の近衛騎士に向けられている。

この日の謁見は珍しく国王ラルス16世から発言が始まった。

「この度の不祥事、いったい誰がどう責任を取ると言うのだ。説明してもらいたいものだ。」

これまた珍しくラルス16世の言葉に棘がある。ラルス16世は温和で怒気を発することがないとされているのだ。

「不祥事とは如何なることでしょうか？」

フレーゲルが何も分からぬと言わんばかりに質問を返す。

「ふむ、そうかそうか、そなたには分からぬか。では余から説明してやろう、しかと聞け。無用の出兵の末、兵を損なったこと。またそれが故、この城を陥落の危機に陥ったこと。これを不祥事と言わずに何を不祥事と言うか。教えてもらいたいものだ。」

「失礼ながら申し上げます。無用の出兵と申されましたがそうでは

ありません。魔物の出沒の報がありました故、あえて出兵致しました。それによる兵の損失は職務によるもの、残念ですが私の責任ではありません。後ろの者に聞いて頂ければ分かります。」

「なるほど、後ろの者、それは誠か？」

「はっ！誠です。私がフレーゲル殿下に魔物の出現の報を致しました。」

「そうか、事の成否はともかく、それが誠なら仕方がなかるうな。」

大広間にほつとしたような霧困気が広がる。大臣の顔も少し穏やかになっている。

「その戦場からそなた等が逃亡したとの噂があるが、それはどうか？」

「自分は逃げたわけではありません。近衛騎士隊長の最も重要な職務、そう、国王陛下をお守りするためにあえてその場を部下に任せ、全力で城に駆け付けたのです。」

「なるほど物は言い様だの、確かにそなた等が戻った時に魔物が引いたのも報告を受けておる。つまりそれらによつて損失した生命も称えられる名誉の戦死とでも言えばよいのかの？」

「その通りでございます。このフレーゲル、近衛騎士隊長として彼等の名誉を称え、哀悼の意を述べるものであります。」

「このたわけがっ！！！！」

いきなりの怒声にそこにいた者達が竦み上がる。フレーゲルなどは腰を抜かして座り込んでいる。

「言わせておけば好き放題言いおつて、誰かつ！隣の部屋から参考人を入れよっ！」

慌てて末席にいた文官が近衛騎士に繋がる扉を開ける。そこには顔を真っ赤にしたサイモン、ステファン、マギーが立っている。サイモンとステファンに至つては全身に血が滲んだ包帯を巻いていて痛々しい。サイモンが足を引きずりながら、ステファンが壊れたゴレムの様に王の眼前に進み、マギーがそれに続く。

「何も知らぬとでも思ったか！余が許す、そなた等何があつたか、述べるがよい。」

フレーゲルを睨みつけているサイモン、ステファンに対してラルス16世が発言を許可する。

「近衛騎士のステファンと申します。直言を許可頂きありがとうございます。あの威力行軍は3日前より準備していたもので、私は魔物の出沒などの話は聞いておりません。もしそうなら必要な装備、物資を持っていったはずです。」

「確かにその方の言う通りだ。3日前から分かっている魔物出現の報など、都合がよいにも程がある。続けよ。」

「あの時、魔物に包囲されて部隊は二つに割れ、私が統率した部隊はなんとかして近衛騎士隊長に合流すべく戦いました。しかしもう少いで合流が叶うその時、近衛騎士隊長達が光と消えました。先ほどのような命令は一切きいておりません。」

ステファンがなんとか怒りを抑えながら続ける。フレーゲルはガタガタ震えながらその言葉を聞いている。後ろに並ぶ側近も何も言えずに下を向いている。ラルス16世が顎で話を続けるよう促す。

「急の逃亡に動揺する兵を小官が何とかまとめて戦いました。それでも倍以上の兵力に屈するかと思われた時、こちらの魔術士殿への協力を得て何とか撃退することができました。」

「なるほどそなた等の奮戦、余が称えよう。よくやってくれた。一つ聞いておきたい、ルビスの聖女とやらはその魔術士殿か？」

「そうでございます。死を覚悟して敵に向かおうとした時、励ましの言葉を頂きました。その後魔術士殿が光輝き、兵が光に包まれ癒されました。その姿に兵士達はルビスの聖女と称えております。」

ステファンが少し興奮して語る。後ろでマギーがばつの悪い顔をしている。

「そなたは先日遺失魔法を報告した魔術士であったな、覚えておるぞ。今回は如何なる術を使ったのか？」

「申し訳ありません。大魔道のベギラマを受けた後の記憶がございません。一時的な記憶喪失と思われませす。騎士殿が仰るような術には覚えがありません。」

マギーが頭を抑えながらそう伝える。

「そうか、残念だ。するとまさにルビス様の思し召し、天の恵みか。魔術士殿は気分がよろしくないようだな。よい、大儀であった、下

がって休むがいい。」

「申し訳ありません、それでは失礼させていただきます。」

深く追求されることがなくなったマギーが安堵の表情を浮かべて退室する。

「あとは城に残った者達だったな。ローゼンシュタインといったな、そなたがうまく兵をまとめあげたお陰でこの城の陥落は免れることができた。礼を言っぞ。」

「はっ！勿体無いお言葉にございます。」

「さて、先ほどの近衛騎士隊長の言からすると、この城の危機に備える為城に戻り、そのお陰で魔物が退散したとのことじゃ。どうだ、そなたはどう考える。」

サイモンが拳を強く握る。握り締めた拳がぶるぶる震えている。

「戻ったこの者等は何もしておりません。崩れ落ちた鎧の騎士やがいこつを見て震え上がって、城内に逃げ帰っただけです。この城を守ったのは死んだ騎士、兵士だ。クルツも死んだ、ハイントもっ！俺が城門の守備を任せさせたせいでっ！そして前近衛騎士隊長が助けに来てくれなければ俺も死んでいた。断じてこの者等に助けられた者などいない！！！」

冷静に話していたつもりだろうが、いつの間にか怒声となっていた。その発言も無礼なものが含まれていたが誰も咎める者はいない。ここが御前でなければ間違いなくサイモンはフレーゲルに襲い掛かっていただろう。

「そなたの気持ちはよく分かった、そなたの代わりに余が罰するでしょう。その前に此度の戦で亡くなった全ての兵に感謝の意を述べよう。それでよいか？」

「はっ！陛下の思し召しのままにっ！」

「では任せてもらおうか。さて何か申し開くことはあるか？」

「へっ陛下、その者等の言うことは虚言にございます。わっ私には覚えがありません・・・それに・・・下賤な者達の命など我等王族に較べれば虫けらも同然！その為に断罪されるなど聞いたこともありません。」

「貴様っ！言うに事欠いてっ！」

「いけませんっ！」

「離せっ！頼む、俺を止めるなっ！」

堪えきれずにサイモンが飛び掛ろうとするのを必死でステファンが抑える。ラルス16世が右手を挙げる。

「もうよかろう、余の顔も立ててくれ。そなたの怒りは余と共にある。」

サイモンの体から力が抜け、しゃがみ込む。サイモンとステファンの目から涙が流れている。

「この者の職務と王位継承権を取り上げる。大臣、それで構わぬか？」

「陛下、それはあまりに酷うございます。職務の停止と登城禁止が相当と愚考致します。」

「まさに愚考だのう、そなたも他人事ではないぞ。この者を推挙したのはそなただ。推挙して一週間と経たずにこの不始末、どう責任をとるつもりだ。」

國務大臣が黙り込んだ。並ぶ文官も言葉もない。

「どちらにせよ余の決定は変わらぬ。それから此度の戦で亡くなつた全ての者に十分な補償を払え、よいな！」

「御意。当然にございます。」

國務大臣が短く答える。ラルス16世が意地の悪い笑みを浮かべる。

「そなたも大変だのう。」

「はっ？何がでございますか？」

「補償に掛かる金は全てそなたが払え、国庫から払うことはまかりならん。」

「なっ、それは無体な。」

「そうか？ならばそなたの職を解き、全ての財産を没収してそれで払うとしよう。そうでなくては誰も納得すまい。」

「ぐっ！そっそれは困ります。」

「では従え、この件が終わるまで國務大臣としての任は無理そうだな。そのの、おお、そなた、名をなんと叫んだ。」

ラルス16世が國務大臣の横に並ぶ文官一人を指差す。

「ホフマンズヴァルダウと申します。財務を担当しております。」

「うむ、ホフマンズ・・・とやら、そなたが中心となって國務大臣の任を代行せよ。」

「私がですか？」

「そうだ。今の担当のままでも構わぬ、決済は余が行なうから、今までどおり職務に励め。」

「はっ！御意に従います。」

「それと近衛騎士はローゼンシュタイン、そなたに任せる。当面は隊長代理として励め。」

「はあ、私がですか？」

「なんじゃ不満か？」

「いえ、意外でしたので・・・では然るべき者に引き継ぐまで御意に従います。」

「それで構わぬ。では今日はここまでとしよう。思わぬ仕事が増えたからのう。」

ラルス16世が玉座から立ち上がって奥に下がろうとした。そこに慌てた兵士が飛び込んできた。

「申し上げます、急ぎの報告がございます……………」

凱旋

「御前である、控えよっ！」

先ほど國務大臣代理となったホフマンズヴァルダウが咎めた。

「これを報告して咎められるなら本望です。勇者アレフ殿がローラ王女と共に凱旋いたしました。！！！」

大広間に嬉しそうな兵士の声が響いた。

- - - - -

時は1時間ほど遡る。謁見の大広間から開放されたマギーに一人の文官が近づく。

「伝言を承っています。こちらです。」

手渡された手紙を開くと“K様帰還、至急戻られたし。影”と短い文章。マギーは駆け出した。咎める者もいたがマギーの耳には一切届いていない。息をきらせて自分の屋敷に駆け込む、玄関の扉を勢いよく開けて悲鳴を上げさせ、近くにいた使用人を捕まえる。

「はあ、はあ、はあ、ケルテンはどこっ？」

「お帰りなさいませ、あの方ならシャットテンブルグ殿が応接室で応対していますか……。」

最後まで聞かずにマギーは駆け出す。バンツ！応接室の扉が勢いよく開けられた。執事のシャッテンブルグが思わず顔をしかめる。ソファに座ってお茶を飲んでいるケルテンも呆気に取られている。マギーはその胸に飛び込んだ。

「ああ、もう、貴族の当主ともあるう者がはしたないな。執事殿も呆れているぞ。」

「うるさい、うるさい、うるさいっ！あなたがいなかったせいで大変だったのよ！」

「ああ、執事殿に聞いた。よくやってくれた。」

マギーがケルテンの胸に顔を押し当てたまま泣いている。軽く背中がポンポンと叩かれた。

「それでは失礼致します。」

シャッテンブルグが退室の挨拶をして部屋から出て行く。退室する際に勢いよく開けられて傷ついた壁を確認して天を仰いだ。

.....

泣き止んだマギーが謁見の内容も足して現状を説明する。

「.....という訳なの。この件でラダトーム王家の権威は失墜しているわ。」

「なるほど、ならちようどいい。予定通り、派手にアレフを凱旋さ

せるぞ。白馬の用意はできているか？」

「ええ、もちろんよ。」

マギーがハンドベルを手に取って鳴らす。すぐに執事が入ってくる。

「お呼びですか。」

「すまないがすぐに白馬を用意してくれ。できるだけ立派で二人乗りの鞍がいい、できるか？」

マギーを差し置いて俺が命令する。

「不可能ではありません。伝来の物があります。」

「ではよろしく頼む、この国と民の将来が掛かっている。」

「この国の将来ですか・・・それは大事ですな、では急いで用意致しますよう。」

軽口を叩いて執事が出て行った。

「どつするの？」

「マギー、白馬の準備ができたならマイラに跳んでくれ。後の段取りは全てアレフに伝えてある。俺は城門の転移基準石で待ってるから。」

「あなた何を考えているの？私にも秘密なのかしら。」

「いけ好かない大臣と殿下を地に落とし、陛下の権威を回復させる最高の一手だ！楽しみにしてくれ。」

しばらくして用意できた白馬を連れてマギーが光と消える。俺は城門へと急いだ。暗く沈んでいる城下街、城門や城壁には戦の跡が未だに残っている。

- - - - -

俺とマギーが並んで白馬のくつわを取って歩く。白馬の上でピカピカに磨いた魔法の鎧、真新しい真紅のマントを身に着けたアレフが胸を張る。その腕の中には白いドレスを着たローラ王女。さらにその後ろには立派な馬に乗ったガイラ、そこにはこれ見よがしにドラゴンの素材が積まれている。わざとゆっくり歩く、誰の目にも留まるように、全ての人に何が起きたが理解できるように。足を止めた者の目が信じられないものを見たように丸くなる。見たものを誰かに伝えようと走り出し、大声で触れ回る。

「ローラ姫だっ！ローラ姫が帰ってきたぞ、勇者アレフが凱旋したぞー！ー！ー！ー！ー！」

予想、予定通りの反応だ。触れを聞いた人々が集まってくる、我先にとメインストリートに駆け寄ってくる。

「ねえ、これも計算どおりなの？派手にも限度があるわよ！」

「まだまだ、まだまだ全然足りない。ショーはこれからだ。」

振り返るとアレフが馬上で照れくさそうにしている。ローラ王女が民衆に向かってにこやかに、優雅に手を振る。後ろのガイラが胸を張り、前だけを見て進んでいる。

「おい、見るよ。ガイラが照れているぞ。」

「そう？堂々として見えるけど・・・。」

「あれは虚勢だ、あいつはそんな珠じゃない。さあ進もう。」

俺とマギーで人だかりを掻き分けて進む。遅々として進まない。

「本当にローラ姫だ。生きていたんだ。」

「勇者アレフとローラ姫だ！」

「後ろの奴は誰だ？強そうだぞ。」

「あれも勇者だよ、ガイラっていったな。一緒に行動していたのか！」

「あの荷物はもしかしてドラゴンを倒した証か？すげえ、少し分けてもらえないかな？」

「うおー、ローラ王女、ばんざーい！」

「勇者アレフ、ばんざーい！！！」

先ほどまでの暗く沈んだ城下街が一変する。集まった人たちが手を振り、大衆の歓喜の音が響き渡る。もう掻き分けて進むこともできな

「ちょっとっ、これどうするのよっ！」

「大丈夫だ、しばらくしたら城から向かえが来るって！」

隣にいるマギーと大声で会話する。果たして、人だかりが強引に

割られて騎乗した騎士が姿を現す。ローラ王女の姿を認めて下馬する。なぜか隊長の印をつけたサイモンだ。

「ローラ王女様、ご無事で何よりでした。陛下がお待ちです。」

サイモンが右手を挙げて振り下ろすと、ついて来ていた騎士達を人掻き分け等間隔に並ぶ。

「ローラ王女様と勇者アレフ殿に、捧げー剣っ！」

サイモンの号令に騎士全員が剣を抜き、正面に立てる。軽く口付けをして右下に払った。そのままの姿勢で待機、再び馬上の人となったサイモンを先頭に俺達が進む。興奮がクライマックスに達したまま、収まることはない。

王と王女

王座でラルス16世が今か今かとその時を待っている。兵士の報告を聞いた瞬間飛び出そうとしたが、その場にいた者達に押し留められたのだ。その顔にはここしばらく誰も見たことのない喜色が見られる。それと対比するかの様に隣の国務大臣の顔色は真っ青を越え、死相が出ている。

「馬鹿な・・・なぜ生きている？あの者は確かに殺したと言った。こんな馬鹿な・・・馬鹿な・・・。」

その言葉は城の外の歓声に消されて誰の耳にも入らない。やがて大臣がふらふらと出て行く。しかし誰もそのことには気がつかなかった。先ほど出て行ったサイモンとステファン、数人の騎士が駆け戻ってくる。近衛騎士隊長が立つべきところにサイモンが立ち、反対側に新任の国務大臣代理ホフマンズヴァルダウが立つ。

やがて大広間の大扉が開き、ローラ王女とエスコートした勇者アレフが入ってきた。すぐ後ろに勇者ガイラ、右後ろに特務隊士の俺、左後ろに筆頭魔術士マギーが並ぶ。

「報告します！勇者アレフ、王女ローラ様を助け出し、只今戻りました。」

ラルス16世が目を大きく見開き、ローラ王女を上から下まで眺める。ローラ王女の右手を握っていたアレフの右手が開く。名残惜しそうにローラ王女の左手がはなれ、次の瞬間ローラは父の胸へと飛び込んだ。

「お父様、只今・戻・り・ま・し・た。」

涙で声もでない。なんとか最後まで言い終わるとラルス16世の胸に顔を押し付けた。ラルス16世が背中に腕をまわして抱きしめる。

「もはや二度と会えぬと思っていた。よくぞ戻って来てくれた。よかった、本当によかった。」

しばらくその格好のまま時が流れる。そこにいる者達の目にも涙が見える。一人俺は冷静その光景を眺める。大臣がいない、それに近衛騎士隊長になったフレーゲルもない、流石に失墜したか。

ラルス16世の手がローラ王女の髪を撫で、両手で顔を起こして見つめる。

「おお、皆の者すまなかつた。あまりの嬉しさに我を忘れていた。誰かつ！ローラに椅子を！」

文官によって豪華な椅子が玉座の左隣に用意される。涙を拭いたローラ王女がその椅子に座って笑顔でその場を見据える。全ての者に視線を送り、最後にアレフの位置で止まる。御前の中心に畏まっているのがアレフだからおかしくはない。

「勇者アレフ、勇者ガイラ、並びに後ろの二人よ、此度の王女の奪還、このラルス16世、一人の親として感謝いたす。誠にありがとう。」

ラルス16世が玉座で深々と頭を下げた。まあ俺とマギーは臣下だから後ろの二人で十分だ。

「勿体無きお言葉、恐縮にございます。」

アレフが形式どおりの返事を返し、ガイラは無言で頭を下げている。

「何か褒美をしてやりたいのだが、何か希望はあるか？」

「いえ、まだ我々の旅は終わっていません。褒美は平和が訪れてからで結構です。」

「そうか、なんとも無欲なことじゃ。しかもまだ先を見据えているとは殊勝なことじゃ、皆もそうは思わぬか？」

「誠に、臣もそう思います。」

國務大臣の位置に立つ代理の男がそう言った。官吏らしい冷たい感じがする。

「しかし、一つ疑問があります。聞いてもよろしいでしょうか？」

「ふむ、なんじゃ。手短に申せ。」

思わぬことにラルス16世が苛立ったように質問を許可した。

「どこかに捕らわれていたにしては、王女様の顔色が良過ぎではないですか？まさか魔物に丁重に扱われていたとは思えませんか？」

「気づいたか。大臣がいたら間違いなく突っ込まれるとは思っていたが、この代理の男も油断ならないな。」

「それは……」

アレフが言葉に詰まり、ローラ王女の方を見る。

「それは私がお願いしました。助けて頂いた時はガリガリに痩せかけて、自分で歩くこともできませんでした。そんな状態でお父様に会うことなんてできませんわ。」

「そっそうですか。それにしても連絡ぐらいしても良さそうですが、特務隊士殿もおられたことですしその辺りどうでしょうか？」

「他ならぬ王女様のお頼みでしたので、申し訳ありません。」

「もうその辺でよからう、こうしてローラも戻ってきたことだ。そうだ、しばらくは國務大臣が別の職務でまともに動けないことだ、そなたら特務隊士は余が預からう。」

「そうですか、陛下がそれでよければ臣は構いません。」

それで大人しく大臣代理が引つ込んだ。助かった、ローラ王女が空気を読める人でよかった。その場にほっとした雰囲気 flowed。

「それでは今夜は晚餐を用意させよう。大臣代理よ、着任して早々の大仕事じゃ頼めるか？」

「はっ、お任せあれ。歴史に残る晚餐となりましょう。ではこれまでに致しましょうか？」

「そうだな。皆の者、大儀であった。下がってよいぞ……あ

あそつだ、特務隊士ケルテンよ、そなたは残れ！」

そう来たか、まあ仕方ない。色々と後ろめたいことがあるからな。俺以外の全ての者が下がる。マギーが心配そうな顔で見ている。俺の事は大丈夫だ、そう意味を込めて頷く。

- - - - -

「いろいろに苦労をかけたようだな、礼を言つぞ。」

「いえ、勇者の支援が職務ですので礼には及びません。」

「やはりそなたはそう言うしかないか・・・しかし実にいいタイミングで帰って来てくれたものだ。これもそなたの差し金か？」

「いいえ、本日戻ることは一週間前からの決定事項です。まさかあんな大事になっていたとは驚きです。」

「偶然とは恐ろしいものだな。これで弟もしばらくは表には出て来れまい。昔から権力を求めるところがあつたからな。」

「その様なことをおっしゃられても困ります。私は一人の臣にすぎませんから・・・。」

「そうだったな。では直属となつて最初の任務をやるう。アイゼンマウアーを探せ、あの者はこの城を守つてまた姿を消したそうだ。その礼をせねばなるまい。この件に関してはそなたにも責任がないとは思つてはおらぬな？」

「……………御意。」

「では下がってよいぞ。」

俺はその場から逃げる。やはり怖い人物だ、大臣なんか比べ物にならない。

「陛下、お呼びですか？」

「シュミット、戻ったか。」

「はっ！あの者はあれでよかったのですか？」

「構わぬ、前にも言ったが害意は感じぬ。どこを見ているかはわからぬがな。しかしそなたに連絡をもらわねば全てが終わっていたかもしれぬ。」

「確かに、大臣に文官、武官共に牛耳られていたかもしれません。」

「その通りじゃ、娘亡き世ならそれでも構わぬとも思っていたがな。」

「短気を起こされては私が困ります。しかしながらあの見識に、あの力量、恐ろしいものがあります。それでいて表舞台には出てこない。むしろ裏にいることを望んでいるような気がします。」

「そなたに似ておるな。」

「残念ながら私にはそこまでの器量はありません。それに格式や形式に嫌気がさして拗ね者となっておりましたから。陛下に拾ってもらわねばもうこの世にはいなくなつたでしょう。」

「余は金貨を拾つただけだ。もつともその金貨は、自分が金貨とは知らなかつたようだがな。」

「そう言われると恥ずかしくなります。」

「では恥ずかしくないよう務めよ。しばらくはこのままあの者とうまくやっていけばよい。」

「御意。」

男の気配が消える。残されたラルス16世が呟く。

「今宵は久し振りに旨い酒が飲めそうだ。世の中捨てたものではないな。」

魔法談義？

9 / 1 勇者支援生活 124日目

昨日の夜の晩餐会は城下街を巻き込んだ盛大なものとなった。ラルス16世とローラ王女、そして勇者アレフは、城下から見える城2階のバルコニーですっと立っていたらしい。大広間が立食パーティーの場所となり、一般の民に城の中庭が開放された。大広間と中庭には様々な料理と酒が、これでもかと言わんばかりに用意された。さらに城下街では自主的に屋台が立ち、いつの間にかお祭り騒ぎとなっていた。

実の所、俺はさつさとマギーの屋敷に引っ込んだので詳しいことは知らない。マギーの悲しみの涙が止まらなかったのを慰めるのに大変だったのだ。そのマギーは今俺の隣で穏やかな顔で眠っている。

「マギー、朝だぞ。」

頬に軽く手を当てて声をかける。マギーが薄く目を開ける。

「んっ、もう朝なの？」

「ああ、久し振りのラダトームの朝だ。」

「・・・昨日はごめんなさい。あなたの顔を見たらほっとして涙が止まらなくなっちゃった。」

「いや、大体何を思って泣いていたのか分かってる。俺も同じ道を通っているから・・・。」

「うん、この前の戦場で始めて理解した。ケルテン、あなたが戦場で何を考えていたか・・・自分以外の誰かが傷つき、倒れていく。自分にはそれを何とかする力があるが、自分の都合でそれを使用できない。己の無力さが身に染みたわ。」

「ああ、その通りだ。遺失魔法を公表しない、そう決めたのは俺自身だ。だけど死んでいく者には俺の都合なんて関係ない。責任なり怨念なりが肩にずっしりと重く押し掛かる、そんな気がした。」

二人の間に沈黙が続く。

「もう一人で背負わなくてもいいわ。それは私達二人で背負えばいいのよ。」

「そうだな、あれ！？いつの間にか俺が慰められているみたいだ。さすがルビスの聖女様だ。」

「それは止めて！何も覚えていないと誤魔化したのだから、あれはルビス様の奇跡、それでいいのっ！」

「了解、でも俺にだけは教えてくれるだろう。何をしたんだ？」

「敵に囲まれてもうこれ以上兵の損失には耐えられない、そう判断してスクルトを使ったの。その場にいたステファンという近衛騎士がうまく兵を密集させていたので効果的だったわ。」

「たしかにスクルトなら使用が分かりづらいし効果的だ。」

「それでそのステファンが、あの赤い兜飾りの悪魔の騎士に苦戦し

ていたのでピオリムとバイキルトで支援したわ。」

「よくばれなかったな。なんとなく分かるものだぞ。」

「簡単な助言と励ましと一緒に背中を押してやったわ。思い込みや自信で強くなることもあるかなと思ってね。それで後は密集している味方にベホマラー、これで形勢逆転。残る大魔道を挑発してベギラマを誘発、これをマホカンタで跳ね返して私のベギラマと合わせて倒した。その後調子にのって勝利宣言しちゃった……。その後は覚えていない。」

マギーが舌を出して笑顔を見せた。

「ベホマラーの癒しの光とマホカンタの光壁、さらに勝利宣言かなるほどルビスの奇跡にしか見えないだろうな。」

「その後で気絶したから、全て覚えていないことにしたの。それでいいわよね？」

「それで構わない。もう一つ聞きたいのだが、もしかして極大呪文も使えるのか？さっきの話だとそれぐらいできるのにやらなかった、そう言っているような気がするのだけど。」

「発動させたことはないけど、もう詠唱はできる。ただ威力や効果範囲が分からないから怖くて使えない。」

「まじか、流石代々魔術士の家系だ。どこまで理解できた？」

「メラゾーマ、ベギラゴン、イオナズンは多分使える。バギ系は相性が悪いみたい。あとヒャド系は範囲のせいでよく分からない。同

じ系統にしては効果範囲が違うのよね、どういことかしら?」

「ああ、ヒヤドは単体への投射、ヒヤダルコは放射、ヒヤダインは空間、最後にマヒヤドが放射、他の魔法みたいに統一性はないな。」

「ちょっと待って、メモしておくから。もう一回言って!」

「順に投射、放射、空間、放射だ。あとバギ系の相性が悪いのは、バギが本来僧侶魔法だからかもしれない。」

マギーがベッドの横の机から紙とペンを取り出して、メモしている。書き終えて満足気な表情を浮かべる。

「全く想像もつかないのがドラゴラムとパルプンテとメガンテ、これは何?」

「んー、それは知らなくていい。」

マギーが何か期待するかのように俺を見つめている。

「ふう、教えないと納得しないな。無理に使われると困るから念の為に教えておく。ドラゴラムはその名の通りドラゴンに変身する。パルプンテは異世界からの召喚、ただし何が起るかは分からない。メガンテは自爆呪文だから絶対使うな。」

「自爆や召喚魔法はともかくドラゴンに変身するのは使えない?」

「残念ながら、理知的な行動が取れなくなる。効果が切れるまで野獣と変わらない。」

「じゃあ、駄目ね、残念。」

「まあその辺にしておこう。あんまりあっさりとはかれるとショックだ。さあいつもの鍛錬だ、訓練所にも行こう。」

ベッドから飛び降りて刀を腰に佩く。すれ違ふこの屋敷の使用人の目が一樣として優しい。

.....

久し振りに来た訓練所は閑散としている。一緒に来たマギーの目に悲しみが浮かぶ。

「そうか、近衛も半減したと言ってたな。」

「半減どころじゃないぜ。」

俺の独り言に返事が返ってきた。サイモンを先頭に、ジョルジヨともう一人見たことのある騎士が歩いてきた。皆一様に血の滲んだ包帯が巻かれている。

「これはヴィッセンブルン殿、先は大変お世話になりました。」

「マギーでいいわ、それにお世話になったのはこちらの方ですね。気を失った私を連れ帰っていただきましたから。」

「ではそういうことにおきましよう、マギー殿。今はほんの少しでもわだかまりがあつていいときではありませんから。」

「ケルテン、彼が例の部隊を纏めたステファン殿よ。」

多分俺が怪訝そうな顔をしていたのだろう。マギーがその騎士を紹介した。

「特務隊士どの、ご無沙汰しています。前の五番勝負依頼ですね。」

「ああ、あの時の・・・失礼ながらあの子爵の連れにはいい腕をしていると思ってました。」

「いえ、こちらこそ己の未熟を悟りました。日々精進しています。」

ステファンという騎士が少し照れくさそうにしている。

「自己紹介は終わったか？じゃあ本題だ、お前なら来ていると思ってここに来た。」

サイモンが強引に割り込んできた。

「ああ、昨日も変だと思ったが、サイモン、何でお前が騎士隊長の腕章をしている？」

「此度の防衛戦に功があったということで、陛下より代理を仰せつかったのですよ。ステファン殿が副長代理、僕は隊長代理の補佐です。」

俺の質問にジョルジョが嬉しそうに説明してくれた。隣のサイモンは少しも嬉しそうにしていない。

「それはおめでとうとでも言えばいいのかな？」

「何がめでたいものか！さつきも言ったが64人いた近衛がいまや23人、再建が思いやられるぜ。」

「ふうん、それで俺に何の用だ？就任披露にきたわけじゃないだろう？？」

「ああ、昨日晚餐の席で相談したんだが、俺達の武器で困っている。この先、正規装備の鉄の剣では刃が立たない。なんとかしないとけないという結論になった。」

「確かにそうだ、せめて鋼の剣が欲しいな。リムルダールとメルキドで売ってるぞ。」

「そんなことは分かっている。そこまでどうやって行けと……。」

そりやそうだ。ルーラで一飛びとはいかないか。

「そこでお前の事を思い出した。その刀とか竜鱗の鎧はどこで作ったのかと。いい伝手があるのдарう！俺とお前の仲じゃねえか、教えろよ。」

「うんまあいいけど、先方が迷惑しないかな？」

「迷惑？それはどういう意味だ？」

「よくも悪くも職人氣質でな、数打ちの武器は作らないんだ。全部オーダ・メイドで、体格、手の形、腕まで全て加味してからしか作ってくれない。ちなみにマイラの村な、すぐに行って帰ってこれる距離じゃない。」

「なんでもいいから、まず紹介してくれ。」

「ケルテン、いいじゃない。あの人達なら話ぐらいいは聞いてくれるわよ。」

隣で聞いていたマギーが助け舟を出す。

「まあそつだな、紹介だけならしてやってもいいか。じゃあ後で近衛の執務室に行くよ。」

「すまん、恩に着る。じゃあまだ仕事があるから行く。」

そのまま立ち去るサイモン。横にいたステファンとジョルジョが丁寧にお辞儀をしてから、その後を追った。

誤算？

なんかサイモン達のせいでやる気が削がれた。それでも最低限はやっておこう、居合いからの右斬り上げ、右袈裟懸け、納刀。一連の流れを10回繰り返す。んっ？少し軽くなった様な感じがする。とりあえず100回まで繰り返す。

「ケルテン、それ何か変わった？」

「分かるのか？」

「うん、光の加減とか納める時の音とかが違う。」

「そうか、それはすごいな。」

抜刀してマギーの前に刀身を突き出す。マギーが覗き込む様にまじまじと見る。

「前より綺麗になってるわ。それ以外はよく分からないわ。」

「それだけかい！・・・ここ見てみ、色が違うだろう。この峰の部分がミスリルと銀の合金になった。前の鋼と鉄の複合材よりミスリルとの馴染みがいいようだ。」

「それだけ？他に何かないの？火がでるとか、雷がでるとか・・・。」

「なんだかなあ・・・金属を合せてよりいい物ができただけでは駄目かい。大体火だったらこうすれば・・・・・・ギラッ！」

右手を刀を持ったまま前に突き出す。ギラの火球が出る・・・はずだった。

「あれっ！発動しない・・・ギラッ！・・・ギラッ！・・・ギラッ！・・・ギラッ！」

なぜか火球はでなかった。

「おかしいな、最近使ってなかったからか？」

「ケルテン、もう一回やって！マナの動きと魔法力を見るから。」

「OK、きちんと口述してみる。『俺はMPを2消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たる力よ、火となりて我が敵を撃てっ』ギラッ！・・・ってやっぱり出ないぞ。どういうことだ？」

魔法が使えなくなったら、一流の戦士にしなければならないぞ。嫌な汗が背中を流れる。

「マナの変換と魔法力はちゃんと動いているわ、発動するはずよ。」

「そうか、マギーがそう言うなら間違いないな。・・・」
「熱っ！」

刀を持ったままだったを思い出して納刀する。鞘を持った左手に軽く刃が当たった瞬間、焼けるような痛みを感じて刀を取り落とした。落とした刀を拾おうと手を伸ばすと熱を感じた。

「マギー、刀身が熱くなってる。」

マギーも刀身に手をかざす。

「本当だ、温かい。触ると火傷するかしら？」

「ああ、ここ。当たった所が火傷している。間違いなく火傷するかから触るなよ。」

「どういふことかしら？ギラの熱かな？」

「そうかもしれない。右手に持ったままギラを使ったからな。じゃあ冷えたら別の魔法を使ってみよう。」

地面に置かれた刀を二人でしゃがんで見ている。傍から見たら明らかにおかしい光景だろう。刀身が冷めたのを触って確認する。まだ少し暖かいが触って火傷するほどでもない。刀を右手に持ち直す。

「雷の魔法を使ったら、雷が宿るのかな。触って確かめるのは嫌だな。」

「じゃあ冷気の魔法でどう？下級魔法なら触っても大丈夫でしょう？」

「それだ、そうしてみる。『俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たるマナよ、氷の矢となりて我が敵を貫けっ、ヒヤド！』……これでどうだ！』

恐る恐る刀身に手を近づける……冷たい。マギーの前に刀身を突き出す。マギーも同じく手を近づける。

「冷たいわ。やっぱり魔法効果が刀身に宿るみたいね。」

「どうもそうみたいだ、なんでこんな事に……。」

「もしかしてミスリルと銀の合金じゃない？それ以外に理由はないわ！」

マギーが興奮して断言した。たしかにそれ以外は考えられない。

「まあ理由はともかくとして、いかに使うかの方が問題だな。また考えておくとしよう。」

「これ結構な発見じゃない。公表する？」

「……まあ止めとこう。鍛冶屋の二人だけには教えてやってもいいかな。」

「少し悩んだわね。即答で駄目と言うかと思っただのに。」

「うーん、まあ万人に有益でもないから、公表しても問題ないかなと思っただけどやっぱり駄目だ。俺専用の武器だからな、誰かに特性を知られたくない。」

「確かにそうね。ねえ、金や銅の合金も何かあるのかしら、楽しみになってきたわ。」

「ならサイモン達を紹介する時にでも確かめてみよう。朝食を食べたらすぐにも近衛に行くことにしよう。」

なんか俺も楽しみになってきた。残りの鍛錬を速やかに済ませて、朝食を食べにマギーの屋敷に戻った。

- - - - -

近衛騎士隊の執務室に来ている。山と積まれた書類にサイモンが埋もれている。隣にジオルジョが立っていてサイモンが何か言う度に突っ込んでいる。机を挟んで反対側のステファンも書類一枚一枚に目を通して、サイモンに渡している。

「おい、サイモン。頑張っているか？」

「んあつ！なんだケルテンか。また文官が書類を持ってきたかと思っただぞ。なんの用だ？これ以上仕事を増やすのは勘弁してくれ！」

「じゃあ帰ってもいいぞ。朝頼まれた武器の話なんだがまあ忙しいなら、また今度という事で……。」

わざとらしく踵を返す。一步踏み出すと後ろから慌てた声が聞こえた。

「待てっ！意地の悪いことをするなっ！」

「だったら初めからそう言えよ。」

「すまん、書類仕事ばかりでいらいらしてたんだ。よくアイゼンマウアー隊長はあんな涼しい顔をしていられたものだ。それだけでも感心するぞ。」

「なんだ知らなかったのか、お前の地獄の行軍の後にも書類と格闘していたぞ。」

サイモンの顔に？マークが浮かぶ。

「ガライへの行軍訓練をこっそり隊長がつけていたんだ。終わった後に貯まった書類がこんな風に山になっていたよ。」

「まじか、やっぱり隊長はあの人しか考えられない。」

「だからと言って、今その仕事をしない理由にはならないな。で、何をしてるんだ？」

「近衛騎士の補充です。まず一般の兵士から人材を調べています。それで兵士から引き抜いた分は民兵から補充させるつもりです。現時点では書類の上だけです。本人の了承を得ないといけません。」

「ふうん、大変だな。一ついい方法を教えてやろうか？」

「なんだ、もったいぶるなよ。」

「ローラ女王様の名前を借りて募集しろ。きっとわんさかやってくるぞ。」

「できるかつ！そんなこと。不敬にも限度があるぞっ！」

サイモンがサイモンらしくないことで怒鳴り声をあげる。

「勝手にやったら不敬だな。だけど本人の了承を得たら不敬じゃない」

くなる。」

「俺から聞けるわけないだろう。何を期待してるんだ。」

「相変わらず馬鹿だな・・・今やお前は近衛騎士隊長代理だろう、陛下にお頼みすればいいだろう。」

「・・・お前代わってくれ。お前の方が適任だ。」

「同じことだ。俺は陛下付きの特務隊士、職務の変更は陛下にお願いしなくてはならない。諦めて自分でやれよ。じゃあお前は忙しそうだから、ステファン隊士を借りていくぞ。マイラの鍛冶屋に紹介してくる。」

サイモンが机に突っ伏す、隣のジョルジョが呆れた顔をしている。

「いいなあ、ステファンは。書類との戦いに俺を残して楽しい所に行くのか・・・いいなあ・・・いいなあ・・・」

突っ伏したままサイモンがぶつぶつ言っている。

「ステファン、ほっといて行くぞ。俺も時間は惜しい。」

「よろしいのですか?」

「いいも悪いもない、こつちも優先事項だ。何人か文官を補佐に入れるよう頼んでおく。とりあえずマイラへ行く、1時間で準備をしてくれ。」

「分かりました。では!」

ステファンが急いで城の一階へと消える。行き掛けの駄賃だ、俺は大臣の執務室へと足を伸ばした。

何度目かのマイラ行

国務大臣執務室、俺の目の前でホフマンズ何とかが渋い顔をしている。

「君もかね？」

「はあ、すみません。」

「ここに来てまず“私の名前を知っているか？”と聞かれて知らないと答えた結果がこれである。」

「陛下に始まって武官のほとんど、そして君までが私の名前を正確に知らないと言う。困ったものだ。」

「いっそのこと改姓してしまえばよろしいのではないですか？陛下によってつけられた姓ならご先祖様も文句は言わないでしょう。」

「はあ、気軽に言ってくれるな。」

「すみません、平民の出ですので明確な姓を持っておりませんから。」

「そうか、それは悪いことを言ってしまったか・・・まあ前向きに検討しよう。それで何用かな？陛下の直属になったことでここには用はないはずだが・・・。」

「それですが近衛騎士の武具に関して助言を頼まれました、その件で副長をしばらくお借りします。近衛騎士隊長代理に負担が大きく

掛かりますので、文官をお貸し頂けないかとお願いにきました。」

それを聞いた大臣代理が手元の書類の幾つかに目を通した。

「現時点でもそのようだな。近衛からの書類が少ないのと、あっても必要事項が十分に記入されていないものがほとんどだ。よろしい、こちらから出向させることにしよう。」

「ありがとうございます。これで安心してマイラに行けます。」

「ふむ、礼を言われるまでもない。これでは二度手間になるだけだ。」

大臣代理が一枚の書類を左手で持って、右手で軽く叩いた。

「では失礼いたします。」

ホフマンズ大臣代理、思ったよりできる人物だ。

.....

厩舎でステファン副隊長代理が待っていた。

「失礼な質問をするが、どこに行く気だ？」

「えっ！マイラの村と聞いてますが……。」

思わず聞いてしまったが、ステファンが用意している荷物は明らかに少ない。

「もしかして行軍訓練をするつもりなのか？俺としてはもう一頭馬を用意して、毛布なり簡易テントなりを積んで快適な旅にしたいな。」

「あつ！すみません。いつもの感覚で用意してしまいました。」

ステファンが申し訳なさそうにしている。

「はあ・・・今のうちに言っておくが、もう只の一近衛騎士ではないと理解しておいた方がいいぞ。たとえ代理がとれても小隊長か中隊長の位になるはずだから、部下の命を預かる覚悟が必要じゃないか。」

「すみません、その通りです、勉強になります。」

「そう言ってくれると助かる。まあ俺の立場からすると出すぎた意見だからね。」

「いえ、隊長代理から噂は聞いています、実に広きに渡った知識の持ち主だと。改めて実感しました。」

「褒めても何も出ないよ。只の知識マニアで、知らないことがあるのが気に入らないだけだ。とまあ、雑談はここまでだ。さっき言った様にもう一頭の馬と簡易テント、毛布二枚、食料3日分を追加で用意してくれ。」

「はっ！分かりました。」

ステファンが俺に敬礼して走ろうとしたのを慌てて止める。

「ちょっと待った！なんでも自分でやらなくていい。近くにいる騎士見習いなどに頼むんだ。周りを見るよ、仮にも副隊長ともいうお方に雑用をさせて、ばつの悪そうな顔をしているぞ。」

「仰るとおりです。どうもいつもの癖で……。」

ステファンが少し笑ってから近くの騎士見習いに声をかけて戻ってきた。

「自分でやらないのは疲れることですね。」

「まあそうだろうね、慣れない者にとってはそんなものだろう。もつとも俺は全て自分でやるけどね。」

「ずるいですね。私にだけ苦労させて悠々自適、悠々自得ですか？」

「まあね、立場が違う。俺は上官として陛下が一人、部下もいない。俺の手の届く範囲に手を伸ばすだけだ。」

「確かにその通りです。私も命を預かる部下の為に精進します。」

なんとなく照れくさいのでそっぽを向いて考え事をすることにした。しばらくして騎士見習いが準備し終えたことを報告しにきた。ステファンがそれっぽく報告を受けている。

「準備が整いました、では出発しましょう。」

ステファンが騎乗の人となって先に進む。荷馬を挟んで俺がついていく。

- - - - -

日が落ちる頃になって二人で簡易テントを張る。実に手際がいい。

「手馴れているね。」

「ええ、子爵様はマントだけで寝ることはありませんでしたから。」

なんとなく寂しそうにステファンが答える。

「そうか、悪いことを聞いたか。俺としてもあの時にもっとやり込めておけばよかった、そう思わんでもない。」

「それまでの積み重ねが問題でした。いや、もう過去の話は止めましょう。」

それっきりステファンが黙り込んでしまった。あの事件は幾人かの心に消えない傷を残してしまった。それが理解できて声をかけることができない。持ってきた干し肉を焚き火で軽く炙って黙々と食べる。食べ終わってやることがないので寝ることにした。

「ステファン、先に寝てもいいか？」

「構いませんよ。」

手短な返事が返ってきた。テントに潜り込んで毛布に包まる。起きたらこの刀の研究をしよう、朝から気になって仕方が無かったのだ。

深夜にステファンを起こされた。この辺も手馴れているようで、遠慮なく速やかにテントにて就寝している。しばらくして寝入ったのを確認してから待望の実験をすることにした。

すでにギラとヒヤドは実験した。ヒートブレード、フリーズブレードとも言えはいいのだろうか・・・効果時間はどうだろう、朝は数分で元に戻ったな。ならばまず効果時間を調べよう。

刀を右手に持ってメラを唱える。当然刀身が熱くなる、このまま放っておくと2、3分で元に戻った。じゃあ何かを斬ってみよう。近くにあった薪に斬りつける、斬り口から火が上がる。

「うわっ！びっくりした。そうか、当たったところで魔法が発動するのか。」

ならば更にヒヤドで実験だ。ヒヤドを使用する、表面が白く凍りついた刀で薪を斬り付ける。予想通り斬り口が凍りついた。

「なるほど、なるほど、一回の魔法をストックできるようなものか。次はバギかな？」

バギをストックさせたら刀身の周りになんとなく気流が見える。バギクロスならばつきり見えるかもしれないな。風がおさまる前に薪に斬りつける。当たった瞬間に薪を中心にバギの気流が開放された。考えてみれば当たり前だが当然のごとく、俺もバギの影響下にあった。

「痛たたたっ！馬鹿か、俺はっ！」

一人で自分に文句を言う。こうなるとギラヤイオは使えないな、
壮絶な自爆になりそうだ。傷を治す為にホイミを使おうとしてふと
思いついた。ホイミもストックできるのだろうか？とりあえずホイ
ミを唱えてみる、

「見た目は変化がないな。とりあえず左手でも傷つけてみるか。」

刀の中ほどを左手の甲に軽く当てる。薄く皮膚が切れた瞬間、そ
の傷が消えた。

「予想通りとはいえ、全く意味がないな。」

一人ぶつぶつと言いながら実験を繰り返す。自己強化系、状態異
常系も同じくストックできた。自己強化系の魔法は意味がないが、
斬撃といっしょにルカニをぶち込むことはできそうだ。今までと違
った戦術が生まれそうだ。

思いつく限りの戦術を思考していた。ふと我に返ると日が昇ろう
としている、こんなに思考に耽ったのは久し振りだ。

「ケルテン殿、夜中に何か言っているようでしたが何かありました
か？」

起きてきたステファンが開口一番、質問をしてきた。

「あつ、えつと聞こえていた？　うるさくしてすまない。」

まずい、聞かれていたとしたら困ったことになる。

「いえ、何を言ってるかまでは分かりませんが、こんなことは慣れてますから大丈夫です。テントの横で酒盛りしている人もいましたから。」

「そうか、それはよかった。ちょっと型稽古をしていたんだ。以後気をつける。」

「気にしないで下さい。では朝食を取ったら出発しましょうか。ちよつと水を汲んできます。」

ステファンが竹筒を持って水場へと歩いていった。ほつとして胸を撫で下ろす。この旅の間は思考に耽るのは自重しよう。

周到な農

「おい、ケルテン！こいつは誰だ？」

ステファンを目の前にした一文字の最初の言葉がこれである。そう言われたステファンが目を丸くしている。これが貴族出身の近衛騎士だったらどうなっていただろうか、少なくともこれからの交渉は成功しないだろう。

「ラダトーム城近衛騎士副隊長ステファン殿だ。聞いて驚け、平民出身だ。」

「平民で副隊長か、腕はいいのだろうな。」

「なかなかのものだ。先の戦でも戦功を上げている。」

「そうか、俺は鍛冶屋一文字、それでこいつがリヒャルト。二人の工房によっこそ！」

そう言ってステファンに右手をさし出す。

「近衛騎士副隊長代理のステファンと申します。」

一文字の出した右手をステファンが握る。握られた手を一文字がしっかりと握って離さない。込められた力にステファンが困惑して俺の方を見る。

「おい、もうその辺にしておけ。ステファンが困ってるぞ。」

俺の一言で一文字がようやくステファンの手を離した。握られていた手をステファンが左手でさする。

「なかなかいい手だ。いいだろう話を聞こう。」

「俺はまだ何も言っていないんだがな。」

「お前がここに来る時は面倒な仕事の話がある時だけだ。おかげさまで一人前の鍛冶屋を名乗れるようになった。」

なんとも複雑な表情で嫌味を言われた。

「単刀直入に話をしよう。近衛騎士の武器を作ってくれ。」

「なんだって！俺に量産しろとそう言ってるのか？それも飾りのついた近衛の剣をっ！」

鍛冶屋一文字が怒鳴る。俺は知っている、この男は誰が使うかも分からない武器は絶対作らない。それがこの男のプライドだと言うことも。

「別にそうは言ってない。」

「じゃあどういう意味だ!？」

「そこから先は私が話そう。」

ステファンが俺と一文字の間に割って入ってきた。

「私が今使っているのはこの鉄の剣だ、近衛騎士の支給品ですらな

い。陛下から頂いた剣はこの前の戦いで折れてしまった。鎧の騎士、それより強い悪魔の騎士には鉄の剣では不足だと分かった。それでケルテン殿に頼んでここに連れてきてもらった。」

「ふん！それで俺にどうして欲しいのだ。」

「まず私の剣を作って欲しい、鉄の鎧を両断して刃こぼれ一つしない剣だ。それが気に入ったら隊長代理を始めとする近衛騎士の剣を作ってもらいたい。不要な飾りはいらぬ。」

「ずいぶんと都合のいい話ばかりだな。俺の都合はお構いなしか！」

「失礼は重々承知している。それでも他に頼む所がない。すまぬ、この通りだ。私の頼み、聞いてはもらえぬだろうか？」

ステファンが頭を深々と下げる。それに一文字が動揺している。

「おい！一文字、そこまでしておけ。近衛の副隊長に頭を下げさせるなんて偉くなったものだ。お前がやらないなら、俺がやるぞ。」

返事に困っている一文字を差し置いて、リヒャルトが救いの手を出した。

「ここで俺が断ったら、俺だけ悪者みたいじゃねえか。」

「みたいじゃないな、悪者そのものだ。それとも何だ、自信がないか？」

ここで俺が止めを刺すことにした。こいつのプライドに問うことにした。

「分かったよ、やればいいんだろっ！やればっ！」

「そうですか。近衛騎士団全員を代表してお礼を言わせてもらおう、ありがとう。」

ステファンが再び深々と礼をする。その後ろでニヤリと笑った俺と一文字の目が合った。俺が勝ちを一文字が負けを悟った。

「それで実際作る剣の話だが、鋼の剣、それも鑄造でなく鍛造、何度も折り返した特製の鋼の剣がいい。」

「相変わらず簡単に言ってくれ。それがどれだけ大変か分かっているだろう。」

「ああ、当然だ。それを解読したのは俺だからな。」

「それが例の秘伝の技術か？」

俺と一文字の会話にリヒャルトが割って入ってきた。

「なんだ、まだ教えてなかったのか。ちょうどいいから伝授してやれよ。」

「うぎぎぎぎっ！ちょうど伝授しようと思っていたところだ。」

声にならない声で一文字が答えた。

「ステファン、それでいいな！」

「はあ、技術的なことは分かりませんが、ケルテン殿がそう言われるならそれで構いません。」

「よし、決まりだ。じゃあ、ここでは時間が足りないからラダトームに工房を用意させよう。」

「ちょっと待て、俺はここでしか仕事をしないぞ。」

「そうか、残念だ。この前の合金に特殊な特性があることが分かったんだが、教えてやる時間がない。俺はすぐにでも城に帰らなくてはならないんだ。」

「特殊だと、何だそれはっ！教えてくれ！」

— 文字が掴みかからんばかりに迫ってくる。

「悪いな、陛下の命令ですぐに戻らなくてはいけないんだ。また今度ということだ……。ああ、ステファン、そういうことでしたらこここの宿屋に逗留するといい。」

「ああ、この性悪めっ！分かった、ラダトームに行けばいいんだろっ！」

「そうか、それなら教えてやる時間も作れそうだな。」

「その代わり、俺の言う物は全部用意してもらおう。」

「当然です。近衛の予算で用意させてもらいます。」

「だ、そうだ。じゃあさっさと荷物をまとめてくれ。ここから持っていく物を荷馬車に積むんだ。俺がルーラで送る。」

「ああ、分かったよ！その代わりお前らも手伝え。」

腹立だしげに一文字が怒鳴った。指示に従って荷物を運ぶ。リヒヤルトが俺に近づいて話しかけてきた。

「酷い交渉だな、罨としか思えんぞ。あいつがかわいそうになった。」

「さて、なんのことが分からないな。」

「そういうことにしておこうか。さあ、さっさと全部積むぞ。あまり遅くなるとあいつの機嫌が悪くなる。」

4人で荷馬車に大量の荷物を運ぶ。それらは厳選された鉄鉱石、乾留した石炭、ダイヤモンドの粉末、特製の砥石など秘伝の技術の塊そのものだった。

.....

「それである者とは連絡が取れぬのかっ！」

「駄目です、旦那様。何度やっても何の返事也没有せん。」

「おのれっ！どいつもこいつも人を虚仮にしおって！なんととしてで

も呼び出せ！」

「旦那様、そうは言われましても魔物との連絡など他に方法を知りません。」

「たわけがっ！その様なこと自分で考えよ。ええい、もうよい、さがれっ！」

「申し訳ありません。それでは失礼致します。」

執事らしき男がいそいそと下がった。

「もしや全て私を失脚させる為の罠なのか。ローラが生きていたのも、あの威力行軍を見逃す約束も、何もかもが……ありえる、そうでなくては説明がつかん。そうだ、そうに違いない。おのれっ！この私がこのままですますと思うなっ！」

暗く締め切った豪華な部屋に暗い怨念にも似た声が響いた。

鍛冶ギルド

9 / 7 鍛冶屋支援生活 3日目

ラダトームに帰ってきてとりあえずの工房を借り、さらに近衛騎士団と兵士を使って住む人のいなくなった屋敷を大工房に改築させている。貴族出身の近衛騎士は土木工事や建設作業を嫌がってはいたが、隊長であるサイモンが楽しそうに作業しているので、不承不承作業をしている。そんな折に事件は起きた。

「我々はラダトーム鍛冶屋ギルドの者だ。ここの責任者を出してもらいたい。」そう抗議が来てますがお願いできませんか？」

屋敷の塀の外で十数人の人が集まり、入り口で押し問答をしている。対応に困った兵士が俺の所に来た。サイモンの方を見ると一瞬目があっただけでそっぽを向かれた。

「それで彼らの要求は何だ？」

「なんでもこのラダトームで鍛冶屋をするには大臣の許可がいるそうで、それに反することに抗議すると言ってます。」

「ふん。でもおかしいな、まだここが鍛冶工房になるとは発表してないぞ。」

「詳しいことは分かりません。我々では対応できませんので、お願いします。」

「了解だ、すぐに行こう。」

兵士に連れられて屋敷の入り口まで行く。さてこれは誰の差し金だろうか？どうも悪い予感しかしない。

「お待たせしました。ここの責任者のケルテンと言います。何の御用でしょうか？」

十数人の男達が入り口に大挙してきている。シュプレヒコールでもしそうな勢いだ。とりあえず丁寧に温厚そうにきりだしてみる。

「おい、若すぎじゃねえか！お前じゃ話にならんつ。もっと上の人間を連れて来い！」

「そうだ、そうだっ！お前みたいな下っ端に話すことはねえ！」

「そうですか、話すことがないなら帰ります。」

くるつと踵を返して屋敷へと歩き出す。

「ちよっ、ちよっと待て！すぐに帰る奴がどこにおるかっ！」

背中に浴びせられる怒号にわざとらしくゆっくり振り向く。

「それでも忙しいのですよ、時間が惜しいので戻っていいですかね？」

怒りで押し切ろうとしていたが、調子が狂ったらしい。一団に明らかな戸惑いが見られる。

「じゃあ、あんたで構わない。話を聞いてくれ。」

「初めからそうしてくれよ、じゃあここでは通行人に邪魔だからこ
ちで話そう。」

そう言って敷地内の材木やレンガが積んである場所まで連れて行
く。適当な材木の上に座る。

「立ったままではなんですから、どうぞその辺に座って下さい。」

代表者らしき男が俺の正面に座る。その他の男達が、立ったまま
俺を見下ろしている。

「それで話とはなんでしようか？」

「そうだ、その話だ。あんたらはここに鍛冶工房を作ろうとしてい
るな、ここラダトームでは大臣の許可無く鍛冶の営業はできないは
ずだ。それに近衛騎士の剣を打たせようとしていると聞いている。
これは、我々ラダトーム鍛冶屋ギルドに対する侮辱だ。」

「なるほど、あなた方の既得権益を損ねるので止めさせたいわけ
ですか。」

「そうはつきり言うもんじゃねえ、筋を通せと言ってるんだっ！」

「筋ねえ、では完成の折には工房の者を連れて挨拶に出向きましたよ
う・・・ああ、そうだ、なぜここが鍛冶工房になると分かりました
か。」

俺の質問に男達が動揺した。表沙汰にしたくないことがあるよう
だ。

「それは城の役人から聞いた。ここで何かをやっているので確かめたんだ。」

これは明らかに嘘だ。男の目が泳ぎ、まわりの連中の視線が俺から逸れた。

「そうですね、では大臣の許可とはなんでしたか？ 国務大臣がまさか商売の認可を与えているとは聞いていません。」

「お前には関係ないだろう、知らねえなら大臣に聞いて来いよ、聞きに行けるものならな。」

「それは不可能ですねえ、国務大臣は今職務停止中です。まあ私は国務大臣付き特務隊士でしたので調べることはできます。ではこちらで調査してからまたお話をしましょう。」

それだけ言つて席を立つ。俺が言った国務大臣付き特務隊士の身分に動揺しているその連中を無視して屋敷内へと戻った。外ではさつきの連中が兵士によって敷地内から追い出されているのが見えた。

「………というわけだ。サイモン、悪いが俺は一度城に戻つて事実を確認してくる。後は図面通り作業を続けてくれ。」

「なあ、あれでよかったのか？ なんかやばくないか？」

「だから調べに行つて来る。どうもきな臭い。」

「俺にはなんだかよく分からん。やっぱり城下から武器を集めるべきだったのかもしれない。」

「無駄だね。城下で売っている武器は銅の剣まで、それと城の兵士に収めている鉄の剣だ。平和が長すぎた、まだ地方の方がまともな武器を売ってるぜ。まあ言っても仕方のないことだ。さっきの連中が来ても無視しろよ。じゃあな。」

まだ何か言いたげなサイモンを置いて城へと向かった。

俺の目の前でホフマンズ國務大臣代理が難しい顔で俺の報告を聞いている。ちなみにどうでもいいことだが、正式に改姓したらしい。

「それで何が言いたいのかね？」

「聞きたいことは一つです、國務大臣の権限で城下の商売の認可を行なっていましたか？」

「下々の商売にわざわざ國務大臣の認可など与えては仕事にならないよ。」

「ではもしかして、近衛騎士の剣の納入業者の選定に口を出していたのでは？・・・大臣代理は長らく財務担当でしたね、何か記憶にありませんか？例えば・・・大臣の意向で納入業者を変更したとか。」

目に見えてホフマンズの顔色が変わった。突然立ち上がって幾つかの書類をあちこちから取り出して執務机の上に並べる。

「見てくれ、この納入業者の経緯を。ここからここまでが現國務大

臣の就任期間の書類、こつちが前大臣の物だ。」

「なるほど、昔はずっと同じ業者が納入していたのですね。それに納入本数も多くないようです。それがオットー国務大臣になってからは、頻繁な納入ところこる変わる業者、何かあると考える方が自然ですね。」

「オットー殿下が大臣になられてからは、“近衛騎士には格が必要だ。”そう仰られて頻繁な近衛の剣の意匠の変更をされていた。まさかその様なからくりがあったとはな。」

「もう一つ、今回、近衛の剣の変更を誰かに伝えましたか？」

「それはまあごく一部の文官には伝えた。予算を捻出する為に必要だからな。」

「その中に大臣に伝えた者がいます、さらにそこからギルドに連絡がいった。我々の邪魔をして復権を早めようと画策しているようですね。」

「まさかそのようなことが・・・しかしそれは君の推論にすぎん、証拠がない。」

「では今回の文官を試してみるといいでしょう。わざと採用しない事案を幾つかやらせるのです。そのリアクションで誰が大臣の手下か分かります。」

「しかし、そのようなこと・・・。」

「ホフマンズ国務大臣代理、もうあなたはここから降りることは

できません。すでに大臣の報復リストに名前が載っています。覚悟を決めなさい、大臣が復職したらあなたの命はありませんよ。」

「……………分かった。」

「一つ提案があります。足りない人材を補う為にドムドーラの流民を使いましょう。鍛冶の大工房の職人、兵士の補充、壊れた城壁の補修などいくらでも人材は必要です。一時的に城から給金を出すことで流民対策にもなります、どうでしょうか？」

「なるほど名案だ、だが抵抗勢力も少なくないだろうな。しかしそれで大臣の力を削ぐことができるかもしれぬ。よし引き続き、鍛冶工房の件は任せる、思うように人を雇ってもかまわぬ。」

「一任されましょう。では後のことはお任せします。」

……………

急いで工事現場に戻るとギルドの連中の姿は見えない。立っていた兵士に聞く。

「あの連中はどうした？姿が見えないようだが。」

「ほとんどは帰りましたよ。あそこで見張っているやつがいますけどね。」

「どこだ？…ああ、いたいた。ちょっと呼んでくる。」

兵士が指差す方向を見ると若い職人と目が合った。目が合って驚

愕している。俺は右手を挙げて近寄る。

「代表の方を呼んでください。お話があります。」

男は首を折れんばかりに縦に振ると、飛ぶように駆け出した。待つこと十分、代表者と思われる職人を3名連れて戻ってきた。敷地内のさきほどの場所で対面することにする。緊張した面持ちで俺を見ている。

「城に戻って調べました。公式には大臣の認可は要らないようですので、この計画は継続させて頂きます。」

「しっしかし、それでは我々が困る。」

「いえいえ、ここで作るのは鋼の剣ですので、あなた方が困ることはありません。それに一般兵士の鉄の剣も不足しています、そちらは正式にあなた達に発注することになるでしょう。」

「それでは我々の面目が立たん。俺達に腕無しと言われているようなものではないか！」

「そのとおりですよ。先の防衛戦で何本もの鉄の剣が折れました。いまは戦時です、数打ちの武器では魔物に通用しません。私に腹を立てている暇があったら、折れない鉄の剣を作ってください。このままでは次の魔物の襲来でこの城が落ちてしまいます。そうになったら面目など気にすることもできなくなりますよ。」

「ぐっ、無礼な！ならあんたが連れてきた職人ならできると言うのか！」

顔を真っ赤にした男が俺に向かって大きな声を上げる。周りにいた人が何事かと見ている。

「仕方ありませんね。ではその職人の作った一品を見せましょう。」

俺は腰に佩いていた刀を抜いて、刀身を見せる。一番年長の男がまじまじと刀身を眺め、口をぱくぱくしている。

「これはもしかして……。」

「多分あなたの想像通りですよ、私の注文で作ってもらいました。」

「しかしどうやってこれをつ！」

「流石にそれは秘密です。彼の家の特伝ですから、私の一存では教えることはできません。」

「くそっ！帰るぞ。」

「親方っ！どうしたんだよ、このまま引き下がっていいのか！」

「あんな物を見せられたら引き下がるしかねえ！それすら分からないお前らは論外だっ！」

立ち去った親方を慌てて他の者達が追いかける。これでこの件は終わっただろうが、きつと大臣は別の手段で邪魔をしてくるだろう。想像できるだけに腹立だしい。

大工房

9 / 10 鍛冶屋支援生活 6日目

騎士と兵士達、それとドムドーラ流民から雇った人達で大工房が完成した。基本的に屋敷外側を残して内部に幾つかの溶練炉、石炭を乾留する為の専用炉がある。一文字とリヒャルトがそのあまりの大きさに驚愕している。

「俺ら二人には広すぎるぜ。一体どういうつもりだ？」

「そう言うと思ったよ。これは必要なことなんだ。あんた達には悪いが幾人かの職人を雇うつもりだ。悠長にしている時間はないのである。」

「俺達が黙って聞くと思っているのか？俺はともかく一文字にとっては秘伝なんだぜ。」

「聞いてくれると確信している。それに秘伝の一部でしかない部分をいつまでも秘匿しておこうなんて、虫が良すぎるぞ。」

「ふざけるな！一部とはいえ秘伝は秘伝だつ。一文字、お前もなんとか言えよっ！」

それまで黙って聞いていた一文字が重い口を開いた。

「リヒャルト、いいんだ。俺達だけで秘匿していても意味がない。確かにそいつの言う通りだ。秘匿している技術の上に胡坐をかいていては更なる高みを目指せない。この技術を伝えたら俺達は次を目

指そう、生憎こいつは次目指す技術の手掛かりを知っている。」

「その通りだ、マイラでも言っただろう。リヒヤルト、あんたの研究の賜物だ。」

「俺の研究の賜物？なんのことだ？」

周りに誰もいないことを確認してから、俺の刀を抜く。

「偶然だがこいつの魔法特性が分かった。ちよつと見てる……
・ギラ！」

「なんだよ、何も起きないじゃないか。」

黙って近くの薪に斬りつける。切り口から炎が上がった。

「おい、どういうことだ。説明しろ！」

「今見たとおり、使った魔法をストックする効果がある。ホイミなら切った先から傷が治る。ベギラマだと雷を纏い、切った相手に直接ベギラマを流す。どんな魔法でもをストックできる。ただしストックしておける時間は5分ぐらいだ。どうだ、面白い話だろう？」

「おい、リヒヤルト。例の金属板を持って来い！」

一文字がそう言うとりヒヤルトが別の部屋に駆け出した。すぐに戻ってきて作業台の上に並べる。

「もしかしたら、こいつらにもまだ解らぬ特性があるかもしれない、
そういうことだな？」

「そつだ、夢のある話じゃないか。伝説の武具に勝るとも劣らぬ武具ができるかもしれないな。」

二人の顔が何かを期待するかのようになり明るくなった。

「と、まあこれはしばらく置いていて、鋼の剣を作ってやってくれ。その工程で幾人かの職人を育てる。そうしたら好きな研究をしたらいい。いくらでも手を貸してやる。」

「分かった、リヒャルトも構わないな。」

「当然だ、やる気がでてきた。」

「それはよかった。じゃあ明日にでも職人を連れてくる、皆ドムドーラの鍛冶職人だ。うまく使ってくれ。」

「明日じゃ駄目だ、今日の昼にでも連れてこい！時間が惜しい。」

「了解だ、連絡しておく。ああそつだ、ステファンの剣はできたのか？」

「ここにできている。あとは微調整だけだ。」

「じゃあ、外に待機させている奴らを呼んでくる。」

.....

先ほどの部屋にサイモンとステファン、ジヨルジヨを入れる。サ

イモンはしばらく外で待たせておいたので不機嫌だ。

「ステファン、これがあんたの剣だ。」

一文字が手にした鋼の剣をステファンに渡す。ステファンが柄を握り、スラリと剣を抜く。眼前に立てた鋼の剣を見つめる。

「これはすごい、詳しいことは分からないが素晴らしい出来です。」

ステファンが持っている鋼の剣は、市販の鋼の剣とは明らかに違った。鏡の様に光る刃の部分と鈍く光る中央の部分によって刃紋ができている。さらに中央に掘られた溝によって、市販の鋼の剣とは全く違う雰囲気を見せている。

「ずいぶんと張り切って作ったな。これは俺の使っていた最初の刀の技法だな?」

「そうだ、刃の部分は硬い鋼、中心は衝撃を受け止める鉄で出来ている。両刃だからずいぶんと苦労したぞ。」

一文字がとても嬉しそうに語る。隣のリヒャルトが腰に手を当て胸を張っている。

「試していいですか?」

「当然だ。この薪を切ってくれ。」

リヒャルトが作業台の上に太さ10cmぐらいの薪を立てた。ステファンを残して皆後ろに下がった。ステファンが剣を構えて斜めに一闪、薪が綺麗に斜めに切れる。ステファンが鋼の剣を再び見つ

めている。

「ステファン、どうした？何か気になることでもあるのか？」

黙って剣を見つめているステファンに声をかける。

「いえ、それほど手ごたえがないのに簡単に切れました。それに前の鉄の剣より軽い感じがしました。」

「当然だ、実際に軽いんだ。剣身と柄は別に作ってある。ちょっと貸してみる。」

リヒャルトがステファンから剣を受け取ると、柄の真ん中辺りに金属の棒を当てるとハンマーで軽く叩いた。それをもう一度繰り返しすと柄と剣身が分離した。サイモンたちが驚いている。

「俺の刀と同じ作りか。面倒くさいことをしたな。」

「こつちの剣身は叩いて作るだろう、どうしても柄の方とうまく繋がらなかった。それで別々に作ることにした。それとやはり騎士の剣だ、何らかの意匠がしたいなら柄の方をいじることができる。」

「なるほどね。それでステファン、気に入ったか？」

「もちろんです。これならあの悪魔の騎士に遅れをとることはないでしょう。」

「それはよかった、ではステファンには手入れの仕方を教えよう。サイモンとジョルジョは次に作る時自分用の剣の寸法を決める。好みの長さ、重さ、いくらでも注文をつけるといい。」

俺がステファンの目の前で鋼の剣を組み立て、ステファンに渡した。

「これを目釘というのだが、これを差し込むことで剣身を固定している。何回か分解と組み立てをやって慣れておくといい。」

「こんなので固定できるんですね。すぐに折れそうなものですが？」

「そう見えるだろうね。竹で出来てるが意外に丈夫なんだ。」

「金属では駄目なんですか？」

ステファンが抜いた目釘を手にして言う。

「ああ、鉄で作ると剣身の穴が駄目になる。それに無理な力がかかった時に、目釘が折れて剣身の破損を抑えることができる。」

「なるほど、理に適っていますね。」

俺は腰の刀を軽く叩く。

「本来はこいつの技術なんだ。いいところは採用する、あの二人らしいな。」

「そうですね。とてもいい剣を頂きました。これで十分な働きができます。礼を言わせて下さい、ありがとうございました。」

ステファンが深々と頭を下げた。毎度のことながら礼儀正しい男だ。

「礼なんかいらぬ。安心して城から離れる為に必要なだけだ。アレフの再訓練が終わったら行かないといけぬ場所があるからね。」

「では近衛騎士団の再編を急がないといけませんね。」

ステファンが冗談めかして言った。その向こうでサイモンとジョルジョが二人の鍛冶屋と色々と話している。作業机の上には詳細が記入された紙が置かれている。これができる前には旅にでなくてはいけないだろう。

ロトの鎚の手がかり

9 / 14

「ぐっぐつと燃える音、無数の鎚を打つ音が響く。ここ大工房では常に十数人の職人が働くことになった。

「「「学者さん、おはようございます。」」」

数日前に連れてきたガイラが俺のことを学者と呼んでいたことと、俺が幾つかの特殊工具を発案したことで、大工房でもそう呼ばれるようになってしまった。軽く手を挙げ挨拶を返して一文字達のいる事務所へと足を運ぶ。

「おはよう、調子はどうだ？」

「おう、学者か。まあまあだ、ドムドローの若いやつらも途中までは任せられるようになった。まだ仕上げだけは俺カリヒャルトでないと駄目だな。」

「ふむ、ならそろそろここを任せても良さそうだな。そろそろ旅に出ようと思っている。」

「そうか、何時までもお前に頼ってはおれんからな。リヒャルト、そっちは何か困ったことがあるか？」

「ああ、誰か書類の仕事をするやつが欲しい。お前さんがいないとやる奴がいない。」

「それならドムドーラの職人に誰か紹介してもらうことにしよう。他にはないか？」

「うーん、鉄鉱石と石炭の納品が滞っている。量が足りなかったり質が悪かったりだ。」

「それは困ったな。とりあえず城の備蓄から出すように頼んでおく。あまり酷いようなら何か対策を考えなくてはいけないな。」

只の需要過多による供給不良ならマイラから運ばせる必要がでてくる。まあこれなら新規の兵士の訓練を兼ねて取り行かせればいい。問題は大臣による妨害工作か・・・ありえるな。

「すみません、回転砥石の予備ありませんか？」

事務所に若い職人が入ってきた。

「もう駄目になったか、まだ乾いていないぞ。取り合えずその作業は止めておけ。」

「そうすか、じゃあそうします。」

「ちょっと待って！」

「えっ、学者さん、俺に何か用ですか？」

俺が呼び止めると意外そうな顔で聞き返した。

「事務仕事ができる人を知らないかな。誰か紹介してくれると助かるんだが・・・」

「うん、皆に聞いてみます。そういうことは元の親方が詳しくかつたんですけどね。」

「元の親方？」

「ええ、ドムドーラから逃げる時に一人残った親方です。結構面倒見のいい人でした。」

「そうか、悪いことを聞いたね。」

「すみません、暗い話をしちゃって・・・そうだ、その親方なんですけどね、俺達に逃げる様に命令したくせに、自分は店に鎧を取りに戻ると言い出したんです。変な人ですよ、命と鎧、どっちが大事か考えなくても分かりますよ。」

「俺にはその親方の気持ちがかかるなような気がするな。」

「鎧っ？どんな鎧知ってるか？」

「ええ、一度だけ見たことがあります。青い鎧でした。」

「もしかして鳥の翼みたいな意匠がなかったか？」

俺の質問にその若い職人が考え込む。

「そう言われると鳥の翼みたいでしたね、こっ胸の所に赤い宝石と金で意匠化されてました。」

「その店の場所を教えてください！」

思わずその職人の両肩を掴んでいた。俺の見幕にその職人が動揺している。

「ちよつと痛いですよ。場所なら教えますから離して下さい。」

そう言われて掴んでいた両手を離れた。思わず興奮してしまったようだ。

「店は町の南東にありました、大きな木が目印です。簡単でよければ地図を書きますよ。」

「ああ、頼む。」

机の上から一枚の紙を渡す。その職人が机に向かって地図を書き始めた。時折空中にペンを走らせてから紙に書いている。

「まあこんな所ですかね、うる覚えなんですいません。ちよつと分かりにくいですよね。」

「いやこれで十分だ、助かったよ。これ少ないけど取っておいてくれ。」

懐から10Gを取り出して手に押し付ける。

「こんなのもらえません。俺達、親方と学者さんには感謝しているんですよ、こんなんで恩が返せるとは思ってません。じゃあ、さっきの事務仕事が出来る人を探してきます。失礼しました。」

そう言って頑なに固辞して、事務所から出て行った。俺の手のひ

らに10Gが残った。

「えらい興奮していたが心当たりがあるのか？」

「ああ、青い鎧で赤い宝玉と金で翼の意匠。ロトの鎧、正式名称光の鎧だ。」

「それは本当か！」

一文字とリヒャルトが興奮して大声を上げた。

「どうかな、至急確かめに行く。もし困ったことがあったらサイモン達に言え。」

まだ何か聞きたげな二人を残して大工房を飛び出した。

アレフ、ガイラを呼び出してマギーの屋敷に来ている。応接室のテーブルを4人で囲む。俺の横にマギー、正面にアレフ、その横にガイラだ。全員の目がさっきの地図を見ている。

「ロトの鎧の手がかりだ。青い鎧に鳥の意匠、古い文献の通りだ。」

「学者、本気か？ドムドローは敵の本拠地みたいなものだ。前に入るのを止めたのはお前だぜ。」

「あの時とは違う。マギーをあわせて4人、それに装備も変わった。」

「

「なら問題ない、俺は賛成だ。元々行きたかつたんだ。」

「僕も賛成です。夢でみたロトの勇者様が着ていた鎧と同じです。いつまでも魔物の元にあるのは本意ではないでしょう。」

「私も賛成よ、ロトの鎧を見れるなんて光栄だわ。」

誰も反対する者はいない。それどころか嬉々に満ちている。

「じゃあ決まりだな。アレフ、鈍った体はもう大丈夫か？」

「ここ二週間、ガイラにみっちりしごかれました。もう大丈夫です。」

「おう、アレフの腕に関しては俺が太鼓判を押してやる。だがいいのか？姫さんのいるこの城下から離れて寂しくないのか？」

その言葉にアレフの顔が真っ赤になった。

「それも大丈夫です。」

「えらい自信だな。ふっきれたのか？」

「いえ、そうじゃありません。いつでもローラ様とはお話できますから……。」

マギー、ガイラの表情に疑問が浮かぶ。

「どっぴいっぴいとっ。」

とっさのマギーの質問にアレフが困惑している。

「……しまった、ローラ様との秘密だったのに。誰にも言わないで下さいね。実はこれなんです。」

アレフが懐から一つのペンダントを取り出して机の上に置いた。

「これを使うとローラ様とお話ができます。1日に1時間程度です
ので相談して決めた時間だけ使用することにしました。」

そうか、これが王女の愛。遠距離通信のできるマジックアイテムか。

「なら肉体的にも精神的にも問題はないな。よし明日出発することにしよう、それでいいな！」

三人が黙ったまま頷く。それを確認して俺も頷く。アレフとガイ
ラが席を立てて出て行った。幾つか懸案事項がある。今日中に仕事
の引継ぎをしなくてはいけない。

専用の武器

9 / 16 勇者支援生活 139日目

明日にはドムドローに着く、今夜が最後の夜営である。ここ二日はアレフ、ガイラ、俺の順番で不寝番をしている。詳しくは知らないがマギーによるとアレフは9時ぐらいから1時間ほど、例のアイテムを使ってローラ王女と話しているらしい。邪魔をする気はないのでさっさと眠りについた。

夜中3時ぐらいだろうか、ガイラに起こされて見張りを代わる。まだこの辺ではそれほど強い魔物はないはずなので考え事をしている。しばらくするとマギーが起きてきた。

「おはよう、ケルテン。アレフ、昨日もずっとしゃべっていたよ、仲のいい事ね。」

「ふ〜ん、まあ自由にやらせておくさ。それにしても便利なアイテムだな、おれも一つ欲しいところだ。」

「それどういう意味？もしかしてローラ姫様とお話したいのかしら。」

マギーが膨れている。言葉に少し棘がある。

「そうじゃない。色々と画策しているやつがいるからな、城に残った誰かと情報のやり取りができれば便利かと思っただけだ。」

「ああ、そういうこと。でも心配性ね、何もかも把握してないと気

がすまないのね。」

「自分でもそう思っているよ。状況を考えずに内側から足を引つ張っている奴がいる。一応頼りになる人物に対処を頼んではあるが、うまくいっているかは知りたい。」

「人に任せたのなら、もう成り行きに任せなさい。」

「そうだな……。」

「一つ聞きたいことがあるんだけど？」

黙り込んだ俺にマギーが明るく質問する。

「なんだい、また質問かい。なにか面白いことでも見つけたのか。」

「ええ、アレフの持つてるあのアイテムどうなっているのかしら？ 便利な割には一日に一時間しか使えないって言ってたじゃない。」

「そう言えばそうだな……ピンク色の宝石がついていただろう、多分あれがマナを万能たる力に変換する役割を果しているんだ。一日かけてチャージできるのが一時間分なんだろうな。」

「あの宝石にそんな力があるの？」

「うん、まだ解明はしていないが間違いはないと思う。炎の剣や雷神の剣にも宝玉はついていたし、ゴーレムの胸の中にもっと大きい宝石が入っていたよ。砕いちゃったけどね。」

「へえ、勿体無いことしたわね。」

「命には代えられないさ。あとはどこかに術式が書いてあるはずだ、それを発動させるパワーワードさえあれば誰にでも使える。」

「ふうん、それが解明できたらすごいわね。」

「そうだな。柄の所に宝玉をつける、それで何らかの術式を施せば一定の魔法の剣が出来るな。ただしそれも術式の解明してからだ。」

「またやるが増えたわね。よかったじゃない、平和になってもやることでいっぱいね。」

マギーが俺に微笑んでいる。

「そうだ、魔法の剣で思い出した。いい物がある、ちょっと待ってる。」

テントに戻って自分の荷物を漁る。この旅の前にマギーにあげるつもりで持ってきたアイテムがある。小振りのワンドを手にして戻る。

「それ何なの？魔法の杖にしては短くないかしら。」

「俺には不要なアイテムだ。護身に持っておくといい。」

マギーに向かって軽く放り投げる。両手で受け止めたマギーがいるんな角度から眺めている。

「護身用ってどういうこと？これといってすごい杖でもなさそうだ

けど。」

「持ったままMPを少し放出してごらん。だいたい3MPぐらいだ。」

杖を右手に持ってマギーが軽く集中する。するとワンドの片側からピンク色の光が伸びた。

「何これっ！なんかでてきたわ。」

驚いたマギーが左手でその光を触ろうとする。

「ああっ、触っちゃ駄目！」

慌てて止める。マギーの手があと数センチのところまで停止した。

「危ねえ、もう少しで大怪我するところだったぞ。それは理力の杖、力のない魔法使いでも白兵戦が出来るように工夫されている。その薪でも切つてごらん。」

マギーの目の前に薪を突き出す。ゆっくりとその光の刃が当てられる。薪がいと簡単に切れ、光刃が消えた。

「これすっごくいいの。」

「ああ、さっきも言ったが俺には不要だ。一回切る度にMPを使つてはられない。」

「じゃあもらっておくわ。実際に使つことはなさそうだけど。」

「確かに君の言うとおりで。それを使う必要がある時が来たとしたら、俺達がやられた後だな。そうならないように気をつけるさ。」

マギーが嬉しそうに理力の杖を振っている。どうも俺達の魔法の武器を見て羨ましかったのかもしれないな。

- - - - -

「これが俺の剣が、完成してたのか。」

「ああ、あんたの注文どおり通常の剣より長い。それに合わせて柄も長くしてある。片手でも両手でも使えるぞ。」

リヒャルトから出来上がったばかりの鋼の剣をサイモンが受け取る。ゆっくりと鞘から剣を抜くと右手に構えた。

「うん、ちょうどいい、長さの割には軽いな。」

「そうか、ならその木偶試してくれ。片手で一回、両手でもう一回だ。」

リヒャルトがサイモンから離れる。10cmほどの材木を十字に組んだ木偶にサイモンが相対する。構えた鋼の剣で木偶の左に切りつける、簡単に木が切れる。今度は両手で上段に構える、気合とともに一気に切り下ろす。縦の材木が左右に倒れた。

「ひゅー、さすが隊長だ。いい腕をしている。」

「代理だ、俺なんか本当の隊長の足元にも及ばん。」

「そんなにすごいのか、そんな奴の剣を打つてみたいものだ。」

「残念だな、隊長はもう剣を持っている。口トの時代の雷神の剣と
いうらしい、ケルテンがそう言ってた。」

「またあいつか、いったいどういう奴なんだ？」

「知らん、俺にとっては親友と言っていい。頭も腕も俺より上だ。」

「そうか、天下の近衛騎士隊長代理とやらにそこまで言わせるとは
たいした奴だ。まあそいつのことはいい。それでこの剣はどうだ、
気に入ったか？」

「ああ気に入った、大満足だ。他の連中の剣も急いで作ってくれ。
それとなにか困ったことがあったら言ってくれ、あいつに頼まれて
いる。」

「ああ、石炭が足りない。今は備蓄でなんとかしているがそのうち
足りなくなる。」

「わかった、ホフマンスに頼んでおく。」

サイモンは一瞬困ったような顔をしていたが、腰に剣を佩くと嬉
しそうに出て行った。

.....

一方その頃、別の部屋ではジヨルジヨが一文字に新しい剣を渡さ

れていた。

「お前さんの注文どおり標準より細めに作ってある、その分厚みは増しているかな。」

「試していいですか？」

「もちろんだ、そのの木偶を使え。」

十字に組まれた木材を指差す。ジヨルジヨがその前に立って構える。前に突き出す構え、次の瞬間、鋼の剣は木偶の中心に突き刺さる。引き抜いて腰の鞘に収める。

「年の割にはいい腕だ。まだ向上する余地があるな。」

「それはどうも、鍛錬する励みになります。しかしこの剣の鋭さはすごいですね、試合用の細剣以上です。」

「あんなのは玩具だ、実戦では使えんだらう。」

「そうですね、でもその玩具での試合では負けたことないですよ。本物の騎士とはやったことありませんけど。」

「そうか、お前さん、いい騎士になれるよ。」

「精進させてもらいます。ではこの剣は頂いていきます。面倒な注文を聞いてくれてありがとうございます。」

ジヨルジヨが一礼して去って行った。残された一文字が呟く。

「ありがとう……か。その一言が聞いただけでもここに来た甲斐があった。」

文官と武官

9 / 17 勇者支援生活 140日目

起きてきたアレフとガイラが呆れている。それもそうだろう、いまだにマギーが理力の杖を嬉しそうに振り回しているからだ。

「あい、学者。あれは何だ？」

「ん？ああ、あれは理力の杖だ。使用者のMPを刃にする魔法の武器だ。」

「ふん、そうか……いや、俺はそんなことを聞いてるんじゃない。そんな大層な物、どこから出てきた？」

「俺の荷物からだ、護身用に渡した。実際に使う事態にならないといいのだが。」

ガイラはまだ俺の答えに納得していないようだ。難しい顔をしている。

「それ、どこで手に入れたのですか？僕から見てもすごいアイテムだと思うのですが。」

「そんなに大した武器でもないさ、大昔には普通に売っていた物だからね。実は昔メルキドの骨董屋で見つけた。価値が分からずに陳列してあってな、100Gと言うのを30Gまで値切って買った。」

「はあ、なんか酷い話ですね。それでどの程度の価値があるんです

か？」

「そうだな・・・骨董価値を加味しないで2500Gぐらいじゃないかな。武器としては市販の鋼の剣よりずっと切れる。」

「お前、呆れた奴だな。そんな価値があるなら値切らなくてもいいだろう。」

「そうですよ。しかもそれを使ってないなんて勿体無くないですか？」

二人の呆れる対象が俺に変わったようだ。

「価値も分からずに売ってる方が悪い。そんなところに置いとくのも可哀想だから、俺が引き取ってあげただけだ。それと切る度にMPを消費するのは効率が悪い。」

「あつ、二人とも起きてきたんだ。ねえ、これ見て、こんな簡単に薪が切れるのよ。」

アレフとガイラに気づいたマギーが駆け寄ってくる。手にした理力の杖に魔力を込め魔力の刃を発生させ、何度か切ったと思われる薪の切れ端をさらに両断した。

「マギー、もういいだろう。MPも無限じゃない。」

「そうね、じゃあもう終わりにしておく。」

そう言つとマギーは理力の杖を腰のベルトの右辺りにぶら下げた。

「まあ、お前らがそれでいいなら俺はいいや。俺は朝飯を作ってる。」

なんかガイラが不貞腐れて立ち去った。

「あいつ、何で拗ねてるんだ？」

「ケルテンさんが非常識だからです。あまり表に出さない方がいいですよ。」

「君等の前でしか出さないよ。口が裂けても要らないことは言わないだろう？それにこんなことで驚いてもらっては困るな。これから取りに行くのはロトの鎧だぞ、あんな物霞んで見えるぐらいの超級のアイテムだ。」

「確かにそうですね・・・じゃあそんな物着て帰ったら、何言われるか分かりませんね。」

「いいじゃない、新たなる勇者の称号に相応しい装備でしょ。」

「その通りでございます、ルビスの聖女様。」

「まあ、アレフもかわいくなってきたわ。その称号は禁句なの！」

俺のことは放っておいて二人の掛け合いが始まった。

「お〜い、もうすぐできるぞー！」

ガイラが呼ぶ声が聞こえる。二人の掛け合いが中断され、朝食を

取る為にガイラの元に集まった。さあ朝食を取ったらドムドーラへ行く。

- - - - -

「ホフマンズ國務大臣代理、ちょっといいか？」

「なんだね、ローゼンシュタイン近衛騎士隊長代理。私は忙しいのだが。」

いきなり國務大臣の執務室に入ってきたサイモンが不躰に声をかける。それに対する返事は刺々しい。

「うーん、家名と肩書きで呼ばれるのはなんか気持ちが悪いな。サイモンでいいぜ、俺もホフマンズと呼ばせてもらう。」

ホフマンズが大きなため息をつく。

「・・・無礼な男だと思っただけだがここまでとはな。まあいいだろう、その方が早い。サイモン、それで何の用かね？」

「それでいい。ホフマンズ、頼みがある。」

「頼み・・・とは？」

「まず例の大工房に納品される石炭が滞っている。なんとかしてくれ。」

「特務隊士から話は聞いている。鍛冶ギルドによる妨害工作に失敗

した大臣の、次の手の可能性があるらしい。こちらで調べておく、商人の懐柔が必要になるだろうな。」

「もう一つある。騎士と兵士の補充が進まん。特に騎士のなり手がおらん。」

「どういうことだ？普段威勢のいい事を吹聴している貴族の子弟ならいくらでもいるだろう。」

「ああ、あいつらは口だけだ。この前の戦いで結構な戦死者が出ただろう、それで尻込みしている様なやつばかりだ。たとえ入ったとしても使い物にならないだろうな。そのくせ身分だの格式だのうるさいことを言うんだ。」

「困ったものだな、それで私はどうすればいい？」

「陛下と王女殿下に公募の要請をして頂きたい。勅命とあれば一部の不平貴族の反感も無視できるし、王女殿下のお頼みなら市井の者も公募に応じやすいだろう？」

「私にそれをやらせるのか・・・陛下、兵が集まりません、お声をかけて下さい。そう言えと貴公は言うのだな。」

「まあそんなところだ。どうも自分では言いづらい。」

ホフマンズの棘のある言い方をサイモンが軽くないなした。

「自分で言いづらいことを人に言わせるな・・・まあいい、提出する書類に混ぜておこう。これは貴公の策ではないな？」

「分かるか？そのとおりだ、ケルテンに忠告されたことを思い出しただけだ。」

「またあいつか。見えないところから我々を操るとは困った奴だ・・・それでその新しい剣はどうかね？」

ホフマンズの視線がサイモンの剣をさす。

「おつ、気づいたか！実にいい出来だ。」

「気づかぬものかつ！さつきからこれ見よがしに手で触れているぞ。しかし私にはよく分からぬが少し長くはないか？」

「ああ、俺に合せた特注だ。あれだけの職人はそうはいないぞ。」

「かなりの予算を使ったのだ、そうでなくては困る。」

「そう金、金、言つなよ。城が落ちたら金勘定なんぞ二度とできなくなるぞ。」

「分かっているから、黙って予算を出したのだ。」

「ホフマンズ、すまん。あんたが話の分かる男で助かる。それと俺の為に何人が出向させてくれて助かっている、礼を言う。」

「ふん、貴公の為じゃない。これ以上書類が滞って欲しくないだけだ。」

「じゃあそういうことにおいてやる。じゃあ俺は行くぞ。」

好きなだけ言いたいことを言っただけでサイモンが出て行った。サイモンが行く先は文官が真つ二つに割れる。静かになった執務室に幾人かの文官が集まってきた。その顔には不満そうな表情が張り付いている。

「國務大臣代理、よろしかったのですか？」

「何がだ？」

「あの無礼な態度と、無理な注文です。」

「構わぬ、今はそんなことを言っている時ではない。あの者が言ったように、落ちた城ではそんなことを言うこともできない。」

「しかし、都合の悪いことを押し付けられたのですよ。」

「多少の事は大目にみてやれ、いざ戦いとなつたら彼らは命を張るのだ。それに較べれば私の苦勞など大した問題ではない。」

ホフマンズの意外な答えに文官が動揺する。

「そつそつですか。なら構わないのですが……。」

「下らぬことを言っている暇があるなら仕事をしろ。この書類、間違っておるぞつ！」

ホフマンズが手にした一枚の書類をパンツと叩いた。

「申し訳ありません。確認して参ります。」

恐れ入った文官が逃げるように立ち去る。周りにいた文官たちも何かを思い出したかの様に、執務室から立ち去った。残されたホフマンスが一枚、また一枚と書類を手に取り何かを書き込んでいる。

国王の仕事

「へっ、陛下。なぜこのような所に！」

机に向かっていたホフマンズが書類から顔を上げた瞬間、ラルス16世と目が合った。慌てて椅子から立ち上がり一礼する。気づくと周りにいたはずの文官たちが遠巻きにしている。

「そのままでもよいぞ、ホフマンズ。ここは余の執務室でもある、来てもおかしくはなからう。」

「はっ、申し訳ありません。」

ホフマンズは先ほど目を通していた書類を後ろに隠した。

「まあよい、それで余が裁可せねばならぬものはどれだ？」

「まず、こちらにございます。城壁補修の予算に関する書類です。」

「はて、先日補修の裁可は出したはずではないか？」

「いえ、急ぎでしたので修理だけは先に行いました。この書類で予算が通ります。」

それから何枚かの書類をホフマンズが出し、一つ一つにラルス16世が質問する。ホフマンズの説明を聞いたラルス16世が裁可するものと再考すべきものとに別けられた。

「結構な量があるのう、そなたには苦勞をかけるな。」

「いえ、これぐらいは当然でございます。」

「そうか、では後ろに隠した書類を見せてくれるか？」

「えっ、あの・・・これは・・・。」

ラルス16世が黙って右手を前に出す。その無言の圧力に堪えかねて後ろに隠していた書類を渡した。

「ふむ、なになに、近衛騎士の公募に関する嘆願書か・・・まだこの先が書いてないのう。これはどういうことかな、説明せよ。」

「はっ！64名の近衛騎士の内現存しているのは23名しかおりません。それで補充することになったのですが公募に応じる者が足りませぬ。」

「ふむ、近衛騎士ならば貴族の子弟が、我先にと押しかけるものはなかったのか？」

「過去に関してはその通りでございます。しかし先の戦で多くが戦死しましたので、二の足を踏んでいる様でございます。そこで陛下と王女殿下のお力をお借りしたく愚考した次第であります。」

「だらしが無いのう、それで余はどうすればいいのだ。公募に応じぬ貴族の子どもの尻を蹴飛ばせばよいのか？それとも格式なり身分なりの壁を取り払えばよいのか？」

「ご明察、恐れ入ります。臣が愚考するには後者でございます。強制的に取り立てたものが役に立つとは思えませぬ。さらに市井から

公募致しますので、出来れば王女殿下のお名前をお借りしたいと愚考致します。」

「そうか、ローラの名前で釣るか。大胆な案じゃのう、そなたの案ではないな？」

「申し訳ありません。私の案ではありません、陛下の特務隊士殿からの案と聞いております。」

「はははっ、楽しいのう。余も娘も全て道具とするか。大胆にも程がある。」

「申し訳ありませぬ、それゆえに提出を躊躇っております。」

ホフマンズの顔色が青くなり、平身低頭して詫げる。

「よい、怒ってはおらぬ。余の名前なら好きに使つがよい、ローラには後で聞いておく。」

「ありがたき幸せにございます。」

「ふむ、ではまだ隠しているものを見せよ。」

ホフマンズが後ろに隠したまま、ラルス16世に抗弁する。

「これは王国、王族の名誉に関わる問題でございます故、お見せできません。臣の下で内密に処理したく存じます。」

「王族の名誉ならば余が知らぬ訳には行かぬだろつ。よいから見せよ。」

ラルス16世が静かに力強く命令する。その迫力に屈したホフマンスがその書類を渡した。ラルス16世が静かに目を通す。その間ホフマンスは黙って顔を伏せていた。

「国務大臣の職を悪用した越権行為による収賄、さらにそれによる現時点での復興事業への妨害か・・・愚かなことだ。そなた、これをどうするつもりだったのだ？」

「そこにあるのはまだ憶測でございます。さらに内偵することによって疑を固めてから処置を講じようと思っております。」

「それでは間に合わぬな、余の手の者を貸そう。過去のことはそれでよい、しかし今現在の妨害とはなんじゃ？」

「はい、近衛騎士の新しい剣を製作させております工房への石炭や鉄鉱石の納品が、滞っているようです。どうも裏から妨害を命令している者がいると思われます。」

「それは大変だ、近衛の装備が手に入らぬとはこの国と余の命の存亡に係わるな。納品させている者どもに余からの勅命だと伝えよ。それでよいな？」

「はっ！ではそのように取り計らいます。」

「そなたには余計な心労をかけておるようじゃの、口にはし辛いこともあるだろうが、全て余に伝えよ。そなたならできるはずじゃ。では今日のところはこれで終わりにしようか。」

それだけ言い残すとラルス16世は執務室を出て行った。残され

たホフマンズが青い顔だが、それでも開放された喜びが表れていた。

- - - - -

ドムドーラの街は砂漠の外れにある人口5万人ほどの町であった。10ヶ月ほど前に急な魔物の襲撃により廃墟と化していた。

「思ったより静かね。もつと魔物が大挙していると思っていたわ。」

砂漠特有の乾いた風の音だけが聞こえる。何かがいる気配は感じない。

「そうみたいだな、俺にとつても意外だ。」

砂が積もった大通りを歩く。街の南側に面した建物は半分以上砂で埋もれている。

「なあ、目的の店に行ったら瓦礫と砂の下なんて俺は嫌だぜ。」

「じゃあ、そうなっていないよう祈っていてくれ。」

半日以上砂の上を歩いていたのでガイラの機嫌はよくない。連れている馬も元気がない。

「とりあえずどこか緑が残っている場所を探そう。水を確保したい。」

「北の方に木が見えます。あちらに行きましょう。」

アレフが自分の馬を引いて街の北側に向かう。その後ろを俺達がついて行く。しばらくして井戸を見つけた。その周りにはかるうじて草が生えている。

「とりあえずここに馬を繋いでおこう。ガイラ、井戸は使えるか？」

「ああ、水だけは出ているようだ。桶に縄を繋いで落とせば汲めそうだ。」

「じゃあ俺達の分と馬が飲む分を汲んでくれ。アレフも手伝うんだ。」

アレフとガイラが転がっていた桶に水を汲む。俺とマギーで馬を近くの木に繋いだ。自由に動けるようになったので例の店に向かう。アレフとガイラが前、俺とマギーが後ろからついて行く。

「そのこの曲がり角はどうだ？」

「ここも駄目ですね。壁が崩れて通れません。」

俺が地図を見ながら通れそうな道を指示する。魔物の襲撃によりそこから中の建物や塀が崩れている。大通りはともかく少し入った所で通れる所は少ない。

「おい、こっちなら通れそうだ。アレフ、足元に気をつける、瓦礫がある。」

狭い路地の向こうからガイラの声が聞こえる。アレフが瓦礫を飛び越す。その振動か、自然にかは分からないが近くの壁が倒れた。砂煙が上がって向こう側が見えない。

「ガイラ、アレフ、そっちは大丈夫か？」

「大丈夫です、飛び越えてから崩れましたから。こっちに来れますか？」

「ちょっと無理だな、また崩れても困る。こっちにはマギーもいるしな。そっちはそっちで進んでくれ、俺達は別の道を探す。」

「了解だ、気をつけるよ。」

ガイラの元気な声が聞こえた。俺とマギーは狭い路地を戻り、大通りに戻る。大通りに出たところで全身に電撃が襲った。ベギラマか！？

「マギー、敵襲だ。気をつける！」

体の痛みをこらえて路地に飛び込む、後ろにいたはずのマギーの姿はない。

各個の戦い

「いったー！いったー！なんなのよっ！」

突然連れ去られ、拳句の果てに放り投げられたマギーが誰かに抗議する。起き上がったマギーが目にしたのは金色の毛皮を持った直立した狼、キラーリカントだ。

「敵襲だよ、もつともいい勝負になんかならねえ、俺の一方的な狩猟だ。実に役得だな、俺は女子供が泣き叫ぶのが大好きなんだ。さあ俺を楽しませろっ！」

目に留まらぬ速さでキラーリカントがマギーに跳びかかる。右手の爪でマギーの左肩を引っかく。水の羽衣には傷はつかないものの衝撃でマギーが吹き飛ぶ。倒れたマギーが左肩を押さえて立ち上がる。

「おいおい、色っぽく悲鳴ぐらいあげろよ。それにしても俺の爪で傷つかねえとはたいした服だな。一体何でできているんだ？」

「誰があんたの為に悲鳴なんて上げるもんですかっ！これでも喰らいなさい、ベギラマ！」

無詠唱からの不意打ちのベギラマ、突き出された杖の先から放出された電撃は、誰もいない空間に虚しく吸い込まれた。次の瞬間、先ほどと同じ左肩に爪の攻撃が入る。今度は吹き飛ばない、狼が首を傾げて飛び去る。

「俺に魔法は当たらねえぜ、手の動きを見てから避けられるからな、

(ボミオスですばやさを下げる？それともマヌーサ？どちらもまとも
に効くか、自信がないわ。それに空間を指定している間に別の場
所に移動されそう。どうすればいいのっ!?)

.....

「連れが気になるか？今頃別の者が相手をしているぞ。」

路地裏に隠れている俺に向かって上から声がかかる。痛む体にベ
ホイミを使ってから、影から空を見上げる。そこには空中から俺を
見下ろす大魔道、金色のローブの中は暗く吸い込まれるような闇、
顔があるべきところには赤く光る双眸だけが見える。

「いつまで隠れているつもりだ。その間に仲間が死ぬかもしれぬぞ。」

大魔道が大物ぶって俺に話しかけてくる。

「どういうつもりだ？なぜ俺達がここにいることを知っている？」

「他の者はどうでもいい。お前のすることが目に余る、この辺りで
消えてもらおう。他の者はそのついでにすぎぬ。それにお前の居場
所などいつでも分かる。」

「なんのことが分からんな。だが黙って殺られるほどお人よしでは
ない、ベギラマっ!」

いきなり物陰から飛び出して電撃をお見舞いする。直撃した電撃が

ロープを引き裂き、内側の闇に吸い込まれる。次の瞬間、闇がいつそう強くなったような気がした。

「なぜ反撃してこない？」

「くふふふふっ！その手は食わぬ。お前達には我等も知らぬ秘術があるはずだ。」

どういうことだ？マギーの使ったマホカンを警戒しているのだろうか・・・なぜそれを知っている。いきなり大魔道の姿が消え、俺の目の前に現れた。振り下ろされる杖、なんとか避ける。居合い一閃、すでにそこに大魔道はいない。

「ずいぶんと自信があるようだな。まさか白兵戦を挑んでくるとは思わなかったぞ。それも瞬間移動とは驚きだ。」

「くつくつくく！脆弱な人間などと同じと思わぬ方がいい。」

大魔道が再び空に浮き上がる。見上げると赤い双眸が俺を見て笑った気がした。

.....

「アレフ、学者達は大丈夫だろうか？」

「心配してもどうにもなりません。まさか瓦礫をどけて戻るわけには行きません。先に進みましょう、あつちに木が見えます。」

アレフが狭い路地裏を進む。後ろからついて行くガイラ。

「お前、なんか強くなったな。いや力でなく、心だが。」

「そうですか？前から言われていたことです、たとえ目の前で俺が死んでも目的を忘れるな。それに従っているだけです。」

「まあその通りなんだが、お前の言う目的とはなんだ？」

「竜王を討伐してこのアレフガルドに平和をもたらす。それだけです。」

「なるほど……。」

(そうか姫さんの為に平和か、漠然とした目的が明確な目的に変わったんだな。)

ガイラが黙ってアレフについて行く。木が見える方向に向かって路地裏を歩く。何度目かの角を曲がると視界が広がった。剣が交わる武器屋の目印、半壊した建物が見えた。その前に鎮座している真っ黒な鎧、頭には真紅の兜飾り。

「お前が新たなる勇者か？」

くぐもった声が兜から漏れる。

「いや、俺じゃねえ。こっちが新たなる勇者、神の申し子アレフだ。」

声をかけられたガイラがアレフを指差して返答する。

「こんな餓鬼が勇者だと？ふざけた話だ。」

「ふざけてなどいないさ。城の連中が決めた勇者じゃねえ、メルキドを護り、王女を助けた、それらの功績に自然とついた称号だ。お前らみたいな魔物にとやかく言われる筋合いはねえ。」

「ガイラ、問答はもういいでしょう。こいつはケルテンさんが言っていたパーソナルマークを持つ悪魔の騎士です。幾度かの遭遇が報告されています。ここで倒しておくべきです。」

「もちろん、そのつもりだ。逃がしてやる義理はねえしな……んっ？」

突然ガイラが不思議そうな顔をした。

「どうしましたか？」

「当たり前のようにしゃべっていたが、なぜ会話ができる？こいつらは汚された魂を封じた鎧だろう。」

「ふははははははっ、俺が穢れた魂だっ！こんな笑える話はない。見るがいいっ！」

悪魔の騎士がその兜を脱ぎ捨てた。そこには人間の男の顔、アレフとガイラがその顔を見て驚く。

「お前、勇者ガルド。学者に負けて姿を消した勇者。」

「そうだ、だがまだ俺は負けを認めていない。このとおり生きていてまだ戦っている。命ある限り戦士は負けぬっ！」

ガルドの方向がドムドローに響く。

「あんな負け方をして、まだそんなことが言えるとは厚顔無恥にもほどがある。だがあの時命を奪わなかったのは学者のミスだな。」

「黙れっ！あの時は運がなかったただけだ。それをこれから証明してやる。」

「ふん、大した自信だ。俺達二人を前にしてそう言えるとはな。」

アレフがガイラの一步前に出て、右手でガイラを遮る。

「僕に任せてください。師匠のミスと言われるなら、弟子である僕が解消しましょう。」

「どいつもこいつも舐めやがってっ！師匠も師匠なら、弟子も弟子だっ！俺を舐める奴は許さねえ。」

いきなりガルドの大斧がアレフを襲う。アレフが飛びのく、叩きつけられた大斧が床の石版を割った。

瀬踏み

マギーは焦っていた。こちらからの魔法は全く当たらない。キラリリカントは徹底したヒット&アウェイで的確に攻撃を当てていく。スカラのおかげで致命傷にはならないが、それでも度々ベホイミを使用して傷を癒している。キラリリカントのにやついた表情に苛立つ。

「へいへい！もう終わりとか言わないよな？まだ泣き叫ぶ声は聞いてないからなっ、呆気なく死んでくれるな。」

「誰があんたを言ばせる為に泣き叫ぶものですかっ！」

「そういう強気な言動もいいなあ、何時それが悲鳴に変わるか・・・楽しみだあ。」

キラリリカントの口の端から涎がこぼれている。マギーはその醜悪さに目を背けたくなかったが、それはあまりに危険なので吐き気を抑えて見ている。

（どうしよう、動きが速くて的を絞ることができない。ボミオスやマヌーサみたいな範囲魔法も避けられた・・・となると空間魔法しかないわ。ヒヤダルコ、ヒヤダイン、どっちだったかしら？でもあの毛皮に冷気の魔法が効果的とは思えない。イオ系の魔法・・・イオでは弱すぎる、イオナズンではこの建物ごと押しつぶされる。じゃあイオラー発であるの化け物が死ぬ？）

「作戦は決まったかい。早くしないと俺から行っちゃうよ。」

キラリリカントが一気に間合いを詰めて下からマギーの腹に拳を打ち込む。対応できずに直撃を受けマギーが蹲る。味わった感触で喜色を浮かべたキラリリカントが跳び去る。

「ベギラマツ！」

蹲ったままのマギーの杖から電撃が放出される。すんでのところでキラリリカントが横にすっ飛んで避けた。

「まだそんな元気があったのか。惜しかったな、もうちょっとで当たるところだったぞ。」

嬉しそうにキラリリカントが話す、その姿は獲物をいたぶる肉食獣そのもの。その余裕の間にマギーが立ち上がる。お腹を押さえた右手が薄く光り輝いている。

「おや？もう魔法力がなくなってきたのかい。さっきまでの強い魔法じゃないな。」

「余計なお世話よっ、ベギラマツ！」

マギーの杖から出た電撃がキラリリカントを襲う。キラリリカントが斜め右に跳んで電撃をかわす。ワンステップでマギーの左側に攻撃を加える。

「もう打ち止めかと思わせて、不意打ちか。いいねえ、足搔け！足搔けっ！足搔けー！」

キラリリカントの連続攻撃、一步、また一步と下がることしかできない。ドンッ！背中に壁が当たった。それに動揺したマギーの左

キラリリカントの口から大量の血が吐き出されて、マギーを汚す。胸に激痛を感じたキラリリカントが手を放して見下ろす。マギーの手の杖から出た光の刃が、キラリリカントの胸を貫いていた。

「何・・・だと・・・？」

マギーが崩れ落ちるキラリリカントを蹴飛ばして、その体を放した。

「お馬鹿なあんたにも分かるように説明してあげるわ。悲鳴を上げたのも、見苦しく足掻いて見せたのも全部演技、もちろん魔法が出なくなっただのもねっ！それで馬鹿面で私に向かってくるあんたの後ろで爆発の魔法を発動させた。吹っ飛んできたあんたがこの理力の杖に自分で刺さったのよ。・・・ねえ、聞いているの？聞いているのって言うてるでしょっ！」

もうマギーの説明を聞いている者はいない。絶命して倒れているキラリリカントを蹴とばして、マギーはその建物から出て行った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺と大魔道の戦闘は膠着している。俺がベギラマを使うと闇が深くなり回復しているみたいだ。大魔道はトリッキーな動きで俺を直接攻撃してくるが、そんなものは俺には当たらない。なにか誘うような攻撃、迂闊な魔法は使えない、そう判断した。

「そろそろあの女が死んだ頃かな？いつまでも私に構っている時間はないぞ。」

「そう簡単にいくものか？簡単に殺られるような女じゃない。それよりお前を足止めする方が大事なようだ。」

「やはり君は只者ではないな。信頼できる仲間がいて冷静な判断力がある。やはりここで死んでもらう。」

大魔道の姿が消える、それまでと同じく俺の目の前に現れて杖を振り下ろす。そのパターンはもう見切った、居合いで杖自体を斬り落としてやる。柄に手を当てたその時、火球が飛んできた。ギラかつ、顔に向かって火球が迫る、首を捻って直撃は免れた。頬を焼く痛み、すでに届く範囲に大魔道はいない。

「なんだ、魔法を反射することはできないのか？ベギラマを使えばよかったか。」

「なんのことだっ！」

ここは誤認させるだけでいい。それだけ叫ぶと物陰に飛び込んで身を隠す。ギラだからそれ程のダメージはない、ホイミで顔の傷を癒す。

「とぼけているのか、それとも本当に何も知らないのか。どうも判断しかねる。」

そう言いながら大魔道が幾つもの火球を俺のいる場所に飛ばしてくる。瓦礫を吹き飛ばし、俺の居場所が露わになる。次に飛んできた火球は竜鱗のある場所で受け、蹲る。さらに飛んできた火球は背中当たる。ここも竜鱗に覆われているから大したダメージはない。

ズツゴオオオオオオン！！！！！！！！

そう遠くないところから大きな爆発音が聞こえた。あれは多分イオラか。

「ふむ、聞いたことのない音だ、どうもあちらが本命だったようだな。ではこちらは終わらせてあちらに行くでしょう。シュトルムに任せるといたぶって殺してしまう。」

大魔道が呟いている。もう俺には興味がなくなったようだ、なら性急な攻撃をしてくるに違いない。マホカントを刀に仕込んでタイミングをはかる。

「では君には死んでもらうでしょう、ベギラマッ！」

放たれた電撃を刀で受ける。次の瞬間、電撃が向きを変えて大魔道へ跳ね返った。大魔道に電撃が直撃する、動きが鈍った大魔道に俺の左手からのベギラマが突き刺さる。

「なん・だ・．．．やはり．．．できるでは．．．ない・か！武器か、確か・に・．．．見たぞ！」

空中で大魔道のローブが燃え尽きた。後に残る物は何もない。しかしどういうことだ、身をもって魔法の反射を確認することになんの意味がある。死んでしまえば誰にも伝えることはできない．．．待てよ、死体がないということは死んでいないかもしれない。実体のない敵、それならば説明がつく。

「ケルテン、ケルテン、いるなら返事をしてっ！」

マギーの呼ぶ声が聞こえた。

- - - - -

アレフがガードと対峙している。ガードの大斧は本来なら両手で使う物、それをガードは片手で扱うことができる。繰り出される大斧の攻撃をアレフが軽々と避ける、反撃はしない。

「おい、無駄だぞ。そんな直線的な攻撃は当たらない。ここで見て
いる俺にでも分かる。」

近くに座って見ているガイラが声をかけた。

「うるせえ、外野は黙ってる！次はお前の番だ。」

ガードが大斧を地面に突き刺して、空いた手で左手の盾を筆り取る。大斧を両手で持って大きく振りかぶる。

「アレフ、なんで黙って見ている。」

「この人が納得する形で勝たないと意味がないのです。さっきも言
いましたが、ここは僕に任せてください。」

「はあ・・・OK。一切、手は出さない。」

アレフの真剣な表情にガイラが折れた。その余裕のある雰囲気
にガードの顔が真っ赤に染まった。

勇者 VS 勇者

ガルドの猛攻をアレフが剣と盾をうまく使っていない。振り下ろされる大斧の刃を水鏡の盾で受け流す、横や下から来る威力の低い攻撃は一步踏み込んで、鉄の柄の部分で炎の剣で合わせて向きを変えている。座って見ているガイラの口から感嘆の声が漏れる。

「ほう、うまいことやるものだ。勝負は見えているな。」

ガルドの手が鈍る、その隙を突いてアレフが距離をとり、炎の剣を腰に納めた。

「もういいでしょう、これ以上やっても無駄です。」

「ガハハハハッ、俺の猛攻に手も足も出ねえじゃないか、剣を納めたら俺が止めるとでも思ったか？」

頭に血が登ったガルドの耳にはアレフの声は聞こえていない。おのれの都合のいい事実だけしか見えない。ガルドは距離をあることをいいことに、いつそう大きく大斧を振りかぶる。その迫力のある構えにアレフが水鏡の盾を強く握って、次の攻撃に備えた。

「死ねやー！」

右袈裟懸けに振り下ろされる大斧、流石に受け流すことは不可能と判断したアレフが、一步下がってその攻撃を避ける。大斧が叩きつけられる、そう予想して今度はアレフが前に出る。しかしこれはガルドの誘い、得意とする必殺の二段旋風撃、さっきより勢いを増した一撃が振り下ろされる。叩きつけられた大斧、その一撃は小憎

たらしい餓鬼を粉碎したはず、ガルドはそう確信した。

ガイラは見た。踏み込んだアレフが上から来る大斧の柄に炎の剣を合せて交差し、そのまま後ろにすり抜けたのを。アレフが振り上げた炎の剣を納めてゆっくりと振り返る。

「勝負はつきました。」

「勝負はついただどっ！馬鹿か、お前は。俺もお前もまだここに立っている。どちらかが地に伏せ、命が失せるまでは終わらん！」

目を血走らせたガルドが大斧を振り上げようとした。だがその手は軽い。

「なんじゃ、こりゃあああああああ！！！！！」

ガルドが手にしていたのは鉄の柄だけ、叩きつけられた大斧は地面に刺さったまま。ありえない状況にガルドの声だけが虚しく響いた。

（あの時と同じだ。ガルドの二段旋風撃に対して剣で柄を切り払った。学者はあの時退いて切った、アレフは前に踏み込んで切った、違いがあるとしたらそれだけか。しかしあの鉄でできた柄を切り落とすとはアレフめ、腕を上げたものだ。）

ガイラが一人思考に耽っている。

「ありえん。二の轍は踏まぬ、そう考えて用意したこの柄まで全て鉄でできた大斧が折れるとは……。」

の栄光だけ。ガルドが無手のままアレフに掴みかかる。無茶な特攻に軽く身を避けて炎の剣を一闪、鮮血が飛び散る。ガルドの巨体はその勢いのまま地面に倒れこんだ、その巨体に首はない。地に転がったガルドの首は血走らせた目を大きく見開いたまま、まだ何かを叫んでいるようだ。剣を納めたアレフがガルドの首に近寄りその目を閉じさせた。

「ごめんなさい……。僕にはあなたは救えませんでした。」

立ちすくむアレフの肩にガイラの大きな手が当てられた。その感触がなんとも心地よい。

「まあ、そのなんだ、お前はよくやった。」

「これでよかったですでしょうか？」

「分からん。ただ俺が言えるのは、もし俺やお前があいつに会わなかったらこうなっていたのは俺達だったかもしれない。力に溺れ、増長した結果がこれなんだろう。こいつも哀れな奴だ、俺達に哀れまられて喜ぶ奴ではないがな。」

二人がガルドの死体を見下ろしたまま、無言の時間が流れた。

.....

「やっと見つけたわ。なんでこんな所に立ちすくんでいるの？ キヤッ！」

いつの間にか駆け寄ってきたマギーが棒立ちのアレフとガイラに

声をかけた。マギーの悲鳴を聞いて俺も駆け寄る。そこで見たのは悪魔の騎士の鎧、それと転がるガルドの首。

「これ、アレフがやったのか？」

「はい、何度も説得したつもりでしたがやむなく……すみません。」

「そうか……アレフが謝る必要はない。これは俺がやるべきことだった、俺の処置が中途半端だったからいろいろと迷惑をかけたよ。うだ……。さあ終わったことはいいから、ロトの鎧を探そう。」

ガルドの死体にさっさと背を向けて目印の木に向かって歩く。

「お墓とかいいのですか？」

「いいさ、あの壊れた斧が墓標だ。」

俺が地面に突き刺さった斧の残骸を指差すと、皆がそれを見つめた。

「さあ、行くぞ。」

いつまでもあんな奴に付き合っではいられるか！そう言いたかったが、アレフとマギーが感傷的になっているので口にしなかった。

半壊した武器屋、建物の奥に大きな木がある。

「手分けして探そう。どこかにロトの鎧があるはずだ。」

「おい、学者よ。本当にあるのか？」

「確証はない。それでも探す価値はある。」

「もう、しゃべっていないで探しなさいよ。」

「ほら、怒られた。ガイラ、お前も探せ。」

武器屋の探索を再開する。散らばった工具、武具の残骸、不思議と錆は浮いていない。崩れた石材の間の砂を掻き分ける。これといったものは見つからない。

「おい、学者。ここで誰か死んでるぞ。乾いてミイラになってる。」

ガイラの声が外から聞こえた。

「お前、遊んでいないで探せよ。」

ガイラに文句を言い外に出向く。ガイラが倒れている遺体の横に座り込んでいる。

「それが変なんだ、なんでスコップを持ったまま死んでるんだ？」

「それだっ！どこかに埋めたんだ、どこかに埋めた跡があるはずだ。」

アレフとマギーを呼んできてさらに探す。あちこちの地面を手ごるな棒で刺す。

「ここ不自然に柔らかいですよ。ちょっと掘ってみます。」

どこからかアレフの声が聞こえた。急いで近寄って手伝う。スコップの先に硬い感触、全員で丁寧に掘り起こした。そこにあったのは大きな宝箱、アレフとガイラで持ち上げて穴の外に置く。アレフが蓋をあける、中には青く光り輝く鎧が納まっていた。その見事な作りに誰も言葉が出ない。

「おい、本当にあつたみたいだな。こいつはすげえ。」

ガイラが一番に口を切った。それを合図に皆が動きだす。特徴的なプレストパーツを取り出す、他の皆も兜、ガントレット、ブーツなどを手にしている。

「アレフ、お前着れそうか？サイズは近いと思うが……。」

「そうですね。でもその前にさっきの人をここに埋めてあげましょう。多分ここにこの鎧を埋めてから、この場所が知られないように別の場所で事切れたでしょう。」

「そうね、ちゃんと葬ってあげましょう。そうすればこの鎧を持っていっても恨まれないわ。」

アレフとマギーの言うとおりだ。いささか人の死に慣れすぎて何の感情も湧かなかつた。ガイラと俺で遺体を運び、宝箱を取り出した穴に下ろす。土を被せてからなんとなく腰にあった酒を振りまいた。

戦いの後

ドムドローの片隅にキャンプを張っている。ロトの鎧の探索に思ったより時間がかかったので、水が確保できる場所を陣取っている。夕食の後、なんとなく気持ちが高ぶって眠れないので、一人焚き火の前で針仕事をしている。

「おい、学者、一体何をやってるんだ？」

「ああ、ロトの鎧の補修だ。金属部分はいいが、内張りの革が傷んでいる。それにアレフの体に合わせる必要もあるからな。」

「ふくん、前から思ってたがお前器用だな。しかしよくそんな物あったな。」

「こうなっていることを予想して持ってきた。持って帰ってから店に任せてもいいが、あまり他人には任せたくない。古今東西でも唯一の代物だ。」

「そうか……それで何を落ち込んでいるんだ？」

「……そう見えるか？」

「考えることを放棄して作業に没頭している、そう見える。」

「じゃあそうなんだろうな。」

ガイラがじつと俺を見ている。

「分かったよ、誰にも言うなよ。昼にガルドと武器屋の人の死体を見たときに何の感情も湧かなかった。アレフとマギーに言われて、初めて人として大事なことを思い出した。」

「それで墓に酒を振り撒いたのか・・・そうだ、アレフとガルドの戦いを詳しく聞かないでいいのか？」

「ああ、大体想像はついている。鉄の柄を切り落とすとはいい腕だ。」

「初めから勝負はついていた。奴には負けを認められなかったんだ。あいつ、あんなに弱かったか？前にお前と勝負した時と較べても強くは感じなかった。」

「ガルドの評価はちからS、すばやさB、HPA+だ、この際かしこさやMPはどうでもいい。ただあいつは金属鎧を着慣れていない、それで本来の能力が生かされていない。それがお前が感じた違和感だ。」

「なるほどねえ、ならあいつはどうすればよかったと思う？勇者支援官としてだ。」

「これはあいつに助言できなかったことだが、まず武器を変えるべきだった。斧は威力はあるが取り回しに難がある。それにわざわざ業物の斧を作ってくれるやつもない。」

「それは俺の武器もいっしょだぜ。」

「確かにそうだ。だが斧だとより多くの材料が必要だ。さらに構造上に問題がある。どうしても柄の部分が弱い、たとえ鉄の柄にした

としても駄目だろう。実際そうだった。」

「よく分かっているな。まだ何かありそうだな。」

「ああ、後は順番に鎧と盾に慣れさせる。そうすれば優秀な戦士になれた、残念だ。」

「残念か、俺はそうは思わんな。あいつは心が歪んでいた、俺の背中を預けることはできそうにない。」

「それは俺のせいかもしれない。俺は苛立ちのあまり、あいつの面子を潰した。それで誘惑に駆られて魔物に組した。そう思うとやりきれない。」

「考えすぎだ。お前は悪くない。」

「そうか、ならこれから言うことは俺の推論だ。お前が何らかの理由で絶望の淵にあったとする、そこに魔物からの甘い誘惑、例えば世界の半分をくれてやる。そう言われたらどうする?」

「世界の半分か、そんなうまい話は信じない。大体俺に半分渡して、残りの半分で満足するような相手か?」

「正解だ。やはりお前は感情的にも理論的にも信頼できるようだ。」

「及第点はもらえたようだな。それでいい、やっぱりお前はそうでなくてはいけない。冷静に判断して感情に流されない、それが戦う学者だ。じゃあ、俺は先に寝るぞ。」

ガイラが軽く手を振ってテントへと入っていった。俺が落ち込ん

でいると思って、慰めに来たのか。柄にもないことをするものだ。

- - - - -

ガイラと話して落ち着いたのか、その後すぐに眠気に襲われた。テントに入っただけの間に夢の世界の住人となった。

世界の半分をくれてやろう、悪魔がささやく。はい／＼いいえ、俺の返事は……。

別の声が聞こえる、誰かが俺を揺り起こす。

「おい、学者。起きろよ、お前の番だ。」

「……なんだ、ガイラか。もう時間か？どうも寝た気がしないな。」

「しつかりしろよ。じゃあ寝なおす、朝まで起こすなよ。」

再びガイラがテントへと入って行った。また一人で焚き火に向かう。夢の続きが気になる、俺はなんて返事をするつもりだったのだろう。考えたくないのに無心で手を動かす、不思議と作業ははかどっている。

「はい、ケルテン。よく眠れた？」

起きてきたマギーが話しかけてきた。昨日はキラリリカントと命のやり取りをしたらしい。水の羽衣以外の服がずたずたになっていた。夕食を食べた後、気を失ったかのように寝てしまい、今やっと

起きてきた。

「全然、あまり寝た気がしない。マギー、それより君は大丈夫なのかい？」

「ええ、大丈夫よ。あのキラリリカントが馬鹿でよかった。まとも
に相手にされていたら死んでいたのは私だった。ああ、ケルテン、
あなたにお礼を言わないといけない、これが役にたったわ。」

マギーが腰にぶら下げた理力の杖に手を当てた。

「それを使ったのか？何があった？」

「とんでもないキラリリカントだったわ。魔法を見てから避けるこ
とができる、そう言ってたわ。杖の向きから分かるんだって。考え
られる？」

「すごいな、相当な動体視力と運動神経だ。よく勝てたな。」

「今思い出しても寒気がする。あいつに獲物をいたぶる趣味があっ
てよかったわ。あの時はそれに腹を立てていたけどね。」

「サディストのキラリリカントか、ずいぶんと趣味の悪いことだ。」

「同感ね。それであいつは私にダメージを与えて、わざわざ魔法で
回復する隙を与える、こちらの攻撃は全く当たらない。スカラでな
んとか耐えていたけど、あのままではいずれMPが尽きて終わりだ
ったわ。」

「それでどうした？」

「魔法の遅延発動だと？聞いたこともないぞ、どうやるんだ？」

「説明できない、なんとなくできるだけだから。うまくやると同時に二つの魔法が発動したようにも見えるわ。がんばれば追い越すこともできるけど、全く意味はないわね。」

「なるほど大した天才だ。見える内にイオラを置いて、自分をそこと敵の延長線に移動させる。それで理力の杖を構えて待っていたのか。よくやった、君が無事でよかった。」

マギーを抱き寄せる。今はつきり分かったことがある、俺は自分の不注意でマギーを危険にさらしたことに苛立っていたんだ。腕の中のマギーが震えている。当然だ、本来白兵戦をしない魔法使いが白兵戦の達人と戦ったのだ、その恐怖は計り知れない。俺の不安とマギーの恐怖が解消される様により強く抱きしめた。

近衛騎士再編

9 / 18 勇者支援生活 141日目

アレフが一番遅くに起きてきた。その表情は暗く浮かない。

「アレフ、何か気がかりなことでもあるのか？」

「大丈夫です、特に何もありませんよ。」

空虚な返事が返ってきた。マギーもガイラも驚いている。

「どうしたんですか？おかしいなあ、昨日の夜もローラ様にも同じ様なこと聞かれましたよ、僕は何も変わっていないのに・・・。」

アレフが虚ろな目で食事をしている。その目には何も映っていないようだ。

「心ここにあらずだな、ガイラ、何か心当たりはないか？」

「うーん、昨日ガルドの首を斬った後で謝っていただろう、もしかして人を斬ったことがなかったのかもしれん。」

「ああ、そうか。よく新兵がなると言われる病気だな。倒すのが魔物の内は罪悪感を感じなかったのだが、同じ人間を殺したことは、無意識にその事実を受け入れられないんだ。」

「でももし捕縛して城に連れ帰ったとしても、どう弁護しようとするかは免れないわよ。」

「ことの是非は関係ない。人を殺してしまった、その事実だけが問題だ。マギー、君も他人事ではないかもしれない。」

「そう、その状況にならないと分からないわ。じゃあどうすればいい

ラダトーム城国務大臣執務室。ホフマンズとシュミットが難しい顔で話している。この部屋にしては珍しく他の誰もいない。ホフマンズが他の者を全て追い出してしまったからだ。そこにラルス16世が入ってくる、丁寧に挨拶をしようとするホフマンズをラルス16世が制した。

「そのままでもいい、他に人はおらぬようだからな。シュミット、報告を聞こうか。」

「まず遺族補償金の報告から・・・。」

シュミットの言葉に二人が頷く。現在一番気になっていることだ。

「補償金の額に格差がでています。貴族出身者の戦死者には10万Gから20万Gまでの提示があります。しかし平民の戦死者には1万Gの提示しかしておりません。それも威圧的な訪問で有無を言わせないやり方です。一部ごねた者には多少なりのアップはあるようですが、あまりよい話は聞けませんでした。」

「なんともおろかなことだ。命に値段をつけるか、あの者らしいな。」

「おろかでは済みませぬ、陛下の威光にも傷が付きまます。確かに貴族と平民である程度の格差はあっても仕方がないでしょう。ただその格差に不満がでてはいけません。」

「まあ、そうだの。ではどうすればいい、そなたはどう思う?。」

「はい、今回戦死した者達は一家を支えていたはずです。その者が

亡くなったということはその家は収入が無くなったことになり、それが1年分の俸給に値しない補償金では残された家族が路頭に迷うことになるでしょう。兵士の一月の俸給が1千Gですので、その3年分3万6千Gを最低限としてはどうでしょうか？当然騎士はその1・5倍になります。」

「なるほどのう、しかし3年としたのには意味はあるのか？」

「5年でも10年でも構いませんが、あまり無理な数字では実際の支払いがされない可能性があります。それに開き直って無茶をしないとも限りません。」

「その辺りが落としどころか。では3年分を下限とするよう余から命令をだそう。どの程度の金額になるか？」

「騎士の戦死者41名、一般兵士の戦死者55名、義勇兵の戦死者61名ですので1千万Gから2千万Gが必要になります。」

「シュミット、どうだ、払えそうか？」

「可能です。7、8割の資産が喪失する計算です。」

「ならばそれでよい。ホフマンズ、書類は任せる。」

「分かりました。今日中に提出致します。」

ホフマンズが手元の紙に何かを書きながら返事をする。

「次は石炭の納入業者ですが、陛下の勅命もあってその業者からは納入されました。ですが次はその業者への卸業者へ圧力がかかって

おります。ただ直接関与している証拠はありません。」

「どこまでもおろかな、いつそのこと処分してはどうだ。」

「陛下、それはなりません。まだ大臣派の貴族を掌握し切れていません、それに密通者も見つかっていません。口にするのも憚りますが謀反を起こさないと限りません。まだ近衛騎士の再編も終わっていません。今はまだ復権の希望の糸を切ってはいけません。」

「国王とはいえ、ままならぬものよ。それでその近衛騎士の再編は進んでおるか？」

「はっ、陛下と王女殿下のお出しになった募集ポスターの反響が、大きすぎて困っているぐらいです。近衛騎士隊長代理、以下何名かがその選定に奮闘しております。いくらなんでもあれはやりすぎです。」

「そうか、両手を広げたローラの肖像画に“ I WANT YOU R HELP!” なかなか気の利いた文言だと思うが、くっくっくくっく……。」

ラルス16世が悪戯っぽく笑っている。すぐそばにいるシュミットが笑いをこらえている。

「笑い事ではありません。城下から相当な人数の応募がございました。近衛騎士では力量を試す為に競技会を開く案も出ております。」

「なるほど、なるほど、それもよい案じゃ。」

ラルス16世が嬉しそうに言う。ホフマンスが余計な事を言って

しまったと顔をしかめている。

「ホフマンズ殿、もう手遅れでございます。陛下はすでに決定されたようでございます。」

ホフマンズがペンを持っていない左手で顔を押さえている。

「ホフマンズ、許せ。余も興味が湧いた。必要なら褒章も出せ、祭りになっても構わぬ。どうせなら盛大に行なおう。」

「分かりました、御意に従います。ではそのように近衛騎士隊長代理に伝えておきます。」

「ほっほっほっほっ、楽しみじゃのう。いかな者が現れるか……。」

ラルス16世が楽しそうに笑いながら執務室から出て行った。残されたホフマンズが難しい顔を、シュミットが苦笑いをしている。

- - - - -

近衛騎士隊長執務室にホフマンズが来ている。執務机いっぱい書類に埋もれたサイモンがうんざりした顔で出迎えた。

「ホフマンズ、こんな所にめずらしいな。」

「好きで来たわけではない。緊急の決定事項を伝えようと思ってな。」

「なんだ、これ以上急げと言われても無理だぞ。」

「それはもういい。無理に急いで選べとはもう言わん。」

「どついうことだ？急がなくてはいけないことは承知しているんだ。それを急ぐことはないだぞ。」

いつもなら文句しか言わないサイモンが、逆に理解を示した。

「サイモン、お前が言っていた競技会の話に、陛下が興味を持たれた。」

「はあ？あれは冗談だ。陛下が興味を持たれたなど、悪い冗談だ。ホフマンス、お前らしくないぞ。」

「冗談ではない、本気だ。早急に大会の予定を決めてくれ。必要な要員は貸す。」

「ま、まじかよ。分かった、皆で相談してすぐにでも決める。近衛騎士全員召集だ。」

ホフマンスを放っておいてサイモンが部屋の扉を開ける。

「おい、近衛騎士全員を集めろっ！」

サイモンが大声で近衛騎士を招集する。なんだ、なんだと騎士達が集まってきた。

「あの競技会の話が正式に決まった。お前ら、知恵を貸せ。」

サイモンのその声に集まった近衛騎士達がどよめく。とりあえず
ホフマンズはこの騒ぎに巻き込まれないようにそつと部屋を後にし
た。

天啓

9 / 20 勇者支援生活 143日目

「アレフ、元気になったわね。」

魔物を相手に戦っているアレフを見てマギーが俺に言った。

「違うな、あれは代償行為だ。罪の意識を魔物を倒すことで解消しているだけだ。本質は別のところにある。」

「そう、でも悲しいね。どうにかして救ってあげたいわ。」

「それができるのは俺達ではないな。ローラ王女なら何とかできるかもしれないが、アレフのことだ、何も伝えていないだろうな。そもそも自覚症状がないからな。」

さつきから俺とマギーが戦闘に加わらずにしゃべっているのには理由がある。相手がメタルスライムだからだ。メタルスライムを発見したら俺とマギーでピオリムを二重にかける。あとはガイラとアレフに任せてみているだけだ。

「ねえ、ケルテン。あなたは戦わなくていいの？」

「ああ、トラウマがある。昔この刀がミスリルじゃなかった頃、メタルスライムで刀を台無しにしたんだ。あの時と同じ様に刃を潰したくない。」

そんな会話をしているとアレフとガイラが戻ってきた。

「ああ、もうっ！また逃げられた。」

悔しそうにアレフが大声を上げた。アレフが感情をむき出しにするのは珍しい。多分心がささくれ立っているからだろ。隣を歩くガイラが両手を上げている。

「いざ倒すとなるとうまく行かないものだな。お手上げた。」

「あと一日だけ粘ろう。それ以上は時間が惜しい。」

「了解。アレフもいいな。」

アレフが無言で頷く。その目は獲物を探して光り輝いている。

ラダトーム城近衛騎士選抜競技大会運営本部。異常に長い名前の札が城の一室にかかっている。サイモン、ステファン、ジョルジョが大量の書類とにらめっこをしている。

「ジョルジョ、結局何人集まった？」

「214名です、隊長代理。」

「大会のお触れを出して一日で応募を締め切ったのは正解だったな。本当は元々応募に応じた連中だけでやるつもりだったんだがなあ。それでもたった一日で100人近く集まるとはな、賞金が出るとすごいな。」

「サイモン隊長代理、基本の大会概要はこれで構いませんか？」

隣で書類を書いていたステファンが、サイモンの感想を無視して書類を渡す。サイモンは興味無さ気に目を通して机の上に放り投げた。

「ん〜ああ、これでいいぜ。割り振りはくじでいいな。」

書類にはこうある。

ラダトーム城近衛騎士選抜競技大会概要

? 総員214名に近衛騎士23名を合せて予選を行なう。

? 予選では近衛騎士1名に応募者4名か5名を足したグループ毎にリーグ戦を行なう。

? なお近衛騎士は本戦には出場できない。残る者の中から近衛騎士が推薦する者を本戦へと出場させる。

? 本戦は最大64名によるトーナメントを行なう。

? 優勝者には報奨金として1万G、準優勝者には5千G、3位2名には各2千Gを与える。

? なお大会の順位を参考として近衛騎士を選抜する。大会に出場した者は近衛騎士採用を拒否することとはできない。

「とりあえず無様な姿を見せた騎士は、地獄の行軍訓練にでも行ってもらおうか。新人を連れてな。」

「それは大変ですね。皆、気合が入りますよ。」

サイモンとステファンの会話に不思議そうにジオルジョが割り込

む。

「それは何ですか？地獄の行軍？・・・訓練？」

「ああそうか、ジオルジヨは知らないか。アイゼンマウアー隊長による行軍訓練だ。一個中隊でガライまでを4日で往復する。装備は武器、防具、マントのみ。夜営用のテントは持っていくがその中で寝ることはできない。マントに包まって寝るだけだ。食料の所持は禁止、水は竹筒1本の所持だけが認められる。どうだ、この過酷さは想像するだけでも寒気がするだろう。」

「大変そうですね。ない物は現地調達ですか？」

「もちろんだ。そうだ！ジオルジヨ、お前は大会の結果如何に関係なく参加だ、中隊長としてな！」

「なっ！それはないですよ。」

「ジオルジヨ、諦める。これは隊長代理の命令らしいぞ。」

「そういうことだ。俺が味わった地獄も知らずに先輩面はさせねえ。」

絶句したジオルジヨの横でサイモンとステファンが笑いながら答える。

それからしばらくして近衛騎士23名によるくじ引きが行なわれた。1〜214の数字が書かれた棒を全員で引く、運の悪い14名は5本、残りは4本、これで各騎士が担当する相手が決定した。現時点ではこの結果がどうであるかは誰にも分からなかった。

- - - - -

9 / 2 1

アレフの夜営の順番の時には念の為に俺が起きていた。昨晩は特におかしなことはなかった。ただローラ王女との通信はずいぶんと盛り上がっていたようだ。今朝のアレフの顔は昨日に較べて明るい。

「ローラ様に聞きました。城で近衛騎士を選抜する大会をするそうです。」

「それは楽しそうだな。俺も参加できないものかな。」

ガイラが心底嬉しそうにそう言った。

「ガイラ、それは駄目だ。お前は近衛騎士にはなれないだろう?」

「そうだった。実に残念だ。」

「もう一つ面白い話を聞きました。ローラ様の夢の話です。夢の中で鳥になって空を飛んだそうです。ラダトーム城を出てすぐ海を見下ろして飛ぶ。そのうち下にいくつかの島、その後には城壁に囲まれた街が見えた。そのまま真っ直ぐ進んで山脈を越えたところで降り、そこには祠があつて妖精が住んでいた。そんな夢です。」

「只の夢にしてはずいぶんと明瞭ね。このアレフガルドを空から見たことある人なんていないはずよ。」

「それでアレフ、姫さんは何か他に言ってたか？」

「気になるので僕達の都合が良ければ見てきて欲しいと言われまして。駄目ですか？」

俺は黙って聞いていた。その場所は妖精の祠があった場所で、口トの印があるはずの場所だ。アレフとローラ王女の繋がりから見つかると。それは決められたことなのだろうか。

「構わんよ。俺はラルス16世陛下直属の隊士だ。当然王女様の願いを叶える義務がある。」

「私もそれでいいわ。その妖精の話にも興味があるわ。」

「俺もいいぜ。一人残るのは趣味じゃない。」

「じゃあ、いいんですね。駄目と言われると思いました。じゃあ今すぐにも行きましょう。」

アレフの表情にここ3日で一番の笑顔が見られた。

「それは駄目だ、約束は順番に護らないとな。まずミスリルを確保しないとイケない。」

「そうでした。じゃあすぐにもメタルスライムを探しましょう。」

アレフは手にしていた食べ物を中心に放りこんで荷物をまとめ始めた。仕方がないので俺達も同じく朝食を終わらせることにした。

近衛騎士選抜大会予選

ラダトーム城のバルコニーからラルス16世が中庭を見下ろしている。中庭には5ヶ所で予選が行なわれ、それぞれで剣撃が響いている。バルコニーの下と簡易当闘技場を挟んで反対側には階段状の観客席が生まれ、多くの国民がひしめいている。

「近衛騎士隊長代理、今日はそなたは出ぬのか？」

「はっ！今日の私の出番は昼からになります。人数が多いので予選を3日、午前午後の部に分けました。」

「そうか、それは楽しみだ。して國務大臣代理よ、あれはそなたの発案か？」

ラルス16世が観客席の一部と、闘技場の両脇にある屋台を指差す。

「ご明察恐れ入ります。観客席でも特に見易い席は有料にしております。一日100Gの席を100、500Gの席を20用意しました。さらに多少の出店料で屋台を出すことを許可しました。店の規模に応じて3日で300G、500G、1000Gの出店料を取っております。」

「そなたは商売上手だのう……それだけではなからう、他にも何かあるか？」

ラルス16世がにやにやししながらホフマンスに問いかける。

「分かりますか？実はくじを販売しております。市井の者が賭けを行なうのは自明の理でありましたので、こちらでも公式のくじを用意しました。」

ばつの悪そうな顔でホフマンズが白状する。その説明を聞いてラルス16世は実に楽しそうである。

「そうか、では余も何口か乗ろうか。どういった方式のくじか？」

「よろしいのですか、陛下？一口10G、1〜214の数字がランダムに10個記されたくじです。数字に該当する者が、何名騎士に選出されるかによって当選金額が変わる方式のくじを用意しました。」

「なるほど、そなたのことだ、こちらが損をすることはないのだからな。よい、では余も10口乗ろうか。それぐらいの遊びは許されるだろう。」

「御意、では後で届けさせます。」

隣にいるサイモンが何か言いたそうにしているのを見て、ラルス16世が更に口を開く。

「そなたは駄目じゃ。この大会においては如何なる賭けもしてはならぬぞ。」

目に見えてサイモンがっくりと頂垂れた。剣撃の音がたくさん観客の歓声でかき消される。そこには確かに祭りの様相があった。

.....

午前の部が終わって控え室で近衛騎士達が昼食を取っている。

「ステファン、お前の組はどうだ？まさか負けてないだろうな。」

「それこそまさかですよ、参加者の半数は冷やかしですから、滅多なことでは負けられません。」

「そうか、ジオルジヨはどうだ？」

「一人強い方がいました。手加減ができなくて怪我をさせたと思います。この25番のダニエルという人で、僕から本戦出場に推薦してもいいと思ってます。」

ジオルジヨが手元の書類を取り出してサイモンに渡す。

「そうかそうか、本戦が楽しみだな。それでどんな奴だった？」

「細剣の使い手です。僕も自信がある方なのでむきになってしまいました。力でなくすばやい動きで翻弄するタイプです。最後は強引に武器を落としましたから、多分手を捻挫ぐらいはしているでしょうか。」

「ほお、持たせる武器によっては期待できそうだな。俺の相手も手ごたえのある奴だといいな。」

「隊長代理、自重して下さい。それでなくてもトラブルメーカーなんですから。」

あまりに嬉しそうに話すサイモンをステファンが嗜める。

「わかった、わかった、俺はこの木剣を使うから、それでいいだろう？」

サイモンが自分専用のかい木剣を軽々と持って、控え室から出て行った。

「あれで大丈夫ですかね？やる気満々ですよ。」

「実剣ではないから、まあ殺してしまうことはないだろう。私は午後からは陛下の警護だ、ジヨルジヨ、下でよく監視してくれ。」

ステファンとジヨルジヨが呆れ顔でサイモンを見送った。

- - - - -

サイモンは焦っている。対峙している相手は鉄の剣に小型の鉄の盾、ただし左右逆に装備している。左の鉄の剣と同時に左手からギラが飛んでくるのだ。その男はどちらかと言うと華奢である、剣の腕だけならサイモンでも圧倒できるであろう。だがその目は暗く、感情というものを感じない。どこから来るか分からない攻撃にサイモンが躊躇しているのだ。

「おい、近衛騎士っ！だらしがねえぞっ！」

観客席から罵声が飛ぶ。サイモンの頭に血が上る、片手に持っていた木剣を両手に持ち大きく振りかぶる。その隙を見逃さず火球がサイモンに向かって放たれる、誰もがその火球が当たって勝負が決

まると思った。

サイモンの大きな体が大きく踏み込み、火球もろとも相手の右手を木剣で叩きつけた。盾の固定具が弾けとぶ、右の肩を左手で押さえて蹲った。

「勝負あり、救護班っ！」

審判の声がかかって、救護班とその他の何名かが駆け寄った。仲間であるう者達が心配そうにしている中で、救護担当のものが負傷具合を確認して丁寧な手当てをする。熱気が冷めたサイモンも近寄る。

「骨は折れてはいないようです。肩の脱臼ですので、回復魔法で治ります。念のために明日までは動かさないで下さい。」

「すまん、やりすぎた。俺の名で本戦出場に推薦しておこう。出れるな？」

サイモンが頭を下げる。周りの仲間が驚いている中、当の本人は表情一つ変えずに頷いた。サイモンは中間に連れられて壇上から降りていくその男を見ていた。

「レオ、お前魔法が使えたんだな。知らなかったぞ。」

「ああ。」

「でも惜しかったな、近衛騎士隊長相手に善戦したんだ。それより良かったじゃないか本戦出場だ、おめでとう。俺達の方も頑張ってくれよ。」

観衆に紛れて消えていく男達を見ていて、サイモンはなぜか背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

ラルス16世とステファンが上から見物している。

「隊長代理はなかなかの剛剣であるな。荒いが雑ではない、そんなところか？」

「御意。」

ステファンの返事は短い。

「何か言いたそうだのう、構わぬから申せ。」

「はっ！では小官が思いますに、勝ちとは言え褒められたものではありません。冷静さを失っていました。」

「そうか、余は見事な勝ちだと思ったが、見る者によっては違う見方があるのだな。」

「御意。」

「そなたの返事はいいな。よい、あの者をよく補佐せよ。それで余も安心できよう。」

「御意。」

三度ステファンの短い返事がされる。その返事を聞いてラルス16世が微笑んだ。まだまだ剣撃の響きは終わらない。

- - - - -

馬上の人となった俺達がメルキドに向かって駆ける。アレフ、マギー、俺、ガイラの順に並んでいる。

「しかし学者よ、昨日までの苦勞が嘘みたいだったな。」

「そうだな、あっさりと3匹倒せた。目的ができると変わるのかな？」

「そうかもしれないな、それよりお前もすごかったみたいだな。メタルスライムが真つ二つ、俺も目の前で見てみたかったな。」

「必死だったんだ。草むらからいきなりマギーに襲い掛かって来たから、無意識で合せた。斬れたのは運がよかつただけだ。」

「運だけではああはいかないわよ、でも助けられてありがとう。」

馬の速度を落として、俺とガイラの会話にマギーが参加してきた。

「ん、ああ、まあ何事もなくてよかつたよ。」

なんとなくそう返事を返した。ドムドローでの失態は繰り返したくない、その想いが行動に出た。それは口にはしたくない。気づくとアレフの馬がずいぶんと先行している。

「無駄口で遅れている、アレフに追いつくぞ。」

俺の声で三人とも馬に鞭を当てて加速する。先行するアレフは何かに取り付かれた様に前に進んでいる。

城砦都市メルキド 再び

9 / 22 勇者支援生活 145日目

メルキド方面と妖精の祠への分岐点に来ている。

「川沿いに上流に向かえばメルキド、橋を渡れば夢の場所だ。どうする？」

「目的地へと急ぎましょう。早く結果を知らせてあげたいです。」

「俺もそれでいいと思うが、学者よ、わざわざ聞くには何か意味があるのだろうか？」

「ガイラには敵わないな、お前の言う通りだ。ここまま進むとしばらく毒の沼地が続くはずだ、海底洞窟の前よりずっと長い。」

マジーとガイラの二人が不信の目で、アレフが血走った目で俺を見ている。

「なんでそんなこと分かるの？まるで見てきたみたいだわ。」

「それは言えない、言っても信じられないだろうからね。どちらにしろ一度メルキドへ行くべきだと思う。最低でも二日分の飼葉が必要だ。それにロトの鎧の兜とブーツの内張りの修復をしたい。」

アレフを少しでも休ませてやりたい。こっそり目でマジーとガイラに合図を送る。

「それもそうね。私もゆつくりとお風呂に入りたいわ。」

「アレフ、マギーがわがママを言い出したら怖いぞ。俺も浴びるほど酒を飲みたくなった。一度街へ行こう。」

「分かりました。僕だけ行くわけにはいきません。」

ガイラとマギーが賛同してくれたおかげでアレフが折れた。

「じゃあメルキドへ向かおう。この距離だ、ルーラを使っても違和感はないだろう。」

全員を集めてルーラを使う。転移した先に城壁がみえる。街の外には各坐したままのゴーレム、城壁にはいくつかの真新しいバリスタと衛兵が見える。

「旅の者だ、街に入っていいかい？」

門番に声をかける。俺達の顔を見て表情が和らいだ。

「これは指揮官殿と勇者様、お久し振りです。」

「すまないが、どうも君の顔には覚えがないようだ。」

「いえ、いいんですよ。僕はたくさんいた兵士の一人にすぎませんでしたから。どうぞお通り下さい、再建したメルキドにようこそ。」

「ありがとう、では入らせてもらおうよ。」

馬を引いて城門を潜り抜ける。そこには巨大な投石器が二基、防

衛戦で壊れていた門や城壁も直されている。部分的に新しい石が使われている為、色違いになっていた。

「ずいぶんと感謝されているのね。自分のことみたいに嬉しいわ。」

「そう言われると困惑するな。襲撃の原因を作ったのは俺達だ。」

「そうだよな、ゴーレムを倒さなかったら襲撃はなかった。学者の言う通りさ。だから俺達はこの街を守る為に戦った、それだけだ。じゃあ行こうぜ。」

これ以上の話は御免だと言わんばかりに、ガイラが街の中に入っていた。後を追う。

自治区長の屋敷に訪れている。流石に黙ってこの街に逗留するほど厚顔ではない。逗留する宿を決めた後、ガイラはどこかに行つてここには来ていない。マギーも宿でゆっくりしたいと言つて来ていない。

「これは特務隊士殿、勇者殿、お久し振りです。」

「お久し振りです、ボーマル区長。街を見せて頂きました。私が助言した物は全て配備が終わっているようですね。なによりこの街を守りたいという意味が感じられます。」

「褒めて頂いて光栄ですな。あの時にここを守る意思の無い者達はいなくなりました、それに弁務官もね。彼らはどうなりましたか？

「ここは情報の辺境でして少々困っています。」

「弁務官は陛下に対して虚偽の報告をした罪で鉄格子の中ですよ。他の連中は知りません。」

「そうですね、まあ二度と顔を見ることもない連中ですが、気にしても意味はなさそうですね。それでこの度は何用でしたか？まさか只遊興に来たわけではないでしょう。」

「旅の補給によったのですよ。それとこれの修復をお願いしたいと思ひまして……。」

アレフが着ている鎧を指差す。ポームルの視線が舐めるように口トの鎧を見る。

「相当な価値がありそうですね。修復の必要があるとは思えませんか？」

背囊からブーツと兜を取り出してテーブルの上に置く。

「中の革が傷んでいてね。信頼できる職人を紹介して欲しいのです。」

「なるほど理解しました。これほどの品です、信頼できる者でなくては預けることはできませんな。私の名誉にかけて紹介させてもらいましょう。」

俺と区長ががっちり握手をする。隣のアレフは置かれた鎧のブーツを見ている。

騎士選抜大会の予選は終わった。近衛騎士全員が集まって各々が書類と向き合っている。

「俺は初日のレオを押し。残りの試合を見たが十分な強さはある。No.100だ。」

「僕はNo.25のダニエルを推薦します。」

「いいぞ、俺も見ていた。技術だけなら俺より上かもしれん。ステファン、そういえばお前引き分けていたな。」

「その相手を推薦します。No.196、マティアスです。」

それぞれが苦戦した相手の書類をサイモンに渡す。どんどんと本戦進出者の書類が貯まっていく。

「ゴルトベルガー子爵はどうだ、誰が相手した？」

一人の騎士が手を上げる、その手には書類が握られている。

「完敗です。さすが名門の一員。No.1、ゴルトベルガー子爵を推薦します。」

「まあそつだろつな。本来ならこんなことをしなくても近衛騎士になれたはずだ。他には目立った奴はいないのか？見せ場がないと困るぞ。」

「No.9、オトマイアー殿はどうです？騎士と言うより魔術士ですが、なかなか強かったですよ。何とかいう貴族の末端に属しています。」

「採用だ、書類を寄越せ。」

数人の手を介してその書類がサイモンの手に渡る。

「何人かは貴族出身の者がいたんだな。てっきり一人もいないかと思ってたぞ。」

「“有事の時に役に立たぬ貴族など不要だ”とすばらしい陛下のお触れがありましたからね。慌てて養子なり、一族の末端なりの優秀な人材を推薦してきましたよ。」

「知らない名前ばかりとは思ったが、そんなからくりがあったのか。」

「隊長代理もたまには貴族の付き合いをした方がよろしいですよ。私のような平民にはできないことです。」

ステファンが非難めいた言葉をかける。

「耳が痛いね。気に入らない奴らばかりだが副長代理の助言には従おう。」

「そうしていただきたいものです。他の候補はどうですか？」

サイモンが手にした書類の束から数枚を取り出す。

「ああ、これを見ると、この双剣のヴォルフラム、重装のゲアハルト、体術のブルーノ、この辺が有望みたいだな。こいつらに負けた奴は行軍訓練だぞ、いいな。」

近衛騎士達にどつと笑いが起きる。その者達に負けたと思われる騎士が心底嫌そうな顔をする。その顔を見てさらに笑いが起きた。本戦のトーナメントは一日休みを置いて9月24日から行なわれる。ここにいる全ての者が、それをできる限り盛り上げようと思っていた。

ベスト8

9 / 23 勇者支援生活 146日目

結局ガイラは朝まで戻ってこなかった。朝一でアレフとマギーを連れて、区長に紹介された職人の工房へ行きロトの鎧を預けた。本通りをはずれた少々狭い路地を戻る。前から子供が歩いてきた。

「兄ちゃん、ゴメンよ！」

一人が声をかけてきたのでマギーと道を譲る。ぼおっとしていたアレフに軽くぶつかって通り抜けた。

「ギラッ！」

いきなり子供に向かって火球が放たれる。放ったのはアレフ、その表情は厳しい。足に当たって倒れた子供に剣を抜く。

「おい、アレフ！どうしたんだ？」

怖い顔のままのアレフが振り返る。俺の後ろにいるマギーが息を飲むのが分かる。

「すりです。僕の懐から財布を抜きました。取り押さえただけです。」

「あなた、やりすぎよ。相手は子供なのよ。」

「やりすぎ？僕は何も悪くありませんよ、マギーさんもおかしなことを言いますね。」

そう言いながらもアレフの剣は突きつけられたまま、微動だにしない。腰を抜かした子供はぶるぶる震えながら小便を洩らしている。アレフからそれほどの殺気がもれているのだ。

「アレフ、とりあえず剣を納める。後はこの街の者に任せよう。」

「この街の警備に引き渡しても、軽微な罪ということですからすぐに開放されてしまいますよ。」

「手でも切り落とすのか？それとも命をとるのか？お前はどつしたいのだ？」

アレフの剣に迷いが出て軽く揺れている。

「分かりません。」

頂垂れたアレフが剣を納める。子供に駆け寄ってホイミを使う。

「すりなど二度としないことだな。相手によっては命と引き換えになるぞ。盗んだ物を返せ。」

その子供が振るえながら懐からサイフを取り出して俺に渡した。そのサイフをアレフに手渡す。素直に受け取ったアレフにはもう殺気を感じない。大通りから声が聞こえる。

「そこで何をしている！」

警備兵が数人駆け寄ってきた。物音を聞きつけてやってきたのだらう。

「すりを捕まえた。少し手荒なことをしたので治していたのだ。」

俺の説明を聞いた警備兵があつと声を上げた。

「これはあの時の指揮官殿ではありませんか。お久し振りです。」

「ああ、挨拶はいいからこの子を引き取ってくれないか。面倒事は避けたい。」

「はっ！申し訳ありません。しかしよく捕らえていただきました。我々も困っていたのです。」

「困っていた？どういうことですか？」

「言いづらいたのですが、この子供達はこの街を見限って逃げた者達の子供です。置いていかれてやむなくこの様なことをしています。」

「誰も面倒を見ないのか？」

「誰かが面倒を見ていたらこんなまねはしていません。無責任に逃げた者の子供ということでもしる迫害されています。」

警備兵が諦めたような口調で話す。

「分かった。さっき子供達と言ったな、他にも幾人かいるわけだ。なんらかの対策を区長に提案しておくから、とりあえずこの子を預かってくれ。少ないがこれを使うといい。」

懐からゴールドの入った袋を取り出して警備兵に押し付ける。その中身を見て驚いている。

「こんなに受け取れません。」

「いいから取っておけ。いずれ区長から連絡があるまで任せる。」

振り向くとアレフが不信を露わにしている。ここにこのまま居続けるのは危険だ、そう判断したので立ち去ることにした。暗い目をしたアレフを連れて宿屋に戻る。

「アレフ、区長と会談があるので今日は出発できそうにない。今日は休んでいていいぞ。」

俺の提案に軽く頷いてアレフが部屋に入っていった。マギーの心配そうな目が俺を見る。

「どうしたのかしら？らしくないわ。」

「ワイト・アープ症候群だ。」

「ワイト・アープ……何？よく分からないわ。」

「ある物語の登場人物からつけられた病気の名前だ。真面目で有能な法の番人がなりやすい心の病で、微罪ですら許すことができない。ある種の代償行為だ。」

「じゃあ、まだこの前のことを気にしているのね。」

「ああ、そつだ。なんとかしないとイケないな。」

俺とマギーは黙りこんで、アレフが消えた扉を見つめていた。

.....

「あらやだ、負けちゃいましたわ。見かけ倒しですのね。」

「そこは情報通りですわ、わたしは近衛騎士に伝手がありますのよ、おほほほほっ！」

本戦の観客特別席では、着飾った貴族のご婦人が花を咲かせている。一緒にいる貴族の男達はそれに反して不機嫌である。

「それにしても、近衛騎士の権威も地に落ちたものです。本来、我等貴族から選出されるべきものを！」

「そつは言いまして先の大戦と防衛戦で、かなりの者が死にました。当家の一員をこれ以上減らすわけにはいきませんな。まあ血生臭いことは下賤な者どもがお似合いですよ。」

「そつ言われる男爵家からも出場させておりますが、どこで見つけてこられたのですか？」

「妾の子ですよ、生まれたときは邪魔でしたが、こんなところで役に立つとは、いやいや何が功を成すかは分かりませんな。貴殿のところのゴルトベルガー子爵が一番の人気、羨ましい限りですな。」

「いえいえ、あれも当家では鼻つまみ者ですよ、これまで飼ってお

いて正解でしたな。あつはつはつはつ！ところで男爵は誰に賭けておいでですか？」

問われた貴族が手元の紙を確認している。

「ゴルトベルガー男爵、オトマイヤー、あとはゲアハルトなる者に賭けております。男爵にはぜひとも勝って貰わないと困りますよ。」

「そうですね、最低でもその二人には上位を占めてもらわねば、我等貴族の沽券に係わる。それに私の賭け金も無駄になる。」

二人が持っているのは公式のくじではない。手元にあるのは本人が書いた覚書でしかなく、実は大貴族が胴元の非公式の賭けをしているのだ。掛け金は最低1000G、上位3名を順に当てる俗に言う三連単である。

会場では本戦初日ということで4試合が同時に行なわれている。近衛騎士達によりある程度仕組まれたトーナメント表に従って、64名の本戦出場者達が闘技台の上上がり順に戦っている。大会運営側としてもいきなり強者が潰しあうのは好ましくなかったのだ。仕組んだ当人たちも後ろめたさが無いわけではなかったが、これは近衛騎士の選抜試験の一部と言いつつ、強さの目立つ8名を別のブロックに配した。

結局、仕組んだ通りゴルトベルガー男爵、オスマイヤー、マティアス、ダニエル、レオ、ゲアハルト、ブルーノ、ヴォルフラムの8名が残り、翌日の最終戦を戦うこととなった。

夜になっても会場のボルテージは下がることは無い。昼は闘技場であった壇上は夜には歌唱、舞踏、歌劇などの舞台になり、それに

熱狂する者達でいっぱいだ。さらに城下街のいたる所ではここまでの戦いぶり、最終戦の予想を肴に酒を酌み交わしている。一番しわ寄せが来ているのが、この日に限って城下街を守るべく配置された兵士達であった。

城下街に溢れる下馬評は次の通りだ。

本命はゴルトベルガー男爵、恵まれた体格で剣と盾のオーソドックスなスタイル、魔法による回復もこなし、全体的に評価が高い。貴族達の後押しもあって人気も高い。

オスマイヤーは貴族の推挙によって出場している。剣はあまり得意ではないが、うまく距離をとつての魔法には定評がある。

近衛騎士副隊長に引き分けたマティアスも評価が高い。オーソドックススタイルで自ら攻撃するのではなく防御から相手を崩すタイプだ。ステファンに近い戦い方で結局決着がつかなかったのだ。

細剣のダニエル。突きを主体とした舞踏のような戦い、若く貴公子然とした外見に女性の観客に大人気だ。見た目だけではなく正確な攻撃とすばやいステップには見るものがある。

謎の魔法剣士レオ。左右逆の装備は相手としても戦い辛い。しかもその攻撃の合間に無拍子でギラの火球が飛んでくる。どちらを対策すべきか？

重装備のゲアハルト、上から下まで分厚い鎧を着込んだ戦士。いかなる攻撃を受けてもひるまず前進してくる姿は敵にとっては恐怖そのものだ。

双剣のヴォルフラム。左右の手に少し短い曲刀を持ち、途切れることのない連続攻撃をしてくる。相手に何もさせずに勝利する、その姿に観客が魅了された。

体術のブルーノ。武器を持たず拳も使わず、気づくと相手は宙を舞っている。何が起きているのか理解できた者はすくない。

本命はゴルトベルガー、対抗はマティアス、単穴としてレオと大體はそう予想されている。だがそれだけではない、誰が勝ってもおかしくはない。明日の結果への期待は増すばかりだ。

- - - - -

ホフマン스가ほくそ笑んでいる。それをサイモンが見咎めた。

「ホフマンズ、悪い顔をしてるぞ。」

「そうか、今回の収支予想をしていたらどうも顔が緩むようだ。慎重としよう。」

「金勘定か、羨ましいな。俺はまだ選別の作業が残っている、ここからが大変だ。」

「なら代わってやろうか？私が騎士選別。サイモン、お前が請求書と収支報告書と格闘、それでどうだ？」

「分かった、分かった、俺が悪かった。まだこっちの方がましだ。」

サイモンが軽く手を振って拒絶する。

「なら自分の職務を果たすのだな。誰が優勝しようとな衛騎士になることに変わりはない。選ぶことよりその先の方が大事だ。」

「その通りだ。ではまたな。」

サイモンとホフマンスが別れる。顔には疲れが見えるが何かを成している喜びに満ちているのが、互いによく分かっていた。

指し示す道

区長の屋敷の応接室で俺とポームル区長二人で難しい顔をしている。

「警備兵から聞きました。恥ずかしいところを見られてしまったようですね。」

「あの子達は加害者であり、被害者でもありませんね。なにか対策はあるのですか？」

「残念ながらありません。たとえ捕らえたとしてもその後がありません。罪にふさわしい罰を与えたところでまた同じことを繰り返すだけです。保護する者もいません、本人達の責任ではありませんがやはり過去は消えませんから。」

「この街にいる限りは……ですか。」

「そうです。あの襲撃の傷跡は思ったより大きいのです。」

「では、できる限り保護してもらえますか？少々当てがあります。」

「保護ですか……分かりました。いつまでにでしょうか？」

「そうですね、明日から二日ほど外に出ますので戻ってくるまでにはお願いします。」

「そんなに申し訳無さそうな顔をしないで下さい。本来は私がしなくてはいけないことです。」

ボーメル区長が俺に深々と頭を下げた。

屋敷を辞した俺は一度宿屋に戻った。部屋ではマギーが浮かない顔をしている。

「ガイラは戻ってきているけど、これからどうするの?」

「あの子供達をなんとかする。罰を与えたり殺したりする以外にも、できることがあるのをアレフに示す。」

「どうするの?」

「ちよつとリムルダールに行ってくる。夜までには戻るから後はよろしく頼む。」

マギーは何か言いたそうだったがすぐに笑顔を見せてくれた。

「ならすぐにでも行ってらっしゃい。多分いい方法を思いついたのでしょう?」

「うまくいくのを祈っててくれ。じゃあ行ってくる。」

できるだけ明るく振舞って部屋から出る。宿屋からだとこころでルーラを使った。

.....

久し振りのリムルダールだ。跳ね橋を渡ると見知った顔がいた。

「おお、ケルテンじゃないか。」

「ちょっと用があつてきた。今日は例の三人じゃないみたいだな。」

「ああ、今日は夜からの予定だ。あいつら、もう完全にここの住人だぞ。」

「それはよかった。じゃあ爺様のところへ行く。」

挨拶もそこそこにそこを後にした。小さくも懐かしい俺の家へと向かう。

「おゝい、爺様、帰ったぞ。」

無遠慮に家の中に入る、そこには爺さんと一緒に茶を飲んでいる3人がいた。

「ケルテン、お前が戻ってくるのはいつも唐突だ。また何か厄介ごとを持ち込んできたんだろう。」

爺さんの視線が一度目の前の三人を通る。

「そうですね、我々もその厄介ごとの一つですか。」

ドゥーマンが笑いながら文句を言う。両脇のクロウとゲオルグも笑っている。

「これは口が滑ったようじゃ、それで何の用だ。」

「何人かの子供を引き取って欲しい。この前襲われたメルキドの戦災孤児だ。」

「そうかメルキドも襲われたか、ここリムルダールもメルキドと同じく中央とすら連絡が取れん。今初めて聞いたわい。」

爺さんがため息をつきながらそう言う。ドゥーマンら三人も頷いている。

「ここは大丈夫か？」

「心配は要らない、お前が残した防衛計画のおかげだ。だから子供が何人か増えようが誰も困らん。どんな子供か聞いてもいいか？」

「もつともな質問だ。じつはメルキドが襲撃された際に、キメラの翼を使ってラダトームに逃げた者達がいる、当然金目の物を持ってだ。それでメルキドに残されてしまった子供だ、引き取り手も無くやさぐれて、掘りや引ったくりで何とか生きている。このままではいずれ命すら失うだろう。」

俺の言葉に疑問があるのだろう、ドーマンが口を開いた。

「あんたがそこまでする理由があるのか？」

「ある。俺の勇者が危つくその子供を斬ってしまうところだった。俺なりの解決方法を示す必要ができた。」

「お人好しだな。分かった、そういう奴らなら俺達が扱いなれてい
る。」

ドゥーマンの自虐的な言葉にクロウとゲオルグが頷く。

「では任せる。早ければ3日で連れてくる。爺様、すまないが手配を頼む。」

「お前は相変わらず常識外れだのう。まあよい、このじじいに任せよ。」

「ありがとう。悪いがすぐに行かなくてはならない。また来るからよろしく頼む。」

急いで家から出てルーラを使う。あの地図で俺が不自然な移動をしていることがばれたかもしれない。その時の為にうまい言い訳を用意しておこう。

9 / 24 勇者支援生活 147日目

何事も無かったようにアレフが起きてきた。

「昨日はすみませんでした。どうも疲れで苛ついていたようです。」

アレフが無邪気とも言える笑顔でそう言った。マギーが驚いている。

「まあいいさ、じゃあすぐにでも街を出よう。いつまでもローラ王女様をお待たせするわけにはいかないからな。」

「そうですね、では用意してきます。」

アレフが自分の部屋に戻る。残された俺達は呆気に取られている。

「学者、アレフは本当に大丈夫か？」

「なんとも言えん。今はローラ王女のことだけが唯一の支えだ。その支えにすぎるしかない。」

「本当はすぐにでローラ姫様に会わせてあげたいのだけど・・・。」

「なら急ごう、少し無理をしても目的地へ急ごう。」

「具体的にはどうするの？今までだって急いでいたのよ。」

「俺とマギーで馬にピオリムを使う。ピオリムの効果時間は約10分、何度も使用するとかなりの負担になるが馬の疲労が見えたらベホマで癒す。マギー、それでいいか？」

「任せなさい。私にできることで助けになるならそれでいいわ。」

「なるほどな、だが多分の俺のライには要らない。今までお前らの馬に合わせてゆっくり走っていたぐらいだ。」

アレフが戻ってきた、もう準備は万端のようだ。俺達もすぐに荷物をもとめて出発した。

.....

決勝トーナメント表が決勝会場に貼り出された。遠くからでもよく見えるように大きく書かれている。

第一試合 双剣のヴォルフラムvs細剣のダニエル

第二試合 魔法剣士レオvs重装備のゲアハルト

第三試合 魔術士オスマイヤーvs体術のブルーノ

第四試合 ゴルトベルガー男爵vs剣士マティアス

第一試合と第二試合の勝者が準決勝を戦い、同じく第三試合と第四試合の勝者が戦う。その両方の勝者が決勝戦を行なう。なお三位決定戦は行なわずに共に三位となる。

発表された対戦カードによって会場が騒ぎ始める。

第一試合は共に速攻を得意とする二人だ。どちらが強いだろうか？この疑問は前から問われ続けていたのだ、その決着が期待される。女性人気のあるダニエルにはファン倶楽部ができていて、その為やっかみもあって男の観客はヴォルフラムの勝ちを望んでいた。

第二試合はどちらかという魔法剣士レオに期待されている。

重装備のゲアハルトは物理攻撃には強いが魔法にはどうだろうか？ここまでギラしか使っていないレオの真価が問われる。

第三試合、近づけばブルーノ、離ればオスマイヤー、分かった結論だがどちらが自分の間合いを保つことができるかは誰にも分からない。

第四試合、ある意味この決勝トーナメントの一番のカードである。どちらも基本的なオーソドックススタイル、やや攻撃寄りのゴルトベルガーと防御のマティアス。どちらが勝つか？玄人好みの戦いになるだろう。

この決勝トーナメントでは特別に国王ラルス16世と王女ローラが挨拶をして、全試合を観覧することになっている。その二人がバルコニーに姿を現した時、会場に歓声が上がった。ラルス16世が右手を上げると会場がしんと静まり返る。

「此度は余とローラの召集に、多くの者が応じてくれたことを嬉しく思う。余も皆もこれからこの国を守護する者達の力量をその目に焼き付けられるであろう。」

ラルス16世のよく通るバリトンが会場に響く。代わってローラ王女が右手を振りながら前にでる。

「皆様には大変ご心配をおかけしました、この場を借りてお詫びいたします。またこの大会に参加された多くの方々と、ここにお集まり頂いた皆様に感謝いたします。ではこれから戦う方々も怪我をなさいませんように気をつけて戦い下さいませ。」

ローラ王女の激励に会場が盛り上がる。

「ではここに近衛騎士選抜大会決勝トーナメントを開始する。」

国務大臣代理のホフマンズによって開催が宣言された。

決勝トーナメント1回戦

壇上で双剣を持った男が舌舐めずりをしている。

「最速決戦だとよ、はっ！結果は分かりきったことだ。」

「……………」

細剣の遣い手ダニエルは口数が極端に少ない、ヴォルフラムの挑発に対しても無言を貫いている。ヴォルフラムは革の鎧、両手に刃渡り60cmほどの曲刀を持っている。一方対するダニエルは細身の鉄の鎧、装飾のされた鉄の兜、右手にレイピア、左手に小型の手持ちの盾を装備している。観客が固唾を飲んで見守る。

「では近衛騎士選抜大会決勝トーナメント第一試合を始めます。双方、剣を合わせよ。」

警備員と審判員を兼ねているステファンが声をかける。すすつと前に出たヴォルフラムとダニエルが剣を合わせ、双方が後ろに跳び去った。一瞬の躊躇の後、一気にヴォルフラムが距離を詰める。

「ヒヤッハーハー！！！」

ヴォルフラムの右手の曲刀が上から振り下ろされるが、ダニエルの盾によって軽く受け流される。間髪いれずに左手の曲刀が下から盾を襲うが、その攻撃は後方に下がることで回避される。しかしヴォルフラムの攻撃は止まらない、ダニエルは盾と弧を描くように下がることで、懸命にその攻撃全てを受け流す。

「そらっそらっそらっそらあっ！受けてばかりじゃ勝てねえぜ。それもここまでだっ！」

両手の双剣をうまく使ってダニエルの下がる方向を誘導する。角に追い詰められたダニエルの盾が弾き飛ばされた。ヴォルフラムの顔に残忍な表情が浮かぶ。

「へへへっ、もう頼みの盾はないぜ、俺の勝ちだな。その綺麗な顔に傷を付けられなくなかったら負けを認めるんだな。」

ダニエルの表情がふっと緩んだ。天使の微笑み、一部のファンからそう言われる表情、この表情が出る時ダニエルは常に勝利している。

「ずいぶんと余裕じゃねえか、舐めるなっ！」

ヴォルフラムの右の曲刀が振り下ろされる。

ガキッ！

「キヤアアアアアアアアアア！！！」

金属同士がぶつかる音と観客の悲鳴が会場に響き渡る。壇上には振り下ろされた曲刀を、左手に持ったマンゴーシュで受け止めているダニエルの姿。

パキーンッ！鋭い音と共に曲刀が折れる。何が起きたか把握できずにいるヴォルフラムの左手に、ダニエルの細剣が当てられた。

「そこまでだ。勝者ダニエル！」

ステファンによりダニエルの勝ち名乗りがされると、大きな歓声が上がった。優雅な笑顔を残してダニエルが闘技場を後にした。

「近衛騎士隊長代理、何が起きたか説明してくれるか？」

バルコニーから見下ろしているラルス16世がサイモンに声をかけた。

「ソードブレイカーというナイフで受け止め、剣を折りました。この状況を予想していたのでしょうか。」

「ソードブレイカー？」

「受け止める為のマンゴーシユの一種です。櫛状の刃で細い剣なら折ることができます。」

「ほう、よく考えたものだ。隊長代理、そなたならどうした？」

「私ならどちらを相手にしても間合いに入れさせません。折れるような代物でもありません。」

腰に差している鋼の両片手剣の柄に手を添える。

「それが例の工房で作らせた剣か。その剣の使い心地はどうじゃ？」

「極上です。」

「ふむ、それは良かったのう。おっ、次の試合が始まるようじゃ。」

眼下の闘技場にレオとゲアハルトが登っている。魔法剣士のレオ

は皮の鎧、鉄の剣と小振りの鉄の盾を左右逆に装備している。対するゲアハルトは盾を持たない両手剣、通常より分厚い鉄の鎧を装備している。面頬を下ろすと全身で鉄に覆われていない場所は存在しない。

「ずいぶん強そうだのう、相手の者が可哀想になるな。」

「陛下、そうでもありません。あの者は魔法を得意としていますから、見た目だけでは判断できません。」

「そうか、では試合を楽しむとするか。」

重厚な鉄の塊が前進する、大きな両手剣が振り回される度に、客席まで風が起こつてきているような感覚に襲われる。レオにその攻撃を受け止めることはできない、剣や盾で受け止めたら腕ごと持っていかれそうな猛撃を後ろに下がってかわす。レオが大きく距離をとって右手から火球を放つ。

「私に炎は効かんっ！」

くぐもつた声が発せられる。火球が顔に当たるのも気にせず、ゲアハルトが突進してくる。突進の威力を上乗せした上段からの一撃が振り下ろされる。レオの鉄の剣が受け止めるかの様に上がる。鉄の剣ごと両断される・・・会場の誰もがそう思った。

ゲアハルトが片膝をついている。横に飛び去ったレオの右手から電撃の追撃、それでゲアハルトが大きな音を立てて倒れた。

「これまた何が起きたのか分からぬ。」

「あのレオという男、ベギラマも使えるようです。ベギラマを受けると一瞬体が硬直します、あの大きな剣を振り下ろす体勢では致命的です。もつとも剣を目の前で振り下ろされながら魔法が放てるのは、大した胆力です。」

「よく見ておるな。それでそなたならどうする？」

「私は予選である者に勝利しています。私の剣の方が速いと思われ
ます。」

「ふむ、ではあの重装備の者にはどうする？」

「そうですね・・・しばらくは同じく両手で剣を扱って打ち合いますか。剣の質はこちらの方がずっと上です。後は相手が疲れるのを待って、転ばすなり剣を落とすなり何とでもなるでしょう。」

「隊長代理は戦闘には自信があるようだのう。」

「いえそれほどでもありません。アイゼンマウアー隊長と陛下の特務隊士には勝てませんでした。」

「そうか、近衛騎士隊長にそこまで言わせるとは、余はいい臣を持つたようじゃ。それほどは強そうには見えぬがのう。」

ラルス16世が感心している。問われたサイモンが苦笑している。

闘技場では次の試合が始まっている。剣と拳を合せてオスマイヤーが跳び去る。一気に間を詰めたブルーノがオスマイヤーの右腕を取った。これまでの試合なら、このまま対戦相手が宙に飛ばされて試合が終わっている。何か嫌な予感にブルーノが横に飛びのく、オ

オスマイヤーの左手から放たれた電撃がブルーノのいた空間を貫いた。

「なんだ、読まれていたか。」

「当然だ、対戦相手の傾向ぐらい調べておくものだ。」

オスマイヤーとブルーノが、互いを見て不敵な笑みを浮かべる。

「今度はこちらから行くぞっ！」

予想に反してオスマイヤーから距離を詰める。右手の鉄の剣がブルーノの顔に突き入れられる。難なく避けたブルーノがオスマイヤーの懐に入って背負い投げる。オスマイヤーの体が大きく空中を舞う。勝利を確信したブルーノが顔を起こす、その顔に電撃が通り過ぎた。崩れ落ちるブルーノ、空中で無理な姿勢でベギラマを放ったオスマイヤーが変な姿勢で落ちる。

オスマイヤーが左肩を押さえてよろよろと立ち上がる。押さえた右手が薄く光り輝いている。ブルーノは倒れたまま起き上がっていない。

「そこまでっ！勝者オスマイヤー。」

静まり返っていた会場に歓声が沸き起こる。

「さすがにここまで来ると素人目には分からぬ攻防があるものじゃないな。」

「オスマイヤー殿は投げられる瞬間、自分で跳びました。本来なら叩きつけられるはずです。それで宙を舞いながらベギラマ、無茶を

するものです。」

「くつくつくつくつ、いや失礼しました。まさか隊長代理の口から無茶と言う言葉がでるとは思いませんでした。」

隣で黙って聞いていたホフマンズが口を挟んだ。

「そうか、隊長代理は無茶なことをするのか。しばらくは自重せよ、余の命令だ。」

「はっ！慎みます。」

サイモンがホフマンズと睨みつける。知らぬ顔でホフマンズが眼下を見下ろす。

「決勝トーナメント一回戦もこれで最後です。果たしてゴルトベルガー男爵は勝てますでしょうか？」

闘技場に相對している二人は共に鉄の鎧、鉄の剣、鉄の盾。違いがあるのはゴルトベルガー男爵の装備は華美な装飾がなされていることぐらいだ。

「では決勝トーナメント第四戦、始めよ！」

鉄の剣が打ち合わされる。そのままゴルトベルガーの剣が突きつけられるが、マティアスの剣が打ち払う。さらにゴルトベルガーの剣がマティスを襲う、マティアスの盾が受け止める。剣と剣、剣と盾、盾と盾がぶつかりガンガンと鈍い音が会場に響き渡る。二人とも一歩も下がらない、まるで退いたほうが負けとされているようだ。

盾と盾がぶつかり動きが止まる。双方の筋肉に力が入り、互いに跳びずさった。

「お前、なかなかやるな。」

「そう言う男爵こそ。」

「お前、魔法はどうだ？」

「少々。」

「そうか、私も少々だ。なら魔法は互いに無しだ、それでいいなっ！」

「承知！」

ゴルトベルガーとマティアスの攻防が再開する。華麗な剣技を洗練された技術で受け流すかと思えば、強引な攻撃を無理に受け止める。次第に受けきれない攻撃が鎧の金属部分に当たり始めた。マティアスの鎧から火花が飛び散り、ゴルトベルガーの鎧の装飾が飛び散る。動きが止まった、双方肩で息をしている。

「はあ、はあ、はあ、おい、まだやれるか？」

「はあ、はあ、んっ、当然だっ！」

二人の視線が交差する。それを合図に双方が剣を力いっぱい打ち合わせた。

ガキンッ！・・・カランカラン！剣が折れ、折れた剣先が地に

落ちる音が響いた。二人の動きが止まっている。

「男爵、私の負けのようです。」

折れた鉄の剣を鞘に納めたマティアスが、頭を垂れた。

「剣の差でしかないな。しかしありがたく勝ちを頂こう。いずれ真の決着をつけよう。」

ゴルトベルガーとマティアスが硬く握手をする。戦いの決着に会場が沸く。

「隊長代理、双方共にいい戦いであったな。」

「御意。」

サイモンの返事は短い。俺はあいつらに勝てるだろうか？負けはしないだろうが勝つのは楽ではないだろう。サイモンはこれから入ってくるであろう二人の力量を測っていた。

決勝トーナメント2回戦

ダニエルとレオが壇上にいる。会場にはこの二人が口を開くのを見た者は少ない。

「それでは決勝トーナメント第二回戦第一試合開始。双方、剣を合わせよ！」

双方が無言のまま、ステファンにより試合の開始が宣言された。剣を合わせた二人が跳びのく。レオの右手から火球が飛び出す、ダニエルはすでに右に跳んでいて、着弾した場所にはすでにいない。さらにワンステップで距離を詰め、細剣でレオの左手の剣をはじき上げる。がら空きになったレオの胸に細剣が突き立てられる。レオが仰け反って避ける。革の鎧が切り裂かれ、血が飛び散る。レオの右手が動き電撃が放出されるが、ダニエルは大きくバックステップをして避けている。

ダニエルの顔が少し歪む。それでもその美貌はいささかも損なわれない。今のダニエルの一撃は致命傷ではないがかなりの苦痛があるはずだ。しかし目の前の男の表情からは一切の苦痛も動揺も感じない。

動揺を胸に隠してダニエルが再度間合いを詰める。同じくレオも前に出て剣を合わせる。幾度も剣と剣がぶつかり合う。剣の技量はダニエルの方が上、一瞬の隙をついてレオの鉄の剣が弾き飛ばされた。

「はっ！」

気合と共に突き出される細剣、鮮血が飛び散る。ダニエルの細剣が完全にレオの左手を貫いている。ダニエルが勝った、誰もがそう思った。ダニエルもそう思ってた体の力を抜いた。

レオが貫かれたままの左手で細剣を握る。意外な行動に動揺したダニエルが細剣から手を放す。レオの右手からベギラマ、放たれた電撃と自ら跳び退いた勢いでダニエルが吹っ飛んだ。裝飾された兜が脱げて長い黒髪が現れた。全身を貫く痛みを耐えてダニエルが立ち上がり、腰のソードブレイカーを抜く。

「女、女じゃないのか？」

観客から声が上がった。会場の全ての目がダニエルに注がれた。

「おい、女が出場していいのか？」

「近衛騎士に女性がいた前例はないはずだ。」

「いやーダニエル様が女なんて！」

いろんな声が響く。壇上で審判をしているステファンの目が、バルコニーの上のラルス16世とサイモンに向けられた。

「陛下、どういたしましたでしょうか？」

「公募の条件に性別を書くのを忘れておったのう。そちらの落ち度じゃ、続けさせよ。」

サイモンの右手が上げられた。それを確認したステファンが試合を再開させる。

レオは無表情で刺さった細剣を抜き、無造作に捨てる。拾った自

分の剣を右手に持って近づいてきたダニエルと対峙する。鉄の剣と短剣では間合いが違いすぎる。ダニエルが追い詰められていく。

ガキツ！ダニエルの逆転の一手、鉄の剣をソードブレイカーで絡めとる。ダニエルが右手に力を込めて剣を折ろうとする。レオの右手が動いてそこから電撃が放たれ、ダニエルがそのままの格好で崩れた。

「そこまでっ！勝者レオ。」

無表情で立っているレオ、倒れたままのダニエル。ステファンが駆け寄って試合を止めた。医療担当が壇上にかかる。

「なんとも言い難い戦いじゃ、逆転の逆転の末の、また逆転。どこに勝ちがあるかは分からぬものよ。」

「お父様、あの方は大丈夫ですか？」

「王女殿下、命に別状はありません。」

ホフマンスが下の医療担当の手の合図を読み取ってローラ王女の質問に答えた。

しばらくの休憩の後、ゴルトベルガー男爵とオスマイヤーが壇上に上がる。

「ここで男爵と当たるとはついてない。」

「そうだな、決勝で当たりたかったものだ。そうすれば双方の一族の名誉も保たれたものを。」

「ふん。一族の名誉など糞食らえだ。つい先日まで厄介者、急に手を翻して英雄扱いだ。」

「私も似たようなものだ。妾の子だとともに相手にもされたことのない私に、近衛騎士になれば勝手なものだ。しかもこの大会には必ず勝てとのありがたい仰せだ。」

「なるほど・・・だがどっちが勝っても恨みっこ無しだ。」

「承知した。」

二人の軽口が終わったのを確認したステファンが、間に割って入る。

「もうよろしいですね。では決勝トーナメント第二回戦第二試合開始。双方、剣を合わせよ！」

ゴルトベルガー男爵とオスマイヤーの剣が合わされる。

「があっ！」

いきなりゴルトベルガーが苦痛の声を上げる。動きが止まったゴルトベルガーにオスマイヤーの剣が襲う。体勢が崩れたのを利用してゴルトベルガーがそのまま倒れこんで剣を避け、転がって距離をとる。

立ち上がるうとするゴルトベルガーに向かって、オスマイヤーの手が向けられる。ゴルトベルガーからダーツが飛び、オスマイヤーの右手に刺さる。

「まさか剣を介して電撃を流すとは考えたな。」

ゴルトベルガーが起き上がりながら声をかける。

「もしかして卑怯とでも言うのか？」

「いや、この試合方式をうまく利用したものだと感じている。」

「それはどうも。しかし男爵も手癖が悪いね。」

オスマイヤーが手に刺さったダーツを抜き、投げ捨てる。その隙をついてゴルトベルガーが踏み込み、オスマイヤーの首に剣を突きつけた。

「まいった。まともな試合なら勝ち目はない。」

オスマイヤーが両手を上げて負けを認めた。

「そこまで、勝者ゴルトベルガー男爵。」

観客には壇上で何を言っているのかは聞こえていない。呆気なく終わった試合に不満の声が漏れている。壇上の二人が仲良く降りていった。

「一見しただけでは分からぬ攻防があったようじゃな。隊長代理には分かったか？」

「残念ながら私には魔法の活用はよく分かりません。いずれ聞いてみることにしましょう。」

「そうか、魔法は不得手か。まあ近衛騎士の隊長に全てができる必要はないのう、使える者さえ使えばそれで構わぬ。」

「御意。」

サイモンの返事はまたしても短い。サイモンにできることは決して多くはない。こんな時に頼りになる奴が近くにいないことに苛ついていた。

準決勝での負傷を癒し万全の状態で戦う為に、決勝戦は昼から行なわれることになった。

- - - - -

ガイラの馬が先導している。ピオリムをかけられた馬は、普段からは考えられない速度で走ることができる。しかし上に乗っている人間はそうではない。あまりの乗り心地の悪さにマギーが根を上げた為、この案は却下された。

「アレフ、ごめんなさい。私にはあれは耐えられないわ。」

「仕方ありませんよ。僕もあのままで何時間も進めるとは思えません。」

街をでて見知らぬ人がいなくなったせいか、アレフの表情は穏やかだ。

「そうだアレフ、近衛騎士の選抜大会についてローラ王女様から聞

「いないか？」

「ローラ様は今日のから観覧するそうです。ベスト8による決勝トナメントですよ。」

「いいなあ、俺もそんな大会に出てみたかったな。なあライ、こんな所で走っているだけじゃ退屈だよな。」

ガイラの問いかけに愛馬ライがいなく。言葉を理解しているようだ。

「今回の大会が好評なら、またそれに近い大会が行なわれるさ。平和な時代に名誉だけをかけた試合もいいだろう。」

「そうか、平和になっても闘いの場があるか。」

「平和になつてからも闘いしかないのかよ。まあガイラらしい。」

「そう言うつお前こそどうするんだ？」

「俺にはやりたいたいことがいっぱいある。世界を回って過去から未来を探索、魔法の研究もまだ終わっていないし、鍛冶屋に付き合つて新素材の研究をしてもいいな。そうだ、アレフ、お前は何がしたい？」

「僕ですか？そんなこと考えたことなかった。竜王を倒す為に強くなる・・・じゃあ竜王を倒したその後は・・・。」

「アレフ、その後のことは俺には教えてやれない。何がしたいのか、誰と一緒にいたいのか、どこにいきたいのか、自分で考える。そう

でない。平和にする意味が無い。お前一人が全ての苦勞と苦痛を背負う必要はどこにもない。」

「誰と一緒にいたい・・・ですか？」

アレフが小さく呟く。俺もマギーもガイラもその答えは分かっている。ただその答えは公には口に出せない相手だから、アレフは無意識に遠慮して身を引こうとしている。俺は未来を知っているからその背中を押してやるだけだ。

決勝戦

観衆が決勝戦の開始を今か今かと待っている。会場にひしめく観客がここまでの闘いを繰り返し褒め称え、これから行なわれる闘いに期待している。同じく貴賓席では今大会の出場者一門が話の華を咲かせている。

「よかったですな、貴殿の家の者が決勝戦まで駒を進めることになりました。」

「はっはっはっは、当家の名誉も保たれて安心致しました。オスマイヤール殿も惜しかったですな。」

「あまり図に乗られても困りまする故、まあ3位ぐらいが適当ですよ。」

「たしかにそうですね。ではうちのヨハンが優勝でもしたら、何か褒美でも考えておかねばいけませんかな？はっはっはっはっは！」

隣にはこの場所が似つかわしくない者達が居心地が悪そうに座っている。

「レオのおかげで特等席で見物できるのはいいが、場違いだよな。」

「うん、俺達のような一介の何でも屋が居る場所じゃないことだけは間違いない。周りを見るよ、貴族と金持ちしかいねえ。」

「だよなあ・・・しかしレオってあんなに強かったか？いや、それ以前に魔法なんか使えたっけ？」

「見たこともないな、実力を隠していたとも思えんが・・・うん・・・。」

使い古された武具を身に着けた二人が小さな声で話していた。

- - - - -

「これより近衛騎士選抜大会決勝戦を始める。双方、前へ！」

ステファンの声にゴルトベルガー男爵とレオが前に進み出る。もっとも会場の歓声が大きすぎて、二人に声が聞こえているわけではない。なんとなく審判の手振りに従っているだけだ。ステファンの手がクロスし、後ろに退いた。

ゴルトベルガーが控えめに鉄の剣を突き出し、レオの剣が無造作に合わされる。何もなかったことに安堵したゴルトベルガーがそのまま間合いを詰める、同じ距離を退くレオ。ゴルトベルガーの猛攻を冷静に剣と盾を使って受け流す、受け損なった剣が幾度も身体を掠めるが、レオの表情は全く変わらない。

攻勢のはずのゴルトベルガーは焦っていた。普通なら猛攻に晒された者はなんとかしようとするや焦りが表情に出るものだ。だが目の前の男には一切の焦燥は感じられない、今までの傾向からするとこちらが把握できないタイミングで魔法が放たれている。その隙を与えない為にも攻撃の手は止めない。

いつの間にか会場では剣撃の音以外の音は聞こえなくなった。ゴルトベルガーの猛攻がレオを捉えるか、レオの魔法によるカウンタ

ーが入るか、固唾を飲んで見守る。

「くそっ、お前人間かよっ！」

先にその状況に耐えられなくなったのはゴルトベルガーだった。吐き出した言葉と共にレオの心臓の位置に鉄の剣を突き出す。

「キヤアアアアアア！！！」

会場から悲鳴が上がる。レオが貫かれ血が飛び散る、悲惨な光景が想像される。

「ぐあっ！」

苦痛を口に出したのはゴルトベルガー、一瞬の硬直の後、剣から手を放して大きく距離をとった。鉄の剣はレオの肩口に刺さったままだ。レオが無表情で剣を抜く、血が飛び散るが一言も発しない。

レオの手が薄く光り傷口が塞がっていく。ゴルトベルガーも魔法を使い、体を貫いた痛みを癒す。

「やつはベホイミ、俺はホイミ、それに俺の剣は奴の後ろか・・・どう見ても俺が不利だな。」

ゴルトベルガーが小さく呟く。盾の後ろからダーツを取り右手に隠す。レオが距離を詰めてゴルトベルガーを襲う、無表情に攻撃を続けるレオとは対照的に、必死な形相のゴルトベルガーが鉄の盾だけで防御し続ける。さっきのは逆に、ゴルトベルガーの鎧にレオの剣が当たり装飾が飛び散る。

うまく剣をうけながしたゴルトベルガーが、レオの剣の間合いの

内側に飛び込み、鉄の盾を思いつきり叩きつけ、レオが吹き飛ばす。吹き飛ばしたレオに向かってダーツを投げる。ダーツはレオの盾に当たって地面に落ちたが、レオが体勢を立て直す間にゴルトベルガーが自分の剣を拾う。

「さて剣を拾ってはみたが、どうしたものか？」

再び剣を構えたゴルトベルガーを見ても、レオの表情は一切変わらない。レオの左手が前に突き出されて電撃が放出される。大きく飛び退いて避けるゴルトベルガー、その表情に余裕はない。

「まともに相手にしていて勝てる相手じゃないな。いっそのこと意表をつくか。」

独り言ちたゴルトベルガーが無造作にレオに向かって突撃、レオが電撃で迎え撃つ。

「やらせるかあつ！」

ゴルトベルガーの手から鉄の剣がレオに向かって投げられる。電撃が剣を貫いてゴルトベルガーを襲い、鉄の剣がレオの右手に当たる。鉄の剣で威力の落ちたベギラマではゴルトベルガーの勢いは止まらない。勢いのまま全身で突撃、肩からレオの腹を突き上げる。大きく宙を舞ったレオの体が闘技場の下へ消えた。

ゴルトベルガーが痛む身体を押さえながら鉄の剣を拾い、闘技場の下に向かって突き出す。そこには倒れたまま起き上がれないレオの姿があった。

「そこまでっ、勝者ゴルトベルガー！」

ステファンによってゴルトベルガーの右手が上げられる。会場の熱気が増し、今までで一番の歓声があがる、心地よい歓声を耳にゴルトベルガーの体が仰向けに倒れた。

医療担当が両者の下に駆け寄る。レオの所には二人の仲間も駆け寄っている。

「なんともすごい闘いであったな。これで近衛騎士も安泰かのう。」

「素材は十分です。」

「ではあとはそなたの手腕次第じゃな。」

「御意。」

近衛騎士の再建はサイモンの肩にかかっている。その覚悟でサイモンの表情が引き締まった。

- - - - -

馬を飛び降りたアレフがキラリリカントの集団に突っ込んで行った。慌ててガイラが後を追う。

「マギー、君は馬を抑えていてくれ。俺も援護に行く。」

「どうしたのよ、正気とは思えないわっ！」

「考察は後だ、多勢に無勢だ。アレフ一人では勝ち目はない。」

言い捨ててアレフの元に走る。キラリリカントの集団の手前でガイラが立ち呆けている。

「とても近寄れん。俺ごと斬られそうだ。」

キラリリカントに囲まれたアレフは、自身が傷つくのも気にせず戦っている。猪突猛進、獅子奮迅、阿修羅か鬼神のごとし、近寄ることもできそうにない。仕方がないので離れたところから援護にスカラとベホイミを使う。

不利を悟ったキラリリカントがアレフの間をついて、逃げ出した。

「お前達は生きてはいけないんだっ！」

その背中に突き刺さる電撃、アレフの手から放たれている。見ていたガイラの表情が曇る。

「むごいな。そこまでしなくても……。」

ガイラの呟きはそれ以上聞こえなかった。

「敵を全滅させました。さあ先を急ぎましょう。」

戻ってきたアレフが自分の馬に飛び乗る、さっきまでの威勢はない。駆け出したアレフに俺達がついて行く。

「さっきのは何だったんだ？」

馬を寄せてきたガイラの口から疑問がもれる。

「正気の見じゃなかったわ。でも戻った時はいつもの目になってたわ。」

「メイジカメラの時はいつも通りだったな。何かへんなスイッチがあるみたいだ。」

「へんなスイッチ？」

「ああ、アレフのトラウマを呼び起こす何かがあるようだ。街の外なら問題無いと思っていたのだがそれだけではないな。」

「最後に変なことを口走っていたな。お前達は生きてはいけない”魔物”はいえあいつの言いそうな言葉じゃない。」

「アープ症候群の典型的症状だ。己の正義を貫く為に一切の妥協をしない、たとえそれが自分の命を失いそうでも無理に解決を急ごうとする。」

「ここままだとどうなるの？」

「いずれ猪突猛進の末……死ぬ。」

「じゃあ何とかしないとっ！」

マギーの口調が強くなる。

「何も考えていないわけではない。今は目的地へ急ぐっ。」

暗く沈んだ空気の中、馬で駆け続ける。

表彰式

ゴルトベルガーとレオの回復を待ってから表彰式が行なわれる。会場から帰る者は少ない、結果はすでに分かっているのだが、やはり荣誉ある表彰式は見たいものだ。

近衛隊長代理サイモンと国務大臣代理ホフマンズを両脇に、ラルス16世が闘技場のある中庭に降り、壇上の更に一段高い台に登る。その台の前にはゴルトベルガー、レオを先頭に8名が二列に並んでいる。

「此度の初の大会にして実にレベル高い大会であった。この優秀な者が余の元を集まったことを嬉しく思う。では皆も待っていることだ、表彰式を始めよう。まずは3位となったオスマイヤーとダニエル、そなたらの力量は優勝した者と較べても遜色ない。精進することでも更なる高みを目指すがよい。」

名指しで声を駆けられたオスマイヤーが、胸を張りそこから貴族らしい礼を返す。対するダニエルは困惑した表情を見せている。

「何か言いたいことでもあるのか、よいから申せ。」

直接問われたダニエルが申し訳なさそうに口を開いた。

「陛下、申し訳ありません。身分を偽って出場致しました。この罪は如何なる罰を受けようとも誰も恨みません。」

「そうか、よい覚悟じゃ。しかし女性がでてはならぬとの要項はなかった故、与える罰もなからう。のう、国務大臣代理よ。」

「はっ！要項に記さなかったのはこちらの落ち度ですので、責めるのは酷かと思われませう。」

「だ、そうだ。近衛騎士と言えば男と思われているが故に、わざわざ男装までして参加するとは殊勝なことだ。して本当の名を何と言う？」

「陛下、ダニエラと申します。」

「そうか、ダニエラと申すか。ダニエラ、一つ残念な知らせをせねばならぬ。そなたは近衛騎士にはなれぬ、力量はともかくやはり女性の入隊はできぬ。」

「しかし、陛下……。」

「そなたの言いたいことは分かる。しかし、たとえそなたが男達の中にあることを気にせずとも、やはり他の近衛騎士達はそなたが気になるだろう。多分それは隊のトップラスには働かん、分かるか？」

「はい、残念にございます。」

「そうだろう、余も残念ではある。だからローラ王女付きの武官として採用しようと思う。もちろんそなた次第ではあるが、それでどうじゃ？」

「あっありがたき幸せ。」

ダニエラが深々と頭を垂れる。ラルス16世の粹な決定に会場の

皆から大きな拍手が贈られた。

「次は準優勝のレオであったな。冷静沈着、剣と魔法の融合の極みに感心したぞ。」

相変わらずレオの表情は全く動かない。

「ふむ、何か言いたいことはないのか？」

「では、一つ。」

重々しく不気味な声が会場に響いた。

「茶番のような大会を開いて近衛騎士を集めようと、陛下の命を守ることはできません・・・」

あまりに不敬かつ大胆な発言に会場のほとんどの者が息を飲む。

「なぜなら、ラルス16世っ！お前はここで死ぬからだ！」

レオの左手が前に突き出されて電撃が放たれる。武人ではないラルス16世ではベギラマには耐えることはできない。

「ぐっっ！」

ラルス16世とレオの間に飛び込んだサイモンが苦痛の声を上げる。だが怯むことなく、その勢いのまま左から切りあげる。レオの革の鎧ごと切り裂かれ、鮮血がが噴き出し、5mほど飛ばされて倒れた。

「陛下をお守りしろ！」

サイモンが苦痛に耐えながら配下に命令する。壇下から数人の近衛騎士が駆け上がりラルス16世を囲む。

レオの体が操り人形のように起き上がる。その視点は定まっていな
い。

「失敗か、実に残念だ。だが次も助かると思うな……」

全く口を動かさずにそれだけ告げると、レオの体が糸が切れた様に崩れた。近衛騎士達が慌てて駆け寄り取り押さえる。

「もう死んでいます。」

想像を超えた事柄に会場がざわつく。その中で近衛騎士達が動き、レオの死体を壇下に下ろす。他の近衛騎士がラルス16世を囲んで城へと誘導する。その間、何の説明もない会場はざわざわしている。

「魔物の刺客はすでに倒され、陛下は御無事。皆の者、静かにせよ！」

壇上の一番高い所に立ったサイモンがよく通る声で宣言する。その声に少しずつ会場が静かになった。

「表彰の式は近衛騎士隊長代理サイモンが陛下の替わりに続ける。ゴルトベルガー、前に出よ。」

ゴルトベルガー男爵が少し躊躇ってから、前に進み出る。

「ゴルトベルガー、此度の大会、見事であった。今後は近衛騎士として励んでもらおう。表彰がこのような形になったのは残念であるが、近衛騎士たる者は如何なる場合でも陛下をお守りせねばならぬ、その模範は示せたと確信している。」

「はっ！近衛騎士の重責、しかと拝見させて頂きました。」

「よろしい、では他の者も大儀であった。ではこれにて近衛騎士選抜大会を終了する。」

会場には得心が行かぬ者達がざわざわしたまま残された。壇上にあつた者も呪縛が解けた様に少しずつ散っていく。しばらくして兵士によつてラダトーム城の中庭から全ての者が追い出された。

.....

ラダトーム城謁見の大広間、ラルス16世が玉座にある。

「陛下、此度の不手際申し訳ありません。」

サイモンが片膝をついて頭を垂れる。

「いや、そなたには命を救われた。礼を言わねばならぬ。」

「恐縮でございます。ですがあの様な者を陛下に近づけたのは我々の失態であります。」

「ふむ、今回のことは余の我俣から始まったことだ。しばらくは表に出ることを控えるでしょう。しかしあれは一体何で会つたのだろ

うか？」

ラルス16世の問いに大広間が静まり返る。

「陛下、私は戦うことに関しては素人ではありますが、見ていて分かったことがあります。」

ホフマンズが口を挟んだ。その場にいる者が続きを促すかの様にホフマンズを見つめる。

「あのレオと申す者は戦い振りといい、最後の言といい、人間とは思えません。」

「ふむ、そなたもそう思うか。見事な戦い振りにあえて見逃してはいたがそう考えるのが妥当であろうな。しかし近衛騎士隊長代理よ、よくあそこで動けたのう。」

「はっ、言葉では説明し辛いですがなんとなく嫌な予感がしました。」

「予感とな・・・これまた説明のつかぬことだのう。」

「失礼致しました。最近魔法を得意とする者とよく戦う様になりました、誰かが魔法を使おうとする気配みたいなものがなんとなく分かる・・・無理に説明するならそんなところでございましょうか？」

「ではその予感とやらに感謝せねばならぬ・・・そうだ、もう代理は外してもよからう。断わることは許さぬ、これは命令だ。」

「はっ！謹んで拝命いたします。」

「ではローゼンシュタイン近衛騎士隊長よ、以後職務を尽くせ。それと今回の件に関して詳しく調べさせよ。」

「御意。」

「ホフマンズ國務大臣代理も調査させよ。本当に魔物の策謀なら対策せねばならぬ。」

「御意。」

「そなたにはまだやらねばならぬことがあるはずだから、今日はこれまでにしよう。」

ラルス16世が玉座を立って、奥へと引っ込んだ。残されたサイモンとホフマンズが胸を撫で下ろす。

「危ない所であった。サイモン、お前よく割り込めたものだ。私は全く動けなかった。」

「仕方あるまい。俺は武人の務めを果たしただけだ。」

「そう言ってくれれば助かる。しかし体は大丈夫なのか？」

「ふん、俺の体はそこらの誰よりも丈夫だ。それに来ると分かるものなら耐えることも可能だ。じゃあ俺は行くぞ、まだ選別の仕事は終わってはおらん。早急に使える者を増やさねば体が幾つあっても足りん。」

サイモンがホフマンズに背を向けて、近衛騎士の控え室に姿を消した。ホフマンズは何か声をかけるべきだと思ったが、何も言うことができなかった。大きなため息をついてホフマンズは自分の執務室へと入っていった。

ロトの印

9 / 25 勇者支援生活 148日目

日が落ちる頃、目的地付近に辿り着いた。オレは昨日からずっとトラマナを使用し続けてへとへとだ。夜もまともに寝れない為、MPの回復はできていない。毒の沼地にかすかに残っている石床と崩れたと思われる石材の上で、なんとか一息できる場所を確保した。

「今日はここでキャンプしよう。アレフ、ローラ女王様に手がかりになりそうなことを聞いてくれ。」

「分かりました。後で聞いておきます。」

「マギー、ガイラ、悪いが寝させてもらう。ここなら動き回らなければ瘴気の影響はうけないだろう。」

なんとか張れたテントに入って、毛布に包まる。猛烈に襲ってくる眠気に意識を手放した。

「学者、ずいぶんと疲れていたようだな。」

「ええ、やっぱり本人が言う通り、私とは最大MPが大分違うみたい。同じような感覚で魔法を使用しちゃ駄目ね、気をつけるわ。」

「そうか、俺には全く想像できないことだな。あいつは何でも自分でやろうとするからなあ。」

「アレフのことで心労もかかっているようで、なんとかしようと思

識しすぎているみたい。」

「そのアレフはどうしている？」

「あれっ、さっきまでそこでローラ姫様と何か話していたはずなんだけど……。」

マギーとガイラが回りを見渡す。夜の帳の向こうにはアレフの姿は見えない。

「しまった、姫さんとの話を邪魔したくないからと、目を放していたのが裏目に出たか。どうする、ケルテンを起こすか？」

「駄目よ、これ以上負担をかけたくない。明かりと毒避けの魔法を使うから回りを探しましょう。私がこっちでガイラ、あなたがそっち。それでいい？」

「それは得策でないな、マギーはここに残。俺達が戻る場所を確保していてくれればいい。目印にできるだけ強い光を維持してくれ。」

「確かにその通りね、じゃあ魔法をかけるわ。毒避けは1時間ぐらい持続するわ、明かりは20分毎に光量が下がるから二回光量が落ちたら戻ってきて。」

「了解、暗闇の中を彷徨うのは遠慮したい。最悪の場合はカメラの翼を使って城に戻ることにする。じゃあ探してくる。」

魔法をかけられたガイラが闇の中へ消えていく。10mぐらい離れたぐらいで手にしている明かりは見えなくなった。

- - - - -

闇の中をアレフが彷徨っている。本人は気づいていないが、ロトの鎧に宿る神気によって瘴気の影響を受けていない。水鏡の盾にかけたレミーラの明かりを頼りに進む。

「ローラ様、こちらでいいですか？」

右手に握り締めたペンダントに向かってアレフが話しかける。

「そうね、もうちょっと右を照らしてもらえるかしら。」

ローラ王女の指図どおり、アレフの明かりが右を照らす。

「それでいいわ。ではその方向へまっすぐ歩いて下さい。」

傍から見ると異様な光景だが、本人はいたって真面目である。ローラ王女から渡されたペンダントの効果は音声を伝えるだけではなかった、効果時間は半減するが、アレフが見るものは遠く離れたローラ王女にも見えるのだ。

「この先に玉座みたいな物が見えます。あれは何でしょうか？」

「夢の中で精霊様が座っていた場所ではないかしら？そこを探して下さい。」

アレフの手が半壊した椅子を探ると硬い物が手に当たる、取り出されたそれは金色に輝くメダル、その中央にはロトの鎧と同じ紋章

が描かれている。

「それです、間違いありません。私が夢の中で見た妖精様が手にしていた物と同じです。」

「見つかってよかったです、では持ち帰りますね。」

「アレフ様、夢の話につき合わせてごめんなさい。でも本当にあつてよかったわ……………」

「ローラ様？ローラ様？どうしましたか？」

アレフがペンダントに向かって大声で話しかける。しかし反応はない。

「もう効果時間が終わったのかな？いつもの半分もないみたいだ。でもこのメダルを持ち帰ることができてよかった。」

呟きながら手にしたメダルを大事そうに懐にいれる。ふと気づいて回りを見渡す。

「あれっ、キャンプの場所はどこだろう？真っ暗で分からないや、確かこつちから来たはず……………」

アレフは記憶を辿りながら歩く。しばらく歩いていると前から明かりが見えた。

「おい、そこにいるのはアレフか？俺だ、ガイラだ。」

「ああ、よかった。戻れないかと思いました。」

「どこに行っていたんだ。皆心配しているぞ。」

「すみません、ローラ様の導きでこれを取りに行っていました。」

アレフが懐からメダルを取り出してガイラに見せる。ガイラがそのメダルを一瞥する。

「そうか、見つかってよかったな。だが勝手な行動は慎めよ。」

「すみません。ローラ様に頼まれてつい……。」

「まあいいさ、じゃあ戻ろう。いくつか目印を残してあるからそれを辿ろう。」

ガイラがアレフを率いて歩く。しばらくして見えた明かりへ向かって足を進めた。

- - - - -

9 / 26 勇者支援生活 150日目

朝日で空が薄っすらと明るくなるころ、目が覚めた。俺の隣でマギーが寝ている。

(しまった、寝すぎたようだ。)

隣で眠るマギーを起こさないように外にでた。ガイラが火を前に座っている。

「ガイラ、すまん。」

「おう、やっと起きてきたか。ここでの用は終わったから皆を起こして戻ろう。」

「？」

用が終わったただと？意味が分からない。

「アレフが夜のうちに見つけてきた。ロトの鎧と同じ模様のメダルだ。」

「はあ？どうやって毒の沼地の中を探したんだ？」

「さあ、分からん。俺が探しに行ったらもう持っていた。」

「探しにとはどういう意味だ、もしかして一人でどっかへ行ったのか？なぜ俺を起こさない！」

「お前はよく寝ていたからな。俺とマギーでなんとかできると思ったからそうした。」

「しかし……。」

「まあいいじゃねえか。結果うまくいってるんだ。お前がアレフに言ったことじゃないが、お前一人で全てを背負うことはないぜ、俺達にも頼れよ。」

ガイラが俺の言葉を遮って、おどけた口調で俺を諭す。

「すまない、俺も前しか見えていなかったようだ。」

「何、俺はお前らに命を助けられているからな。こんなことで借りが返せたとは思っていない。それよりメルキドに戻って宿屋でゆっくり寝させてくれ、流石の俺も徹夜は疲れた。」

「分かった、二人を起こしてくる。」

マギーとアレフに声をかけて起こし、急いでテントを片付ける。帰る準備は整った、ルーラを使おう。俺がルーラを使おうとする。

「ルーラなら任せて、メルキドまででいいわね。」

マギーがルーラを使う。毒の沼地を離れ、眼下に城砦都市が見えた。

蟠り

メルキドの街に戻った俺は他の三人を宿屋において、一人で区長の屋敷に向かった。俺の来訪に気づいた執事が安堵の表情を浮かべた。案内された応接室で区長を待っている。

「お待たせして申し訳ない。」

入ってきたボーメル区長が謝罪する。

「構いませんよ、それで例の件はどうになりましたか？」

「全員保護致しました。いや言葉を飾っても仕方ありませんな、正確には捕らえてあります。」

「捕らえてですか・・・そんなにひどいのですか？」

「ええ、こちらの話を聞き入れませんから無理に捕らえて、この屋敷の一室に軟禁しています。」

「なるほど先ほどの執事の反応は、そう言うことですか。ではすぐにも説得しましょう、これ以上火種を置いておくのは区長殿も喜ばしくないでしょう。」

「そうして頂けるとありがたい、情けない話ですが当屋敷の者も大変困っております。ではこちらへ。」

執事を先頭に区長、俺と続く。奥の部屋には見張りが二人いる。

「ここまで結構ですよ。後は私にお任せ下さい。」

執事から鍵を受け取り、扉を開いて俺一人で部屋に入る。そこにはこの前捕まえた少年とそれより年下の子供が5人いる。入ってきた俺を不信の目で見ている。

「てめえ、この間のっ！俺達を捕まえてどうする気だっ！」

この前の掏りの子供が荒い口調で俺に詰め寄る。他の子供は部屋の隅で縮こまっている。

「虚勢を張らなくてもいい。別に取って食つつもりはない。」

「じゃあどうする気だ。罰を与えて放り出すのか、俺達を逃がしたらまた同じことを繰り返すぞ。そうしないと生きていけないからな！」

「なるほど、君の言う通りだな。いつそのこと消えるか。」

軽く刀の柄に手を当てる。虚勢を張っていた子供が窓際まで逃げる。隅の子供達がさらに縮こまる。

「殺すのか、やっぱりそうなんだな。俺達は要らないんだ、親もこの町の誰もっ！殺すなら殺せよ、死んでもずっと恨んでやる。」

「そうか死んでもこの街に災いとなるか、じゃあ止めておこう。なら一つ提案がある、聞いてくれるか？」

「嫌だと言ったらどうなるんだ？」

「そうだな・・・どうもできない。だから聞いてくれ、君達をこの街に居させることはできない。」

「やっぱり殺すんじゃないかねえか、この街から追い出されたら魔物に殺されるしかねえ。」

「話は最後まで聞けよ、メルキドに居られないだけだ。他の街に連れて行く。」

子供達がじつと俺の目を見ている。俺も目を逸らさない。

「他の街に行っても知り合いなんていない。結局やることは同じだぞ。」

「知り合いがないなら迫害するやつもないな。俺ならお前達を引き取る様、頼む当てがある。そこでなら食うには困らん、代わりに多少働いてもらうことになる。」

「どうやってそこまで行くんだよ、街の外は魔物でいっぱいだ。キメラの翼を使っても城にしか行けないだろう？それに今城下街にそんな余裕はないって聞いている。」

「よく知ってるな、その通りだ。だが俺が連れて行くのはリムルダールだ。」

「それこそ無茶だつ、行けるわけない。」

「それじゃあ俺の提案は聞けないということか？お前ら全員で相談しろ。俺の言うことを戯言として無視するか、唯一の助けとしてすがってみるか。好きに決めればいい。」

それだけ伝えて部屋から出る。そこにはまだ区長がいる、俺を待っていたようだ。

「お礼を言わなければなりません、本来私の仕事のはずです。」

「只の自己満足です。礼を言われる筋合いはありません。」

そのまま無言で待つ。5分経った、中からノックの音が聞こえた。再び扉を開けて中に入る、今度は区長もついてきた。子供達が口を開くのを待つ。

「あんたの言うことが本当なら聞いてもいい。多分今よりはましだ。」

「そうか、後ろの皆もそれでいいんだな？」

後ろの子供達に視線を送って問いかける。視線のあった子供が首を縦に振る。

「分かった、じゃあ精霊ルビスに誓おう。俺がリムルダールに連れて行く、それで信頼できる人物に君達を預けよう。昼食を取ったらすぐにでも行く。ボーメル区長、この子供達にこの街最後の食事を出してやってください。昼1時に向かえにきます。」

「では執事に用意させます。ありがとうございます、少しでも贖罪の機会が頂けるとは思いませんでした。」

「出発するまでに済ませないといけない用事がありますので、とりあえず失礼します。」

なんとなく照れくさいので区長の屋敷から出て行く。昼間にアレフを連れてロトの鎧を取りに行かないといけない。

.....

4人揃って区長の屋敷に戻ってきた。約束の1時には少し早いが構わないだろう。

「ここに何の用ですか？」

当然の疑問がアレフの口から出た。

「俺とお前の重荷の一つを軽くする為に来た。もうしばらく待て。」

屋敷の入り口で来訪を告げる。執事ができて中に入るよう言われたが時間がないのでここで済ませることを伝えた。しばらくしてポームル区長が6人の子供を連れてでてきた。さつきよりずっと良い服に着替えている。

「お待たせしました。こちらでできることはできる限りしておきました。後はお任せいたします。」

子供達が俺達に引き渡される。一人の子供の顔を見たアレフの目の色が変わった、腰の剣に手が伸びる。

「アレフ、止める。」

「でもこいつは.....。」

「アレフ、お前には謝らなければいけないことがある。俺がガルドの処置を誤ったせいでお前に重荷をおわせてしまった。だから今度はお前の重荷を一つ取り除こう。」

「重荷……ですか？」

「罰を与えたり斬るだけが、解決の方法でないことを示してやる。」

俺とアレフの会話に子供達と区長が引いている。マギーとガイラも心配そうに見ている。

「本当に大丈夫ですか、リムルダールまでは遠く一月以上かかると聞いてますが、こんな状態で無事に辿り着けますでしょうか？」

「お任せ下さい。ではルーラを使います、またいずれ会いましょう……ルーラ！」

詳しく説明するわけにはいかないので強引に話を終わらせた。直接リムルダールに跳んだ。

.....

城砦都市から湖上都市、突然変わった景色に子供達が驚いている。

「おっおい、どうなっているんだよ！」

「秘密の方法でリムルダールに跳んできた、方法は教えない。そんなことより街に入ろう。」

子供達を連れて跳ね橋を渡る。後ろのアレフの表情はまだ硬い。

「おっ、あんたか、相変わらず神出鬼没だな。後ろのが例の子か？」

「ああ、そうだ。多分何人かはゲオルグかドゥーマン、お前に預ける。」

「ん？なんで俺だ？」

「魔法の素質があるならドゥーマン、剣ならゲオルグだ。詳しくは言えないがあまり素性は良くない。お前らならなんとかできるだろう。」

「ひどい言われようだが、反論できないな。」

「じゃあ、爺さんに預けてくる。お前らついて来いよ。」

子供達を引率して爺さんの家に向かう。すれ違う人から色々と言かけられるので簡単な返事を返す。

「ずいぶんと人気なのね。」

「仮にも俺の故郷だ。さあ着いたぞ、ここが俺の家だ。」

「リムルダールの区長にしては質素な家ね。」

当然の疑問なので無視して家に入る。すでに門番から連絡があったようで、爺さんが俺達を待っていた。

「この子達が、不敵な面をしているわい。」

「ああ訳あってメルキドに居られなくなった子供達だ。ただ飯を食わせるとは言わない、農業でも漁業でも何でもやらしてくれ。」

「ふん、お前に較べてばかわいいものだ。剣を振り回したり、魔法をぶっ放したりしないだろう。」

「それは言わないでくれ、俺の連れもいるんだ。」

「そうか、詳しく教えてやってもいいのだが、まあ今日のところは止めておこうか。ではこの子達は任せよ、この街の子として養ってやろう。」

「じゃあ任せる。すぐにも城に戻らないといけないのでこれで失礼する。」

「おう、またいつでも来いよ。」

ここにいと自分のペースが乱される。醜態を見せたくないのだから家を後にした。

「アレフ、納得できたか？」

「よく分かりません。ここに連れてきてあの子供達が立ち直るとは限りません。」

「そうだな、どうなるかは分からん。それでもメルキドに居るよりはずっとましだ。ここでなら悪事で生きていく必要はない。」

アレフが何か考え込んでいる。まだわだかまりは消えてはいない。

壊れた心

久し振りに戻ってきたラダトームは、出発した時より活気に包まれている。ただその中にいくらかの不穏な空気も見られるのが気になる。繁華街を商人や職人が数多く往来する中に、武装した者が混じっている。

一段と柄の悪い輩が俺達の前方に見える。こちらには馬もいるので、端によってやり過ぎす。

気づいた時に遅かった。ふらふらと寄って来た一人がアレフに軽くぶつかり、わざとらしく転ぶ。駆け寄った仲間が抱き起こしながら大声でわめく。

「痛えー、肩がああああ！」

「てめえ、俺の連れに何してくれてんだっ！」

「ちよつと面貸せや。」

テンプレ通りのセリフを口々に吐き、アレフに掴みかかろうとしてあっさり避けられている。周りにいた人は係わり合いにならない様、目を逸らして通り過ぎていく。

「金で解決してやると言ってるんだ。そんないい格好をして女と護衛をつけてるならそれなりの身分なんだろう、ここで大事にしてもいいのか？」

上から下までブルーメタルの鎧を着たアレフは貴公子然と見えな
いことも無い、俺とガイラが護衛でマギーが侍らせている女に見え
たらしい。

恐喝する男の前にアレフがすうっと出る。まずい、完全に目が据わっている。腰の剣に手が伸びる。いきなりの抜剣、狙いは正確に男の首。

キンッ！

少し遅れて抜いた俺の刀がアレフの炎の剣を弾く。目の前の出来事に男が腰を抜かしている。

「なんで止めるのですか？」

アレフが弾かれた剣を上段に構えなおす、本気の日だ。ここでもともにやりあつたらとんでもないことになる。

「やりすぎだ、そこまですることはない。」

「駄目ですよ、邪魔をしないで下さい。こいつらはこの世界には必要ないんだ。だったらここで殺した方がいい。」

「マギー、ガイラ、アレフを止めろっ！」

俺の掛け声でガイラが組んだ拳をアレフの後頭部に落とす。前のめりになったアレフにマギーの魔法、眠ったアレフがそのまま倒れこんだ。当たり前屋達はあまりの出来事に動けずにいる。

「そこっ、何をしている。」

騒然としているこの場に兵士が割り込んできた。自分の刀を納めてアレフの炎の剣を拾う。倒れているアレフの鞘に剣を納める。

「特務隊のケルテンだ、こいつらは恐喝を生業とするものです。取り押さえてください。」

例の王家の紋章の入ったナイフを見せて現状を説明する。こんな風に権力を振りかざすのは本意ではないのだが、ここは穏便に済ませたい。

「はっ！ご苦労様です。おい、捕縛しろ！」

兵士達が意気消沈した当たり屋を取り押さえていく。

「そちらの人は大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない。そいつらには多分、余罪があるだろうから調べるといい。必要なら俺が証言する。じゃあ後は任せた。」

マギーとガイラに目配せして城へと急ぐ。アレフはガイラが抱きかかえて運ぶ。城に駆け込んで陛下への謁見を依頼した。

- - - - -

玉座にラルス16世が座っている、横にはローラ王女。國務大臣代理ホフマンズとサイモン、文官と近衛騎士が並ぶ。俺とガイラ、マギーが片膝をついて控える。俺達の真ん中には横になったままのアレフがいる。

ホフマンズは機嫌が悪い。特務隊士による突然の謁見許可申請、しかも当の勇者は意識を失ったまま、こんな不敬を聞かねばならな

い理由は一つも無い。ローラ王女の口ぞえさえなければ断つたものだ。

「特務隊士ケルテンよ、それで何用だ。陛下も私も近衛騎士隊長も忙しいのだ。簡潔に用件を述べよ。」

「國務大臣代理よ、そう、かつかとするでない。わざわざ余に会いに来てくれたのだ。なにか大事なことがあるのだろうか。」

苛立ちを隠せないホフマンズをラルス16世が嗜める。

「陛下にはご機嫌麗しく、まず報告致します。ロトの鎧、ロトの印を入手致しました。」

「なんとっ！ロトの鎧とな。それは誠か!？」

「そのこの勇者アレフが来ているのがロトの鎧でございます。」

「ほう、となるとやはり勇者アレフがロトの血を引きし者に違いあるまい。して、どうしてそこで気を失っておるのか？」

「はっ！それがもう一つの用件でございます。勇者アレフはその正義感のあまり、心の病にあります。陛下のお力をお貸し頂きたいと愚考しました。」

「余の力とな・・・余にできることであればよいのだが？」

「正確には陛下ではなく、ローラ王女殿下の力をお貸し頂きたいのです。」

俺の答えにラルス16世の温厚な顔が厳格な顔に変わった。

「陛下のお力だけでなく、王女殿下のお力だと！そのようなこと許されるわけがなかるう。控えよっ！」

ラルス16世の機嫌を酌んだホフマンズ國務大臣代理が、俺を嗜める。

「しかし、それでは勇者アレフが壊れます。そうならば竜王討伐はなりません。」

「その時はまた勇者を募ればよい、その為のシステムではないか。先の大会においてまだ人材は野に埋もれていることが証明された。いや、王女殿下が戻られたからには近衛騎士から主だった者を派遣することも考えられよう。そうではないのか！」

「國務大臣代理の言う通りだ、その願いを聞くわけにはいかぬな。」

「お父様！私なら構いません。」

ローラ王女がラルス16世に異議を唱えた。

「黙っておれ、臣下の元へなどありえぬことだ。」

一喝したラルス16世が玉座を立つ、背を向けて歩き出す。

誰も何も言えない。ローラ王女の席の後ろで足音が止まった。

「ローラ、お前が話を聞くために誰かを部屋に呼ぶというなら、それは余の知らぬことだ。」

ラルス16世の立ち去る足音だけが大広間を響き渡った。

- - - - -

人の少なくなった屋敷の一室で暗い目をした男が座っている。前に立つ男が報告する。

「旦那様、大会の表彰式でラルス16世の弑逆事件が起きました。」

「死んではおらぬのか？」

「未遂に終わりました。」

「そうか、実に残念だ。そのようなつまらぬことなど聞きとらない。」

「申し訳ありません。それが困ったことにその犯人が準優勝の男です。例の賭博の件はどういたしましょうか？」

「その者を抜いて決めればよからう。つまらぬことで私の手を煩わせるな。」

「しかし、当たっていた者が騒いでおります。」

「構わん、その分こちらの懐に入る。公的なものではないのだ、公にできることではない。」

「申し訳ありません。ではその様に取り計らいます。」

執事が退室した。

「誰の差し金かは知らぬが無能にもほどがある、どうせやるなら成
功させよ。どいつもこいつも役に立たん……………」
「。」

男の愚痴が止まることはない。

偽りのローラ

9 / 27

アレフは目が覚めた。そこにはなんとも言えない甘い香り、柔らかい布団に天蓋、横の椅子には座ったまま寝ているローラ王女がいる。

「ここは？」

アレフの身じろぎにローラ王女が目を覚ました。

「アレフ様、お起きになりましたか？」

「ローラ様、どうしてここに!？」

「どうしても何もここは私の部屋ですよ。昨日気を失ったアレフ様をあなたの師匠が連れてきました、私に介抱してほしいとお父様に頼んだのですわ。」

「昨日・・・何があったかな？メルキドを出て、リムルダールで子供達を預けて・・・城に戻ってきた、そこで柄の悪い人達に因縁をつけられて・・・そこから・・・？」

アレフは昨日の記憶を探るが途中で途切れる。呟く様に口にした言葉がローラ王女の耳に入る。

「その悪い人達を切ろうとして止められたのですよ、覚えていないのですか？」

「覚えていませんが、何か激しい憤りを感じた気がします。」

アレフが項垂れる。それを目にしたローラ王女が慰めようと手を伸ばし、アレフの頬に触れる。

「とても辛そうな顔をしています。何が辛いのですか？いつからですか？全部ローラに話して下さい。」

ローラ王女の優しい声を聞いたアレフの目から涙が流れる。

「おかしいな、涙が流れている……何も悲しくないのに。」

「感情を閉じ込めてはいけません。では私と別れてからの話をして下さい。まずどこへ行きましたか？そこで何がありましたか？どんなことでもいいですから、全部教えてください。」

「……ローラ様と城に戻った後体を鍛えなおして、それからドムドーラへ……その間ずっと声は聞けてもローラ様には会えなくて……」

アレフの長い長い話が始まった。

- - - - -

ラダトーム城に戻ってきた俺の前には、国務大臣執務室でラルス16世とホフマンス国務大臣代理、そして特務隊士シュミットがいる。国務大臣代理やシュミットはともかく、なんで陛下までここにいいのか理解できない。

「昨日のそなたはメルキドからリムルダールへ移動したな、この地図ではそう見えたがどうということだ？」

大臣代理が俺に詰問する。そうかやはり見られていたか。

「その通りです。確かにメルキドからリムルダール、さらにそこからラダトームに飛びました。」

「それは分かっておる、どうやったのかを聞いているのだ。」

「ルーラを使いました。私独自の解釈で改良したものです。」

「どうということだ、なぜ公開せぬか！」

ホフマンズが一方的に俺を問い詰める。予定通りの言い訳をするか。

「公表しても誰にでも使えるものではないのです。まず行った事無い場所には跳べません。さらに明確なイメージが必要です。」

「ではそなたにしか使えぬのか？もう少し詳しく話してはくれぬか？」

「陛下、では説明致します。まず基本のルーラはラダトームに戻る魔法とされていますが、実は違います。本来は任意の場所へ移動する魔法です。」

「ふむ、なるほど・・・それで？」

「任意の場所と言いましたが、目的地を知らないと使えません。目的地の明確なイメージが必要になります。イメージと目的地が異なる場合は魔法自体が発動しません。私が行けるのはマイラ、メルキド、リムルダール、そしてラダトームの4箇所です。」

「ガライとドムドローがないのはなぜじゃ？」

「行ける場所は昔アレフガルド中を旅した時に、何度も訪れたことのある場所です。ガライはあまり興味をひくことが無かったので明確なイメージができませんでした。ドムドローは魔物によって破壊されたのでイメージと実際の地形が異なる為、使えなくなりました。」

「では俺がメルキドに行った時も、本当は簡単に行けたのか？」

「それは無理です、もとのイメージにそびえ立つゴーレムの姿がありましたので、ゴーレムを破壊して新しいイメージが必要でした。」

「なるほど、筋は通っているな。大臣代理、これで納得できるか？」

「独自の解釈による新たな魔法とは理解しました。ですが陛下にまで秘密にしていたことには納得できません。」

「まあそうじゃのう、それはなぜじゃ？」

「便利すぎるからです。便利すぎて依存するとそれが失われた時に混乱を招きます。そうなるぐらいなら初めから知らない方がましです。多分、今いくつかの使用を考えたと思います。例えばほとんど連絡を取れないメルキドやリムルダールへの伝令、流民の移住、

あとは兵士の派遣といったところででしょうか。」

畳み掛けるような俺の発言にホフマンズが渋い顔をしている。理解はできても納得はできないといったところか。

「さらなる問題があります。一度公表したら教えるという者が現れるでしょう。可能性としてこの魔法の失敗はどこか知らない場所へと行くことになるかもしれない、この危険は理解できますでしょうか？」

「ぬう、それは困るのう。あたり優秀な者を危険にさらすのは王国にとっても損失となるう。ホフマンズ、もうその辺でいいだろう。この魔法はこの者が勇者の為だけに使用する、それでよかるう。」

「陛下がそう仰るのなら、それで構いません。」

「ではそれでよい。他になにかあるか？」

「現在の進行状態を伺っておきたいところです。可能性のない者に期待しても仕方がありません。」

とりあえずルーラの話は終わった。まあその話題ならいくらでも教えてやる。

「竜王の島に渡る為に必要なアイテムは残す所一つ、虹のしずくのみです。これも現存している場所と入手法は分かっています。勇者アレフの回復を待つてから出発する予定です。」

「なるほど、勇者アレフを推すのも分からんでもないな。しかしルーラで癒せるものなのか？」

「分かりません。ですがルビスの写し身とも言われる王女殿下の微笑みならばと、おすがりした次第であります。」

「そうか、ではルビスに祈るとでもしよう。大臣代理、これによいか？」

「はい。」

ホフマンズの返事は短い。俺からも一つ懸念事項がある、この機会に伝えておかねばならない。

「一つお願いがあります。」

「なんじゃ、言ってみよ。」

「この魔法の地図を他の場所に移動して下さい。」

「唐突だのう、何かあるのか？」

「魔物に我々の行方が知れ渡っています。現にドムドローで待ち伏せされ、各個撃破されるところでした。」

「そうか、では余の寝室にでも移動させようか。」

「御意、それで構いません。ではここから外します。」

壁に貼られた魔法の地図に手をかける。ん？何かおかしい、違和感がある。

「シユミット、前からこんな点あったか？」

魔法の地図のドムドローの位置に黒い点が見える。アレフ達の光の点と違う闇の点だ。その点を指差してシユミットに聞いてみる。

「知らない、何時からあったのだ。陛下、この魔法の地図の効果ですか？」

「余も知らぬ。そのような効果は聞いてはおらぬ。」

何か背筋が寒くなるのを感じる。ここにいる4人全てがそう感じているだろう。その不安を消すかのように魔法の地図を壁から外して丸めた。

脅威

近衛騎士控え室は大変なことになっていた。騎士だけでなく文官も入り混じって書類と格闘している。隊長の部屋の扉が開いたままで幾人も出入りしている。黙って入れる雰囲気ではないので、控え室の入り口辺りで声をかける。

「サイモンはいるか？」

「失礼ですがどなたでしょうか？近衛騎士隊長殿は多忙です。」

見たことのない騎士が慇懃無礼な返事をする。高級そうな服に装飾、いかにも貴族っぽい、その顔は自信に満ちている。

「ゴルトベルガー殿、特務隊士のケルテン殿です。」

周りにいた一人の騎士が慌てて口を挟む。

「ああ、あの噂の特務隊士ですか。ローゼンシュタイン近衛騎士隊長から伺っています。ずいぶんとお強いそうですね。一度お手合わせして頂きたいものです。」

その言葉に周りの者達の顔色が明らかに青くなった。俺としては今こいつとやり合うつもりはない。

「まあいずれそのうちにでも……それでサイモンはいるのか？報告しておきたいことがある。」

「失礼ではありませんか、二度も隊長を呼び捨てとは聞き捨てなり

ません！」

ゴルトベルガーの怒声が部屋に響いた。その場にいた者達の手が止まり視線が集まる。

「ああ、そいつはいいんだ、中に入れてもらえ。」

奥の部屋から見えないサイモンの声が聞こえた。その声にしびしびと道を空ける。空いた空間を通ってサイモンの部屋に入った。山積みの書類の束の向こうにサイモンが座っている、その両脇にはステファンとジョルジョ、その向かいに文官が3人座っている。

「ずいぶんと忙しそうだな、出直した方がいいか？」

「いや、構わん。少し息抜きがしたい。すまないが席を外してくれ。」

サイモンが手振りでも文官三人に退室を促す。文官三人が軽く礼をして出て行った。

「話は聞いたぞ、お手柄じゃないか。ロトの鎧だってな、俺にも着れそうか？」

「残念ながら無理だな。お前にはサイズが小さすぎる、どうもロトの勇者はあまり背が高くなかったようだ。」

「そうか、一度ぐらいは着てみたかったな。まあいや、それで何の用だ？」

「実はドムドローで大魔道に襲われた。」

「あの金色のやつか、倒せたのか？」

「ああ、何とか倒せた。その時に気づいたことがある、大魔道同士で情報を共有している可能性が高いと思われる。」

「どういうことだ、もう少し分かりやすいように説明してくれ。」

「今までに目撃された大魔道は、メルキド、ラダトーム、ラダトーム南の海岸、そしてドムドーラ。やつは知能が高く普通に会話ができることは知っているな。」

「私が対峙した大魔道は、前の隊長を会話していました。」

ステファンが俺の質問に答える。

「城門前の大魔道は分らん。アイゼンマウアー隊長があっさり倒してしまったからな。それでなんでそんなことを思った？」

「いろいろと警戒しているようで、一つ一つこちらの手を確認しているようだった。ステファンは見ていただろうが、あの時の大魔道はベギラマを反射されて死んだ、そうだな？」

「ええ、確かに見ました。ルビスの奇跡と言われています。」

「それを警戒したのか、俺に対して何度もギラを唱えてきた。最後にはベギラマだったが、明らかに様子見の行動だと思われる。それにそのようなことを口にしていた。」

「そうか、だがそれがどうした？」

面倒くさくなってきたのか、軽い口調で返された。

「迂闊なことはできないと言うことだ。特に秘匿したい情報などは絶対に知られないようにした方がいい。これまでは倒してしまえばいいと思っていたが、どうもそうではないようだ。」

「どうもよく分からんな、わざわざ戦場でいらんことをしゃべる奴などいないぞ。」

「じゃあこれならどうだ。お前が率いる兵士の弱点、お前の得意とする戦法、使用できる魔法、何でも次に備えることができる。特にまずいのが内側の不和を知られない様にしなければいけない。」

「技術的なことはともかく、内側から崩されることだけは避けたいな。今もそれで苦労している。」

「何かあったのか？」

「ああ、大会の表彰式で陛下を弑逆しようとした奴がいてな、今は入隊させる者に裏がないか調べさせている。」

サイモンが手元の書類を一枚取ってひらひらとさせる。

「大会前には調べなかったのか？」

「当然調べたさ、特に怪しいところはなかった。事後の調査でも怪しいところはない、ただ仲間が言うにはそのレオという男が魔法を使用できることは知らなかったそうだ。大会ではベギラマを使った、陛下を襲う時もベギラマを使った。」

「そうか、なんとも言えないな。そいつの戦いぶりを詳しく教えてくれ。」

「そうだな、俺とやった時はギラだったが剣での攻撃と一緒に、別の手からギラの火球を放ってきた。腹が立ったから火球ごと叩き切った。」

「なるほど、剣と魔法の同時攻撃か。俺にはできないな。他に気づいたことはあるか？」

「私が説明しましょう。ずっと審判をしていましたので一番近くで見えていました。剣と魔法の同時攻撃は何度も見えていますので間違いありません。剣の技量はそれほどでもありませんが、左右逆の装備で対戦相手が困惑します。さらに感情を全く表に出さないのが戦いにくいようです。まるで鎧の騎士と戦っているようでした。」

「おお、それは俺も感じた。戦っているこっちが動揺したぐらいだ。」

「他には？」

「感情がないとは違いますが、こつ手や肩を剣で貫かれた状態から魔法を放ちました。ケルテン殿は魔法に精通してますが可能ですか？」

ステファンが自分の左手と右肩を手元のペンで軽く突きながら説明する。

「絶対に無理とは言わないがやりたくはないな。それに集中が乱れ

れば魔法は発動しない、多分できないだろうね。そいつ本当に人間か？」

「死体は間違いなく人だった。」

ステファンが沈痛な声で語る。気分がいい仕事ではなかったはずだ。

「とりあえず憂慮しておく。考えて分かることでもない。」

重々しい空気で沈黙が続く。

「そうだ、新しい奴を紹介しておこう。おい、ゴルトベルガー、入って来い。」

重い空気を吹き飛ばす様にサイモンが外に声をかけた。しばらくして現れたのはさっきの貴族風の騎士だ。

「近衛騎士ゴルトベルガー、入ります。」

「おう、お前に紹介しておく。陛下直属の特務隊士のケルテンだ、俺の個人的な友人で、職務でも同格だ。それとケルテン、こいつが大会の優勝者のゴルトベルガー男爵だ。」

「ゴルトベルガーです、以後よろしくお願いします。」

「ケルテンです、よろしく。」

手を出すとやたらと強く握ってきた。俺よりはちからは上だな、それだけはよく分かった。

「俺と同じで、本来男爵位を持たない貴族の一人だ。今回の大会前に陛下が出された檄が、思ったより効果を上げたようだ。」

「檄？」

「有事に役に立たぬ貴族など要らぬ”そう仰られました。名門貴族が慌てて一門の中で推挙できる者がいないか探したのです。私もそのうちの一人です。」

「なるほど、では相当剣の腕には自信があるようですね。」

「そのつもりです、今まで負けたことはありません。流石にローゼンシュタイン隊長には敵いそうではありませんが……。」

「じゃあ、ケルテンにも勝てないな。俺はこいつに負け越している。」

「サイモン、そうじゃない。条件によって勝敗は左右される。純粋な剣の腕ならお前に勝る者は一人しか知らない。」

「アイゼンマウアー隊長か、確かにあの人に勝てる気はしないな。それとその条件とやらを考えて戦うことができるのがお前の強さだ。ゴルトベルガー、強さとは剣の腕だけではないぞ、確実に勝てる戦いのできる者が一番強い。」

前半は冗談交じりで、後半は真面目にサイモンが語る。ゴルトベルガーが不思議そうな顔をしている。

「まあ幅の広い思考が必要だと言っている。俺はタイムンではこい

つに勝てないが、副長や補佐、そしてお前らを率いることでそれ以上の強さを発揮できると思っている。まあ今は分からなくてもいいさ、こいつは朝6時に兵舎の訓練所で鍛錬するのが毎朝の習慣だ、一度見に行くといい。」

「では近いうちに拝見させて頂きます。」

「おう、もういいぞ、仕事に戻ってくれ。」

「はっ！では失礼致します。」

正式な敬礼をしてゴルトベルガーが出て行った。ほっとしたような空気が流れた。

「いけ好かない貴族の子弟かと思ったがそうでもないみたいだな。」

「ああ、俺よりはずっと真面目だ。妾の子で表に出て来れなかった不満が内にあるようだ。それ故、より貴族らしくあるうとしている。身内が敵とは辛いな。」

「サイモン、お前変わったな。ずいぶんと人として成長したようだ。」

「そうか？正式に隊長に任命されてから、ホフマンスに心得とやらを叩き込まれた。あれは地獄の行軍訓練と同じぐらいきつかった。」

頭を掻きながらサイモンが語る。

「それはよかったな。じゃあもう行くぞ、まだ行く所がある。」

俺が席を立って立ち去ろうとすると、サイモン達も立ち上がった俺を見送る。その腰には各自に合わせた剣が佩かれていた。

宿題

次は買取センターか、日にちが開き過ぎて行き辛い。そつと覗いてみるとそこには・・・なんだガイラか、メイヤー男爵が素材の山を前にため息をついている。

「お久しぶりです、メイヤー男爵。」

「お久しぶりではありません。ずっと姿が見えないと思ったら、いきなりこれでは酷すぎます。査定を手伝って下さい。」

「ガイラ、すぐに金は必要か？」

「いや、全然。すでに金で買える物に価値はないぞ。俺は元々買う装備も無かったしな。」

「だ、そうだ。時間をかけていいから全部預りをお願いします。」

「そんな適当でいいのですか？それに勇者のレベルも更新されていませんよ。」

メイヤー男爵が本気で怒っている。

「一緒に旅をしていたから技量は分かっている。ガイラがレベル22、アレフがレベル20、それでいいや。」

「これまた適当なことを言いますね。本当にそれでいいのですか？」

「構いません。現にリムルダールからメルキドまで、このアレフが

ルドで二人が行っていない場所は竜王の島だけです。それもこれから渡る手段を確保しに行くところですから、もうレベル査定に意味はありませんよ。」

「分かりました。ではその通り報告書を提出しておきます。素材は私が責任持って査定しておきます。」

「ありがとうございます、では失礼します。ガイラ、例の物は宿屋か？」

「ああ、そうだ。工房だな？」

俺とガイラは宿屋へメタルスライムの外殻を取りに戻り、その足で大工房へ行った。

- - - - -

大工房はすごい熱気だ。5つある炉は全て稼動していて、各炉に3人の職人が働いている。一文字トリヒヤルトの姿は見えない。人の隙間を通り抜けて奥の事務所に入る。そこには一文字トリヒヤルト、それに3人の女性が机に向かっていた。

「軌道に乗ったようだ。お前らは鎚を持たなくていいのか？」

「おう、学者、戻ったのか！おかげさまで大盛況だ。俺らがいなくても回る様になってきた。」

「へえ、それはすごいな。じゃあもう二人は要らないのか？」

「要らないとはひどいな、まあいずれここを誰かに任せるつもりだから、それでもいいかもしれん。」

「それよりミスリルはどこだ？早く出せっ。」

リヒャルトが割り込む、ミスリルの研究に一番熱心だったのはリヒャルトだったな。多分待ちきれなかったのだろう。ガイラの持っている包みから4つの塊を取り出して机の上に置く。真ん中に抉ったような穴が開いている物、拳大に凹み反対側が破裂している物、真っ二つに切れている物である。

リヒャルトがミスリルに飛びつく。一文字は一つ一つを見聞している。

「これは剣で抉った者で、こっちはガイラの仕業だ。これは綺麗に斬れているがどうやったのだ？」

「そこに気付くとは流石だ。俺が斬った、二度とできない。」

「刀を見せてもらっていいか？」

腰の刀を鞘ごと抜いて一文字に渡す。一文字が刀を抜いて刀身を見つめている。

「よかった、刃こぼれ一つ無い。」

「そっちの心配か。まあいいさ、その出来には満足している。」

一文字が俺の言葉に満面の笑みを浮かべて刀を返す。

「あのお、大親方、にやにやして気持ち悪いですよ。」

事務の女性が思わず苦情を言った。それで正気に戻った一文字がいつもの厳格な顔に戻った。

「そんなことより学者、お前がない間に分かったことがある、聞いてくれ。」

リヒャルトが例の合金を並べて語り始めた。

「魔法を使える者の協力で分かったことがある。この金との合金は魔法を反射する特性、銅との合金は魔法を打ち消す特性があるようだ。まだ研究中で確定はしていない。」

「へえ、それが本当ならすごいな。いろんな武器が作れそうだ。」

「そうだ、俺も色々考えたが応用が難しい。例えば魔法を反射したり、打ち消す鎧を作ったとする。残念ながら使い物にならない、ホイミヤルーラさえ効かなくなる。」

「盾でいいじゃないか。」

「それも考えた、使用する者の力量に左右されるな。使い勝手がいいとは思えん。」

「俺はそれでいいと思うがな、ガイラはどう思う？」

「俺もそれでいい、結局どんな武器でも使い手次第だ。」

「なるほど、やっぱり武人の言には重みがあるな。ならこれで盾を

アレフの話は続いている。ドムドローまでの道中の話、ドムドロー砂漠の蜃気楼の話、廃墟と化したドムドローの話、ローラ王女にとっては何もかも新鮮な話だった。アレフが語ると、ローラ王女が喜び、悲しみ、楽しそうに相槌を打つ。語るアレフの感情がローラ王女にも伝わる。

アレフの話が核心に近づく。

「ドムドローでは元勇者のガルドなる男に会いました。」

「元とはどういう意味ですか？」

「器量が足りないと師匠が勇者の称号を取り消しました。僕はその時初めて会ったのですが、師匠がそうした理由がなんとなく分かりました。」

「その理由を聞いてもよろしいですか？」

アレフが表情が少し曇る。

「言いくいなら、無理に言わなくてもよろしいですわ。」

「力があれば何でも手に入る、名誉も地位も金も女も全てだ”そんなことを言っていました。」

「でも武を生業とする者はそうではありませんか？」

「王女様がその様なことを言ってもよろしいのですか？」

ここでアレフから質問が返された。

「良いも悪いもありません、事実です。少し違いますが武力を権力に置き換えると同じになります。私は幼い時からそういった者に囲まれて育ちましたから分かります。」

「そうですか、武力も権力も同じですか……。なるほどローラ様は僕より賢い様です。」

「まあ、アレフ様でしたら。それで何を思いましたか？」

「人もこうなつては魔物と変わらない、そう思いました。それでも何度も説得しましたが聞き入れてもらえませんでした。最後にはその首を僕の手で落としました。人を手にかけてしたのは初めてです。切つたのも命を奪つたのも……。」

再びアレフの目から涙が流れている。その頭をローラ王女が胸に抱く。

「人を切つたことが悲しいのですか、それとも切らなくてはいけないことになつたのが悲しいのですか？」

「えっ、切らなくてはいけないことが悲しい？」

「理解できませんか？城にはいろんな職務に就く者がいます。その中には罪人を捕らえる者、処罰を与える者がいますが、誰もその職務を好んでやるものではありません。むしろやらなくていいならやりたくない仕事でしょう。その様な仕事があることが悲しいことです。」

ローラ王女の言葉にアレフが聞き入る。

「今から思うと、それからの僕は悪事を行なう者が許せなくなりました。僕の財布を盗んだ子供、襲い掛かってくる者、恐喝を生業とする者、全ていなくなればいい。そう考えていたのかもしれない。」

「アレフ様は真面目で優しいから、全てを背負おうとしたのでしょう。駄目ですよ、勇者様はそんなことまでしなくてもいいのです。アレフガルドに光をもたらす、その為だけに力を使って下さい。」

「本当にそれだけでいいのですか？もうこれ以上人を切らなくていいのですか？」

「そのためにお父様も私もいます、必要なら権力でも武力でも使える立場です。だからアレフ様は迷わずに前に向かって歩いてください、後ろを振り向いてはいけません。アレフ様はその名の通り、アレフガルドの光となって下さい。」

いつしかアレフの涙は止まっていた。背中に乗っていた重荷が消えてなくなった、そんな気がしていた。

復活

ローラ王女が穏やかな顔で眠っているアレフをずっと眺めている。苦悶の表情が消え、穏やかなその寝顔は何時間眺めていても飽きることはない。どれだけ時間が経ったか分からない、アレフの目覚めた。

「アレフ様、お目覚めですか？今お茶を用意させます。」

状況を理解できていないアレフが頷く。それを確認したローラ王女が部屋の外に声をかけた。

「誰かいらつしゃいますか」

「ローラ王女様、どうかいたしましたか？」

「ダニエラですか？アレフ様が目覚められます、お茶の用意をお願いします。」

「承知致しました、しばしお待ち下さい。」

部屋の外で誰かの話し声と立ち去る音、振り返ったローラ王女がアレフに再び話しかける。

「お茶が来るまでにお着替えになって下さい。そのままの姿では困りますわ。」

体を起こしたアレフが用意された衣服に着替え終えた頃、控えめなノックが聞こえた。

「用意ができました。入ってよろしいですか？」

「どうぞ、お入り下さい。」

「失礼致します。」

男装の麗人ダニエラがトレイに茶の道具を乗せて入ってきた。緊張の為、動きがぎこちない。

「ダニエラ、もしかしてずっと外に控えていましたか？」

「申し訳ありません。この部屋に男性が入ることは滅多にないと聞いていました。何か間違いがあつてはならないと厳命されています。」

「ダニエラが謝ることはありません。そんなことを言うのはお父様ですね、アレフ様が私に危害を与えることなど絶対にありませんのに。」

半分冗談めかしたローラ王女の言葉にアレフが慌てふためく。それでダニエラの緊張が解けた。改めて手を動かしてお茶を入れる、部屋の中にお茶の香気が漂う。

「そう言えば紹介していませんでしたね。こちらが私の武官のダニエラです。この間の大会で活躍したのですよ。ダニエラ、こちらが勇者アレフ様です、ご挨拶下さい。」

「ローラ王女様付き武官のダニエラです。女ながら武器を携えています、以後お見知りおきを。」

「アレフです。」

アレフの眼が何かを見定めるかの様に細くなる。その鋭い眼にダニエラがたじろいだ。

「アレフ様、また怖い顔をなさっています。ここにはあなたに危害を与える者はいません。勿論私に危害を与える者もいませんよ。」

「ローラ様、すみません。ダニエラ殿も失礼しました。」

アレフが素直に謝った。まだ残る強張りを隠してダニエラが茶を入れ、ローラ王女、アレフの前に順に茶を置いた。

「ダニエラ、あなたとアレフ様、どちらが強いかお試ししませんか？確か前にそのようなことを言われましたね。」

「お許し下さい、ローラ王女様。私では相手にならないと思います。」

ダニエラが膝をついて頭を下げる。

「まあ、そうなのですか、私も少々興味がありましたのに残念です。」

さほど残念そうでもない感じでそう言うと、ローラ王女はお茶を口に運んだ。アレフは何も言えずにいる。左手のソーサーにティーカップを置いて話を続ける。

「アレフ様、お分かりですか？あなたに勝てる者はそうはいないの

です。弱い者には優しくしてあげなさい、少々のおいたなら軽く懲らしめてあげればいいのですよ。」

「ありがとうございます、ローラ様。僕を理解して心配してくれる人がいることに今気付きました。それだけで十分心強いです。」

「きっとそれは私だけではありませんよ。」

「そうですね、なんでそんなことも分からなかったのでしょうか。」

「きっと悪いものに取り憑かれていたのでしょう。もう大丈夫のようですね、ではもうお行きなさい。また何か悩むことがあったらいつでも私に相談して下さい。」

「はい、ローラ様、ありがとうございます。では失礼致します。」

アレフが部屋を飛び出していった。残されたローラ王女が微笑んでいる。

「ごめんなさいね、ダニエラ。脅すようなまねをして・・・でもあの人には必要なことだったの、あの人の周りには強い人ばかりでずいぶんと無理をしているようでしたから、それを分かって欲しかったのです。」

「まだ上があるのですか？」

「強さにはいろいろあります。剣、魔法、知力、権力、財力、それを理解して使える者が強いのです。アレフ様の周りにはそんな方がいっぱいいますよ、一度その目で見てみるといいでしょう。それはきっとダニエラ、あなたの強さになります。」

「難しい話です、私は長らく男に負けまいを剣技を磨いてきましたが、それだけではないと言われるのですね。だとするとローラ王女様もお強いと私は思います。」

ローラ王女が黙って微笑んでいる。これ以上の話は必要ないと理解したダニエラは一礼して部屋を辞した。

- - - - -

宿屋に戻ったアレフは自分のお古の魔法の鎧を手に入れている。口の鎧を手に入れた以上もうこれは必要ない。でも今はこれを感嘆に売却したり処分したりはしたくなかった。師匠やガイラ、マギーはこれを上回る物を持っているし、体格も合わない。

(そうだ、ジヨルジヨにでもあげよう。体格も近いし、近衛騎士になったのだから有効に使ってくれるだろう。)

独り言ちるとさっきまでいた城へと向かう。平服のアレフは腰に炎の剣だけを佩き、魔法の鎧を手に入れている。すれ違う人はそれが勇者だとは誰も気付かない。城に入ったアレフは二階に上がる階段の前で衛兵に声をかけた。

「近衛騎士のジヨルジヨ殿はいらっしゃいますか？」

「多分、おられると思いますが何用でしょうか？」

「進呈したい物があるのでお会いしたいのです。駄目でしょうか？」

ずいぶんと穏やかに下手に出ているアレフに、衛兵の二人はそれが勇者アレフとは気付いていない。

（おい、どうする？）

（とりあえず呼んで来た方が良さそうだな。近衛騎士のジオルジョ殿って隊長補佐だろ。）

（そうだ。こいつも結構いい服を着ているし、取り次がないわけにはいかないだろう。」

アレフが着ている服はローラ王女が用意させた物で、一見貴族の様に見える。よくある就任祝いか何かと二人は勘違いしているのだ。

「では一度確認してきます。失礼ですがお名前を聞いてもよろしいでしょうか？」

「アレフと申します。そう言えば分かると思います。」

「はっ！アレフ殿ですね。しばらくお待ち下さいませ。」

「よろしく願います。」

アレフがそう言うと、衛兵の一人が二階に上がっていった。しばらくすると血相を変えたジオルジョが降りてきた。

「アレフ殿、もうよろしいのですか？」

「ご心配をおかけしました。僕はもう大丈夫です。」

「そうですか、ではここではなんですからあちらの部屋に行きましょ。」

ジョルジョがアレフを城の一室に案内する。テーブルを挟んでアレフとジョルジョが向かい合う。テーブルの上に魔法の鎧を置く。

「今日はこれを差し上げようと持って来ました。僕のお古で申し訳ないのですが、ぜひともジョルジョ殿にもらって頂きたいのです。」

予想だにしない申し出にジョルジョが躊躇う。

「お古なんてとんでもない。このような高価な物をよろしいのですか？まだ必要と思いますが。」

「いえ、ロトの鎧を手に入れましたので僕はもう使いません。それにジョルジョ殿にもらって欲しいのです。僕は誰かにいるんな物をもらっています、形のある物もない物も。だから一つぐらいは僕から誰かに差し上げたいのです。」

「そうですね、ではありがたく頂きます。ケルテン殿の紹介で素晴らしい剣を手に入れました。そこにアレフ殿の鎧を受け継ぐことで職務に励むことができると思います。」

二人が硬く握手をする。二人はライバルでもあり師弟でもある。互いに足りないものを補って成長してきたのだ。その思いが伝わった。

次の予定

ローラ王女の部屋からアレフは帰ったと聞いた。しかし宿屋に一度戻って来た後、どこかに出て行ったらしい。ガイラとマギーと三人で街中を探すがどこにもいない。途方にくれてアレフの部屋で三人で待っている。

「あいつ、どこに行ったんだ？盾も背囊も置きっ放しだぞ。」

「でも炎の剣は持って行ったみたいよ。ほんとにもうどこに行ったのかしら。ケルテン、魔法の地図で分からないの？」

「無理言つなよ、そんなに精度の高いものじゃないんだ。それに今は陛下の部屋に移したんだ、そう気軽に見に行けないぞ。」

「どうして？」

「大魔道がお前の居場所はいつでも分かると言っていた。あの地図を見ているとしか思えないので、見ることのできる者を限定させてもらった。」

「そんなことはどうでもいい、アレフをどうするんだ？」

苛ついたガイラが八つ当たりぎみに怒鳴り散らす。

「俺に怒鳴っても何も変わらんぞ、待つしかない。門番に聞いたが出て行った気配はない。」

俺の言葉に場の空気がさらに重くなった。秀囲気に耐えられない

ので手元の紙に落書きを始める。

リヒャルトは何と言ったかな・・・金とミスリルの合金は魔法反射、銀が待機、銅が消去か。多分ミラーシールドは金との合金を使えば作れるかな、でもこの世界には古今東西存在していない盾だよな。

魔法の反射か、ミラーシールドの反射の確率は25%、これでは使い勝手が悪い。100%なら他にも使い道を考えられる。例えば・・・平行に設置した二枚の間に魔法を放つたら面白そうだ。待てよ、平行より単管にした方がいいな、うまく行けば魔法を凝縮して放出させることができそうだ。

だとすると待機させた魔法を放出させることができれば、誰も見たことの無い武器ができそうだ。この刀でも2〜3分が限度だから何か対策を考えないといけないな。こう円柱状の物に魔法を貯めるだろう、それで発散しない様に反射素材で包む。おお、これはいけそうだ。じゃあさっきの反射筒にこれを詰めて後ろから衝撃を与えろ。そうすれば前方から射出されるかもしれない。ん？どこかで見ただことがあるような気がするな。この世界じゃない、多分俺の記憶の中だ。

気付くと手元の紙にはいろいろと書かれている。意味不明なものから設計図の出来損ないのような落書き、書きかけた途中でぐりぐりと塗りつぶしたものなど、俺以外には全く意味の分からないメモになっている。

突然部屋の扉が開く、俺達の視線が集まる。

「あれっ、皆揃ってどうしたのですか？」

「お前どこに行ってたんだよ、みんな心配していたんだぞ。」

さつきと同じ剣幕でガイラが怒鳴った。その怒りをまともに浴びたアレフが微笑む。

「お前、馬鹿にしているのか？ だったら許さんぞ。」

「すみません、馬鹿にしているつもりはないんです。ローラ様に言われた通りだと思っただけです。」

「お前、何言ってるんだ、本当に大丈夫か？」

「もう大丈夫です、もう独りじゃないと分かりましたから。」

アレフの顔は晴れ晴れとしている、もう吹っ切れたようだな。

「そうか、もう次に行っていていいな。次に行く場所は分かっているか？」

「これを持って聖なる祠に行きます。」

アレフが懐から口トの印を出して見せる。

「その通りだ。保管している雨雲の杖と太陽の石も渡すから一緒に持っていけ。今回は俺はついていけないからガイラと二人だ。リムルダールまでは送る。」

「ちょっと大丈夫なの？ そんなに便利に使っちゃ駄目でしょ！」

「もう陛下はご存知だ。俺にしか使えないことにしてあるから心配
いらぬ。」

「そう、じゃあそれはいいわ。ついていけないのはどうして？」

「行かねばならないことができた。」

「なら私も行く。」

「勅命だ、今回は遠慮してくれ。それにマギーには頼みたいことも
あるし。」

「頼みたいことって何よ、私じゃないと駄目なことなの？」

さっきの落書きでいっぱいの紙をマギーに渡す。覗き込んだ三人
が怪訝な顔をしている。

「何よこれ？でたらめにも程があるわよ。」

「これはひどいな、子供の落書きでももう少しマシだぞ。」

「そうですね、これは何ですか？」

「これはただのメモだ、書き直せばいいだろっ！これを大工房に持
って行って研究してほしい。魔法を使える者の協力がいるからマギ
ーが適任だ。」

異口同音で責められた俺が少し切れ気味に答える振りをする。本
当は勅命なんて嘘だ、ドムドーラに落とす前に行く。これは
元々俺の失態だから、誰にも伝える気はない。

「そう、だったら仕方が無いわね。私は残ればいいのね。それでい

「そうですね、それは見たかったですね。」

「そのうち見せてもらえるさ。それよりその魔法の鎧は、そのままでは使えないぞ。」

「駄目ですか？」

「駄目だな、近衛の意匠を入れられないといけない。職人に頼んでおくのだな、アイゼンマウアー隊長も同じく魔法の鎧を使っていたから、できないことはないはずだ。けどいいなあ、なんでお前なんだ？」

「隊長ではサイズが合わないからじゃないですか？それに僕達は友達ですから。」

「そういう恥ずかしいことを言うなよ。まあいいや、すぐに手配しておけよ。いつ魔物の襲撃があるとも限らん、備えておいて損はない。」

「了解です。」

「ジョルジョがそこから立ち去った。それを羨ましそうに見送ったサイモンが呟く。」

「俺も鎧を新調したいな、この鉄の鎧では心もとない。」

「先の戦いでそこら中が痛んだ騎士の鎧を眺めながら、さらにサイモンは呟いた。」

それぞれの成果

10 / 1 勇者支援生活 156日目

俺一人で廃墟と化したドムドーラに再び来ている。暗き闇点が俺を呼んでいる気がしたからだ。瓦礫の間を掻い潜り、ガルドの墓標がある場所へと足を進める。そこには黒き鎧が突き立てた大斧を手に鎮座していた。そのままならただ鎧が飾ってあるだけに見えるが、そうでないのは分かっている。

「渴望に答えて、来てやったぞ。」

俺が声をかけると面頬の奥に紅き双眸が光る。鮮血の兜飾りを持つ悪魔の騎士が嬉しそうに立ち上がる

「そんな姿になってまで、仇なすとは大した執念だな。だがその姿を見るのは正直忍びない。」

腰から刀を抜いて面と向かう、悪魔の騎士となったガルドも大斧を大きく構える。大上段から俺に向かって袈裟懸け、さらに一回転してからの旋風撃、あの時と同じ攻撃だが飛び込むことも迎撃もできない。違うのは俺だ。自己強化魔法を使用していない、今回は使用しないと決めてきた。多分ガルドは理不尽に負けたと納得できなかったのだらう。ならば今回は素の俺の力だけで勝負を決めてやる。

再び振りかぶられた大斧が襲ってくる、袈裟懸けからの横振りの旋風撃、さらにもう一回転して唐竹割り、進化したその攻撃は避けただけで精一杯だ。叩き付けた勢いを利用してそのまま肩で突進、予想外の攻撃を刀で受け流す。黒い甲冑と刀の間に火花が飛び散る。

交差した俺達は互いに位置を変え、再び対峙する。今度はこちらから切り込む、悪魔の騎士の盾がぎこちなく動く。斧の扱いに較べて遅いその動きを掻い潜って、左腕を内側から斬る。黒い鎧の左腕の肘から先が鈍い音を立てて落ちた。切り口には暗い闇しかない。

「技術と装備が釣り合っていないんだよ。まあ言っても聞こえてはいないだろうがね。」

通常の悪魔の騎士の持つ斧より大きいガルドの大斧が右腕一本で振り回される。あまりにも大振りなその軌道は読みやすい、掻い潜って右肩から先を斬り落とす。

両腕を失った悪魔の騎士が無茶苦茶な攻撃を繰り返す、これも前と同じだ。前はここで手を止めたが今回はそうはいかない。今度こそ確実にあの世に送ってやろう。

(俺はMPを2放出する、MPはマナと混じりて神に捧げん、おお偉大なる神よ、かの者達の魂を救いたまえ、ニフラム！)

刀に破邪の力が宿る、悪魔の騎士の特攻に合わせて一閃。左下から右肩にかけて鎧が斬り裂かれ、その動きが完全に止まる、糸が切れた操り人形の様で鎧がパーツ毎に地に落ちた。

「これで満足か？悪いがこれは貰っておく。」

地に転がっている兜の飾りを掴む。お前との因縁も終わりだ、これで俺もアレフも悩まされることは無くなるだろう。

- - - - -

- - -

アレフとガイラは聖なる祠のある小集落に来ている。

「爺さん、これで文句はあるまい。」

「ガイラ、それは失礼ですよ。」

挑戦的なガイラの口調をアレフが嗜める。その手にはロトの印が握られている。

「よいよい、確かにそれは話に聞くロトの印に間違いないようじゃ。もう追いつく必要もあるまい。では太陽の石、雨雲の杖を渡してもらおうか。」

にやりと笑みを浮かべたガイラが、背囊から太陽の石と雨雲の杖を取り出して渡す。つるつるの頭に白く長い顎髭を蓄えた老人が、受け取った杖を祠の祭壇に祭る。さらに対になる祭壇に太陽の石を祭る。

「なあ、爺さん、そこに置いてどうなるんだ？」

「わしにも分からん、先祖からの申し送りの通りしているだけじゃ。」

ガイラがアレフに耳を寄せて小声で囁く。

「これで只のボケじじいだったら、冗談にもならんな。」
「しっ、ガイラ、聞こえますよ。」

「誰がボケじじいじゃ、まあよい、しばらく待つがいい。伝承によるとこれから何か起こるらしい。」

「アレフガルドの賢者ともあるうお方にしては、何も知らないようですな？」

嫌味っぽくガイラが言い放つ。

「よほど放り出したことを恨んでおるようじゃのう。年寄りの冗談じゃ、まあ許せ……おおつ、何じゃ！」

雨雲の杖から白いもやが発生して、祭壇のあるこの空間を白く染める。さらに太陽の石が光輝き、もやの奥に虹が浮かび上がった。

「おお、虹じゃ、虹が現れたぞ。」

興奮した老賢者が声を上げる。アレフとガイラはその光景に息を飲んでいる。徐々にもやが薄れ、太陽の光が消える。それに伴い消えていった虹の下に、七色に光り輝く一つの宝石が落ちていた。老賢者が宝石を拾い上げてアレフの手に渡す。

「これが虹の雫じゃ、これを魔王の島を望む、岬で使うといい。」

「これで本当に渡れるのですか？」

「ふむ、実のところわしにも分からん。ロトの勇者がそうしたと伝承されておるだけだからのう。」

「胡散臭え。アレフ、もう行くうぜ。」

「そうじゃ、もうここに用はなかるう。さつさと行くが良い、勇者達にルビスの加護あれ！」

老賢者の声と共にアレフとガイラが光に包まれる。その光が消え、我に返った二人は祠の外にいることに気付いた。

「くそじじい、わざわざ追い出さなくても帰ると言っているのに・・・。」

「まあ、いいじゃないですか。無事に虹の雫が手に入りました。一度城に帰りましょう。」

アレフがルーラを唱えてラダトームへと帰る。これで竜王の城へと渡る手段は手に入った。これからの冒険に心が躍り、震える二人だった。

.....

「マギー、こいつらを試してくれないか？手加減はしてくれよ、前みたいに壊してくれるなよ。」

リヒャルトが30cm四方の金属板5枚を地面に立てた木に固定する。

「分かっているわよ！」

昨日も同じ様に金属板に向かって火球を飛ばしたのだが、ギラの火球が弾かれるのを見たマギーが調子に乗ってメラミを放ったところ、金属板は木っ端微塵になってしまった。リヒャルトはそれを懸

念しているのだ。

「ねえ、何で5枚もあるの?」

「ああ、ミスリルと金の配合量を変えてある。効果のほどを知りたい。」

「ふうん、じゃあどいてくれる。行くわよ……ギラ……ギラ……ギラ……ギラ……ギラ……もう一つギラッ!」

放たれた火球が金属板に当たる。弾かれる火球、直撃して固定している木ごと倒してしまうもの様々だ。

「うん、どうもよく分からんな。実はこっちから半々で配合した物、6:4、7:3、8:2、9:1だ。反射したのは半々のと、8:2のか。すまんがもう一度やってくれるか?」

「いいわよ、じゃあ行くわよ……ギラ……ギラ……ギラ……ギラ……ギラ……これで最後、ギラッ!」

さつきとは違う結果がでた。反射したのは半々の物と、7:3、9:1の物だ。

「まだ魔法は大丈夫か?」

「まだまだ平気よ、あと10回は行けるわ。」

「すごいな、やっぱり城勤めの魔術士ともなると格がちがうな。じゃあ頼む。」

リヒャルトとマギーの実験はしばらく続けられた。マギーの言う通り10度に渡って繰り返された実験によって見当がついたようだ。

「結果だけ言うと半々で混ぜた物は100%魔法を反射する。ミスリルの量が増えると増えた量に比例して反射率が下がるようだ。」

「じゃあ、半々で作ればいいじゃないの。」

「反射させることだけ考えるならそうだな。だがこれだと金の特性で硬度が落ちている、武器には不向きだな。9：1だとミスリルに匹敵する硬度を持つが反射する確率は25%程度だ。どの辺がいいかはまた学者と相談するでしょうか。」

「まあそうね、でもこの前の変な筒はどうするの?」

「そうだな、あれは100%反射しないと駄目だから、補強を考えたほうが良さそうだな。」

実験の終わった金属板を集めながらリヒャルトが返事をする。実験の結果は満足いくものだったらしい。マギーはリヒャルトの表情からそれを読み取っていた。

過去から未来

近衛騎士隊長サイモンは多忙である。選定した者の調査、面接、採用後の所属部隊の決定、武器の支給、技量の再確認からの訓練の手配、他にも多くの事毎に書類が必要である。当然事務仕事をしつつ、自身の鍛錬も必要不可欠だ。

「歴代の隊長もこんなことずっとやってたのかよ。書類だけでも死ぬぞ。」

サイモンが台詞と共に机に突っ伏す。

「こんなに多忙なのは長い歴史の中でも始めてではないでしょうか？」

「そうか？なんでそう思う、ステファン。」

「総員の2/3の補充を経験した隊長などいませんよ。多分、ロトの勇者の時代にもいないと思いますよ。」

机から顔を起こしたサイモンが椅子にもたれ掛かり、両の手を頭の後ろで組む。行儀悪く足を机の上に投げ出す。

「そうか、まずい時に就任してしまったものだな。だいたい俺は隊長なんて柄じゃねえんだよ。なんでこんなことになったのかなあ？」

「先の戦で兵を主導して戦い、生き残ったからですよ。」

「それはステファン、お前もそうだろう。俺としてはお前が隊長で

も構わんのだがな。」

「サイモン殿は爵位をお持ちですからね、やはり近衛騎士をまとめるには必要なことなのでしょう。」

「爵位か、それも好きで持っているわけじゃないな。嫌なことを思い出した、俺あの時につまらん身分や位は関係ねえって言っただろう。あれな、ホフマンスに目茶苦茶怒られた、仮にも爵位や位を持つ者が言っってはならぬだとさ。」

「その通りですよ、本来爵位を与えられるのは戦果に対する名誉の証でもありますから、それを軽視してはいけません。さらに軍の位は命令方向を決める大事なことですから、これも軽視できません。極端な話をするなら隊長は私やジョルジョ、他の全ての騎士、兵士に死ねと命令できます。」

「その説教も聞いた。まあそんな命令しないがな。」

「最悪を想定しておいて下さい。陛下を守るために、誰かが犠牲にならなければならぬこともあります。その時に誰かに犠牲を強いるのも隊長の職務です。」

「ああ、理屈では分かっているつもりだ。けどなあ・・・そう簡単には割り切れないな。やっぱりステファンが隊長をやった方がいいんじゃないか？」

「駄目です、剣の技量はサイモン殿が上です。それになんと云うか華があります。隊長には必要なことだと思いますよ。」

「分かった、もういい。本人を目の前に褒めるのは勘弁してくれ、

こつちが恥ずかしくなる。その代わりちゃんと支えてくれよ。俺には難しい作戦立案や宮廷工作はできないからな。」

「作戦の立案はお任せ下さい。とりあえず宮廷工作は敵を作らない様にして下さい。そのうち裏の無いことが最大の武器になるでしょう。」

サイモンが姿勢を正すと机の上から数枚の書類を選び出す。

「善処しよう。じゃあまずこの書類を片付けてしまおう。ジョルジヨ、これとこれをホフマンスに持って行ってくれ。それでこつちの書類にサインをもらったら、その足で工房にお前の鎧を出して来い。それでお前の鎧の意匠の手配は済むはずだ。」

「本当ですか？ありがとうございます。すぐに行ってきます。」

サイモンから書類を受け取ったジョルジヨが部屋から飛び出して行く。

「よろしかったのですか？私物を正式採用するには手続きが大変だと聞いてますが。」

「だからホフマンスに直接頼んだ、一人でも万全の状態にする為ならいくらでも頭を下げるし、何枚でも書類を書いてやる。」

サイモンの言葉にステファンが微笑んでいる。

「この書類は何がいけないんだ？提出したはずのが返って来ているぞ。」

照れくさを隠す為にサイモンが書類を手に大げさに騒いだ。

- - - - -

城に戻ってきた俺は魔法の地図の闇点がどうなったか確認する為に、ラルス16世の部屋に来ている。

「戻ったか、少し前に闇点は消えた。何があつた？」

「魔物になった勇者の怨霊を倒しました、これがその兜です。移民団の襲撃、閲兵式後の襲撃に加わっていました。先日勇者アレフが首を取ったのですが、それから悪魔の騎士に変貌していたと思われます。」

「ではもう出現することはないのだな。」

「絶対ではありません。別の者が誘惑に駆られて魔物側に寝返る者がいないとは限りませんから・・・。」

「そうか、人でありながら闇に堕ちる者もあるか。そなたは堕ちるな、手強い相手になる。」

なんと言っているのか返答に困る。

「陛下、悪いご冗談はお止め下さい。」

「ふっ、冗談なものか。そなたは誰よりも知があり、それを使う術を知っておる。敵にはしたくないのう。」

「陛下、それこそ買いかぶりというものです。」

「ふむ、そなたはそう言うしかないだろうな。では次はどうするつもりじゃ？」

「少々準備をしてから魔王の島に渡ります。それで決着をつけましよう。」

「自信があるのだな。そうか、それで全て終わってからどうするつもりじゃ？この国に収まるそなたではあるまい。」

「……………」

「まあよい、大儀であった。下がってよいぞ。」

「では失礼致します。近いうちに良い結末を報告できると思います。」

部屋を辞する。ラルス16世に何が見えているのか、最後まで分からなかった。

……………

暗い闇を潜り抜けた最奥にとぐろを巻いて眠る竜がいる。その巨躯は紫色の鱗に覆われ、大きな翼を持つその姿は明らかにドラゴンとは一線を画す。そばに何者かの気配を感じたのかいびきが止まり、目を開く。

「勇者を称する者が虹の雫を手に入れました。いかが致しましょう

か？」

「勇者を称する者が再び邪魔をすると言うのか。面白い、では我等が剛の者を集め、丁重に迎えるが良い。」

「それだけでよろしいのですか？」

「大魔道よ、外のことはお前に任せる。勇者なる者が戻る場所を亡くしてやるのも一興というもの。」

「承知しました。ではその様に取り計らいます。」

消えた気配に再び目を閉じる。

(産まれる前からこの地に捨てられたその運命を恨め。)

(正統なる権利を奪い返せ。)

(光を喰らい、闇で世界を覆え、全ての命を生贄とし、世界を絶望で覆い尽くせ。)

この城に満ちる怨嗟の声を子守唄に長き時を過ごしてきた。最初は耳障りであったその声も今はもう心地良いものとなっていた。

ロトの盾

10/2 勇者支援生活 157日目

「ふくん、配合する量で確率が変わるのか。反復実験はどの程度やった？」

「各12回だ。昨日出来上がってから、マギーに手伝ってもらった。」

「12回・・・ギラ60回か、俺にはできない芸当だな。銅の合金でも同じかな？」

「まだ作っていないから分かん。」

「ふむ、盾に使うなら反射より消滅の方がいいかな。こっちの研究も進めてくれ。あと例の魔法の筒はできそうか？」

リヒャルトが懐を漁って、俺の書いた図面を机の上に広げる。

「確実に反射させる為に金50%の合金を使うと強度が落ちる。それを解消する為にミスリルで補強する必要ができた、これが厄介で加工に時間がかかる。」

「なるほど、その厄介ついでで悪いが、こっち側の内径を1mmずつ広げてくれ。」

図面の一部を指で指して注文を加える。リヒャルトの手が動いて図面にそれを書き加える。

「これは厳しいな、何の意味があるんだ？」

「ああ、こっち側から魔法と詰めた筒を差し込む。こうしておけば反対に抜けることはないだろう。」

「なるほど、では充填する方は1mm広げるか。」

図面には直径5cm、長さ30cmの筒にクロスボウの様に持ち手が着いた者が書かれ、その後ろから矢印で直径3cm、長さ5cmの筒が示されている。そこにさらに加筆された、多分俺達以外では何のことかわからないだろう。

「なあ、学者。これだと射出した時に後ろに出ないか？」

「ありえるな、じゃあ後ろに栓をつけるか。ここで反対側に突起をつけて栓を固定する、これでどうだ？」

俺が鉛筆で薄く書き込む。

「それならこっちをピンジにして、反対側で止める形にしよう。」

リヒャルトが俺の下書きにさらに加筆して形が出来上がった。書いているリヒャルトは実に楽しそうだ。

「こっちの魔法を充填する方は、まだ実験していないがこれでいいのか？」

「内側を銀との合金で作ることで魔法を待機させ、金との合金で覆うことで発散するのを防ぐ。理論上は問題ないと思う。付け加える

なら、前方の開いたところを細くした方がいいかな？」

「こんな感じか？」

リヒャルトが鉛筆を持って、円柱に円錐の先端を切り落とした物をつけた形に修正する。

「そうだな、だとすると射出側の筒もこれに合わせた形にしようか。加工が大変になるがいいか？」

「勿論だ、出来る限り完璧を目指したい。そうだ、これが完成したら名前はどつする？」

「うーん、考えておく。また行く場所がある、戻るのは3日後だ。その次はいつ戻ってくるかは俺にも分からん。」

「暗に3日で仕上げると言っているようなものだな。」

「無理しなくていいぞ。現時点ですぐにでも必要でもないからな。それより近衛騎士の武器はいいのか？」

「ああ、一文字もいるし、ドムドローの職人に任せておいても問題ない。」

そう言うリヒャルトの目は図面から離れない。もう作成すること以外に興味がないのだろう。これ以上邪魔しないうちにここを去るとしよう。

.....

アレフ、ガイラ、マギーを連れてロトの遺跡に到着した。遺跡内を進んでいるのだが、目的を告げていないのでガイラは不満そうだ。

「ここなら前にも来たぞ。そろそろ目的を教えろよ。まさか魔王の島に渡る前に御参りに来たとか言わないよな？」

「それも悪くないな。まあいいや、実はここにはロトの盾がある、この前マギーと来た時に発見した。」

「見つけたなら持って来れば良かったじゃねえか？」

「理由があつて持って来れなかったのよ、黙つてついて来なさい！」

ずっと聞いているだけだったマギーが一喝する。それでガイラが黙つてついて来るようになった。」

「でも僕も隅々まで調べましたけど、何もありませんでしたよ？ほら、この通りです。」

アレフが背囊から紙の束を取り出して、一枚を俺の目の前に出す。

「普通はそう考えるだろうな。もうちょっとで着くから楽しみにしている。」

俺が先導して歩く。地下二階の北側の直線通路の途中で止まる。

「ここだ、ここは壁の向こうだ。」

「壁の向こう？これ壊れるのか？」

「それが壊れるんだな、手伝えよ。」

俺がナイフで壁の隙間の土を削り出す、それを真似てアレフも削り出した。ガイラはナイフを使えないので俺達が外した石を運ぶ。それほど時間をかけることなく一人一人が潜り抜ける穴が開いた。全員が穴を潜って空洞の中に入る。ロトの盾がその姿を現す。

「これがロトの盾ですか？」

「ああ、ロトの鎧と同じ意匠で、素材はミスリル。伝承の通りだ。」

「ふん、真贋はどうでもいいさ。さっさと持っていこうぜ。」

「そうだな、アレフ、ロトの印を出せ。それがないと持っていけない。」

「ロトの印？何につかうんですか？」

「この盾の代わりに置いていく。」

アレフとガイラが怪訝そうな顔をしている。俺は少し歩いて大きな亀裂のそばに立つ。

「この亀裂は魔王の下か、地獄に続いているとされている。それを封印しているのがこの盾だ。実はそうではないのかもしれないが、懸念材料は一つでも減らしておきたい。ロトの印もルビスの加護を受けているから代理に置いておく。」

「嘘臭い話だな、只の亀裂じゃないのか？」

ガイラがそう言いながら、足元の石を蹴って亀裂に落とす。いつまで経っても何の音もしない。

「まあ、そうするよな。今見たとおり底なしの亀裂で、何が出てきてもおかしくはない。ロトの書によると崩れ行く魔王の島から脱出してきたのがここだ。」

「じゃあ、繋がっているのか？」

「そうかもしれん、だがここからは行かない。明かりさえ拒む亀裂だ。俺が封印しておいた意味が分かったか？」

「よく分かった。お前に分からんのなら、人知の及ぶ所じゃない。」
覗き込んでいたガイラが怖ろしそうに退く。

「アレフ、盾を取ったら、ロトの印をかけておけ。」

アレフがロトの盾を恐る恐る手にする。立てかけてあった台にロトの印を置くと静かに下がった。亀裂の方には特に変化はない。

「アレフ、使えそうか？」

「固定ベルトがありません。革が腐ってしまったのでしょう。」

「了解、俺が直す。水鏡の盾のベルトと交換しよう。それで水鏡の盾はどうする？」

「そうですね、魔法の鎧と同じ様にジヨルジヨにあけてもいいです

けど、やはり元の持ち主のリヒャルトさんに返しませう。」

「今リヒャルトに渡したら、潰して材料にするかもしれんぞ。」

「それでもいいじゃないですか。きっと無駄にはなりません。」

「アレフがそれでいいなら、それで構わんさ。ふうん、魔法の鎧はジヨルジヨにあげたのか。」

俺達三人がにやにやしてアレフを見る。

「なんですか、そんなに可笑しいですか？」

「そうじゃないわ、アレフらしいなと皆思っているのよ。」

「そうですか、もうここを出しましょう。誰かに見つかるかもしれませんよ。」

照れを隠す為アレフがそう提案する。穴から遺跡に戻り、元通り石を組みなおした。その後は戻らずにロトの墓をお参りすることにした。

告白

ロトの墓の前に座って話をしている。

「これからの方針だが、まだ魔王の島に渡る前にすることがある。」

「なんだ、ロトの剣を探しにでも行くのか？」

「違う、ロトの剣を探す必要はない。」

「要らないのか？伝説の剣ならあるに越したことはないだろうが。」

「当然必要だ、探さずともこれから行く場所にあることは分かっている。」

三人がポカンとしている。

「なんでそんなことが分かるんだよっ！」

「行ったことがある。まだ竜王が現れる前に、俺は一度魔王の島に渡っている。」

「どうやってだ？島を隔てる水とそびえ立つ岸壁を越える術はないはずだ。」

「そう、その説明こそがあの島に渡る為にしなければならぬことだ。これから俺のできることを教えておく、もう隠すことはない。」

マギーを除く二人が息を飲む音が聞こえる。その横でマギーが心

配そつな顔をしている。

「まず第一に俺がアレフに勝る能力はかしこさしかない。ちから、すばやさ、HP、MP、いずれもアレフの方が上だ。」

「そんな、ちからはともかくすばやさでは僕は勝てませんよ。」

「そうじゃない、俺のすばやさは基本Bだ。普段は並みの戦士より少し早いぐらいだが、いざ戦闘になればピオリムを使うことで人の限界のすばやさを得ているだけだ。ちなみに数値に換算すると俺のすばやさは170、ガイラが215、アレフが190、マギーは115ぐらいだ。ピオリムを使うと元の数値の1/4上昇する、二回使うと1.5倍になる。今までも何度か確かめたがガイラに2度使用しても俺の限界値と変わらない。多分、限界を超えた能力で体を壊すことのない様に上限があるのだろう。」

アレフ達が俺の言葉を黙って聞いている。

「だから今まで戦闘をなるべく短時間で終わらせてきたんだ。でもこれから行く場所ではそうは言ってはいられない。だから今のうちに俺の手の内を教えておく必要があるんだ。」

「でもそれでいいのですか？そんな大切なことが他人に知れたら大変なことになりますよ。」

「口外することはないと確信している。もしなんらかの形で漏れたとしても後悔はしない。」

「それはずるいな、脅迫しているのと同じだぞ。まあいいさ、聞いてやるから話せよ。」

この二人から漏れることは絶対がない、それは再確認することができた。

「まず俺の使える魔法はかつてロトの時代に使用されていた魔法全でだ。メルキドでの落雷、マギーの使った魔法反射、ガイラと一緒に使った爆発もそうだ。大別すると攻撃魔法とそれ以外の魔法だ。」

「俺を旅していた時に調べていたのはそれが目当てだったのだな。なるほど夢中になってまで探すはずだ。」

「そうだ、各地に散らばる都市や遺跡から文献を漁った。話を戻そう、攻撃魔法は火球、火炎放射、旋風、冷気、爆発、電撃、呪殺とある。後で実際に使うから、効果を見てくれ。」

俺の言葉と共にアレフが指折り数えている。

「ずいぶんとたくさん魔法があるんですね。全部の魔法の名前を覚えるだけでも大変そうです。」

「そうでもない、まあ詠唱文を覚えるのは大変だけどな。発掘に3年、修得に5年かかった。他にも回復、蘇生、強化、妨害、移動、その他それら該当しない魔法もある。」

「なんだかよく分からんが、その移動つてので魔王の島に渡ったのか？」

「残念、正解は冷気の魔法だ。冬の特に寒い日を選んで水を凍らせて進んだ。結局どんな魔法でも応用によっては色々な使い方がある

のぞ。」

「そんな馬鹿なことをするのはお前ぐらいだ。」

「違うない、じゃあ魔法を見せるから外に出よう。今日、明日はここで過ごそう、その間に見せることのできる魔法は全て見せる。そのうち使わねばならない状況も出てくるだろうから、知っていて欲しい。一々使う度に驚かれたり、質問されても困る。」

「それは構わんが、二日もかかるのか？」

ガイラが立ち上がりながら、うんざりした様にそう言う。

「全部で使用しなくてはいけないMPは500前後になる。俺一人では3日経っても全て使用することはできないぐらいさ。」

「俺には全く想像できん話だ。アレフ、分かるか？」

「一日に使用できる量には限度があるのは分かっています。ラダトームなら祝福爺さんがいましたから、限界以上使えますけどね。」

「祝福爺さん？誰よそれ、私は知らないわよ。」

「マギー、城の奥にいる“勇者に祝福あれっ！”の爺さんのことだ。あの祈りでMPが回復するんだ。なぜかは不明だ。」

「そうだったんだ、知らなかったわ。でもそこまで消費することないから関係ないかな。」

「リヒャルトの実験に付き合うなら必要だよ。」

たわいもない話をしながら出口へと向かう。外と違いここは平和だ、いずれ本当に平和になってからもこんな話ができれば幸いだ。

- - - - -

「ずいぶんと落ちぶれたものだ、別人の屋敷に来たかと思ったぞ。」

明かりもない暗い部屋に男が座っている。誰もいない空間から不気味な声がした。

「貴様、どこから入ってきた！いや、よくも顔を出せたものだ。」

「そなたが窮地にあると聞いてね、ここは助けてやらねばなるまいとやってきたのだ。あの時はそちらが先に約定を破ったのだ。それを分かってこちらを責めているのか？」

暗い闇に金色のローブが浮かび上がる。

「約定を破ったのがこちらだと？どう言うことだ！」

「あの時点で王女は奪還されておったのだ、そなたの手下の仕業だよ、実に大した役者だ。」

「そのようなこと、私は知らぬ。」

「まあ済んだことを言っても仕方あるまい。そうでもなければ約束通り茶番のような戦で、終わらせていたのだ。惜しいことをしたものだ。」

その声には人を馬鹿にしたような響きがある。言われた側の顔が屈辱で真っ赤に染まる。

「ぐっ！それで何様だ。まさか私を虚仮にする為に来たのではあるまい。」

「なに、そなたが復権できる様に手伝ってやろうと思ってな。何を成すのにも力は必要であろう。」

「その言を信じると言つのか？」

「信じられないなら、帰っても一向に構わぬのだがな。」

「うぬっ！どこまでも人を喰った話だ。だがこのまま落ちぶれていくよりはずつとました。」

「そうだ、我等に従えばこの世界の半分をやるう。どうだ、この契約を結ぶか？」

「結ぶ、すでに私に戻る場所はない。ならばその場所は奪うしかない。」

「よろしい、契約は成立した。ぬっ、何者だっ！……ベギラマ！」

「ぐあっ！」

金色のローブから電撃が部屋の隅に向かって放たれた。押し殺した悲鳴が上がり、誰かがいた気配が消えた。

「聞かれたのか、誰かに知られてはならん。必ず殺すのだ。」

「くっくっく、この出血ではそう遠くには行つてはいまい、すぐにも追つ手を出すのだな。私はあまり表舞台には出れぬ。」

「誰かつ！誰かあるかつ！」

部屋の扉が開き、執事が入ってくる。金色のローブは闇に消え、その姿は見えない。

「曲者だ、決して逃してはならぬ。追つ手を出して殺せ。」

「はっ、仰せの通りにします。」

執事が慌てて出て行く。しばらくして屋敷が騒がしくなる、鎧がガチャガチャ音を立て、幾人もの足音が遠ざかる。男は暗い部屋で椅子に座ったまま、これからの期待と不安に震えていた。

魔法談義？

「アイゼンの旦那、外で面白いものを拾ってきましたよ。」

「俺のことは放っておいてくれと言ったはずだが……。」

「つれないこと言うなよ、俺っちと旦那の仲じゃないですか。文句はこれを見てからにして下さいよ。」

小男が引きずる様に持ってきたのは全身血みどろの男、血でよく分からないが地味で目立たない格好をしている。その男に見覚えがある気がしたアイゼンマウアーが顔の血を拭い、顔を確かめる。

「シュミットか、陛下の影とは聞いていたがこれはどうしたことだ？」

「よく分からんが裏路地で倒れていた。そこら辺に柄の悪い奴等がうろつろしていたんで確保してきた。」

しゃがみ込んだアイゼンマウアーはシュミットの負傷具合を確かめる。傷の場所が多いので傷毎にホイミを使う。それを眺めていた小男が口を挟む。

「ベホイミでどんと治せないんですかね？」

「止めておいた方がいいな、剣による打撲や骨折も見られる。とりあえず止血を優先する。」

「こいつ助かりますかね？」

「分からん、体力次第としか言えんな。それより追っ手はどこの者が分かるか？」

「そりゃあ簡単だ、こいつが逃げてきた方角にあるのは大臣の屋敷で、武装した兵を出せる奴なんぞそうはいない。答えはおのずと出てくるものさ。」

「きな臭いな・・・おっ！」

横になっているシュミットが体を起こそうとしている。アイゼンマウアーがその上半身を抱き上げる。

「おい無理をするな、死にたいのか！」

「こ・・・こじは？」

「俺の隠れ家だ。安心しろ、誰にも見つからんはずだ。」

「ア、アイゼン、マウアーか・・・探して・・・いる・・・時は見つからない・・・皮肉なもの・・・だ。」

「あまりしゃべるな。」

「うぐっ！頼む・・・陛下をお守り・・・くれ・・・が謀反・・・いる・・・」

口から血を吐き出しながらそれだけ言い終わると、シュミットは気を失った。生死を確かめる為に首に手を当てる。

「まだ死んではない、このままではそのうち死ぬことには変わらない、すぐに医者を手配してくれ。」

「いいんですか？それで旦那はどうするのです？」

「一方的な約束とはいえ果たさねばならぬな。」

「旦那を放りだした城の連中のことなんか捨て置いても、誰も文句言わんぜ。」

「たとえ放逐されようと、漢は一度仕えた者を悪くは言わぬものだ。それに放り出されたのではない、私がけじめをつけたのだ。」

「そうですか、損な性分だ。じゃあ医者を呼んできますが、連れてくるまでに死なせないで下さいよ。」

小男が足音を立てることなく消える。アイゼンマウアーはシュミットに手を当て、その命が消えぬようにホイミを唱え続ける。

（そうか、俺を探していたのか。まあこんなことでもなければ、あいつが隠した痕跡は見つかるまい。運がいいのか悪いのか、分からんものだな。しかし、大臣が謀反だと・・・うまく立ち回らねば国が滅びかねん。）

.....

手から扇状に火炎が噴出する。

「これが本当のギラだ。そしてこれが・・・・・・ベギラマ。さら

にこれが………ベギラゴンだ。俺の手から噴出するから使用が難しい。」

「すごいな、一個中隊ぐらいなら一掃できそうだな。」

「対をなす魔法もある、それがヒヤド系だ。ヒヤドは氷の矢……、ヒヤダルコは………扇状に噴射、ヒヤダインは………一定範囲内に吹雪を起こす。そしてこれが魔王の島に渡った魔法マヒヤドだ。」

腕を強く前に突き出し、猛烈な冷気を放出する。あえて扇状でなく狭い範囲で放つと、不規則な氷の柱がバキバキと前方に伸びていった。

「これまたとんでもない魔法だな。ワンマンアーミーを名乗れるぞ。」

「まだ続きがある。次はイオ………ごらんの通り爆発だ。それと一度ガイラに見せたがイオラ………、そして落雷の魔法を除いた最強の魔法イオナズンだ。」

俺達の前方のかなり離れた場所を中心に大爆発、俺以外の全員が耳を押さええている。

「前見たのとは桁違いの威力だが、前みたいに巻き込まれたら命がなさそうだ。」

「そうだな、とても屋内で使う気にはなれない。そうだ、ついでだからマギーには教えておくが、石炭を岩場に埋めて、上からこれを使うと例の硬い粉末ができる。」

「へえ、破壊の魔法で物を作るとはケルテンらしいわ。」

「どんな道具も使い方次第さ。それと一人では戦えない理由だが、ここまでで俺のMPの半分以上を使っている。それも上位の魔法だけでその半分を占める。適当にぶつ放すとあつと言つ間にMP切れになるし、溜めが長い分危険も多い。」

少し頭痛がしてきたのでこめかみを押さえる。

「ちよつとマギー、いいかい。力を抜いてこれから使う魔法を受け入れてくれ。少し不快な効果があるが俺を信じてくれ。」

「いいわ、あなたを信じる。」

「ありがとう、これが吸魔の術………
ホトラ！」

「あ……あつ………ああー！ー！ー！ー！！！」

俺にMPを奪われたマギーが身悶え、突き出した俺の手からマギーのMPが流れ込んでくる。アレフとガイラがなんとなく顔を伏せて目を逸らしている。

「なによこれ、体から何かが抜かれたみたい。」

「そうだよ、本来は敵のMPを奪って魔法を使えなくする魔法だが、俺みたいにMPの上限が低い者にとっては、味方から補充する魔法として使うことも可能だ。まあこれからも勝手にはやらないよ。」

「そうね、でも必要なら遠慮なく言って、私なら大丈夫だから。」

「分かった、その時はそうさせてもらう。では残りの魔法も見せておこう。旋風の魔法バギ、．．．見ても分からなかったかもしれないが、真空の刃で皮膚が切れる。威力を増したのが．．．バギマ、そして竜巻で敵を切り刻む．．．バギクロスだ。」

「これは分かり辛いな。最後のはともかく効果が見えない魔法は困るな。」

竜巻が収まるのと見ながらガイラが呟く。

「確かにそうだ。さらに一般にギラと言われている火球の魔法．．．メラ、威力を増したのが．．．メラミ、そして敵を焼き尽くす．．．メラゾーマだ。」

メラに較べると膨大な熱の塊が少し離れた場所にあつた大木を消し炭に変えてしまう。

「ここまで来ると人の技をば思えんな。剣や拳で戦うのが馬鹿らしくなってこないか？なあ、アレフ。」

「でもケルテンさんが言ったじゃないですか、強力な魔法を使うには溜めがいるって。だから僕達はその時間を作らないと、効果的には発揮できないんですよ。」

「なるほどなあ、確かにその通りだ。」

「理解してくれるとありがたい。へたな奴と組んだら一人で前に出

される恐れもあるんだ。これも公開しない理由の一つだ。」

「そうだな、強過ぎて一人で何でも出来そうな錯覚に陥るな。」

「だから自重している。それとどれか一系統の上級魔法を何人かに使用させたら、一つの街を陥落させることも可能だ。そう考えると怖くて公開できなかった。」

「確かにそれは怖いですね。爆発の魔法なら城壁ぐらい簡単に壊せそうだし、他のどの魔法でも受けて無事な人はいないでしょうね。」

「そうだ、この怖さを理解できない奴には絶対に教えない。」

「魔法を使えない俺には関係ない話だ、俺は誰にも言わないからうまく使ってくれ。」

真剣な声で語る俺に対し、おどけた口調でガイラが茶化する。

「そう簡単に言っつなよ。うまく使うために幾つかの合図を送るから覚えてくれ。前にマジキと使っていたやつだ。」

「うへっ、マジかよ。覚えるのは苦手なんだよ。」

心底癒そうな顔をするガイラを見て、俺達に笑い声が戻った。

勃発

10/5 ラダトーム城大広間

毎朝の様に謁見の大広間に文官、武官が集まる。以前の国務大臣が執務室で裁可を行っていた頃と違い、大広間で報告、議論が行なわれ、国王によって裁可、却下、再考などの決定がされる様になった。そんな時に大広間の大扉が開いて数人の男たちが現れた。

「何者か！陛下の御前である。」

ホフマンズが咎め、控えていた近衛騎士達がラルス16世を守る。

「私は正式に大臣の職を廃されたのか？そうではなかるう、ホフマンズヴァルダウよ、私を叱責するとはずいぶんと偉くなったものだな。」

王弟オットーであり国務大臣でもあるその男は、不敵な笑みを浮かべて嫌味な一言を発した。

「国務大臣に於きましては、先の戦没者への補償が済むまでは出仕を止められています。」

「そうであったな。しかしその件に関しては全て段取りが終わり、国務大臣の職務に支障はないと判断した。よって国務大臣として復帰するべく挨拶に参ったのだ。」

「それならば正式な登城願いを出すべきです。正式な手続きも無しにここに来られるとは無礼ではありませんか？」

「黙れ下郎！たかが一貴族が我等王族に意見するなど勘違いも甚だしいわ。」

國務大臣により一喝されたホフマンズだがそれでも怯まない。

「失礼致しました。それでは手続きに関しては陛下の顔を立てて不問に致しましょう。ですが後ろに武装した兵を待るのは不見識が過ぎるのではないでしょうか？」

「クツクツクツク、今この城の中には私の味方はおらぬ。それゆえに神聖なる王家の命を守るための自衛手段として連れてきた。」

「それは詭弁です。味方がいないのはあなた様の行いによるものです。それでも命を奪おうとする者などいません。」

「そうか、私が復権したら一番困るのはそなたではないのか？だとすれば私の命を狙う者がおらぬなど妄言と言えよう。」

「失礼な！地位のために品性を失ったと言われるなどあまりの侮辱、訂正して頂きたい。」

ホフマンズが顔を真っ赤にして咆哮する。それを馬鹿にした様な顔で大臣が見ている。

「なるほど、余もそう思う。確かにそなたの言う通りだ。」

「そうでしょう、兄上。我等神聖不可侵の王家の血は何よりも尊いのです。さあ今すぐにも私の復帰を許可頂きたい。私が國務大臣になって二十数年、実質この城を運営していたのは私です。この私

がおらぬのではこの城どころか国が回らぬでありましょう。」

その言は自己陶醉に浸っていることは明らかで、この場にいた全ての者が嫌悪感を感じた。

「そうではない、ホフマンズの言う通りだと言っておる。そなたの言い様は無礼かつ品性を失った発言と言わざるを得ない。その様な不見識な者はもはや余の治世には不要である。残念だがラダトーム王国国王として、そなたの王位継承権と國務大臣の職を剥奪する。」

ラルス16世の静かな声が大広間に響き渡る。当の本人は言われたことの意味が理解できずにいた。誰も音を発することの無い中、徐々に耳障りな音が広間に広がった。國務大臣の手が全身が震え音を発しているのだ。

「くっくっくっ、あはははっ、あーはっはっはっはっ！これは可笑しい、これを可笑しいと言わずに何を可笑しいと言えようか！兄上が王となって30年、その間この国を支えた私を不要だと？魔物の襲来に何も出来なかった兄上が私を不要だと言うのか！もはや凡庸で無気力な王、そうとしか評することの出来ぬ兄上にはこの国を任せることなど出来ぬわ！」

「無礼な！陛下に対して何たる発言、しかも謀反を示唆することを口にするなど許せません。」

憤るホフマンズをラルス16世が手を上げて制する。

「なるほど、そなたはそんな風に思っていたのか。凡庸で無気力な王か、確かにそなたの言う通りだ。それでもよいと平和な時代は思っておった。だが今はそうではない、余に力無くとも共にこの国を

支えてくれる者達がおる。これからの時代はそういった者達が作る
のであるうな。余もそなたもこれからの時代には不要なのだ。」

「不要か、ならば私を必要とする者に従うとしよう。お前達、ここ
にいる全ての者を切れ！然る後我が正義を世界に発信するとしてよう。」

「

その言葉にオットーの後ろに控えていた男達が剣を抜き、前に出
る。同じくラルス16世を守るサイモンを初めとする近衛騎士達も
剣を抜きその前に立ちほだかる。

戦いが始まるうとしていたその時、オットーが自らの護衛の前に
出る。その意外な行動に近衛騎士達が戸惑った。

「ほら、その剣を振り下ろせるものならやってみるがよい。」

サイモンは構えた剣を振り下ろそうとした。だがその腕は石にな
ったかの様に動かない。

「そうだろう、できるはずもない。高貴なる血の前にはお前らの武
力など無力なのだ。さあ今のうちだ、ラルス16世の命を奪うのだ
っ！」

.....

ロトの遺跡を拠点に二日の戦闘訓練をおこなった。俺達以外には
分からぬ合図を互いに送ることで、前にはできなかった様々な戦術
が確立できたと思う。前衛二人が強化魔法を催促したり、後衛から
魔法を使うために前衛を散開させたり、敵を誘導したりできるよう

にした。昨日の夜のうちに城に帰っても良かったが、なんとなくもう一夜ここで過ごしたのだ。

「さあ、一度城に帰ろう。陛下に出陣の挨拶をしてから魔王の島へと旅立つことにしようか。今の俺達の実力ならどんな敵が来ても負けることは無い。」

「勝てるとは言わないのね。」

「勝てると言っただけで勝てるならそうする。だが現実はそのではない、勝てぬ相手と判断したら逃げる、そう言っている。」

「学者は心配性だな。まあ逃げてもいいと言うお前は怖いな。」

「怖いですか？僕は目的を果たす為の手段の一つだと思いますが。」
「だから怖いんだ。普通、騎士や貴族らは目的を果たせなくとも死ぬも言う。こいつは目的を果たせないなら死ぬなど言っているんだ。目的を成就させる為の覚悟が違うんだ。」

「俺は玉砕とか、無駄死には嫌だと言っているだけだ。それだけ理解してくれればいい。」

「私も死ぬのは嫌よ、それと知り合いが死ぬのを見るのも絶対嫌。」

「マギーの言う通りだな。さあ城に帰ろう。」

それからルーラで城下街に戻った俺達はその足でラダトーム城へと向かった。そこでは普段聞きなれない物音が聞こえる。

「おい、学者！なにかおかしくないか？剣撃の音が聞こえるぞ、城の中だっ！」

「お前もそう思うか、急ごう！」

俺の返答もそこにアレフが血相を変えて城の中へと走る。慌てた後を追う。ラダトーム城の中ではありえない光景があった。そこには無数の鎧の騎士と兵士が戦っている。特に二階へと上がる階段の前の戦闘は激しい。

階段の前に立ちはだかるのは真紅の鎧1体と漆黒の鎧2体、それと無数の鎧の騎士。それを相手に一人で奮戦している男がいる。

「アイゼンマウアー隊長！」

雷神の剣と魔法の鎧、如何なる戦場でも目立つその姿、思わず声をかけた。

「戻ったか、勇者二人も一緒だな。私も一人では辛いと思っていたところだ。俺がああ赤いのを相手にする、なんとかお前一人でも二階に上がれ。」

「全員でこいつらを倒しましょう。」

「駄目だ、時間が惜しい。かなり前に国務大臣達が上がっている。」

「俺が一人殺る！アレフはもう一人だ。マギー、援護頼む。学者、目的を違えるな！」

ガイラのミスリルナックルが鎧の騎士をふっ飛ばして、悪魔の騎

士の前を陣取る。アイゼンマウアーが中央で死神の騎士と相対し、その左でアレフも悪魔の騎士と戦い始めた。後ろを振り返るとマギーと目があった。

「ケルテンは行って！これぐらい私達だけで十分よ。」

「分かった。マギー、あんまり強力な魔法は使っなよ。」

「分かってるわ、ここは私達の城なのよ。さあいくわよ。」

マギーの魔法で身体が軽く感じる。もう一度同じ感覚を感じてから階段へと走る。死神の騎士と悪魔の騎士が俺の邪魔をしようとすがるが、三人がそれを許さない。階段を駆け上がる、大広間の大扉が全開している。その中で近衛騎士を前に國務大臣が立ち、その後ろに見たことのない男達が剣を構えている。声が聞こえた。

「そうだろう、できるはずもない。高貴なる血の前にはお前らの武力など無力なのだ。さあ今のうちだ、ラルス16世の命を奪うのだっ！」

舊紙の力

「そうだろう、できるはずもない。高貴なる血の前にはお前らの武力など無力なのだ。さあ今のうちだ、ラルス16世の命を奪うのだっ！」

国務大臣オットーがサイモン達の前に立ち、命令する。なぜか近衛騎士は棒立ちのままだ。国務大臣の後ろにいた男たちが躊躇いながらラルス16世に近づいて行く。なるほど、彼らは下にいた鎧の騎士と違って只の人間だ、弑逆を命じられても簡単に剣を振り下ろすことはできないらしい。ならば間に合えっ！

《俺はMPを6消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお、万能たる力よ、全てを拒絶する鉄となりて、彼の者達を守れ、アストロン！》

勢いよく剣がラルス16世の首に振り下ろされる、しかしその一撃は高い金属音を発して弾かれた。ありえない出来事に男たちが驚愕する。なにかの間違いかと繰り返すが、当然アストロンの鉄壁の防御を越えることはできない。

「なっなんだ！これはどうしたことだ！」

国務大臣はアストロンの影響で動けなくなった近衛騎士達を押しつけて、ラルス16世に駆け寄る。触れたその手には金属を触った様な感触しかない、そこで俺に気づいた。

「いつの間に現れた、ここには誰も入っては来れないはずだ！」

「下の魔物は駆逐しました。もう終わりです、武器を捨てて縛に
いて下さい。」

「何を馬鹿なことを、ここまでしたからには私か、兄上のいずれか
が死ぬまでは終わらん。」

「なるほど確かにそれは正論です。私の知っている歴史が物語って
います。では私の手で終了させて頂きます。」

「そうはいかん、お前達、私を守れ！」

國務大臣の命令によって、護衛の男達が俺と大臣の間に入る。俺
から大臣まで20m、その間に武装した護衛が5人、大広間にいる
文官を巻き込まないで彼らを排除するのは難しい。それにアストロ
ンの効果は約3分、残る時間はあと2分。

「お前が私の知らぬ力を持っていることは、ある者から聞いておる。
だがその力があるうとこの状況は覆せない。これが分かるか！」

大臣が懐から数枚の紙を取り出す。強く握ったその中から一枚を
選び出して眼前に突き出す。

「この城に仕える者の誓紙、だがその実情は違う。王家の者への反
逆の防止、さらに生殺与奪の権を持つ呪法だ！」

俺の言葉にここにいる全ての者たちの顔色が変わった。驚愕、
畏怖、侮蔑、動揺、様々な感情が表情にでている。

「なっ、そこまで分かっているとは！やはりお前は油断ならぬ、も
はや生かしておくわけにはいかん。この秘密を知った者全てだっ！」

国務大臣の手によって俺の誓紙が破られる。破れた紙から魔力が解き放たれ、現れた暗き死神の手が伸び俺の心臓が握りつぶされた。

だが俺は立っている。

「馬鹿なっ！なぜだっ、なぜお前は死なぬっ！そうかつ、やはりお前は人間ではないな、この呪法が効かぬとは魔物に違いない！」

信じられない事実には大臣がわめき散らす。それを冷静に見つめながら、首に下げていたペンダントをとりだす、真っ赤に染まった水晶が砕けている。

「これは命の石。持ち主の命が失われる時、身代わりになる魔法のアイテム。こんなこともあるのかとずっと身に付けていた。決して魔物の業ではない、ロトの時代から存在する魔法のアイテムだ。」

わなわなと震えている大臣に説明する。その言葉が大臣の耳に届いているかは分からない。目があらぬ方向を見ている。

「まだだっ、まだ終わってはいない。たかが一人だ、お前達やってしまえっ！」

大臣の命令に護衛の男達が俺に襲い掛かってきた。俺はまだマジの魔法の影響下にある。止まって見える様な二流の戦士達の攻撃を掻い潜る。刀を五閃、首から血飛沫を上げ倒れる男達。刀の血を勢いよく振ることで落として納刀する。

「まだ続けますか？もうあなたを守る者はいませんよ。」

大臣に声をかける。その後ろではラルス16世、サイモン達動き始めているのが見える。アストロンの効果が切れたか。

「終わりだと・・・お前は王家の者には手を出せぬはず、だから終わってなどいない。」

『私はMPを5消費する、MPはマナ・・・』

使い慣れていないだろう魔法の詠唱。大臣の後ろにいたラルス16世と目があった、ラルス16世が静かに頷く。

《俺はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお、万能たる力よ、不可視の鏡となりて、我を守れ、マホカ
ンタ！》

『雷となり我が敵を撃て！ベギラマツ！』

遅れて詠唱が終わった大臣から電撃が放たれる。抜いた刀に跳ね返された電撃が大臣を襲う。

「ぎゃああああああ！」

大きな悲鳴を上げて大臣が倒れる。武人でない大臣はもう瀕死であるうか、それでも這ってラルス16世の下へと進む。サイモン達が剣を振り下ろそうとするが呪法の効果でそれは叶わない。

「私は・・・死なぬ・・・この国を私の手で導くのだ・・・私でなくては・・・このく」

大臣の呪詛にも似た言葉が途切れる。俺が刀を一閃してその首を

落としたからだ。

「大臣、誓紙を破った時点で強制力も失われていたのです。」

まだ何か言いたそうな首が転がっている。その目と口を閉じさせてラルス16世の前に置く。

「反逆者オットーの首をとりました。お確かめ下さい。」

「確かにそれは我が弟オットーの首に違いない。王家の者であろうと反逆は死をもって償うより他はない。特務隊士ケルテンよ、よくやった。大儀であった。」

“大儀であった。”その言葉で張り詰めた空気が緩んだ。

「近衛騎士達よ、陛下はご無事。だがまだ終わってはいない。残る敵を駆逐せよっ！」

サイモンの台詞によって、近衛騎士達が解き放たれる。駆け出した近衛騎士が一階へ降りていくのが見えた。

- - - - -

アレフと対峙している悪魔の鎧の動きは鈍い。鈍いというより何かを恐れるかのようにも見える。その鈍い攻撃の隙をついて、アレフの炎の剣が悪魔の騎士の剣を弾き飛ばす。返す剣で悪魔の騎士の兜を飛ばす、中身の無い鎧から力が抜けて崩れ落ちた。

一方ガイラが相手をしている悪魔の騎士の動きは鋭い。一撃一撃

が致死に値する攻撃をミスリルナツクルと左手の籠手で弾き、受け流す。ガイラの攻撃は悪魔の騎士の大きな盾で防がれてダメージを与えられない。

「なんだか俺の相手だけ違わねえか？」

あまり有利とも言えない状況でもガイラの軽口は止まらない。しかもその顔には歓喜の表情が浮かんでいる。一度距離を取ってから腰を落として構える。その構えに何かを感じたのか、悪魔の騎士が盾を前ににじり寄ってくる。

「せいやつー！」

ガイラの正拳が盾に叩きつけられる。普通はあえて盾に攻撃する者はいない、悪魔の騎士はその意外な攻撃をまともに盾で受けてしまった。吹き飛んだ盾が悪魔の騎士の後ろで大きな音を立てる。左手の肘から先を失った悪魔の騎士が、残った右手の斧をガイラに向かって振るう。しかし懐に飛び込んだガイラはその腕を取って背負い投げる。床に叩き付けた頭がひしゃげて、逆さまになったまま悪魔の騎士は動きを止めた。

アイゼンマウアーは死神の騎士の猛攻を受け流しながら、冷静に戦局を見極めている。

「二人の勇者が負ける要素はない、あいつめなかなかいい手駒を育てたものだ。それに周りの鎧の騎士は割り込んで来ないようだな。よほど信頼しているのか、巻き込まれるのを恐れているのか・・・はっ、この魔物に意志があるはずもないか。」

アイゼンマウアーは攻撃を受けているだけではない。死神の騎士

の際を見つけて雷神の剣を振るう。ミスリルでできた雷神の剣が少しずつ死神の騎士の斧、盾、鎧を削る。

「技量は同等以上、だが装備では私の方がやや上。無理はできない。」

死神の騎士の攻撃は止まない。まともに受けてしまえば致命傷にもなり兼ねない攻撃を冷静に、凌ぎ続ける。いつしか両脇の勇者二人が、同じ死神の騎士に向かって武器を構えていた。死神の騎士の攻撃が止み、構えが防御に寄った。

「邪魔はしないでくれ。こんな相手には二度と会うことはない。」

そう言いながらもアイゼンマウアーの剣が死神の騎士を襲う。剣と斧の間に火花が飛び散る、振りぬいた雷神の剣に死神の騎士の斧頭が半分になり裂かれた。それでも死神の騎士は軽くなった斧でアイゼンマウアーを攻撃する。その軽い攻撃を魔法の盾で受け流して雷神の剣を死神の騎士の面頬に差し込む。

『業炎よ、敵を焼きつくせ！』

死神の騎士の空っぽの鎧の中で炎が荒れ狂う。内側から炎に焼かれた死神の騎士が崩れる。雷神の剣を引き抜いたアイゼンマウアーは一撃の下に両断した。

「いい腕だな。流石、学者が褒めるだけはある。」

「まだまだ、油断するな。」

二階から鎧の立てる音が近づいてくる。三人が上からの襲撃に備

えて構える。階段を降りてきたのは近衛騎士達。

「アイゼンマウアー隊長！」

「もう俺は隊長ではない。陛下は無事か？」

「無事です、もう大丈夫です。敵を掃討しましょう。」

それを聞いた三人は近衛騎士に混じって、鎧の騎士の掃討に加わった

事後処理

一通り騒動が終わるまで大広間にて待機している。一度下に行こうとしたが止められたので仕方なくそうしている。アレフ達は大丈夫だろうか？そんなことを考えているとアレフ達3人が上がった。き

「大丈夫だったか？」

「ああ、楽勝だったぜ。マギーの援護があればそうそう負けることはない。お前こそ大丈夫かよ？浮かない顔してるぜ。」

「うん・・・ああ、大臣を切った。まさか魔物に魂まで売るとは思わなかったよ。」

「そうか、よく切れたな。お前らしくないな。」

「ガルドの時の二の舞は犯さない。切るべき時に切らないと後悔することになる。だけど気分のいいものじゃないな、できれば二度としたくない。」

「そうね、あなたは本当は優しいから・・・。」

マギーが俺に寄り添う。途切れた言葉の続きが聞こえたような気がした。

「ガルドの時の二の舞って、僕が切ったあの人のことですか？」

「ああ、俺が切っておけば、アレフ、お前にあんなに負担をかける

ことはなかった。だから今回は大臣をこの手にかけた。」

「僕ならもう平気です。」

「生意気だな。そんなことは魔王を倒してから言っただけでおか。」

アレフの鎧を軽く小突く。俺達4人に笑顔が戻った。

.....

謁見の大広間に秩序が戻った。玉座にラルス16世が座り、国務大臣の位置にホフマンズ、近衛騎士隊長としてサイモンが立ち、文官、武官が並ぶ。ラルス16世の前にアレフ、ガイラ、マギーが膝を折り畏まっている。俺はというと堂々と突っ立っている。

「御前である、控えよ！」

ホフマンズが俺に一喝するが、涼しい顔で受け流す。他の者達も無言で不満を表している。

「謀反の収束に功ありとは言え、凶に乗るでない！」

ホフマンズが吼えている。サイモンが俺に視線を送ってなんとかしようとしている。俺のすぐ後ろにいるアレフ達も困惑しているのが分かる。

「互いの認識の違いを確認しておきましょうか。」

「認識の違いだと？」

「そうです。今や私は臣下ではありません。誓紙を一方的に破ったのはそちらですから、私は望むことなくそうなってしまいました。だから一方的に拝礼する必要はないのです。理解して頂けましたか？」

「なっ、その様なことが許されるとでも思っておるのか、そなたには多額の契約金を払っておるのだ。」

ホフマンズが猛る。他の者達は蒼白になったままだ。

「それも私の知ったことではありませんな。」

「しかし、それでは「もうよい！ホフマンズ、その者の言う通りだ。その者がいなくては余もそなたも命はなかった。それにその者も理不尽に命を奪われるところだったのだ、もう好きにさせてもよかるう。」

「理解してもらえて幸いです。アレフ、ガイラ、マギー、行くうか。」

「ちょっと待て、どこに行くつもりだ？」

「何を今更・・・勇者が行く所など決まっていますでしょう。他でもない、竜王を倒しに行くのですよ。」

俺の言葉にアレフ達の顔がぱつと明るくなった。出口に向かって歩く、数歩進んだ所で立ち止まり振り向く。

「ああそうだ、一つ言い忘れていたことがあった。あんな誓紙など

なくなれば、臣下だのそうでないだの言わなくて済むものを……」

「あっはっはっはっは！そなたは実に面白いのう。ホフマンズ、全ての誓紙をここへ。」

「全てですか？」

ラルス16世が無言で促すと、ホフマンズが執務室へとすっ飛んで行った。誰もが居辛さに逃げ出したくなる時間が過ぎる。5分と立たずにホフマンズが戻ってきた。

「陛下、こちらが全ての誓紙になります。」

「ふむ、これを破棄するにはどうすればよいか？破っても燃やしてもならぬとされておる。今までは破棄する必要がなかったからその方法は知らぬ。博識のそなたなら知っておろう。」

ラルス16世が俺の方を見て質問してきた。

「王家の血にて解除できるかと……幸い使用できる血には困りません。」

「そうか、ではあの馬鹿者が最後に出来る仕事があるのだな。近衛騎士隊長、あの者の死体をここに。」

「はっ！仰せのままに。」

サイモンがそう答え、配下に命令する。近衛騎士二人が控え室から首のない死体を運んできた。

「まず、勇者アレフ、ガイラ、それと魔術士マギウスの誓紙を解除して頂きたい。竜王討伐の旅の途中で不明の死があつては困りますから。」

「そなたの言う通りにしよう。ホフマンズ、この者達の誓紙を。」

ラルス16世の命令にホフマンズが手元の紙を調べる。やっと見つけた3枚がラルス16世に渡されると、その誓紙が死体から出た血に浸された。

「ふむ、これでは本当に解除されたのか判らぬのう。」

「確かにそうです。まさか破って確かめるわけにはいきません。困ったな。」

「陛下、では私の誓紙を破って下さい。」

一歩進み出たマギーがそう進言した。

「マギー、何を言うんだ。確証はないんだぞ。」

「私はあなたを信じる。だからそれを破っても私は死なない。それにこれがあれば死ぬことはないはずですよ。」

胸元から出した命の石を皆に見せびらかす。

「分かった、なら俺がやる。陛下、その誓紙を渡して下さい。」

「ホフマンズ、渡してやれ。」

ホフマンズの手を介して俺の手に誓紙が渡る。大きく息を吸ってから、両の手に力を込めて誓紙を二つに裂いた。マギーを見る、何も起こらない。マギーが俺に向かって微笑む。

「陛下の英断、確かに見させて頂きました。ケルテン＝リムルダール、只今より特務隊士に戻ります。」

俺は片膝をついて頭を下げる。

「殊勝である、では職務に励むがよい。だがこれで蘇生の法は使えなくなつた、自愛せよ。」

「はっ！では失礼いたします。」

アレフ達を連れて大広間を辞する。俺の背中で誰かが安堵の息をしたような気がした。

- - - - -

とりあえず図書館で休んでいる。ここがこの城の中で一番居心地がいい。

「ねえ、なんであんなことしたの？」

「ん、何が？」

「わざわざ反抗的な態度を取ってまで、誓紙を処分させたことよ。」

「ああでもしなければ陛下が困ることになったはずだ。君臣の間に深い亀裂ができる。その亀裂は早いうちに埋めておかねばならないと思ったんだ。」

「流石は学者だ。そこまで考えていたとはな。」

いつもの様にガイラが茶化す。

「流石なのは陛下の方だよ、俺の投げかけにすぐに答えたんだ。並の判断力じゃない。」

「はあ、やっぱり敵わないや。ケルテンさんのことをローラ様も褒めていましたよ。」

アレフがため息をつく。ローラ王女が俺のことを褒めていたとは初耳だ。

「まあ敬愛する王女様のことは置いといてだ、学者、どうしたらそんな芸当が出来る様になるんだ？」

「簡単さ、ここにある書物を読めばいい。特に王国の歴史を修めるといいぞ。」

「歴史か・・・あの何年に何が起きたとか嫌いなんだ。分かったからと言って何の意味もない。」

「そうじゃない。年号なんか覚える必要はない。必要なのは誰が何を考えて、結果何が起きたかだ。そうすれば成功はできなくても、失敗を回避することはできる。」

「また意味の分からんことを言う。アレフ、ここの本を読んでも竜王は倒せんぞ。」

ガイラが真つ先に話題から逃げた。

「そうですね。まずは平和を、その後からでも遅くは無いでしょう。」

「その通りね、じゃあ万全の準備をしてから行きましょう。」

俺達の目的意識も明確に固まった。後顧の憂いも無い、これで前だけ見て進むことができるようになった。今回の弑逆未遂は大変だったが、それだけは成果であったと思えた。

もう一つの道（前書き）

162話から分岐する別の話です。

大臣の謀反が成立して誰も救われない、鬱な話になっています。気に入らない人は飛ばして下さい。

もう一つの道

「そうだろう、できるはずもない。高貴なる血の前にはお前らの武力など無力なのだ。さあ今のうちだ、ラルス16世を捕らえよっ！」

目の前でラルス16世に見知らぬ兵士たちが掴みかかる。止めなければ、間に合うか！

《俺はMPを6消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお、万能たる力よ、全てを拒絶す「ぐあっ！！！」》

全身を貫く電撃、仰け反った俺の後頭部にさらに強烈な打撃。闇から響くような声が聞こえる。

「ふっふっふ！無粋な真似はよせ、せつかくの晴れの舞台だ。」

なんとか顔を起こすと捕縛されるラルス16世と、俺の前で踏ん返り返っているオットーが見えた。

「それでこの者はどうするのだ？」

「殺すな、まだ利用価値がある。とりあえず牢にでも入れておけ。」

「詰まらぬ真似はしない方がいい。世界の半分、それで満足しておくのだな。」

闇の気配が消える。そう感じると共に俺の意識も消えた。

.....

顔に何か冷たさを感じて意識を取り戻した。冷たく感じたのは頬に触れている石床、目を開いても暗くて緑に何も見えない。目を凝らすと鉄格子、ここは地下牢か。まだ全身に痛み、後頭部に鈍痛が残っている。

「俺はMPを7消費する、MPはマナと……くそっ駄目か、マナが薄い。ここでは強い魔法は使えない。」

癒せぬ痛みで冷静になってみると現実が見えてきた。俺の両手に枷、右脚に壁から鎖で繋がった足枷が嵌っている。俺ごときに大した待遇だ。いや、それどころではない、俺以外はどうなった？

地下牢に響く誰かのうめき声。隣の牢からもうめき声が聞こえる。

「誰かいるのか？」

俺の問いかけに壁の向こうから搾り出すような声が聞こえた。

「めっ目が……覚めたのだな、ま・まさか弟があそこまで……堕ちているとは余も思わなんだ。」

「陛下ですか、大丈夫ですか？」

「もっ、もう余の命も終わる。それ……だけは余にも分かる。ラダトーム王家を滅ぼせ。それが最後の勅……。」

それっきり声は聞こえなくなった。死に際の勅命だと、こんな状態でどうしろと言っんだ。武器も無い、魔法も使えない、仲間もい

ない。痛む体を起こして壁にもたれ掛かる、まともに動くのは頭だけか……。ならばできることをしよう。誰か一人でも生き延びていてくれたらなんとかできるかもしれない。

「誰か！誰かいるのだろう！取引をしたい、大臣を呼んでくれ！」

あらん限りの声で闇に向かって叫ぶ。誰かが階段を降りてくる音がする。一人の兵士が明かりで俺を照らす。その表情は暗く沈んでいる。

「すでに国王陛下となられています。そのように対応なされますよう忠告します。」

「なんだと、あれから何日経った？アレフは、ガイラは、マギーはどうなった？」

「亡くなりました、最後まで抵抗されて……。我々近衛騎士も誓紙を盾に仕えることを強いられております。何人かはそれで殺されました。」

「嗚呼嗚呼あああああああああああー！」

俺の心が裂ける、叫ぶ声が地下牢に響く。

「それでは陛下をお呼びしてきます。」

その声は俺には聞こえていなかった。

.....

数人の護衛に守られたオットーが地下牢に降りてきた。残酷な笑みを浮かべたその顔が薄明かりに見えた。腹の底から怒りが込み上げる、こいつを絶望の彼方へと送ってやる。その感情を押し殺して悲壮な表情で語りかける。

「たつ頼む、命だけは助けてくれ。なんでもする、何でも教える、それで命は助けてくれ。」

鉄格子を揺さぶって嘆願する。

「何でもするか、聞いてやらんこともない。だがその前に“助けて下さい、陛下”だろう。」

残酷な笑みのまま、俺を見下ろす。

「助けてください、陛下！」

石床に額を擦りつけ、哀れを誘う声で嘆願する。

「実にいい気分だ、やっとお前がひれ伏す姿を見れたぞ。そうか、そんなに命が惜しいか。ならばお前が秘匿している魔法を記せ。如何なる場所へとも転移する魔法、雷を落とす魔法、魔法を反射する魔法。そうだ、あの女が最後に使ったその場にいた者全てを絶命させる魔法もだ。それらの魔法を得られれば竜王など取るに足りん。」

その場にいた者を絶命させる魔法だと。メガンテかパルプンテだ、マギーはそんな物を使ったのか。そうか、だったら教えてやる。それがお前の滅びの唄となるろう。

「でっでは全てお教えします。ですがここは薄暗く書に記すには向きません。それにこの体を癒さねばいつ命が失われなくても限りません。ぜひともお慈悲を！」

オットーがニヤニヤしながら俺を見下ろしている。ここはさらにこいつの自尊心を満たしてやる。床に擦り付けていた頭をさらに叩きつける。何度も何度も、痛みは感じない、アレフの、ガイラの、マギーの無念を思えばこんな屈辱などなんでもない。

「まあよい。部屋を用意させよう。だがおかしな真似はするな。逃げ出そうとしたり、記された魔法が偽りであったり場合にはお前の命はない。それだけでは済まさん、そうだお前の故郷を灰燼としてやる。」

「そっそれだけは勘弁してください。決して偽りなどしません。」

「そうだ、それでよい。初めからそうすればよかったのだ。」

俺の痴態に満足したのかオットーが地下牢から去る。一人の騎士が鉄格子を開けて、俺の枷を外す。

「失望しましたぞ、例え命を失おうともこんな痴態を見せる方とは思いませんでした。」

何とでも言え、俺は奴に復讐するまでは如何なる屈辱にでも耐えてやる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

城の一室を与えられて魔法の書を記している。部屋の内外には屈強な兵士が立っていて、俺がおかしなことをしないか見張っている。ここ数日でいくつかの魔法を記して献上した。ここから出られない俺は知らぬことだが、それらの魔法が発動するところを見てご満悦だそう。だが一つだけ本当の魔法と違えてある、中級、上級魔法については消費MPを倍にしておいた。

この部屋にいていくつか分かったことがある。ここにはマナがあるので魔法は使用できる。だが壁や床に魔法を無効化する処理がされているようで、外部に影響を与えることはできない。ここで強力な魔法を使用しても自身がその影響を受けるだけだろう。それに窓もないからルーラは使えない。

脱出の機会を探していたある日、ご機嫌なオットーが現れた。当然護衛の兵士と魔術士に囲まれている。

「お前の記した魔法は実に素晴らしいな。これならばもっと早く教えてくれればよかったものを、そうすれば臣下として望める栄華を手に入れられただろう。それがこんな所で軟禁とは実に皮肉だろう。」

「陛下の仰る通りでございます。今は改心してこの様に記させております。これが残りの全てでございますれば、ここより開放していただきたく存じます。」

俺の手の魔法の書を護衛の一人に渡す。あくまで卑屈に下手にて油断を誘う。

「ふむ、これで最後か、なるほど幾つか記してあるが、どれも膨大な魔力を必要とするようじゃ。しかもこれらの効果は一軍に匹敵し

よう。」

「流石は陛下、そこまでご理解していただけるとは。こんなことならもっと早くお教えすればよかったと今痛烈に感じております。」

「ふふふつ、だがもう遅いな。これで全てと言ったな、ならばもうお前は不要だ。」

「なっなんですと！陛下、それでは約束が違います。」

「ふん、お前のような下賤な者との約束など知らぬ。自分の馬鹿さ加減を後悔して死ぬがよい。」

やっぱりそうか、こうなることは予想の範囲内だ。俺が絶望の淵に落ちるのをわざわざ見に来たというわけだ。だがそれこそが俺の好機になる。

《俺はMPを12消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、

おお万能たる力よ、鏡となりて、彼の者の姿を我に映せ、モシヤス》

魔法の発動と共にオットーの護衛に体当たりをする。護衛諸共オットーが倒れこむ。

「何をしておる、早くその者を取り押さえろ！」

倒れたオットーが二人同じ台詞を同じ口調で叫ぶ。護衛の兵士が困惑している。

「こつこれは何たることだ！陛下が二人いるぞ。」

「馬鹿者、余が本物だ！余が分からぬか！」

「何を言う、この者は偽者じゃ、はよう捕らえよ！」

俺とオットーが互いに掴みかかって、護衛の兵士に怒鳴り散らす。困惑した護衛の兵士は手を出しかねている。そうしている間に出口が近づいてきた。本物のオットーを掴んだまま転がり出る。武を修めていないこいつなど取り押さえるのは簡単だ、馬乗りになって殴りつける。喉をつぶしてまともに話せなくしておく。

「こいつが偽者だっ！もう一度牢に放り込んでおけ！」

うなり続けているオットーを強く殴りつけて離れる。兵士が慌てて取り押さえた。

「遅い、何かある前に取り押さえられなくて何が護衛だ！然るべき処罰を覚悟せよ！」

曲者を取り押さえている護衛に罵声を飛ばす。その勢いに恐れ入った兵士がまだ暴れ続けているオットーを殴りつけている。

「気分が悪い、戻るぞ！」

護衛の兵士を残したまま立ち去る、俺の剣幕に誰もついて来ない。そのままの姿でずんずんと城の中を進む。大広間を通り抜け、国王の部屋に入る。多分あいつのことだから、手に入れた俺の武具はどこかに置いているはず。あった、これ見よがしに飾ってある、これを見て俺の醜態を想像していたのか。

鎧を身に着け金目の物をポケットに突っ込んでから、ルーラでリムルダールに跳ぶ。そこには灰燼と化し、多くの兵によって行なわれる略奪が見えた。押さえきれない怒りに気付いた時はすでに生きている者はいない。

もう俺には何も無い。メルキドに跳び、たくさんの紙と筆記用具を購入する。読んだ者が分かり易く簡単に魔法を修得できるように記してばら撒く。これでいかにラダトーム王家が兵を派遣しようが簡単には負けることはないはずだ。各地を離れる前にルーラが使えない様に転移基準石を破壊しておくことも忘れない。これで一方的に襲われるのはラダトームだけだ。

最後の仕上げだ、魔王の城へと跳ぶ。城の最深部へと続く迷路を並み居る魔物を、片っ端から倒して進む。怒りで感覚が麻痺している俺が刀を振るい、あらゆる魔法を使って魔物をなぎ倒す。MPが切れる前に適当な魔物からMPを奪う。もう穢れた魂の叫びも俺には届かない。常時、ピオリム、スカラ、バイキルト、マホカンタ、フバーハのかかったエンペラータイムのまま進む。

最深部にて玉座が見えた。様々な魔物が俺を遠巻きに囲む。

「よく来た。わしが王の中の王、竜王だ。わしは待つておった。そなたのような若者が現れることを・・・もしわしの味方になれば世界の半分をや」

「黙れ！なにが世界の半分だ、そんなもの俺には要らぬ。俺が欲しかったのはそんなちっぽけな物じゃない。つまりぬ事を言うなら今すぐ殺してやるつか。」

竜王の台詞をぶった切って、言いたいことを叩きつける。周りに

いた魔物達が俺に向かってより強い怒りを表す。その中央で光が凝縮して大爆発を起こす。勿論俺の使用したイオナズンだ。吹き飛ばす魔物、血が、肉が飛び散り、悲鳴が上がる。

「ぬう、何たる魔力だ。そなたは本当に人間か？」

「いつまでも大物ぶるな。お前などいつでも殺せる、そう言ったのを忘れたか！」

俺の剣幕に恐れおののいている魔物の集団に向かって手を振りかざす。俺の手から放出された冷気によって多くの魔物が氷柱に閉じ込められる。

「よかるう。今のわしではそなたには敵わぬようだ。何が望みだ、言ってみよ。」

「まず一つ、いつまでその人を舐めた格好のままにいるつもりだ。さっさと本性を現せ！」

「なぜそこまで知っておる。分かった、これでどうだ。」

人型を取っていた竜王が本性の双翼を持つ直立した竜の姿を現す。まだ残っている魔物がどよめく。なんか腹が立ったのでその集団に向かって手を突き出す。必死で何かを避けようとする魔物からMPを奪った。

「初めからそうしろ、次は大魔道を出せ。」

竜王の眼が魔物の集団に大魔道の姿を探す。魔物の中から大魔道が姿を現す。

「お前のせいで俺は全てを失ったぞ、こうなることがお前の望みだったのか？」

「一部の愚かな者を操って、王家を分断することまでは成功した。だがお前にここまでの力があるとは想像だにしなかった、私の負けのようだ。」

「いい覚悟だ。ならばこれをくれてやる。」

残った最後の魔道書を大魔道に放り投げる。足元に落ちた魔道書と拾った大魔道の双眸が輝く。

「貴様、何を考えておる。こんなことに何の意味があるのだ。」

「要らぬのなら捨てても構わんぞ、それと同じ物を各地にばら撒いておいた。もうこの世界がどうなるかと知らん、せいぜい滅ばぬように励むのだな。」

もうここには用はない。リレミトを唱えて脱出する。さてどこへ行くこうか・・・もう俺の行く場所もいききたい場所もない。

.....

1年の後、ラダトームの城は廃墟と化していた。城無き城下町となった街もすでに秩序はなく、血で血を洗う地になっていた。同じ様に竜王の城も内部より破壊され、すでに威風を誇った姿は見られない。地方の都市も似たようなものだ。

暗き闇の中で男が一人。

「うぐおおおお・・・！私には何も分からぬ・・・。何も思い出せぬ・・・。しかし何をやるべきか、それだけはわかつている・・・。ぐはあああつ！！もう何も無いこの世界に未練はない。この世界に生きる者全てを滅ぼしてくれろわっ！！」

C h a o s E n d

魔道砲（前書き）

前回は反響が多かったので、今回の冒頭を足してケルテンの夢
と言う事にしました。

魔道砲

「ケルテン、ケルテン！起きなさいっ！起きてっ！」

俺を呼ぶ声がある。暗く逃げることの出来ない闇に一筋の光が差す。

「はっ！ここはっ？」

突然意識が覚醒した。意識が血相を変えたマギーが俺の体を揺さぶっている。

「どうしたのよ！ものすごくうなされていたわ。」

「あれ！なんでマギーがここに？」

「何寝惚けてるのよ、昨日の騒動が終わって私の屋敷で寝てたんでしょ。うなされてたから起こしたのよっ！」

「あっ、そうだった。なんであんな夢を見たんだろう？」

「夢？まだ寝惚けているの？水でも飲む？」

「嗚呼貰うよ。……酷い夢を見たんだ。アレフもガイラも君も死んで絶望に堕ちた俺が世界を滅ぼす、そんな夢だ。」

受け取った水を飲みながら夢の内容を語る。

「何馬鹿なことを言ってるの？私はこうして生きているし、世界は

何も変わっていないわ。」

「そうだね、俺が悪かったよ。昨日はあんなことがあったんだ、多分疲れていただけだろう。」

「そうだったらもう少し寝なさい。まだ起きるには早いわ。」

マギーの優しい言葉に目を瞑る。それから朝まで夢を見ることの無く眠る。

- - - - -

「来るのが一日遅いな、俺は昨日までに仕上げたのだがな。」

リヒャルトが怒っている。昨日は城のどさくさで工房に来ることができなかった。そのことを責めているのだ。だが昨日来ることが出来なかった理由を、教えるわけにはいかないので誤魔化すしかない。

「すまん、どうしても外せない用事が出来たんだ。その代わり土産がある、アレフ、例の物を出してくれ。」

「リヒャルトさん、これをお返しします。」

アレフが水鏡の盾をリヒャルトに差し出す。

「どうしてだ、もう要らないのか?」

「新しい盾を手に入れました、ロトの盾です。」

「ロトの盾だと！見せてくれ、それはこの水鏡の盾を上回る性能なのか、ぜひ見せてくれ。」

リヒャルトが掴みかからんばかりにアレフに詰め寄る。今は剣以外は身につけていないのでアレフが困った顔をしている。

「アレフ、すまんが宿屋に戻ってロトの鎧と盾を持ってきてくれ。」

「分かりました。では行つてきます。」

アレフが走って出て行った。ロトの鎧と聞いたリヒャルトが更に騒いでいるが、それについては無視する。

「ロトの鎧のことはいいから、例の魔道砲はどうなったんだ。見せてくれないか？」

「魔道砲？そう名付けたのか、なるほどいい名前だ。いいだろう、今見せてやる、俺の渾身の作だ。」

リヒャルトが棚から布の包みを取り出して、机の上に置く。包みを開くとそこには銀色に輝く物が現れた。直径5cm、長さ30cmの銀色の筒に持ち手、筒の後ろにヒンジで開閉できる蓋、持ち手にはトリガーが付いている。手に取って持ち具合を確かめる。

「流石だな、使い込んだみたいに手になじむ。魔法は詰めてあるのか？」

「入っていないはずだぞ、一度詰めた魔法は一時間ほどで抜けるよ。うだ。永久とはいかないみたいだな。」

「そうか、だとすると魔法を使用するのはあまり変わらんか・・・」

「ふっふっふっ、そうとも言えんぞ。まあやってみる。」

リヒャルトがなんとも自信有り気な口調で俺に言う。

「どう使うんだよ、中の筒を取り出して魔法を使えば良いのか？」

「その必要はない、そのトリガーに指を当てて魔法を使え、それで充填できる様に回路を作っている。具体的にはこの図面の通りだ。」

俺の図面よりずっと詳しい図面を取り出して、複雑な回路の部分を指差す。

「ああ、後で聞くから。まず試させてくれ。」

まだ何か言いたそうなりヒャルトを放っておいて、魔道砲のトリガーに指を添えてメラを唱える。放出したメラが吸い込まれるように消えた。いろんな角度から眺めてみるが特に変化はない。

「出口は覗き込むなよ、何かの拍子にでないとに限らん。じゃあ次はもう一度魔法を使ってくれ、それでさっきの魔法が射出される。」

「なるほど、魔法で魔法を打ち出すのか。こんな感じでいいか？」

近くにあった木偶に向かって構える。リヒャルトが慌てて俺の手を押さえる。

「ああ、そんな所に撃つな！あっちにしてくれ。」

そう言って指差したのは土の山、幾つか穴が開いている。

「なんだよ、いきなり。まあいいや、こっちでいいんだな。」

土の山に向かって砲口を構えて、さっきと同じくメラを使う。次の瞬間、砲口から熱線が射出されて土の山に吸い込まれた。その威力はメラとは思えない、思わずリヒャルトと魔道砲を交互に見た。

「なっ！ただの魔法と一緒にするなよ。凝縮した魔法が放てるんだ。画期的で新しい技術と言えよう。」

「想像以上だ、いや想定外の威力だ。これはベギラマだとどうなる？」

「分からん、うちにはベギラマを使える奴はいないからな。もしかしたら小筒の許容量を超えるかもしれん。実験するなら本体から外してからにした方がいいな。外し方はヒンジの反対側の金具を外せば蓋が開く。」

楽しみにしていたらしくリヒャルトが嬉しそうに語る。これはやれと言っているのと同義だ。筒の後ろの金具を緩めて中から小筒を取り出す。右手で握ってライデインを使う・・・のを止める。

「もしかして許容量を越えてたら爆発でもするのかわ？」

「ああ・・・可能性はあるな。」

「危ねえな、じゃあここに置いたままやるぞ。」

机の上に小筒を置いて指先だけで触れる。覚悟を決めてライディンを使う・・・目立った変化はない。振り返るとリヒヤルトが構えていた盾を地に下ろしている。

「俺の予想通り大丈夫みたいだな。」

「よくそういう台詞が言えるな。まあいいさ、じゃあこれをこっちに詰め直して・・・蓋を閉めるっ。それで、もう一度ベギラマを使うか。」

さっきと同じ様に土の山に向かって構える。さっきと同じくリヒヤルトが俺を止める。

「何だよ、またか!」

「ギラでさっきの威力だ、ベギラマだとんでもない威力になるかもしれない。外でやろう。」

「ああ、なるほど。」

納得できたのでリヒヤルトと外に出る。外にこの工事の際に余った土の山があったので、そこに向かって構える。リヒヤルトの手がまた俺の手を押さえる。

「駄目だ、空に向かって撃とう。まだ危険な気がする。」

「慎重だな。まあいいや、じゃあこうだ。」

空に向かって構えて魔法を使う。砲口から閃光が飛び出て空の彼

方へと消えた。

「なっ、何だと！今の見たかつ。」

「ああ、見た。どうもとんでもない物を作ってしまったようだ。」

「おい、リヒャルト、これの製法は絶対秘密にしよう、それにもう作るなよ。あまりに危険すぎる。」

「そうか、でも勿体無くないか？これさえあればどんな魔物が来ても簡単に退治できるぜ。」

「確かにそうだが、使えるのは人間だけじゃないんだぞ。もし奪われてもしたら敵の武器にもなる。」

「ああ、そう言われればそうだな。分かった、とりあえずその一丁で終わりにしておく。」

俺が不信の眼でリヒャルトを見る。調子に乗って何をするか分かったもんじゃない。

「そんな目で見るなよ、大体手元のミスリルもそんなには無いんだ。心配は要らない。」

「本当だな、信用してもいいんだな？」

「くどいな、もう作らないよ。」

「そうしてくれ、じゃあこれは貰っておくぞ。」

「当然だ、それはお前の手に合わせて作ってあるからな。それと腰に下げられる様にベルトを作っておいた。中にあるから渡そう。」

リヒャルトと建物の中に戻る。先ほどの魔道砲を取り出した棚から、別の包みを取り出して包みを開く。出てきたベルトを俺の腰に装着、魔道砲を収める。ホルスターから取り出して構えて撃つ真似、次はホルスターに戻して手を放す。俺は大満足だ、それを眺めているリヒャルトも満足のようだ。

集合

ロトの鎧と盾を装備して戻ってきたアレフを中心に一文字とリヒヤルトが、ぐるぐる回って見ている。

「なあ、これは何で出来ているんだ？見たことも無い金属だ。」

一通り見終わった一文字からそう聞かれた。

「伝説や書物によるとブルーメタルだ。どこで採れるのか如何にして加工するかも不明だ。」

「ふむ、ミスリルのように何か裏技はないのか？お前なら何か知ってるのじゃないか？」

「残念ながら知らない。」

「そうか、まあ当面は必要ないから構わん。」

当面？何とも意味深な言葉だな。

「何か聞いたそつな顔だな、俺はミスリルの研究、こいつは後進の育成でしばらくは忙しいんだ。だから当面は必要ないんだ。」

「なるほど、納得した。あれほど研究熱心だった一文字らしくないと思っただけだ。」

「別に研究に飽きたわけじゃないさ。最近は大ダトームの鍛冶ギルドからも職人が来る様になった。どうせ教えるならきちんとしたも

のを教えただけだ。とても他のことをやっている暇はない。」

「鍛冶ギルド？ 仮にも秘伝の技術を教えていいのか？」

「どの口がそういっことを言えるのか、ここに連れてきたのはお前だぞ。」

「まあそうだな。だが本当によかったのか？」

「ああ、構わん。近衛騎士から鎧の注文も来るようになったが、ともうちだけでは手が足りん。秘伝に拘って国が滅んでは元も子もない。腕のいい職人が増えれば、まあ次の技術も生まれてくるだろう。」

胸を張って立っている一文字は実に誇らしげだ。

「まあ、俺達のことには心配要らないぜ。さつさと竜王とやらを倒して来い。ああそうだ、俺の新しい武器の実戦テストの結果を持って帰るんだぞ。」

「分かった、分かった、じゃあそうさせて貰うさ。行くところか、アレフ。」

「あつ、はい。」

アレフに声をかけて工房を出て行く、出口付近で足を止める

「あつそうだ。帰ってきたら錆びない鉄について教えてやるよ。」

そのまま工房を出る。少し遅れて付いてきたアレフが遠慮がちに

俺に質問する。

「よろしいのですか？最後のあれ、何か聞いたそうでしたよ。」

「放っておけ、何もかも教えていたら限が無い。あいつらは貪欲だからな。」

「貪欲ですか・・・確かにいい意味でそうですね。でも錆びない鉄って何ですか？」

「なんだ、お前が気になってたのか。その通り錆びない鉄、平和になったらそれで日用品を作ってもらうのさ。」

「平和に・・・なつたらですか？」

アレフが少し溜めて不思議そうに聞く。

「ああ、魔王を倒してめでたしめでたしで話は終わらない。平和になつたら剣や鎧は不要になるし、そうなつたらあいつらも不要では悲しいだろう？だから平和を謳歌できる方法を考えてやるんだ。」

「そこまで考えないと駄目ですか？」

「当然だ、あいつらだけじゃないぞ。勇者も平和になつたら不要になるんだ。一、二年はちやほやされるかもしれないが、その後は恐れられて閑職にまわされたり、処分されたりする。それが嫌ならこの国から消えるか、絶対的な権力を握るか、どちらかしかない。」

「なんともやりきれない話ですが、平和の末に絶対的権力者になるのは本末転倒です。どこか新天地でも目指しますか。ああ、でもこ

「アレフガルドにそんな場所ありますか？」

「まあ楽しみにしてる、世界は唯一つしかないわけでもない。」

「相変わらず意味の分からないことを言いますね。楽しみは後に取っておきましょう、きっと竜王を倒せば分かることなんでしょうね。」

「そうだな、じゃあマギーの屋敷へ急ごう。もうガイラも来ているはずだ。」

約束の時間を少し過ぎている。アレフを促して急いでマギーの屋敷に向かうことにした。

.....

「遅いぞ、いったい何してたんだ？」

「すまん、工房で話し込んでいたんだ。ちょっと見て欲しい物がある。」

腰から魔道砲を抜いて天に向かって構える。メラを使用すると、熱線が空に向かって放出された。

「ちょっと今の何よ？メラゾーマであんなことできないわよ！」

予想通りマギーが食いついた。俺の手から魔道砲を奪っているんな角度から眺めている。

「フツ、今はメラゾーマではない・・・メラだ。」

「意味が分からないんだけど・・・。」

「一度ここに充填したメラを次のメラで射出するんだ。その際に熱エネルギーの方向を限定することで、威力を増している。まあそんなところだ。」

「ねえ、やってみていい？」

マギーの目が輝いている。駄目と言っても聞かないだろう。

「ああいいさ。ここに指を当ててメラを使ってくれ。あと危ないから空か地面に向けて撃つこと。」

「こつね、いくわよー。」

さつきと同じ様に熱線が空に向かって放たれる。嬉しそうなマギーとは対照的に、アレフとガイラが冷ややかな目で見ている。

「あれが当たったら洒落じゃ済まないな。お前が敵だったらどうする？」

「そうですね、的を絞らせない為に動くしかありませんね。」

「物騒な話だな。使うのは俺だし、リヒャルトにはもう作らせない様に言っている。そんなに心配しなくていいぞ。」

アレフとガイラの会話に参加しつつ、マギーの前に手を出す。名残惜しそうにマギーが俺の手に魔道砲を渡す。

「これ、他の魔法ではどうなの？」

「ああ、ライデインはやってみた。我ながらとんでもない物を作ってしまったと思うぐらいだ。」

「じゃあ、メラゾーマとかイオナズンではどうなるのかしら？」

「怖くて実験できない。ここにどの程度までの魔法が充填できるか不明だ。限度を超えたら爆発するかもしれないからね。」

「そう、残念ね。一度見てみたかったんだけど……。」

「頼むから興味本位だけで実験するのは止めてくれ。これ一つしかないし、今はこの程度で十分だよ。」

マギーの気が変わらないうちにホルスターに片付ける。

「じゃあ、これからの予定だが、まずリムルダールに跳ぶ。そこから歩いて魔王の島へ一番近い岬へ向かう。何か質問はあるか？」

「なぜ徒歩で行くんですか？」

「魔王の島の半分は毒の沼地だ、それに竜王の城は迷宮になっているから馬を連れては入れない。」

「なんでそこまで分かるんだよ？」

「だから前にも行ったと言っただろ。」

「前にルーラで行けると言っただけじゃなかった？だったらルーラで行けばいいじゃない。」

「うん、まあそれも考えたけど怖いから却下だ。」

「怖い？」

「下手したら敵集団の真ん中に出ないとも限らないからね。囲まれるより陣を張って待っていてくれた方が対処がしやすい。」

「まあ・・・確かにそうね。」

俺とマギーの会話にアレフとガイラが呆れている。

「普通は陣を張って待っていた方がいいなんて思わないんだけどな、まあお前らの魔法を知っているから、理解はできるけどよ。」

「そうですね。あの魔法の威力は異常ですよ。」

「アレフ、他人事みたいに言っただけで駄目だぞ。お前にもいくつかは覚えてもらおうからな。」

「僕にですか？」

「他に誰がいるんだ、とりあえずベホマ、イオラ、最終的にはギガデインを覚えて欲しいかな。」

「なんかよく分からない取り合わせね。」

「伝説のロトの勇者の使用した魔法だよ。やっぱり勇者ならそうで

あつて欲しい、格好いいからな。」

「呆れたやつだ、個人的な美学の問題かよ。俺には関係ない話だから好きにすればいいさ。」

魔法を使うことのできないガイラが少し拗ねている。

「ガイラ、お前には道中で幾つかの薬草を調査してもらおう。MPも有限だから節約したい。」

「そうか、俺にもできることがあるのはありがたいな。お前らといると一人役立たずになった気がする時がある。」

「いろいろと頼りにはしている、こと戦闘となれば誰よりもお前が一番強い。こんなことを言っても仕方が無いな。じゃありムルダールへ跳ぼう。」

「待って、ルーラは私が使う、これから先は補助的な魔法は私が使うわ。」

「了解だ、じゃあ任せた。」

俺、アレフ、ガイラがマギーに近寄ってマギーのルーラの発動を待つ。俺達4人が光に包まれて天を駆けた。

最後の晩餐

「お兄ちゃん、あの時はごめんなさい。」

アレフの目の前で真剣な顔をした子供が頭を下げている。下げられたアレフの方が戸惑っているぐらいだ。

「こいつも反省しているんだ。なっ、もう許してやってくれよ。」

横に立っていたゲオルグが助け舟を出す。

「あっはい、もう怒っていません。こっちこそやり過ぎたと反省しているぐらいです。」

「よかったな、ハインリツヒ、もう怒っていないってよ。よし、じやあ走りこみの続きだ、南の投石器まで行って帰って来い。」

「はい、先生。では行ってきます。」

メルキドで掬いを生業としていた子供が明るい笑顔で走っていく。俺がここに連れてきたのは間違っていないかった。

「それにしてもゲオルグが先生か、一体何を教えているやら・・・」

「剣と体力作りだ。他の子供もそれぞれ酪農や漁業、農業を習っているさ。ドオーマンから魔法を習っているものもある。」

「あの時殺さなくてよかったです。あの笑顔を見たらそう思えまし

た。」

「子供相手だぞ？何があったかは知らんがやり過ぎだ。もっともそんなことを言えた俺達でもないがな。」

ゲオルグの言葉にアレフが少し思いつめたような顔をした。

「もうその辺にしといてくれ。アレフも反省しているし、あの子供もそうだ。もう二人とも同じ過ちは犯さないさ。お前たちもそうだっただろう？」

「違う。俺もあいつらもお前のおかげで居場所ができて、前よりは幸せになった。あとは竜王がいなくなれば平和が来ればもっとよくなる。だから早く竜王を倒してアレフガルドを救ってくれ、勇者様。」

ゲオルグはそう言うと、アレフの肩を軽くポンと叩いて去っていった。

「だ、そうだ。アレフ、お前期待されているんだぞ。」

「そうでしょうか？」

「そうでなかったらわざわざ勇者なんて言わないさ。まあいいさ、とりあえず俺の家に行こう。」

俺が先導してリムルダールの街中を進む。

「ここはラダトームやメルキドに較べて平和そうに見えますね。」

「湖の結界と、防備を越えてこれる魔物はまずいない。住む人間の意識も統一されているから内から崩れることも無い。それなりに苦勞したけどね。」

「そこら中にあるバリスタや投石器、それにクロスボウはあなたの仕業だったわね。」

「竜王出現の前から準備させたんだ。なかなか話を信じて貰えなくてね、結構いろいろ言われたよ。もし何もなかったらどうするんだ、そんな金がどこにあるんだ、極めつけはそんな危険な物を街中に設置するなどんでもないってね。」

「でも本当に竜王が現れて、あなたが感謝されている。そうみたいね。」

「なんでそんなこと分かる？」

「すれ違う人の目が優しい、それに何人が頭を下げている人もいたわ。あなたがラダトームで育っていたらよかった。そう思ってしまったのは私のエゴかしら？」

「たとえば俺がラダトームにいたとしても、俺の言うことを聞いてくれたとは思えないな。俺は自分の手の届く範囲だけを助ける、それもエゴだ。さあ、俺の家に着いたぞ。みんな一度は来ているよな。」

誰の許可も得ていないが勝手に家の中に入る。玄関を通り抜けてリビングへそこに養父が座っている。俺が入ってきたことに少しも驚いていない。

「そろそろ来るころだと思ったよ、茶の用意ができている。皆に座

ってもらいなさい。」

「だ、そうだ。みんな座って茶でも貰おうか。」

「失礼します。」

「失礼しますわ。」

「爺さん、久しぶりだな。元気だったか？」

三人が三人とも違う挨拶をして座る。俺も座って茶を貰おうとする。

「久しぶりにお前が入れた茶が飲みたい。湯と道具はそこにあるから頼む。」

文句の一つも言いたかったが、一つ睨んで黙って言うことに従った。入れた茶をテーブルに並べると、それぞれが口に運ぶ。

「やはりお前が入れた茶はうまいのう。次はいつ帰ってくるか分からんから、これを味わえてよかったわい。」

「じい様、次の旅が終わったら少し落ち着くはずだ。そうになったら毎日でもいれてやるさ。」

「そうか、ならさつさと竜王とやらを倒して来い。あやつが現れることを知っておったお前のことじゃ、倒す術も知っておるのだろう。帰ってきたら祝言でもあげるか？」

思わず口に含んでいた茶を噴出した。

「いきなり何を言い出すんだっ！」

「それぐらい分かる。そちらのお嬢さんの視線はお前を行ったり来たり、お前も同じじゃ。ああ、別に責めてもおらんし、反対する気もない。ケルテン、お前にも居場所ができてよかったな。」

「年の功には敵わないな。紹介しておくよ、ラダトーム城筆頭魔道士、兼、王立図書館司書官のマギウス・J・ヴィツセンブルン嬢、男爵位も持っている名門の当主様だ。」

「なんとも素晴らしいお嬢さんを射止めたものだ。わしがケルテンの育ての親のヨハン、一応リムルダールの長をしておる。こいつの死んだ両親の財産を横領して、さらにラダトーム城に10万Gで売った性悪爺じゃ。よろしくな、マギウス・J・ヴィツセンブルン殿。」

人の悪い笑顔を浮かべて爺さんが自己紹介した。少し困惑の表情を浮かべていたマギーが我に返って返答する。

「マギーでよろしいですね。お爺様。」

「お爺様が、いい響きじゃ。では一つわしの昔話に付き合ってもらおうかのう・・・15年も前のことじゃ、この街に移住してくる親子がいた。馬車に家財道具と5万Gもの大金を積んでこの街に急いでおった。運の悪いことに産卵期のキメラの巣を刺激してしまったらしい。襲ってくるキメラから逃げようと必死で馬車を走らせたが転倒して、子供が馬車から放り出された。異変に気付いた街の者が助けに来た時には、馬車の中の夫婦は亡くなっておって、助けることができたのは湖に投げ出された子供だけだったのじゃ。」

そこで一旦区切って、茶を一口すする。誰も何も言わない、俺は

この話を10年前に聞いているので今更驚きも悲しみもない。

「どこまで話したかのう、そうじゃ、それでわしがその子供を引き取ることにしたんじゃ。確かその頃、この街では城に収める金が5万Gほど足りんかった。悪いとは思ったが使わせてもらった、それでその子供を我が子同様に育てたのじゃ。それが正解であったかは分からぬ、ただそのおかげでこの街は助かっておるし、この国も助けられておるようじゃ。さてわしの懺悔はこれで終わりじゃ、今晩は出来る限りの夕食を用意させる。今日一日ぐらいゆっくりしていても誰も文句は言うまい。」

言うだけ言うと残った茶を全て飲み干して、さっさとリビングを出て行った。残された俺達は気まずい雰囲気にもまれていた。

「なんと言うか、なんとやっていいのかわからんが・・・学者、俺はお前と会えてよかったと思うぞ。」

「慰めてもらわなくても平気さ、俺は誰も恨んでないし、じい様のことだけを咎める気もない。当然のことだったんだよ、この街の自治を守るためには必要なことだった、ただそれだけさ。おかげでまだ子供の頃から好き勝手にやらせてもらったものだ。剣の練習に、魔法の修行、街長の立場を利用して結構無理に書物を得ることができた。今の俺があるのはあのじい様のおかげだ。」

「ラダトームの城にいる時は、地方がこんなになっているなんて知らなかったわ。メルキドもそうだったけど城を維持するためにずいぶん犠牲を強いていたのね。」

「一部の特権階級のために、ほとんどの民が犠牲になっているのが現実だよ。初期の志は忘れて特権だけを貪り喰らう、貴族や王族達

は魔物を倒す義務を背負っていることを忘れていたんだ。ああ、マギー、俺がそう言ったことは陛下や貴族には秘密にしておいてくれよ。」

「私も貴族なんですけど・・・冗談よ、誰にも言わないわ。アレフはどうなの？お姫様といつでもお話できるんですよ。」

「僕も言ったりしません。もし言っただとしても笑って済むとおもいますけどね。」

「そうか、それなら安心だ。」

それからたわいのない話をして夜を待った。夜には町中から集められた豪華な食事がテーブルに並べられ、町中から知己の人々が代わる代わる訪れることとなった。

虹の橋

10/10 勇者支援生活 165日目

リムルダールを出発して4日、やっと魔王の島が見える岬へと辿り着いた。

「ここで虹の雫を使えばいいんですね。」

「ああ、伝承によるとそうみたいだな。本当に橋が架かるのか、一時的に渡れる橋ができるのか、それともあちらへと転送するだけかは伝承だけでは分からないな。この旅に同行した理由の一つがこれだよ。」

「ここに学者馬鹿がいるぞ。この先にある脅威に対する緊張感がないな。」

「これを見ることができたのは、過去に4人、これから見る俺達4人しかしない。これを楽しみにしないで何が学者か。さあ、アレフ、虹の雫を天にかざすのだ。」

「ええ、じゃあいきます。」

アレフが手にした虹の雫を右手に持ち、天にかざす。太陽の光が虹の雫に吸い込まれ、岬から魔王の島に向かって虹を形成する。数分の時をかけて七色に輝く虹の橋が岬と魔王の島を繋いだ。そのなんと美しい光景に目を奪われる。

「おいおい、綺麗なのはいいが本当にこんなので渡れるのか？なん

とも頼りない橋じゃないか。」

「無粋なことを言うなよ。伝承ではこれで渡っているんだ。とりあえず乗れるか調べてみよう。」

虹の橋の端に踏み出すと足はすり抜けた。二度三度と繰り返すが変化はない。

「無理みたいだな。なにか間違っているのかもしれない。」

マギーは虹の橋に手をかざしている。

「当然、すり抜けるわね。」

「そうみたいです。僕もやってみま」

アレフが虹の橋に触れた瞬間、突然アレフの姿が消えた。周りを見渡してアレフの姿を探す。

「あつあそこよ！橋の向こうにアレフがいるわ。」

虹の橋の反対側に手を振っているアレフの姿がなんとか見える。俺達も行けるかと再び触れてみるがなんの効果も見られない。

「ロトの勇者でないと駄目なのか？」

「そんなことは無いはずだ。伝承ではロトの勇者と一緒に仲間が渡っているんだ。転送の魔法の一種と仮定すると手を繋ぐとかすればいいのかもしれない。とりあえずアレフに戻ってきてもらおう。」

「隊長、あれでよろしかったのですか？」

書類仕事をしているサイモンにゴルトベルガーとオスマイヤーが迫っている。一緒に仕事をしているステファンとジヨルジヨが不快そうな顔をする。

「ん、何がだ？」

「陛下に対して不敬な態度を取ったあの者のことです。私の下に多くの貴族から不平不満がきています。」

「そうか、オスマイヤーもそうなのか？」

「そうです。不敬を理由に放逐せよとの意見もあります。一部な過激な者達は闇討ちを計画しているとも聞いています。」

「なるほど。しかし陛下が不問とされたのだ、我々がどうこう言うても仕方あるまい。」

サイモンがどうということも無い口調で返答した。それを聞いたゴルトベルガーが強く言い返す。

「陛下が不問にされたからといって放っておいてよい問題ではありません。このままでは君臣の間に亀裂ができることになります。」

「卿はそう言うが、すでに亀裂はできていたのだ。あの誓紙のことが知れた時点だな。王家に対する強烈な不信感、それを陛下のご英断で打ち消させた俺は思っている。」

「そうかも知れませんが、やはり私は納得できません。」

「卿は真面目だな、貴族としてより貴族らしくあるうとしているのは分かるが、前しか見ていないと足元を掬われるぞ。ステファン、ちよつと前のお前に似ているな。」

「確かにそうですね。平民出の私が騎士らしくあるうとするのにも似ています。」

「話を誤魔化さないで下さい。」

ゴルトベルガーが憤慨して声を荒げる。肩をすくめたサイモンが真面目な顔に戻る。

「では話を戻そうか。卿等の心配は無用で無益なものだ。」

「なぜですか？いつ誰が動いてもおかしくない状況なのですよ。」

「そもそも当の本人はすでに城にはいない。数日前に魔王の島へと向かったそうだ。ことが成就したら勲功一番で誰にも文句は言えないだろうな。それにあいつに辞めると言ったら喜んで辞めるぞ。」

「なつ、しかしそれこそ王家や貴族を軽視しているのではないですか！」

「それも卿の言う通りだ。俺の知っているあいつにはそんなところがある。今は目的が一致しているからこそ一緒に居られるのだろうな。」

「目的ですか、それはなんでしょう？」

「竜王の討伐だ、当たり前のことを言わずな。」

「では竜王の討伐を終えたら、敵になるかもしれないのですか？それこそなんとかせねばなりません。」

ゴルトベルガーの台詞にサイモンが口をゆがめてフツと笑う。

「あいつが敵にまわるか、あり得ない話だ。もしそうなったとしても卿ではあいつには勝てぬよ。」

「なぜそこまで断言できるのです、まさか私が弱いと言われるのですか？」

「いや、卿は十分強い、だが怖くはない。」

それを聞いたステファンとジョルジョもサイモンと同じようにフツと笑う。あまりの屈辱にゴルトベルガーの顔が真っ赤に染まった。

「仰る意味が分かりません。」

「俺以外の二人にも分かっているようだ。さっきも言ったが前だけを見ていると足元を掬われる、あいつは足元を掬う名人だ。」

「卑怯な手段を使うのですか？それこそ騎士の戦い方ではありませんん。」

「ステファン、どこかで聞いたことのある台詞だな。」

サイモンは思わずステファンに話を振った。

「ゴルトベルガー殿、戦いに対する考え方が変わったのです。儀礼を旨とする近衛騎士では魔物の侵攻を押さえることはできません。陛下とこの国を守ることができなくては、近衛騎士の意味がありません。」

「では卑怯な手段を容認するのでしょうか？」

「成すべきことを成せと言っているのです。剣で勝てない相手には魔法を使う、魔法では勝てない相手には剣を使う、剣でも魔法でも勝てないなら勝てる方法を考える。そういうことのできる人物なのですよ、だからゴルトベルガー殿では勝てないと隊長は言っているのです。」

「もうその辺でいいだろう、ゴルトベルガーもオスマイヤーも身内の不平は自分で押さえる。それができないなら一族共々消えることになるぞ。無理に説得することはない、今はいないとでも言っておけ。それでも納得しない相手にはこう言えばいい。“いずれ竜王に負けて尻尾を巻いて逃げてきます、その吠え面を眺めてやりましょう”とな。」

「分かりました。全て納得したわけではありませんが従います。では失礼しました。」

ゴルトベルガーとオスマイヤーが隊長室から出て行った。

「サイモン殿も成長していますね。これからは常にローゼンシュタイン隊長と呼ばなくてはいけないでしょうか？」

「止めてくれ、お前にまでそう呼ばれたら俺の居場所がなくなる。公式の場以外は今までどおりでいいさ、ジヨルジヨもだぞ。」

「了解です、サイモン隊長。」

二人が敬礼と共に同時に返答をした。

神の雷

10 / 12 勇者支援生活 167日目

虹の橋を渡って二日、遠くに魔王の城が見えるところまで来た。ここから先は毒の沼地を進むことになる、ただそれだけではなかった。毒の沼地に千を越える魔物が陣を張っている、率いるのは真紅の鎧が特徴的な死神の騎士。配下には悪魔の騎士、鎧の騎士、死霊の騎士、死霊、がいこつと不死の軍団の名を欲しいままにしていると言っていていいだろう。

「なんとも豪勢な景色だ。流石の俺様でもここを突破するのは無理だぞ。」

「何を言っているんだ、せっかく俺達を歓迎してくれているんだ。ぜひともこのパーティーに参加したいものだね。」

「パーティーなら大きな花束か、豪華な料理が必要ね。用意してないわよ。」

「もう三人とももつと真面目にやって下さい。それでどうするんですか？」

あまりに緊張感の無い俺達にアレフが怒っている。別にふざけているわけではないがここはさらに明るく振舞う。

「よし、ならばここは派手にやってやろう。例のあれをやる、アレフ、できるか？」

「あれですか・・・時間がかかりますよ。」

俺の提案にアレフが自身なさそうにしている。

「どれくらいだ。使えないわけじゃないんだろっ?」

「早くて1分です。」

「OK、それでいい。出来るだけ接近してからやるぞ。毒の沼地の50m手前まで寄る。それとアレフは口述詠唱でいいぞ、俺とマギーはそれを聞いて自分のタイミングで詠唱する。マギー、それでいいな。」

「いいわ、きつと世界で誰も見たこともない花火が見れるわ。」

「よし決まりだ。ガイラ、時間稼ぎを頼む、ただし毒の沼地には入るな。」

「へいへい、損な役回りだがやらせてもらいますよ。」

ガイラを先頭に魔物の軍団に近づくと、俺達が近寄っても毒の沼地から出てこない。不死の軍団にしかできない布陣、地の利は譲る気はないらしい。だがその地がお前達の墓になる。

ガイラが毒の沼地の手前ぎりぎりまで進む。魔物の軍団の後衛から前衛を越えて、散発的に矢が飛んでくるが俺達までは届かない。ガイラが毒の沼地の手前で矢を叩き落している。

『僕はMPを30消費する』

MPはマナと混じりて万能たる力となれ・・・

アレフがゆつくりと詠唱する。膨大なMPを消費する為、放出と融合に時間がかかっている。途中でマギーの詠唱が始まった、声には出さないが口が動いているからそれが分かる。少し遅れて俺の思考詠唱を始める。

《俺はMPを30消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、》

『おお万能たる力よ、神の怒りとなりて、天より来たれ！』

《おお万能たる力よ、神の怒りとなりて、天より来たれ！》

「「神よ！汝に仇成す者達に天罰を与えたまえ！ギガデイン！！」
！
「
「

三人の最後の詠唱が重なる。

アレフの炎の剣が天を指し示し、一条の光が天に伸び、一瞬の間を置いて轟音を立てて雷が魔物の軍団の中央に落ちた。稲妻の光と天を裂く音、目が閃光を拒否して瞼を閉じさせ、耳が轟音に悲鳴を上げている。

大地の揺れが治まった。恐る恐る目を開くと毒の沼地に布陣していた不死の軍団が、一切の動きを止めていた。どれが死神の鎧なのか、まったく分からない。

「怖い魔法です。相手が命を持たない魔物だからいいものの、これを人相手には絶対に使いたくはありません。」

想像を超える魔法の結果にアレフが慄いている。まあ俺も人相手

に使うつもりはない。耳を押さえたままガイラが俺達の下に戻ってきた。

「まだ耳が悲鳴を上げている、メルキドの時の比にならんぞ。」

「三人分のギガデインを集約したものだからな。これをミナデインと名づけよう、もう使うことはないだろうけど……。さあ行くのか、これで城まで邪魔をするものはない。」

瘴気を発生させていた毒の沼地ですら蒸発して、俺達を阻むことは無くなった。進んだ分だけ魔王の城が大きく見えてきた。

「どうせなら、城にさっきのミナデインを落としてはどう？きつと竜王ごと潰せるわよ。」

「残念ながら竜王は地下深くにいる。下手に城を壊したらどこから入るか分からなくなるぞ。」

「ふ〜ん、残念ね。まあいいわ。」

とうとう俺達は魔王の城に辿り着いた。これから何が俺達を待ち受けているかは分からない。それでもこの先に目指す竜王がいる。誰もがそれだけは分かっていた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

魔王の城の一室で大魔道が部下の魔道士から報告を受けている。

「なんだと、死神の騎士が率いた軍団が全滅しただと、いったいど

ういうことだ？」

「文字通り全滅です。天からの落雷を受けて消滅しました。なまじ固まっていたのが仇となりました。」

「今更そんなことを言ってもどうにもならんわっ！」

報告者の魔道士に大魔道の怒りが突き刺さる。電撃を浴びた魔道士が崩れ落ちた。

「壹千の軍勢を失ったと・・・こんなことが竜王様に知れたら私の命も危うい。なんとしてでもやつ等を葬らねばならぬ。」

呟く大魔道に足音が近づく。振り向いた大魔道の前に死神の騎士が姿を現した。

「実に危ういところであつたわ、貴様が苦戦していたのも頷ける。」

「おお、無事であつたか。それで何か分かつたか？」

「二度とあの魔法を受けぬことだ。詠唱におよそ一分の時間がかかる、それも三人での詠唱が必要だ。もし次に使用する素振りが見えたら攻撃を集中すればいいだろう。」

「なるほど、よくやってくれた。しかしよく助かったものだ。」

「ふん、貴様と同じく偽りの体を操っていたのだ、貴様だけの秘術と思うな。」

「ぬっ……………」

「では俺は最下層にてやつ等を待つとしよう。貴様も成すべきことを成せ。」

紅き鎧が音を立てて大魔道の前から消えた。

「馬鹿な、私の秘術が私だけの物ではないだど・・・事終わるまでに奴も消さねばならぬか。」

一人残された大魔道が不気味な声で呟いていた。

大魔王の気配

招かれざる客を抗議するかのように、魔王の城の城門が音を立てて開く。中はシンと静まり返っていて魔物一匹の姿も見えない。

「何もいませんね、こうもつと魔物がひしめいていると思っていました。」

「アレフ、罾かもしれんぞ。どこかに隠れていて急に襲ってくるかもしれん。」

珍しくガイラが慎重論を口に出している、ここは同調しておこうか。

「用心するに越した事は無い、アレフが先頭、ガイラ、マギーと続いてくれ。俺が最後尾だ。」

「なんで俺が先頭じゃないんだ？」

「防御力ではアレフの右に出る者はいない。それにこの城には魔法結界もあるから、ロトの鎧の結界無効が有効だ。」

「なるほど、魔法の結界は俺の専門外だ、遠慮しておこう。」

ガイラが大人しく従ったのでその隊列で静かな城の中を進む。当然の様にアレフが手元の紙に地図を書いていて、それほど早くは進まない。まず右側の通路を進み行き止まりを確認する。その後左側を進み、城内をぐるりと一周回って中央の扉の前に来た。

「この先に何かいそうですね、そんな雰囲気があります。開けるので

気をつけて下さい。」

そう言いながらアレフが両開きの扉に手をかけて開く。そこには大きな石で出来た彫像が六体並んでいる、今は動く気配はない。なるほどゾーマの時に大魔神が並んでいたのと同じか、なんとも粋な演出だ。

「学者、メルキドのゴーレムに似ているな。動くのか？」

「ああ、メルキドでゴーレムと死闘を繰り広げたストーンマンに間違いないだろうな。」

「命の無い彫像が死闘って変な表現ね。」

「そう言われればそうだな、まあそれはいいさ。こいつらは多分攻撃を受けるか、俺達が向ここの扉に辿り着いたら一斉に動き出すだろう。さてどうしたものか……。」

言葉を区切って思考を巡らす、左右に三体ずつ綺麗に並んでいるストーンマンを見て、いいアイデアが浮かんだ。

「アレフ、ガイラ、マギーは左三体のストーンマンに備えてくれ。右三体は俺がやる。」

「ずいぶんと自信ですが、どうするのですか？」

「まあ見てろ。せつかく並んでいるんだ、うまく利用させてもらおう。」

腰のホルスターから魔道砲を抜きライデインを充填する。ストー

ンマン三体が一直線になる場所に立って右ひざ辺りに照準を合わせ
る。もう一度ライデインを使う。魔道砲の先から出た閃光が、スト
ンマン三体の膝を打ち抜いた。

「ぐおおおおおっおお！」

俺の射撃を合図に全てのストーンマンが動きだす。膝を撃ちぬか
れたストーンマンの膝が砕けて右側に倒れる、俺の予定どおりだ。
さらにもう一発、俺の前に倒れて横になったストーンマンの胸を目
掛けて魔道砲を撃つ。再び出た閃光がストーンマン三体を貫いて二
度と動かぬガラクタへと変えた。

「よし、こっちは終わった。マギー、そっちはどうだ！」

予定通りにうまくいったことに歓喜してから、もう一方の戦いに
目を向ける。動き出したストーンマンがアレフとガイラに襲い掛か
っている。ガイラが一体、アレフが二体を引き受けているようだ。
ガイラはストーンマンの攻撃を紙一重で避けて、カウンターの攻撃
を入れている。アレフはロトの装備の防御力を頼みに、二体のスト
ンマンの攻撃を受け続けている。マギーは少し離れた所でスト
ンマンの攻撃を受けないようにしている。俺の声に気付いたマギー
が振り返った。

「私の魔法では石でできたストーンマンに効果的なダメージを与え
られない、二人に強化魔法をかけたらもうできることはないわね。
そっちはもう終わったの？」

「ああ、ライデインを集約した光線で一気に貫くことができた。並
んでいたからの同然だよ。こっちは手伝った方がいいか？」

そう言いながら二人の戦いに目を向ける。ガイラの何回目かの攻撃がストーンマンの膝を砕き、そのストーンマンが両の手をついた。ミスリルナツクルを低くなった頭に叩きつけ、粉碎する。片足と頭を失ったストーンマンが目茶苦茶に手を振り回すが、ガイラは跳び去ってその攻撃の範囲にはいない。ガイラは放っておいていい。

アレフは防戦一方だ、いくら動きが遅いとはいえ二体の相手は辛い。スカラの不可視の盾とロトの装備のおかげで、ほとんどダメージを受けていないがいつまでも受け続けることはできないであろう。

「アレフ、援護する。できるだけその場所を動くなよ。」

アレフの首が少し前に傾いた。アレフから離れた場所に魔道砲を向けて機会を待つ。なかなか機会は訪れない、額から汗が流れて顎に伝わる。アレフによって受け流されたストーンマンが、照準の先で大きく体勢を崩した。

《俺はMPを2消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお、万能たる力よ、炎となりて我が敵を撃て、メラ！》

俺の手から放たれるはずの火球は魔道砲へと吸い込まれ、先のライデインを解き放つ。砲口から飛び出た閃光がストーンマンの肩から胴体を貫いて反対側へと抜けた。

ガイラが相手にしていたストーンマンの四肢を全て破壊して動かぬ岩塊としてから、アレフと二人で残ったストーンマンと戦う。もう勝負はついた、アレフが攻撃を受け流し体勢を崩す、その隙をついてガイラの拳がストーンマンを攻撃する。それが幾度も繰り返されてストーンマンを只の岩塊へと変えた。

アレフとガイラが座って息を整えている。

「ご苦労さま、結構大変だったようだな。」

「パワーはあるが戦い方が洗練されていない、ゴーレムの方が強かった。そんな印象だ。」

「まあそうだろう。メルキドのゴーレムはストーンマン10体を退けたらしいからね。」

「それはすごいですね、でもそのストーンマンをあつという間に倒したケルテンさんもすごいですよ。」

「こいつのおかげだ。それに撃たれる為に一列に並んでいた、まともな戦闘では考えられないな。」

ホルスターに収めた魔道砲を軽く叩く。

「それを作らせたのは学者だから、もつと誇ってもいいぜ。」

「俺は案を出しただけで実際に仕上げたのはリヒャルトだ、帰ったらこの成果を報告できるな。さあ、もう少し休んだら進もう。この先に玉座があるはずだ。」

予想だにしていなかったストーンマン六体との戦いは終わった。誰の思惑かは知らないが明らかにゾーマの影響を受けている。それは文献によるものか、あの時代からの伝承か、それとも大魔王の怨念か。もし怨念ならこれから先の苦戦は免れぬことであろう。

「あいつらうまくやってるかなあ？」

「親方、あいつらって誰ですか？」

休憩中にいきなり意味の分からないことを呟いたりヒヤルトに、若い職人の一人が聞き返した。

「ん、ああ、学者達のことだ。俺の作ったあれが役に立っているといいのだがな。」

「俺が実験に付き合ったあれですか？あれは驚きましたね、ギラがああなるとは思いませんでしたよ。あの人、相当名のある学者なのですか？」

「いや、それが一平民に過ぎない。アレフガルド中を回っていると調べているらしい。学者ってのは連れがつけたあだ名だ。」

「へえ、そうなんですか。てっきり城勤めの学者かと思っていました。親方とは付き合いは長いのですか？」

「いやそれほどでもない。一文字の方がずっと長いはずだ。俺が初めてあったのは何時だったかな・・・数年前に俺の店に壊れた武器を持ってきた。それが今ここで打っている剣の原型だが、見て驚いたものだ。その時の俺の驚きは想像できるだろう。」

「当然です、この鋼の剣は市販の物とは別物です。」

若い職人が打ちかけの鋼の塊を指差してそう言う。

「そうだ、その時にはすごい客が来たとは思ったがそれで終わりだった。それが三ヶ月ほど前に再び現れて今度はミスリルの剣だ、氣付いた時には店を畳んでその技術の主弟子入りしていた、それがお前らが大親方と呼ぶ一文字だ。」

「それが学者さんとどう繋がるんです？」

「一文字の家に伝わるどこの文字かも分からない秘伝書を解読したそう。それ以来、蒸し石炭の技術、鋼の鍛錬、鉄と鋼の積層構造、ミスリルの加工を研究し続けていたらしいぞ。」

「なるほど、あれはミスリルだったのですか、見たことのない金属だとは思いましたが……。」

「しまった、誰にも言うなよ。ミスリルの製法は当面公表しないとあいつと約束しているんだ。」

「言いませんよ、どうせ信じてもらえませんが。でもいつか教えてくださいよ、いつでも実験の手伝いはしますから。」

「そのうちな、さあ続きだ。まだ作らないといけない注文がいつばある。」

「はい！」

リヒャルトと若い職人が鋼を挟んで鎚を振るう。赤熱した鋼、鎚を振り下ろす度に飛び散る火花が、二人を無心に動かしていた。

ロトの導き？

主のいない玉座がある。何者をも拒むかのように魔法の結界がその場所を守っている。あまりの事実に俺以外の三人が啞然としている。

「竜王はどこです。なぜ誰もいないのですか？」

「ここが真の玉座ではないからだよ、真の玉座は地下深くにある。アレフ、玉座の周りを調べるんだ。」

「はい、そこで待っていて下さい。」

ロトの鎧を着たアレフが魔法の結界に入り、玉座を調べている。

「アレフ、玉座の後ろだ。床を叩くと軽い音がする場所があるはずだ。」

アレフが俺の助言に従い、炎の剣を鞘ごと抜いてそれで床を叩く。しばらくして音の違う場所を見つけたアレフが、床の隙間に短剣を差し込んで力を入れている。床の一部が持ち上がって地下への階段がその姿を見せた。

「でかした。俺達はトラマナを使ってそこまで行く。ちょっと待ってる。」

そう声をかけるとほぼ同時に、トラマナの光がマギーを覆つ。

「言ったでしょ、こういう魔法は全て私が使ってる。さあ行きまし

「よう。」

「助かるよ、さっきの戦闘で結構MPを消費している。出来るだけMPを使いたくない。」

「マギーを中心にアレフのところまで進む。ここから見える階段の下には暗闇しか見えない。」

「やはり明かりは無いようだな。マギー、レミィラを頼む。」

「マギーが背囊から松明を取り出してそこに魔法の明かりをつける。」

「ガイラ、先頭を頼めるか？」

「今度は俺が先頭か、アレフじゃ駄目なのか？」

「重装備のアレフに明かりを持たせると、いざという時に対処が遅れる。マギー、明かりをガイラに。」

「了解だ。そういうことなら理解できる。」

ガイラがマギーから明かりを受け取った。そのまま降りると大きな扉があり、ガイラが扉に手をかけるが開かない。鍵がかかっていて俺達の行き先を阻んでいるのだ。

「こんなこともあるのかと、魔法の鍵を買っておいてよかった。まあ俺が言い出したことじゃないけどな。」

「軽口を叩いてガイラが、ポケットから魔法の鍵を取り出した。」

「キメラの翼、魔法の鍵、聖水、松明は常に持っていないと駄目なんですよね。」

「そうか、前に言ったことを覚えていて実行してたのか。大分前に魔法でできることでも用心しろと教えたな。」

ガイラが魔法の鍵を使って扉を開く。その先はずっと遠くまで闇、闇、魔法の明かりを頼りに進むしかない。

「この明かりは時間に限りがあるのだったな、さっさと進もうぜ。」

ガイラが先頭に立って進む。階段を一つ、二つと降りる、途中で幾度か魔物と出会うが即効倒して済ました。三つ目の階段を降りてしばらく進んだ所で登る階段と降る階段を見つけた。

「アレフ、どうする?」

「登る階段を行きましょう。ロトの鎧と盾が何かに共鳴しているよ。うな気がするのです。」

「俺は何も感じないぞ。いつもの様に全て回らないと気が済まないだけじゃないのか?」

「いえ、違います。誰かが僕を呼ぶ声がします。」

俺はこの先にロトの剣があることを知っている。しかし何も知らないアレフが、何かに誘われるかの様に階段を登ろうとしているのはなぜだろうか? ロトの導きか、神器の共鳴か、それとも悪魔の囁きか。

「ガイラ、まあいいじゃないか。前にも言っただろう、ロトの剣がどこかにあるって。アレフが惹かれると言うならきつとこの先にあるのだろう。」

「そうか、学者がそう言うなら構わない。」

ガイラが階段を登る。アレフ、マギー、俺と続いて登る。特に声や音は聞こえない。階段を登った先にはまた登る階段、さらにその先にも登る階段。

「ずいぶんと変な作りだな。わざわざ降りてから登ることに意味があるのか？」

ガイラがぶつくさ文句を言っている。さらに階段を登ると明かりに浮かび上がる広い空間、その奥には祭壇があり何かが刺さっている。突然この空洞に無数の明かりが灯る、その明かりに二体のドラゴンが姿を現した。青い鱗に赤い手足のドラゴン、赤い鱗に青い手足のドラゴンだ。

「ようこそ、勇者一行よ。お前達にこの剣を渡すわけにはいかぬ。」

「それに我等が弟が世話になったそうだな、その仇を討たせてもらわねばならぬ。今ここにその機会が訪れたことを竜王様に感謝しよう。」

「弟だと、いったいなんのことだ！」

想像はついているが時間稼ぎの為に、マギーの前に出てとぼけた質問を返す。後ろに回した手でフバーハの指示をする。

「なるほど、それがお前の手か。だがその手には乗らぬ。喰らえっ！」

ゴオオオオオオオオ！！

キースドラゴンの口から激しい炎の息が噴き出されて俺達を包み込む。さらにダースドラゴンの口から魔法の詠唱、ターゲットは誰だ？ガイラの体が不自然に揺れている、ガイラを狙ってラリホーか少し遅れてマギーのフバー八が完成し、俺達は外向きの気流に包まれた。

「何をしたのは分からぬが、それが炎に対する防御か。ならば我等が炎を吐くだけが能でないことを証明してくれるわっ！」

一旦体勢を立て直さなくてはいけない。マギーにベホマラーの合図を送る。

「アレフ、ガイラを守れっ！ラリホーの影響を受けているぞ。」

アレフに指示してから、俺もベホマラーの詠唱。アレフが耐えてくれれば二回分のベホマラーで体勢は整うはず、それから仕切りなおしだ。

- - - - -

ラダトーム城には王家の者と王家の者が許可した者しか入れぬ部屋がある。国王とその家族の部屋である。その一室でローラ王女が天に向かって祈りを捧げている。

「ローラよ、勇者アレフが心配か？」

突如娘の部屋に入ってきた声にローラ王女が驚いて祈りの手を止める。

「お父様！いくらお父様とはいえ、突然私の部屋に入ってくるとは失礼です。」

「すまぬ、許せ。一つ聞いておきたいことがあったのでな、他の誰にも聞かれてはならぬことだ。」

ラルス16世の静かで重々しい声にローラ王女が息を飲む。

「お前、勇者アレフと恋仲ではないのか？」

「えっ、いえ、そんなことはありません。」

突然の質問に慌てたローラ王女がなんとか否定する。

「そうか、恋仲か。無理に隠そうとしても余には分かる。仮にも国王たるもの、人の心の内が読めなくては勤まらぬのでな。」

「ごめんなさい、ごめんなさい、お父様。私、私・・・あの方を・・・」

涙を流しているローラ王女はなんとか言葉を続けようとするが、その先を告げることができない。

「おお、ローラよ。余は別にお前を責めはせぬ、ただ確かめたかっただけじゃ。あの者達がいなかったらお前は戻ってくることはでき

なかった。一時はお前のことを諦めていたのだから、無事に帰ってくることはできた。余は満足しておる。」

「お父様、私、アレフ様と……」

「その先は言わなくてもよい、それでお前が幸せなら余は何も言わぬ。もしあの者が竜王を倒して戻ってきたのなら、あの者に褒美をやらねばならぬな、余が与えられる最大の褒美を。だからローラよ、お前はあの者の為に祈ってやるがよい。」

「ああ、お父様……ありがとうございます。」

ラルス16世がローラ王女に背を向けて部屋を出て行く。ローラ王女の声は届いていない。

双竜戦

棒立ちのガイラに向かってキースドラゴンの顎が襲う。ロトの盾を前に突き出したアレフが飛び込んで代わりにその攻撃を受けた。アレフの体がキースドラゴンの顎に挟まれるが、キースドラゴンの牙はロトの鎧と盾の表面を滑って噛みつくことは不可能だった。

必殺の攻撃を外されたキースドラゴンは、噛み付きに行った勢いを利用してその巨体を旋回させる。想像以上に俊敏なその動きから、大きな尻尾がアレフとガイラにたたきつけられた。まともにその攻撃を受けたアレフとガイラが、ベホマラーの詠唱中の俺に向かって吹っ飛んできた。

俺、アレフ、ガイラが激突して倒れる、途中まで練った万能たる力を練り直す。

《おお、万能たる力よ、血、肉となり、我等を癒せ！ベホマラー》

俺のベホマラーが完成する前にマギーのベホマラーが発動して、俺達の火傷が癒される。さらに俺のベホマラーでテールアタックによるダメージが癒された。俺とガイラが飛び跳ねるように起き上がり、アレフが転がって位置を変えてから起き上がった。

「俺の牙が通らぬか、なんという硬さだ。そうか、お前がロトの勇者の再来か！」

「なんと、一連の攻撃を受けて全員が無傷で起き上がるとは・・・なるほどオピオン程度では勝てぬはずだ。」

二匹のドラゴンが驚愕しつつ、冷静に戦況を見極めている。オピオンの様に見下し、驕り高ぶることはないか、こういう相手が一番きつい。ならばまず奴等の戦力を丸裸にする。

「赤い方がダースドラゴン、魔法に気をつける。青い方がキースドラゴン、今見た様に力とすばやさ兼ね備えている。」

俺の言葉を聞いたアレフとガイラからハンドサインが送られる。ガイラは防御力、アレフは攻撃力を要求している。

「マギーはアレフの援護を頼む。いくぞっ!」

《俺はMPを3消費する、MPはマナと混じりて、万能たる力となれ》

「小ざかしい奴がおるようだ、キース、まず奴から殺るぞ。」

《おお、万能たる力よ、不可視の盾となりて、彼の者を守れ、スカラ!》

アレフとガイラの間キースドラゴンの巨体が強引に割って入り、俺に前脚を叩きつけてくる。横っ飛びに避けたところで、ダースドラゴンの顔の前に異変を感じた。魔法力が集約して電気へと変換される、そこから来るのはベギラマ。

マホカントは今からでは間に合わない。一か八か腰の刀を抜刀、刀の腹で電撃を受け止める。全てを吸収することはできずに余波でダメージを受けるがまともに食らうよりはましだ。

「今だっ!青いのを殺るぞ。」

冷静なダースドラゴンの声がキースドラゴンの怒りを静める。そうか、俺達の意識がキースドラゴンに集中していた間にベホイミを使ったのか。おかしい、俺が知っているダースドラゴンはベギラマやベホイミは使えなかったはずだ。

「ダース、すまねえ。ここは仕切りなおした。」

キースドラゴンが下がり、ダースドラゴンと並ぶ。ダースドラゴンがさらに魔法を使いキースドラゴンを癒す。その間にこちらも強化魔法を使用する。

第一ラウンドは奴等、第二ラウンドは俺達がポイントを取ったと言えよう。だがこの戦いはポイント制ではない、どちらかが死ぬまで続けられる。

「アレフ、ガイラ、マギー、しばらく青い方を頼む。ダースドラゴンは俺が食い止める。」

「えっ、無理よ!」

「無理は承知!」

ガイラの更に左側を回りこんで、ダースドラゴンに向かう。ダースドラゴンの回復魔法は放っておくことはできない。一つ試したいことがある、この刀に宿らせた魔法は相手に直接流し込むことによって、抵抗をし辛くできると思われる。

「一人で私を相手にするですか、ずいぶんと舐められてものです。己の馬鹿さ加減を後悔して死になさい。」

俺の態度に静かな怒りを示したダースドラゴンの牙、脚、尾が俺を襲う。さらにその中にベギラマやギラを織り交せてくる。一つ一つが致命傷になる攻撃を紙一重で避け、魔法を詠唱し続ける。

《俺はMPを6消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお、万能たる力よ、全てを拒絶する鉄となりて、彼の者達を守れ、アストロン！》

魔法がミスリルブレードに吸収された。ダースドラゴンの攻撃を避けて刀で斬り付ける。硬い鱗の抵抗をもとしないでミスリルの刃が肉を切り裂く。

「ぐう、私の鱗を切り裂くとはやるな。だがその程度の傷で私が倒れるとは思わぬ方がいい、ウグア、な・・なんだっ！」

ダースドラゴンの動きが止まった。アストロンによる強制的な停止、鉄壁の守りと引き換えに全ての動きができない。

「キースドラゴンが死ぬところをそこで見ている！」

ダースドラゴンから目を離して振り返ると、キースドラゴンを相手に善戦するアレフ達が見える。アレフが後衛のマギーを守るようにキースドラゴンの前に立ちはだかる。ガイラがキースドラゴンの周りを動き回って攻撃を繰り返す。キースドラゴンは標的を決めかね、攻撃の手が散漫になっている。キースドラゴンは俺の動きには気付いていない。腰のホルスタから魔道砲を抜く。

《俺はMPを9消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお、万能たる力よ、凍てつく嵐となりて、かの地で荒れ狂え、ヒヤダイン！》

魔道砲に変化はない。これはリムルダールからここまでの道中で試行済みだ。さらにこれを最も射出力の強いライデインで送り出す。

《俺はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、
おお、万能たる力よ、雷となり、我が敵を撃て！ライデインッ
！》

魔道砲の砲口から冷気が打ち出され、キースドラゴンに当たり反対側に抜ける。その途中に存在するキースドラゴンの心臓が凍て付き、その鼓動を止めた。キースドラゴンの全身の力が抜けて、地にその身を横たわらせた。

「まだ、こつちのダースドラゴンがいるぞ。今は魔法の効果でこちらからの攻撃も効かない。」

「アストロンを敵に使ったの？あの魔法、敵にかけれるんだ？」

「普通は無理だろうな、これを使った。」

腰の刀の柄に左手を当てて説明する。右手に持っていた魔道砲をマギーに手渡す。

「こいつは任した、少しMPを使いすぎた。ヒヤダインをライデインで射出するんだ。アレフとガイラは左右に分かれてこいつの攻撃に備えてくれ。」

ダースドラゴンの首が届くかどうかのぎりぎりの位置で、アレフとガイラが武器を構える。マギーが少し離れた場所で魔道砲を構える。俺はマギーの視線に入らない位置でマギーを守る。

「もう少しで魔法の効果が切れるぞ。10秒前、9・8・7・6・5・4・3・2・1・今だ！」

射出された冷気の塊がダースドラゴンを正面から襲う。多分恐怖の表情と思われるものがダースドラゴンの顔に浮かんでいる。アストロンの魔法が解けたダースドラゴンの体を貫き、兄弟のキースドラゴンと同じ死を遂げた。

ロトの剣

二体のドラゴンを倒した俺達は、座り込んで休憩している。特に俺は消耗がはげしいので立っているのが辛い。今日だけでギガデイン一回、ライデイン五回、メラ二回、ベホマラー一回、スキルト二回、ピオリム一回、覚えているだけで100ものMPを消費している。

アレフが祭壇に祭られているロトの剣に魅入られている。その姿にガイラが声をかける。

「アレフ、ロトの剣の声でも聞こえるのか？」

「さっきまでは聞こえていたような気がしていたのですが、今は何も聞こえません。この剣を持っていていいものなのでしょうか？」

「どうだろうな、あんなドラゴンが守っていたんだ。きっと竜王にとっても都合の悪い武器なんだ。」

「でも都合が悪いなら壊すなり、どこか誰の目にも届かない場所に置くなりすればいいと思いますが。」

確かにアレフの言う通りだが、俺なりの推論を口にしてみる。

「アレフ、ここが誰の目にも届かない場所だ。それと壊すことができなかつたんだ、この剣はオリハルコンでできている。最強の神の金属、それに神気が宿っているから、魔物に破壊できるわけがない。ん？そういえばロトの盾もその神気で魔王の爪跡を封印していたな。・・もしかしたらこの剣もそうなのかもしれない。」

「ふうん、なるほどねえ、流石は学者だ。言うことが一々もつともらしい。」

「もつともらしいとは失礼な言い草だ。まあ根拠があることじゃない。とりあえず今日はここで休もう。俺は打ち止めだ。」

「そうですね、僕も普段使わないような魔法を使って少し疲れました。それにストーンマン、さらにドラゴンとの戦闘もたいへんでした。」

皆疲れている。この先にはまだ恐ろしい魔物もいるだろうから、ここを宿屋の代わりにするのも悪くない。

.....

一晩をロトの剣の加護を頼りに過ごした。見張りを立てて魔物の襲来に備えたが何もやっては来なかった。やはりロトの加護とやらはあるのかもしれない。

「ロトの剣を取りますよ。これがあれば今までよりずっと戦えます。これ以上足手まといになるのは嫌です。」

「何を言っているんだ、アレフ。誰もお前が足手まといなんて思っていないぞ。現に昨日はお前がいなかったら、俺は死んでいた。もつと自信を持てよ。」

「でもこの炎の剣では満足にドラゴンの鱗が斬れませんでした。例の攻撃力が上がる魔法を貰って初めて斬れる、それでは竜王は倒せ

ません。」

「誰も駄目とは言っていない、もともとその剣をお前に使わせるつもりだったんだ。昨日は詰まらんことを言っただけが悪かったな。アレフ、ロトの剣を手に取れ、それはお前の物だ。」

俺の言葉にアレフが頷く。アレフの手がロトの剣の柄を掴み、祭壇から引き抜いた。何か嫌な気配が祭壇から飛び去った気がする、背中に冷たい汗が流れぞくりとした。

「どうしたの？へんな顔をしているわよ。」

「いや多分気のせいだ、気にしないでくれ。アレフ、持ってみた感じはどうだ？」

アレフがロトの剣を持って、一通り剣舞を行なう。

「昔から使っている剣みたいに手に馴染みます。長さの割には軽くて使いやすいです。」

祭壇に置いてある対となる鞘に剣を納めて、アレフの腰に装備された。それはロトの鎧、ロトの盾とセットになって、まるであるべき場所を見つけたかの様に輝いて見えた。

「アレフ、その剣には特殊能力があるぞ、剣を構えて『旋風よ、竜巻となれ』だ。直径10mぐらいの竜巻が発生するはずだ。」

「やってみていいですか？」

アレフの目が期待に光り輝いている。

枕元の声に反応したのか、シュミットがうめき声をあげた。

「シュミット、気づいたのか、余じゃ、そなたの主ラルス16世じや。」

「あつ、へつ、陛下。どうしてここに？」

「シュミット、無理に起きなくてよい。誰にこんな目にあわされたのじゃ？」

「國務大臣の屋敷で・・・あつ、反逆の計画が、痛っ！」

慌てて起き上がろうとしたシュミットは苦痛に声を上げる。

「もうよい、そのことはもう終わったのじゃ。そうかお前をこんな目にあわせたのもあの者だったのか。しかしどうやって助かったのじゃ？」

「あの時はもう駄目かと覚悟を決めて・・・誰かに・・・そうだ、アイゼンマウアー、アイゼンマウアーの手の者に助けられて・・・後は記憶にありません。」

「そうか、アイゼンマウアーか。お前を助けて、さらにこの城の危機に駆けつけてくれたのだな。実におしいのう。ホフマンズ、その後の行方は分からぬか？」

「残念ながら・・・よほど腕のよい間者を持っているでしょう、一切の手がかりを消して行方を眩ませました。」

「もうよい、檻の中に居れる者ではないのじゃ、残念じゃがもう探さなくともよい。シュミット、聞こえたな、もう探すでないぞ。」

「陛下……。」

「シュミット、完治した後に次の任務を与える。それまではゆっくりと休むといい。ホフマンズ、では行くぞ。」

シュミットは軽く頷いて、目を閉じた。それを見届けてラルス16世とホフマンズが病室を出た。廊下を歩きながらラルス16世が小声で話す。

「ホフマンズ、一つやってもらいたいことがある。そなたにしか頼めないことだ。」

「私にしかできないことですか？」

「そうだ、至急、王位継承権を選定し直せ、5位まででよい。」

「何か理由がおりますか？」

「ぐくりと鍰を飲み込んでからホフマンズが質問をした。」

「特に深い理由はない。だが王位継承権1位、3位の二人がいなくなったのだ。改めて順位付けしておく必要がある。そう思ったただだ。」

「そうですね。分かりました。」

「では任せたぞ、勇者達が帰ってくるまでには終わらせよ。」

「はあ？いえ、失礼しました。」

ホフマンズは思わず出てしまった疑問を飲み込む。

（しかし勇者が帰ってくるまでとは性急な話だ。本来ならば然るべき家柄の者と王女とめあわせて次の王とするはず・・・しかしわざわざ王位継承権を選定し直すということは、別の思惑があると考えた方がよさそうだ。）

「ホフマンズ、いきなり黙ってどうかしたのか？」

「いえ、少々考え事をしていました。やはり有力な貴族に漏れることを恐れていますか？」

「まあ、そうじゃのう。誰かに取り入って権力を誇示するような輩の耳には入らぬに越したことは無い。」

「承知しました。ではそのように取り計らいます。」

（そう遠くない未来にこの王国の理が変わる。いやもうすでに変わりつつあるのかもしれない。）

城の廊下に二人の足音が響く。それがホフマンズには、新しい世界が向こうからやってくる音に聞こえた。

地底魔城

(また声が聞こえた。一度目はドムドローを落とした時、二度目が十日ほど前、そして今日。分からぬ・・・分からぬことばかりだ。いつも聞こえてくる声は常に同じ“全ての命を我が生贖とし、その苦しみを我に捧げよ”、おぼろげに見えるその姿は三つの凍て付くような視線。いったいお前は何者なのだ、何を求めて私に力を授ける・・・。)

- - - - -

「無限回廊とは恐れ入ったぜ、アレフの地図が無かったら気付かなかったな。こつちが本命で間違いないな？」

「先頭を歩いていたガイラにアレフが助言したのがつい先ほどである。来た道を戻って、別の階段を降りている。」

「地図からすると他に道はありません。間違いないと思います。」

アレフが本来の真面目で慎重な性格を十全に発揮している、いい兆候だ。それにしても俺が知っているこの迷宮の地図は上から見たもので、実際に歩いて自分の目で見ると全然違って見える。アレフに指摘されるまで無限回廊には気付かなかった。

階段を降りた先は細い一本道がずっと続いていくだけ、二度曲がって突き当たりの階段を降りると天井が高く大きく広がった部屋、そこには当然の様に敵が待っていた。

「これ以上好き勝手にはさせん。ここには天はない、魔法を反射させるような迂闊な真似もせぬ、貴様等との因縁もここまでだ。」

ドラゴンが二体、悪魔の騎士が八体、キラーリカントも八体、一番後ろには大魔道、今の声の主はこいつに違いない。

「またお前か、何度破れても懲りぬ奴だ。いい加減に舞台から降りてくれ。」

「貴様等を竜王様に会わせるわけにはいかぬ、かかれっ！」

ドラゴン二体を先頭に他の魔物達が、俺達に向かって襲い掛かってきた。

「マギー、本当のベギラマを見せてやれ。アレフはロトの剣の力を使うんだ！」

《俺はMPを6消費する。MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお、万能たる力よ、猛火となりて、かの地を焼き払え、ベギラマ！》

『旋風よ、竜巻となれ』

アレフが中央で魔物の集団に向かってロトの剣を突き出し、俺とマギーがその両脇に立ち手から火炎を放つ。魔物の中央に巨大な竜巻が発生し、俺達の火炎を巻き込んだ。

魔物が風に切り刻まれ、その傷が熱気に焼かれる。悪魔の騎士は竜巻によって宙に舞い地に落ち、熱によって劣化した鎧がその衝撃で破壊されている。

「アレフ、ガイラ、風が止んだら突っ込むぞ。」

猛烈な熱気を含んだ竜巻が止む。俺とアレフとガイラが突っ込み、まだ動いている魔物の群れを掃討する。生ある魔物はすでにまともに動くこともできず、金属の劣化した悪魔の鎧ともどもあっさりと倒れていった。

数分後、この部屋に立っている魔物は一匹たりとていなかった。

「すごい竜巻ですね。それに切れ味もすごい。」

アレフが手にしたロトの剣を見ながら呟く。

「その剣の本当の名前は王者の剣、オリハルコンで作られたその刃は如何なる物も切り裂く。」

「確かにその通りです。あの硬いドラゴンの鱗もやすやすと切り裂くことができました。これならどんな敵が来ても勝てると思います。」

「切れ味はともかく、MPの消費も無しであんな簡単に竜巻を出されたら、私みたいな魔術士は要らないわね。」

「マギー、それは大丈夫だ。一度放つたらしばらくは出ないはずだ。宝玉に溜めておける魔法力には限界がある。それに状況に合わせた多彩な魔法が使えるのが魔術士だ。魔術士と同じことをするために幾つもの魔法の武器を持たないと駄目だ。」

「アイゼンマウアー隊長の雷神の剣以外にも、こんな武器があるの

「？」

「ああ、吹雪の剣、稲妻の剣、雷の杖、くさなぎの剣、誘惑の剣、まあそんなところかな。」

指折り数えながら一つ一つ名前をあげる。これらのどれか一つでも持っていたらどんなに楽だっただろうか？

「おい、学者。もしかして持ってないよな？」

「残念ながら持ってないよ、まあ無い物のことを言っても仕方が無い。さあ次は最後のフロアだ、行こうか。」

部屋の先の階段を降りると大空洞、そこにそびえ立つ魔王の城。俺達全員がその光景に息を飲んでいる。

「まさか地下に城があるとは想像していなかったぞ。」

「うん、そうね。ここが竜王の城かしら？」

あまりの光景に圧倒されていたが、いつもの様にガイラのお馬鹿な感想でその緊張が解ける。

「そつだ、ここが真の竜王様の城、地底魔城だ。よくぞここまで来た勇者よ。」

不意に俺達以外の声が聞こえた。紅い鎧そのものの死神の騎士が城の門の前に立っている。

「死神の騎士、話ができるということはお前も裏切り者の一人か？」

「フツ！あんな出来損ないと一緒にされては困るな。俺はひ弱な人間などではない、栄えある魔族の一人だ。」

死神の騎士が紅い兜の面頬を少し上げて、中から紫色の顔を見せる。

「なるほど、貴重な情報に感謝する。もはや絶えたと思われた魔族がこのような形で残っていたとは驚きだ。しかし、ラダトームの城にいた死神の騎士は中身がなかったと聞いているがあれはどういうことだ？」

「そこまで教えてやる義務はない。大魔道にでも聞くがいい、生きてここを通れたらな。」

死神の騎士が面頬を下ろして腰の剣を抜く。鎧の内側から強烈な殺気を放っている。その殺気に俺とガイラが反応して構える。アレフの右手が俺達を遮った。

「相手は一人です。ここは僕がこの勝負を受けます。」

「アレフ、それはないぜ。俺もやりたかったんだ、譲れよ。」

「駄目です。僕もそうですから・・それにこの剣に慣れておきたいですからっ！」

アレフが言葉の最後とともに王者の剣を抜き、一気に死神の騎士に迫る。死神の騎士の盾がその一撃を受け流して、二人の決闘が始まった。

武人の最後

アレフの初手は火花を散らし、死神の騎士の盾の表面を削った。受け流して反撃に移ろうとしていた死神の騎士の剣が止まる。

「この間の戦士に較べて腕はまだ未熟なれど、なんたる業物だ。」

「これはロトの剣です。まだ手にしてから間がありません。」

「なるほどオリハルコンか、だとすると魔族最高と言われたこの鎧としてそうはもたぬな。ならばこちらから行かせてもらおうっ！」

そう言い放った死神の騎士の剣がアレフを襲う。ロトの盾に当たった剣の軌道が変化してアレフの体を襲うが、ロトの鎧で阻まれる。それを見届けた死神の騎士が一旦跳び去る。

「鎧も盾も一級品だな。だが武具の性能の違いが、闘いの決定的差でないことを教えてやるっ！」

死神の騎士の猛攻が始まった。力尽くの攻撃、フェイントを使用した巧緻な攻撃、時には蹴りまで取り混ぜてアレフを襲う。死神の騎士の剣は鎧に覆われていない場所を狙って蛇の様にアレフを襲うが、それを把握しているアレフは冷静にその攻撃を捌いている。鎧の隙間や鎧に覆われていない所に来る攻撃を、体をずらして受ける。それだけではない、死神の騎士の姿勢が崩れた時にはアレフからも攻撃をしている。

「学者、俺はアレフの勝ちに賭けるぞ。お前はどうか？」

「賭けにならないな。今までにアレフが負けると思ったことは無い。」

ガイラの無責任な台詞に俺なりの答えを返す。

「なに不謹慎なことを言ってるの、苦戦してるじゃない！」

「心配は要らない。見ろ、アレフの攻撃が当たるようにってきたぞ。」

死神の騎士の剣をうまく弾き、ロトの剣が死神の騎士を襲う。最初は死神の騎士の攻撃が8、アレフが2で交わされていたが、今は6：4ぐらいになっている。

アレフの盾が、死神の騎士の攻撃を押し返してその姿勢を崩し、死神の騎士の頭にロトの剣が斬り下ろされる。押された反動を利用して仰け反ってその一撃を避ける。ロトの剣が兜にかすり、その面頬を切り裂いた。死神の騎士が切れて変形した面頬を忌々しげに引きちぎる。

「この俺が練習台だと・・・舐めるなっ！」俺はMPを8消費する、MPはマナと混じりて万能たる力となれ、おお万能たるマナよ、雷とな・・・ぐあっ！」

アレフの右手が死神の騎士に向けられている。

「馬鹿な！無詠唱で俺より速いだと・・・。」

ベギラマの直撃を受けた死神の騎士が仰け反り、苦悶に喘ぐ。そこに居合いからの一閃、見事な右斜め切り上げが死神の騎士の鎧を

切り裂いた。

「見事だ、俺の・・・負けだっ！」

鮮血が噴出し、死神の騎士が仰向けに倒れる。

「ベギラマの練習なら何百回、何千回としてきました。僕より速く詠唱できる人は二人しか知りません。」

「そうか・・・お前には目指す頂が・・・常にあるのだな。羨ま・・・ことだ。その・・・二人・・・よろしく・・・くれ。」

最後は何を言っているかは分からなかったが、全て言い終えた死神の騎士の鎧を纏った魔族が事切れた。アレフが倒れた魔族のそばに歩み寄る。

「なぜ満足そうな顔で亡くなっているのでしょうか？」

俺達も近寄ってその顔を見る。アレフの言う通り、目を瞑ったその顔は満足そうな笑みを浮かべている。

「分からんよ、魔族の考えることは想像できない。」

「俺には分かる気がするな。武人たる者、最後は戦場に倒れたいと思っっている。」

「そうか、そんなものか。」

「俺はベッドの上で満足に動けなくなってから死ぬのは嫌だ。」

ガイラの静かだが沈痛な叫びにも似た独白が、なんとか俺の耳に届いた。アレフとマギーには聞こえなかったようできょとんとしている。

「お墓を作ってやらなくていいですか？」

「要らん、戦場に倒れた武人は屍を晒し、いずれ土に還る。」

ガイラがこの場を後にする。置いていかれた形になった俺達はその後ろ姿を追った。

.....

「アイゼンの旦那、旦那の言う通り城門の前に置いてきましたよ。でもあれでよかったのですか？」

「いいも悪いも無い。せつかく助かった命だ、主の下に返すべきだろう。」

「そう意味じゃなくて、あいつの頼みで王様の危機に駆けつけたんだ。褒美を貰うなり、復職するなりできたのではないですか？」

「私が褒美目当てで動く人間とも思っただか？」

「そんな怖い目で睨まんで下さいよ。」

アイゼンマウアーに睨まれた小男が肩を竦める。そう言う割りに怖がっている気配は無い。

「私は城には戻らない、そう決めたのだ。今回の件で全ての借りを返すことができただろう。」

「借りねえ。返し終わったら、はいさよならですか。」

小男がふざけた口調で聞き返す。

「私の復職を望まぬ者も少なくはない。それに誰かを助けるのに許可があるなど、私の性には会わない。」

「ああ、そうですかい。惜しいなあ、俺っちは近衛騎士の影でいたかったんだけどな。」

「そうか、お前が望むのなら推薦状でも書いてやるうか？」

「いやいやいや、俺っちは旦那のいる近衛騎士の影がよかったんだけだ。」

小男が大慌てで頭を降る。

「お前も損な性分だな。まあいいだろう、私はこれから一介の戦士に戻る。私の手の届く範囲を私の甲斐性で守るとしよう。お前も自由にするがいい。」

「当然、旦那についてく。旦那は一介の戦士にしては光り輝きすぎてるからね、俺っちがその影で旦那の足跡を消さないと大変なことになりますよ。」

「そうか、どおりで今まで誰も私の前に現れなかったわけだ。煩わしくなくていいと思っていたところだ。」

「理解してもらえて光栄ですな、ならさっさとここを引き払いましょうや、あの人が目を覚ましたらここに誰かやってきますぜ。」

アイゼンマウアーがそれに答えるように黙って立ち上がる。足元にあつたそう多くない荷物を担ぎ、腰の雷神の剣を確かめて部屋から出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1157y/>

勇者って一人じゃないんですか？

2012年1月14日00時08分発行